

吾輩^{わがはい}は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当^{けんとう}がつかぬ。何でも薄暗

いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というも

のを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人

どうあく

間中で一番獰悪な種族であつたそうだ。この書生と

つかま

いうのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。

しかしその当時は何という考もなかつたから別段恐

てのひら

しいとも思わなかつた。ただ彼の掌に載せられてス

ーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあ

つたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の

顔を見たのがいわゆる人間というものの見始みはじめである

う。この時妙なものだと思つた感じが今でも残つて

いる。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつる

つるしてまるで薬缶やかんだ。その後猫こにもだいぶ逢あつた

がこんな片輪かたわには一度も出會でわした事がない。のみ

ならず顔の真中があまりに突起している。そうして

その穴の中から時々ふうふうと煙けむりを吹く。どうも咽む

せぼくて実に弱った。これが人間の飲む煙草たばこというものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏うちでしばらくはよい心持に坐つて

おつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが
無暗むやみに眼が廻る。胸が悪くなる。到底とうてい助からないと

思っていると、どさりと音がして眼から火が出た。

それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんお

った兄弟が一疋びきも見えぬ。肝心かんじんの母親さえ姿を隠し

てしまった。その上今までの所とは違つて無暗むやみに明

るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも

容ようす子がおかしいと、のそのそ這はい出して見ると非常

に痛い。吾輩は藁わらの上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよかうと考えて見た。別にこれという分別ぶんべつも出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやって見たが

誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物^{もの}のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左^{ひだ}りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這^はつて行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這^{はい}入ったら、

どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある

邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこ

の竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍ろぼう

に餓死したかも知れのである。一樹の蔭とはよく

云つたものだ。この垣根の穴は今日こんにちに至るまで吾輩

が隣家となりの三毛を訪問する時の通路になっている。さ

て邸やしきへは忍び込んだもののこれから先どうして善い

か分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るといふ始末でもう一刻の猶^ゆ予^{うよ}が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで吾輩は彼^かの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇^{そうぐう}したのである。第一に逢つたのがおさんで

ある。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋くびすじをつかんで表へ抛ほうり出した。

いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのにはどう

しても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙すきを見て

台所へ這はい上あがった。すると間もなくまた投げ出され

た。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上っては

投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになった。この間おさんの三馬をさんま偷ぬすんでこの返報をしてやってから、やっと胸の痞つかえが下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家のうち主人が騒々しい何だといいいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿やどなしの小

猫がいくら出しても出しても御台所へ上あがつて来て困

りますという。主人は鼻の下ひねの黒い毛を撚りながら

吾輩の顔をしばらく眺ながめておったが、やがてそんな

ら内へ置いてやれといったまま奥へ這はい入いつてしまつ

た。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口く

惜やしそうに吾輩を台所へ抛ほうり出した。かくして吾輩

はついにこの家うちを自分の住家すみかと極きめる事にしたので

ある。

吾輩の主人は滅多めったに吾輩と顔を合せる事がない。

職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼

の書齋を覗のぞいて見るが、彼はよく昼寝ひるねをしている事

がある。時々読みかけてある本の上に涎よだれをたらして

いる。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色たんこうしよくを帯びて弾力の

ない不活澆ふかつぱつな徴候をあらわしている。その癖に大飯

を食う。大飯を食った後あとでタカジヤスターゼを飲む。

飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠く

なる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返

す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽らくなものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度たびに何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のも

のにははなはだ不人望であつた。どこへ行つても跳はね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに珍重されなかつたかは、今日こんにちに至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍そばにいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝ひざの上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背せ中に

乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得るのである。

その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃めしびつの上、夜は炬燵こたつ

の上、天氣のよい昼は椽側えんがわへ寝る事とした。しかし

一番心持の好いのは夜よに入いってここのうちの小供の

寢床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この

小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ

床へ入はいつて一間ひとまへ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間

に己おのれを容いるべき余地を見出みいだしてどうにか、こうに

か割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒さ

ますが最後大変な事になる。小供は——ことに小さ

い方が質たちがわるい——猫が来た猫が来たといつて夜

中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると

例の神経胃弱性の主人は必かならず眼をさまして次の部屋

から飛び出してくる。現にせんだってなどは物指でものさし

尻ペたをひどく叩たたかれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればするほど、

彼等は我儘わがままなものだと断言せざるを得ないようにな

った。ことに吾輩が時々同衾どうきんする小供のごときに至

つては言語同断である。ごんごどうだん自分の勝手な時は人を逆さ

にしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛ほうり出したり、へ、

つついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で

少しでも手出しをしようものなら家内かない総がかりで追

い廻して迫害を加える。この間もちよつと畳で爪を

磨といだら細君が非常に怒おこつてそれから容易に座敷へ

入れない。台所の板の間で他ひとが顫ふるえていても一向平

気なものである。吾輩の尊敬する筋向すじむこうの白君などは

逢あう度毎たびごとに人間ほど不人情なものはないと言つてお

らるる。白君は先日玉のような子猫を四足産うまれたのである。ところがその家の書生が三日目うちにそいつを裏の池へ持って行つて四足ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族ねこぞくが親子の愛を完まったくして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅そうめつせねばならぬといわれた。一々もつともの議論と思う。ま

た隣りの三毛君^{みけ}などは人間が所有権という事を解し

ていないといつて大に憤慨^{おおい}している。元来我々同族

間では目刺^{めざし}の頭でも鰯^{ぼら}の臍^{へそ}でも一番先に見付けたも

のがこれを食う権利があるものとなっている。もし

相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善^よいく

らいのものだ。しかるに彼等人間は毫^{ごう}もこの觀念が

ないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のた

りやくだつ

めに掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼ん

で正当に吾人が食い得べきものを奪^{うば}つてすましてい

る。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持

っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こん

な事に関すると両君よりもむしろ楽天である。ただ

その日その日がかこうにか送られればよい。

いくら人間だって、そういつまでも栄える事もある

まい。まあ気を永く猫の時節を待つがよからう。

わがまま

我儘で思い出したからちよつと吾輩の家の主人が

この我儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何

と云つて人に勝れてすぐ出来る事もないが、何にでもよ

く手を出したがる。俳句をやつてほととぎすへ投書

をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけ

の英文をかいいたり、時によると弓に凝こつたり、謡うたいを

習つたり、またあるときはヴァイオリンなどをブー
ブー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこ
れも物になつておらん。その癖やり出すと胃弱の癖
にいやに熱心だ。後架こうかの中で謡をうたつて、近所で

後架先生と渾名あだなをつけられているにも関せず一向平いっこう

気なもので、やはりこれは平たいらの宗盛むねもりにて候そうろうを繰返し
ている。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいであ

る。この主人がどういう考になつたものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後の^{のち}のある月の月給日に、大きな包みを提^さげてあわただしく歸つて來た。何を買つて來たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいている。

しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたもの
やら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くない
と思つたものか、ある日その友人で美学とかをやつ
ている人が来た時に下の^{しも}のような話をしてゐるのを聞
いた。

「どうも甘く^{うま}かけないものだね。人を見ると何で
もないようだが自ら筆をとつて見ると今更の^{いまさら}ように

むずかしく感ずる」これは主人の述懐である。なる

ほど詐^{いつわ}りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越に主人

の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけない

さ、第一室内の想像ばかりで画^えがかける訳のもので

はない。昔^{むか}し以太利^{イタリー}の大家アンドレア・デル・サル

トが言った事がある。画をかくなら何でも自然その

物を写せ。天に星辰^{せいしん}あり。地に露華^{ろか}あり。飛ぶに禽^{とり}

あり。走るに獣^{けもの}あり。池に金魚あり。枯木^{こぼく}に寒鴉^{かんあ}あ

り。自然はこれ一幅の大活画^{だいかつが}なりと。どうだ君も画

らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいつ

た事があるかい。ちつとも知らなかった。なるほど

こりやもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗^{むやみ}

に感心している。金縁の裏には嘲^{あざ}けるような笑^{わらい}が見

えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側えんがわに出て心持善く昼ひ

寝るねをしていたら、主人が例になく書斎から出て来て

吾輩の後ろうしで何かしきりにやっている。ふと眼が覚さ

めて何をしているかと一分いちぶばかり細目に眼をあけて

見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルト

を極きめ込んでいる。吾輩はこの有様を見て覚えす失

笑するのを禁じ得なかった。彼は彼の友に擲^や擄^ゆせら

れたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあ

るのである。吾輩はすでに十分^{じゆうぶん}寝た。欠^{あく}伸^びがしたく

てたまらない。しかしせつかく主人が熱心に筆を執^と

っているのを動いては気の毒だと思つて、じつと辛^{しん}

棒^{ぼう}しておつた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔の

あたりを色彩^{いろど}っている。吾輩は自白する。吾輩は猫

として決して上乘の出来ではない。背といい毛並と

いい顔の造作といいあえて他の猫に勝るとは決してまさ

思っておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今

吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、えが

どうしても思われない。第一色が違う。吾輩は波斯ペルシャ

産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のうるしのごとき斑入ふい

りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑う

べからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色とびいろでもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。もつともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫めくらだか寝

ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおつてやりた
いと思つたが、さつきから小便が催うしている。身み
内うちの筋肉はむずむずする。最早もはや一分も猶予ゆうよが出来ぬ
仕儀しぎとなつたから、やむをえず失敬して両足を前へ

存分のして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸をした。さてこうなつて見ると、もうおとなしくしていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち壊わしたのだから、ついでに裏へ行つて用を足そうと思つてのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜたような声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」と怒鳴った。この主人は人を罵るとき

は必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪口の
言いようを知らないのだから仕方がないが、今まで
辛棒した人の気も知らないで、無暗むやみに馬鹿野郎呼よわ
りは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背せ中なかへ乗
る時に少しは好い顔でもするならこの漫罵まんばも甘んじ
て受けるが、こっちの便利になる事は何一つ快くし
てくれた事もないのに、小便に立ったのを馬鹿野郎

とは酷い。ひど元来人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て来て窘めていじやらなくてはこの先どこまで増長するか分らない。

わがまま我儘もこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園ちやえんがある。広くは

ないが瀟洒さつぱりとした心持ち好く日の当あたる所だ。うちの

小供があまり騒いで楽々昼寝の出来ない時や、あま

り退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつで

もここへ出て浩然こうぜんの気を養うのが例である。ある小

春の穏かな日の二時頃であつたが、吾輩は昼飯後快ちゆうはんご

よく一睡した後のち、運動かたがたこの茶園へと歩ほを運

ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのも一向心付かざるごとく、また心付くも無頓着なるとく、大きな鼾いびきをして長々と体を横よこたえて眠っている。他の庭内ひとに忍び入りたるものがかくまで平気に睡ねむられるものかと、吾輩は窃ひそかにその大胆なる度

胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。わずかに午^ごを過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛^なげかけて、きらきらする柔毛^{にこげ}の間より眼に見えぬ炎でも燃^もえ出^いずるように思われた。彼は猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇心の心に前後を忘れて彼の前に佇立^{ちよりつ}して余念

もなく眺^{なが}めっていると、静かなる小春の風が、杉垣の

上から出たる梧桐^{ごとう}の枝を軽く誘^{かろ}つてばらばらと二三

枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかつとその真^{まん}

丸^{まる}の眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人

間の珍重する琥珀^{こはく}というものよりも遥^{はる}かに美しく輝

いていた。彼は身動きもしない。双眸^{そうぼう}の奥から射る

ごとき光を吾輩^{わいしやう}の矮小^{ひたい}なる額の上にあつめて、御^ごめ、

えは一体何だと云った。大王にしては少々言葉が卑いや

しいと思つたが何しろその声の底に犬をも挫ひしぐべ

き力が籠こもつていたので吾輩は少なからず恐れを抱いだい

た。しかし挨拶あいさつをしないと險吞けんのんだと思つたから「吾

輩は猫である。名前はまだない」となるべく平氣を

装よそおつて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はた

しかに平時よりも烈しく鼓動しておつた。彼は大おおに

軽蔑^{けいべつ}せる調子で「何、猫だ？　猫が聞いてあきれら

あ。^{ぜん}全てえどこに住んでるんだ」随分^{ぼうじやくぶじん}傍若無人であ

る。「吾輩はここの教師の家^{うち}にいるのだ」「どうせ

そんな事だろうと思つた。いやに瘠^やせてるじゃねえ

か」と大王だけに気焰^{きえん}を吹きかける。言葉付から察

するとどうも良家の猫とも思われない。しかしその

膏切^{あぶらぎ}つて肥満しているところを見ると御馳走を食つ

てるらしい、豊かに暮しているらしい。吾輩は「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかった。

「己^おれあ車屋の黒^{くろ}よ」昂^{こう}然^{ぜん}たるものだ。車屋の黒は

この近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋

だけに強いばかりでちつとも教育がないからあまり

誰も交際しない。同盟敬遠主義^まの^と的^とになっ^ている奴

だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを

起すと同時に、一方では少々輕侮けいぶの念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを試ためしてみようと思つて左さの問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに極きまつていらあな。御めえのうち、の主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強だいぶんそうだ。車屋にいと

御馳走が食えろと見えるね」

「何^{なあ}におれ、なんざ、どこの国へ行つたつて食い物に

不自由はしねえつもりだ。御めえ^{おれ}なんかも茶^ち畠^{やばたけ}ばか

りぐるぐる廻つていねえで、ちつと己^{おれ}の後^{あと}へくつ付

いて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに間違える

ように太れるぜ」

「追つてそう願う事にしよう。しかし家^{うち}は教師の方

が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

べらぼう

「笹棒め、うちなんかいくら大きくたって腹の足したになるもんか」

おおい

かんしやく

さわ

彼は大に肝癰に障った様子で、寒竹をそいだよう

かんちく

な耳をしきりとぴく付かせてあららかに立ち去った。

ちき

吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。

その後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼

は車屋相当の気焰きえんを吐く。先に吾輩が耳にしたとい

う不徳事件も実は黒から聞いたのである。

或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶畠ちやばたけの中で寝

転びながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつも

じまんばな

の自慢話をさも新しそうに繰り返したあとで、吾

輩に向つて下しものごとく質問した。「御めえは今まで

に鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりも余程発達しているつもりだが腕力と勇氣とに至つては到底とうてい黒の比較にはならないと覺悟はしていたものの、この問に接したる時は、さすがに極きまりが善よくはなかつた。けれども事實は事實で詐いつわる訳には行かないから、吾輩は「実はとろうとろうと思つてまだ捕とらない」と答えた。黒は彼の鼻の先からぴんと突張つっぱつてゐる

長い髭をびりびりと震わせて非常に笑った。元来黒

は自慢をする丈にどこか足りないところがあつて、

彼の気焰きえんを感心したように咽喉のどをころころ鳴らして

謹聴していればはなはだ御ぎよしやすい猫である。吾輩

は彼と近付になつてから直すぐにこの呼吸を飲み込んだ

からこの場合にもなまじい己おのれを弁護してますます

形勢をわるくするのも愚ぐである、いつその事彼に自

分の手柄話をしやべらして御茶を濁すに若くはない

と思案を定め^{さだ}めた。そこでおとなしく「君などは年が

年であるから大分^{だいぶん}とつたろう」とそそのかして見た。

果然彼は墻壁^{しょうへき}の欠所^{けつしょ}に呐喊^{とっかん}して来た。「たんとでも

ねえが三四十はとつたろう」とは得意気なる彼の答

であつた。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は

一人でいつでも引き受けるがいたちってえ奴は手に

合わねえ。一度いた、ちに向つて酷い目に逢つた」

「へえなるほど」と相槌あいづちを打つ。黒は大きな眼をば

ちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭

主が石灰いしばいの袋を持つて椽えんの下へ這い込んだら御めえ、

大きないた、ちの野郎が面喰めんくらつて飛び出したと思ひね

え」「ふん」と感心して見せる。「いた、ちつてけど

も何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生ちぎしょうつて

気で追っかけてとうとう泥溝どぶの中へ追い込んだと思

いねえ」「うまくやったね」と喝采かつさいしてやる。「と

ころが御めえいざってえ段になると奴め最後さいごっ屁ぺを

こきやがった。臭くせえの臭くねえのってそれからって

えものはいたちを見ると胸が悪くならあ」彼はここ

に至ってあたかも去年の臭氣を今いまなお感ずるごとく

前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻わした。吾輩も

少々気の毒な感じがする。ちつと景気を付けてやろうと思つて「しかし鼠なら君に睨にらまれては百年目だろう。君はあまり鼠を捕とるのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥つて色つやが善いのだろう」黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を呈出ていしゆつした。彼は喟然きぜんとして大息たいそくしていう。

「考かんげえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとつた

つて——一てえ人間ほどふてえ奴は世の中にいねえ
ぜ。人のとつた鼠をみんな取り上げやがって交番へ
持って行きやあがる。交番じや誰が捕とつたか分らね
えからそのたんびに五錢ずつくれるじやねえか。う
ちの亭主なんか己おれの御蔭でもう壺円五十錢くらい儲もう
けていやがる癖に、碌ろくなものを食わせた事もありや
しねえ。おい人間てものあ体ていの善いい泥棒だぜ」さす

が無学の黒もこのくらいの理窟りくつはわかると見えてす

こぶる怒おこった容子ようすで背中の毛を逆立さかだてている。吾輩

は少々気味が悪くなつたから善い加減にその場を胡ご

魔化まかして家うちへ歸つた。この時から吾輩は決して鼠を

とるまいと決心した。しかし黒の子分になつて鼠以

外の御馳走あさを獺あさつてあるく事もしなかつた。御馳走

を食うよりも寝ていた方が氣楽でいい。教師の家うちに

いると猫も教師のような性質になると見える。要心しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といえは吾輩の主人も近頃に至つては到底水

のぞみ

彩画において望のない事を悟つたものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

〇〇と云う人に今日の会で始めて出逢つた。でああの人

だいぶほうとう

は大分放蕩をした人だと云うがなるほど通人らしい

ふうさい

風采をしている。こう云う質たちの人は女に好かれるも

のだから〇〇が放蕩をしたと云うよりも放蕩をする

べく余儀なくせられたと云うのが適當であろう。あ

うらや

の人の妻君は芸者だそうだ、羨ましい事である。元

来放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格の

ないものが多い。また放蕩家をもつて自任する連中

のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。これらは余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。あたかも吾輩の水彩画に於けるがごときもので、到底卒業する気づかいはない。しかるにも関せず、

自分だけは通人だと思つて済すましている。料理屋の酒

を飲んだり待合へ這はい入るから通人となり得るという

論が立つなら、吾輩も一廉ひとかどの水彩画家になり得る理り

窟だ。^{くつ}吾輩の水彩画のごときはかかない方がましであると同じように、愚昧^{ぐまい}なる通人よりも山出しの大^お野暮^{おやぼ}の方が遥^{はる}かに上等だ。

通人^{つうじんろん}論はちよつと首肯^{しゅこう}しかねる。また芸者の妻君

を羨しいなどというところは教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画における

批評眼だけはたしかなものだ。主人はかくのごとく
自知じちの明めいあるにも関せずその自惚心うぬぼれしんはなかなか抜け
ない。中なか二日ふつか置いて十二月四日の日記にこんな事を
書いている。

昨夜ゆうべは僕が水彩画をかいて到底物にならんと
思つて、そこらに抛ほうつて置いたのを誰かが立派な額にして欄らん

間に懸かけてくれた夢を見た。さて額んまになつたところ
を見ると我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。
これなら立派なものだと独ひとりで眺め暮らしていると、
夜が明けて眼が覚さめてやはり元の通り下手である事
が朝日と共に明瞭になつてしまつた。

主人は夢の裡うちまで水彩画の未練を背負しよつてあるい

ていると見える。これでは水彩画家は無論夫子ふうしの所いわ謂ゆる通人にもなれない質たちだ。

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡めがねの美学者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈へき頭とう第一に「画えはどうかね」と口を切った。主人は平気な顔をして「君の忠告に従って写生を力つとめているが、なるほど写生をすると今まで気のつかなかった

物の形や、色の精細な変化などがよく分るようだ。

西洋では昔むかしから写生を主張した結果今日こんにちのよう

に発達したものと思われる。さすがアンドレア・デル

・サルトだ」と日記の事はおくびにも出さないで、

またアンドレア・デル・サルトに感心する。美学者

は笑いながら「実は君、あれは出鱈目でたらめだよ」と頭を

搔かく。「何が」と主人はまだ嘘いつわられた事に気がつ

かない。「何がって君のしきりに感服しているアン
ドレア・デル・サルトさ。あれは僕のちよつと捏造^{ねつぞう}
した話だ。君がそんなに真面目^{まじめ}に信じようとは思わ
なかつたハハハハ」と大喜悦の体^{てい}である。吾輩は椽
側でこの対話を聞いて彼の今日の日記にはいかなる
事が記^{しる}さるるであろうかと予め想像せざるを得なか
つた。この美学者はこんな好^{いい}加減な事を吹き散らし

て人を担ぐのを唯一の樂たのしみにしている男である。彼は

アンドレア・デル・サルト事件が主人の情線じょうせんにいか

なる響を伝えたかを毫ごうも顧慮せざるもののごとく得

意になつて下しものような事を饒舌しやべった。「いや時々冗じよ

談うだんを言う人と人が真まに受けるので大に滑稽的美感を挑ちよ

撥うはつするのは面白い。せんだつてある学生にニコラス

・ニツクルベーがギボンに忠告して彼の一世の大著

述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で出版させたと言ったら、その学生がまた馬鹿に記憶の善い男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であつた。ところがその時の傍聴者は約百名ばかりであつたが、皆熱心にそれを傾聴しておつた。それからまだ面白い話がある。せんだって或る文学者のいる席でハリソン

の歴史小説セオファーノの話はなしが出たから僕はあれ

は歴史小説の中でうち白眉はくびである。ことに女主人公が死

ぬところは鬼き気人きを襲うようだと評したら、僕の向

うに坐っている知らんと云った事のない先生が、そ

うそうあすこは実に名文だといった。それで僕はこ

の男もやはり僕同様この小説を読んでおらないとい

う事を知った」神経胃弱性の主人は眼を丸くして問

いかけた。「そんな出鱈目でたらめをいってもし相手が読ん

でいたらどうするつもりだ」あたかも人を欺くあざむのは

さしつかえ
差支ない、ただ化ばけの皮かわがあらわれた時は困るじやな

いかと感じたもののごとくである。美学者は少しも

動じない。「なにその時ときや別の本と間違えたとか何

とか云うばかりさ」と云ってけらけら笑っている。

この美学者は金縁の眼鏡は掛けているがその性質が

車屋の黒に似たところがある。主人は黙って日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと云わんばかりの顔をしている。美学者はそれだから画えをかいても駄目だという目付で「しかし冗談じょうだんは冗談だが画というものは実際むずかしいものだよ、レオナルド・ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみを写せと教えた事があるそうだ。なるほど雪隠せついんなどに這入はいつ

て雨の漏る壁を余念なく眺めていると、なかなかうまい模様画が自然に出来ているぜ。君注意して写生して見給えきつと面白いものが出来るから」「また欺すの^{だま}だろう」「いえこれだけはたしかだよ。実際奇警な語じゃないか、ダ・ヴィンチでもいいそうな事だあね」「なるほど奇警には相違ないな」と主人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で写生はせ

ぬようだ。

車屋の黒はその後跣いびつになつた。彼の光沢ある毛は

漸々色だんだんが褪さめて抜けて来る。吾輩が琥珀こはくよりも美し

いと評した彼の眼には眼脂めやにが一杯たまっている。こ

とに著るしく吾輩の注意を惹ひいたのは彼の元氣の消

沈とその体格の悪くなつた事である。吾輩が例の茶ちや

園えんで彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら

「いたちの最後屁と肴屋の天秤棒には懲々だ」とい
つた。

赤松の間に二三段の紅を綴った紅葉は昔しの夢の

ごとく散ってつくばいに近く代る代る花卉をこぼし

た紅白の山茶花も残りなく落ち尽した。三間半の南

向の椽側に冬の日脚が早く傾いて木枯の吹かない日

はほとんど稀になつてから吾輩の昼寝の時間も狭め

られたような気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立て籠^{こも}る。

人が来ると、教師が厭^{いや}だ厭^{いや}だという。水彩画も滅多

にかかない。タカジヤスターゼも機能がないといっ

てやめてしまった。小供は感心に休まないで幼稚園

へかよう。帰ると唱歌を歌って、毬^{まり}をついて、時々

吾輩^{しっぽ}を尻尾でぶら下げる。

吾輩は御馳走も食わないから別段肥りもしないが

まずまず健康で跛びつゝにもならず、にその日その日を暮

している。鼠は決して取らない。おさんは未だに嫌

いである。名前はまだつけてくれないが、欲をいっ

ても際限がないから生涯しょうがいこの教師の家うちで無名の猫で

終るつもりだ。

吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながらちよつと鼻が高く感ぜらるるのありがたい。

元朝早々主人の許もとへ一枚の絵え端書はがきが来た。これは

彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、

下部を深緑ふかみどりりで塗つて、その真中に一の動物が蹲踞うずくま

っているところをパステルで書いてある。主人は例
の書斎でこの絵を、横から見たり、たて 豎から眺めたり
して、うまい色だなという。すでに一応感服したも
のだから、もうやめにするかと思うとやはり横から
見たり、ね 豎から見たりしている。からだを拗じ向け
たり、手を延ばして年寄が三世相を見るようにした
さんぜそう
り、または窓の方へむいて鼻の先まで持って来たり

して見ている。早くやめてくれないと膝ひざが揺れて陰けん呑のんでたまらない。ようやくの事で動揺があまり劇はげしくなくなつたと思つたら、小さな声で一体何をかいたのだらうと云いう。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思ひながら、寝ていた眼を上品に半なかば開いて、落

ちつき払って見ると紛れまぎもない、自分の肖像だ。主

人のようにアンドレア・デル・サルトを極めき込んだ

ものでもあるまいが、画家だけに形体も色彩もちや

んと整って出来ている。誰が見たって猫に相違ない

。少し眼識のあるものなら、猫の中うちでも他ほかの猫じや

ない吾輩である事が判然とわかるように立派に描かい

てある。このくらい明瞭な事を分らずにかくまで苦

心するかと思うと、少し人間が気の毒になる。出来る事ならその絵が吾輩であると云う事を知らしてやりたい。吾輩であると云う事はよし分らないにして、せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。しかし人間というものは到底吾輩猫属ねこぞくの言語を解し得るくらいに天の恵めぐみに浴しておらん動物であるから、残念ながらそのままにしておいた。

ちよつと読者に断つておきたいが、元来人間が何ぞという猫々と、事もなげに軽侮の口調をもつて吾輩を評価する癖があるははなはだよくない。人間の糟かすから牛と馬が出来て、牛と馬の糞から猫が製造されたごとく考えるのは、自分の無智に心付かんで高慢な顔をする教師などにはありがちの事でもあるうが、はたから見てもあまり見つともいい者じゃない

。いくら猫だつて、そう粗末簡便には出来ぬ。よそ

目には一列一体、平等無差別、どの猫も自家固有の
特色などはないようであるが、猫の社会に這入はいつて

見るとなかなか複雑なもので十人十色といろという人間界

の語ことばはそのままここにも応用が出来るのである。目

付でも、鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違

う。髯ひげの張り具合から耳の立ち按排あんばい、尻尾しっぽの垂れ加

減に至るまで同じものは一つもない。器量、不器量

、好き嫌い、すいぶすい粹無粹かずの数を悉くして千差万別と云つ

ても差支えないくらいである。そのように判然たる

區別が存しているにもかかわらず、人間の眼はただ
向上とか何とかいって、空ばかり見ているものだか

ら、吾輩の性質は無論相貌そうぼうの末を識別する事すら到

底出来ぬのは氣の毒だ。同類相求むとは昔むかしからあ

る語だことばそうだがその通り、餅屋は餅屋、猫は猫で、

猫の事ならやはり猫でなくては分らぬ。いくら人間

が発達したってこればかりは駄目である。いわんや

實際をいうと彼等が自ら信じているごとくえらくも

何ともないのだからなおさらむずかしい。またいわ

んや同情に乏しい吾輩の主人のごときは、相互を殘

りなく解するというのが愛の第一義であるということ

すら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の悪

い牡蠣かきのごとく書斎に吸い付いて、かつて外界に向

って口を開ひらいた事がない。それで自分だけはすこぶ

る達観したような面構つらがまえをしているのはちよつとおか

しい。達観しない証拠には現に吾輩の肖像が眼の前

にあるのに少しも悟った様子もなく今年は征露の第

二年目だから大方熊の画えだろうなどと気の知れぬこ

とをいってすましているのもわかる。

吾輩が主人の膝ひざの上で眼をねむりながら考える

ていると、やがて下女が第二の絵端書えはがきを持って来た

。見ると活版で舶来ひきの猫が四五疋ひきずらりと行列して

ペンを握ったり書物を開いたり勉強をしている。そ

の内の一疋は席を離れて机の角で西洋の猫じや猫じ

やを躍おどっている。その上に日本の墨で「吾輩は猫で

ある」と黒々とかいて、右の側わきに書を読むや躍おどるや

はるひとひ

猫の春一日という俳句さえ認めしたたられてある。これは

主人の旧門下生より来たので誰が見たつて一見して

意味がわかるはずであるのに、迂濶うかつな主人はまだ悟

らないと見えて不思議そうに首を捻ひねつて、はてな今

ひんがし

年は猫の年かなと独言を言つた。吾輩がこれほど有

ま

名になつたのを未だ気が着かずにいると見える。

ところへ下女がまた第三の端書を持ってくる。今

度は絵端書ではない。恭賀新年とかいて、傍かたわらに乍きょう

しゆくながら

恐縮かの猫へも宜よろしく御伝声奉願上候とある。いか

うえん

に迂遠な主人でもこう明らさまに書いてあれば分る

ものと見えてようやく気が付いたようにフンと言ひ

ながら吾輩の顔を見た。その眼付が今までとは違つ

て多少尊敬の意を含んでゐるように思われた。今ま

で世間から存在を認められなかった主人が急に一個

しんめんぼく

の新面目を施こしたのも、全く吾輩の御蔭だと思えばこのくらいの眼付は至当だろうと考える。

おりから門の格子こうしがチリン、チリン、チリリリリ

ンと鳴る。大方来客であろう、来客なら下女が取次

さかなや

に出る。吾輩は肴屋の梅公がくる時のほかは出ない

事に極きめているのだから、平気で、もとのごとく主

人の膝に坐っておった。すると主人は高利貸にでも
飛び込まれたように不安な顔付をして玄関の方を見
る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭
らしい。人間もこのくらい偏屈へんくつになれば申し分はな
い。そんなら早くから外出でもすればよいのにそれ
ほどの勇氣も無い。いよいよ牡蠣かきの根性こんじょうをあらわし
ている。しばらくすると下女が来て寒月かんげつさんがい

でになりましたという。この寒月という男はやはり
主人の旧門下生であつたそうだが、今では学校を卒
業して、何でも主人より立派になつてゐるという話^{はな}
しである。この男がどういふ訳か、よく主人の所へ
遊びに来る。来ると自分を恋^{おも}つてゐる女が有りそう
な、無さそうな、世の中が面白そうな、つまらなそ
うな、凄^{すこ}いような艶^{つや}っぽいような文句ばかり並べて

は帰る。主人のようなしなびかけた人間を求めて、
わざわざこんな話しをしに来るのからして合点^{がてん}が行
かぬが、あの牡蠣^{かき}的主人がそんな談話を聞いて時々
相槌^{あいづち}を打つのはなお面白い。

「しばらく御無沙汰をしました。実は去年の暮から
大^{おお}に活動しているものですから、出^でよう出ようと思
つても、ついこの方角へ足が向かないので」と羽織

の紐をひねくりながら謎見たような事をいう。「ど

っちの方角へ足が向くかね」と主人は真面目な顔を

して、黒木綿くろもめんの紋付羽織の袖口そでぐちを引張る。この羽織

は木綿でゆきが短かい、下からべんべら者が左右へ

五分くらいずつはみ出している。「エへへへ少し違

った方角で」と寒月君が笑う。見ると今日は前歯が

一枚欠けている。「君齒をどうかしたかね」と主人

は問題を転じた。「ええ実はある所で椎茸しいたけを食いま

してね」「何を食ったって?」「その、少し椎茸を

食ったんで。椎茸の傘かさを前歯で噛み切ろうとしたら

ぼろりと歯が欠けましたよ」「椎茸で前歯がかける

なんぞ、何だか爺々臭じじいくさいね。俳句にはなるかも知れ

ないが、恋にはならんようだな」と平手で吾輩の頭

を軽く叩く。かる。「ああその猫が例のですか、なかなか

肥ってるじやありませんか、それなら車屋の黒にだ
って負けそうもありませんね、立派なものだ」と寒
月君は大に吾輩を賞める。おおい「近頃大分だいぶん大きくなつた
のさ」と自慢そうに頭をぽかぽかなぐる。賞められ
たのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよ
いと合奏会をやりましてね」と寒月君はまた話しを
もとへ戻す。「どこで」「どこでもそりや御聞きに

ならんでもよいでしょう。ヴァイオリンが三挺とピ

ちよう

ヤノの伴奏でなかなか面白かったです。ヴァイオリ

ンも三挺くらいになると下手でも聞かれるものです

ね。二人は女で私がその中へまじりましたが、自分

わたし

でも善く弾ひけたと思いました」「ふん、そしてその

女というのは何者かね」と主人は羨うらやましそうに問い

かける。元来主人は平常枯木寒巖こぼくかんがんのような顔付はし

ているものの実のところは決して婦人に冷淡な方ではない、かつて西洋の或る小説を読んだら、その中にある一人物が出て来て、それが大抵の婦人には必ずちよつと惚ほれる。勘定をして見ると往来を通る婦人の七割弱には恋着れんちやくするといふ事が諷刺ふうしてき的に書いてあつたのを見て、これは真理だと感心したくらいな男である。そんな浮気な男が何故なぜ牡蠣的生涯を送つ

ているかと云うのは吾輩猫などには到底分らない。とうてい

或人は失恋のためだとも云うし、或人は胃弱のせいだとも云うし、また或人は金がなくて臆病な性質だたち

からだとも云う。どっちにしたって明治の歴史に係するほどの人物でもないのだから構わない。しか

し寒月君の女連れおんなづを羨ましげ気に尋ねた事だけは事実

である。寒月君は面白そうに口取くちとりの蒲鉾かまぼこを箸で挟ん

で半分前歯で食い切った。吾輩はまた欠けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であつた。「なに二人とも去る所の令嬢ですよ、御存じの方じやありません」と余所余所しい返事をする。「ナール」と主人は引張つたが「ほど」を略して考えている。寒月君はもう善い加減な時分だと思つたものか「どうも好い天気ですな、御閑ならごいっしょに散歩でもしまし

ようか、旅順が落ちたので市中は大変な景気ですよ

」と促^{うな}がして見る。主人は旅順の陥落より女連^{おんなづれ}の身

元を聞きたいと云う顔で、しばらく考え込んでいた

がようやく決心をしたものと見えて「それじゃ出る

としよう」^{かたみ}と思い切って立つ。やはり黒木綿の紋付

羽織に、兄の紀念^{きふ}とかいう二十年来着^き古^{ふる}るした結城^{ゆうきつ}

紬^{むぎ}の綿入^{わたいり}を着たままである。いくら結城紬が丈夫だ

つて、こう着つづけではたまらない。所々が薄くなつて日に透かして見ると裏からつぎを当てた針の目が見える。主人の服装には師走しわすも正月もない。ふだん着も余所よそゆきもない。出るときは懷手ふところをしてぶらりと出る。ほかに着る物がないからか、有つても面倒だから着換えないのか、吾輩には分らぬ。ただしこれだけは失恋のためとも思われぬ。

ふたり

兩人が出て行つたあとで、吾輩はちよつと失敬し

て寒月君の食い切つた蒲鉾かまぼこの残りを頂戴ちやうだいした。吾輩

もこの頃では普通一般の猫ではない。まず桃川如燕ももかわじょえん

以後の猫か、グレーの金魚を偷ぬすんだ猫くらいの資格

は充分あると思う。車屋の黒などは固もとより眼中にな

い。蒲鉾の一切ひときれくらい頂戴したつて人からかれこれ

云われる事もなからう。それにこの人目を忍んで間かん

食しよくをするという癖は、何も吾等猫族に限った事では

ない。うちの御三おさんなどはよく細君の留守中に餅菓子

などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬している

。御三ばかりじゃない現に上品な仕付しつけを受けつつあ

ると細君から吹聴ふいちようせられている小児こどもですらこの傾向

がある。四五日前のことであつたが、二人の小供が

馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝て

いる間むかに對い合あうて食卓に着いた。彼等は毎朝主人

の食くう麵パン麩ふの幾分いくぶんに、砂糖をつけて食くうのが例であ

るが、この日はちようど砂糖壺さとうつぼが卓たくの上に置かれて

匙さじさえ添そえてあつた。いつものように砂糖を分配し

てくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中

から一匙ひとさじの砂糖をすくい出して自分の皿の上へあけ

た。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を

同方法で自分の皿の上にあけた。少らくしば兩人は睨みりょうにんにら

合っていたが、大きいのがまた匙をとって一杯をわ

が皿の上に加えた。小さいのもすぐ匙をとってわが

分量を姉と同一にした。すると姉がまた一杯すくつ

た。妹も負けずに一杯を附加した。姉がまた壺へ手

を懸ける、妹がまた匙をとる。見ている間まに一杯一

杯一杯と重なって、ついにはふたり兩人の皿には山盛の砂

うずたか

糖が堆くなつて、壺の中には一匙の砂糖も余つてお

まなこ こす

らんようになつたとき、主人が寝ぼけ眼を擦りなが

ら寢室を出て来てせつかくしやくい出した砂糖を元

のごとく壺の中へ入れてしまった。こんなところを

見ると、人間は利己主義から割り出した公平という

まさ

念は猫より優っているかも知れぬが、智慧はかえつ

ちえ

て猫より劣っているようだ。そんなに山盛にしない

うちに早く嘗^なめてしまえばいいに思つたが、例のごとく、吾輩の言う事などは通じないのだから、気の毒ながら御櫃^{おはち}の上から黙つて見物していた。

寒月君と出掛けした主人はどこをどう歩^{ある}行いたものか、その晩遅く歸つて来て、翌日食卓に就^ついたのは九時頃であつた。例の御櫃の上から拝見していると、主人はだまつて雑煮^{ぞうに}を食っている。代えては食い

代えては食う。餅の切れは小さいが、何でも六切むきれ

ななきれ

か七切食って、最後の一切れを椀の中へ残して、も

うよそうと箸はしを置いた。他人がそんな我儘わがままをすると

なかなか承知しないのであるが、主人の威光を振

り廻わして得意なる彼は、濁った汁の中に焦げ爛れこただ

た餅の死骸を見て平気ですましている。妻君が袋戸ふくろど

の奥からタカジヤスターゼを出して卓の上に置くと

主人は「それは利きかないから飲まん」という。

「でもあなた澱粉でんぷん質のものには大變功能があるそう

ですから、召し上ったらいいでしよう」と飲ませた

がる。「澱粉だろうが何だろうが駄目だよ」と頑固がんこ

に出る。「あなたはほんとに厭あきつぽい」と細君が

独言ひとりごとのようひにいう。「厭きつぽいのじゃない薬が利

かんのだ」「それだつてせんだつてじゆうは大變に

よく利くよく利くとおっしやって毎日毎日上ったじやありませんか」「こないだうちは利いたのだよ、

この頃は利かないのだよ」と対句ついくのような返事をする。「そんなに飲んだり止めやたりしちや、いくら功

能のある薬でも利くきづか気遣いはありません、もう少し

しんぼう

辛防しんぼうがよくなかつちやあ胃弱なんぞはほかの病氣た

あ違つて直らないわねえ」とお盆を持って控えた御お

三さんを顧みる。「それは本当のところでございます。

もう少し召し上ってご覧にならないと、とても善よい

薬か悪い薬かわかりますまい」と御三は一も二もな
く細君の肩を持つ。「何でもいい、飲まんのだから

飲まんのだ、女なんかには何がわかるものか、黙って

いろ」「どうせ女ですわ」と細君がタカジヤスター

ゼを主人の前へ突き付けて是非詰腹つめばらを切らせようと

する。主人は何にも云わず立つて書齋へ這入る。細

君と御三は顔を見合せてにやにやと笑う。こんなと

きに後あとからくっ付いて行つて膝ひざの上へ乗ると、大變

な目に逢あわされるから、そつと庭から廻つて書齋の

椽側へ上あがつて障子の隙すきから覗のぞいて見ると、主人はエ

ピクテタスとか云う人の本を披ひらいて見ておつた。も

しそれが平常いつもの通りわかるならちよつとえらいとこ

ろがある。五六分するとその本を叩き付けたたけるように
机の上へ抛ほうり出す。大方そんな事だろうと思ひなが
らなお注意していると、今度は日記帳を出して下しもの
ような事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池いけの端はた、神田辺へんを散歩。池の
端の待合の前で芸者が裾模様の春着はるぎをきて羽根をつ

いていた。いしよう衣装は美しいが顔はすこぶるまずい。何となくうちの猫に似ていた。

何も顔のまずい例に特に吾輩を出さなくつても、

よさそうなものだ。吾輩だつて喜多床きたどこへ行つて顔さ

え剃すつて貰もらやあ、そんなに人間と異ちがつたところはあ

りやしない。人間はこう自惚うぬぼれているから困る。

ほうたん

かど

宝丹の角を曲るとまた一人芸者が来た。これは背の

なでがた

かつこう

すらりとした撫肩の恰好よく出来上った女で、着て

きもの

いる薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた

。白い歯を出して笑いながら「源ちゃん昨夕は――
ゆうべ

つい忙がしかったもんだから」と云った。ただしそ

たびがらす

しやが

の声は旅鴉のごとく皺枯れておったので、せつかく

の風采も大に下落したように感ぜられたから、いわ

ゆる源ちゃんなるもののいかなる人なるかを振り向

いて見るも面倒になつて、懐手ふところのまま御成道おなりみちへ出た

。寒月は何となくそわそわしているごとく見えた。

人間の心理ほど解げし難いものはない。この主人の

今の心は怒おこっているのだか、浮かれているのだか、

または哲人の遺書に一道いちどうの慰安を求めつつあるのか

ちつとも分らない。世の中を冷笑しているのか、

世の中へ交まじりたいたいのだか、くだらぬ事に肝癰かんしゃくを起し

ているのか、物外ぶつがいに超然ちょうぜんとしているのだかさっぱり

見当けんとうが付かぬ。猫などはそこへ行くと単純なものだ

食いたければ食い、寝たければ寝る、怒おこるときは

一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く。第一

日記などという無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人のように裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に発揮する必要があるかも知れないが、我等猫属ねこぞくに至ると行住坐臥ぎようじゆうざが、行屎送尿こうしそうにようことごとく真正てかずの日記であるから、別段そんな面倒な手数をして、己おのれの真面目しんめんもくを保存するには及ばぬと思う。日記を

つけるひまがあるなら椽側に寝ているまでの事さ。

神田の某亭で晚餐ばんさんを食う。久し振りで正宗を二三杯

飲んだら、今朝は胃の具合が大変いい。胃弱には晩酌が一番だと思う。タカジヤスターゼは無論いかん

。誰が何と云つても駄目だ。どうしたって利きかないものは利かないのだ。

無暗^{むやみ}にタカジヤスターゼを攻撃する。独りで喧嘩

をしているようだ。今朝の肝癰がちよつとここへ尾を出す。人間の日記の本色はこう云う辺^{へん}に存するの
かも知れない。

せんだって○○は朝飯^{あさめし}を廃すると胃がよくなると云

にさんち

うたから二三日朝飯をやめて見たが腹がぐうぐう鳴るばかりで功能はない。△△は是非香こうの物ものを断たてと忠告した。彼の説によるとすべて胃病の原因は漬物にある。漬物さえ断てば胃病の源を涸からす訳だから本復は疑なしという論法であつた。それから一週間ばかり香の物に箸はしを触れなかつたが別段の験げんも見えなかつたから近頃はまた食い出した。××に聞くと

それは按腹揉療治に限る。あんふくもみりょうじただし普通のではゆかぬ

みながわりゅう

。皆川流という古流な揉もみ方で一二度やらせれば大

抵の胃病は根治出来る。安井息軒やすいそっけんも大変この按摩術あんまじゆつ

を愛していた。さかもとりようま坂本竜馬のような豪傑でも時々は治

療をうけたと云うから、早速上根岸かみねぎしまで出掛けて揉も

まして見た。ところが骨を揉もまなければ癒なおらぬとか

、臓腑の位置を一度顛倒てんとうしなければ根治がしにくい

とかいって、それはそれは残酷な揉み方をやる。後

で身体が綿のようになって昏睡病にかかったような

こんすいびょう

心持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A

君は是非固形体を食うなという。それから、一日牛

乳ばかり飲んで暮して見たが、この時は腸の中でど

ぼりどぼりと音がして大水でも出たように思われて

終夜眠れなかった。B氏は横膈膜で呼吸して内臓を

おうかくまく

運動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから
試しにやって御覧という。これも多少やったが何と
なく腹中が不安で困る。ふくちゅうそれに時々思い出したよう
に一心不乱にかかりはするものの五六分立つと忘れ
てしまう。忘れまいとすると横隔膜が気になつて本
を読む事も文章をかく事も出来ぬ。美学者の迷亭がめいてい
この体を見て、てい産氣のついた男じゃあるまいし止よす

がいいと冷かしたからこの頃は廃よしてしまった。C

先生は蕎麦そばを食ったらよかろうと云うから、早速か、

け、ともり、をかわるがわる食ったが、これは腹くだが下る

ばかりで何等の機能もなかった。余は年来の胃弱を

直すために出来得る限りの方法を講じて見たがすべ

て駄目である。ただ昨夜ゆうべ寒月と傾けた三杯の正宗は

たしかに利目ききめがある。これからは毎晩二三杯ずつ飲

む事にしよう。

これも決して長く続く事はあるまい。主人の心は

吾輩の眼球めだまのように間断なく変化している。何をや

つても永持ながもちのしない男である。その上日記の上で胃

病をこんなに心配している癖に、表向は大おおに瘦我慢

をするからおかしい。せんだってその友人で某なにがしとい

う学者が尋ねて来て、一種の見地から、すべての病
気は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果にほかならない
と云う議論をした。大分研究したものと見えて、条
理が明晰めいせきで秩序が整然として立派な説であつた。氣
の毒ながらうちの主人などは到底これを反駁はんぱくするほ
どの頭腦も學問もないのである。しかし自分が胃病
で苦しんでいる際さいだから、何とかかんとか弁解をし

て自己の面目を保とうと思つた者と見えて、「君の
説は面白いが、あのカーライルは胃弱だったぜ」と
あたかもカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名誉
であると云つたような、見当違いの挨拶をした。す
ると友人は「カーライルが胃弱だって、胃弱の病人
が必ずカーライルにはなれないさ」と極め付けたの
で主人は默然もくねんとしていた。かくのごとく虚栄心に富

んでいるものの実際はやはり胃弱でない方がいいと
見えて、今夜から晩酌を始めるなどというのはちよ
つと滑稽だ。考えて見ると今朝雑煮をぞうにあんなにたく
さん食ったのも昨夜寒月君と正宗をひっくり返した
影響かも知れない。吾輩もちよつと雑煮が食つて見
たくなつた。

吾輩は猫ではあるが大抵のものは食う。車屋の黒

のように横丁の肴屋^{さかなや}まで遠征をする氣力はないし、

新道の二絃^{しんみち}琴^{にげんきん}の師匠^{とこ}の所^{みけ}の三毛^{ぜいたく}のように贅沢^{ぜいたく}は無論

云える身分でない。従つて存外^{きらい}嫌は少ない方だ。小

供の食いこぼした麵^{パン}麩^ンも食うし、餅菓子^{あん}の餡^{あん}もなめ

る。香^{こう}の物^{もの}はすこぶるまずいが経験^たのため沢庵^{あん}を二

切ばかりやつた事がある。食つて見ると妙なもので

大抵^いのものは食える。あれは嫌^{いや}だ、これは嫌^{いや}だと

云うのは贅沢ぜいたくな我儘で到底教師の家うちにいる猫などの

口にすべきところでない。主人の話しによると仏蘭フランド

西シにバルザックという小説家があつたそうだ。この

男が大の贅沢屋ぜいたくで——もつともこれは口の贅沢屋で

はない、小説家だけに文章の贅沢を尽したという事

である。バルザックが或る日自分の書いている小説

中の人間の名をつけようと思つていろいろつけて見

たが、どうしても氣に入らない。ところへ友人が遊
びに来たのでいっしょに散歩に出掛けた。友人は固^{もと}
より何も知らずに連れ出されたのであるが、バルザ
ックは兼ねて自分の苦心している名を目付^{めつけ}ようとい
う考えだから往来へ出ると何もしないで店先の看板
ばかり見て歩行^{ある}している。ところがやはり氣に入つ
た名がない。友人を連れて無暗^{むやみ}にあるく。友人は訳

がわからずにくっ付いて行く。彼等はずいに朝から晩まで巴理パリを探険した。その帰りがけにバルザックはふとある裁縫屋の看板が目についた。見るとその看板にマーカスという名がかいてある。バルザックは手を拍うつて「これだこれだこれに限る。マーカスは好い名じゃないか。マーカスの上へZという頭文字をつける、すると申し分ぶんのない名が出来る。Zで

なくてはいいかん。Z. Marcus は実にうまい。どうも自分で作った名はうまくつけたつもりでも何となく故意^{わざ}とらしいところがあつて面白くない。ようやくの事で気に入った名が出来た」と友人の迷惑はまるで忘れて、一人嬉しがったというが、小説中の人間の名前をつけるに一日巴理^{いちんちパリ}を探険しなくてはならぬようでは随分手数^{てすう}のかかる話だ。贅沢もこのくらい

出来れば結構なものだが吾輩のように牡蠣かき的主人を

持つ身の上ではとてもそんな気は出ない。何でもい

い、食えさえすれば、という気になるのも境遇のし

からしむるところであろう。だから今雑煮ぞうが食いた

くなつたのも決して贅沢の結果ではない、何でも食

える時に食っておこうという考から、主人の食あまい剩

した雑煮がもしや台所に残つていはすまいかと思ひ

出したからである。……台所へ廻つて見る。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に膠着こうちやくしている。白状するが餅というものは今まで

一辺ぺんも口に入れた事がない。見るとうまそうにもあ

るし、また少しは気味きびがわるくもある。前足で上に

かかっている菜っ葉を搔かき寄せる。爪を見ると餅の

上皮うわかわが引き掛つてねばねばする。嗅かいで見ると釜の

底の飯を御櫃おはちへ移す時のような香においがする。食おうか

な、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か

誰もいない。御三おさんは暮も春も同じような顔をして羽

根をついている。小供は奥座敷で「何とおっしやる

兎さん」を歌っている。食うとすれば今だ。もしこ

の機をはずすと来年までは餅というものの味を知ら

ずに暮してしまわねばならぬ。吾輩はこの刹那せつなに猫

ながら一の真理を感得した。「得難き機会はすべて

の動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は
実を云うとそんなに雑煮を食いたくはないのである。

否^{わんてい}碗底の様子を熟視すればするほど^{きび}気味が悪くなつ

て、食うのが厭になつたのである。この時もし御三

でも勝手口を開けたなら、奥の小供の足音がこちら

へ近付くのを聞き得たなら、吾輩は^{おしげ}惜気もなく碗を

見棄てたろう、しかも雑煮の事は来年まで念頭に浮

ばなかつたろう。ところが誰も来ない、いくらちゆうちよ躊躇

していても誰も来ない。早く食わぬか食わぬかと催

促されるような心持がする。吾輩は椀の中を覗のぞき込

みながら、早く誰か来てくれればいいと念じた。や

はり誰も来てくれない。吾輩はとうとう雑煮を食わ

なければならぬ。最後にからだ全体の重量を椀の底

へ落すようにして、あぐりと餅の角を一寸いっすんばかり食

い込んだ。このくらい力を込めて食い付いたのだから、

大抵なものなら噛かみ切れる訳だが、驚いた！

もうよかろうと思つて齒を引こうとすると引けない。

もう一辺ぺん噛み直そうとすると動きがとれない。餅は

魔物だなと疳かんづいた時はすでに遅かった。沼へでも

落ちた人が足を抜こうと焦あせ慮るたびにぶくぶく深く

沈むように、噛めば噛むほど口が重くなる、歯が動
かなくなる。歯答えはあるが、歯答えがあるだけで
どうしても始末をつける事が出来ない。美学者迷亭
先生がかつて吾輩の主人を評して君は割り切れない
男だといった事があるが、なるほどうまい事をいつ
たものだ。この餅も主人と同じようにどうしても割
り切れない。噛んでも噛んでも、三で十を割るごと

く尽未来際方じんみらいざいかたのつく期ごはあるまいと思われた。この

はんもん

煩悶はんもんの際吾輩は覚えず第二の真理に逢着ほうちやくした。「す

べての動物は直覺的に事物の適不適を予知す」真理

はすでに二つまで発明したが、餅もちがくっ付いている

ので毫ごうも愉快を感じない。齒が餅の肉に吸収されて、

抜けるように痛い。早く食い切って逃げないと御三おさん

が来る。小供の唱歌もやんだようだ、きつと台所へ

馳^かけ出して来るに相違ない。煩悶^{きよくしつぽ}の極尻尾をぐるぐ

る振って見たが何等の機能もない、耳を立てたり寝

かしたりしたが駄目である。考えて見ると耳と尻尾^{しっぽ}

は餅と何等の関係もない。要するに振り損の、立て

損の、寝かし損であると気が付いたからやめにした。

ようやくの事これは前足の助けを借りて餅を払い落

すに限ると考え付いた。まず右の方をあげて口の周

罎を撫なで廻す。撫なでたくらいで割り切れる訳のもの

ではない。今度は左ひだりの方を伸のして口を中心として

急劇に罎を劃かくして見る。そんな呪まじないで魔は落ちない。

辛防しんぼうが肝心かんじんだと思つて左右交かわる交がわるに動かしたがや

はり依然として齒は餅の中にぶら下っている。ええ

面倒だと両足を一度に使う。すると不思議な事にこ

の時だけは後足あとあし二本で立つ事が出来た。何だか猫で

ないような感じがする。猫であろうが、あるまいが
こうなつた日にやあ構うものか、何でも餅の魔が落
ちるまでやるべしという意気込みで無茶苦茶に顔中
引つ搔き廻す。前足の運動が猛烈なのでややともす
ると中心を失つて倒れかかる。倒れかかるたびに後
足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所にいる
訳にも行かんのので、台所中あちら、こちらと飛んで

廻る。我ながらよくこんなに器用に起たつていられた

ものだと思う。第三の真理が驀ばくち地に現げんぜん前する。「危

きに臨のぞめば平常なし能あたわざるところのものを為なし能

う。之これを天祐てんゆうという」幸さいわいに天祐を享うけたる吾輩が一

生懸命餅の魔と戦っていると、何だか足音がして奥

より人が来るような気合けわいである。ここで人に来られ

ては大変だと思つて、いよいよ躍起やつきとなつて台所を

かけ廻る。足音はだんだん近付いてくる。ああ残念だが天祐が少し足りない。とうとう小供に見付けられた。「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊っている」

と大きな声をする。この声を第一に聞きつけたのが御三である。羽根も羽子板も打ち遣^やつて勝手から

「あらまあ」と飛込んで来る。細君は縮緬^{ちりめん}の紋付で

「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さえ書斎から

出て来て「この馬鹿野郎」といった。面白い面白いと云うのは小供ばかりである。そうしてみんな申し合せたようにげらげら笑っている。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる訳にゆかぬ、弱った。ようやく笑いがやみそうになったら、五つになる女の子が「御かあ様、猫も随分ね」といったので狂瀾きやうらんを既倒きとうに何とかするといふ勢でまた大變笑われた。人間の

同情に乏しい実行も大分見聞だいぶんけんもんしたが、この時ほど恨うら

めしく感じた事はなかった。ついに天祐もどつかへ

消え失うせて、在来の通り四よつ這ばいになつて、眼を白黒

するの醜態を演ずるまでに閉口した。さすが見殺し

にするのも気の毒と見えて「まあ餅をとつてやれ」

と主人が御三に命ずる。御三はもつと踊らせようじ

やありませんかという眼付で細君を見る。細君は踊

は見たいが、殺してまで見る気はないのでだまつて
いる。「取つてやらんと死んでしまふ、早くとつて
やれ」と主人は再び下女を顧みる。かえり御三は御馳走を

半分食べかけて夢から起された時のように、気のな
い顔をして餅をつかんでぐいと引く。寒月君かんげつじやな

いが前歯がみんな折れるかと思つた。どうも痛いの
痛くないのつて、餅の中へ堅く食い込んでゐる歯を

情け容赦もなく引張るのだからたまらない。吾輩が

「すべての安樂は困苦を通過せざるべからず」と云う第四の真理を経験して、けろけろとあたりを見廻した時には、家人はすでに奥座敷へ這入はいつてしまつておつた。

こんな失敗をした時には内にいて御三なんぞに顔を見られるのも何となくばつが悪い。いつその事氣

を易^かえて新道の二絃^{にげんきん}琴の御師匠さんの所^{ところ}の三毛子^{みけこ}で

も訪問しようと台所から裏へ出た。三毛子はこの近

辺で有名な美貌^{びぼう}家である。吾輩は猫には相違ないが

物の情^{なさ}けは一通り心得ている。うちで主人の苦^{にが}い顔

を見たり、御三の険^{けん}突を食^くって気分が勝^{すぐ}れん時は必

ずこの異性の朋友^{ほうゆう}の許^{もと}を訪問していろいろな話をす

る。すると、いつの間^まにか心が晴^{せい}々^{せい}して今までの心

配も苦勞も何もかも忘れて、生れ變つたような心持

になる。女性の影響というものは実に莫大ばくだいなものだ。

杉垣の隙から、いるかなと思つて見渡すと、三毛子

は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく椽側えんがわに

坐っている。その背中の丸さ加減が言うに言われん

ほど美しい。曲線の美を尽している。尻尾しっぽの曲がり

加減、足の折り具合、物憂ものうげに耳をちよいちよい振

景色なども到底形容が出来ん。ことによく日の当

る所に暖かそうに、品よく控えているものだから、

身体は静肅端正の態度を有するにも関らず、天鷲毛

を欺くほどの滑らかな満身の毛は春の光りを反射し

て風なきにむらむらと微動するごとくに思われる。

吾輩はしばらく恍惚として眺めていたが、やがて我

に帰ると同時に、低い声で「三毛子さん三毛子さん」

といいながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」

と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちやらちやらと鳴る。おや正月になつたら鈴までつけたな、どうもいい音だねと感心している間に、吾輩の傍そばに来て

「あら先生、おめでとう」と尾を左りひだへ振る。吾等

猫属間ねこぞくで御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく立てて、それを左りへぐりと廻すのである。町内

で吾輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかりである。吾輩は前回断わった通りまだ名はないのであるが、教師の家うちにいるものだから三毛子だけは尊敬して先生先生といつてくれる。吾輩も先生と云われて満更まんざら悪い心持ちもしないから、はいはいと返事をしている。「やあおめでとう、大層立派に御化粧が出来ましたね」「ええ去年の暮御師匠おししょうさんに買っ

て頂いたの、宜いでしよう」とちやらちやら鳴らし
て見せる。「なるほど善い音ねですな、吾輩などは生
れてから、そんな立派なものは見た事がないですよ」
「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」とまたちや
らちやら鳴らす。「いい音ねでしよう、あたし嬉しい
わ」とちやらちやらちやら続け様に鳴らす。

「あなたのうちの御師匠さんは大変あなたを可愛が

つていると見えますね」と吾身に引きくらべて暗にあん

欣羨きんせんの意を洩もらす。三毛子は無邪気なものである

「ほんとよ、まるで自分の小供のようよ」とあどけなく笑う。猫だって笑わないとは限らない。人間は

自分よりほかに笑えるものが無いように思っている

のは間違いである。吾輩が笑うのは鼻の孔あなを三角に

して咽喉のど仏ぼとけを震動させて笑うのだから人間にはわか

らぬはずである。「一体あなたの所ところの御主人は何で

すか」「あら御主人だって、妙なね。御師匠おししょうさん

だわ。二絃琴にげんきんの御師匠さんよ」「それは吾輩も知っ

ていますがね。その御身分は何なんです。いずれ昔むか

しは立派な方なんでしょうな」「ええ」

君を待つ間まの姫小松……………

障子の内で御師匠さんが二絃琴を弾ひき出す。「宜い

い声でしよう」
と三毛子は自慢する。「宜いいようだが、吾輩にはよくわからん。全体何というものですか」
「あれ？ あれは何とかつてもものよ。御師匠さんはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六十二よ。随分丈夫だわね」
六十二で生きているくらいだから丈夫と云わねばなるまい。吾輩は「はあ」と返事をした。少し間まが抜けたようだが別に名答も

出て来なかつたから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大變好かつたんだつて。いつでもそうおつしやるの」「へえ元は何だつたんです」「何でも天てんしょういんしょういんの御祐筆ごゆうひつの妹の御嫁に行つた先さきの御おつかさんの甥おいの娘なんだつて」「何ですつて?」「あの天璋院様の御祐筆の妹の御嫁にいった……」「なるほど。少し待って下さい。天璋院様の妹の御祐筆の……」

……」 「あらそうじやないの、天璋院様の御祐筆の妹

の……」 「よろしい分りました天璋院様のでしよう」

「ええ」 「御祐筆のでしよう」 「そうよ」 「御嫁に

行つた」 「妹の御嫁に行つたですよ」 「そうそう間

違つた。妹の御嫁に入つた先きの」 「御つかさんの

甥の娘なんですとさ」 「御つかさんの甥の娘なんで

すか」 「ええ。分つたでしよう」 「いいえ。何だか

混雜して要領を得ないですよ。詰つまるところ天璋院様

の何になるんですか」「あなたもよっぽど分らないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘なんだって、先さつきっから言ってるんじゃないですか」「それはすつかり分っているんですがね」「それが分りさえすればいいんでしょ」「ええ」と仕方がないから降参をし

た。吾々は時とすると理詰の虚言^{うそ}を吐^つかねばならぬ事がある。

障子の中^{うち}で二絃琴の音^ねがぱったりやむと、御師匠

さんの声で「三毛や三毛や御飯だよ」と呼ぶ。三毛

子は嬉しそうに「あら御師匠さんが呼んでいらっし

やるから、私^{あた}し帰るわ、よくって？」わるいと云っ

たって仕方がない。「それじゃまた遊びにいらっし

「やい」と鈴をちやらちやら鳴らして庭先までかけて行つたが急に戻つて来て「あなた大変色が悪くつてよ。どうかしやしくつて」と心配そうに問いかける。まさか雑煮を食つて踊りを踊つたとも云われないから「何別段の事もありますせんが、少し考え事をしたら頭痛がしてね。あなたと話しでもしたら直るだろうと思つて実は出掛けて来たのですよ」「そう。

御大事になさいまし。さようなら」少しは名残り惜なご

し気に見えた。これで雑煮の元気もさっぱりと回復

した。いい心持になった。歸りに例の茶園ちやえんを通り抜

けようと思つて霜柱しもばしらの融けとかかったのを踏みつけな

がら建仁寺けんにんじの崩れくずから顔を出すとまた車屋の黒が枯

菊の上に背せを山にして欠伸あくびをしている。近頃は黒を

見て恐怖するような吾輩ではないが、話しをされる

と面倒だから知らぬ顔をして行き過ぎようとした。

黒の性質として他が己れを輕侮したと認むるや否や

決して黙っていない。「おい、名なしの権兵衛、近

頃じゃ乙う高く留つてゐるじゃあねえか。いくら教師

の飯を食つたつて、そんな高慢ちきな面らあするね

え。人つけ面白くもねえ」黒は吾輩の有名になつた

のを、まだ知らんと見える。説明してやりたいが到

底分る奴ではないから、まず一応の挨拶をして出来

得る限り早く御免蒙るに若くはないと決心した。

「いや黒君おめでとう。不相変元気がいいね」と尻

尾を立てて左へくると廻わす。黒は尻尾を立てた

ぎり挨拶もしない。「何おめでてえ？ 正月でおめ

でたけりや、御めえなんざあ年が年中おめでてえ方

だろう。気をつけろい、この吹い子の向う面め」吹

い子の向うづらという句は罵詈ばりの言語であるようだ

が、吾輩には了解が出来なかった。「ちよつと伺うかが

うが吹い子の向うづらと云うのはどう云う意味かね」

「へん、手めえが悪体あくたいをつかれてる癖に、その訳わけを

聞きや世話あねえ、だから正月野郎だって事よ」正

月野郎は詩的であるが、その意味に至ると吹い子の

何とかよりも一層不明瞭な文句である。参考のため

ちよつと聞いておきたいが、聞いたつて明瞭な答弁は得られぬに極きまっているから、面めんと対むかつたまま無言で立つておつた。いささか手持無沙汰の体ていである。すると突然黒のうちの神かみさんが大きな声を張り揚げて「おや棚へ上げて置いた鮭しゃけがない。大變だ。またあの黒の畜生ちきしょうが取つたんだよ。ほんとに憎らしい猫だつちやありやあしない。今に歸つて来たら、どう

するか見ていやがれ」と怒鳴る。どな 初春はつはるの長閑のどかな空気

を無遠慮に震動させて、枝を鳴らさぬ君が御代みよを大おお

に俗了ぞくりようしてしまふ。黒は怒鳴るなら、怒鳴りたいだ

け怒鳴っていると云わぬばかりに横着な顔をして、

四角な顚あでこを前へ出しながら、あれを聞いたかと合図

をする。今までは黒との応対で気がつかなかったが、

見ると彼の足の下には一切れ二銭三厘に相当する鮭

の骨が泥だらけになって転がっている。「君不相変あいかわらず

やってるな」と今までの行き掛りは忘れて、つい感

投詞を奉呈した。黒はそのくらいな事ではなかなか

機嫌を直さない。「何がやってるでえ、この野郎。

し、や、け、の一切や二切で相変らずたあ何だ。人を見縊みく

びつた事をいうねえ。憚はばりながら車屋の黒だあ」と

腕まくりの代りに右の前足を逆さかに肩の辺へんまで搔かき

上げた。「君が黒君だと云う事は、始めから知ってるさ」「知ってるのに、相変らずやってるたあ何だ。何だてえ事よ」と熱いのを頻しきりに吹き懸ける。人間なら胸倉むなぐらをとられて小突き廻されるところである。

少々辟易へきえきして内心困った事になったなと思っ
と、再び例の神さんの大声が聞える。「ちよいと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよこの人

あ。牛肉を一斤^{きん}すぐ持つて来るんだよ。いいかい、

分ったかい、牛肉の堅くないところを一斤だよ」と

牛肉注文の声が四隣^{しりん}の寂寞^{せきばく}を破る。「へん年に一遍

牛肉を誂^{あつら}えると思つて、いやに大きな声を出しやあ

がらあ。牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだから始末

に終えねえ阿魔^{あま}だ」と黒は嘲^{あざけ}りながら四つ足を踏張^{ふんば}

る。吾輩は挨拶のしようもないから黙つて見ている。

「一斤くらいじゃあ、承知が出来ねえんだが、仕方がねえ、いいから取るときや、今に食ってやらあ」

と自分のために逃あつらえたもののごとくいう。「今度は

本当の御馳走だ。結構結構」と吾輩はなるべく彼を

帰そうとする。「御めっちの知った事じゃねえ。黙

っている。うるせえや」と云いながら突然後足あとあしで霜しも

柱ばしらの崩れた奴を吾輩の頭へばさりと浴あびせ掛ける。

吾輩が驚ろいて、からだの泥を払っている間に黒は垣根を潜くぐつて、どこかへ姿を隠した。大方西川の牛ぎゆうを覘ねらいに行つたものであろう。

家うちへ帰ると座敷の中が、いつになく春めいて主人

の笑い声さえ陽気に聞える。はてなと明け放した椽

側あがから上つて主人の傍そばへ寄つて見ると見馴れぬ客が

来ている。頭を奇麗に分けて、木綿もめんの紋付の羽織に

こくら

はかま

しごく

しよせいとい

小倉の袴を着けて至極真面目そうな書生体の男であ

る。主人の手あぶりの角を見ると春慶塗りの巻煙草

しゅんけいぬ

まきたばこ

おちとうふうくん

そろ

入れと並んで越智東風君を紹介致候水島寒月という

名刺があるので、この客の名前も、寒月君の友人で

あるという事も知れた。主客しゅかくの対話は途中からであ

るから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹

介した美学者迷亭君の事に関しているらしい。

「それで面白い趣向があるから是非いつしよに來いとおっしゃるので」と客は落ちついて云う。「何ですか、その西洋料理へ行つて午飯ひるめしを食うのについて趣向があるといふのですか」と主人は茶を続つぎ足して客の前へ押しやる。「さあ、その趣向というのが、その時は私にも分らなかつたんですが、いずれあの方かたの事ですから、何か面白い種があるのだらうと思

いまして……」 「いっしょに行きましたか、なるほど」 「ところが驚いたのです」 主人はそれ見たかと云わぬばかりに、膝ひざの上に乗った吾輩の頭をぽかと叩く。たた少し痛い。「また馬鹿な茶番見たような事な
んでしよう。あの男はあれが癖でね」 と急にアンド
レア・デル・サルト事件を思い出す。「へへー。君
何か変ったものを食おうじゃないかとおっしやるの

で」「何を食いました」「まず献立こんだてを見ながらいろ

いろ料理についての御話しがありました」「誂あつらえ

ない前にですか」「ええ」「それから」「それから

首を捻ひねってボーの方を御覧になつて、どうも変つた

ものもないようだなとおっしやるとボーは負けぬ気

で鴨かものロースか小牛のチャップなどは如何いかですと云

うと、先生は、そんな月並つきなみを食いにわざわざここま

で来やしないとおっしやるんで、ボイは月並という
意味が分らんものですから妙な顔をして黙っていま
したよ」「そうでしょう」「それから私の方を御向
きになつて、君仏蘭西フランスや英吉利イギリスへ行くと随分天明調てんめいちよう
や万葉調まんようちようが食えるんだが、日本じゃどこへ行つたつ
て版で圧おしたようで、どうも西洋料理へ這はい入る気が
しないと云うような大気燄だいきえんで——全体あの方かたは洋行

なすった事があるのですかな」「何迷亭が洋行なんかするもんですか、そりや金もあり、時もあり、行こうと思えばいつでも行かれるんですがね。大方これから行くつもりのところを、過去に見立てた洒落しやれなんでしよう」と主人は自分ながらうまい事を言つたつもりで誘い出し笑をする。客はさまで感服した様子もない。「そうですか、私はまたいつの間に洋ま

行なさったかと思つて、つい真面目に拝聴してしました。それに見て来たようになめくじのソップの御話や蛙かえるのシチュの形容をなさるものですから」「そりや誰かに聞いたんでしよう、うそをつく事はなかなか名人ですからね」「どうもそうのようで」と花か瓶びんの水仙を眺める。少しく残念の気色けしきにも取られる。「じゃ趣向というのは、それなんですネ」と主人が

念を押す。「いえそれはほんの冒頭なので、本論はこれからなのです」「ふーん」と主人は好奇的な感
投詞を挟む。^{はさ}「それから、とてもなめくじや蛙は食
おうっても食べやしないから、まあトチメンボーく
らいなところで負けとく事にしようじゃないか君と
御相談なさるものですから、私はつい何の気なしに、
それがいいでしょう、^といってしまったので」「へ

「とちめんぼうは妙ですな」「ええ全く妙なので

すが、先生があまり真面目なものですから、つい気

がつきませんでした」とあたかも主人に向つて麁忽そこつ

を詫わびているように見える。「それからどうしまし

た」と主人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向同情

を表しておらん。「それからボーにおいトチメンボ

ー、ににんまえを二人前持つて来いというト、ボーがメンチボー

ですかと聞き直しましたが、先生はますます真面目まじめ

な貌かおでメンチボーじゃないトチメンボーだと訂正さ

れました」 「なある。そのトチメンボーという料理

は一体あるんですか」 「さあ私も少しおかしいとは

思いましたがいかにも先生が沈着であるし、その上

あの通りの西洋通でいらっしやるし、ことにその時

は洋行なすったものと信じ切っていたものですから、

私も口を添えてトチメンボーだトチメンボーだトチメンボーだトボ
イに教えてやりました」 「ボイはどうしました」

「ボイがね、今考えると実に滑稽こっけいなんですすがね、し

ばらく思案していましてね、はなはだ御気の毒様で

すが今日はトチメンボーは御生憎様おあいにくさまでメンチボーな

おふたりまえ

ら御二人前すぐに出来ますと云うと、先生は非常に

残念な様子で、それじゃせっかくここまで来た甲斐かい

がない。どうかトチメンボーを都合して食わせても

わけ

らう訳には行くまいかと、ボーに二十錢銀貨をやら

れると、ボーはそれではともかくも料理番と相談し

て参りましようとお奥へ行きましたよ」「大変トチメ

ンボーが食いたかつたと見えますね」「しばらくし

まこと

てボーが出て来て真に御生憎で、御誂ならこしらえ

おあつらえ

ますが少々時間がかかります、と云うと迷亭先生は

落ちついたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、少し待って食って行こうじゃないかと云いながらポケットから葉巻を出してぷかりぷかり吹かし始められたので、私しも仕方ないから、わたく懐からふところ日本新聞を出して読み出しました、するとボーはまた奥へ相談に行きましたよ」「いやに手数が掛りますな」と主人は戦争の通信を読むくらいの意気込で

席を前^{すす}める。「するとボーがまた出て来て、近頃は

トチメンボ^ーの材料が払底で亀屋へ行つても横浜の

十五番へ行つても買われませんかから当分の間は御生

憎様でと気の毒そうに云うと、先生はそりや困つた

な、せつかく来たのになあと私の方を御覧になつて

しきりに繰り返さるので、私も黙っている訳にも

参りませんから、どうも遺憾^{いかん}ですな、遺憾^{きわま}極るです

なと調子を合せたのです」「ごもつともで」と主人が賛成する。何がごもつともだか吾輩にはわからん。「するとボーも気の毒だと見えて、その内材料が参りましたら、どうか願いますってんでしよう。先生が材料は何を使うかねと問われるとボーはへへへへと笑って返事をしないんです。材料は日本派の俳人だろうと先生が押し返して聞くとボーはへえさよう

で、それだものだから近頃は横浜へ行つても買われ
ませんので、まことにお気の毒様と云いましたよ」

「アハハハそれが落ちなんですか、こりや面白い」

と主人はいつになく大きな声で笑う。膝がひざ揺れて吾

輩は落ちかかる。主人はそれにも頓着とんじゃくなく笑う。ア

ンドレア・デル・サルトにかか罹かかつたのは自分一人でな

いと云う事を知ったので急に愉快になつたものと見

える。「それから二人で表へ出ると、どうだ君うま

く行つたらう、とちめんぼう橡面坊を種に使つたところが面白か

らうと大得意なんです。敬服の至りですと云つて御

別れしたようなものの実は午飯ひるめしの時刻が延びたので

大変空腹になつて弱りましたよ」「それは御迷惑で

したろう」と主人は始めて同情を表する。これには

吾輩も異存はない。しばらく話しが途切れて吾輩の

のど
咽喉を鳴らす音が主客しゅかくの耳に入る。

東風君は冷めなくなつた茶をぐつと飲み干して

「実は今日参りましたのは、少々先生に御願があつて参つたので」と改まる。「はあ、何か御用で」と

主人も負けずに済すます。「御承知の通り、文学美術

が好きなものですから……」「結構で」と油さを注す。

「同志だけがよりましてせんだってから朗読会とい

うのを組織しまして、毎月一回会合してこの方面の研究をこれから続けたいつもりで、すでに第一回は去年の暮に開いたくらいであります」「ちよつと伺つておきますが、朗読会と云うと何か節奏ふしでも附けて、詩歌しいか文章の類るいを読むように聞えますが、一体どんな風にやるんです」「まあ初めは古人の作からはじめて、追々おいおいは同人の創作なんかもやるつもりです」

「古人の作という和白樂天の琵琶行はくらくてん びわこうのようなもので

でもあるんですか」「いいえ」ぶそん「蕪村の春風馬堤曲しゅんふうばていきよく

の種類ですか」「いいえ」「それじゃ、どんなもの

をやったんです」「せんだつては近松の心中物しんじゅうものをや

りました」「近松？じょうるりあの浄瑠璃じようるりの近松ですか」近

松に二人はない。近松といえは戯曲家の近松に極きまつ

ている。それを聞き直す主人はよほど愚ぐだと思つて

いると、主人は何にも分らずに吾輩の頭を叮嚀ていねいに撫なでている。藪睨やぶにらみから惚ほれられたと自認している人間もある世の中だからこのくらいの誤謬ごびゅうは決して驚くに足らんと撫でらるるがままにすましていた。

「ええ」と答えて東風子とうふうしは主人の顔色を窺うかがう。「そ

れじゃ一人で朗読するのですか、または役割を極きめてやるんですか」「役を極めて懸合かけあいでやって見まし

た。その主意はなるべく作中の人物に同情を持って
その性格を発揮するのを第一として、それに手真似
や身振りを添えます。白せりふはなるべくその時代の人を
写し出すのが主で、御嬢さんでも丁稚でっちでも、その人
物が出てきたようにやるんです」「じゃ、まあ芝居
見たようなものじゃありませんか」「ええ衣装いしやうと書かき
割わりがないくらいなものですな」「失礼ながらうまく

行きますか」「まあ第一回としては成功した方だと

思います」「それでこの前やったとおっしやる心中

物というところ」「その、船頭が御客を乗せて芳原よしわらへ行

く所ところなんです」「大變な幕をやりましたな」と教師だ

けにちよつと首を傾かたむける。鼻から吹き出した日の出、

の煙りが耳を掠かすめて顔の横手へ廻る。「なあに、そ

んなに大變な事もないんです。登場の人物は御客と、

船頭と、花魁おいらんと仲居なかいと遣手やりてと見番けんばんだけですから」と

東風子は平気なものである。主人は花魁という名を

きいてちよつと苦にがい顔をしたが、仲居、遣手、見番

という術語について明瞭の智識がなかったと見えて

まず質問を呈出した。「仲居しょうかというのは娼家しょうかの下婢かひ

にあたるものですか」 「まだよく研究はして見ま

せんが仲居は茶屋の下女で、遣手おんなべやというのが女部屋

の助役見たようなものだろうと思います」東風子は

さつき、その人物が出て来るようにこわいろ仮色を使うと云

った癖に遣手や仲居の性格をよく解しておらんらし

い。「なるほど仲居は茶屋にれいぞく隷属するもので、遣手

は娼家に起き臥がする者ですね。次に見番と云うのは人

間ですかまたは一定の場所を指さすのですか、もし人

間とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の

人間だと思ひます」 「何を司つかさどっているんですかな」

「さあそこまではまだ調べが届いておりません。そ

の内調べて見ましよう」これで懸合をやつた日には

頓珍漢とんちんかんなものが出来るだろうと吾輩は主人の顔をち

よつと見上げた。主人は存外真面目である。「それ

で朗読家は君のほかになんな人が加わつたんですか」

「いろいろありました。花魁が法学士のK君でした

が、口髯くちひげを生やして、女の甘ったるいせりふを使つかか

うのですからちよつと妙でした。それにその花魁が癩しやくを起すところがあるので……」朗読でも癩を起

さなくっちゃ、いけないんですか」と主人は心配そうに尋ねる。「ええとにかく表情が大事ですから」

と東風子はどこまでも文芸家の氣でいる。「うまく癩が起りましたか」と主人は警句を吐く。「癩だけ

は第一回には、ちと無理でした」と東風子も警句を吐く。「ところで君は何の役割でした」と主人が聞く。「私わたくしは船頭」「へー、君が船頭」君にして船頭が務つとまるものなら僕にも見番くらいはやれると云ったような語気を洩もらす。やがて「船頭は無理でしたか」と御世辞のないところを打ち明ける。東風子は別段癪に障った様子もない。やはり沈着な口調で

「その船頭でせつかくの催しも竜頭蛇尾りゅうとうだびに終りました。

実は会場の隣りに女学生が四五人下宿していま

してね、それがどうして聞いたものか、その日は朗

読会があるという事を、どこかで探知して会場の窓

下へ来て傍聴していたものと見えます。わたく私しが船頭

のこわいろ仮色を使つて、ようやく調子づいてこれなら大丈

夫と思つて得意にやっていると、……つまり身振り

があまり過ぎたのでしよう、今まで耐^こらえていた女
学生が一度にわっと笑いだしたものですから、驚ろ
いた事も驚ろいたし、極^{きま}りが悪^わるい事も悪^わるいし、
それで腰を折られてから、どうしても後^{あと}がつづけら
れないので、とうとうそれ限^きりで散会しました」第
一回としては成功だと称する朗読会がこれでは、失
敗はどんなものだろうと想像すると笑わずにはいら

れない。覚えのどぼとけず咽喉仏がごろごろ鳴る。主人はいよ

いよ柔かに頭を撫なでてくれる。人を笑って可愛がら

れるのはありがたいが、いささか無気味なところも

ある。「それは飛んだ事で」と主人は正月早々弔詞ちようじ

を述べている。「第二回からは、もつと奮発して盛

大にやるつもりなので、今日出ましたのも全くその

ためで、実は先生にも一つ御入会の上御尽力を仰ぎ

たいので」「僕にはとても癩なんか起せませんよ」

と消極的の主人はすぐに断わりかける。「いえ、癩

などは起していただかんでもよろしいので、ここに

賛助員の名簿が」と云いながら紫の風呂敷から大事

そうに小菊版こぎくばんの帳面を出す。「これへどうか御署名

の上御捺印ごなついでんを願いたいので」と帳面を主人の膝ひざの前

へ開いたまま置く。見ると現今知名な文学博士、文

学士連中の名が行儀よく勢揃せいぞろいをしている。「はあ賛

成員にならん事ありませんが、どんな義務がある

のですか」かきせんせいと牡蠣先生は掛念けねんの体ていに見える。「義務

と申して別段是非願う事もないくらいで、ただ御名

前だけを御記入下さって賛成の意さえ御表し被下れおひよう
くださ

ばそれで結構です」「そんなら這入はいります」と義務

のかからぬ事を知るや否や主人は急に気軽になる。

責任さえないと云う事が分つておれば謀叛むほんの連判状

へでも名を書き入れますと云う顔付をする。のみならず加之こ

う知名の学者が名前を列つらねている中に姓名だけでも

入籍させるのは、今までこんな事に出合つた事のな

い主人にとっては無上の光栄であるから返事の勢の

あるのも無理はない。「ちよつと失敬」と主人は書

斎へ印をとりに入る。吾輩はぼたりと畳の上へ落

ちる。東風子は菓子皿の中のカステラをつまんで一

口に頬張る。ほおばモゴモゴしばらくは苦しそうである。

吾輩は今朝の雑煮事件をぞうにちよつと思ひ出す。主人が

書齋から印形いんぎようを持って出て来た時は、東風子の胃の

中にカステラが落ちついた時であつた。主人は菓子

皿のカステラが一切ひときれ足りなくなつた事には気が着か

ぬらしい。もし気がつくとすれば第一に疑われるも

のは吾輩であらう。

東風子が帰ってから、主人が書齋に入って机の上を見ると、いつの間にか迷亭先生の手紙が来ている。

「新年の御慶目出度申納候^{ぎよけいめでたもうしおさめそろ}。」

……」

いつになく出が真面目だと主人が思う。迷亭先生

の手紙に真面目なのはほとんどのので、この間な

どは「其後別に恋着せる婦人も無之、いず方より艶

しよ

書も参らず、先ず先ず無事に消光罷り在り候間、乍

りながら

憚御休心可被下候」と云うのが来たくらいである。

くださるべくそろ

それに較べるとこの年始状は例外にも世間的である。

くら

まか

そろ

はばか

そのご

れんちやく

これなく

かた

えん

「一寸参堂仕り度候^{たく}えども、大兄の消極主義に反して、出来得る限り積極的方針を以^{もつ}て、此千古未^み曾^ぞ有の新年を迎うる計画故、毎日毎日目の廻る程の多忙、御推察願上候^{そろ}……」

なるほどあの男の事だから正月は遊び廻るのに忙

がしいに違いないと、主人は腹の中で迷亭君に同意する。

「昨日は一刻のひまを偷^{ぬす}み、東風子にトチメンボ、
の御馳走^{ごちそう}を致さんと存^{ぞろ}じ候^{ところ}処、生憎^{あいにく}材料払底^たの為^{ため}
其意を果さず、遺憾^{いかん}千万に存^{ぞんじ}候^{ところ}。……」

そろそろ例の通りになつて来たと主人は無言で微笑する。

「明日は某男爵の歌留多^{かるたかい}会、明後日は審美学協会の新年宴会、其明日は鳥部教授歓迎会、其又明日は……」

うるさいなと、主人は読みとばす。

「右の如く謡曲会、俳句会、短歌会、新体詩会等、

会の連発にて当分の間は、のべつ幕無しに出勤致し

候^{そろ}為め、不得^{やむをえず}已賀状を以て拝趨^{はいすう}の礼に易^かえ候段不悪^{そろだんあしからず}

ごゆうじょくだされたくそろ

御宥恕被下度候。……」

別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事をする。

「今度御光来の節は久し振りにて晚餐でも供し度心

たき

得に御座候。

そろ

かんちゅう

寒厨何の珍味も無之候えども、せめて

これなくそうら

はトチメンボーでもと只今より心掛居候。

おりそろ

……」

まだトチメンボ―を振り廻している。失敬なと主人はちよつとむつとする。

「然^{しか}しトチメンボ―は近頃材料払底の為め、ことに

依ると間に合い兼^{かね}候も計りがたきにつき、其節は孔^{くじ}

雀の舌^{やく}でも御風味に入れ可^{した}申候。^{もうすべくそろ}……」

両天秤をかけたたと主人は、あとが読みたくなる

。

「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指

の半ばなかにも足らぬ程故健啖けんたんなる大兄の胃囊いぶくろを充みたす

為には……」

うそをつけと主人は打ち遣やつたようにいう。

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さざる可べらずと存ぞん

候しそろ。然る所孔雀は動物園、浅草花屋敷等には、ちら

ほら見受け候えども、普通の鳥屋など杯いっこうには一向見当り

不申もうさず、苦心くしん此事このことに御座候そろ。……」

独りで勝手に苦心しているのじやないかと主人は
毫まも感謝きんしやうの意を表しない。

「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌みぎり、一時非

常に流行致し候そろものにて、豪奢風流ごうしやの極度と平生よ

りひそかに食指しょくしを動かし居候次第御諒察可被下候。
おりそろ

……」

何が御諒察だ、馬鹿なと主人はすこぶる冷淡である。

「降^{くだ}って十六七世紀の頃迄は全欧を通じて孔雀は宴席に欠くべからざる好味と相成居候。あいなりおりそろレスター伯が

エリザベス女皇をじょこうケニルウオースに招待致し候節もそろせつ

慥^{たし}か孔雀を使用致^{そろう}し候様記憶^{いたし}致^{そろう}候。

有名なるレンブ

ラントが画^{えが}き候饗宴^{そろう}の図にも孔雀が尾を広げたる儘^{まま}

卓上^{よこた}に横^{よこた}わり居^{そろう}り候……」

孔雀の料理史をかくくらいなら、そんなに多忙で
もなさそうだと不平をこぼす。

「とにかく近頃の如く御馳走の食べ続けにては、さすがの小生も遠からぬうちに大兄の如く胃弱と相成あいなるは必定……」
ひつじょう

大兄のごとくは余計だ。何も僕を胃弱の標準にしなくても済むと主人はつぶやいた。

「歴史家の説によれば羅馬人ローマじんは日に二度三度も宴会

を開き候由。そろよし日に二度も三度も方丈ほうじょうの食饌しょくせんに就き候

えば如何なる健胃の人にてても消化機能に不調を醸かもす

べく、従つて自然は大兄の如く……」

また大兄のごとくか、失敬な。

「然るに贅沢ぜいたくと衛生とを両立せしめんと研究を尽したる彼等は不相当に多量の滋味を貪むさぼると同時に胃腸を常態に保持するの必要を認め、ここに一の秘法を案出致し候そろ……」

はてねと主人は急に熱心になる。

「彼等は食後必ず入浴致候。いたしそろ 入浴後一種の方法によ

りて浴前に嚥下よくぜん えんかせるものを悉く嘔吐ことごと おうとし、胃内を掃除

致し候。そろ 胃内廓清いなかくせいの功を奏したる後のち又食卓に就つき、

飽あく迄珍味を風好ふうこうし、風好おわし了れば又湯に入りて之これ

を吐出致候。としゆついたしそろ かくの如くすれば好物は貪むさぼり次第貪

り候も毫も内臓の諸機関に障害を生ぜず、一挙兩得

とは此等の事を可申もうすべきかと愚考致候……」いたしそろ

なるほど一挙兩得に相違ない。主人は羨ましうらやそう
な顔をする。

「廿世紀の今日こんにち交通の頻繁ひんぱん、宴会の増加は申す迄も

なく、軍国多事征露の第二年とも相成候折柄そろりから、吾人

戦勝国の国民は、是非共羅馬人ローマに倣ならつて此入浴嘔吐

の術を研究せざるべからざる機会に到着致し候事とそろ

自信致候。いたしそろ

左もなくば切角せっかくの大国民も近き将来に於

て悉く大兄の如く胃病患者と相成る事と窃ひそかに心痛

罷りあり候……」まか そろ

また大兄のごとくか、癩しやくに障さわる男だと主人が思う

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を考究し、既に廃絶せる秘法を発見し、之を明治の社会に応用致し候わば所謂禍を未萌に防ぐの功德にも相成り平素逸楽を擅に致し候御恩返も相立ち可申と存候

いつらくほしいまま

そろ

いわばざわい みほう

くどく

もうすべくぞんじそろ

……」

何だか妙だなと首を捻^{ひね}る。

「依^{よつ}て此間中^{じゅう}よりギボン、モンセン、スミス等諸家

の著述^{しやうりよう}を涉獵^{おりそうら}致し居候えども未^{いま}だに発見^{たんしよ}の端緒^{たんしよ}をも

見出^{みいだ}し得ざるは残念の至^{ぞんじそろ}に存候。然し御存じの如く

小生は一度思^{そろ}い立ち候事は成功するまでは決して中

絶^{つかまつ}仕^{つかまつ}らざる性質に候えば嘔吐^{おうとほう}方を再興致^{そろ}し候も遠か

らぬうちと信じ居り候次第。そろ右は発見次第御報道可つかま

つるべくそろ

仕候につき、左様御承知可被下候。くださるべくそろ就てはさきに申つい

そろ

上候トチメンボー及び孔雀の舌の御馳走も可相成はあいなるべく

右発見後に致し度、たく左すれば小生の都合は勿論、もちろん既

に胃弱に悩み居らるる大兄の為にも御便宜かごべんぎと存候ぞんじそろ

草々不備」

何だとうとう担かつがれたのか、あまり書き方が真面

目だものだからつい仕舞しままで本氣にして読んでいた

。新年匆々そうそうこんな悪戯いたずらをやる迷亭はよつぽどひま人

だなあと主人は笑いながら云った。

それから四五日は別段の事もなく過ぎ去った。白は

磁くじの水仙がだんだん凋しぼんで、青軸あおじくの梅が瓶びんながらだ

んだん開きかかるのを眺め暮らしてばかりいてもつ

いちりょうど

まらんと思つて、一両度三毛子を訪問して見たが逢^あ

へんめ

われない。最初は留守だと思つたが、二返目には病

気で寝ているという事が知れた。障子の中で例の御

ちようずばち

師匠さんと下女が話しをしているのを手水鉢の葉蘭
の影に隠れて聞いているところであつた。

「三毛は御飯をたべるかい」「いいえ今朝からまだ

なん

何にも食べません、あつたかにして御火燵^{おこた}に寝かし

ておきました」何だか猫らしくない。まるで人間の取扱を受けている。

一方では自分の境遇と比べて見て羨ましくもあるが、一方では己が愛している猫が^{おの}かくまで厚遇を受けていると思えば嬉しくもある。

「どうも困るね、御飯をたべないと、身体が^{からだ}疲れるばかりだからね」「そうでございますとも、私共で

さえ一日御饗をいただかないと、明くる日はとても働けませんもの」

下女は自分より猫の方が上等な動物であるような返事をする。実際この家では下女より猫の方が大切かも知れない。

「御医者様へ連れて行つたのかい」「ええ、あの御医者にはよっぽど妙でございますよ。私が三毛をだい

て診察場へ行くと、風邪かぜでも引いたのかって私の脈みやく

をとろうとするんでしょう。いえ病人は私ではござ

いません。これですって三毛を膝の上へ直したら、

にやにや笑いながら、猫の病気はわしにも分らん、

抛ほうっておいたら今に癒なおるだろうってんですもの、あ

んまり苛ひどいじゃございませんか。腹が立ったから、

それじゃ見ていたただかなくつてもようございますこ

れでも大事の猫なんですって、三毛を懷ふところへ入れてさ

っさと歸つて参りました」「ほんにねえ」

「ほんにねえ」は到底とうてい吾輩のうちなどで聞かれる言

葉ではない。やはり天璋院様てんしょういんの何とかの何とかでな

くては使えない、はなはだ雅がである后感心した。

「何だかしくしく云うようだが……」「ええきつと

風邪を引いて咽喉のどが痛むんでございますよ。風邪を

引くと、どなたでも御咳おせきが出ますからね……」

天璋院様の何とかの何とかの下女だけに馬鹿ていねい丁寧な言葉を使う。

「それに近頃は肺病とか云うものが出来てのう」

「ほんとにこの頃のように肺病だのペストだのって新しい病気ばかり殖ふえた日にや油断も隙もなりやしませんのでございますよ」「旧幕時代に無い者に碌ろく

な者はないから御前も気をつけないといかんよ」

「そうでございましょうかねえ」

下女は大に感動おおいしている。

「風邪かぜを引くといつてもあまり出あるきもしないよ
うだったに……」 「いえね、あなた、それが近頃は
悪い友達が出来ましてね」

下女は国事の秘密でも語る時のように大得意であ

る。

「悪い友達？」 「ええあの表通りの教師の所とこにいる

薄ぎたない雄猫おねこでございますよ」 「教師と云うのは

あの毎朝無作法な声を出す人かえ」 「ええ顔を洗

うたんびに鵜鳥がちょうが絞め殺しされるような声を出す人で

ござんす」

鵜鳥が絞め殺されるような声はうまい形容である

。吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽うがいをやる時、楊枝ようじで

咽喉のどをつつ突いて妙な声が無遠慮に出す癖がある。

機嫌の悪い時はやけにがあがやる、機嫌の好い時

は元気づいてなおがあがやる。つまり機嫌のいい

時も悪い時も休みなく勢よくがあがやる。細君の

話しではここへ引越す前まではこんな癖はなかった

そうだが、ある時ふとやり出してから今日きょうまで一日

もやめた事がないという。ちよつと厄介な癖であるが、なぜこんな事を根気よく続けているのか吾等猫などには到底想像もつかん。それもまず善いとして「薄ぎたない猫」とは随分酷評をやるものだとなお耳を立ててあとを聞く。

「あんな声を出して何の呪いまじなになるか知らん。御維ごいつ新前しんまえは中間ちゅうげんでも草履取ぞうりりでも相応の作法は心得たも

ので、屋敷町などで、あんな顔の洗い方をするものは一人もおらなかつたよ」「そうでございましょうともねえ」

下女は無暗むやみに感服しては、無暗にねえを使用する

。「あんな主人を持っている猫だから、どうせ野良猫のらねこさ、今度来たら少し叩たたいておやり」「叩いてやりま

すとも、三毛の病氣になつたのも全くあいつの御蔭に相違ございませんもの、きつと讐かたきをとつてやります」

飛んだ冤罪えんざいを蒙こうむつたものだ。こいつは滅多めったに近ちか寄よれないと三毛子にはとうとう逢わずに歸つた。

歸つて見ると主人は書齋うちの中で何か沈吟ちんぎんの体ていで筆を執とっている。二絃琴にげんきんの御師匠とこさんの所で聞いた評

判を話したら、さぞ怒るおこだろうが、知らぬが仏とやらで、うんうん云いながら神聖な詩人になりすましている。

ところへ当分多忙で行かれないと云って、わざわざ年始状をよこした迷亭君が飄然ひょうぜんとやって来る。

「何か新体詩でも作っているのかね。面白いのが出来たら見せたまえ」と云う。「うん、ちよっとうま

い文章だと思ったから今翻訳して見ようと思つてね

」と主人は重たそうに口を開く。「文章？　誰^だれの

文章だい」「誰れのか分らんよ」「無名氏か、無名

氏の作にも随分善いのあるからなかなか馬鹿に出
来ない。全体どこにあつたのか」と問う。「第二読

本」と主人は落ちつきはらつて答える。「第二読本

？　第二読本がどうしたんだ」「僕の翻訳している

名文と云うのは第二読本の中うちにあると云う事さ」

「冗談じょうだんじゃない。孔雀の舌の讐かたきを際きわどいところで討

とうと云う寸法なんだろう」 「僕は君のような法螺ほら

吹ふきとは違ちがうさ」と口髯くちひげを捻ひねる。泰然たるものだ。

「昔むかしある人が山陽に、先生近頃名文はござらぬか

といったら、山陽が馬子まごの書いた借金の催促状を示

して近來の名文はまずこれでしようと言ったという

話があるから、君の審美眼も存外たしかかも知れん

。どれ読んで見給え、僕が批評してやるから」と迷

亭先生は審美眼の本家ほんけのような事を云う。主人は禪

坊主が大燈国師だいとうこくしの遺誠ゆいかいを読むような声を出して読み

始める。「巨人きょじん、引力いんりょく」「何だいその巨人引力と云

うのは」「巨人引力と云う題さ」「妙な題だな、僕

には意味がわからんね」「引力と云う名を持ってい

る巨人というつもりさ」「少し無理なつもりだが表題だからまず負けておくとしよう。それから早々本そうそう文を読むさ、君は声が善いからなかなか面白い」

「ま雑ぜかえしてはいかんよ」と予あらかじめ念を押してまた読み始める。

ケートは窓から外面そとを眺ながめる。小児しょうにが球たまを投げて遊

んでいる。彼等は高く球を空中に擲つ。球は上へ上へとのぼる。しばらくすると落ちて来る。彼等はまた球を高く擲つ。再び三度。擲つたびに球は落ちてくる。なぜ落ちるのか、なぜ上へ上へとのみのぼらぬかとケートが聞く。「巨人が地中に住む故に」と母が答える。「彼は巨人引力である。彼は強い。彼は万物を己れおのの方へと引く。彼は家屋を地上に引く

。引かねば飛んでしまう。小児も飛んでしまう。葉が落ちるのを見たらう。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を落す事がある。巨人引力が来いというからである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ。呼ぶと落ちてくる」

「それぎりかい」「むむ、うま甘いじゃないか」「いや

これは恐れ入った。飛んだところでトチメンボーの

御返礼に預あずかった」御返礼でもなんでもないさ、実

際うまいから訳して見たのさ、君はそう思わんかね

」と金縁の眼鏡の奥を見る。「どうも驚ろいたね。

君にしてこの伎倆ぎりようあらんとは、全く此度こんどという今度こんど

は担かつがれたよ、降参降参」と一人で承知して一人で

喋しゃべ舌る。主人には一向いっこう通じない。「何も君を降参さ

せる考えはないさ。ただ面白い文章だと思ったから
訳して見たばかりさ」「いや実に面白い。そう来な
くつちや本ものでない。凄^{すご}いものだ。恐縮だ」「そ
んなに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩画をや
めたから、その代りに文章でもやろうと思ってね」
「どうして遠近無差別黒白平等の水彩画の比じやな
えんきんむさべ つくびやびようどう
い。感服の至りだよ」「そうほめてくれると僕も乗

り気になる」と主人はあくまでも疇違かんちがいをしている。

ところへ寒月君かんげつが先日は失礼しましたと這入はいって

来る。「いや失敬。今大変な名文を拝聴してトチメ

ンボンボーの亡魂を退治たいじられたところで」と迷亭先生は

訳のわからぬ事をほのめかす。「はあ、そうですか

」とこれも訳の分らぬ挨拶をする。主人だけは左さの

み浮かれた気色けしきもない。「先日は君の紹介で越智東

風ふうと云う人が来たよ」「ああ上あがりましたか、あの越お

智東ちこち風と云う男は至って正直な男ですが少し変って

いるところがあるので、あるいは御迷惑かと思いま

したが、是非紹介してくれというものですから……

」「別に迷惑の事もないがね……」「こちらへ上あがつ

ても自分の姓名のことについて何か弁じて行きやし

ませんか」「いいえ、そんな話もなかったようだ」

「そうですか、どこへ行っても初対面の人には自分の名前の講釈こうしゃくをするのが癖くせでしてね」「どんな講釈

をするんだい」と事あれかしと待ち構えた迷亭君は

口を入れる。「あの東風こちと云うのを音おんで読よまれると

大変きん気にするので」「はてね」と迷亭先生は金唐皮きんからかわ

の煙草たばこ入いれから煙草をつまみ出す。「私わたくしの名は越智おちと

東風とうふうではありません、越智おちこちらですと必ず断ります

よ」「妙だね」と雲井くもいを腹の底まで呑み込のむ。「そ

れが全く文学熱から来たので、こちと読むと遠近と

云う成語せいごになる、のみならずその姓名が韻いんを踏んで

いると云うのが得意なんです。それだから東風こちを音おん

で読むと僕がせつかくの苦心を人が買ってくれない

といつて不平を云うのです」「こりやなるほど変つ

てる」と迷亭先生は図に乗って腹の底から雲井を鼻

の孔^{あな}まで吐き返す。途中で煙が戸^{とまど}迷いをして咽喉^{のど}の

出口へ引きかかる。先生は煙管^{きせる}を握ってごほんごほ

んと咽^{むせ}び返る。「先日来た時は朗読会で船頭になつ

て女学生に笑われたといっていたよ」と主人は笑い

ながら云う。「うむそれぞれ」と迷亭先生が煙管^{きせる}で

膝頭^{ひざがしら}を叩^{たた}く。吾輩^{けんのん}は陰呑^{そば}になつたから少し傍を離れ

る。「その朗読会さ。せんだってトチメン、ボーを御馳走した時にね。その話しが出たよ。何でも第二回には知名の文士を招待して大会をやるつもりだから先生にも是非御臨席を願いたいって。それから僕が今度も近松の世話物をやるつもりかいと聞くと、いえこの次はずっと新しい者を撰えらんで金色夜叉こんじきやしやにしませんでしたと云うから、君にや何の役が当つてるかと聞

いたら私は御宮おみやですといったのさ。東風とうふうの御宮は面

白かろう。僕は是非出席して喝采かつさいしようと思つてゐる

よ」「面白いでしょう」と寒月君が妙な笑い方をす

る。「しかしあの男はどこまでも誠実で軽薄なところ

ろがないから好い。迷亭などとは大違いだ」と主人

はアンドレア・デル・サルトと孔雀くじやくの舌とトチメン

ボーかたきの復讐ふくしうを一度にとる。迷亭君は氣にも留めない

様子で「どうせ僕などは行徳の俎と云う格だからな
あ」と笑う。「まずそんなところだろう」と主人が
云う。実は行徳の俎と云う語を主人は解かいさないので
あるが、さすが永年教師をして胡魔化ごまかしつけている
ものだから、こんな時には教場の経験を社交上にも
応用するのである。「行徳の俎というのは何の事で
すか」と寒月が真率しんそつに聞く。主人は床の方を見て

「あの水仙は暮に僕が風呂の歸りがけに買つて来て挿^さしたのだが、よく持つじやないか」と行徳の俎を無理にねじ伏せる。「暮といえ、去年の暮に僕は実に不思議な經驗をしたよ」と迷亭が煙管^{きせる}を大神樂のごとく指の尖^{さき}で廻わす。「どんな經驗か、聞かし玉^{たま}え」と主人は行徳の俎を遠く後^{うしろ}に見捨てた氣で、ほっと息をつく。迷亭先生の不思議な經驗というの

を聞くと左さのごとくである。

「たしか暮の二十七日と記憶しているがね。例の東とう

風ふうから参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたいから

御在宿を願うと云う先さき触ぶれがあつたので、朝から

心待ちに待っていると先生なかなか来ないやね。昼

飯を食ってストーブの前でバリー・ペーンの滑稽物こっけいもの

を読んでいるところへ静岡の母から手紙が来たから

見ると、年寄だけにいつまでも僕を小供のように思
つてね。寒中は夜間外出をするなどか、冷水浴もい
いがストーブを焚たいて室へやを煖あたたかにしてやらないと風か
邪ぜを引くとかいろいろの注意があるのさ。なるほど
親はありがたいものだ、他人ではとてもこうはいか
ないと、呑のん気きな僕もその時だけは太おおに感動おおいした。そ
れにつけても、こんなにのらくらしては勿もつ体たいな

い。何か大著述でもして家名を揚げなくてはならん。
母の生きているうちに天下をして明治の文壇に迷
亭先生あるを知らしめたいと云う気になった。それ

からなお読んで行くと御前なんぞは実に仕合せ者だ

。露西亞ロシアと戦争が始まって若い人達は大変な辛苦しんくを

して御国みくにのために働らいているのに節季師走せつきしわすでもお

正月のように気楽に遊んでいると書いてある。――

僕はこれでも母の思つてるように遊んじやいないや

ね——そのあとへ以て来て、僕の小学校時代の朋友ほうゆう

で今度の戦争に出て死んだり負傷したものの名前が

列举してあるのさ。その名前を一々読んだ時には何

だか世の中が味気あじきなくなつて人間もつまらないと云

う気が起つたよ。一番仕舞しまいにね。私わたししも取る年に候

えば初春はつはるの御雑煮おぞうにを祝い候も今度限りかと……何だ

か心細い事が書いてあるんで、なおのこと気がくさ

くさしてしまつて早く東風とうふうが来れば好いと思つたが

、先生どうしても来ない。そのうちとうとう晩飯に

なつたから、母へ返事でも書こうと思つてちよいと

十二三行かいた。母の手紙は六尺以上もあるのだが

僕にはとてもそんな芸は出来んから、いつでも十行

内外で御免蒙ごうむる事に極めてあるのさ。すると一日動

かずにおつたものだから、胃の具合が妙で苦しい。

東風が来たら待たせておけと云う氣になつて、郵便を入れながら散歩に出掛けたと思ひ給え。いつにな

く富士見町の方へは足が向かないで土手三番町の方

どてさんばんちよう

へ我れ知らず出てしまった。ちようどその晩は少し

曇つて、から風が御濠おほりの向うむこから吹き付ける、非常

に寒い。かぐらざか神楽坂の方から汽車がヒューと鳴つて土手

下を通り過ぎる。大変淋さみしい感じがする。暮、戦死

、老衰、無常迅速などと云う奴が頭の中をぐるぐる

馳かけ廻めくる。よく人が首を縊くると云うがこんな時にふ

と誘われて死ぬ気になるのじゃないかと思ひ出す。

ちよいと首を上げて土手の上を見ると、いつの間にま

か例の松の真下ましたに来ているのさ」

「例の松た、何だい」と主人が断句だんくを投げ入れる。

「首懸くびかけの松さ」と迷亭は領えりを縮める。

「首懸の松は鴻こうの台だいでしょう」寒月はもんが波紋をひろげる。

「鴻こうの台だいのは鐘懸かねかけの松で、土手三番町のは首懸くびかけの松

さ。なぜこう云う名が付いたかと云うと、昔むかしから

の言い伝えで誰でもこの松の下へ来ると首が縊くりた

くなる。土手の上に松は何十本となくあるが、そら

首縊^{くびく}りだと来て見ると必ずこの松へぶら下がっている。

年に二三返^{ぺん}はきつとぶら下がっている。どうし

ても他^{ほか}の松では死ぬ気にならん。見ると、うまい具

合に枝が往来の方へ横に出ている。ああ好い枝振り

だ。あのままにしておくのは惜しいものだ。どうか

してあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か来ない

かしらと、四^{あたり}辺を見渡すと生憎^{あいにく}誰も来ない。仕方が

ない、自分で下がろうか知らん。いやいや自分が下

がつては命がない、危あぶないからよそう。しかし昔の

希臘人ギリシャじんは宴会の席で首くびくく縊りの真似をして余興を添え

たと云う話しがある。一人が台の上へ登つて縄の結

び目へ首を入れる途端に他ほかのものが台を蹴返す。首

を入れた当人は台を引かれると同時に縄をゆるめて

飛び下りるといふ趣向しゅこうである。果してそれが事実な

ら別段恐るるにも及ばん、僕も一つ試みようと思へ

手を懸けて見ると好い具合に撓しわる。撓り按排あんばいが実に

美的である。首がかかつてふわふわするところを想

像して見ると嬉しくてたまらん。是非やる事にしよ

うと思つたが、もし東風とうふうが来て待つていると氣の毒

だと考え出した。それではまず東風とうふうに逢あつて約束通

り話しをして、それから出直そうと云う氣になつて

ついにうちへ歸つたのさ」

「それで市が栄えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにやにやしながら云う。

「うちへ歸つて見ると東風は来ていない。しかし今

にち よんどころなきさしつか

日は無抛処差支えがあつて出られぬ、いずれ永日御

めんご

はがき

面晤を期すという端書があつたので、やつと安心し

て、これなら心置きなく首が縊くれる嬉しいと思つた

。で早速下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して見る……」と云つて主人と寒月の顔を見てすましている。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦^じれる。

「いよいよ佳境に入りますね」と寒月は羽織の紐^{ひも}をひねくる。

「見ると、もう誰か来て先へぶら下がっている。た

った一足違いでねえ君、残念な事をしたよ。考える

と何でもその時は死神しにがみに取り着かれたんだね。ゼー

ムスなどに云わせると副意識下の幽冥界ゆうめいかいと僕が存在

している現実界が一種の因果法によって互に感応かんのうし

たんだろう。実に不思議な事があるものじゃないか

「迷亭はすまし返っている。

主人はまたやられたと思いいながら何も云わずに空く

也餅を頬張^{うやもち}つて口をもごもご云わしている。

寒月は火鉢の灰を丁寧^なに掻^かき馴^ならして、俯向^{うつむ}いてにやにや笑っていたが、やがて口を開く。極めて静かな調子である。

「なるほど伺って見ると不思議な事でちよつと有りそうにも思われませんが、私などは自分でやはり似たような経験をつい近頃したものですから、少しも

疑がう気になりません」

「おや君も首を縊くりたくなつたのかい」

「いえ私のは首じゃないんで。これもちょうど明ければ昨年の暮の事でしかも先生と同日同刻くらいに起つた出来事ですからなおさら不思議に思われます」

「こりや面白い」と迷亭も空也餅を頬張る。

「その日は向島の知人の家で忘年会兼合奏会けんけんがあり

まして、私もそれへヴァイオリンを携たずさえて行きました。

十五六人令嬢やら令夫人が集ってなかなか盛会

で、近來の快事と思うくらいに万事が整っていました。

晩餐ばんさんもすみ合奏もすんで四方よもの話しが出て時刻

も大分遅だいぶくなったから、もう暇乞いとまごいをして帰ろうか

と思つていますと、某博士の夫人が私のそばへ来て

あなたは○○子さんの御病気を御承知ですかと小声

で聞きますので、実はその両三日前に逢った時は平

りょうさんにちまえ

常の通りどこも悪いようには見受けませんでしたか

ら、私も驚ろいて精しく様子を聞いて見ますと、私

くわ

わたく

しの逢ったその晩から急に発熱して、いろいろな謔

うわ

こと
くちばし

語を絶間なく口走るそうで、それだけなら宜いです

い

がその謔語のうちに私の名が時々出て来るといふの

です」

主人は無論、迷亭先生も「御安おやすくないね」などと

いう月つき並なみは云わず、静肅に謹聴している。

「医者を呼んで見てもらうと、何だか病名はわから

んが、何しろ熱が劇はげしいので脳を犯しているから、

もし睡眠すいみんざい剤が思うように功を奏しないと危険である

と云う診断だそうで私はそれを聞くや否や一種いや

な感じが起つたのです。ちやうど夢でうなされる時のような重くるしい感じで周囲の空氣が急に固形体になつて四方から吾が身をしめつけるごとく思われましました。帰り道にもその事ばかりが頭の中にあつて苦しくてたまらない。あの奇麗な、あの快活なあの健康な○○子さんが……」

「ちよつと失敬だが待ってくれ給え。さつきから伺

つていると○○子さんと云うのが二返^{へん}ばかり聞える
ようだが、もし差支^{さしつか}えがなければ承^{うけたま}わりたいね、君
」と主人を顧^{かえり}みると、主人も「うむ」と生返^{なまへんじ}事をす
る。

「いやそれだけは当人の迷惑になるかも知れません
から廃^よしましょう」

「すべて曖^{あいあいぜん}々然^{まいまいぜん}として昧^{まいまいぜん}々然^{まいまいぜん}たるかたで行くつもり

かね」

「冷笑なさつてはいけません、極真面目ごくまじめな話しなん

ですから……とにかくあの婦人が急にそんな病氣に

なつた事を考えると、実に飛花ひからくよう落葉の感慨で胸が一

杯になつて、総身そうしんの活氣が一度にストライキを起し

たように元氣がにわかめいに滅入めいつてしまひまして、た

だ蹠々そうそうとして踉々ろうろうという形かたちで吾妻橋あずまばしへきかかった

のです。欄干に倚よつて下を見ると満潮か干潮か分り

ませんが、黒い水がかたまつてただ動いているよう

に見えます。花川はなかわど戸の方から人力車が一台馳かけて来

て橋の上を通りました。その提灯ちようちんの火を見送つてい

ると、だんだん小さくなつて札幌さっぽろビールの処で消えま

した。私はまた水を見る。すると遥はるかの川上の方で

私の名を呼ぶ声が聞えるのです。はてな今時分人に

呼ばれる訳はないが誰だろうと水の面をすかして見

おもて

ましたが暗くて何にも分りません。気のせいに違い

なん

ない早々帰ろうと思つて一足二足あるき出すと、ま

そうそう

た微かな声で遠くから私の名を呼ぶのです。私はま

かす

た立ち留つて耳を立てて聞きました。三度目に呼ば

れた時には欄干に捕まっていながら膝頭ががくがく

つか

ひざがしち

悸え出したのです。その声は遠くの方か、川の底か

ふる

ら出るようですが紛まぎれもない○○子の声なんですよ。

私は覚えず「はい」と返事をしたのです。その返事が大きかったものですから静かな水に響いて、自分で自分の声に驚かされて、はっと周囲を見渡ししました。人も犬も月も何なんにも見えません。その時に私はこの「夜」よるの中に巻き込まれて、あの声の出る所へ行きたいと云う気がむらむらと起ったのです。

。○○子の声がまた苦しそうに、訴えるように、救を求めするように私の耳を刺し通したので、今度は

「今直^{すぐ}に行きます」と答えて欄干から半身を出して

黒い水を眺めました。どうも私を呼ぶ声が浪^{なみ}の下か

ら無理に洩^もれて来るように思われましてね。この水

の下だなと思いながら私はとうとう欄干の上に乗

りましたよ。今度呼んだら飛び込もうと決心して流を

見つめているとまた憐れな声が糸のように浮いて来る。ここだと思つて力を込めて一反飛いったんび上がつておいて、そして小石か何ぞのように未練なく落ちてしましました」

「とうとう飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問う。

「そこまで行こうとは思わなかった」と迷亭が自分

の鼻の頭をちよいとつまむ。

「飛び込んだ後あとは気が遠くなつて、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、どこも濡ぬれた所ところも何もない、水を飲んだような感じもしない。たしかに飛び込んだはずだが実に不思議だ。こりや変だと気が付いてそこいらを見渡すと驚きましたね。水の中へ飛び込んだつもりでいたところ

が、つい間違つて橋の真中へ飛び下りたので、その時は実に残念でした。前と後ろの間違うしだけであの声の出る所へ行く事が出来なかつたのです」寒月はやにや笑いながら例のごとく羽織の紐ひもを荷厄介にやっかいにしている。

「ハハハハこれは面白い。僕の経験と善く似ているところが奇だ。やはりゼームス教授の材料になるね

。人間の感応と云う題で写生文にしたらきつと文壇を驚かすよ。……そしてその○○子さんの病気はどうなつたかね」と迷亭先生が追窮する。

「二三日前にさんちまえ年始に行きましたら、門の内で下女と羽根を突いていましたから病気は全快したものと見えます」

主人は最前から沈思の体であつたが、この時よう

やく口を開いて、「僕にもある」と負けぬ気を出す。

「あるって、何があるんだい」迷亭の眼中に主人な
どは無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

あんどこう

「みんな去年の暮は暗合で妙ですな」と寒月が笑う

。欠けた前歯のうちに空也餅くうやもちが着いている。

「やはり同日同刻じゃないか」と迷亭がまぜ返す。

「いや日は違うようだ。何でも二十日頃はつかだよ。細君

が御歳暮の代りに摂津大掾を聞かしてくれろと云う

せつつだいじよう

から、連れて行ってやらん事もないが今日の語り物

は何だと聞いたら、細君が新聞を参考して鰻谷うなぎだにだと

云うのさ。鰻谷は嫌いだから今日はよそうとその日

はやめにした。翌日になると細君がまた新聞を持っ

て来て今日は堀川ほりかわだからいいでしょうと云う。堀川

は三味線もので賑やかなばかりで実みがないからよそ

うと云うと、細君は不平な顔をして引き下がった。

その翌日になると細君が云うには今日は三十三間堂

です、私は是非せつ摂津の三十三間堂が聞きたい。あな

たは三十三間堂も御嫌いか知らないが、私に聞かせ
るのだからいっしょに行つて下すつても宜いいでしょう

うと手詰てづめの談判をする。御前がそんなに行きたいな

ら行つても宜よろしい、しかし一世一代と云うので大

変な大入だから到底突懸とうていつつかけに行つたつて這はい入いれる気き

遣づかいはない。元来ああ云う場所へ行くには茶屋と云

うものが在あつてそれと交渉して相当の席を予約する

のが正当の手続きだから、それを踏まないで常規を

脱した事をするのはよくない、残念だが今日はやめ

ようと云うと、細君は凄^{すご}い眼付をして、私は女です

からそんなむずかしい手続きなんか知りませんが、

大原のお母あさんも、鈴木^の君代さんも正当の手続
きを踏まないで立派に聞いて来たんですから、いく

らあなたが教師だからって、そう手^{てすう}数のかかる見物

をしないでもすみましよう、あなたはあんまりだと

泣くような声を出す。それじゃ駄目でもまあ行く事

にしよう。晩飯をくって電車で行こうと降参をする
と、行くなら四時までに向うへ着くようにしなくつ
ちやいけません、そんなぐずぐずしてはいられませ
んと急に勢がいい。なぜ四時までに行かなくては駄
目なんだと聞き返すと、そのくらい早く行つて場所
をとらなくちや這入れないからですと鈴木の君代さ
んから教えられた通りを述べる。それじや四時を過

ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、ええ駄目ですともと答える。すると君不思議な事にはその時から急に悪寒おかんがし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はぴんぴんしていらあね。僕がさ。何だ

か穴の明いた風船玉のように一度に萎縮いしゆくする感じが

起ると思うと、もう眼がぐらぐらして動けなくなつ

た」

「急病だね」と迷亭が註釈を加える。

「ああ困った事になった。細君が年に一度の願だか

らは是非叶かなえてやりたい。平生叱いつもりつけたり、口を聞

かなかつたり、身上しんしょうの苦勞をさせたり、小供の世話

をさせたりするばかりで何一つ洒掃薪水さいそうしんすいの勞に酬むくい

た事はない。今日は幸い時間もある、囊中のうちゅうには四五

枚の堵物とぶつもある。連れて行けば行かれる。細君も行

きたいだろう、僕も連れて行ってやりたい。是非連

れて行ってやりたいがこう悪寒がして眼がくらんで

は電車へ乗るどころか、靴脱くつぬぎへ降りる事も出来ない

。ああ気の毒だ気の毒だと思うとなお悪寒がしてな

お眼がくらんでくる。早く医者に見てもらって服薬

でもしたら四時前には全快するだろうと、それから

あまき

細君と相談をして甘木医学士を迎いにやると生憎昨

あいにくゆ

うべ

夜が当番でまだ大学から帰らない。二時頃には御帰

りになりますから、帰り次第すぐ上げますと云う返

事である。困ったなあ、今杏仁水でも飲めば四時前

きょうにんすい

なお

きま

にはきつと癒るに極っているんだが、運の悪い時に

は何事も思うように行かんもので、たまさか妻君の

喜ぶ笑顔を見て楽もうと云う予算も、がらりと外れ

はず

そうになつて来る。細君は恨め^{うら}しい顔付をして、到^{とう}

底^{てい}いらつしやれませんかと聞く。行くよ必ず行くよ

。四時までにはきつと直つて見せるから安心してい

るがいい。早く顔でも洗つて着物でも着換えて待つ

ているがいい、と口では云つたようなものの胸中

無限の感慨である。悪寒はますます劇^{はげ}しくなる、眼

はいよいよよぐらぐらする。もしや四時までに全快し

て約束を履行りこうする事が出来なかつたら、氣の狭い女

の事だから何をするかも知れない。情なさけない仕儀に

なつて来た。どうしたら善かろう。万一の事を考え

ると今の内に有為ういてんべん轉變の理、生者しょうじゃひつめつ必滅の道を説き聞

かして、もしもの變が起つた時取り乱さないくらい

の覺悟をさせるのも、夫おつとの妻つまに対する義務ではある

まいかと考え出した。僕は速すみやかに細君を書齋へ呼ん

だよ。呼んで御前は女だけれども many a slip 'twixt

the cup and the lip と云う西洋の諺ことわざくらいは心得

ているだろうと聞くと、そんな横文字なんか誰が知るもんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使つて人にからかうのだから、宜よろしゅうございます、どうせ英語なんかは出来ないんですから、そんなに英語が御好きなら、なぜ

ヤソがっこう

耶蘇学校の卒業生かなんかをお貰いなさらなかった

んです。あなたくらい冷酷な人はありませんと非

けんまく

常な権幕なんで、僕もせつかくの計画の腰を折られ

てしまった。君等にも弁解するが僕の英語は決して

悪意で使った訳じゃない。全く妻を愛する至情から

さい

出たので、それを妻のように解釈されては僕も立つ

瀬がない。

それにさつきからの悪寒と眩暈で少し脳

おかん

めまい

と眩暈で少し脳

が乱れていたところへもって来て、早く有為轉變、生者必滅の理を呑み込ませようと少し急^せき込んだものだから、つい細君の英語を知らないと言う事を忘れて、何の気も付かずに使ってしまった訳さ。考えるとこれは僕が悪^{わる}い、全く手落ちであつた。この失敗で悪寒はますます強くなる。眼はいよいよぐらぐらする。妻君は命ぜられた通り風呂場へ行つて両^{もろ}

肌はだを脱いで御化粧をして、たんす箆笥から着物を出して着

換える。もういつでも出掛けられますと云う風情ふぜいで

待ち構えている。僕は気が気でない。早く甘木君が

来てくれれば善いがと思つて時計を見るともう三時

だ。四時にはもう一時間しかない。「そろそろ出掛

けましようか」と妻君が書斎の開き戸を明けて顔を

出す。自分の妻さいを褒ほめるのはおかしいようであるが、

僕はこの時ほど細君を美しいと思った事はなかった。

もろ肌を脱いで石鹼で磨き上げた皮膚がぴかついて

くろちりめん

黒縮緬の羽織と反映している。その顔が石鹼と摺津

せつつだ

いじょう

大掾を聞こうと云う希望との二つで、有形無形の両

方面から輝やいて見える。どうしてもその希望を満

足させて出掛けてやろうと云う気になる。それじゃ

奮発して行こうかな、と一ぶくふかしているとよう

やく甘木先生が来た。うまい注文通りに行つた。が

容体をはなすと、甘木先生は僕の舌を眺^{なが}めて、手を

握つて、胸を敲^{たた}いて背を撫^なでて、目縁^{まぶち}を引つ繰り返

して、頭蓋^{ずがいこつ}骨をさすつて、しばらく考え込んでいる。

「どうも少し険^{けん}呑^{のん}のような気がしまして」と僕が云

うと、先生は落ちついて、「いえ格別の事もござい

ますまい」と云う。「あのちよつとくらい外出致し

ても差支えはございますまいね」と細君が聞く。さしつか

「さよう」と先生はまた考え込む。「御気分さえ御

悪くなければ……」「気分は悪いですよ」と僕がい

う。「じゃともかくも頓服とんぷくと水薬すいやくを上げますから」

「へえどうか、何だかちと、危あぶないようになりそう

ですな」「いや決して御心配になるほどの事じゃご

ざいません、神経を御起しになるといけませんよ」

と先生が帰る。三時は三十分過ぎた。下女を薬取りにやる。細君の厳命で馳^かけ出して行つて、馳^かけ出して返ってくる。四時十五分前である。四時にはまだ十五分ある。すると四時十五分前頃から、今まで何とも無かつたのに、急に嘔^{はきけ}氣を催^{もよ}おして來た。細君は水薬を茶碗へ注^{すいやく}いで僕の前へ置いてくれたから、茶碗を取り上げて飲んでみると、胃の中からげー

と云う者が呐喊とっかんして出てくる。やむをえず茶碗を下

へ置く。細君は「早く御飲おのみになつたら宜いいでしよ

う」と逼せまる。早く飲んで早く出掛けなくては義理が

悪い。思い切つて飲んでしまおうとまた茶碗を唇へ

つけるとまたゲしゅうねんぶかーが執念深く妨害をする。飲もうと

しては茶碗を置き、飲もうとしては茶碗を置いてい

ると茶の間の柱時計がチンチンチンチンと四時を打

った。さあ四時だ愚図愚図してはおられんと茶碗を
また取り上げると、不思議だねえ君、実に不思議と
はこの事だろう、四時の音と共に吐はき気けがすっかり
留まって水薬が何の苦なしに飲めたよ。それから四
時十分頃になると、甘木先生の名医という事も始め
て理解する事が出来たんだが、背中がぞくぞくする
のも、眼がぐらぐらするのも夢のように消えて、当

分立つ事も出来まいと思つた病氣がたちまち全快したの嬉しかった」

「それから歌舞伎座へいっしょに行つたのかい」と迷亭が要領を得んと云う顔付をして聞く。

「行きたかつたが四時を過ぎちや、這^{はい}入れないと云う細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。もう十五分ばかり早く甘木先生が来てくれたら僕の

義理も立つし、妻も満足したろうに、さいわずか十五分の差でね、実に残念な事をした。考え出すとあぶないところだったと今でも思うのさ」

語り了つた主人はおわようやく自分の義務をすましたような風をする。これで兩人に対して顔が立つと云う気かも知れん。

寒月は例のごとく欠けた齒を出して笑いながら

「それは残念でしたな」と云う。

迷亭はとぼけた顔をして「君のような親切な夫をおつと

持った妻君は実に仕合せだな」と独り言ひとことのようにい

う。障子の蔭でエヘンと云う細君の咳せき払いばらいが聞える。

吾輩はおとなしく三人の話しを順番に聞いていた
がおかしくも悲しくもなかった。人間というものは

時間を潰すために強いて口を運動させて、おかしく

もない事を笑ったり、面白くもない事を嬉しがった

りするほかに能もない者だと思った。吾輩の主人の

わがまま　へんきょう

我儘で偏狭な事は前から承知していたが、平常は言

ふだん

葉数を使わないので何だか了解しかねる点があるよ

うに思われていた。その了解しかねる点に少しは恐

しいと云う感じもあったが、今の話を聞いてから急

に輕蔑けいべつしたくなつた。かれはなぜ兩人の話しを沈黙

して聞いていられないのだらう。負けぬ氣になつて

愚ぐにもつかぬ駄弁ろを弄ろうすれば何の所得があるだらう。

エピクテタスにそんな事をしろと書いてあるのか知

らん。要するに主人も寒月も迷亭も太平たいへいの逸民いつみんで、

彼等は糸瓜へちまのごとく風に吹かれて超然すまと澄し切つて

いるようなものの、その実はやはり娑婆しやば氣もあり慾よ

気くけもある。競争の念、勝とう勝とうの心は彼等が日

常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一歩進めば

彼等が平常罵倒ばとうしている俗骨共ぞっこつどもと一つ穴の動物にな

るのは猫より見て気の毒の至りである。ただその言

語動作が普通の半可通はんかつうのごとく、文切り形もんきの厭味がたを

帯びてないのはいささかの取り得とえでもあろう。

こう考えると急に三人の談話が面白くなくなった

ので、三毛子の様子でも見て来ようかと二絃琴にげんきんの御

師匠さんの庭口へ廻る。門松注目飾かどまつしめかざりりはすでに取り

払われて正月も早はや十日となつたが、うららかな春は

日るびは一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度

に照らして、十坪に足らぬ庭の面おもも元日の曙光しょうこうを受

けた時より鮮あざやかな活気を呈している。椽側ぎぶとんに座蒲団

が一つあつて人影も見えず、障子も立て切つてある

のは御師匠さんは湯にでも行つたのか知らん。御師匠さんは留守でも構わんが、三毛子は少しは宜い方か、それが氣掛りである。ひっそりして人の氣合けわいもしないから、泥足のまま椽側えんがわへ上あがつて座蒲団の真中へ寝転ねころんで見るといい心持ちだ。ついうとうととして、三毛子の事も忘れてうたた寝をしていると、急に障子のうちで人声がする。

「御苦労だった。出来たかえ」御師匠さんはやはり留守ではなかったのだ。

「はい遅くなりましたして、仏師屋へ参りましたらちよ

うど出来上ったところだと申しまして」「どれお見

せなさい。ああ奇麗に出来た、これで三毛も浮かば

れましょう。金は剥きんげる事はあるまいね」「ええ念

を押しましたら上等を使つたからこれなら人間の位い

牌はいよりも持つと申しておりました。……それから猫みよ

うよしんによ

誉信女の誉の字は崩くずした方が恰好かつこうがいいから少し劃かく

を易かえたと申しました」「どれどれ早速御仏壇へ上

げて御線香でもあげましょう」

三毛子は、どうかしたのかな、何だか様子が変わだ

と蒲団の上へ立ち上る。チーン南無猫誉信女、南無なむ

あみだぶつ

阿弥陀仏南無阿弥陀仏と御師匠さんの声がする。

「御前も回向えこうをしておやりなさい」

チーン南無猫誉信女南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と

今度は下女の声がする。吾輩は急に動悸どうきがして来た。

座蒲団の上に立ったまま、木彫きぼりの猫のように眼も動

かさない。

「ほんとに残念な事を致しましたね。始めはちよい

と風邪かぜを引いたんでございましょうがねえ」「甘木

さんが薬でも下さると、よかったかも知れないよ」

「一体あの甘木さんが悪うございますよ、あんまり

三毛を馬鹿にし過ぎますからね」
ひとさま「そう人様の事を悪

く云うものではない。
じゅみようこれも寿命だから」

三毛子も甘木先生に診察して貰ったものと見える。

「つまるところ表通りの教師のうちの野良猫がのらねこ無暗むやみ

に誘い出したからだと、わたしは思うよ」「ええあ

ちきしょう

の畜生が三毛のかたきでございますよ」

少し弁解したかったが、ここが我慢のしどころと

つば

唾を呑んで聞いている。話しはしばし途切とぎれる。

「世の中は自由にならん者でのう。三毛のような器

はやしに

量よしは早死をするし。不器量な野良猫は達者でい

たずらをしているし……」「その通りでございます

よ。三毛のような可愛らしい猫は鐘と太鼓で探してあるいたって、二人ふたりとはおりませんからね」

二匹と云う代りに二ふたりといった。下女の考えでは猫と人間とは同種族ものと思つてゐるらしい。そう云えばこの下女の顔は吾等猫属ねこぞくとはなはだ類似している。

「出来るものなら三毛の代りに……」 「あの教師の

所の野良のらが死ぬと御誂おあつらえ通りに参つたんでござい
すがねえ」

御誂え通りになつては、ちと困る。死ぬと云う事
はどんなものか、まだ経験した事がないから好きと
も嫌いとも云えないが、先日あまり寒いので火消壺ひけしつぼ
の中へもぐり込んでいたら、下女が吾輩がいるのも
知らんで上から蓋ふたをした事があつた。その時の苦し

さは考えても恐しくなるほどであつた。白君の説明によるとあの苦しみが今少し続くと死ぬのであるそうだ。三毛子の身代りみがわになるのなら苦情もないが、あの苦しみを受けなくては死ぬ事が出来ないのなら、誰のためでも死にたくはない。

「しかし猫でも坊さんの御経を読んでもらったり、
かいみよう戒名をこしらえてもらつたのだから心残りはあるま

い」「そうでございますとも、全く果報者でござい

ますよ。ただ慾を云うとあの坊さんの御経があまり

軽少だったようでございますね」「少し短か過ぎた

ようだったから、大變御早うございますねと御尋ね

をしたら、月桂寺げっけいじさんは、ええ利目ききめのあるところを

ちよいとやっておきました、なに猫だからあのくら

いで充分浄土へ行かれますとおっしゃったよ」「あ

らまあ……しかしあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないとしばしば断っておくのに、この下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくらありがたい御経だつて浮かばれる事はございませんよ」

吾輩はその後野良ごが何百遍繰り返されたかを知らぬ。吾輩はこの際限なき談話を途中で聞き棄てて、

布団ふとんをすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八万八

千八百八十本の毛髪を一度にたてて身震みぶるいをした。

その後二絃琴ごにげんきんの御師匠さんの近所へは寄りついた事

がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから軽
少な御回向ごえこうを受けているだろう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が慵ものうく

感ぜらるる。主人に劣らぬほどの無性猫ぶしょうねことなつた。

主人が書齋にのみ閉じ籠こもっているのを人が失恋だ失

恋だと評するのも無理はないと思うようになった。

ねずみ

鼠はまだ取った事がないので、一時は御三おさんから放ほう

ちくろん

ていしゅつ

逐論ちくろんさえ呈出ていしゅつされた事もあったが、主人は吾輩の普

通一般の猫でないと云う事を知っているものだから

吾輩はやはりのらくらしてこの家やに起臥きがしている。

この点については深く主人の恩を感謝すると同時に

その活眼かつがんに対して敬服の意を表するに躊躇ちゆうちよしないつ

もりである。御三が吾輩を知らずして虐待をするの

は別に腹も立たない。今に左甚五郎ひだりじんごろうが出て来て、吾

輩の肖像を楼門ろうもんの柱に刻みきざ、日本のスタンランが好

んで吾輩の似顔をカンヴァスの上に描くえがようになつ

たら、彼等鈍瞎漢どんかつかんは始めて自己の不明を恥はずるであ

ろう。

三毛子は死ぬ。黒は相手にならず、いささか寂寞^{せきばく}

の感はあるが、幸い人間に知己^{ちぎ}が出来たのでさほど

退屈とも思わぬ。せんだっては主人の許^{もと}へ吾輩の写

真を送ってくれと手紙で依頼した男がある。この間

は岡山の名産吉備きび団子だんごをわざわざ吾輩の名宛で届け

てくれた人がある。だんだん人間から同情を寄せら

るるに従つて、己おのれが猫である事はようやく忘却して

くる。猫よりはいつの間まにか人間の方へ接近して来

たような心持になつて、同族を糾合きゆうごうして二本足の先

生と雌雄しゆうを決しようなどと云いう量見は昨今のところ

毛頭もうとうない。それのみか折々は吾輩もまた人間世界の

一人だと思ふ折さえあるくらいに進化したのはたの

もしい。あえて同族を輕蔑けいべつする次第ではない。ただ

性情の近きところに向つて一身の安きを置くは勢いきおいの

しからしむるところで、これを変心とか、輕薄とか、

裏切りとか評せられてはちと迷惑する。かような言

語を弄ろうして人を罵詈ばりするものに限つて融通の利きかぬ

貧乏性の男が多いようだ。こう猫の習癖を脱化して

見ると三毛子や黒の事ばかり荷厄介にしている訳に

は行かん。やはり人間同等の氣位きぐらいで彼等の思想、言

行を評隲ひょうしつしたくなる。これも無理はあるまい。ただ

そのくらいな見識を有している吾輩をやはり一般猫びよ

兎うじの毛の生えたものくらいに思つて、主人が吾輩に

一言いちごんの挨拶もなく、吉備団子きびだんごをわが物顔に喰い尽し

たのは残念の次第である。写真もまだ撮とつて送らぬ

容子^{ようす}だ。これも不平と云えば不平だが、主人は主人、

吾輩は吾輩で、相互の見解が自然^{こと}異なるのは致し方

もあるまい。吾輩はどこまでも人間になりすまして

いるのだから、交際をせぬ猫の動作は、どうしても

ちよいと筆に上^{のぼ}りにくい。迷亭、寒月諸先生の評判

だけで御免蒙^{ごうむ}る事に致そう。

今日は上天気の日曜なので、主人はのそのそ書斎

から出て来て、吾輩の傍へ筆硯と原稿用紙を並べて

はらばい

腹這になつて、しきりに何か唸うなっている。大方草稿

おろ

じよびら

を書き卸す序開きとして妙な声を発するのだらうと

注目していると、ややしばらくして筆太に「香一炷」

ふでぶと

こういつしゆ

とかいた。はてな詩になるか、俳句になるか、香一

炷とは、主人にしては少し洒落過ぎしやれているがと思う

間もなく、彼は香一炷を書き放しにして、新たに行ぎやう

を改めて「さつきから天然居士てんねんこじの事をかこうと考え

ている」と筆を走らせた。筆はそれだけではたと留

ったぎり動かない。主人は筆を持って首を捻ひねったが

別段名案もないものと見えて筆の穂を嘗なめだした。

唇が真黒になったと見てみると、今度はその下へち

よいと丸をかいだ。丸の中へ点を二つうって眼をつ

ける。真中へ小鼻の開いた鼻をかいだ、真一文字に

口を横へ引張った、これでは文章でも俳句でもない。

主人も自分で愛想が尽きたと見えて、そこそこに顔

を塗り消してしまった。主人はまた行を改める。彼

の考によると行さえ改めれば詩か賛か語か録か何か

になるだろうとただ宛もなく考えているらしい。や

がて「天然居士は空間を研究し、論語を読み、焼芋

を食い、鼻汁を垂らす人である」と言文一致体で一

つきかせい
気呵成に書き流した、何となくごたごたした文章で

ある。それから主人はこれを遠慮なく朗読して、い

つになく「ハハハハ面白い」と笑ったが「鼻汁はなを垂

らすのは、ちと酷こくだから消そう」とその句だけへ棒

を引く。一本ですむところを二本引き三本引き、奇

麗な併行線へいこうせんを描かく、線がほかの行まで食はみ出しても

構わず引いている。線が八本並んでもあとの句が出

来ないと見えて、今度は筆を捨てて髭ひげを捻ひねつて見る。

文章を髭から捻り出して御覧に入れますと云う見幕けんまく

で猛烈に捻つてはねじ上げ、ねじ下ろしているところへ、

茶の間から妻君さいくんが出て来てぴたりと主人の鼻

の先へ坐すわる。「あなたちよつと」と呼ぶ。「なん

だ」と主人は水中で銅鑼どらを叩たたくような声を出す。返

事が気に入らないと見えて妻君はまた「あなたちよ

つと」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の穴へ親指と人さし指を入れて鼻毛をぐつと抜く。「今月はちつと足りませんが……」「足りんはずはない、医者へも薬礼はすましたし、本屋へも先月払ったじゃないか。今月は余らなければならん」とすまして抜き取った鼻毛を天下の奇観のごとく眺^{なが}めている。

「それでもあなたが御飯を召し上らんで麵^{パン}麩^{おた}を御食

べになつたり、ジャムを御舐めおなになるものですから」

「元来ジャムは幾缶いくかん舐めたのかい」　「今月は八つ入い

りましたよ」　「八つ？　そんなに舐めた覚えはない」

「あなたばかりじゃありません、子供も舐めます」

「いくら舐めたって五六円くらいなものだ」と主人

は平気な顔で鼻毛を一本一本丁寧に原稿紙の上へ植

付ける。肉が付いているのでぴんと針を立てたごと

くに立つ。主人は思わぬ発見をして感じ入った体で、

ふっと吹いて見る。ねんちやくりよく粘着力が強いので決して飛ばな

い。「いやに頑固がんこだな」と主人は一生懸命に吹く。

「ジャムばかりじゃないんです、ほかに買わなけり

や、ならない物もあります」と妻君は大に不平な気け

色しきを両頬みなぎに漲みなぎらす。「あるかも知れないさ」と主人

はまた指を突っ込んでぐいと鼻毛を抜く。赤いのや、

黒いのや、種々の色が交まじる中に一本真白なのがある。

大に驚いた様子で穴の開あくほど眺めていた主人は指の股へ挟んだまま、その鼻毛を妻君の顔の前へ出す。

「あら、いやだ」と妻君は顔をしかめて、主人の手を突き戻す。「ちよつと見ろ、鼻毛の白髪しらがだ」と主

人は大に感動した様子である。さすがの妻君も笑いながら茶の間へ這はい入る。経済問題は断念したらしい。

主人はまた天然居士てんねんこじに取り懸かる。

鼻毛で妻君を追払った主人は、まずこれで安心と

云わぬばかりに鼻毛を抜いては原稿をかこうと焦あせる

体ていであるがなかなか筆は動かない。「焼芋やきいもを食うも

蛇足だそくだ、割愛かつあいしよう」とついにこの句も抹殺まっさつする。

「香一炷とうとつもあまり唐突とうとつだから已やめろ」と惜気もなく

筆誅ひつちゅうする。余す所は「天然居士は空間を研究し論語

を読む人である」と云う一句になってしまった。主人はこれでは何だか簡単過ぎるようだなと考えていたが、ええ面倒臭い、文章は御廃しおはいにして、銘だけにしろと、筆を十文字に揮ふるって原稿紙の上へ下手な文人画の蘭を勢よくかく。せっかくの苦心も一字残らず落第となった。それから裏を返して「空間に生れ、空間を究めきわ、空間に死す。空たり間たり天然居てんねん

士噫こじああ」と意味不明な語を連ねてつらいるところへ例のご

とく迷亭が這入はいって来る。迷亭は人の家も自うち分の家

も同じものと心得ているのか案内も乞わず、ずかず

か上ってくる、のみならず時には勝手口から飄然ひょうぜんと

舞い込む事もある、心配、遠慮、気兼きがね、苦勞、を生

れる時どこかへ振り落した男である。

「また巨人引力かね」と立ったまま主人に聞く。

「そう、いつでも巨人引力ばかり書いてはおらんさ

。天然居士の墓銘を撰せんしているところなんだ」と大お

おげさ
裂袈おげさな事を云う。「天然居士と云うなあやはり偶然、

童子のような戒名かね」と迷亭は不相変出鱈目あいかわらずでたらめを云

う。「偶然童子と云うのもあるのかい」「なに有り

やしないがまずその見当けんとうだろうと思つていらあね」

「偶然童子と云うのは僕の知つたものじゃないよう

だが天然居士と云うのは、君の知ってる男だぜ」

「一体だれが天然居士なんて名を付けてすましているんだい」 「例の曾呂崎そろさきの事だ。卒業して大学院へ

這入って空間論と云う題目で研究していたが、あまり勉強し過ぎて腹膜炎で死んでしまった。曾呂崎はあれでも僕の親友なんだからな」 「親友でもいいさ、決して悪いと云やしない。しかしその曾呂崎を天

然居士に變化させたのは一体誰の所作しよさだい」「僕さ

、僕がつけてやったんだ。元来坊主のつける戒名ほ

ど俗なものは無いからな」と天然居士はよほど雅かな

名のように自慢する。迷亭は笑いながら「まあその

墓碑銘ぼひめいと云う奴を見せ給え」と原稿を取り上げて

「何だ……空間に生れ、空間を究きめ、空間に死す。

空たり間たり天然居士あ噫」と大きな声で読あみ上る。

「なるほどこりやあ善い、天然居士相当のところだ

」主人は嬉しそうに「善いだろう」と云う。「この

墓銘ぼめいを沢庵石たくあんいしへ彫ほり付けて本堂の裏手ちからいしへ力石ちからいしのよう

に抛ほうり出して置くんだね。雅がでいいや、天然居士も

浮かばれる訳だ」「僕もそうしようと思っっているの

さ」と主人は至極真面目しごくまじめに答えたが「僕あちよつと

失敬するよ、じき帰るから猫にでもからかっ

くれ給え」と迷亭の返事も待たず風然ふうぜんと出て行く。

計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想ぶあいそ

な顔もしていられないから、ニヤーニヤーと愛嬌あいきょうを

振り蒔まいて膝ひざの上へ這はい上あがつて見た。すると迷亭は

「イヨー大分肥だいぶんふとったな、どれ」と無作法ぶさほうにも吾輩の

襟髪えりがみを攫つかんで宙へ釣つるす。「あと足をこうぶら下げ

ては、鼠ねずみは取れそうもない、……どうです奥さんこ

の猫は鼠を捕りますかね」と吾輩ばかりでは不足だと見えて、隣りの室へやの妻君に話しかける。「鼠ころじやございません。御雑煮おぞうにを食べて踊りをおどるんですもの」と妻君は飛んだところで旧悪あばを暴く。吾輩は宙乗ちゆうのりをしながらも少々極りが悪かった。迷亭はまだ吾輩を卸おろしてくれない。「なるほど踊りでもおどりそうな顔だ。奥さんこの猫は油断のならな

い相好そうごうですぜ。昔むかしの草双紙くさそうしにある猫又ねこまたに似ていま

すよ」と勝手な事を言いながら、しきりに細君さいくんに話

しかける。細君は迷惑めいわくそうに針仕事の手をやめて座敷へ出てくる。

「どうも御退屈様、もう帰りましょう」と茶を注つぎ

易かえて迷亭の前へ出す。「どこへ行つたんですかね

」「どこへ参るにも断わつて行つた事の無い男です

から分りかねますが、大方御医者へでも行つたんで
しよう」甘木さんですか、甘木さんもあんな病人
に捕つかまっちゃ災難ですな」「へえ」と細君は挨拶の
しようもないと見えて簡単な答えをする。迷亭は一いっ
向頓着こうちやうしない。「近頃はとうです、少しは胃の加減
が能いいんですか」「能いいか悪いか頓とんと分りません、
いくら甘木さんにかかったって、あんなにジヤムば

かり嘗^なめては胃病の直る訳がないと思います」と細

^{せんごく}

君は先刻の不平を暗^{あん}に迷亭に洩^もらす。「そんなにジ

ヤムを嘗めるんですかまるで小供のようですね」

「ジャムばかりじゃないんで、この頃は胃病の薬だ

^{だいこおろ}

とか云って大根卸しを無暗^{むやみ}に嘗めますので……」

「驚ろいたな」と迷亭は感嘆する。「何でも大根卸

^{だいこおろし}

の中にはジャスターゼが有るとか云う話を新聞で

読んでからです」 「なるほどそれでジャムの損害を

つぐな

償おうと云う趣向ですな。なかなか考えていらあハ

ハハハ」 と迷亭は細君の訴を聞いて大に愉快な気色うったえ おおい けしき

である。 「この間などは赤ん坊にまで嘗めさせまし

て……」 「ジャムをですか」 「いいえ大根卸を……だいこおろし

あなた。 坊や御父様がうまいものをやるからおいで

てって、 ——たまに小供を可愛がつてくれるかと思

うとそんな馬鹿な事ばかりするんです。二三日前に

にさんちまえ

は中の娘を抱いて箆笥たんすの上へあげましてね……」

「どう云う趣向がありました」と迷亭は何を聞いて

も趣向ずくめに解釈する。「なに趣向も何も有りや

しません、ただその上から飛び下りて見ろと云うん

ですわ、三つや四つの女の子ですもの、そんな御お転て

婆んばな事が出来るはずがないです」「なるほどこりや

趣向が無さ過ぎましたね。しかしあれで腹の中は毒のない善人ですよ」「あの上腹の中に毒があつちや、
辛防しんぼうは出来ませんわ」と細君は大に気焰きえんを揚げる

。「まあそんなに不平を云わんでも善いでさあ。こ

うやって不足なくその日その日が暮らして行かれれ

ば上じょうの分ぶんですよ。苦沙弥君くしゃみくんなどは道楽はせず、服装

にも構わず、地味しよたいむに世帯向きに出来上った人でさあ

」と迷亭は柄がらにない説教を陽気な調子でやっている

。「ところがあなた大違いで……」 「何か内々でや

りますかね。油断のならない世の中だからね」と飄ひよ

然うぜんとふわふわした返事をする。「ほかの道楽はない

ですが、無暗むやみに読みもしない本ばかり買いましてね

。それも善い加減に見計みはからって買ってくれと善い

んですけれど、勝手に丸善へ行っちゃ何冊でも取っ

て来て、月末になると知らん顔をしているんですもの、去年の暮なんか、月々のが溜たまって大変困りました」 「なあに書物なんか取って来るだけ取って来て構わんですよ。払いをとりに来たら今にやる今にやると云っていいりや帰ってしまいまさあ」 「それでも、そういうまでも引張る訳にも参りませんから」と妻君は慚然ぶぜんとしている。「それじゃ、訳を話して書しよ

籍費じやくひを削減させるさ」 「どうして、そんな言ことを云つ

たつて、なかなか聞くものですか、この間などは貴

様は学者の妻さいにも似合わん、毫ごうも書籍しよじやくの価値を解し

ておらん、昔むかし羅馬ローマにこう云う話がある。後学の

ため聞いておけと云うんです」 「そりや面白い、ど

んな話ですか」 迷亭は乗気になる。細君に同情を

表しているというよりむしろ好奇心に駆かられている

。「何んでも昔し羅馬ローマに樽金たるきんとか云う王様があつて

……」樽金たるきん？樽金はちと妙ですぜ」私は唐人とうじん

の名なんかむずかしくて覚えられせんわ。何でも七代目なんだそうです」「なるほど七代目樽金は妙ですな。ふんその七代目樽金がどうかしましたかい」「あら、あなたまで冷かしては立つ瀬がありませんわ。知っていらつしやるなら教えて下さればいい

じやありませんか、人の悪い」と、細君は迷亭へ食
つて掛る。「何冷かすなんて、そんな人の悪い事を
する僕じゃない。ただ七代目樽金は振ふるつてると思つ
てね……ええお待ちなさいよ羅馬ローマの七代目の王様で
すね、こうつとたしかには覚えていないがタークイ
ン・ゼ・プラウドの事でしよう。まあ誰でもいい、
その王様がどうしました」「その王様の所へ一人の

女が本を九冊持つて来て買つてくれないかと云ったんだそうです」「なるほど」「王様がいくらなら売るといつて聞いたら大變な高い事を云うんですつて、あまり高いもんだから少し負けないかと云うとその女がいきなり九冊の内の三冊を火にくべて焚やいてしまったそうです」「惜しい事をしましたな」「その本の内には予言か何かほかで見られない事が書い

てあるんですって」「へえー」「王様は九冊が六冊
になったから少しは価^ねも減つたろうと思つて六冊で
いくらだと聞くと、やはり元の通り一文も引かない
そうです、それは乱暴だと云うと、その女はまた三
冊をとつて火にくべたそうです。王様はまだ未練が
あつたと見えて、余つた三冊をいくらで売ると聞く
と、やはり九冊分のねだんをくれと云うそうです。

九冊が六冊になり、六冊が三冊になつても代価は、

元の通り一厘も引かない、それを引かせようとする
と、残つてゐる三冊も火にくべるかも知れないので、

王様はとうとう高い御金を出して焚^やけ余^{あま}りの三冊を

買ったんですつて……どうだこの話で少しは書物

のありがた味^みが分つたろう、どうだと力^り味^きむのです

けれど、私にや何^ながありがたいんだか、まあ分りま

せんね」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を

促^{うな}がす。さすがの迷亭も少々窮したと見えて、袂^{たもと}か

らハンケチを出して吾輩をじやらしていたが「しか

し奥さん」と急に何か考えついたように大きな声を

出す。「あんなに本を買って矢鱈^{やたら}に詰め込むものだ

から人から少しは学者だとか何とか云われるんです

よ。この間ある文学雑誌を見たら苦沙弥君^{くしやみくん}の評が出

ていましたよ」「ほんとに？」と細君は向き直る。

主人の評判が気にかかるのは、やはり夫婦と見える

。「何とかいてあつたんです」「なあに二三行ばか

りですがね。苦沙弥君の文は行雲流水のごとしとあ

りましたよ」細君は少しにこにこして「それぎりで

すか」「その次にね——出ずるかと思えば忽ち消え

、逝ゆいては長とこえに帰るを忘るとありましたよ」細君

は妙な顔をして「賞ほめたんでしうか」と心元ない調子である。「まあ賞めた方でしうな」と迷亭は済ましてハンケチを吾輩の眼の前にぶら下げる。

「書物は商買道具で仕方もござんすまいが、よつぽど偏屈へんくつでしてねえ」迷亭はまた別途の方面から来たなど思つて「偏屈は少々偏屈ですな、学問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合わせるような

弁護をするような不即不離の妙答をする。「せんだ
つてなどは学校から歸つてすぐわきへ出るのに着物
を着換えるのが面倒だものですから、あなたがいとう外套も
脱がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。

おぜん
御膳を火燵こたつやぐらの上へ乗せまして——私は御櫃おはちを抱えかか

て坐っておりますがおかしくって……」 「何だか
ハイカラの首実検のようですな。しかしそんなとこ

ろが苦沙弥君の苦沙弥君たるところで——とにかく

つきなみ

月並でない」と切ない褒め方をする。^{せつ}「月並か月並

でないか女には分りませんが、なんぼ何でも、あま

り乱暴ですわ」「しかし月並より好いですよ」と無

暗に加勢すると細君は不満な様子で「一体、月並月

並と皆さんが、よくおっしゃいますが、どんなのが

月並なんです」と開き直って月並の定義を質問する

、「月並ですか、月並と云うと——さようちと説明

しにくいのですが……」 「そんな曖昧あいまいなものなら月

並だって好さそうなものじゃありませんか」と細君

は女人にょにん一流の論理法で詰め寄せる。 「曖昧じゃあり

ませんよ、ちゃんと分っています、ただ説明しにく

いだけの事でさあ」 「何でも自分の嫌いな事を月並

と云うんでしよう」と細君は我われ知らず穿うがった事を云

う。迷亭もこうなると何とか月並の処置を付けなければならぬ仕儀となる。「奥さん、月並と云うのはね、まず年は二八か二九からぬと言わず語らず物思、^{あいだ}い、の間に寝転んでいて、この日や天気晴朗とくると必ず一瓢を携えて墨堤に遊ぶ連中を云うんです」
「そんな連中があるでしょうか」と細君は分らんものだから好^い加減な挨拶をする。「何だかごたごたし

て私には分りませんわ」とついに我^がを折る。「それ

^{ばきん}

じや馬琴の胴へメジヨオ・ペンデニスの首をつけて

一二年欧州の空氣で包んでおくんですね」「そうす

ると月並が出来るでしうか」「迷亭は返事をしない

で笑っている。「何そんな手^{てすう}数のかかる事をしない

でも出来ます。中学校の生徒に白木屋の番頭を加え

て二で割ると立派な月並が出来上ります」「そうで

しうか」と細君は首を捻ひねつたまま納得なっとくし兼ねたと云う風情ふぜいに見える。

「君まだいるのか」と主人はいつの間にやら帰つて来て迷亭の傍そばへ坐すわる。「まだいるのかはちと酷こくだな、すぐ帰るから待ってい給えと言つたじゃないか

」「万事あれなんですもの」と細君は迷亭を顧かえりみる。「今君の留守中に君の逸話を残らず聞いてしまつ

たぜ」 「女はとかく多弁でいかん、人間もこの猫く
らい沈黙を守るといいがな」と主人は吾輩の頭を撫な
でてくれる。「君は赤ん坊に大根卸しを嘗なめさした
そうだな」「ふむ」と主人は笑ったが「赤ん坊でも
近頃の赤ん坊はなかなか利口だぜ。それ以来、坊や
辛からいのはどこと聞くときつと舌を出すから妙だ」
「まるで犬に芸を仕込む氣でいるから残酷だ。時に

寒月かんげつはもう来そうなものだな」「寒月が来るのかい

」と主人は不審な顔をする。「来るんだ。午後一時

までに苦沙弥くしゃみの家うちへ来いと端書はがきを出しておいたから

」「人の都合も聞かんで勝手な事をする男だ。寒月

を呼んで何をするんだい」「なあに今日のはこっち

の趣向じやない寒月先生自身の要求さ。先生何でも

理學協会で演説をするとか云うのでね。その稽古を

やるから僕に聴いてくれと云うから、そりやちようどいい苦沙弥にも聞かしてやろうと云うのでね。そ

こで君の家へ呼ぶ事うちにしておいたのさ——なあに君

はひま人だからちようどいいやね——差支さしつかえなんぞ

ある男じゃない、聞くがいいさ」と迷亭は独ひとりで吞

み込んでゐる。「物理学の演説なんか僕にや分らん

」と主人は少々迷亭の専断せんだんを憤いきどおったもののごとくに

云う。「ところがその問題がマグネ付けられたノツ

ズルについてなどと云う乾燥無味なものじゃないん

だ。首[、]縊[、]りの[、]力[、]学[、]と云う脱俗超凡^{だつぞくちようぼん}な演題なのだから

傾聴する価値があるさ」「君は首を^{くく}縊^そり損^そくなつた

男だから傾聴するが好いが僕なんざあ……」「歌舞

伎座で悪寒^{おかん}がするくらいの人間だから聞かれないと

云う結論は出そうもないぜ」と例のごとく軽口を叩

く。妻君はホホと笑つて主人を顧みながら次の間へ退く。主人は無言のまま吾輩の頭を撫なでる。この時のみは非常に丁寧な撫で方であつた。

それから約七分くらいすると注文通り寒月君が来る。今日は晩に演舌えんぜつをするといふので例になく立派なフロツクを着て、洗濯し立ての白襟カラーを聳そびやかして

、男振りを二割方上げて、「少し後おくれまして」と落

ちつき払って、挨拶をする。「さつきから二人で大
待ちに待ったところなんだ。早速願おう、なあ君」

と主人を見る。主人もやむを得ず「うむ」と生返事なまへんじ
をする。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯

頂戴しましょう」と云う。「いよー本式にやるのか
次には拍手の請求とおいでなさるだろう」と迷亭は
独りで騒ぎ立てる。寒月君は内隠うちかくしから草稿を取り

出して徐ろに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を
おもむ
願います」と前置をして、いよいよ演舌の御浚いを
おさら
始める。

「罪人を絞罪こうざいの刑に処すると云う事は重おもにアングロ
サクソン民族間に行われた方法でありまして、それ
より古代に溯さかのぼって考えますと首縊くびくりは重に自殺の方
法として行われた者であります。猶ユダヤじんちゆう太人中あに在って

は罪人を石を抛なげつけて殺す習慣であつたそうでご

ざいます。旧約全書を研究して見ますといわゆるハ

ンギングなる語は罪人の死体を釣るして野獸または

肉食鳥の餌食えじきとする意義と認められます。ヘロドタ

スの説に従つて見ますと猶太人ユダヤじんはエジプトを去る以

前から夜中死骸やちゆうを曝さらされることを痛く忌いみ嫌つたよ

うに思われます。エジプト人は罪人の首を斬つて胴

くぎづ

だけを十字架に釘付けにして夜中曝し物にしたそう

で御座います。

ペルシャじん

波斯人は……」

「寒月君首縊りと縁

がだんだん遠くなるようだが大丈夫かい」と迷亭が

口を入れる。

「これから本論に這入るところですか

はい

」

「少々御辛防を願います。

ごしんぼう

……さて波斯人はどう

かと申しますとこれもやはり処刑には磔を用いたよ

はりつけ

うでございます。

うでございます。

但し生きているうちに張付けに致

はりつ

うでございます。

したものか、死んでから釘を打ったものかその辺は

ちと分りかねます……」 「そんな事は分らんでもい

いさ」と主人は退屈そうに欠伸あくびをする。「まだいろ

いろ御話し致したい事もございますが、御迷惑であ

らっしゃいましたようから……」 「あらっしゃいまし

ようより、いらっしゃいましたの方が聞きいいよ

ねえくしやみくん苦沙弥君」とまた迷亭が咎め立とがだてをすると主人

は「どっちでも同じ事だ」と氣のない返事をする。

「さていよいよ本題に入りまして弁じます」「弁じ、

ます、なんか講釈師の云い草だ。演舌家はもっと上品

な詞ことばを使つて貰いたいね」と迷亭先生また交まぜ返す

。「弁じます、が下品なら何と云つたらいいでしょう

。」と寒月君は少々むつとした調子で問いかける。

「迷亭のは聴まいているのか、交まぜ返ましているのか判

然しない。寒月君そんな弥次馬やじうまに構わず、さつさと

やるが好い」と主人はなるべく早く難関を切り抜けようとする。「むっとして弁じましたる柳かな、か

ね」と迷亭はあいかわらず飄然ひょうぜんたる事を云う。寒月

は思わず吹き出す。「真に処刑として絞殺を用いま

したのは、私の調べました結果によりますると、オ

ディセイの二十二巻目に出ております。すなわ即ち彼のかテ

レマカスがペネロピーの十二人の侍女を絞殺すると

いう条りくだでございます。希臘語ギリシヤゴで本文を朗読しても

宜よろしゅうございますが、ちと銜てらうような気味にもな

りますからやめに致します。四百六十五行から、四

百七十三行を御覧になると分ります」希臘語うんぬん云々

はよした方がいい、さも希臘語が出来ますと云わん

ばかりだ、ねえ苦沙弥君」「それは僕も賛成だ、そ

んな物欲しそうな事は言わん方が奥床おくゆかしくて好い」

と主人はいつになく直ちに迷亭に加担する。両人りょうにんは

毫ごうも希臘語が読めないのである。「それではこの両

三句は今晚抜く事に致しまして次を弁じ——ええ申し上げます。

この絞殺を今から想像して見ますと、これを執行するに二つの方法があります。第一は、彼かのテレマ

カスがユーミアス及びフヒリーシヤスの援を藉りて

たすけ
か

縄の一端を柱へ括りつけます。そしてその縄の所々

へ結び目を穴に開けてこの穴へ女の頭を一つずつ入

れておいて、片方の端をぐいと引張つて釣し上げた

はじ

ものと見るのです」「つまり西洋洗濯屋のシャツの

ように女がぶら下つたと見れば好いんだろう」「そ

の通りで、それから第二は縄の一端を前のごとく柱

へ括り付けて他の一端も始めから天井へ高く釣るの
です。そしてその高い縄から何本か別の縄を下げて
、それに結び目の輪になつたのを付けて女の頸を入
れておいて、いざと云う時に女の足台を取りはずす
と云う趣向なのです」 「たとえば云うと縄暖簾の先
ちようちんだま
へ提灯玉を釣したような景色けしきと思えば間違はあるま
い」 「提灯玉と云う玉は見た事がないから何とも申

されませんが、もしあるとすればその辺へんのところか
と思います。——それでこれから力学的に第一の場
合は到底成立すべきものでないと云う事を証拠立て
て御覧に入れます」「面白いな」と迷亭が云うと
「うん面白い」と主人も一致する。

「まず女が同距離に釣られると仮定します。また一
番地面に近い二人の女の首と首を繋つないでいる縄はホ

リゾントルと仮定します。そこで $\alpha_1 \alpha_2 \dots \alpha_6$ を縄が地平線と形づくる角度とし、 $T_1 T_2 \dots T_6$ を縄の各部が受ける力と見^{みな}做し、 $T_7 \parallel X$ は縄のも^{もち}つとも低い部分の受ける力とします。 W は勿^{もちろ}論女の体重と御承知下さい。どうです御分りになりましたか」

迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分った」と云う。

但しこの大抵と云う度合は兩人が勝手に作ったのだから他人の場合には応用が出来ないかも知れない。

「さて多角形に関する御存じの平均性理論によりまして、下の^{しも}ごとく十二の方程式が立ちます。 $T_1 \cos$

$$\alpha_1 = T_2 \cos \alpha_2 \dots \dots (1) \quad T_2 \cos \alpha_2 = T_3 \cos \alpha_3 \dots \dots$$

(2)……」 「方程式はそのくらいで沢山だろう」と

主人は乱暴な事を云う。「実はこの式が演説の首脳

なんですが」と寒月君ははなはだ残り惜し気に見える。
「それじゃ首脳だけは逐おつて何う事にしようじやないか」と迷亭も少々恐縮の体ていに見受けられる。

「この式を略してしまふとせつかくの力学的研究がまるで駄目になるのですが……」 「何そんな遠慮はいらんから、ずんずん略すさ……」 と主人は平気で云う。「それでは仰せに従つて、無理ですが略しま

しよう」「それがよかろう」と迷亭が妙なところで手をぱちぱちと叩く。

「それから英国へ移つて論じますと、ベオウルフの

中に絞首架即ちこうしゆなすなわガルガと申す字が見えますから絞罪

の刑はこの時代から行われたものに違ないと思われ

ます。ブラクストンの説によるともし絞罪に処せ

られる罪人が、万一縄の具合で死に切れぬ時は再度ふたたび

同様の刑罰を受くべきものだとしてあります。が、妙な事にはピヤース・プローマンの中にはたとい仮令兇漢でも二度絞める法はないと云う句があるのです。まあどっちが本当か知りませんが、悪くすると一度で死ねない事が往々実例にあるので。千七百八十六年に有名なフヒツ・ゼラルドと云う悪漢を絞めた事がありました。ところが妙なはずみで一度目には台から

飛び降りるときに縄が切れてしまったのです。また

やり直すと今度は縄が長過ぎて足が地面へ着いたの
でやはり死ねなかつたのです。とうとう三返目に見

物人が手伝つて往生おうじょうさしたと云う話しです」「やれ

やれ」と迷亭はこんなところへくると急に元氣が出

る。「本当に死に損そこないだな」と主人まで浮かれ出す。

「まだ面白い事があります首を縊くると背せいが一いっすん寸ばか

り延びるそうです。これはたしかに医者が計つて見たのだから間違はありません」「それは新工夫だね、どうだいくしやみ苦沙弥などはちと釣つて貰つちやあ、一寸延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷亭が主人の方を向くと、主人は案外真面目で「寒月君、一寸くらい背せいが延びて生き返る事があるだろうか」と聞く。「それは駄目きまに極つています。釣られて脊髓せきずい

が延びるからなんで、早く云うと背が延びると云うより壊こわれるんですからね」「それじゃ、まあ止やめよう」と主人は断念する。

演説の続きは、まだなかなか長くあつて寒月君は首縊りの生理作用にまで論及するはずでいたが、迷亭が無暗に風来坊ふうらいぼうのような珍語を挟はさむのと、主人が時々遠慮なく欠伸あくびをするので、ついに途中でやめて

歸つてしまった。その晩は寒月君がいかなる態度で、
いかなる雄弁を振ふるつたか遠方で起つた出来事の事だ
から吾輩には知れよう訳がない。

二三日は事もなく過ぎたが、或る日の午後二時頃
にさんち

また迷亭先生は例のごとく空々くうくうとして偶然童子のご
とく舞い込んで来た。座に着くと、いきなり「君、

越智東風のおちとうふう高輪事件を聞いたかい」と旅順陥落の号
たかなわじけん

外を知らせに來たほどの勢を示す。「知らん、近頃

は合あわんから」と主人は平生いっもの通り陰氣である。

「きようはその東風子とうふうしの失策物語を御報道に及ぼう

と思つて忙しいところをわざわざ來たんだよ」「ま

たそんな仰山ぎょうさんな事を云う、君は全体不埒ふらちな男だ」

「ハハハハ不埒と云わんよりむしろ無埒むらちの方だろ

う。それだけはちよつと區別しておいて貰わんと名

誉に關係するからな」 「おんなし事だ」 と主人は嘯うそぶ

いている。純然たる天然居士の再来だ。 「この前の

日曜に東風子とうふうしが高輪泉岳寺たかなわせんがくじに行つたんだそうだ。こ

の寒いのによせばいいのに――第一いまだき今時泉岳寺など

へ参るのはさも東京を知らない、田舎者いなかものようじや

ないか」 「それは東風の勝手さ。君がそれを留める

権利はない」 「なるほど権利は正まさにない。権利はど

うでもいいが、あの寺内に義士遺物保存会と云う見世物があるだろう。君知ってるか」「うんにや」

「知らない？　だって泉岳寺へ行つた事はあるだろ

う」「いいや」「ない？　こりや驚ろいた。道理で

大變東風を弁護すると思つた。江戸っ子が泉岳寺を

知らないのは情け^{なさ}ない」「知らなくても教師は務^{つと}ま

るからな」と主人はいよいよ天然居士になる。「そ

りや好いが、その展覽場へ東風が這入^{はい}つて見物して

いると、そこへ独逸人^{ドイツじん}が夫婦連^{づれ}で来たんだって。そ

れが最初は日本語で東風に何か質問したそうだと

ころが先生例の通り独逸語が使つて見たくてたまら

ん男だろう。そら二口三口べらべらやって見たとさ。

すると存外うまく出来たんだ——あとで考えるとそ

れが災^{わざわい}の本^{もと}さね」「それからどうした」と主人はつ

いに釣り込まれる。「独逸人が大鷹源吾おおたかげんごの蒔絵まきえの印いん

籠ろうを見て、これを買いたいが売ってくれるだろうか

と聞くんたそうだ。その時東風の返事が面白いじや

ないか、日本人は清廉の君子くんしばかりだから到底駄目どうてい

だと云ったんだとさ。その辺は大分景気だいぶがよかった

が、それから独逸人の方では恰好かっこうな通弁を得たつも

りでしきりに聞くそうだ」「何を?」「それがさ、

何だか分るくらいなら心配はないんだが、早口で無^む

^{やみ}

暗に問い掛けるものだから少しも要領を得ないのさ。

たまに分るかと思うと鳶口^{とびぐち}や掛矢^{かや}の事を聞かれる。

西洋の鳶口や掛矢^{かや}は先生何と翻訳して善いのか習つ

た事が無いんだから弱^よわらあね」「もつともだ」と

主人は教師の身の上に引き較^{くら}べて同情を表する。

^{ひまじん}

「ところへ閑人^{ひまじん}が物珍しそうにぽつぽつ集ってくる。

仕舞しまいには東風と独逸人を四方から取り巻いて見物す

る。東風は顔を赤くしてへどもどする。初めの勢に

引き易かえて先生大弱りの体ていさ」 「結局どうなつたん

だい」 「仕舞に東風が我慢出来なくなつたと見えて

さいならと日本語で云つてぐんぐん歸つて来たそう

だ、さいならは少し変だ君の国ではさよならをさい

ならと云うかつて聞いて見たら何やっぱりさよなら

ですが相手が西洋人だから調和を計るために、さい、ならにしたんだって、東風子は苦しい時でも調和を忘れない男だと感心した」「さいならはいいが西洋人はどうした」「西洋人はあっけに取られて茫然とぼうぜん見ていたそうだハハハ面白いじゃないか」「別段面白い事もないようだ。それをわざわざ報知しらせに来る君の方がよっぽど面白いぜ」と主人は巻煙草まきたばこの灰を

火桶の中へはたき落す。ひおけ 折柄格子戸のベルが飛び上おりから

るほど鳴って「御免なさい」と鋭どい女の声がする。
迷亭と主人は思わず顔を見合わせて沈黙する。

主人のうちへ女客は稀有けうだなど見ていると、かの

鋭どい声の所有主は縮緬ちりめんの二枚重ねを畳へ擦すり付け

ながら這入はいって来る。年は四十の上を少し超こしたく

らいだろう。抜け上った生え際はぎわから前髪が堤防工事

のように高く聳そびえて、少なくとも顔の長さの二分の

一だけ天に向つてせり出している。眼が切り通しの

坂くらいな勾配こうばいで、直線に釣つるし上げられて左右に

対立する。直線とは鯨くじらより細いという形容である。

鼻だけは無暗に大きい。人の鼻を盗んで来て顔の真

中へ据すえ付けたように見える。三坪ほどの小庭へ招しょう

魂うこん社の石灯籠しやいしどうろうを移した時のごとく、独ひとりで幅を利か

しているが、何となく落ちつかない。その鼻はいわ

ゆる鍵鼻で、ひと度は精一杯高くなつて見たが、こ

かぎばな

たび

れではあんまりだと中途から謙遜して、先の方へ行

けんそん

くと、初めの勢に似ず垂れかかつて、下にある唇を

のぞ

覗き込んでいる。かく著るしい鼻だから、この女が

いちじ

物を言うときは口が物を言うと言わんより、鼻が口

をきいているとしか思われない。吾輩はこの偉大な

る鼻に敬意を表するため、以来はこの女を称して鼻^は

^{なこ}

子鼻子と呼ぶつもりである。鼻子は先ず初対面の挨拶

を終つて「どうも結構な御住居ですこと」と座敷

中を睨^ねめ廻^{まわ}す。主人は「嘘をつけ」と腹の中で言

つたまま、ぷかぷか煙草^{たばこ}をふかす。迷亭は天井を見

ながら「君、ありや雨洩^{あまも}りか、板の木目^{もくめ}か、妙な模

様が出ているぜ」と暗に主人を促^{うな}がす。「無論雨の

洩りさ」と主人が答えると「結構だなあ」と迷亭がすまして云う。鼻子は社交を知らぬ人達だと腹の中いきどおで憤る。しばらくは三人鼎坐ていざのまま無言である。

「ちと伺いたい事があつて、参ったんですが」と鼻子は再び話の口を切る。「はあ」と主人が極めて冷淡に受ける。これではならぬと鼻子は、「実は私は

つい御近所で——あの向う横丁の角屋敷かどやしきなんですが」

「あの大きな西洋館の倉のあるうちですか、道理で

あすこには金田かねだと云う標札ひょうさつが出ていますな」と主人

はようやく金田の西洋館と、金田の倉を認識したよ

うだが金田夫人に対する尊敬の度合どあいは前と同様であ

る。「実は宿やどが出まして、御話を伺うんですが会社

の方が大変忙がしいもんですから」と今度は少し利き

いたろうという眼付をする。主人は一向動いっこうじない。

鼻子の先刻さつきからの言葉遣いが初対面の女としてはあ

ぞんざい

まり存在過ぎるのですでに不平なのである。「会社

でも一つじや無いんです、二つも三つも兼ねている

んです。それにどの会社でも重役なんで——多分御

存知でしょうが」それでも恐れ入らぬかと云う顔付

をする。元来ここの主人は博、士、と、か、大、学、教、授、と、か、い

うと非常に恐縮する男であるが、妙な事には実業家

に對する尊敬の度は極めて低い。實業家よりも中学校の先生の方がえらいと信じている。よし信じてお
らんでも、融通の利かぬ性質として、到底實業家、
金満家の恩顧を蒙る事は覺束ないと諦らめてゐる。
こうむ
おぼつか
あき

いくら先方が勢力家でも、財産家でも、自分が世話
になる見込のないと思ひ切つた人の利害には極めて
無頓着である。それだから學者社會を除いて他の方

面の事には極めて迂濶うかつで、ことに実業界などでは、

どこに、だれが何をしているか一向知らん。知って

も尊敬畏服の念は毫ごうも起らるのである。鼻子の方で

は天が下あめの一隅したにこんな変人がやはり日光に照らさ

れて生活していようとは夢にも知らない。今まで世

の中の人間にも大分接だいぶんして見たが、金田の妻さいですと

名乗って、急に取扱いの変らない場合はない、どこ

の会へ出て、どんな身分の高い人の前でも立派に
金田夫人で通して行かれる、いわんやこんな燻^{くすぶ}り返
った老書生においてをやで、私の家^{わたしうち}は向う横丁の角^か
屋敷^{どやしき}ですとさえ云えば職業などは聞かぬ先から驚く
だろうと予期していたのである。

「金田って人を知ってるか」と主人は無雑作^{むぞうさ}に迷亭
に聞く。「知ってるとも、金田さんは僕の伯父の友

達だ。この間なんざ園遊会へおいでになつた」と迷

亭は真面目な返事をする。「へえ、君の伯父さんて

えな誰だい」

まきやまだんしやく

「牧山男爵さ」と迷亭はいよいよ真面

目である。主人が何か云おうとして云わぬ先に、鼻

子は急に向き直つて迷亭の方を見る。迷亭は大島紬

おおしまつむぎ

こわたりさらさ

に古渡更紗か何か重ねてすましている。「おや、あ

なたが牧山様の――何でいらつしやいますか、ちつ

とも存じませんで、はなはだ失礼を致しました。牧

山様には始終御世話になると、宿やどで毎々御噂おうわさを致し

ております」ていねいと急に叮嚀な言葉使をして、おまけに

御辞儀までする、迷亭は「へええ何、ハハハハ」と

笑っている。主人はあつけ気けに取られて無言で二人を

見ている。「たしか娘の縁辺えんぺんの事につきましてもい

ろいろ牧山さまへ御心配を願いましたそうで……」

「へえー、そうですか」とこればかりは迷亭にもち

とうとつ

と唐突過ぎたと見えてちよつと魂消たたまげような声を出

す。「実は方々からくれくれと申し込はございます

が、こちらの身分もあるものでございますから、滅め

った

多な所ところへも片付けられませんで……」 「ごもつと

もで」と迷亭はようやく安心する。「それについて、

あなたに伺おうと思つて上がったんですがね」と鼻

子は主人の方を見て急に存在ぞんざいな言葉に返る。「あな

みずしまかんげつ

たびたび

たの所へ水島寒月という男が度々上がるそうですが、

あの人は全体どんな風な人でしよう」「寒月の事を

なん

にがにが

聞いて、何にするんです」と主人は苦々しく云う。

「やはり御令嬢の御婚儀上の関係で、寒月君の性行

いっばん

の一斑を御承知になりたいという訳でしよう」と迷

亭が気転を利きかす。「それが伺えれば大変都合が宜よろ

しいのでございますが……」 「それじゃ、御令嬢を

寒月におやりになりたいとおっしやるんで」 「やり

たいなんてえんじや無いんです」 と鼻子は急に主人

を参らせる。 「ほかにもだんだん口が有るんですか

ら、無理に貰つていたただかないだつて困りやしませ

ん」 「それじゃ寒月の事なんか聞かんでも好いでし

よう」 と主人も躍起やつきとなる。 「しかし御隠しなさる

訳もないでしょう」と鼻子も少々喧嘩腰になる。迷

亭は双方の間に坐つて、銀煙管ぎんぎせるを軍配団扇ぐんぱいうちわのよう

持つて、心の裡うちで八卦はっけよいやよいやと怒鳴っている。

「じゃあ寒月の方では是非貰もらいたいとでも云つたので
すか」と主人が正面から鉄砲を喰くらわせる。「貰いた

いと云つたんじゃないんですけれども……」 「貰い

たいだろうと思つていらつしやるんですか」と主人

はこの婦人鉄砲に限ると覺つたらしい。さと「話しはそ

んなに運んでるんじゃないやありませんが——寒月さんだ

って満更嬉しくない事もないでしょう」と土俵際でまんざら

持ち直す。「寒月が何かその御令嬢に恋着したといれんちやく

うような事でもありますか」あるなら云って見ろと

云う権幕で主人は反り返る。けんまく「まあ、そんな見当でけんとう

しょうね」今度は主人の鉄砲が少しも功を奏しない。

おもしろげ　ぎょうじ

今まで面白氣に行司氣取りで見物していた迷亭も鼻

いちごん

子の一言に好奇心を挑撥ちようはつされたものと見えて、煙管きせる

を置いて前へ乗り出す。「寒月が御嬢さんに付け文ぶみ

でもしたんですか、こりや愉快だ、新年になつて逸

話がまた一つ殖ふえて話しの好材料になる」と一人で

喜んでゐる。「付け文じゃないんです、もつと烈し

いんでさあ、御二人とも御承知じゃありませんか」

と鼻子は乙おつにからまつて来る。「君知ってるか」と

主人は狐付きのような顔をして迷亭に聞く。迷亭も

馬鹿ばかげ氣た調子で「僕は知らん、知っていりや君だ」

とつまらんとところで謙遜けんそんする。「いえ御兩人共御存おふたりとも

じの事ですよ」と鼻子だけ大得意である。「へえー」

と御兩人は一度に感じ入る。「御忘れになつたら私わたし

しから御話をしましょう。去年の暮向島の阿部さん

の御屋敷で演奏会があつて寒月さんも出掛けたじや

ありませんか、その晩歸りに吾妻橋で何かあつたで

あずまばし

しよう——詳しい事は言いますまい、当人の御迷惑

になるかも知れませんか——あれだけの証拠があ

りや充分だと思ひますが、どんなものでしよう」と

ダイヤ

はま

金剛石入りの指環の嵌つた指を、膝の上へ併べて、

なら

つんと居ずまいを直す。偉大なる鼻がますます異彩

を放つて、迷亭も主人も有れども無きがごとき有様である。

主人は無論、さすがの迷亭もこの不意撃ふいうちには胆きもを

抜かれたものと見えて、しばらくは呆然ぼうぜんとして瘡おこりの

落ちた病人のように坐っていたが、驚愕きようがくの箍たががゆる

んでだんだん持前の本態に復すると共に、滑稽と云

う感じが一度に唢とっかん喊してくる。両人ふたりは申し合せたご

とく「ハハハハハ」と笑い崩れる。鼻子ばかりは少し当てがはずれて、この際笑うのははなはだ失礼だと兩人を睨にらみつける。「あれが御嬢さんですか、なるほどこりやいい、おっしやる通りだ、ねえ苦沙弥くしゃみ君、全く寒月はお嬢さんを恋おもつてるに相違ないね：もう隠したってしようがないから白状しようじゃないか」「ウフン」と主人は云ったままである。

「本当に御隠しなさってもいけませんよ、ちゃんと種は上ってるんですからね」と鼻子はまた得意になる。「こうなりや仕方がない。何でも寒月君に関する事實は御参考のために陳述するさ、おい苦沙弥君、君が主人だのに、そう、にやにや笑っていては埒らちがあかんじやないか、実に秘密というものは恐ろしいものだねえ。いくら隠しても、どこからか露見ろけんする

からな。――しかし不思議と云えば不思議ですねえ、
金田の奥さん、どうしてこの秘密を御探知になった
んです、実に驚ろきますな」と迷亭は一人で喋舌しゃべる。

「私わたしの方だって、ぬかりはありませんやね」と鼻

子はしたり顔をする。「あんまり、ぬかりが無さ過
ぎるようですぜ。一体誰に御聞きになったんです」

「じきこの裏にいる車屋の神かみさんからです」「あの

黒猫のいる車屋ですか」と主人は眼を丸くする。

「ええ、寒月さんの事じゃ、よっぽど使いましたよ。

寒月さんが、ここへ来る度に、どんな話しをするか

と思つて車屋の神さんを頼んで一々知らせて貰うん

です」 「そりや苛い^{ひど}」と主人は大きな声を出す。

「なあに、あなたが何をなさろうとおっしやろうと、それに構つてゐるんじゃないんです。寒月さんの事だ

けですよ」 「寒月の事だつて、誰の事だつて——全

体あの車屋の神さんは気に食わん奴だ」と主人は一

人怒^{おこ}り出す。「しかしあなたの垣根のそとへ来て立

っているのは向うの勝手じゃありませんか、話しが

聞えてわるけりやもつと小さい声でなさるか、もつ

と大きなうちへ御^お這^{はい}入んなさるがいいでしょう」と

鼻子は少しも赤面した様子がない。「車屋ばかりじ

やありません。新道しんみちの二絃琴にげんきんの師匠からも大分だいぶんいろ

いろな事を聞いています」「寒月の事をですか」

「寒月さんばかりの事じゃありません」と少しすこ凄

事を云う。主人は恐れ入るかと思うと「あの師匠は

いやに上品ぶって自分だけ人間らしい顔をしている、

馬鹿野郎です」「はばか憚さまり様、女ですよ。野郎は御門おかどちが違

いです」と鼻子の言葉使いはますます御里おさとをあらわ

して来る。これではまるで喧嘩をしに来たようなものであるが、そこへ行くと迷亭はやはり迷亭でこの談判を面白そうに聞いている。鉄柺てつかいせん仙人が軍鶏しやもの蹴け合あいを見るような顔をして平気で聞いている。

あっこう

悪口の交換では到底鼻子の敵でないと自覚した主人は、しばらく沈黙を守るのやむを得ざるに至らしめられていたが、ようやく思い付いたか「あなたは

寒月の方から御嬢さんに恋着したようにばかりおつ

しやるが、私の聞いたんじや、わたし少し違いますぜ、ね

え迷亭君」と迷亭の救いを求める。「うん、あの時

の話しじや御嬢さんの方が、始め病氣になつて――

何だか譚語うわごとをいったように聞いたね」「なにそんな

事はありません」と金田夫人は判然たる直線流の言

葉使いをする。「それでも寒月はたしかに○○博士

の夫人から聞いたと云っていましたぜ」「それがこ
っちの手なんでさあ、○○博士の奥さんを頼んで寒
月さんの気を引いて見たんでさあね」「○○の奥さ
んは、それを承知で引き受けたんですか」「ええ。

引き受けて貰うたって、ただじゃ出来ませんやね、
それやこれやでいろいろ物を使っているんですから」
「是非寒月君の事を根掘り葉掘り御聞きにならなく

「つちや御歸りにならないと云う決心ですかね」と迷
亭も少し氣持を悪くしたと見えて、いつになく手障てざわ
りのあらい言葉を使う。「いいや君、話したって損
の行く事じゃなし、話そうじやないか苦沙弥君――

奥さん、私わたしでも苦沙弥でも寒月君に関する事実で差さし

支つかえのない事は、みんな話しますからね、――そう、

順を立ててだんだん聞いて下さると都合がいいです

ね」

鼻子はようやく納得なっとくしてそろそろ質問を呈出する。

一時荒立てた言葉使いも迷亭に対してはまたものごとく丁寧になる。「寒月さんも理学士だそうです

が、全体どんな事を専門にしているのでございます」
「大学院では地球の磁気の研究をやっています」と
主人が真面目に答える。不幸にしてその意味が鼻子

には分らんものだから「へえー」とは云つたが怪訝けげん

な顔をしている。「それを勉強すると博士になれま
しょうか」と聞く。「博士にならなければやれない
とおっしゃるんですか」と主人は不愉快そうに尋ね
る。「ええ。ただの学士じゃね、いくらでもありま
すからね」と鼻子は平気で答える。主人は迷亭を見
ていよいよいやな顔をする。「博士になるかならん

かは僕等も保証する事が出来んから、ほかの事を聞
いていただく事にしよう」と迷亭もあまり好い機嫌
ではない。「近頃でもその地球の——何かを勉強し
ているんでございましょうか」「二三日前は首縊り
の力学と云う研究の結果を理学協会で演説しました」
と主人は何の気も付かずに云う。「おやいやだ、首
縊りだなんて、よっぽど変人ですねえ。そんな首縊

りや何かやってたんじや、とても博士にはなれます
まいね」「本人が首を縊くつちやあむずかしいですが、
首縊くりの力学なら成れないとも限らんです」「そう
でしょうか」と今度は主人の方を見て顔色を窺うかがう。

悲しい事に力学と云う意味がわからんので落ちつき
かねている。しかしこれしきの事を尋ねては金田夫
人の面目に關すると思つてか、ただ相手の顔色で八は

卦つけを立てて見る。主人の顔は渋い。「そのほかにな

にか、分り易やすいものを勉強しておりますまいか」

「そうですね、せんだって団栗だんりのスタビリチーを論じて併せて天体の運行に及ぶと云う論文を書いた事

があります」 「団栗どんぐりなんぞでも大学校で勉強するも

のでしょうか」 「さあ僕も素人しろうとだからよく分らんが、

何しろ、寒月君がやるくらいなんだから、研究する

価値があると見えますな」と迷亭はすまして冷かす。

鼻子は学問上の質問は手に合わんと断念したものと見えて、今度は話題を転ずる。「御話は違いますが

——この御正月に椎茸しいたけを食べて前歯を二枚折ったそ

うじやございませんか」「ええその欠けたところに

空也餅くうやもちがくっ付いていましたね」と迷亭はこの質問

こそ吾縄張内なわばりうちだと急に浮かれ出す。「色気のない人

じゃございませんか、何だつて楊子ようじを使わないんで

しょう」 「今度逢あつたら注意しておきましよう」と

主人がくすくす笑う。 「椎茸で歯がかけるくらいじ

や、よほど歯の性しょうが悪いと思われませんが、如何いかになも

のでしょう」 「善いとは言われますまい——ねえ

迷亭」 「善い事はないがちよつと愛嬌あいぎょうがあるよ。あ

れぎり、まだ填つめないところが妙だ。今だに空也餅

ひっかけどころ

引掛所になつてゐるなあ奇観だぜ」 「歯を填める小遣

こづかい

がないので欠けなりにしておくんですか、または物好きで欠けなりにしておくのでしょうか」 「何も永

まえばかけなり

く前歯欠成を名乗る訳でもないでしょうから御安心なさいよ」と迷亭の機嫌はだんだん回復してくる。

鼻子はまた問題を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ当人の書いたものでもございますならちよつと拝

見したいもんでございますが」 「端書はがきなら沢山あり

ます、御覧なさい」と主人は書斎から三四十枚持っ

て来る。「そんなに沢山拝見しなくても――その内

の二三枚だけ……」 「どれどれ僕が好いのを撰よって

やろう」と迷亭先生は「これなざあ面白いでしょう

」と一枚の絵葉書を出す。「おや絵もかくんでござ

いますか、なかなか器用ですね、どれ拝見しましよ

う」と眺めていたが「あらいやだ、狸たぬきだよ。何だっ

て撰りに撰って狸なんぞかくんでしようね——それでも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。

「その文句を読んで御覧なさい」と主人が笑いながら云う。鼻子は下女が新聞を読むように読み出す。

「旧暦の歳としの夜よ、山の狸が園遊会をやさって盛さかんに舞踏します。その歌に曰いわく、来こいさ、としの夜よで、御山おや

まふみ
婦美も来まいぞ。スツポコポンノポン」 「何ですこ

りや、人を馬鹿にしているじゃございませんか」と

鼻子は不平の体である。てい「この天女は御氣に入りまてんによ

せんか」と迷亭がまた一枚出す。見ると天女が羽衣はごろも

を着て琵琶びわを弾ひいている。「この天女の鼻が少し小

さ過ぎるようですが」 「何、それが人並ですよ、鼻

より文句を読んで御覧なさい」文句にはこうある。

「昔むかしある所に一人の天文学者がありました。ある

夜よいつものように高い台に登って、一心に星を見て

いますと、空に美しい天女が現われ、この世では聞

かれぬほどの微妙な音楽を奏し出したので、天文学

者は身に沁しむ寒さも忘れて聞き惚ほれてしまいました

。朝見るとその天文学者の死骸しがいに霜しもが真白に降って

いました。これは本当の噺はなしだと、あのうそつきの爺じい

やが申しました」「何の事ですこりや、意味も何もないじやありませんか、これでも理学士で通るんですかね。ちっと文芸倶楽部でも読んだらよさそうなものですがねえ」と寒月君さんざんにやられる。迷亭は面白半分に「こりやどうです」と三枚目を出す。今度は活版で帆懸舟が印刷してあつて、例のごとくその下に何か書き散らしてある。「よべの泊りの

ほかけぶね

とま

十六小女郎、じゅうろくこじょう

親がないとて、

ありそ

荒磯の千鳥、さよの寝ね

ざめ

覚の千鳥に泣いた、親は船乗り波の底」「うまいの

ねえ、感心だ事、話せるじゃありませんか」「話せ

ますかな」「ええこれなら三味線に乗りますよ」

「三味線に乗りや本物だ。こりや如何いかがです」と迷亭

は無暗むやみに出す。

「いえ、もうこれだけ拝見すれば、

ほかのは沢山で、そんなに野暮やぼでないんだと云う事

は分りましたから」と一人で合点している。鼻子はこれで寒月に関する大抵の質問を卒おえたものと見えて、「これははなはだ失礼を致しました。どうか私の参った事は寒月さんへは内々に願います」と得手えて勝手かってな要求をする。寒月の事は何でも聞かなければならないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云う方針と見える。迷亭も主人も「はあ

「と氣のない返事をする」といずれその内御礼は致しますから」と念を入れて言いながら立つ。見送りに出た兩人が席へ返るや否や迷亭が「ありや何だいふたり」と云うと主人も「ありや何だい」と双方から同じ問をかける。奥の部屋で細君が忪こらえ切れなかつたと見えてクツクツ笑う声が聞える。迷亭は大きな声を出して「奥さん奥さん、月並の標本が来ましたぜ。」

月並もあのくらいになるとなかなか振ふるつていますな

あ。さあ遠慮はいらんから、存分御笑いなさい」

主人は不満な口こうき気で「第一氣に喰わん顔だ」と悪にく

らしそうに云うと、迷亭はすぐ引きうけて「鼻が顔

の中央に陣取つて乙おつに構えているなあ」とあとを付

ける。「しかも曲つていらあ」「少し猫背ねこぜだね。猫

背の鼻は、ちと奇拔きばつ過ぎる」と面白そうに笑う。

「夫を剋^{おつと}する顔だ」と主人はなお口^く惜し^やそうである

。「十九世紀で売れ残って、二十世紀で店曝^{たなぎら}しに逢

うと云う相^{そう}だ」と迷亭は妙な事ばかり云う。ところ

へ妻君が奥の間^まから出て来て、女だけに「あんまり

悪口をおっしやると、また車屋の神^{かみ}さんにいつけら

れますよ」と注意する。「少しいづける方が薬です

よ、奥さん」「しかし顔の讒^{ざん}訴^そなどをなさるのは、

あまり下等ですわ、誰だって好んであんな鼻を持つ
てる訳でもありませんから——それに相手が婦人で
すからね、あんまり苛ひどいわ」と鼻子の鼻を弁護する
と、同時に自分の容貌ようぼうも間接に弁護しておく。「何

ひどいものか、あんなのは婦人じゃない、愚人だ、

ねえ迷亭君」「愚人かも知れんが、なかなかえら者

だ、大分だいぶ引き搔かかれたじゃないか」「全体教師を何

と心得ているんだろう」「裏の車屋くらいに心得て
いるのさ。ああ云う人物に尊敬されるには博士にな
るに限るよ、一体博士になつておかんのが君の不^{ふりよう}了
見^{けん}さ、ねえ奥さん、そうでしょう」と迷亭は笑いな
がら細君を顧^{かえり}みる。「博士なんて到底駄目ですよ」
と主人は細君にまで見離される。「これでも今にな
るかも知れん、軽^{けいべつ}蔑するな。貴様なぞは知るまいが

昔しアイソクラチスと云う人は九十四歳で大著述をした。ソフォクリスが傑作を出して天下を驚かしたのは、ほとんど百歳の高齢だった。シモニジスは八十で妙詩を作った。おれだって……」 「馬鹿馬鹿しいわ、あなたのような胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちゃんと主人の寿命を予算している。「失敬な、——甘木さんへ行つて聞いて

見ろ——元来御前がこんな皺しわ苦茶な黒木綿くろもめんの羽織や

、つぎだらけの着物を着せておくから、あんな女に

馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭の着ているよう

な奴を着るから出しておけ」「出しておけって、あ

んな立派な御召おめしはござんせんわ。金田の奥さんが迷

亭さんに叮嚀ていれいになったのは、伯父さんの名前を聞い

てからですよ。着物の咎とがじやございません」と細君

うまく責任を逃^のがれる。

主人は伯父さん、と云う言葉を聞いて急に思い出したように「君に伯父があると云う事は、今日始めて聞いた。今までついに噂^{うわさ}をした事がないじゃないか、本当にあるのかい」と迷亭に聞く。迷亭は待ってたと云わぬばかりに「うんその伯父さ、その伯父が馬鹿に頑物^{がんぶつ}でねえ——やはりその十九世紀から連綿

と今日まで生き延びているんだがね」と主人夫婦を半々に見る。「オホホホ面白い事ばかりおっしやって、どこに生きていらっしやるんです」「静岡に生きてますがね、それがただ生きてるんじや無いです。頭にちよんまげ鬘を頂いて生きてるんだから恐縮しまさあ。帽子を被かぶれってえと、おれはこの年になるが、まだ帽子を被るほど寒さを感じた事はないと

威張つてゐるんです——寒いから、もつと寝ていらつ

しやいと云うと、人間は四時間寝れば充分だ。四時

間以上寝るのは贅沢ぜいたくの沙汰だつて朝暗いうちから起

きてくるんです。それでね、おれも睡眠時間を四時

間に縮めるには、永年修業をしたもんだ、若いうち

はどうしても眠ねむたくていかなんだが、近頃に至つて

始めて随処任意の庶境しよきように入つてはなはだ嬉しいと自

慢するんです。六十七になつて寝られなくなるなあ

当り前でさあ。修業も糸瓜へちまも入いつたものじゃないの

に当人は全く克己こつぎの力で成功したと思つてゐるんです

からね。それで外出する時には、きつと鉄扇てっせんをもつ

て出るんですがね」「なににするんだい」「何にす

るんだか分らない、ただ持つて出るんだね。まあス

テツキの代りくらいに考えてるかも知れんよ。とこ

ろがせんだって妙な事がありましたね」と今度は細君の方へ話しかける。「へえー」と細君が差し合さあいのない返事をする。「此年ことしの春突然手紙を寄こして山高帽子とフロックコートを至急送れと云うんです。

ちよつと驚ろいたから、郵便で問い返したところが老人自身が着ると云う返事が来ました。二十三日に静岡しずくしやうかいで祝捷会があるからそれまでに間まに合うように

、至急調達しろと云う命令なんです。ところがおか

しいのは命令中にこうあるんです。帽子は好い加減

な大きさを買ってくれ、洋服も寸法を見計らって

大丸へ注文してくれ……」
だいまる「近頃は

仕立てるのかい」「なあに、先生、白木屋しろきやと間違え

たんだあね」「寸法を見計ってくれたって無理じゃ

ないか」「そこが伯父の伯父たるところさ」「どう

した？」「仕方がないから見計らって送ってやった

」「君も乱暴だな。それで間に合ったのかい」「ま

あ、どうにか、こうにかおつついたんだろう。国の

新聞を見たら、当日牧山翁は珍らしくフロックコー

トにて、例の鉄扇てっせんを持ち……」「鉄扇だけは離さな

かったと見えるね」「うん死んだら棺の中へ鉄扇だ

けは入れてやろうと思っっているよ」「それでも帽子

も洋服も、うまい具合に着られて善かった」「とこ

ろが大間違さ。僕も無事に行つてありがたいと思つ

てると、しばらくして国から小包が届いたから、何

か礼でもくれた事と思つて開けて見たら例の山高帽

子さ、手紙が添えてあつてね、せっかく御求め被下くだされ

そちら

候えども少々大きく候間、そろあいだ帽子屋へ御遣わしの上、おつか

くだされたくそろ

御縮め被下度候。

こがわせ

縮め賃は小為替にて此方より御送

こなた

おんおくり

もうしあぐべきそろ
可申上候とあるのさ」 「なるほど迂濶うかつだな」と主人

おの

は己れより迂濶なものの天下にある事を発見して大おお

てい

に満足の体に見える。やがて「それから、どうした

」と聞く。「どうするったって仕方がないから僕が

かぶ

頂戴して被かぶっていらあ」 「あの帽子かあ」と主人が

かた

にやにや笑う。「その方が男爵でいらっしやるんで

すか」と細君が不思議そうに尋ねる。「誰がです」

「その鉄扇の伯父さまが」「なあに漢学者でさあ、

せいどう

しゅしがく

若い時聖堂で朱子学か、何かにこり固まったものだ

うやうや

まげ

から、電気灯の下で恭しくちよん鬘を頂いているん

あご

な

です。仕方がありません」とやたらに頤を撫で廻す

。「それでも君は、さっきの女に牧山男爵と云った

ようだぜ」「そうおっしやいましたよ、私も茶の間

で聞いておりました」と細君もこれだけは主人の意

見に同意する。「そうでしたかなアハハハハ」と

迷亭は訳もなく笑う。わけ「そりや嘘うそですよ。僕に男爵

の伯父がありや、今頃は局長くらいになっていまさ

あ」と平気なものである。「何だか変だと思った」

と主人は嬉しそうな、心配そうな顔付をする。「あ

らまあ、よく真面目であんな嘘が付けますねえ。あ

なたもよっぽど法螺ほらが御上手でいらっしやる事」と

細君は非常に感心する。「僕より、あの女の方が上う

わ手てでさあ」「あなただつて御負けなさるきづか氣遣いは

ありません」「しかし奥さん、僕の法螺は單なる法

螺ですよ。あの女のは、みんな魂胆があつて、曰いわく

付きの嘘ですぜ。たちが悪いです。猿智慧さるぢえから割り

出した術数と、天来の滑稽趣味と混同されちや、コ

メディーの神様も活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる

訳に立ち至りますからな」主人は俯目ふしめになって「どうだか」と云う。妻君は笑いながら「同じ事ですわ」と云う。

吾輩は今まで向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。
角屋敷かどやしきの金田とは、どんな構えか見た事は無論ない。
聞いた事さえ今が始めてである。主人の家うちで実

業家が話頭に上のぼった事は一返もないので、主人の飯

を食う吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみならず、はなはだ冷淡であつた。しかるに先刻^{はか}ならずも鼻子の訪問を受けて、余^よ所^そながらその談話を拝聴し、その令嬢の艶美^{えんび}を想像し、またその富貴^{ふうき}、権勢を思い浮べて見ると、猫ながら安閑^{えんがわ}として椽側^{えんがわ}に寝転んでいらなくなつた。しかのみならず吾輩は寒月君に対してはなはだ同情の至りに堪えん。先方

では博士の奥さんやら、車屋の神さんかみやら、二絃琴にげんきん

てんしょういん

の天璋院まで買収して知らぬ間まに、前歯の欠けたの

さえ探偵しているのに、寒月君の方ではただニヤニヤして羽織の紐ばかり気にしているのは、いかに卒業したての理学士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。

と言って、ああ云う偉大な鼻を顔の中うちに安置してい

る女の事だから、滅多めったな者では寄り付ける訳の者で

はない。こう云う事件に關しては主人はむしろ無頓着でかつあまりに錢がなさ過ぎる。迷亭は錢に不自由はしないが、あんな偶然童子だから、寒月に援けを与える便宜は尠ぺんぎかろう。して見ると可哀相なのは首縊りの力学を演説する先生ばかりとなる。吾輩でも奮発して、敵城へ乗り込んでその動靜を偵察してやらなくては、あまり不公平である。吾輩は猫だけ

れど、エピクテタスを読んで机の上へ叩きつけるく

らいな学者の家に寄寓うちきぐうする猫で、世間一般の痴猫ちびよう、

愚猫ぐびようとは少しく撰せんを殊ことにしている。この冒険をあえ

てするくらいの義侠心は固もとより尻尾しっぽの先に畳み込ん

である。何も寒月君に恩になつたと云う訳もないが

、これはただに個人のためにする血氣躁狂けつきそうきようの沙汰で

はない。大きく云えば公平を好み中庸を愛する天意

を現実にする天晴あっぱれな美挙だ。人の許諾を経へずして吾あ

ずまばし

妻橋事件などを至る処に振り廻わす以上は、人の軒

下に犬を忍ばして、その報道を得々として逢う人に

ふいちよう

吹聴する以上は、車夫、馬丁ばてい、無頼漢ぶらいかん、ごろつき書

ひやといばあ

生、日雇婆ひやといばあ、産婆ようば、妖婆ようば、按摩あんま、頓馬とんまに至るまでを

使用して国家有用の材に煩はんを及ぼして顧みかえりざる以上

は——猫にも覚悟がある。幸い天気も好い、霜解しもどけは

少々閉口するが道のためには一命もすてる。足の裏

へ泥が着いて、椽側えんがわへ梅の花の印を押すくらいな事

は、ただ御三おさんの迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦

痛とは申されない。翌日あすとも云わずこれから出掛け

ようと勇猛精進ゆうもうしょうじんの大決心を起して台所まで飛んで出

たが「待てよ」と考えた。吾輩は猫として進化の極

度に達しているのみならず、脳力の発達においては

あえて中学の三年生に劣らざるつもりであるが、悲しいかな咽喉のどの構造だけはどこまでも猫なので人間の言語が饒舌しゃべれない。よし首尾よく金田邸へ忍び込んで、充分敵の情勢を見届けたところで、肝心かんじんの寒月君に教えてやる訳に行かない。主人にも迷亭先生にも話せない。話せないとすれば土中にある金剛石ダイヤモンドの日を受けて光らぬと同じ事で、せっかくの智識も

無用の長物となる。これは愚^ぐだ、やめようかしらんと上り口で佇^{たたず}んで見た。

しかし一度思い立った事を中途でやめるのは、白^{ゆう}

雨^{だち}が来るかと待っている時黒雲共隣^{とも}国へ通り過ぎた

ように、何となく残り惜しい。それも非がこつちに

あれば格別だが、いわゆる正義のため、人道のため

なら、たとい無駄^{むだ}死^じをやるまでも進むのが、義務を

知る男児の本懐であろう。無駄骨を折り、無駄足を

汚す^{よご}くらいは猫として適當のところである。猫と生

れた因果^{いんが}で寒月、迷亭、苦沙弥諸先生と三寸の舌頭^{ぜつとう}

に相互の思想を交換する技倆^{ぎりよう}はないが、猫だけに忍

びの術は諸先生より達者である。他人の出来ぬ事を

成就^{じょうじゆ}するのはそれ自身において愉快である。吾^{われ}一箇

でも、金田の内幕を知るのは、誰も知らぬより愉快

である。人に告げられんでも人に知られているなど云う自覚を彼等に与うるだけが愉快である。こんなに愉快が続々出て来ては行かずにはいられない。やはり行く事に致そう。

向う横町へ来て見ると、聞いた通りの西洋館が角

どしめん
わがものがお

地面を吾物顔に占領している。この主人もこの西洋

館のごとく傲慢ごうまんに構えているんだらうと、門を這入はい

つてその建築を眺^{なが}めて見たがただ人を威圧しようと

二階作りが無意味に突っ立っているほかに何等の

能もない構造であつた。迷亭のいわゆる月並^{つきなみ}とはこ

れであらうか。玄関を右に見て、植込の中を通り抜

けて、勝手口へ廻る。さすがに勝手は広い、苦沙弥

先生の台所の十倍はたしかにある。せんだって日本

新聞に詳しく書いてあつた大隈伯^{おおくまはく}の勝手にも劣るま

いと思うくらい整然とぴかぴかしている。「模範勝

手だな」と這^{はい}入り込む。見ると漆喰^{しっくい}で叩き上げた二

坪ほどの土間に、例の車屋の神^{かみ}さんが立ちながら、

御飯^{ごはん}焚きと車夫を相手にしきりに何か弁じている。

こいつは劍^{けん}呑だと水桶^{みずおけ}の裏へかくれる。「あの教師

あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と飯^{めした}焚が云

う。「知らねえ事があるもんか、この界^{かい}限^{わい}で金田さ

んの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪かたわだあな

「これは抱え車夫の声である。」「なんとも云えない

よ。あの教師と来たら、本よりほかに何にも知らない変人なんだからねえ。旦那の事を少しでも知って

りや恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の小供

の歳としさえ知らないんだもの」と神さんが云う。「金

田さんでも恐れねえかな、厄介とうへんぼくな唐変木かまだ。構こたあ事

あねえ、みんなで威嚇おどかしてやろうじゃないか」

「それが好いよ。奥様の鼻が大きい過ぎるの、顔が気に喰わないのって——そりやあ酷ひどい事を云うんだよ

。自分の面つらあ今戸焼いまどやきの狸見たぬきたような癖に——あれで

一人前いちにんまえだと思っっているんだからやれ切れないじゃない

いか」「顔ばかりじゃない、手拭てぬぐいを提さげて湯に行く

ところからして、いやに高慢ちきじゃないか。自分

くらいえらい者は無いつもりでいるんだよ」と苦沙

おおい

弥先生は飯焚にも大に不人望である。「何でも大勢

そば

であいつの垣根の傍へ行つて悪口をさんざんいつて

やるんだね」「そうしたらきつと恐れ入るよ」「し

かしこつちの姿を見せちやあ面白くねえから、声だ

け聞かして、勉強の邪魔をした上に、出来るだけじ

らしてやれつて、さつき奥様が言い付けておいでな

すったぜ」 「そりや分っているよ」と神さんは悪口
の三分の一を引き受けると云う意味を示す。なるほ
どこの手合が苦沙弥先生を冷やかに来るなど三人
の横を、そつと通り抜けて奥へ這入る。

猫の足はあれども無きがごとし、どこを歩いても
不器用な音のした試しがない。空を踏むがごとく、
雲を行くがごとく、水中に磬けいを打つがごとく、洞裏とうり

に瑟しつを鼓こするがごとく、醍醐だいごの妙味を嘗なめて言詮ごんせんの

ほかに冷暖れいだんを自知じちするがごとし。月並な西洋館もな

く、模範勝手もなく、車屋の神さんも、権助ごんすけも、飯

焚も、御嬢さまも、仲働なかばたらきも、鼻子夫人も、夫人の

旦那様もない。行きたいところへ行つて聞きたい話

を聞いて、舌を出し尻尾しっぽを掉ふつて、髭ひげをぴんと立て

て悠々ゆうゆうと歸るのみである。ことに吾輩はこの道に掛

けては日本一の堪能である。かんのう 草双紙にある猫又ねこまたの血

脈を受けておりはせぬかと自ら疑うくらいである。みずか

墓がまの額ひたいには夜光やこうの明珠めいしゆがあると云うが、吾輩の尻尾

には神祇釈教恋無常しんぎしやつきよういむじようは無論の事、満天下の人間を馬

鹿にする一家相伝いっかそうでんの妙薬が詰め込んである。金田家

の廊下を人の知らぬ間まに横行するくらいは、仁王様

が心太ところてんを踏み潰つぶすよりも容易である。この時吾輩は

我ながら、わが力量に感服して、これも普段大事にする尻尾の御蔭だなと気が付いて見るとただ置かれ
ない。吾輩の尊敬する尻尾大明神を礼拝らいはいしてニヤン
運長久を祈らばやと、ちよつと低頭して見たが、ど
うも少し見当けんとうが違ふようである。なるべく尻尾の方
を見て三拝しなければならん。尻尾の方を見ようと
身体を廻すと尻尾も自然と廻る。追付こうと思つて

首をねじると、尻尾も同じ間隔をとって、先へ馳かけ

出す。なるほど天地玄黄を三寸裏りに収めるほどの靈

てんちげんこう

物だけあつて、到底吾輩の手に合わない、尻尾を環めぐ

る事七度ななたび半にして草臥くたびれたからやめにした。少々

眼がくらむ。どこにいろのだかちよつと方角が分ら

なくなる。構うものかと滅茶苦茶にあるき廻る。障

子の裏うちで鼻子の声がする。ここだと立ち留まつて、

左右の耳をはすに切つて、息を凝^こらす。「貧乏教師

の癖に生意氣じゃありませんか」と例の金^{かな}切^きり^{なき}声^{こえ}を

振り立てる。「うん、生意氣な奴だ、ちと懲^こらしめ

のためにいじめてやろう。あの学校にや国のものも

いるからな」「誰がいるの?」「津木^{つき}ピン助^{すけ}や福地^{ふくち}

キシヤゴがいるから、頼んでからかわしてやろう」

吾輩は金田君の生^{しょう}国^{こく}は分らんが、妙な名前^{なまえ}の人間ば

かり揃そろった所だと少々驚いた。金田君はなお語をつ

いで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「はあ

、車屋の神さんの話では英語のリードルか何か専門に教えるんだって云います」「どうせ碌ろくな教師じゃ

あるめえ」あるめえにも尠すくなからず感心した。「こ

の間ピン助に遇あったら、私わたしの学校にや妙な奴がおり

ます。生徒から先生番茶ばんちやは英語で何と云いますと聞

かれて、番茶は Savage tea であると真面目に答え

たんで、教員間の物笑いとなっています、どうもあんな教員があるから、ほかのものの、迷惑になつて

困りますと云つたが、おおかた大方あいつの事だぜ」「あい

つに極きまつていまさあ、そんな事を云いそうな面構つらがまえ

ですよ、いやに髭ひげなんか生はやして」「怪けしからん奴

だ」髭を生やして怪しからなければ猫などは一足だ

つて怪しかりようがない。「それにあの迷亭とか、

へべれけとか云う奴は、まあ何てえ、頓狂な跳返り

はねつかえ

なんでしよう、伯父の牧山男爵だなんて、あんな顔

に男爵の伯父なんざ、有るはずがないと思つたんで

すもの」「御前がどこの馬の骨だか分らんものの言

う事を真まに受けるのも悪い」「悪いって、あんまり

人を馬鹿にし過ぎるじゃありませんか」と大變残念

そうである。不思議な事には寒月君の事は一言半句

いちごんはんく

も出ない。吾輩の忍んで来る前に評判記はすんだも

のか、またはすでに落第と事が極きまつて念頭ねんとうにないも

のか、その辺へんは懸念けねんもあるが仕方がない。しばらく

佇たたずんでいると廊下を隔てて向うの座敷でベルの音が

する。そらあすこにも何か事がある。後おくれぬ先に、

とその方角へ歩を向ける。

来て見ると女が独りひとで何か大声で話している。そ

の声が鼻子とよく似ているところをもつて推おすと、

これが即ち当家の令嬢寒月君をして未遂入水をあえ

みすいじゆすい

てせしめたる代物しろものだろう。惜哉障子越しで玉の御姿おんすがた

おしいかな

を拝する事が出来ない。従つて顔の真中に大きな鼻

を祭り込んでいるか、どうだか受合えない。しかし

談話の模様から鼻息の荒いところなどを綜合そうごうして考

えて見ると、満更まんざら人の注意を惹ひかぬ獅鼻ししばなとも思われ

ない。女はしきりに喋舌しゃべっているが相手の声が少し

も聞えないのは、噂うわさにきく電話というものであるう。

「御前は大和やまとかい。明日あしたね、行くんだからね、鶉うずらの

三を取っておいておくれ、いいかえ——分ったかい

——なに分らない？ おやいやだ。鶉うずらの三を取るん

だよ。——なんだって、——取れない？ 取れない

はずはない、とるんだよ——へへへへ御冗談をだごじようだん

って——何が御冗談なんだよ——いやに人をおひや

らかすよ。全体御前は誰だい。ちようきち長吉だ？ 長吉なん

ぞじや訳が分らない。お神さんに電話口へ出ろって

御云いな——なに？ 私わたくしで何でも弁じます？——

お前は失敬だよ。妾あしを誰だか知ってるのかい。金

田だよ。——へへへへ善く存じておりますだって。

ほんとに馬鹿だよこの人あ。——金田だつてえばさ。

——なに？——毎度御^{ごひいき}贔屓にあずかりましてありが

とうございます？——何がありがたいんだね。御礼

なんか聞きたかあないやね——おやまた笑ってるよ。

お前はよつぽど愚物^{ぐぶつ}だね。——仰せの通りだつて？

——あんまり人を馬鹿にすると電話を切ってしまう
よ。いいのかい。困らないのかよ——黙ってちや分

らないじゃないか、何とか御云いなさいな」電話は長吉の方から切ったものか何の返事もないらしい。

令嬢は癩癩かんしゃくを起してやけにベルをジャラジャラと廻

す。足元で狎ちんが驚ろいて急に吠え出す。これは迂濶うかつ

に出来ないと、急に飛び下りて椽えんの下へもぐり込む。

折柄廊下を近く足音がして障子を開ける音がする。
おりから
ちかづ

誰か来たなと一生懸命に聞いていると「御嬢様、旦那様と奥様が呼んでいらっしやいます」と小間使らしい声がする。「知らないよ」と令嬢は剣突けんつくを食わせる。「ちよつと用があるから嬢じょうを呼んで来いとおっしゃいました」「うるさいね、知らないてば」と令嬢は第二の剣突を食わせる。「……水島寒月さんの事で御用があるんだそうでございます」と小間使

は氣を利^きかして機嫌を直そうとする。「寒月でも、

水月でも知らないんだよ——大嫌いだわ、糸瓜^{へちま}が戸^と

迷^{まど}いをしたような顔をして」第三の劍突は、憐れな

る寒月君が、留守中に頂戴する。「おや御前いつ束^{そく}

髪^{はっ}に結^いったの」小間使はほっと一息ついて「今日^{こんにち}」

となるべく単簡^{たんかん}な挨拶をする。「生意気だねえ、小

間使の癖に」と第四の劍突を別方面から食わす。

「そうして新しい半襟はんえりを掛けたじゃないか」「へえ、

せんだって御嬢様からいただきましたので、結構過

ぎて勿体もったいないと思つて行李こうりの中へしまつておきまし

たが、今までのがあまり汚よごれましたからかけ易かえま

した」「いつ、そんなものを上げた事があるの」

「この御正月、白木屋へいらつしやいまして、御求

め遊うぐいすばしたので――鶯茶うぐいすちやへ相撲すもうの番附ばんづけを染め出した

のでございます。妾^{あた}しには地味過ぎていやだから御

前に上げようとおっしやった、あれでございます」

「あらいやだ。善く似合うのね。にくらしいわ」

「恐れ入ります」 「褒^ほめたんじゃない。にくらしい

んだよ」 「へえ」 「そんなによく似合うものをなぜ

だまって貰ったんだい」 「へえ」 「御前にさえ、そ

のくらい似合うなら、妾^{あた}しにだっておかしい事あな

いだろうじゃないか」「きつとよく御似合い遊ばします」「似あうのが分つてゐる癖になぜ黙つてゐるんだい。そうしてすまして掛けてゐるんだよ、人の悪い」剣突は留めどもなく連発される。このさき、事局はどう発展するかと謹聴してゐる時、向うの座敷で「富子や、富子や」と大きな声で金田君が令嬢を呼ぶ。令嬢はやむを得ず「はい」と電話室を出て行

く。吾輩より少し大きな狎ちんが顔の中心に眼と口を引き集めたような面かおをして付いて行く。吾輩は例の忍び足で再び勝手から往来へ出て、急いで主人の家に帰る。探険はまず十二分の成績せいせきである。

帰って見ると、奇麗な家うちから急に汚ない所へ移ったので、何だか日当りの善い山の上から薄黒い洞窟どうくつの中へ入はいり込んだような心持ちがする。探険中は、

ほかの事に気を奪われて部屋の装飾、襖ふすま、障子しょうじの具

合などには眼も留らなかつたが、わが住居すまいの下等な

るを感ずると同時に彼かのいわゆる月並つきなみが恋しくなる。

教師よりもやはり実業家がえらいように思われる。

吾輩も少し変だと思つて、例の尻尾しっぽに伺いを立てて

見たら、その通りその通りと尻尾の先から御託宣ごたくせんが

あつた。座敷へ這入はいつて見ると驚いたのは迷亭先生

まだ歸らない、まきたばこ巻煙草の吸い殻を蜂の巣のごとく火

鉢の中へ突き立てて、おおあぐら大胡坐で何か話し立てている。

いつの間にかま寒月君さえ来ている。主人は手枕をし

て天井の雨洩を余念もなく眺めている。あまもりあいかわら

ず太平の逸民の会合である。

「寒月君、君の事をうわごと譚語にまで言つた婦人の名は、

当時秘密であつたようだが、もう話しても善かろう」

と迷亭がからかい出す。「御話しをしても、私だけ

さしつか

に関する事なら差支えないんですが、先方の迷惑に

なる事ですから」「まだ駄目かなあ」「それに○○

博士夫人に約束をしてしまったもんですから」「他

言をしないと云う約束かね」「ええ」と寒月君は例

ひも

のごとく羽織の紐をひねくる。その紐は売品にある

てんぼうちよう

まじき紫色である。「その紐の色は、ちと天保調だ

な」と主人が寝ながら云う。主人は金田事件などに

は無頓着である。「そうさ、とうてい到底日露戦争時代のも

のではないな。じんがさ陣笠に立葵の紋の付いたぶつさ割き羽

織でも着なくつつちや納まりの付かない紐だ。織田信

長がむこいり聳入をするとき頭の髪を茶笠にちやせん結つたと云うが

その節用いたのは、たしかそんな紐だよ」と迷亭の

文句はあいかわらず長い。「じじい実際これは爺が長州征

伐の時に用いたのです」と寒月君は真面目である。

「もういい加減に博物館へでも献納してはどうだ。

首縊りの力学の演者、理学士水島寒月君ともあろう

ものが、売れ残りの旗本のような出で立いをたちするのは

ちと体面に関する訳だから」「御忠告の通りに致し

てもいいのですが、この紐が大変よく似合うと云っ

てくれる人もありますので——」「誰だい、そんな

趣味のない事を云うのは」と主人は寝返りを打ちながら大きな声を出す。「それは御存じの方なんじゃないんで――」御存じでなくてもいいや、一体誰だい」「去る女性によしやうなんです」「ハハハハハよほど茶人だなあ、当てて見ようか、やはり隅田川の底から君の名を呼んだ女なんだろう、その羽織を着てもう一返御駄おだぶつ仏を極きめ込んじやどうだい」と迷亭が横合

から飛び出す。「へへへへもう水底から呼んでは

おりません。ここから乾いぬいの方角にあたる清浄しょうじょうな世界

で……」 「あんまり清浄でもなさそうだ、毒々しい

鼻だぜ」 「へえ？」 と寒月是不審な顔をする。「向

う横丁の鼻がさつき押しかけて来たんだよ、ここへ、

実に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙弥君」 「うむ」

と主人は寝ながら茶を飲む。「鼻って誰の事です」

「君の親愛なる久遠くおんの女性によしやうの御母堂様だ」「へえー」

「金田の妻さいという女が君の事を聞きに来たよ」と主

人が真面目に説明してやる。驚くか、嬉しがるか、

恥ずかしがるかと寒月君の様子を窺うかがって見ると別段

の事もない。例の通り静かな調子で「どうか私に、

あの娘を貰ってくれと云う依頼なんでしょう」と、

また紫の紐をひねくる。「ところが大違さ。その御

母堂なるものが偉大なる鼻の所有主ぬしでね……」迷亭

が半なかば言い懸けると、主人が「おい君、僕はさつき

から、あの鼻について俳体詩はいたいしを考えているんだがね」

と木に竹を接ついだような事を云う。隣の室へやで妻君が

くすくす笑い出す。「随分君も吞気のんきだなあ出来たの

かい」「少し出来た。第一句がこの顔に鼻祭りはなまつりと云

うのだ」「それから？」「次がこの鼻に神酒供えと

いうのさ」「次の句は？」「まだそれぎりしか出来

ておらん」「面白いですな」と寒月君がにやにや笑

う。「次へ穴二つ、幽かなりと付けちやどうだ」と迷

亭はすぐ出来る。すると寒月が「奥深く毛も見えず、

はいけますまいか」と各々出鱈目おのおのでたらめを並べていると、

垣根に近く、往来で「今戸焼いまどやきの狸たぬき今戸焼の狸」と四

五人わいわい云う声がする。主人も迷亭もちよつと

驚ろいて表の方を、垣の隙すきからすかして見ると「ワ

ハハハハハ」と笑う声がして遠くへ散る足の音がす

る。「今戸焼の狸というな何だい」と迷亭が不思議

そうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が答え

る。「なかなか振ふるっていますな」と寒月君が批評を

加える。迷亭は何を思い出したか急に立ち上って

「吾輩は年来美学上の見地からこの鼻について研究

した事がございますから、その一斑いっばんを披瀝ひれきして、御

両君の清聴を煩わずらわしたいと思います」と演舌の真似

をやる。主人はあまりの突然にぼんやりして無言の

まま迷亭を見ている。寒月は「是非承うけたまわりたいもので

す」と小声で云う。「いろいろ調べて見ましたが鼻

の起源はどうも確しかと分りません。第一の不審は、も

しこれを実用上の道具と仮定すれば穴が二つでたく

さんである。何もこんなに横風おうふうに真中から突き出し

て見る必用がないのである。ところがどうしてだん

だん御覧のごとく斯様かようにせり出して参ったか」と自

分の鼻を抓つまんで見せる。「あんまりせり出してもお

らんじやないか」と主人は御世辞のないところを云

う。「とにかく引っ込んではおりませんからな。た

だ二個の孔あなが併ならんでいる状態と混同なすつては、誤

解を生ずるに至るかも計られませんか、予め御注意をしておきます。――で愚見によりますと鼻の発

達^{はな}は吾々人間が鼻汁をかむと申す微細なる行為の結

果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したも

のでございます」^{いつわ}「佯りのない愚見だ」とまた主人

が寸評を挿入する。^{そうにゆう}「御承知の通り鼻汁^{はな}をかむ時は、

是非鼻を抓みます、鼻を抓んで、ことにこの局部だ

けに刺激を与えますと、進化論の大原則によつて、この局部はこの刺激に応ずるがため他に比例して不相当な発達を致します。皮も自然堅くなります、肉も次第に硬く^{かた}なります。ついに凝^こつて骨となります」

「それは少し——そう自由に肉が骨に一足飛に変化は出来ますまい」と理学士だけあつて寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰わぬ顔で陳^のべ続ける。「い

や御不審はごもつともですが論より証拠この通り骨があるから仕方がありません。すでに骨が出来る。

骨は出来ても鼻汁はなは出ますな。出ればかまずにはい

られません。この作用で骨の左右が削り取けずられて細

い高い隆起と変化して参ります——実に恐ろしい作

用です。点滴てんてきの石を穿うがつがごとく、賓頭びんずる顱おのずの頭が自

から光明を放つがごとく、不思議薰不思議臭ふしぎくんふしぎしゅうの喩たとえの

ごとく、斯かよう様に鼻筋が通つて堅くなります」「それ

でも君のなんぞ、ぶくぶくだぜ」「演者自身の局部
は回かいご護の恐れがありますから、わざと論じません。

かの金田の御母堂の持たせらるる鼻のごときは、も
つとも発達せるもつとも偉大なる天下の珍品として
御両君に紹介しておきたいと思ひます」「寒月君は思
わずヒヤヤヤと云う。「しかし物も極度に達します

おそろ

と偉観には相違ございませんが何となく怖しくて近

びりよう

づき難いものであります。あの鼻梁などは素晴らしい

しゅんけん

には違いございませんが、少々峻嶮過ぎるかと思わ

れます。古人のうちにててもソクラチス、ゴールドス

ミスもしくはサツカレーの鼻などは構造の上から云

うと随分申し分はございましょうがその申し分のあ

あいきよう

るところに愛嬌がございます。鼻高きが故に貴から

たつと

ず、奇^きなるがために貴しとはこの故でもございまし

ようか。下世^{げせ}話^わにも鼻より団子と申しますれば美的

価値から申しますとまず迷亭くらいのところが適當

かと存じます」寒月と主人は「フフフフ」と笑い出

す。迷亭自身も愉快そうに笑う。「さてただ今^{いま}まで

弁じましたのは——」「先生、弁じましたは少し講釈

師のようで下品ですから、よしていただきましょう」

ふくしゅう

と寒月君は先日ふくしゅうの復讐をやる。「さようしからは顔

を洗って出直しましょうかな。——ええ——これか

ら鼻と顔の権衡けんこうに一言論いちごん及したいと思います。他に

関係なく単独に鼻論をやりますと、かの御母堂など

はどこへ出しても恥ずかしからぬ鼻——鞍馬山くらまやまで展

覧会があつても恐らく一等賞だろうと思われるくら

いな鼻を所有していらせられますが、悲しいかなあ

れは眼、口、その他の諸先生と何等の相談もなく出来上った鼻であります。ジュリアス・シーザーの鼻は大したものには相違ございません。しかしシーザーの鼻を鋏でちよん切つて、当家の猫の顔へ安置したらどんな者でございましょうか。喩えにも猫の額と云うくらいな地面へ、英雄の鼻柱が突兀として聳えたら、碁盤の上へ奈良の大仏を据え付けたようなも

ので、少しく比例を失するの極、その美的価値を落
す事だろうと思ひます。御母堂の鼻はシーザーのそ
れのごとく、正まさしく英姿颯爽えいしさつそうたる隆起に相違ござい
ません。しかしその周囲をい圍繞する顔面的条件は如
何かな者でありましよう。無論当家の猫のごとく劣等
ではない。しかし癲癇病てんかんやみの御かめのごとく眉まゆの根
に八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるるのは事

実であります。諸君、この顔にしてこの鼻ありと嘆
ぜざるを得んではありませんか」迷亭の言葉が少し
途切れる途端^{とたん}、裏の方で「まだ鼻の話をしている
んだよ。何てえ剛突^{ごうつ}く張^{はり}だろう」と云う声が聞える。

「車屋の神さんだ」と主人が迷亭に教えてやる。迷
亭はまたやり初める。「計らざる裏手にあたつて、

新たに異性の傍聴者のある事を発見したのは演者の

深く名誉と思うところであります。ことに宛転えんてんたる

きょうおん

嬌音きょうおんをもつて、乾燥なる講筵こうえんに一点の艶味えんみを添えら

れたのは実に望外の幸福であります。なるべく通俗

的に引き直して佳人淑女かじんしゆくじよの眷顧けんこに背かざらん事を期

する訳でありますが、これからは少々力学上の問題

に立ち入りますので、勢御婦人方いきおいには御分りにくい

かも知れません、どうか御辛防ごしんぼうを願います」寒月君

は力学と云う語を聞いてまたにやにやする。「私の証拠立てようとするのは、この鼻とこの顔は到底調和しない。ツアイシングの黄金律を失していると云う事なんで、それを厳格に力学上の公式から演繹えんえきして御覧に入れようと云うのであります。まずHを鼻の高さとします。 α は鼻と顔の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さ

い。どうです大抵お分りになりましたか。……」

「分るものか」と主人が云う。「寒月君はどうだい」
「私にもちと分りかねますな」「そりや困ったな。」

苦沙弥くしゃみはとにかく、君は理学士だから分るだろうと

思つたのに。この式が演説の首脳なんだからこれを
略しては今までやった甲斐かいがないのだが——まあ仕
方がない。公式は略して結論だけ話そう」「結論が

あるか」と主人が不思議そうに聞く。「当り前さ結論のない演舌は、デザートのない西洋料理のようなものだ、——いいか両君能く聞き給え、これから結論だぜ。——さて以上の公式にウィルヒョウ、ワイスマン諸家の説を参酌して考えて見ますと、先天的形体の遺伝は無論の事許さねばなりません。またこの形体に追陪ついでして起る心意的状況は、たとい後天

性は遺伝するものにあらずとの有力なる説あるにも
関せず、ある程度までは必然の結果と認めねばなり
ません。従つてかくのごとく身分に不似合なる鼻の
持主の生んだ子には、その鼻にも何か異状がある事
と察せられます。寒月君などは、まだ年が御若い
から金田令嬢の鼻の構造において特別の異状を認め
られんかも知れませんが、かかる遺伝は潜伏期の長い

なんどき

ものでありますから、いつ何時氣候の劇變と共に、

急に發達して御母堂のそれのごとく、

咄嗟とっさの間に膨ぼう

ちょう

脹ちやうするかも知れません、それ故にこの御婚儀は、迷

亭の学理的論証によりますと、今の中御断念になつ

た方が安全かと思われます、これには当家の御主人

ねこまたどの

は無論の事、そこに寝ておらるる猫又殿にも御異存

は無かろうと存じます」主人はようよう起き返つて

「そりや無論さ。あんなものの娘を誰が貰うものか。寒月君もらっちやいかんよ」と大變熱心に主張する。

吾輩もいささか賛成の意を表するためににやーにやーと二声ばかり鳴いて見せる。寒月君は別段騒いだ

様子もなく「先生方の御意向がそうなら、私は断念してもいいんですが、もし当人がそれを気にして病気にでもなったら罪ですから——」「ハハハハハハえん艶

罪さいと云う訳わけだ」主人おおいだけは、大にむきになつて「そん

な馬鹿があるものか、あいつの娘なら碌ろくな者でない

に極きまつてらあ。初めて人のうちへ来ておれをやり込

めに掛つた奴だ。傲慢ごうまんな奴だ」と独りひとでぶんぶんす

る。するとまた垣根のそばで三四人が「ワハハハハ

ハ」と云う声がする。一人が「高慢こうまんちきな唐変木とうへんぼくだ」

と云うと一人が「もっと大きな家うちへ這入はいりてえだろ

う」と云う。また一人が「御氣の毒だが、いくら威

張ったってかげべんけい蔭弁慶だ」と大きな声をする。主人はえん椽

がわ側へ出て負けないような声で「やかましい、何だわ

ざわざそんなへい堀の下へ来て」と怒鳴る。どな。「ワハハハ

ハハサヴェジ・チーだ、サヴェジ・チーだ」と口々

に罵ののしる。主人は大に逆鱗おおい げきりんの体で突然起たってステツ

キを持って、往来へ飛び出す。迷亭は手を拍うって

「面白い、やれやれ」と云う。寒月は羽織の紐を撚ひねつてにやにやする。吾輩は主人のあとを付けて垣の崩れから往来へ出て見たら、真中に主人が手持無沙汰にステッキを突いて立っている。人通りは一人もない、ちよつと狐きつねに抓つままれた体ていである。

例によつて金田邸へ忍び込む。

例によつてとは今更いまさら解釈する必要もない。しばし

ばを自乗じじようしたほどの度合を示す語ことばである。一度やっ

た事は二度やりたいもので、二度試みた事は三度試
みたいのは人間にのみ限らるる好奇心ではない、猫
といえどもこの心理的特権を有してこの世界に生れ

出でたものと認定していただかねばならぬ。三度以上繰返す時始めて習慣なる語を冠せられて、この行為が生活上の必要と進化するのもまた人間と相違はない。何のために、かくまで足繁くあししげ金田邸へ通うのかと不審を起すならその前にちよつと人間に反問したい事がある。なぜ人間は口から煙を吸い込んで鼻から吐き出すのであるか、腹の足たしにも血の道の薬

にもならないものを、恥はづかし氣もなく吐吞とどんして憚はばか

らざる以上は、吾輩が金田に出入しゅつにゆうするのを、あまり

大きな声で咎とがめ立てだてをして貰いたくない。金田邸は

吾輩の煙草たばこである。

忍しのび、込こむと云うと語弊がある、何だか泥棒か間男まおとこ

のようで聞き苦しい。吾輩が金田邸へ行くのは、招

待こそ受けないが、決して鯉かつおの切身きりみをちよろまかし

たり、眼鼻が顔の中心に痙攣けいれん的に密着している狎君ちん

などと密談するためではない。――何探偵？――も

つてのほかの事である。およそ世の中に何が賤いやしい

家業かぎようだと云って探偵と高利貸ほど下等な職はないと

思っている。なるほど寒月君のために猫にあるまじ

きほどの義侠心ぎぎようしんを起して、一度は金田家の動静を余よ

所そながら窺うかがった事はあるが、それはただの一遍で、

その後は決して猫の良心に恥ずるような陋劣ろうれつな振舞

を致した事はない。——そんなら、なぜ忍び込むと

云いうような胡乱うろんな文字を使用した？——さあ、それ

がすこぶる意味のある事だて。元来吾輩の考による

と大空たいくうは万物を覆おおうため大地は万物を載のせるために

出来ている——いかに執拗しつような議論を好む人間でもこ

の事実を否定する訳には行くまい。さてこの大空大たいくうだ

いち

地を製造するために彼等人類はどのくらいの労力を

つい

費やしているかと云うと尺寸せきすんの手伝もしておらぬで

はないか。自分が製造しておらぬものを自分の所有

と極きめる法はなからう。自分の所有と極めても差さし

つか

支えないが他の出入しゅつにゅうを禁ずる理由はあるまい。この

ほうぼう

茫々たる大地を、小賢こざかしくも垣めぐを囲らし棒杭ぼうぐいを立て

て某々所有地などと劃かくし限るのはあたかもかの蒼天そうてん

に繩張なわばりして、この部分は我われの天、あの部分は彼かれの天

と届け出るような者だ。もし土地を切り刻んで一坪

いくらの所有権を売買するなら我等が呼吸する空気を一尺立方に割って切売をしても善い訳である。空

気の切売が出来ず、空の繩張が不当なら地面の私有

も不合理ではないか。如是によぜかん觀によりて、如是によぜほう法を信

じている吾輩はそれだからどこへでも這はい入って行く。

もつとも行きたくない処へは行かぬが、志す方角へは東西南北の差別は入らぬ、平氣な顔をして、のそのそと参る。金田ごときものに遠慮をする訳がない。

——しかし猫の悲しさは力ずくでは到底人間には叶^{とうてい}かな

わない。強勢は権利なりとの格言さえあるこの浮世に存在する以上は、いかにこつちに道理があつても猫の議論は通らない。無理に通そうとすると車屋の

黒のごとく不意に肴屋さかなやの天秤棒てんびんぼうを喰くらう恐れがある。

理はこつちにあるが権力は向うにあると云う場合に、
理を曲げて一も二もなく屈従するか、または権力の
目を掠かすめて我理を貫くかと云えば、吾輩は無論後者
を択えらぶのである。天秤棒は避けざるべからざるが故
に、忍しのばざるべからず。人の邸内へは這入り込んで
差支さしつかえなき故込こまざるを得ず。この故に吾輩は金田

邸へ忍び込むのである。

忍び込む度が重なるにつけ、探偵をする気はない

が自然金田君一家の事情が見たくもない吾輩の眼に映じて覚えたくもない吾輩の脳裏のうりに印象を留とどむるに

至るのはやむを得ない。鼻子夫人が顔を洗うたんび

に念を入れて鼻だけ拭く事や、富子令嬢が阿倍川餅あべかわもち

を無暗むやみに召し上がらるる事や、それから金田君自身

が——金田君は妻君に似合わず鼻の低い男である。

単に鼻のみではない、顔全体が低い。小供の時分喧

嘩をして、がきだいしょう餓鬼大将のために頸筋をくびすじ捉つかまえられて、

うんと精一杯に土堀どべいへお押し付けられた時の顔が四十

年後の今日こんにちまで、因果いんがをなしておりはせぬかと怪あやしま

るくらい平坦な顔である。至極しごく穏かで危険のない

顔には相違ないが、何となく変化に乏しい。いくら

怒つても平かな顔である。——その金田君が鮪まぐろの刺さ

おこ
しみ

身を食つて自分で自分の禿頭はげあたまをぴちやぴちや叩たたく事

や、それから顔が低いばかりでなく背が低いので、

無暗に高い帽子と高い下駄はを穿く事や、それを車夫

がおかしがつて書生に話す事や、書生がなるほど君

の観察は機敏だと感心する事や、——一々数え切れ

ない。

近頃は勝手口の横を庭へ通り抜けて、築山つきやまの陰か

ら向うを見渡して障子が立て切つて物静かであるな

と見極めがつくと、徐々そろそろ上り込む。もし人声が賑かにぎや

であるか、座敷から見透みすかさるる恐れがあると思え

ば池を東へ廻つて雪隠せついんの横から知らぬ間まに椽えんの下へ

出る。悪い事をした覚おぼえはないから何も隠れる事も、

恐れる事もないのだが、そこが人間と云う無法者に

逢つては不運と諦めるより仕方がないので、もし世

くまさかちようはん

間が熊坂長範ばかりになつたらいかなる盛徳の君子

もやはり吾輩のような態度に出ずるであらう。金田

もと

君は堂々たる実業家であるから固より熊坂長範のよ

きづかい

うに五尺三寸を振り廻す気遣はあるまいが、承る処

うけたまわ

によれば人を人と思わぬ病氣があるそうである。人

を人と思わないくらいなら猫を猫とも思うまい。し

て見れば猫たるものはいかなる盛徳の猫でも彼の邸

内で決して油断は出来ぬわけ訳である。しかしその油断

の出来ぬところが吾輩にはちよつと面白いので、吾

輩がかくまでに金田家の門をしゅつにゆう出入するの、ただこ

の危険が冒おかして見たいばかりかも知れぬ。それは追

つて篤とくと考えた上、猫の脳裏のうりを残りなく解剖し得た

時改めて御吹聴ごふいちようかまつ仕ろう。

今日はどんな模様だなど、例の築山の芝生しばふの上に

顎あごを押しつけて前面を見渡すと十五畳の客間を弥生やよい

の春に明け放って、中には金田夫婦と一人の来客と

の御話最中である。おはなさいちゆう生憎あいにく鼻子夫人の鼻がこつちを向

いて池越しに吾輩の額の上を正面から睨にらめ付けてい

る。鼻に睨まれたのは生れて今日が始めてである。

金田君は幸い横顔を向けて客と相對しているから例

の平坦な部分は半分かくれて見えぬが、その代り鼻

ありか

の在所が判然しない。ただ胡麻塩色の口髯くちひげが好い加

ごましお

減な所から乱雑もせいに茂生もせいしているので、あの上に孔あなが

二つあるはずだと結論だけは苦もなく出来る。春風はるかぜ

なめら

もああ云う滑かな顔ばかり吹いていたら定めて楽らくだ

たくま

ろうと、ついでながら想像を逞たくましゆうして見た。御

うち

ようぼう

客さんは三人の中で一番普通な容貌ようぼうを有している。

ただし普通なだけに、これぞと取り立てて紹介する

に足るような雑作ぞうさくは一つもない。普通と云うと結構

なようだが、普通の極平凡きよくの堂に上りのぼ、庸俗の室に

入いったのはむしろ憫然びんぜんの至りだ。かかる無意味な面つら

構がまえを有すべき宿命を帯びて明治の昭代しょうだいに生れて来た

のは誰だろう。例のごとく椽の下まで行つてその談

話を承わらなくては分らぬ。

「……それで妻がわざわざあの男の所まで出掛けて

行つて容子ようすを聞いたんだがね……」と金田君は例の

ごとく横風おうふうな言葉使である。横風ではあるが毫ごうも峻しゅ

嶮んけんなところがない。言語も彼の顔面のごとく平板へいばんぼう彪

だい大である。

「なるほどあの男が水島さんを教えた事がございま
すので——なるほど、よい御思い付きで——なるほ

ど」となるほどずくめのは御客さんである。

「ところが何だか要領を得ないので」

「ええ苦沙弥くしやみじや要領を得ない訳わけで——あの男は私

がいつしよに下宿をしている時分から実に煮にえ切らない——そりや御困りでございましたらう」と御客さんは鼻子夫人の方を向く。

「困るの、困らないのってあなた、私わたししやこの年に

なるまで人のうちへ行つて、あんな不取扱ふとりあつかいを受けた事はありやしません」と鼻子は例によつて鼻嵐を吹く。

「何か無礼な事でも申しましたか、昔むかしから頑固がんこな性分で――何しろ十年一日のごとくりードル専門の教師をしているのでも大体御分りになりましたよう」と御客さんは体ていよく調子を合せている。

「いや御話しにもならんくらいで、妻さいが何か聞くとまるで剣もほろろの挨拶だそうで……」

「それは怪けしからん訳で——一体少し学問をしてい
るととかく慢心が萌きざすもので、その上貧乏をすると
負け惜しみが出ますから——いえ世の中には随分無
法な奴がおりますよ。自分の働きのないのにや気が
付かないで、無暗むやみに財産のあるものに喰くって掛かるな

んてえのが――まるで彼等の財産でも捲まき上げたよ
うな気分ですから驚きますよ、あははは」と御客さ
んは大恐悦ていの体である。

「いや、まことに言語同断で、ああ云うのは必竟世ひつきよう

間見ずの我儘わがままから起るのだから、ちつと懲こらしめの

ためにいじめてやるが好かろうと思つて、少し当つ
てやったよ」

「なるほどそれでは大分答だいぶんえましたろう、全く本人のためにもなる事ですから」と御客さんはいかなる、
、
、
、
うけたまわ
当り方が承らぬ先からすでに金田君に同意している。

「ところが鈴木さん、まあなんて頑固な男なんでしょう。学校へ出てふくちも福地さんや、津木つきさんには口も利きかないんだそうです。恐れ入って黙っているのか

と思つたらこの間は罪もない、宅たくの書生をステツキ
を持つて追つ懸けたつてんです——三十面づらさげて、
よく、まあ、そんな馬鹿な真似が出来たもんじやあ
りませんか、全くやけで少し氣が変になつてるんで
すよ」

「へえどうしてまたそんな乱暴な事をやつたんで：
…」とこれには、さすがの御客さんも少し不審を起

したと見える。

「なあに、ただあの男の前を何とか云つて通つたんだそうです、すると、いきなり、ステッキを持って

はだし
跣足で飛び出して来たんだそうです。よしんば、ち

つとやそつと、何か云つたつて小供じゃありません

か、
髯面ひげづらの大僧おおぞうの癖にしかも教師じゃありませんか」

「さよう教師ですからな」と御客さんが云うと、金田君も「教師だからな」と云う。教師たる以上はいかなる侮辱を受けても木像のようにおとなしくしておらねばならぬとはこの三人の期せずして一致した論点と見える。

「それに、あの迷亭って男はよっぽどな酔興人すいきようじんですね。役にも立たない嘘うそ八百を並べ立てて。私わたししやあ

んな変へん挺ていな人にや初めて逢あいましたよ」

「ああ迷亭ですか、あいかわらず法螺ほらを吹くと見え

ますね。やはり苦沙弥の所で御逢いになつたんです

か。あれに掛かつちやたまりません。あれも昔むかし自炊

の仲間でしたがあんまり人を馬鹿にするものですか

ら能よく喧嘩けんかをしましたよ」

「誰たれだつて怒りまさあね、あんなじや。そりや嘘うそを

つくのも宜^ようござんしようさ、ね、義理が悪^{わる}いと
か、ばつを合せなくっちやあならないとか——そん
な時には誰しも心にならない事を云うもんでさあ。しか
しあの男のは吐^つかなくってすむのに矢鱈^{やたら}に吐^つくんだ
から始末に了^おえないじやありませんか。何が欲^ほしく
って、あんな出鱈^{でたらめ}目を——よくまあ、しらじらしく
云えると思いますよ」

「ごもつともで、全く道楽からくる嘘だから困ります」

「せっかくあなた真面目に聞きに行つた水島の事も

めちやめちや

滅茶滅茶になつてしまいました。私わたしや剛腹ごうはらで忌々しいまいま

くつて——それでも義理は義理でさあ、人のうちへ

物を聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりです

あと

から、後で車夫にビールを一ダース持たせてやった

んです。ところがあなたどうでしょう。こんなものを受取る理由がない、持って帰れって云うんだそうで。いえ御礼だから、どうか御取り下さいって車夫が云ったら——悪^にくいじやありませんか、俺はジヤムは毎日舐^なめるがビールのような苦^{にが}い者は飲んだ事がないって、ふいと奥へ這^{はい}入ってしまったって——言い草に事を欠いて、まあどうでしょう、失礼じ

やありませんか」

「そりや、ひどい」と御客さんも今度は本気に苛ひどい
と感じたらしい。

「そこで今日わざわざ君を招いたのだがね」としばらく途切れて金田君の声が聞える。「そんな馬鹿者は陰から、からかってさえいればすむようなものの、少々それでも困る事があるじやて……」と鮪まぐろの刺身

を食う時のごとく禿頭はげあたまをぴちやぴちや叩たたく。もつと

も吾輩は椽えんの下にいるから實際叩いたか叩かないか

見えようはずがないが、この禿頭の音は近来大分聞だいぶん

馴なれている。比丘尼びくにが木魚の音を聞き分けるごとく、

椽の下からでも音さえたしかであればすぐ禿頭だな

しゅつしよ

と出所を鑑定する事が出来る。「そこでちよつと君

わずら

を煩わづらわしたいと思つてな……」

「私に出来ます事なら何でも御遠慮なくどうか――
今度東京勤務と云う事になりましたのも全くいろいろ
御心配を掛けた結果にほかならん訳でありますか
ら」と御客さんは快よく金田君の依頼を承諾する。

くちよう

この口調で見るとこの御客さんはやはり金田君の世
話になる人と見える。いやだんだん事件が面白く発
展してくるな、今日はあまり天氣が宜いので、来る

気もなしに來たのであるが、こう云う好材料を得よえ

うとは全く思い掛がけなんだ。

御彼岸おひがんにお寺詣てらまいりをし

て偶然ほうじょう方丈ぽたもちで牡丹餅の御馳走になるような者だ。金

田君はどんな事を客人に依頼するかなと、椽の下から耳を澄して聞いている。

「あの苦沙弥と云う変物へんぶつが、どう云う訳か水島に入い

れ智慧ちえをするので、あの金田の娘を貰いつては行かん

などとはのめかすそうだ——なあ鼻子そうだな」

「ほのめかすところじゃないんです。あんな奴の娘を貰う馬鹿がどこの国にあるものか、寒月君決して貰っちゃいかんよって云うんです」

「あんな奴とは何だ失敬な、そんな乱暴な事を云ったのか」

「云ったどころじゃありません、ちゃんと車屋の神

さんが知らせに来てくれたんです」

「鈴木君どうだい、御聞の通りの次第さ、随分厄介
だろうが？」

「困りますね、ほかの事と違って、こう云う事には
他人が妄りみだに容喙ようかいするべきはずの者ではありません
からな。そのくらいな事はいかな苦沙弥でも心得て
いるはずですが。一体どうした訳なんでしよう」

「それでの、君は学生時代から苦沙弥と同宿をしていて、今はとにかく、昔は親密な間柄であつたそうだから御依頼するのだが、君当人に逢つてな、よく利害を論さとして見てくれんか。何か怒おこっているかも知れんが、怒るのは向むこうが悪わるいからで、先方がおとなしくしてさえいれば一身上の便宜も充分計つてやるし、氣に障さわるような事もやめてやる。しかし向が

向ならこつちもこつちと云う氣になるからな——つ
まりそんな我^がを張るのは当人の損だからな」

「ええ全くおつしやる通り愚^ぐな抵抗をするのは本人
の損になるばかりで何の益もない事ですから、善く
申し聞けましょう」

「それから娘はいろいろと申し込もある事だから、
必ず水島にやると極^きめる訳にも行かんが、だんだん

聞いて見ると学問も人物も悪くもないようだから、もし当人が勉強して近い内に博士にでもなったらあ
るいはもらう事が出来るかも知れんくらいはそれと
なくほのめかしても構わん」

「そう云ってやったら当人も励はげみになつて勉強する
事でしよう。宜よろしゅうございます」

「それから、あの妙な事だが——水島にも似合わん

事だと思ふが、あの変物へんぶつの苦沙弥を先生先生と云つ

て苦沙弥の云う事は大抵聞く様子だから困る。なに

そりや何も水島に限る訳では無論ないのだから苦沙

弥が何と云つて邪魔をしようと、わしの方は別に差さし

支つかえもせんが……」

「水島さんが可哀そうですね」と鼻子夫人が口を出す。

「水島と云う人には逢つた事もございませんが、とにかくこちらと御縁組が出来れば生涯しょうがいの幸福で、本人は無論異存はないのでしよう」

「ええ水島さんは貰いたがっているんですが、苦沙弥だの迷亭だのって変り者が何だとか、かんだとか云うものですから」

「そりや、善くない事で、相当の教育のあるものに

も似合わん所作しよさですな。よく私が苦沙弥の所へ参つて談じましょう」

「ああ、どうか、御面倒でも、一つ願いたい。それから実は水島の事も苦沙弥が一番詳くわしいのだがせんだって妻さいが行つた時は今の始末で碌々ろくろく聞く事も出来なかつた訳だから、君から今一応本人の性行学才等をよく聞いて貰いたいて」

「かしこまりました。今日は土曜ですからこれから廻ったら、もう帰っておりますよう。近頃はどこに住んでおりますか知らん」

「ここの前を右へ突き当って、左へ一丁ばかり行くと崩れかかった黒塀のあるうちです」と鼻子が教える。

「それじゃ、つい近所ですな。訳はありません。帰

りにちよつと寄つて見ましよう。なあに、大体分り

ましようひようきつ標札を見れば」

「標札はあるときと、ないときとありますよ。名刺

を御饌粒ごぜんつぶで門へ貼はり付けるのでしよう。雨がふると

剥はがれてしまひましよう。すると御天氣の日あてにまた

貼り付けるのです。だから標札は当あてにやなりません

よ。あんな面倒臭い事をするよりせめて木札きふだでも懸

けたらよさそうなもんですがねえ。ほんとうにどこまでも気の知れない人ですよ」

「どうも驚きますな。しかし崩れた黒塀のうちと聞いたら大概分るでしょう」

「ええあんな汚ないうちは町内に一軒しかないから、すぐ分りますよ。あ、そうそうそれで分らなければ、
好きな事がある。何でも屋根に草が生はえたうちを探し

て行けば間違つてありませんよ」

「よほど特色のある家いえですなアハハハハ」

鈴木君が御光来になる前に帰らないと、少し都合が悪い。談話もこれだけ聞けば大丈夫沢山である。

椽えんの下を伝つわつて雪隠せついんを西へ廻まわつて築山つきやまの陰から往來へ出て、急ぎ足で屋根に草の生えているうちへ歸つて来て何喰くわぬ顔をして座敷の椽へ廻る。

主人は椽側へ白毛布しろげつとを敷いて、腹這はらばいになつて麗うるわか

はるび こうら

な春日に甲羅を干している。太陽の光線は存外公平

なもので屋根にペンペン草の目標のある陋屋ろうおくでも、

金田君の客間のごとく陽気に暖かそうであるが、気

の毒な事には毛布けつとだけが春らしくない。製造元では

白のつもりで織り出して、唐物屋とうぶつやでも白の気で売り

捌さばいたのみならず、主人も白と云う注文で買つて来

たのであるが――何しろ十二三年以前の事だから白

の時代はとくに通り越してただ今は濃灰色なる変色のうかいしよく

の時期に遭遇そうぐうしつつある。この時期を経過して他の

暗黒色に化けるまで毛布の命が続くかどうかは、

疑問である。今でもすでに万遍なく擦り切れて、豎たて

横よこの筋は明かに読まれるくらいだから、毛布と称す

るのはもはやせんじょう僭上の沙汰であって、毛の字は省はぶいて

単にツトとでも申すのが適當である。しかし主人の
考えでは一年持ち、二年持ち、五年持ち十年持った
以上は生涯持たねばならぬと思つてゐるらしい。随

分呑氣のんきな事である。さてその因縁いんねんのある毛布けつとの上へ

前申す通り腹這ぜんになつて何をしてゐるかと思ふと両

手で出張つた顚あぐこを支えて、右手の指の股に巻煙草まきたばこを

挟んでゐる。ただそれだけである。もつとも彼がフ、

ケだらけの頭の裏には宇宙の大真理が火の車のごとく廻転しつつあるかも知れないが、外部から拝見したところでは、そんな事とは夢にも思えない。

煙草の火はだんだん吸口の方へ逼つて、一寸ばかり

燃え尽した灰の棒がぱたりと毛布の上に落つるの

も構わず主人は一生懸命に煙草から立ち上る煙の行

末を見詰めている。その煙りは春風に浮きつ沈みつ、

流れる輪を幾重いくえにも描いて、紫深き細君の洗髪あらいがみの根

本へ吹き寄せつつある。——おや、細君の事を話しておくはずだった。忘れていた。

細君は主人に尻しりを向けて——なに失礼な細君だ？

別に失礼な事はないさ。礼も非礼も相互の解釈次第

でどうでもなる事だ。主人は平気で細君の尻のと

ころへ頬杖ほおづえを突き、細君は平気で主人の顔の先へ荘そう

嚴なる尻を据えたまでの事で無礼も糸瓜へちまもないので

ある。御両人は結婚後一カ年も立たぬ間に礼儀作法ま

などと窮屈な境遇を脱却せられた超然的夫婦である。

——さてかくのごとく主人に尻を向けた細君はどう

云う了見りようけんか、今日の天気に乗じて、尺に余る緑の黒

髪を、麴ふ海苔のりと生卵でゴシゴシ洗濯せられた者と見

えて癖のない奴を、見よがしに肩から背へ振りかけ

て、無言のまま小供の袖なしを熱心に縫っている。

実はその洗髪を乾かすために唐縮緬とうちりめんの布団ふとんと針箱を

椽側えんがわへ出して、恭しく主人に尻うやうやを向けたのである。

あるいは主人の方で尻のある見当けんとうへ顔を持って来た

のかも知れない。そこで先刻御話たばこしをした煙草の煙

りが、豊かに靡なびく黒髪なびの間に流れ流れて、時ならぬ

陽炎かげろうの燃えるところを主人は余念もなく眺めている。

しかしながら煙は固もとより一所いっしょに停とどまるものではない、

その性質として上へ上へと立ち登るのだから主人の

眼もこの煙りの髪毛かみげと縋もつれ合う奇観を落ちなく見よ

うとすれば、是非共眼を動かさなければならぬ。

主人はまず腰の辺から觀察を始めて徐々じょじょと背中を伝つた

つて、肩から頸筋くびすじに掛つたが、それを通り過ぎてよ

うよう脳天に達した時、覚えずあつと驚いた。――

かいろうどうけつ

ちぎ

主人が偕老同穴を契つた夫人の脳天の真中には真丸

まんまる

はげ

な大きな禿がある。しかもその禿が暖かい日光を反

射して、今や時を得顔に輝いている。思わざる辺に

へん

まば

この不思議な大発見をなした時の主人の眼は眩ゆい

どうこう

中に充分の驚きを示して、烈しい光線で瞳孔の開く

のも構わず一心不乱に見つめている。主人がこの禿

のうり

いえ

を見た時、第一彼の脳裏に浮んだのはかの家伝来の

仏壇に幾世となく飾り付けられたる御灯明皿である。

いっけ

彼の一家は真宗で、真宗では仏壇に身分不相応な金

を掛けるのが古例である。主人は幼少の時その家の

きんぱく

倉の中に、薄暗く飾り付けられたる金箔厚き厨子ずしが

しんちゆう

あつて、その厨子の中にはいつでも真鍮しんちゆうの灯明皿が

ぶら下つて、その灯明皿には昼でもぼんやりした灯ひ

がついていた事を記憶している。周囲が暗い中にこ

の灯明皿が比較的明瞭に輝やいていたので小供心にこの灯を何遍となく見た時の印象が細君の禿に喚よび起されて突然飛び出したものであろう。灯明皿は一分立たぬ間まに消えた。この度たびは観音様かんのんさまの鳩の事を思ひ出す。観音様の鳩と細君の禿とは何等の関係もないようであるが、主人の頭では二つの間に密接な聯想がある。同じく小供の時分に浅草へ行くと必ず鳩

ぶんきゆう

に豆を買ってやった。豆は一皿が文久二つで、赤い

かわらけ

はい

かわらけ

おおき

土器へ這入っていた。その土器が、色と云い大さと

云いこの禿によく似ている。

「なるほど似ているな」と主人が、さも感心したらしく云うと「何がです」と細君は見向きもしない。

「何だって、御前の頭にや大きな禿があるぜ。知ってるか」

「ええ」と細君は依然として仕事の手をやめずに答える。別段露見を恐れた様子もない。超然たる模範妻君である。

「嫁にくるときからあるのか、結婚後新たに出来たのか」と主人が聞く。もし嫁にくる前から禿げているなら欺だまされたのであると口へは出さないが心の中うちで思う。

「いつ出来たんだか覚えちゃいませんわ、禿なんざ
どうだって宜^いいじやありませんか」と大^{おお}に悟つたも
のである。

「どうだって宜^いって、自分の頭じやないか」と主
人は少々怒気を帯びている。

「自分の頭だから、どうだって宜^いいんだわ」と云つ
たが、さすが少しは氣になると見えて、右の手を頭

に乗せて、くるくる禿を撫なでて見る。「おや大分大
きくなった事、こんなじや無いと思つていた」と言
つたところをもつて見ると、年に合わして禿があま
り大き過ぎると云う事をようやく自覚したらしい。

「女は鬘まげに結ゆうと、ここが釣れますから誰でも禿げ
るんですわ」と少しく弁護しだす。

「そんな速度で、みんな禿げたら、四十くらいにな

れば、から薬缶やかんばかり出来なければならん。そりや病氣に違いない。伝染するかも知れん、今のうち早く甘木さんに見て貰え」と主人はしきりに自分の頭を撫なで廻して見る。

「そんなに人の事をおっしやるが、あなただつて鼻の孔あなへ白髪しらがが生はえてるじやありませんか。禿が伝染するなら白髪だつて伝染しますわ」と細君少々ぷり

ぷりする。

「鼻の中の白髪は見えんから害はないが、脳天が――ことに若い女の脳天がそんなに禿げちや見苦しい。

かたわ
不具だ」

「不具かたわなら、なぜ御貰いになつたのです。御自分が

好きで貰つておいて不具だなんて……」

「知らなかつたからさ。全く今日きょうまで知らなかつた

んだ。そんなに威張るなら、なぜ嫁に来る時頭を見せなかったんだ」

「馬鹿な事を！　どこの国に頭の試験をして及第したら嫁にくるなんて、ものが在るもんですか」

「禿はまあ我慢もするが、御前は背せいが人並外はずれて低い。はなはだ見苦しくていかん」

「背いは見ればすぐ分るじやありませんか、背せいの低

いのは最初から承知で御貰いになつたんじやありませんか」

「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延びるかと思つたから貰つたのさ」

「廿にもなつて背せいが延びるなんて――あなたもよ

っぽど人を馬鹿になさるのね」と細君は袖そでなしを抛ほう

り出して主人の方に振ねじ向く。返答次第ではその分

にはすまさんと云う権幕けんまくである。

はたち

「廿はたちになつたつて背いが延びてならんと云う法はあ
るまい。嫁に来てから滋養分でも食わしたら、少し

は延びる見込みがあると思つたんだ」と真面目な顔

をして妙な理窟りくつを述べていると門口かどぐちのベルが勢いきおいよく

鳴り立てて頼むと云う大きな声がする。いよいよ鈴

木君がペンペン草を目的めあてに苦沙弥先生くしやみの臥竜窟がりようくつを尋

ねあてたと見える。

細君は喧嘩を後日に譲つて、倉皇そうこう針箱と袖なしを

抱かえて茶の間へ逃げ込む。主人は鼠色の毛布けつとを丸め

て書斎へ投げ込む。やがて下女が持つて来た名刺を

見て、主人はちよつと驚ろいたような顔付であつた

が、こちらへ御通し申してと言ひ棄てて、名刺を握

つたまま後架こうかへ這入はいつた。何のために後架へ急に這

入ったか一向要領を得ん、何のために鈴木藤十郎君すずきとうじゅうろうの名刺を後架まで持つて行つたのかなおさら説明に苦しむ。とにかく迷惑なのは臭い所へ随行を命ぜられた名刺君である。

下女が更紗さらさの座布団とこを床の前へ直して、どうぞこ

れへと引き下がった、跡あとで、鈴木君は一応室内を見

廻めぐわす。床に掛けた花開万国春はなひらばんこくのはるとある木菴もくあんの贗物にせものや、

京製の安青磁やすせいじに活いけた彼岸桜ひがんざくらなどを一々順番に点検

したあとで、ふと下女の勧めた布団の上を見るとい

つの間まにか一疋びきの猫がすまして坐っている。申すま

でもなくそれはかく申す吾輩である。この時鈴木君

の胸のうちにちよつとの間顔色にも出ぬほどの風波

が起つた。この布団は疑いもなく鈴木君のために敷

かれたものである。自分のために敷かれた布団の上

に自分が乗らぬ先から、断りもなく妙な動物が平然

そんきよ

と蹲踞そんきよしている。これが鈴木君の心の平均を破る第

一の条件である。もしこの布団が勧められたまま、

ぬし

主ぬしなくして春風の吹くに任せてあつたなら、鈴木君

けんそん

はわざと謙遜けんそんの意を表して、主人がさあどうぞと云

ひよう

うまで堅い畳の上で我慢していたかも知れない。

しかし早晩自分の所有すべき布団の上に挨拶もなく

乗ったものは誰であろう。人間なら譲る事もあるう
が猫とは怪けしからん。乗り手が猫であると云うのが
一段と不愉快を感じしめる。これが鈴木君の心の平
均を破る第二の条件である。最後にその猫の態度が
もつとも癩しやくに障る。少しは気の毒そうにでもしてい
る事か、乗る権利もない布団の上に、傲然ごうぜんと構えて、
丸い無愛嬌ぶあいぎょうな眼をぱちつかせて、御前は誰だいと云

わぬばかりに鈴木君の顔を見つめている。これが平均を破壊する第三の条件である。これほど不平があるなら、吾輩の頸根くびねつこを捉とらえて引きずり卸したら宜よさそうなものだが、鈴木君はだまって見ている。

堂々たる人間が猫に恐れて手出しをせぬと云う事は有ろうはずがないのに、なぜ早く吾輩を処分して自分の不平を洩もらさないかと云うと、これは全く鈴木

君が一個の人間として自己の体面を維持する自重心の故であると察せらるる。もし腕力に訴えたなら三尺の童子も吾輩を自由に上下し得るであらうが、体面を重んずる点より考えるといかに金田君の股肱ここうたる鈴木藤十郎その人もこの二尺四方の真中に鎮座まします猫大明神を如何いかにともする事が出来ぬのである。いかに人の見ていぬ場所でも、猫と座席争いをした

とあつてはいささか人間の威厳に関する。真面目に

きよくちよく

猫を相手にして曲直を争うのはいかにも大人気ない。

おとなげ

滑稽である。この不名誉を避けるためには多少の不

便は忍ばねばならぬ。しかし忍ばねばならぬだけそ

ぞうお

れだけ猫に対する憎悪の念は増す訳であるから、鈴

にが

木君は時々吾輩の顔を見ては苦い顔をする。吾輩は

鈴木君の不平な顔を拝見するのが面白いから滑稽の

念を抑えておさなるべく何喰わぬ顔をしている。

吾輩と鈴木君の間に、かくのごとき無言劇が行わ

れつつある間に主人は衣紋えもんをつくろつて後架こうかから出

て来て「やあ」と席に着いたが、手に持っていた名

刺の影さえ見えぬところをもつて見ると、鈴木藤十

郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に処せられたものと

見える。名刺こそ飛んだ厄運やくうんに際会したものだと思

う間もなく、主人はこの野郎と吾輩の襟がみを攫^{えり}んでえいとばかりに椽側^{えんがわ}へ擲^たきつけた。

「さあ敷きたまえ。珍らしいな。いつ東京へ出て来た」と主人は旧友に向つて布団を勧める。鈴木君はちよつとこれを裏返した上で、それへ坐る。

「ついまだ忙がしいものだから報知もしなかったが、実はこの間から東京の本社の方へ歸るようになって

ね……」

「それは結構だ、大分^{だいぶん}長く逢わなかつたな。君が田^い

舎^{なか}へ行つてから、始めてじやないか」

「うん、もう十年近くになるね。なにその後時々東

京へは出て来る事もあるんだが、つい用事が多いも

んだから、いつでも失敬するような訳さ。悪^{わる}るく思

つてくれたもうな。会社の方は君の職業とは違つて

随分忙がしいんだから」

「十年立つうちには大分違ふもんだな」と主人は鈴木君を見上げたり見下ろしたりしている。鈴木君は

頭を美麗きれいに分けて、英国仕立のトウイードを着て、

派手な襟飾えりかざりをして、胸に金鎖りさえピカつかせて

いる体裁、どうしても苦沙弥君くしやみの旧友とは思えない。

「うん、こんな物までぶら下げなくちゃ、ならんよ
うになつてね」と鈴木君はしきりに金鎖りを気にし
て見せる。

「そりや本ものかい」と主人は無作法ぶさほうな質問をかける。

「十八金だよ」と鈴木君は笑いながら答えたが「君
も大分年を取つたね。たしか小供があるはずだった

が一人かい」

「いいや」

「二人？」

「いいや」

「まだあるのか、じゃ三人か」

「うん三人ある。この先幾人出来るか分らん」

「相変わらず気楽な事を云ってるぜ。一番大きいのは

いくつになるかね、もうよつぽどだろう」

「うん、いくつか能く知らんが大方六つか、七つか
だろう」

「ハハハ教師は呑氣のんきでいいな。僕も教員にでもなれば善かった」

「なつて見ろ、三日で嫌いやになるから」

「そうかな、何だか上品で、氣樂で、閑暇ひまがあつて、

すきな勉強が出来て、よさそうじゃないか。実業家も悪くもないが我々のうちは駄目だ。実業家にならずつと上にならずちやいかん。下の方になるとやはりつまらん御世辞を振り撒まいたり、好かん猪口ちよこをいただきに出たり随分愚ぐなもんだよ」

「僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さえ取れば何でもする、昔で云えば素町人すちやうにんだからな」と実業

家を前に控ひかえて太平樂を並べる。

「まさか——そうばかりも云えんがね、少しは下品
なところもあるのさ、とにかく金かねと情死しんじゆうをする覚悟
でなければやり通せないから——ところがその金と
云う奴が曲者くせもので、——今もある実業家の所へ行つて
聞いて来たんだが、金を作るにも三角術を使わなく
ちやいけなないと云うのさ——義理をかく、人情をか

く、恥をかく、これで三角になるそうだ面白いじゃないかアハハハハ」

「誰だそんな馬鹿は」

「馬鹿じゃない、なかなか利口な男なんだよ、実業界でちよつと有名だがね、君知らんかしら、ついこの先の横丁にいるんだが」

「金田か？ 何^なんだあんな奴」

「大變怒つてゐるね。なあに、そりや、ほんの冗談だじようだん

ろうがね、そのくらいにせんと金は溜らんと云う喩たとえ

さ。君のようにそう真面目に解釈しちや困る」

「三角術は冗談でもいいが、あすこの女房の鼻はなんだ。君行つたんなら見て来たろう、あの鼻を」

「細君か、細君はなかなかさばけた人だ」

「鼻だよ、大きな鼻の事を云つてゐるんだ。せんだつ

て僕はあの鼻について俳体詩はいたいしを作ったがね」

「何だい俳体詩と云うのは」

「俳体詩を知らないのか、君も随分時勢に暗いな」

「ああ僕のように忙がしいと文学などは到底駄目どうていさ。

それに以前からあまり数奇すきでない方だから」

「君シャーレマンの鼻の恰好かつこうを知ってるか」

「アハハハハ随分気楽だな。知らんよ」

「エルリントンは部下のものから鼻々と異名いみようをつけられていた。君知ってるか」

「鼻の事ばかり気にして、どうしたんだい。好いじやないか鼻なんか丸くても尖とんがってても」

「決してそうでない。君パスカルの事を知ってるか」

「また知ってるかか、まるで試験を受けに来たよう

なものだ。パスカルがどうしたんだい」

「パスカルがこんな事を云っている」

「どんな事を」

「もしクレオパトラの鼻が少し短かかったならば世界の表面に大変化を来したろうときた」

「なるほど」

「それだから君のようにそう無雑作むぞうさに鼻を馬鹿にし

てはいかん」

「まあいいさ、これから大事にするから。そりやそうとして、今日来たのは、少し君に用事があつて来たんだがね——あの元君もとの教えたとか云う、水島——ええ水島ええちよつと思ひ出せない。——そら君の所へ始終来ると云うじゃないか」

「寒かん月げつか」

「そうそう寒月寒月。あの人の事についてちよつと聞きたい事があつて来たんだがね」

「結婚事件じゃないか」

「まあ多少それに類似の事さ。今日金田へ行つたら……」

「この間鼻が自分で来た」

「そうか。そうだって、細君もそう云っていたよ。」

苦沙弥さんに、よく伺おうと思つて上つたら、生憎あいにく

迷亭が来ていて茶々を入れて何が何だか分らなくしてしまつたつて」

「あんな鼻をつけて来るから悪るいや」

「いえ君の事を云うんじゃないよ。あの迷亭君がおつたもんだから、そう立ち入った事を聞く訳にも行かなかつたので残念だつたから、もう一遍僕に行つ

てよく聞いて来てくれないかって頼まれたものだからね。僕も今までこんな世話はした事はないが、もし当人同士が嫌いやでないなら中へ立まつて纏まとめるのも、決して悪い事はないからね——それでやって来たのさ」

「御苦労様」と主人は冷淡に答えたが、腹の内では当人同士と云う語ことばを聞いて、どう云う訳か分らんが、

ちよつと心を動かしたのである。蒸^むし熱い夏の夜に

いちる 一縷^{れいふう}の冷風が袖口を潜^{そでぐち}ったような気分になる。

元来

この主人はぶっ切ら棒の、頑固^{がんこつや}光沢消しを旨^{むね}として

製造された男であるが、さればと云つて冷酷不人情

な文明の産物とは自^{おのず}からその撰^{せん}を異^{こと}にしている。彼

が何^{なん}ぞと云うと、むかつ腹をたててぶんぶんするの

でも這裏^{しやり}の消息は会得^{えとく}できる。先日鼻と喧嘩をした

のは鼻が気に食わぬからで鼻の娘には何の罪もない話しである。実業家は嫌いだから、実業家の片割れなる金田某も嫌きらいに相違ないがこれも娘その人とは没交渉の沙汰と云わねばならぬ。娘には恩も恨うらみもなくて、寒月は自分が実の弟よりも愛している門下生である。もし鈴木君の云うごとく、当人同志が好いた仲なら、間接にもこれを妨害するのは君子のなす

べき所作しよさでない。――苦沙弥先生はこれでも自分を君子と思っている。――もし当人同志が好いているなら――しかしそれが問題である。この事件に対し
て自己の態度を改めるには、まずその真相から確か
なければならん。

「君その娘は寒月の所へ来たがってるのか。金田や
鼻はどうでも構わんが、娘自身の意向はどうなんだ」

「そりや、その――何だね――何でも――え、来た
がってるんだろうじゃないか」鈴木君の挨拶は少々

曖昧あいまいである。実は寒月君の事だけ聞いて復命さえす

ればいいつもりで、御嬢さんの意向までは確かめて

来なかつたのである。従つて円転滑脱かつだつの鈴木君もち

よつと狼狽ろうばいの気味に見える。

「だ、ろ、う、た判然しない言葉だ」と主人は何事によらず、正面から、どやし付けないと気がすまない。

「いや、これやちよつと僕の云いようがわるかった。

令嬢の方でもたしかに意いがあるんだよ。いえ全くだ

よ——え？——細君が僕にそう云ったよ。何でも時

々は寒月君の悪口を云う事もあるそうだがね」

「あの娘がか」

「ああ」

「怪^けしからん奴だ、悪口を云うなんて。第一それじや寒月に意^いがないんじゃないか」

「そこがさ、世の中は妙なもので、自分の好いている人の悪口などは殊^{こと}更^や云^いつて見る事もあるからね」

「そんな愚^ぐな奴がどこの国にいるものか」と主人は

かよう
斯様な人情の機微に立ち入った事を云われても頓^{とん}と

感じがない。

「その愚な奴が随分世の中にやあるから仕方がない。

現に金田の妻君もそう解釈しているのさ。戸惑いとまどを

へちま

した糸瓜へちまのようだなんて、時々寒月さんの悪口を云

いますから、よつぽど心の中うちでは思つてるに相違あ

りませんと」

主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり思い

掛けないものだから、眼を丸くして、返答もせず、

鈴木君の顔を、だいどうえきしや大道易者のようにじつ昵と見つめている。

鈴木君はこいつ、この様子では、ことによるとやり損なうなとかん疇づいたと見えて、主人にも判断の出来そうな方面へと話頭を移す。

「君考えても分るじゃないか、あれだけの財産があつてあれだけの器量なら、どこへだつて相応の家うちへ

やれるだろうじやないか。寒月だつてえらいかも知れんが身分から云や——いや身分と云つちや失礼かも知れない。——財産と云う点から云や、まあ、だれが見たつて釣り合わんのだからね。それを僕がわざわざ出張するくらい両親が気を揉^もんでるのは本人が寒月君に意があるからの事じやあないか」と鈴木君はなかなかうまい理窟をつけて説明を与える。今

度は主人にも納得が出来たらしいのでようやく安心したが、こんなところにまごまごしているとまた唸とつ喊かんを喰う危険があるから、早く話しの歩を進めて、

一刻も早く使命を完まっうする方が万全の策と心付いた。

「それでね。今云う通りの訳であるから、先方で云うには何も金銭や財産はいらんからその代り当人に

附属した資格が欲しい——資格と云うと、まあ肩書だね、——博士になつたらやつてもいいなんて威張つてゐる次第じゃない——誤解しちゃいかん。せんだつて細君の来た時は迷亭君がいて妙な事ばかり云うものだから——いえ君が悪いのじゃない。細君も君の事を御世辞のない正直かたな方だと賞ほめていたよ。全く迷亭君がわるかつたんだろう。——それでさ本

人が博士にでもなつてくれれば先方でも世間へ対し

て肩身が広い、面目めんぼくがあると云うんだがね、どうだ

ろう、近々きんきんの内水島君は博士論文でも呈出して、博

士の学位を受けるような運びには行くまいか。なあ

に――金田だけなら博士も学士もいらんのさ、ただ

世間と云う者があるとな、そう手軽にも行かんから

な」

こう云われて見ると、先方で博士を請求するのも、あながち無理でもないように思われて来る。無理ではないように思われて来れば、鈴木君の依頼通りにしてやりたくなる。主人を活^いかすのも殺すのも鈴木君の意のままである。なるほど主人は単純で正直な男だ。

「それじゃ、今度寒月が来たら、博士論文をかくよ

うに僕から勧めて見よう。しかし当人が金田の娘を貰うつもりかどうだか、それからまず問い正して見なくちやいかんからな」

「問い正すなんて、君そんな角張かどばった事をして物が纏まとまるものじゃない。やっぱり普通の談話の際にそれとなく気を引いて見るのが一番近道だよ」

「気を引いて見る？」

「うん、気を引くと云うと語弊があるかも知れん。

——なに気を引かんでもね。話しをしていると自然分るもんだよ」

「君にや分るかも知れんが、僕にや判然と聞かん事は分らん」

「分らなけりや、まあ好いさ。しかし迷亭君見たように余計な茶々を入れて打ち壊^{ぶこ}わすのは善くないと

思う。仮令たとひ勧めないまでも、こんな事は本人の随意

にすべきはずのものだからね。今度寒月君が来たら
なるべくどうか邪魔をしないようにしてくれ給え。

——いえ君の事じゃない、あの迷亭君の事さ。あの
男の口にかかると到底助かりっこないんだから」と

主人の代理に迷亭の悪口をきいていると、噂うわさをすれ

ば陰の喩たとえに洩れず迷亭先生例のごとく勝手口から飄ひよ

然と春風に乗じて舞い込んで来る。
うぜんしゅんぷう

「いやー珍客だね。僕のような狎客こうかくになると苦沙弥くしゃみ

はとかく粗略にしたがつていかん。何でも苦沙弥の

うちへは十年に一遍くらいくるに限る。この菓子

いつもより上等じゃないか」と藤村ふじむらの羊羹ようかんを無雑作むぞうさ

に頼張ほおばる。鈴木君はもじもじしている。主人はにや

にやしている。迷亭は口をもがもがさしている。吾

輩はこの瞬時の光景を椽側えんがわから拝見して無言劇と云

うものは優に成立し得ると思つた。禅家ぜんけで無言の問

答をやるのが以心伝心であるなら、この無言の芝居も明かに以心伝心の幕である。すこぶる短かいけれどもすこぶる鋭どい幕である。

「君は一生旅鳥たびがらすかと思つてたら、いつの間まにか舞い

戻つたね。ながいき長生はしたいもんだな。どんな僥倖ぎやうこうに廻めぐ

り合わんとも限らんからね」と迷亭は鈴木君に対しても主人に対するごとく毫ごうも遠慮と云う事を知らぬ。いかに自炊の仲間でも十年も逢わなければ、何となく気のおけるものだが迷亭君に限って、そんな素振そぶりも見えぬのは、えらいのだから馬鹿なのかちよつと見当がつかぬ。

「可哀そうに、そんなに馬鹿にしたものでもない」

と鈴木君は当らず障さわらずの返事はしたが、何となく
落ちつきかねて、例の金鎖を神経的にいじっている。

「君電気鉄道へ乗ったか」と主人は突然鈴木君に對
して奇問を發する。

「今日は諸君からひやかされに來たようなものだ。

なんぼ田舎者だつて——これでも街鉄がいてつを六十株持つ

てるよ」

「そりや馬鹿に出来ないな。僕は八百八十八株半持

っていたが、惜しい事に大方虫が喰おおかたつてしまつて、

今じや半株ばかりしかない。もう少し早く君が東京へ出てくれば、虫の喰わないところを十株ばかりやるところだったが惜しい事をした」

「相変らず口が悪るい。しかし冗談は冗談として、

ああ云う株は持つてて損はないよ、ねんねん年々高くなるば

かりだから」

「そうだたとい仮令半株だつて千年も持つてるうちにや倉

が三つくらい建つからな。君も僕もその辺にぬかり

はない当世の才子だが、そこへ行くと苦沙弥などは

憐れなものだ。株と云えば大根の兄弟分くらいに考

えているんだから」とまたようかん羊羹をつまんで主人の方

を見ると、主人も迷亭の食くい気けが伝染して自おのずから菓子皿の方へ手が出る。世の中では万事積極的のものが人から真似らるる権利を有している。

「株などはどうでも構わんが、僕は曾呂崎そろさきに一度で

いいから電車へ乗らしてやりたかった」と主人は喰い欠けた羊羹の齒痕はあとを撫然ぶぜんとして眺める。

「曾呂崎が電車へ乗ったら、乗るたんびに品川まで

行つてしまふは、それよりやつぱり天然居士てんねんこじで沢庵たくあん

石いしへ彫ほり付けられてる方が無事でいい」

「曾呂崎と云えば死んだそうだな。気の毒だねえ、

いい頭の男だったが惜しい事をした」と鈴木君が云
うと、迷亭は直ただちに引き受けて

「頭は善かったが、飯を焚たく事は一番下手だったぜ。

曾呂崎の当番の時には、僕あいつでも外出をして蕎そ

麦ばで凌しのいでいた」

「ほんとに曾呂崎の焚いた飯は焦こげくさくって心しんが

あつて僕も弱った。御負けに御菜おかずに必ず豆腐をなま

で食わせるんだから、冷たくて食われやせん」と鈴

木君も十年前の不平を記憶の底から喚よび起す。

「苦沙弥はあの時代から曾呂崎の親友で毎晩いっし

よに汁粉しるこを食いに出了たが、その崇たたりで今じや慢性胃

弱になつて苦しんでゐるんだ。実を云うと苦沙弥の方が汁粉の数を余計食つてゐるから曾呂崎より先へ死んで宜い訳なんだ」

「そんな論理がどこの国にあるものか。俺の汁粉より君は運動と号して、毎晩竹刀しな刀いを持って裏の卵塔婆らんとうばへ出て、石塔を叩たたいてるところを坊主に見つかつて

剣突けんつくを食つたじゃないか」と主人も負けぬ氣になつ

て迷亭の旧惡を曝く。あば

「アハハハそうそう坊主が仏様の頭を叩いては安眠の妨害になるからよしてくれって言つたつけ。しかし僕のは竹刀だが、この鈴木將軍のは手暴てあらだぜ。石塔と相撲をとつて大小三個ばかり転がしてしまったんだから」

「あの時の坊主の怒り方は実に烈しかった。是非元

のように起せと云うから人足を傭やとうまで待ってくれ
と云つたら人足じやいかん懺悔ざんげの意を表するため
あなたが自身で起さなくては仏の意に背そむくと云うん
だからね」

「その時の君の風采ふうさいはなかつたぜ、金巾かなきんのしやつに
えっちゅうふんどし
越中禪で雨上りの水溜りの中でうんうん唸うなって……」

「それを君がすました顔で写生するんだから苛い。ひど

僕はあまり腹を立てた事のない男だが、あの時ばかりは失敬だと心しんから思ったよ。あの時の君の言草をまだ覚えてゐるが君は知ってるか」

「十年前の言草なんか誰が覚えてゐるものか、しか

しあの石塔に帰泉院殿黄鶴大居士安永五年辰正月ときせんいんでんこうかくだいこじ
たつ

彫ほつてあつただけはいまだに記憶している。あの

石塔は古雅に出来ていたよ。引き越す時に盗んで行きたかったくらいだ。実に美学上の原理に叶^{かな}つて、ゴシック趣味な石塔だった」と迷亭はまた好い加減な美学を振り廻す。

「そりやいいが、君の言草がさ。こうだぜ——吾輩は美学を専攻するつもりだから天地間^{てんちかん}の面白い出来事はなるべく写生しておいて将来の参考に供さなけ

ればならん、気の毒だの、可哀相だのかわいそうと云う私情は

学問に忠実なる吾輩ごときものの口にすべきところ
でないと平気で云うのだらう。僕もあんまりな不人
情な男だと思ったから泥だらけの手で君の写生帖を
引き裂いてしまった」

「僕の有望な画才が頓挫とんざして一向振いっこうわなくなつたの
も全くあの時からだ。君に機鋒きほうを折られたのだね。

僕は君に恨うらみがある」

「馬鹿にしちやいけない。こっちが恨めしいくらいだ」

「迷亭はあの時分から法螺吹ほらふきだったな」と主人は羊よう羹かんを食おいわ了わって再び二人の話の中に割り込んで来る。

「約束なんか履行りこうした事がない。それで詰問を受け

ると決して詫^わびた事がない何とか蚊^かとか云う。あの

さるすべり

寺の境内に百日紅が咲いていた時分、この百日紅が

散るまでに美学原論と云う著述をすると云うから、

駄目だ、到底出来る氣遣^{きづかい}はないと云ったのさ。する

と迷亭の答えに僕はこう見えても見掛けに寄らぬ意

志の強い男である、そんなに疑うなら賭^{かけ}をしようと

云うから僕は真面目に受けて何でも神田の西洋料理

を奢り^{おご}つこかなにかに極^きめた。きっと書物なんか書

く気遣はないと思つたから賭をしたようなものの内

心は少々恐ろしかつた。僕に西洋料理なんか奢る金

はないんだからな。ところが先生一向稿^{いっこう}を起す景色^{けしき}

がない。七日^{なぬか}立つても二十日^{はつか}立つても一枚も書かな

い。いよいよ百日紅が散つて一輪の花もなくなつて

も当人平気でいるから、いよいよ西洋料理に有りつ

いたなと思つて契約履行を逼せまると迷亭すまして取り合わない」

「また何とか理窟りくつをつけたのかね」と鈴木君が相の手を入れる。

「うん、実にずうずうしい男だ。吾輩はほかに能はないが意志だけは決して君方に負けはせんと剛情を張るのさ」

「一枚も書かんのにか」と今度は迷亭君自身が質問をする。

「無論さ、その時君はこう云ったぜ。吾輩は意志の一点においてはあえて何人にも一歩も譲らん。しか
なんぴとし残念な事には記憶が人一倍無い。美学原論を著わ
そうとする意志は充分あったのだがその意志を君に
発表した翌日から忘れてしまった。それだから百日

紅の散るまでに著書が出来なかったのは記憶の罪で意志の罪ではない。意志の罪でない以上は西洋料理などを奢る理由がないと威張っているのさ」

「なるほど迷亭君一流の特色を發揮して面白い」と鈴木君はなぜだか面白がっている。迷亭のおらぬ時の語気とはよほど違っている。これが利口な人の特色かも知れない。

「何が面白いものか」と主人は今でも怒おこっている様子である。

「それは御気の毒様、それだからその埋うめ合あわせをする

ために孔雀くじやくの舌なんかを金と太鼓で探しているじゃ

ないか。まあそう怒おこらずに待っているさ。しかし著

書と云えば君、今日は一大珍報を齎もたらして来たんだ

よ」

「君はくるたびに珍報を齎らす男だから油断が出来
ん」

「ところが今日の珍報は真の珍報さ。正札付一厘も
引けなしの珍報さ。君寒月が博士論文の稿を起した
のを知っているか。寒月はある妙に見識張った男
だから博士論文なんて無趣味な労力はやるまいと思
ったら、あれでやっぱり色気があるからおかしいじ

やないか。君あの鼻に是非通知してやるがいい、この頃はどんぐりはかせ団栗博士の夢でも見ているかも知れない」

鈴木君は寒月の名を聞いて、話してはいけぬ話してはいけぬとあごこ顫と眼で主人に合図する。主人には一いつ向意味が通じない。さつき鈴木君に逢つて説法を受

けた時は金田の娘の事ばかりが気の毒になつたが、今迷亭から鼻々と云われるとまた先日喧嘩をした事

を思い出す。思い出すと滑稽でもあり、また少々は

悪^{にく}らしくもなる。しかし寒月が博士論文を草しかけ

たのは何よりの御見^{おみ}やげで、こればかりは迷亭先生

自賛のごとくまずまず近來の珍報である。啻^{ただ}に珍報

のみならず、嬉しい快よい珍報である。金田の娘を

貰おうが貰うまいがそんな事はまずどうでもよい。

とにかく寒月の博士になるのは結構である。自分の

ように出来損いの木像は仏師屋の隅で虫が喰うまで
しらき
白木のまま燻くすぶつていても遺憾いかんはないが、これは旨うまく
仕上がったと思う彫刻には一日も早く箔はくを塗つてや
りたい。

「本当に論文を書きかけたのか」と鈴木君の合図は
そつち除のけにして、熱心に聞く。

「よく人の云う事を疑ぐる男だ。——もつとも問題

は団栗だか首縊りの力学だか確と分らんがね。とにかく寒月の事だから鼻の恐縮するようなものに違くない」

さつきから迷亭が鼻々と無遠慮に云うのを聞きたんびに鈴木君は不安の様子をする。迷亭は少しも気が付かないから平気なものである。

「その後鼻についてまた研究をしたが、この頃トリ

ストラム・シャンデーの中に鼻論はなろんがあるのを発見し

た。金田の鼻などもスターンに見せたら善い材料になつたろうに残念な事だ。鼻名びめいを千載せんざいに垂れる資格

は充分ありながら、あのままで朽くち果つるとは不憫ふびん

千万せんばんだ。今度ここへ来たら美学上の参考のために写

生してやろう」と相変らず口から出任せでまかに喋舌しゃべり立

てる。

「しかしあの娘は寒月の所へ来たいのだそうだ」と
主人が今鈴木君から聞いた通りを述べると、鈴木君
はこれは迷惑だと云う顔付をしてしきりに主人に目
くばせをするが、主人は不導体のごとく一向電氣に
感染しない。

「ちよつと乙おつだな、あんな者の子でも恋をすところ
ろが、しかし大した恋じやなかろう、大方鼻恋はなごいくら

いなところだぜ」

「鼻恋でも寒月が貰えばいいが」

「貰えばいいがって、君は先日大反対だったじやないか。今日はいやに軟化しているぜ」

「軟化はせん、僕は決して軟化はせんしかし……」

「しかしどう、かしたんだろう。ねえ鈴木、君も実業

家の末席を汚すばっせき一人だから参考のために言つて聞かけが

せるがね。あの金田某なる者さ。あの某なるものの

息女などを天下の秀才水島寒月の令夫人と崇め奉る

あが

のは、少々提灯と釣鐘と云う次第で、我々朋友たる

ちようちん

ほうゆう

者が冷々黙過する訳に行かん事だと思ふんだが、た

れいれい

とい実業家の君でもこれには異存はあるまい」

「相変らず元気がいいね。結構だ。君は十年前と容

よ

子が少しも変っていないからえらい」と鈴木君は柳

うす

に受けて、胡麻化ごまかそうとする。

「えらいと褒ほめるなら、もう少し博学なところを御

目にかけるがね。昔むかしの希臘人ギリシヤじんは非常に体育を重ん

じたものであらゆる競技に貴重なる懸賞を出して百

方奨励の策を講じたものだ。しかるに不思議な事に

は学者の智識ちしきに対してのみは何等の褒美ほうびも与えたと

云う記録がなかったもので、今日こんにちまで実は大おおに怪しん

でいたところさ」

「なるほど少し妙だね」と鈴木君はどこまでも調子を合せる。

「しかるについ両三日前に至つて、美学研究の際ふとその理由を発見したので多年の疑団ぎだんは一度に氷解。

しつづ

漆桶を抜くがごとく痛快なる悟りを得て歡天喜地かんでんきちの

至境に達したのさ」

あまり迷亭の言葉が仰山ぎょうさんなので、さすが御上手者おじょうずもの

の鈴木君も、こりや手に合わないと言う顔付をする。

主人はまた始まったなと云わぬばかりに、象牙ぞうげの箸はし

で菓子皿の縁ふちをかんかん叩いて俯うつつ向むいている。迷

亭だけは得意で弁じつつける。

「そこでこの矛盾なる現象の説明を明記して、暗黒

の淵ふちから吾人の疑を千載せんざいの下もとに救い出してくれた者

は誰だと思ふ。學問あつて以來の學者と稱せらるる

か
ギリシヤ

彼の希臘の哲人、逍遙派しょうようはの元祖アリストートルその

人である。彼の説明に曰くさ——おい菓子皿などを

いわ

叩かんで謹聴していなくちやいかん。——彼等希臘

人が競技において得るところの賞与は彼等が演ずる

技芸その物より貴重なものである。それ故に褒美ほうびに

もなり、奨励の具ともなる。しかし智識その物に至

つてはどうである。もし智識に対する報酬として何物をか与えんとするならば智識以上の価値あるものを与えざるべからず。しかし智識以上の珍宝が世の中にあろうか。無論あるはずがない。下手なものをやれば智識の威厳を損する訳になるばかりだ。彼等は智識に対して千両箱をオリムパスの山ほど積み、クリーサスの富を傾け^{かたむ}尽^{つく}しても相当の報酬を与えん

としたのであるが、いかに考えても到底釣^とり合^あうは

ずがないと云う事を観破^{かんぱ}して、それより以来と云う

ものは奇麗さっぱり何にもやらない事にしてしまつ

た。黄白青銭^{こうはくせいせん}が智識^{ひつてき}の匹敵でない事はこれで十分理

解出来るだろう。さてこの原理を服膺^{ふくよう}した上で時事

問題に臨^{のぞ}んで見るがいい。金田某は何だい紙幣^{さつ}に眼

鼻をつけただけの人間じゃないか、奇警なる語をも

つて形容するならば彼は一個の活動紙幣かつどうしへいに過ぎんの

である。活動紙幣の娘なら活動切手くらいなところ

だろう。ひるがえ翻ひるがえつて寒月君は如何いかにと見ればどうだ。辱かたじけ

なくも学問最高の府を第一位に卒業して毫ごうも倦怠けんたいの

念なく長州征伐時代の羽織の紐をぶら下げて、日夜

どんぐり

団栗どんぐりのスタビリチーを研究し、それでもなお満足す

きんきん

る様子もなく、近々きんきんの中ロード・ケルヴィンを圧倒

するほどな大論文を発表しようとしつつあるではな

いか。たまたま吾妻橋をあずまばし通り掛つて身投げの芸を仕

損じた事はあるが、これも熱誠なる青年に有りがち

の発作的所為でほっさてきしよい毫も彼が智識の問屋たるにとんや煩いわずらを及

ぼすほどの出来事ではない。迷亭一流の喩たとえをもつて

寒月君を評すれば彼は活動図書館である。智識をも

つて捏こね上げたる二十八珊サンチの弾丸である。この弾丸

が一たび時機を得て学界に爆発するなら、——もし爆発して見給え——爆発するだろう——」迷亭はここに至って迷亭一流と自称する形容詞が思うように出て来ないので俗に云う竜頭蛇尾りゅうとうだびの感に多少ひるんで見えたがたちまち「活動切手などは何千万枚あつたつて粉こな微塵みじんになつてしまふさ。それだから寒月には、あんな釣り合わない女性にょしょうは駄目だ。僕が不承

知だ、百獣の中うちでもつとも聡明なる大象と、もつと

たんらん

も貪婪なる小豚と結婚するようなものだ。そうだろ

う苦沙弥君」と云つて退のけると、主人はまた黙つて

菓子皿を叩き出す。鈴木君は少し凹へこんだ気味で

「そんな事も無かろう」と術じゆつなげに答える。さつき

まで迷亭の悪口を随分ついた揚句ここで無暗むやみな事を

云うと、主人のような無法者はどんな事を素すつ破ぱ抜ぬ

くか知れない。なるべくここは好^い加減に迷亭の鋭鋒をあしらって無事に切り抜けるのが上分別なのである。鈴木君は利口者である。いらざる抵抗は避けらるるだけ避けるのが当世で、無要の口論は封建時代の遺物と心得ている。人生の目的は口舌^{こうぜつ}ではない実行にある。自己の思い通りに着々事件が進捗^{しんちよく}すれば、それで人生の目的は達せられたのである。苦勞と心

配と争論とがなくて事件が進捗すれば人生の目的は

ごくらくりゆう

極楽流に達せられるのである。鈴木君は卒業後この

極楽主義によつて成功し、この極楽主義によつて金

時計をぶら下げ、この極楽主義で金田夫婦の依頼を

うけ、同じくこの極楽主義でまんまと首尾よく苦沙

とうがい

弥君を説き落して当該事件が十中八九まで成就した

じようじゆ

ところへ、迷亭なる常規をもつて律すべからざる、

普通の人間以外の心理作用を有するかと怪まるる風ふう

らいぼう

来坊が飛び込んで来たので少々その突然なるに面喰めんくら

つているところである。極楽主義を発明したものは

明治の紳士で、極楽主義を実行するものは鈴木藤十郎君で、今この極楽主義で困却しつつあるものもまた鈴木藤十郎君である。

「君は何にも知らんからそうでもなからうなどと澄

し返って、例になく言葉寡ことばずくなに上品に控ひかえ込むが、

せんだってあの鼻の主が来た時の容ようす子を見たらいか

に実業家鼯びいき負の尊公でも辟易へきえきするに極きまってるよ、ね

え苦沙弥君、君大おおに奮闘したじゃないか」

「それでも君より僕の方が評判がいいそうだ」

「アハハハなかなか自信が強い男だ。それでなくて

はサヴェジ・チーなんて生徒や教師にからかわれて

すまして学校へ出ちやいられん訳だ。僕も意志は決して人に劣らんつもりだが、そんなに凶太くは出来ん敬服の至りだ」

「生徒や教師が少々愚図愚図言ったって何が恐ろしいものか、サントブーヴは古今独歩の評論家であるが巴^{パリ}里大学で講義をした時は非常に不評判で、彼は

学生の攻撃に応ずるため外出の際必ず^{あいくち}匕首^{そで}を袖の下

に持つて防禦ぼうぎよの具となした事がある。ブルヌチエル
がやはり巴里の大学でゾラの小説を攻撃した時は：
：

「だって君や大学の教師でも何でもないじゃないか。
高がリードルの先生でそんな大家を例に引くのは雑ざ
魚こが鯨くじらをもつて自みづら喩たとえるようなもんだ、そんな事
を云うとなおからかわれるぜ」

「黙っている。サントブーヴだって俺だって同じくらいな学者だ」

「大変な見識だな。しかし懐剣をもって歩行^{ある}くだけ

はあぶないから真似^{まね}ない方がいいよ。大学の教師が

懐剣ならリードルの教師はまあ小刀^{こがたな}くらいなところ

だな。しかしそれにしても刃物は剣呑^{けんのん}だから仲見世^{なかみせ}

へ行^しっておもちゃの空気銃を買^しって来て背負^{しょ}ってあ

るくがよかろう。愛嬌あいぎょうがあつていい。ねえ鈴木君」

と云うと鈴木君はようやく話が金田事件を離れたのでほっと一息つきながら

「相変わらず無邪気で愉快だ。十年振りで始めて君等に逢ったんで何だか窮屈くわくな路次ろじから広い野原へ出たような気持がする。どうも我々仲間の談話は少しも油断がなくなくてね。何を云うにも気をおかなくち

やならんから心配で窮屈で実に苦しいよ。話は罪がないのがいいね。そして昔しの書生時代の友達と話すのが一番遠慮がなくっていい。ああ今日は凶はからず迷亭君に遇あつて愉快だった。僕はちと用事があるからこれで失敬する」と鈴木君が立ち懸かけると、迷亭も「僕もいこう、僕はこれから日本橋の演芸矯風会えんげいきょうふうかいに行かなくっちゃならんから、そこまでいっしょに

行こう」「そりやちようどいい久し振りでいっしょに散歩しよう」と両君は手を携たずさえて帰る。

五

二十四時間の出来事を洩もれなく書いて、洩れなく読むには少なくとも二十四時間かかるだろう、いくら

写生文を鼓吹する吾輩でもこれは到底猫の企て及ぶ

べからざる芸当と自白せざるを得ない。従っていか

に吾輩の主人が、二六時中精細なる描写に価する奇

言奇行を弄するにも関らず逐一これを読者に報知す

るの能力と根氣のないのははなはだ遺憾である。遺

憾ではあるがやむを得ない。休養は猫といえども必

要である。鈴木君と迷亭君の歸つたあとは木枯しの

はたと吹き息やんで、しんしんと降る雪の夜のごとく

静かになつた。主人は例のごとく書斎へ引き籠こもる。

小供は六畳の間まへ枕をならべて寝る。一間半の襖ふすまを

隔へて南向の室へやには細君が数え年三つになる、めん

子さんと添乳そえちして横になる。花曇りに暮れを急いだ

日は疾とく落ちて、表を通る駒下駄の音さえ手に取る

ように茶の間へ響く。隣町となりちやうの下宿で明笛みんてきを吹くのが

絶えたり続いたりして眠い耳底じていに折々鈍い刺激を与える。外面そとは大方臃おぼろであらう。晚餐に半はんぺんの煮汁だしで鮑貝あわびがいをからにした腹ではどうしても休養が必要である。

ほのかに承うけたまわれば世間には猫の恋とか称する俳諧はいかい趣味の現象があつて、春さきは町内の同族共の夢安からぬまで浮あかれ歩あるく夜もあるとか云うが、吾輩

はまだかかる心的變化に遭逢そうほうした事はない。そもそ

も恋は宇宙的の活力である。上かみは在天の神ジュピタ

ーより下しもは土中に鳴く蚯蚓みみず、おけらに至るまでこの

道にかけて浮身を窶やつすのが万物の習いであるから、

吾輩どもが朧おぼろうれしと、物騒な風流氣を出すのも無

理のない話しである。回顧すればかく云いう吾輩も三み

毛けこ子に思い焦こがれた事もある。三角主義の張本金田

君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋慕したと云う

うわさ

噂である。それだから千金の春宵を心も空に満天下

しゅんしょう

めねこおねこ

の雌猫雄猫が狂い廻るのを煩惱の迷のと軽蔑する念

ぼんのう

まよい

けいべつ

は毛頭ないのであるが、いかんせん誘われてもそん

な心が出ないから仕方がない。吾輩目下の状態はた

だ休養を欲するのみである。こう眠くは恋も出来

ぬ。

のそのそと小供の布団の裾へ廻って心地快く眠

ふとん

すそ

ここちよ

る。
……

ふと眼を開いて^あ見ると主人はいつの間にか書斎から寢室へ来て細君の隣に延べてある布団^{ふとん}の中にいつの間にか^{もぐ}潜り込んでいる。主人の癖として寝る時は必ず横文字の小本^{こほん}を書斎から携^{たずさ}えて来る。しかし横になつてこの本を二頁^{ページ}と続けて読んだ事はない。あの時は持つて来て枕元へ置いたなり、まるで手を触

れぬ事さえある。一行も読まぬくらいならわざわざ
提^さげてくる必要もなさそうなものだが、そこが主人
の主人たるところでいくら細君が笑つても、止せと
云つても、決して承知しない。毎夜読まない本をご
苦勞千万にも寢室まで運んでくる。ある時は慾張つ
て三四冊も抱えて来る。せんだってじゆうは毎晩ウ
エブスターの大字典さえ抱えて来たくらいである。

思うにこれは主人の病気で贅沢ぜいたくな人が竜文堂りゆうぶんどうに鳴る

松風の音を聞かないと寝つかれないごとく、主人も書物を枕元に置かないと眠れないのであろう、して見ると主人に取っては書物は読む者ではない眠を誘う器械である。活版の睡眠剤である。

今夜も何か有るだろうと覗のぞいて見ると、赤い薄い

本が主人の口髯くちひげの先につかえるくらいな地位に半分

開かれて転がっている。主人の左の手の拇指おやゆびが本の間に挟はさまったままであるところから推おすと奇特にも今夜は五行読んだものらしい。赤い本と並んで例のごとくニツケルの袂時計たもとどけいが春に似合わぬ寒き色を放っている。

細君は乳呑児ちのみごを一尺ばかり先へ放り出して口を開あいていびきをかいて枕を外はずしている。およそ人間に

おいて何が見苦しいと云って口を開けて寝るほどの

不体裁はあるまいと思う。猫などは生涯しょうがいこんな恥を

かいた事がない。元来口は音を出すため鼻は空気を

吐吞とどんするための道具である。もつとも北の方へ行く

と人間が無精になつてなるべく口をあくまいと儉約

をする結果鼻で言語を使うようなズーズーもあるが、

鼻を閉塞へいそくして口ばかりで呼吸の用を弁じているのは

ズーズーよりも見ともないと思う。第一天井から鼠ねずみの糞ふんでも落ちた時危険である。

小供の方はと見るとこれも親に劣らぬ体ていたらくで寝そべっている。姉のとん子は、姉の権利はこんなものだと言わぬばかりにうんと右の手を延ばして妹の耳の上へのせている。妹のすん子はその復讐ふくしゅうに姉の腹の上に片足をあげて踏反ふんぞり返っている。双方共

寝た時の姿勢より九十度はたしかに廻転している。

しかもこの不自然なる姿勢を維持しつつ兩人とも不平も云わずおとなしく熟睡している。

さすがに春の灯火ともしびは格別である。天真爛漫らんまんながら

無風流極まるこの光景の裏うちに良夜を惜しめとばかり

床ゆかしげに輝やいて見える。もう何時なんじだろうと室へやの中

を見廻すと四隣はしんとしたただ聞えるものは柱時

はぎし

計と細君のいびきと遠方で下女の齒軋はぎしりをする音のみである。この下女は人から齒軋はぎしりをすると云われ

こんにち

おぼえ

るといつでもこれを否定する女である。私は生れてから今日に至るまで齒軋はぎしりをした覚おぼえはございませんと強情を張って決して直しましうとも御氣の毒でございますとも云わず、ただそんな覚おぼえはございませんと主張する。なるほど寝ていてする芸だから覚は

ないに違ない。しかし事實は覺がなくても存在する事があるから困る。世の中には悪い事をしておりながら、自分はどこまでも善人だと考えているものがある。これは自分が罪がないと自信しているのだから無邪気で結構ではあるが、人の困る事實はいかに無邪気でも滅却する訳には行かぬ。こう云う紳士淑女はこの下女の系統に属するのだと思う。――夜よは

大分更だいぶんけたようだ。

台所の雨戸にトントンと二返ばかり軽く中あたつた者

がある。はてな今頃人の来るはずがない。大方例の

鼠だろう、鼠なら捕とらん事に極めているから勝手に

あばれるが宜よろしい。——またトントンと中あたる。どう

も鼠らしくない。鼠としても大変用心深い鼠である。

主人の内の鼠は、主人の出る学校の生徒のごとく日にっ

中ちゆうでも夜中やちゆうでも乱暴狼藉ろうぜきの練修に余念なく、憫然びんぜんな

る主人の夢を驚破きやうはするのを天職のごとく心得ている

連中だから、かくのごとく遠慮する訳がない。今の

はたしかに鼠ではない。せんだってなどは主人の寝

室にまで闖入ちんにゆうして高からぬ主人の鼻の頭を嚙かんで凱が

歌いかを奏して引き上げたくらいの鼠にしてはあまり臆

病すぎる。決して鼠ではない。今度はギーと雨戸を

下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出

来るだけ緩やかに、溝に添うて滑らせる。いよいよ

鼠ではない。人間だ。この深夜に人間が案内も乞わ

ず戸締を外とじまりずして御光来になるとすれば迷亭先生や

鈴木君ではないに極きまっている。御高名だけはかねて

承うけたまわっている泥棒陰士どろぼういんしではないか知らん。いよいよ

陰士とすれば早く尊顔そんがんを拝したいものだ。陰士は今

や勝手の上に大いなる泥足を上げて二足ばかり進んふたあし

だ模様である。三足目と思う頃揚板あげいたに蹶つまずいてか、ガ

タリと夜よるに響くような音を立てた。吾輩の背中せなかの毛

が靴刷毛くつばけで逆に擦こすられたような心持がする。しば

らくは足音もしない。細君を見ると未まだ口をあいて

太平の空気を夢中に吐吞とどんしている。主人は赤い本に

拇指おやゆびを挟はさまれた夢でも見ているのだらう。やがて台

所でマチを擦る音が聞える。陰士でも吾輩ほど夜陰に眼は利かぬと見える。勝手がわるくて定めし不都合だろう。

この時吾輩は蹲踞まりながら考えた。陰士は勝手

から茶の間の方面へ向けて出現するのであるか、

または左へ折れ玄関を通過して書斎へと抜けるであ

ろうか。――足音は襖の音と共に縁側へ出た。陰士

はいよいよ書齋へ這^{はい}入った。それぎり音も沙汰もない。
い。

吾輩はこの間^まに早く主人夫婦を起してやりたいものだとようやく気が付いたが、さてどうしたら起きるやら、一向^{いっこう}要領を得ん考のみが頭の中に水車^{みずぐるま}の勢で廻転するのみで、何等の分別も出ない。布団^{ふとん}の裾^{すそ}を^{くわ}叩^{くわ}えて振って見たらと思つて、二三度やつて見た

が少しも効用がない。冷たい鼻を頬に擦り付けたら
と思つて、主人の顔の先へ持つて行つたら、主人は
眠つたまま、手をうんと延ばして、吾輩の鼻づらを
否いやと云うほど突き飛ばした。鼻は猫にとつても急
所である。痛む事おびただしい。此度こんどは仕方がない
からにやーにやーと二返ばかり鳴いて起こそうとし
たが、どう云うものかこの時ばかりは咽喉のどに物が痞つか

えて思うような声が出ない。やつとの思いで洩りな

がら低い奴を少々出すと驚いた。肝心かんじんの主人は覚めさ

る気色けしきもないのに突然陰士の足音がし出した。ミチ

リミチリと椽側を伝つたって近づいて来る。いよいよ来

たな、こうなつてはもう駄目だと諦あきらめて、襖ふすまと柳やな

行李きこの間にしばしの間身を忍ばせて動静を窺うかがう。

陰士の足音は寢室の障子の前へ来てぴたりと已やむ。

吾輩は息を凝^こらして、この次は何をするだろうと一

生懸命になる。あとで考えたが鼠を捕^とる時は、こん

な気分になれば訳はないのだ、魂^{たましい}が両方の眼から飛

び出しそうな勢^{いきおい}である。陰士の御蔭で二度とない悟^{さとり}

を開いたのは実にありがたい。たちまち障子の棧^{さん}の

三つ目が雨に濡れたように真中だけ色が変わる。それ

を透^{すか}して薄紅なものがだんだん濃く写ったと思うと、

紙はいつか破れて、赤い舌がぺろりと見えた。舌はしばしの間に暗い中に消える。入れ代って何だか恐しく光るものが一つ、破れた孔あなの向側にあらわれる。疑いもなく陰士の眼である。妙な事にはその眼が、部屋の中にある何物をも見ないで、ただ柳行李の後うしろに隠れていた吾輩のみを見つめているように感ぜられた。一分にも足らぬ間ではあったが、こう睨にらまれ

ては寿命が縮まると思つたくらいである。もう我慢出来んから行李の影から飛出そうと決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰士がついに眼前にあらわれた。

吾輩は叙述の順序として、不時の珍客なる泥棒陰士その人をこの際諸君に御紹介するの栄誉を有する訳であるが、その前ちよつと卑見を開陳かいちんしてご高慮

わづら

を煩わ^{わづら}したい事がある。古代の神は全智全能と崇め^{あが}

ヤソきよう

こんにち

られている。ことに耶蘇教の神は二十世紀の今日ま

めん かぶ

でもこの全智全能の面を被^{めん かぶ}っている。しかし俗人の

考うる全智全能は、時によると無智無能とも解釈が

出来る。こう云うのは明かにパラドックスである。

どうは

てんちかいびやく

しかるにこのパラドックスを道破^{どうは}した者は天地開闢

まんざら

以来吾輩のみであろうと考えると、自分ながら満更

な猫でもないと言ふ虚栄心も出るから、是非共ここにその理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ないと言ふ事を、高慢なる人間諸君の脳裏のうりに叩き込みたいと考える。天地万有は神が作ったそうなの、して見れば人間も神の御製作であらう。現に聖書とか云うものにはその通りと明記してあるそうだ。さてこの人間について、人間自身が数千年来の觀察を積んで、大おおい

に玄妙不思議がると同時に、ますます神の全智全能を承認するように傾いた事実がある。それは外ほかでもない、人間もかようにうじやうじやいるが同じ顔をしている者は世界中に一人もない。顔の道具は無論極きまっている、大さおおきも大概は似たり寄ったりである。換言すれば彼等は皆同じ材料から作り上げられている、同じ材料で出来ているにも関らず一人も同じ結

果に出来上つておらん。よくまああれだけの簡単な

材料でかくまで異様な顔を思いついた者だと思つと、

製造家の伎倆ぎりょうに感服せざるを得ない。よほど独創的

な想像力がないとこんな変化は出来のである。一

代の画工が精力を消耗しょうこうして変化を求めた顔でも十二

三種以外に出る事が出来んのをもつて推おせば、人間

の製造を一手いってで受負うけおつた神の手際てぎわは格別な者だと驚

嘆せざるを得ない。到底人間社会において目撃し得ざる底の伎倆であるから、これを全能的伎倆と云つても差し支えないだろう。人間はこの点において大に神に恐れ入っているようである、なるほど人間の観察点から云えばもつともな恐れ入り方である。しかし猫の立場から云うと同一の事実がかえって神の無能力を証明しているとも解釈が出来る。もし全然

無能でなくとも人間以上の能力は決してない者である
と断定が出来るだろうと思う。神が人間の数だけ
それだけ多くの顔を製造したと云うが、当初から胸
中に成算があつてかほどの変化を示したもののか、ま
たは猫も杓子しゃくしも同じ顔に造ろうと思つてやりかけて
見たが、とうてい旨うまく行かなくて出来るのも出来る
のも作り損そこねてこの乱雑な状態に陥おちいつたものか、分

らんではないか。彼等顔面の構造は神の成功の紀念

と見らるると同時に失敗の痕迹こんせきとも判ぜらるるでは

ないか。全能とも云えようが、無能と評したって差

し支えはない。彼等人間の眼は平面の上に二つ並ん

でいるので左右を一時いちじに見る事が出来んから事物の

半面だけしか視線内に這入はいらんのは気の毒な次第で

ある。立場を換かえて見ればこのくらい単純な事実は

彼等の社会に日夜間断なく起りつつあるのだが、
人逆^{のぼ}せ上がって、神に吞^のまれているから悟りようが
ない。製作の上に变化をあらわすのが困難であるな
らば、その上に徹頭徹尾の模倣^{もこう}を示すのも同様に困
難である。ラファエルに寸分違わぬ聖母の像を二枚
かけと注文するのは、全然似寄らぬマドンナを双幅^{そうふく}
見せろと逼^{せま}ると同じく、ラファエルにとっては迷惑

であろう、否同じ物を二枚かく方がかえって困難かも知れぬ。弘法大師に向つて昨日きのう書いた通りの筆法で空海と願いますと云う方がまるで書体を換かえてと注文されるよりも苦しいかも知らん。人間の用うる国語は全然模倣もこうしゆぎ主義で伝習するものである。彼等人間が母から、乳母うばから、他人から実用上の言語を習う時には、ただ聞いた通りを繰り返すよりほかに毛

頭の野心はないのである。出来るだけの能力で人真似をするのである。かように人真似から成立する国語が十年二十年と立つうち、発音に自然と変化を生じてくるのは、彼等に完全なる模倣もこうの能力がないと云う事を証明している。純粹の模倣もこうはかくのごとく至難なものである。従つて神が彼等人間を区別の出来ぬよう、悉しっかい皆焼印の御ごかめのごとく作り得たなら

ばますます神の全能を表明し得るもので、同時に今^{こん}

にち

日のごとく勝手次第な顔を天日^{てんぴ}に曝^さらさして、目ま

ぐるしきまでに変化を生ぜしめたのはかえってその
無能力を推知し得るの具ともなり得るのである。

吾輩は何の必要があつてこんな議論をしたか忘れ
てしまった。本^{もと}を忘却するのは人間にさえありがち

の事であるから猫には当然の事さと大目に見て貰い

たい。とにかく吾輩は寢室の障子をあけて敷居の上にぬっと現われた泥棒陰士を瞥見べっけんした時、以上の感想が自然と胸中に湧わき出でたのである。なぜ湧いた？——なぜと云う質問が出れば、今一応考え直して見なければならん。——ええと、その訳はこうである。

吾輩の眼前に悠然ゆうぜんとあらわれた陰士の顔を見ると

その顔が——平常神ふだんの製作についてその出来栄できばえをあ

るいは無能の結果ではあるまいかと疑っていたのに

、それを一時に打ち消すに足るほどの特徴を有して

いたからである。特徴とはほかではない。彼の眉目びもく

がわが親愛なる好男子水島寒月君に瓜うり二つである

云う事実である。吾輩は無論泥棒に多くの知己ちきは持

たぬが、その行為の乱暴なところから平常想像ふだんして

私ひそかに胸中に描えがいていた顔はないでもない。小鼻の

左右に展開した、一銭銅貨くらいの眼をつけた、毬いが

栗頭ぐりあたまにきまっていると自分で勝手に極きめたのである

が、見ると考えるとは天地の相違、想像は決して逞たくまし

くするものではない。この陰士は背せいのすらりとした

色の浅黒い一の字眉の、意気で立派な泥棒である

。年は二十六七歳でもあろう、それすら寒月君の写

生である。神もこんな似た顔を二個製造し得る手際てぎわ

があるとするれば、決して無能をもつて目する訳には
行かぬ。いや実際の事を云うと寒月君自身が気が変
になつて深夜に飛び出して来たのではあるまいかと
、はつと思つたくらいよく似ている。ただ鼻の下に
薄黒く髯ひげの芽生めえが植え付けてないのでさては別人
だと気が付いた。寒月君は苦味にがみばしつた好男子で、

活動小切手と迷亭から称せられたる、金田富子嬢を優に吸収するに足るほどの念入れの製作物である。

しかしこの陰士も人相から觀察するとその婦人に対する引力上の作用において決して寒月君に一步も譲らない。もし金田の令嬢が寒月君の眼付や口先に迷ったのなら、同等の熱度をもつてこの泥棒君にも惚ほれ込まなくては義理が悪い。義理はとにかく、論理

に合わない。ああ云う才気のある、何でも早分りの
する性質たちだからこのくらいの事は人から聞かんでも
きつと分るであろう。して見ると寒月君の代りにこ
の泥棒を差し出しても必ず満身の愛を捧げて琴瑟調きんしつ
和の実を挙げらるるに相違ない。万一寒月君が迷亭
などの説法に動かされて、この千古の良縁が破れる
としても、この陰土が健在であるうちは大丈夫であ

る。吾輩は未来の事件の発展をここまで予想して、富子嬢のために、やっと安心した。この泥棒君が天地の間に存在するのは富子嬢の生活を幸福ならしむる一大要件である。

陰士は小脇になにか抱えている。見ると先刻主人さつき

が書斎へ放り込んだ古毛布ふるげつとである。唐棧とうざんの半纏はんてんに、

御納戸おなんどの博多はかたの帯を尻の上にむすんで、生白なましろい脛すねは

ひざ

膝から下むき出しのまま今や片足を挙げて畳の上へ

入れる。先刻さつきから赤い本に指を噛かまれた夢を見てい

た、主人はこの時寝返りを堂どうと打ちながら「寒月だ

」と大きな声を出す。陰士は毛布けつとを落して、出した

足を急に引き込めます。障子の影に細長い向脛むこうすねが二本

立ったまま微かすかに動くのが見える。主人はうーん、

むにやむにやと云いながら例の赤本を突き飛ばして

黒い腕を皮癬病ひぜんやみのようにぼりぼり搔かく。そのあ

とは静まり返って、枕をはずしたなり寝てしまふ。

寒月だと云ったのは全く我知らずの寝言と見える。

陰士はしばらく椽側えんがわに立ったまま室内の動静をうか

がっていたが、主人夫婦の熟睡しているのを見済みすまし

てまた片足を畳の上に入れる。今度は寒月だと云う

声も聞えぬ。やがて残る片足も踏み込む。一穂いっすいの春しゅ

灯で豊かに照らされていた六畳の間は、陰士の影に

鋭どく二分せられて柳行李の辺から吾輩の頭の上を

越えて壁の半ばが真黒になる。振り向いて見ると陰

士の顔の影がちようど壁の高さの三分の二の所に漠

然と動いている。好男子も影だけ見ると、八つ頭の

化け物のごとくまことに妙な恰好である。陰士は細

君の寝顔を上から覗き込んで見たが何のためかにや

にやと笑った。笑い方までが寒月君の模写であるに
は吾輩も驚いた。

細君の枕元には四寸角の一尺五六寸ばかりの釘付くぎづ

けにした箱が大事そうに置いてある。これは肥前の

国は唐津からつの住人多々良三平君が先日帰省した時御土おみ

産やげに持って来た山の芋いもである。山の芋を枕元へ飾つ

て寝るのはあまり例のない話しではあるがこの細君

は煮物に使う三盆さんぼんを用簞笥ようだんすへ入れるくらい場所の適

不適と云う觀念に乏しい女であるから、細君にとれ

ば、山の芋は愚かおろ、沢庵たくあんが寢室あに在つても平氣かも

知れん。しかし神ならぬ陰士はそんな女と知ろうは

ずがない。かくまで鄭重ていちょうに肌身に近く置いてある以

上は大切な品物であらうと鑑定するのも無理はない

。陰士はちよつと山の芋の箱を上げて見たがその重

さが陰士の予期と合して大分^{だいぶん}目方が懸^かりそうなので
すこぶる満足の体^{てい}である。いよいよ山の芋を盗むな
と思つたら、しかもこの好男子にして山の芋を盗む
なと思つたら急におかしくなつた。しかし滅^め多^{った}に声
を立てると危険であるからじつと忪^{こら}えている。

やがて陰士は山の芋の箱を恭^{うやうや}しく古毛布^{ふるげつと}にくるみ
初めた。なにかからげるものはないかとあたりを見

廻す。と、幸い主人が寝る時に解きすてた縮緬ちりめんの兵へ

こおび

古帯がある。陰士は山の芋の箱をこの帯でしつかり

括くくつて、苦もなく背中へしよう。あまり女が好すく体

裁ではない。それから小供のちゃんちゃんを二枚、

やす ももひき

主人のめり安やすの股引の中へ押し込むと、股のあたり

ふく あおだいししょう かえる

が丸く膨ふくれて青大將が蛙を飲んだような——あるい

りんげつ

は青大將の臨月りんげつと云う方がよく形容し得るかも知れ

ん。とにかく変な恰好かっこうになった。嘘だと思うなら試

しにやってみるがよろしい。陰士はめり安をぐるぐ

る首くびつ環たまへ捲まきつけた。その次はどうするかと思う

と主人の紬つむぎの上着を大風呂敷のように拡ひろげてこれに

細君の帯と主人の羽織じゅばんと繻絆じゅばんとその他あらゆる雑物ぞうもつ

を奇麗に畳んでくるみ込む。その熟練と器用なやり

口にもちよつと感心した。それから細君の帯上げと

しごきとを続つぎ合わせてこの包みを括くって片手にさ

げる。まだ頂戴ちやうだいするものは無いかなと、あたりを見

廻まわしていたが、主人の頭の先に「朝日」の袋がある

のを見付けて、ちよつと袂たもとへ投げ込む。またその袋

の中から一本出してランプに翳かざして火を点つける。旨う

まそうに深く吸って吐き出した煙りが、乳色のホヤ

を繞めぐってまだ消えぬ間まに、陰士の足音は椽側えんがわを次第

に遠のいて聞えなくなつた。主人夫婦は依然として熟睡している。人間も存外迂濶うかつなものである。

吾輩はまた暫時ざんじの休養を要する。のべつに喋舌しゃべつ

ていては身体が続かない。ぐつと寝込んで眼が覚めさ

た時は弥生やよいの空が朗らかに晴れ渡つて勝手口に主人

夫婦が巡査と対談をしている時であつた。

「それでは、ここから這入はいつて寢室の方へ廻つたん

ですな。あなた方は睡眠中で一向気がつかないのですな」

「ええ」と主人は少し極きまりがわるそうである。

「それで盗難に雇かかったのは何時頃なんじですか」と巡査は

無理な事を聞く。時間が分るくらいなら何なにも盗ま
れる必要はないのである。それに気が付かぬ主人夫
婦はしきりにこの質問に対して相談をしている。

「何時頃かな」

「そうですね」と細君は考える。考えれば分ると思つてゐるらしい。

「あなたは夕べ何時に御休ゆうみになつたんですか」

「俺の寝たのは御前よりあとだ」

「ええ私わたくしの伏せつたのは、あなたより前です」

「眼が覚めたのは何時だったかな」

「七時半でしたらう」

「すると盗賊の這入はいったのは、何時頃になるかな」

「なんでも夜なかでしょう」

「夜中よなかは分りきっているが、何時頃かと云うんだ」

「たしかなところはよく考えて見ないと分りませんわ」と細君はまだ考えるつもりでいる。巡査はただ形式的に聞いたのであるから、いつ這入ったところ

が一向痛痒を感じないのである。嘘でも何でも、いい加減な事を答えてくれれば宜いと思つてゐるのに主人夫婦が要領を得ない問答をしているものだから少々焦れたくなつたと見えて

「それじゃ盗難の時刻は不明なんですな」と云うと主人は例のごとき調子で

「まあ、そうですね」と答える。巡査は笑いもせず

に

「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝
たところが盗賊が、どこそこの雨戸を外してどこそ

はず

こに忍び込んで品物を何点盗んで行つたから右告訴

みぎこくそに

おまびろうなり

及候也という書面をお出しなさい。届ではない告訴

なあて

です。名宛はない方がいい」

「品物は一々かくんですか」

「ええ羽織何点代価いくらと云う風に表にして出
すんです。——いや這はい入って見たって仕方がない。盗と
られたあとなんだから」と平氣な事を云つて歸つて
行く。

主人は筆硯ふですずりを座敷の真中へ持ち出して、細君を前
に呼びつけて「これから盜難告訴をかくから、盜ら
れたものを一々云え。さあ云え」とあたかも喧嘩で

もするような口調で云う。

「あら厭^{いや}だ、さあ云えだなんて、そんな権柄^{けんぺい}づくで誰が云うもんですか」と細帯を巻き付けたままどつかと腰を据^すえる。

「その風はなんだ、宿場女郎の出来損^{できそこな}い見たようだな。なぜ帯をしめて出て来ん」

「これで悪るければ買って下さい。宿場女郎でも何

でも盗られりや仕方がないじやありませんか」

「帯までとって行つたのか、苛ひどい奴だ。それじや帯

から書き付けてやろう。帯はどんな帯だ」

「どんな帯って、そんなに何本もあるもんですか、

黒くろ襦じゆす子と縮ちりめん緬の腹合せの帯です」

「黒襦子と縮緬の腹合せの帯一筋——あたい価はいくらく

らいだ」

「六円くらいでしよう」

「生意気に高い帯をしめてるな。今度から一円五十銭くらいのにしておけ」

「そんな帯があるものですか。それだからあなたは不人情だと云うんです。女房なんどは、どんな汚ない風をしていても、自分さい宜よけりや、構わないんでしよう」

「まあいいや、それから何だ」

いとおり

「糸織の羽織です、あれは河野こうのの叔母さんの形身かたみに

もらつたんで、同じ糸織でも今の糸織とは、たちが

違います」

「そんな講釈は聞かんでもいい。値段はいくらだ」

「十五円」

「十五円の羽織を着るなんて身分不相当だ」

「いいじやありませんか、あなたに買っていただきやあしまいし」

「その次は何だ」

「黒足袋が一足」

「御前のか」

「あなたんでさあね。代価が二十七錢」

「それから？」

「山の芋が一箱」

「山の芋まで持って行つたのか。煮て食うつもりか
、とろろ汁にするつもりか」

「どうするつもりか知りません。泥棒のところへ行
つて聞いていらつしやい」

「いくらするか」

「山の芋のねだんまでは知りません」

「そんなら十二円五十銭くらいにしておこう」

「馬鹿馬鹿しいじやありませんか、いくら唐津からつから

掘って来たって山の芋が十二円五十銭してたまるも

んですか」

「しかし御前は知らんと云うじやないか」

「知りませんわ、知りませんが十二円五十銭なんて

法外ですもの」

「知らんけれども十二円五十銭は法外だとは何だ。

まるで論理に合わん。それだから貴様はオタンチン・パレオロガスだと云うんだ」

「何ですって」

「オタンチン・パレオロガスだよ」

「何ですそのオタンチン・パレオロガスって云うのは」

「何でもいい。それからあとは——俺の着物は一向いっこう出て来んじやないか」

「あとは何でも宜ようござんす。オタンチン・パレオ
ロガスの意味を聞かして頂戴ちやうだい」

「意味も何なにもあるもんか」

「教えて下すつてもいいじゃありませんか、あなたはよっぽど私を馬鹿にしていらっしゃるのね。きつ

と人が英語を知らないと思つて悪口をおつしやつたんだよ」

「愚^ぐな事を言わんで、早くあとを云うが好い。早く告訴をせんと品物が返らんぞ」

「どうせ今から告訴をしたって間に合いやしません。それよりか、オタンチン・パレオロガスを教えて頂戴」

「うるさい女だな、意味も何にも無いと云うに」

「そんなら、品物の方もあります」

「頑愚^{がんぐ}だな。それでは勝手にするがいい。俺はもう

盗難告訴を書いてやらんから」

「私も品数^{しなかず}を教えて上げません。告訴はあなたが御

自分でなさるんですから、私は書いていただかない

でも困りません」

「それじゃ廃よそう」と主人は例のごとくふいと立つて書齋へ這はい入る。細君は茶の間へ引き下がって針箱の前へ坐る。兩人共十分間ばかりは何にもせず黙もくつて障子を睨にらめ付けている。

ところへ威勢よく玄関をあけて、山の芋の寄贈者多々良三平君が上あがってくる。多々良三平君はもとこの家やの書生であつたが今では法科大学を卒業してあ

る会社の鉤山部に雇われている。これも実業家の芽^め

生^{ばえ}で、鈴木藤十郎君の後進生である。三平君は以前

の関係から時々旧先生の草廬^{そうろう}を訪問して日曜などに

は一日遊んで帰るくらい、この家族とは遠慮のない
間柄である。

「奥さん。よか天気でございます」と唐津訛^{からつなま}りか何
かで細君の前にズボン^{ズボン}のまま立て膝をつく。

「おや多々良さん」

「先生はどこぞ出なすったか」

「いいえ書齋にいます」

「奥さん、先生のごと勉強しなされると毒ですばい。

たまの日曜だもの、あなた」

「わたしに言っても駄目だから、あなたが先生にそ

うおっしやい」

「そればつてんが……」と言ひ掛けた三平君は座敷中を見廻わして「今日は御嬢さんも見えんな」と半分妻君に聞いているや否や次の間まからとん子とすん子が馳け出して来る。

「多々良さん、今日は御寿司おすしを持って来て？」と姉の、とん子は先日約束を覚えていて、三平君の顔を見るや否や催促する。多々良君は頭を掻かきながら

「よう覚えているのう、この次はきつと持って来ます。今日は忘れた」と白状する。

「いやーだ」と姉が云うと妹もすぐ真似をして「いやーだ」とつける。細君はようやく御機嫌が直って少々笑顔になる。

「寿司は持って来んが、山の芋は上げたろう。御嬢さん喰べなさったか」

「山の芋ってなあに？」と姉がきくと妹が今度もまた真似をして「山の芋ってなあに？」と三平君に尋ねる。

「まだ食いなさらんか、早く御母^{おか}あさんに煮て御貰い。唐津^{からつ}の山の芋は東京のとは違つてうまかあ」と三平君が国自慢をすると、細君はようやく気が付い

て

「多々良さんせんだつては御親切に沢山ありがとうございます

」

「どうです、喰べて見なすつたか、折れんように箱を誂あつらえて堅くつめて来たから、長いままでありましたろう」

「ところがせつかく下すつた山の芋を夕べ泥棒ゆうに取られてしまつて」

「ぬす盗とが？　馬鹿な奴ですなあ。そげん山の芋の

好きな男がおりますか？」と三平君大おおに感心して
いる。

「御母おかあさま、夕べ泥棒が這入はいったの？」と姉が尋
ねる。

「ええ」と細君は軽かろく答える。

「泥棒が這入って——そうして——泥棒が這入って

——どんな顔をして這入ったの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答えてよいか分らんの
で

「恐い顔こわをして這入りました」と返事をして多々良君の方を見る。

「恐い顔って多々良さん見たような顔なの」と姉が
気の毒そうにもなく、押し返して聞く。

「何ですね。そんな失礼な事を」

「ハハハハ私わたしの顔はそんなに恐いですか。困ったな

」と頭を搔かく。多々良君の頭の後部には直径一寸ば

かりの禿はげがある。一カ月前から出来だして医者に見

て貰ったが、まだ容易なほに癒なほりそうもない。この禿を

第一番に見付けたのは姉のトン子である。

「あら多々良さんの頭は御母おかあさまのように光ひかって

よ」

「だまっていらっしゃいと云うのに」

「御母あさま夕べの泥棒の頭も光かつて」とこれは妹の質問である。細君と多々良君とは思わず吹き出したが、あまり煩わしくて話も何も出来ぬので

い。今に御母あさまが好い御菓子を上げるから」と

細君はようやく子供を追いやつて

「多々良さんの頭はどうしたの」と真面目に聞いて見る。

「虫が食いました。なかなか癒りません。奥さんも有んなさるか」

「やだわ、虫が食うなんて、そりやまげで釣るところは女だから少しは禿げますさ」

「禿はみんなバクテリアですばい」

「わたしのはバクテリアじゃありません」

「そりや奥さん意地張りたい」

「何でもバクテリアじゃありません。しかし英語で

禿の事を何とか云うでしょう」

「禿はボールドとか云います」

「いいえ、それじゃないの、もっと長い名があるで

しょう」

「先生に聞いたら、すぐわかりましょう」

「先生はどうしても教えて下さらないから、あなたに聞くんです」

「私^{わたし}はボードより知りませんが。長かって、どげんですか」

「オタンチン・パレオロガスと云うんです。オタン

チンと云うのが禿と云う字で、パレオロガスが頭な
んでしよう」

「そうかも知れませんか。今に先生の書齋へ行つ
てウェブスターを引いて調べて上げましょう。しか
し先生もよほど変っていなさいますな。この天氣の
好いのに、うちにじつとして——奥さん、あれじゃ
胃病は癒りません。ちと上野へでも花見に出掛け

なさるごと勧めなさい」

「あなたが連れ出して下さい。先生は女の云う事は決して聞かない人ですから」

「この頃でもジャムを舐なめなさるか」

「ええ相変らずです」

「せんだって、先生こぼしていなさいました。どうも妻さいが俺のジャムの舐め方が烈しいと云って困るが

俺はそんなに舐めるつもりはない。何か勘定違いだろうと云いなさるから、そりや御嬢さんや奥さんがいつしよに舐めなさるに違ない――」

「いやな多々良さんだ、何だってそんな事を云うんです」

「しかし奥さんだって舐めそうな顔をしていなさるばい」

「顔でそんな事がどうして分ります」

「分らんばってんが——それじゃ奥さん少しも舐めなさらんか」

「そりや少しは舐めますさ。舐めたって好いじやありませんか。うちのものだもの」

「ハハハハそうだろうと思った——しかし本の事、ほん こと

泥棒は飛んだ災難でしたな。山の芋ばかり持って行い

たのですか」

「山の芋ばかりなら困りやしません、不断着をみんな取って行きました」

「早速困りますか。また借金をしなければならんですか。この猫が犬ならよかつたに——惜しい事をしたなあ。奥さん犬の大か奴ふとを是非一丁飼いなさい。

——猫は駄目ですばい、飯を食うばかりで——ちっ

とは鼠でも捕りますか」

「一匹もとった事はありません。本当に横着な凶々ずう

凶々ずうしい猫ですよ」

「いやそりや、どうもこうもならん。早々棄てなさい。
私が貰わたしって行つて煮て食おうか知らん」

「あら、多々良さんは猫を食べるの」

「食いました。猫は旨うもうござります」

「随分豪傑ね」

下等な書生のうちには猫を食うような野蛮人があ
る由はよしかねて伝聞したが、吾輩が平生けんこ眷顧を辱かたじけうす
る多々良君その人もまたこの同類ならんとは今が今
まで夢にも知らなかった。いわんや同君はすでに書
生ではない、卒業の日は浅きにも係かわらず堂々たる
一個の法学士で、六むつ井い物産会社の役員であるのだ

から吾輩の驚愕きょうがくもまた一と通りではない。人を見た

ら泥棒と思えと云う格言は寒月第二世の行為によつ

てすでに証拠立てられたが、人を見たら猫食いと思

えとは吾輩も多々良君の御蔭によつて始めて感得し

た真理である。世に住めば事を知る、事を知るは嬉

しいが日に日に危険が多くて、日に日に油断がなら

なくなる。こうかつ狡猾になるのも卑劣になるのも表裏二枚

合せの護身服を着けるのも皆事を知るの結果であつて、事を知るのは年を取るの罪である。老人に碌ろくなものがないのはこの理だな、吾輩などもあるいは今のうちに多々良君の鍋なべの中で玉葱たまねぎと共に成仏じょうぶつする方が得策かも知れんと考えて隅すみの方に小さくなつていると、最前細君と喧嘩さいぜんをして一反書齋いったんへ引き上げた主人は、多々良君の声を聞きつけて、のそのそ茶

の間へ出てくる。

「先生泥棒に逢いなさったそうですね。なんちゆ愚^ぐな事です」と劈頭^{へきとう}一番にやり込める。

「這^{はい}入る奴が愚^ぐなんだ」と主人はどこまでも賢人をもって自任している。

「這入る方も愚だばってんが、取られた方もあまり賢^{かし}こくはなかごたる」

「何にも取られるものの無い多々良さんのようなのが一番賢いんでしよう」と細君が此度こんどは良人おっとの肩を持つ。

「しかし一番愚なのはこの猫ですばい。ほんにまあ、どう云う了見じやろう。鼠は捕とらず泥棒が来ても

知らん顔をしている。——先生この猫を私わたしにくんなさらんか。こうしておいたつちや何の役にも立ちま

せんばい」

「やっても好い。何にするんだ」

「煮て喰べます」

主人は猛烈なるこの一言を聞いて、いちごんうふと気味の

悪い胃弱性の笑を洩もらしたが、別段の返事もしない

ので、多々良君も是非食いたいとも云わなかったのは吾輩にとって望外の幸福である。主人はやがて話

頭を転じて、

「猫はどうでも好いが、着物をとられたので寒くて

いかん」と大に銷沈おおい しょうちん ていの体である。なるほど寒いはず

である。昨日きのうまでは綿入を二枚重ねていたのに今日

はあわせ衿はんそでに半袖のシャツだけで、朝から運動もせず枯坐こざ

したぎりであるから、不十分な血液はことごとく胃

のために働いて手足の方へは少しも巡回して来ない

「先生教師などをしておったちやとうていあかんで
すばい。ちよつと泥棒に逢つても、すぐ困る——」いっ

丁ちよう今から考かを換えて実業家にでもなんなさらんか」

「先生は実業家は嫌きらだから、そんな事を言つたつて

駄目よ」

と細君が傍そばから多々良君に返事をする。細君は無

論実業家になつて貰いたいのである。

「先生学校を卒業して何年になんなさるか」

「今年で九年目でしよう」と細君は主人を顧みる。かえり

主人はそうだとも、そうで無いとも云わない。

「九年立つても月給は上がらず。いくら勉強しても

人は褒めほちやくれず、郎君独寂寞ろうくんひとりせきばくですたい」と中学

時代で覚えた詩の句を細君のために朗吟すると、細

君はちよつと分りかねたものだから返事をしない。

「教師は無論嫌だが、きらい実業家はなお嫌いだ」と主人

は何が好きだか心の裏でうち考えているらしい。

「先生は何でも嫌なんだから……」

「嫌でないのは奥さんだけですか」と多々良君柄にがら

似合じようだんわぬ冗談を云う。

「一番嫌だ」主人の返事はもつとも簡明である。細

君は横を向いてちよつと澄すましたが再び主人の方を見て、

「生きていらつしやるのも御嫌おきらいなんでしょう」と充分主人を凹へこましたつもりで云う。

「あまり好いてはおらん」と存外のんき呑気な返事をする。
これでは手のつけようがない。

「先生ちつと活潑かつぱつに散歩でもしなさんと、からだ

を壊^{こわ}してしまえます。――そうして実業家にな
んなさい。金なんか儲^{もう}けるのは、ほんに造^{ぞう}作^{さく}もない
事でござります」

「少しも儲けもせん癖に」

「まだあなた、去年やつと会社へ這^{はい}入^いったばかりで
すもの。それでも先生より貯蓄があります」

「どのくらい貯蓄したの？」と細君は熱心に聞く。

「もう五十円になります」

「一体あなたの月給はどのくらいなの」これも細君の質問である。

「三十円ですたい。その内を毎月五円宛ずつ会社の方で預って積んでおいて、いざと云う時にやります。――

――奥さん小遣錢で外濠線そとぼりせんの株を少し買いなさらんか、今から三四個月すると倍になります。ほんに少し

金さえあれば、すぐ二倍にでも三倍にでもなります
」

「そんな御金があれば泥棒に逢ったって困りやしないわ」

「それだから実業家に限ると云うんです。先生も法
科でもやって会社か銀行へでも出なされば、今頃は
月に三四百円の収入はありますのに、惜しい事でご

ざんしたな。——先生あの鈴木藤十郎と云う工学士を知つてなさるか」

「うんきのう昨日来た」

「そうでござんすか、せんだつてある宴会で逢いまして時先生の御話をしたら、そうか君は苦沙弥君くしやみのところの書生をしていたのか、僕も苦沙弥君とは昔むかし小石川の寺でいっしょに自炊をしておつた事があ

る、今度行ったら宜しく云うてくれ、僕もその内尋ねるからと云っていました」

「近頃東京へ来たそうだな」

「ええ今まで九州の炭坑におりましたが、こないだ東京詰づめになりました。なかなか旨いうまです。私わたしなぞに

でも朋友のように話します。——先生あの男がいくらか貰つてると思ひなさる」

「知らん」

「月給が二百五十円で盆暮に配当がつきますから、何でも平均四五百円になりますばい。あげな男が、よかしこ取っておるのに、先生はリーダー専門で十年一狐裘いちこぎゆうじや馬鹿気ておりますなあ」

「實際馬鹿気ているな」と主人のような超然主義の人でも金銭の観念は普通の人間と異なることところはな

い。否困窮するだけに人一倍金が欲しいのかも知れない。多々良君は充分実業家の利益を吹聴ふいちちようしてもう云う事が無くなつたものだから

「奥さん、先生のところへ水島寒月と云う人じんが来ますか」

「ええ、善くいらつしやいます」

「どげんな人物ですか」

「大變學問の出来る方だそうです」

「好男子ですか」

「ホホホ多々良さんくらいなものでしょう」

「そうですか、わたし私くらいなものですか」と多々良君

真面目である。

聞く。

「どうして寒月の名を知っているのかい」と主人が

「せんだって或る人から頼まれました。そんな事を聞かだけの価値のある人物でしうか」多々良君は聞かぬ先からすでに寒月以上に構えている。

「君よりよほどえらい男だ」

「そうでございますか、私わたしよりえらいですか」と笑

いもせず怒おこりもせぬ。これが多々良君の特色である。

きんきん
「近々博士になりますか」

「今論文を書いてるそうだ」

「やっぱり馬鹿ですな。博士論文をかくなんて、もう少し話せる人物かと思ったら」

「相変らず、えらい見識ですね」と細君が笑いながら云う。

「博士になったら、だれとかの娘をやるとかやらん

とか云うていましたから、そんな馬鹿があるうか、娘を貰うために博士になるなんて、そんな人物にくれるより僕にくれる方がよほどましだと云ってやりました」

「だれに」

わたし

「私に水島の事を聞いてくれと頼んだ男です」

「鈴木じゃないか」

「いいえ、あの人にや、まだそんな事は云い切りません。向うは大頭ですから」

「多々良さんは蔭弁慶かげべんけいね。うちへなんぞ来ちや大變

威張つても鈴木さんなどの前へ出ると小さくなつて
るんでしよう」

「ええ。そうせんと、あぶないです」

「多々良、散歩をしようか」と突然主人が云う。先さき

刻つきからあわせ拾一枚であまり寒いので少し運動でもしたら

暖かになるだろうと云う考から主人はこの先例のな
い動議を呈出したのである。行き当りばつたりの多

々良君は無論しゅんじゅん逡巡する訳がない。

「行きましたよう。上野にしますか。芋坂いもざかへ行つて団

子を食べましょうか。先生あすこの団子を食べた事
がありますか。奥さん一返行つて食つて御覧。柔ら

かくて安いです。酒も飲ませます」と例によつて秩序のない駄弁を揮ふるつてゐるうちに主人はもう帽子を被くつぬぎつて沓脱へ下りる。

吾輩はまた少々休養を要する。主人と多々良君が上野公園でどんな真似をして、芋坂で団子を幾皿食びこうつたかその辺の逸事は探偵の必要もなし、また尾行あいだする勇氣もないからずっと略してその間休養せんけ

ればならん。休養は万物の旻天びんてんから要求してしかる

べき権利である。この世に生息すべき義務を有して

しゅんどう

蠢動する者は、生息の義務を果すために休養を得ね

ばならぬ。もし神ありて汝なんじは働くために生れたり寝

るために生れたるに非ずと云わば吾輩はこれに答え

て云わん、吾輩は仰せのごとく働くために生れたり

故に働くために休養を乞うと。主人のごとく器械に

不平を吹き込んだまでの木強漢ぼくきやうかんですら、時々は日曜

以外に自弁休養をやるではないか。多感多恨にして

日夜心神を労する吾輩たといごとき者は仮令猫といえども

主人以上に休養を要するは勿論の事である。ただ先さき

つき

刻多々良君が吾輩を目して休養以外に何等の能もな

ぜいぶつ

ののし

い贅物のごとくに罵ったのは少々気掛りである。と

ぶつしょう

かく物象にのみ使役せらるる俗人は、五感の刺激以

外に何等の活動もないので、他を評価するのでも形

骸以外に渉^{わた}らんのは厄介である。何でも尻でも端折^{はしよ}

って、汗でも出さないと働らいていないように考え

ている。達磨^{だるま}と云う坊さんは足の腐るまで座禅をし

て澄ましていたと云うが、仮令^{たと}壁の隙^{すき}から蔦^{つた}が這い

込んで大師の眼口を塞^{ふさ}ぐまで動かないにしろ、寝て

いるんでも死んでいゝるんでもない。頭の中は常に活

動して、廓然無聖などと乙な理窟を考え込んでいる

。儒家にも静坐の工夫と云うのがあるそうだ。これ

だって一室の中に閉居して安閑と壁の修行をするの

ではない。脳中の活力は人一倍熾に燃えている。た

だ外見上は至極沈静端肅の態であるから、天下の凡

眼はこれらの知識巨匠をもつて昏睡仮死の庸人と見

做して無用の長物とか穀潰しとか入らざる誹謗の声

を立てるのである。これらの凡眼は皆形を見て心を見ざる不具なる視覚を有して生れついた者で、――

しかも彼^かの多々良三平君のごときは形を見て心を見ざる第一流の人物であるから、この三平君が吾輩を

目して乾屎橛^{かんしけつ}同等に心得るのももつともだが、恨む

らくは少しく古今の書籍を読んで、やや事物の真相を解し得たる主人までが、浅薄なる三平君に一も二

もなく同意して、猫鍋ねこなべに故障さしはさを挟けしむ景色ききのない事で

ある。しかし一歩退いて考えて見ると、かくまでに

彼等が吾輩を輕蔑けいべつするのも、あながち無理ではない

。大声は俚耳りじに入らず、陽春白雪の詩には和するも

の少なしの喩たとえも古い昔からある事だ。形体以外の活

動を見る能あたわざる者に向つて己靈これいの光輝を見よと強し

ゆるは、坊主に髪を結いえと逼せまるがごとく、鮪まぐろに演説

をして見ろと云うがごとく、電鉄に脱線を要求する
がごとく、主人に辞職を勧告するごとく、三平に金
の事を考えるなと云うがごとくものである。ひっきょう必竟無

理な注文に過ぎん。しかしながら猫といえども社会
的動物である。社会的動物である以上はいかに高く

みずか

自ら標置するとも、或る程度までは社会と調和して

行かねばならん。主人や細君や乃至御さん、三平連づれ

が吾輩を吾輩相当に評価してくれんのは残念ながら
致し方がないとして、不明の結果皮を剥はいで三味線
屋に売り飛ばし、肉を刻んで多々良君の膳のぼに上すよ
うな無分別をやられては由々ゆゆしき大事である。吾輩
は頭をもつて活動すべき天命を受けてこの娑婆しゃばに出
現したほどの古今来ここんらいの猫であれば、非常に大事な身
体である。千金の子しは堂陲どうすいに坐せずとの諺ことわざもある事

なれば、好んで超邁ちようまいを宗そうとして、徒らいたずらに吾身の危険

を求むるのは単に自己の災わざわいなるのみならず、また大

いに天意に背そむく訳である。猛虎も動物園に入れば糞ふん

豚とんの隣りに居を占め、鴻雁こうがんも鳥屋に生擒いけどらるれば雛すう

鶏けいと俎まないたを同じゆうす。庸人ようじんと相互あいごする以上は下くだつて

ようびよう

庸猫と化せざるべからず。庸猫たらんとすれば鼠を

捕とらざるべからず。——吾輩はとうとう鼠をとる事

に極^きめた。

せんだってじゅうから日本は露西亞^{ロシア}と大戦争をし

ているそうだ。吾輩は日本の猫だから無論日本^{びいき}鼻負

である。出来得べくんば混成^{こんせい}猫旅団^{ねこりょだん}を組織して露西

亜兵を引つ搔^かいてやりたいと思うくらいである。か

くまでに元氣旺盛^{おうせい}な吾輩の事であるから鼠の一疋や

二疋はとろうとする意志さえあれば、寝ていても訳

なく捕とれる。昔むかしある人當時有名な禪師に向つて、

どうしたら悟れましようと聞いたら、猫が鼠をねらう

ようにさしやれと答えたそうだ。猫が鼠をとるよう

にとは、かくさえすれば外はずれっこはござらぬと云

う意味である。女賢さかしゆうしてと云う諺はあるが猫

賢さかしゆうして鼠捕とり損そこなうと云う格言はまだ無いはず

だ。して見ればいかに賢かしこい吾輩のごときものでも

鼠の捕れんはずはあるまい。とれんはずはあるまい
どころか捕り損うはずはあるまい。今まで捕らんの
は、捕りたくないからの事さ。春の日はきのうのご
とく暮れて、折々の風に誘わるる花吹雪が台所の腰
障子の破れから飛び込んで手桶ておけの中に浮ぶ影が、薄
暗き勝手用のランプの光りに白く見える。今夜こそ
大手柄をして、うちじゅう驚かしてやろうと決心し

た吾輩は、あらかじめ戦場を見廻つて地形を飲み込

んでおく必要がある。戦鬪線は勿論もちろんあまり広かろう

はずがない。畳数にしたら四畳敷もあろうか、その

一畳を仕切つて半分は流し、半分は酒屋八百屋の御

用を聞く土間である。へつついは貧乏勝手に似合わ

ぬ立派な者で赤の銅壺どうこがぴかぴかして、後ろうしは羽目

板の間まを二尺遺のこして吾輩の鮑貝あわびがいの所在地である。茶

の間に近き六尺は膳碗皿小鉢ぜんわんさらこばちを入れる戸棚となつて

狭せまき台所をいとど狭く仕切つて、横に差し出すむき

出しの棚とすれすれの高さになつてゐる。その下に

摺鉢すりばちが仰向けあおむに置かれて、摺鉢の中には小桶の尻が

吾輩の方を向いてゐる。大根卸し、摺すりこぎ小木が並んで

懸かけてある傍かたわらに火消壺だけが悄然しょうぜんと控ひかえている。

真黒になつた樽木たるきの交叉した真中から一本の自在じざいを

下ろして、先へは平たい大きな籠かごをかける。その籠が時々風に揺れて鷹揚おうように動いている。この籠は何のために釣るすのか、この家うちへ来たてには一向要領いっこうを得なかったが、猫の手の届かぬためわざと食物をここへ入れると云う事を知ってから、人間の意地の悪い事をしみじみ感じた。

これから作戦計画だ。どこで鼠と戦争するかと云

えば無論鼠の出る所でなければならぬ。いかにこつ

ちに便宜べんぎな地形だからと云つて一人で待ち構えてい

てはてんで戦争にならん。ここにおいてか鼠の出口

を研究する必要が生ずる。どの方面から来るかなと

台所の真中に立つて四方を見廻わす。何だか東郷大

将のような心持がする。下女はさつき湯に行つて戻

つて来こん。小供はとくに寝ている。主人は芋坂いもざかの団

子を喰つて歸つて来て相変らず書斎に引き籠こもつてい

る。細君は——細君は何をしているか知らない。大

方居眠りをして山芋の夢でも見ているのだらう。時

々門前を人力じんりきが通るが、通り過ぎた後は一段と淋し

い。わが決心と云い、わが意氣と云い台所の光景と

云い、四辺しへんの寂寞せきばくと云い、全体の感じが悉く悲壯で

ある。どうしても猫中ねこちゆうの東郷大将としか思われない

。こう云う境界きょうがいに入ると物凄ものすごい内に一種の愉快を覚

えるのは誰しも同じ事であるが、吾輩はこの愉快の

底に一大心配が横よこたわっているのを発見した。鼠と戦

争をするのは覚悟の前だから何足来ても恐こわくはない

が、出てくる方面が明瞭でないのは不都合である。

周密なる觀察から得た材料を綜合そうごうして見ると鼠賊そぞくの

逸出いつしゅつするのには三つの行路がある。彼れらがもしど

ぶ鼠であるならば土管を沿うて流しから、へつついの裏手へ廻るに相違ない。その時は火消壺の影に隠れて、帰り道を絶つてやる。あるいは溝へ湯を抜く

漆喰しっくいの穴より風呂場を迂回うかいして勝手へ不意に飛び出

すかも知れない。そうしたら釜の蓋ふたの上に陣取って

眼の下に來た時上から飛び下りて一攫ひとつかみにする。そ

れからとまたあたりを見廻すと戸棚の戸の右の下隅

が半月形に喰い破られて、彼等の出入しゆつにゆうに便なるかの

疑がある。鼻を付けて臭かいで見ると少々鼠臭くさい。も

しここから呐喊とっかんして出たら、柱を楯たてにやり過ごして

おいて、横合からあつと爪をかける。もし天井から

来たらと上を仰ぐと真黒な煤すすがランプの光で輝やい

て、地獄を裏返しに釣るしたごとくちよつと吾輩の

手際てぎわでは上のぼる事も、下くだる事も出来ん。まさかあんな

高い処から落ちてくる事もなからうからとこの方面だけは警戒を解く事にする。それにしても三方から攻撃される懸念けねんがある。一口なら片眼でも退治して見せる。二口ならどうか、こうにかやつてのける自信がある。しかし三口となるといかに本能的に鼠を捕とるべく予期せらるる吾輩も手の付けようがない。さればと云つて車屋の黒ごときものを助勢に頼ん

でくるのも吾輩の威厳に関する。どうしたら好かろう。どうしたら好かろう。どうしたら好かろうと考えて好い智慧ちえが出ない時は、そんな事は起る氣遣きづかいはないと決めるのが一番安心を得る近道である。また法のつかない者は起らないと考えたくなるものである。まず世間を見渡して見給え。きのう貰った花嫁も今日死なんとも限らむこどのんではないか、しかし賀殿は玉椿千代も八千代もな

ど、おめでたい事を並べて心配らしい顔もせんではないか。心配せんのは、心配する価値がないからではない。いくら心配したって法が付かんからである

。吾輩の場合でも三面攻撃は必ず起らぬと断言すべき相当の論拠はないのであるが、起らぬとする方が安心を得るに便利である。安心は万物に必要である。吾輩も安心を欲する。よって三面攻撃は起らぬと

極^きめる。

それでもまだ心配が取れぬから、どう云うものかとだんだん考えて見るとようやく分った。三個の計略のうちいずれを選んだのがもつとも得策であるかの問題に対して、自^{みづか}ら明瞭なる答弁を得るに苦しむからの煩悶^{はんもん}である。戸棚から出るときには吾輩これに応ずる策がある、風呂場から現われる時はこれに

はかりごと

対する計がある、また流しから這い上るときはこれ

を迎うる成算もあるが、そのうちどれか一つに極めき

おおい

ねばならぬとなると大に当惑する。東郷大將はバル

つしまかいきよう

チック艦隊が対馬海峡を通るか、津軽海峡へ出るか

つがるかいきよう

そうやかかいきよう

おおい

、あるいは遠く宗谷海峡を廻るかについて大に心配

されたそうだが、今吾輩が吾輩自身の境遇から想像

して見て、ご困却の段実に御察し申す。吾輩は全体

の状況において東郷閣下に似ているのみならず、この格段なる地位においてもまた東郷閣下とよく苦心を同じゅうする者である。

吾輩がかく夢中になつて智謀をめぐらしていると突然破れた腰障子が開あいて御三おさんの顔がぬうと出る。顔だけ出ると云うのは、手足がないと云う訳ではない。ほかの部分は夜目よめでよく見えんのに、顔だけ

が著るしく強い色をして判然眸底ぼうていに落つるからであ

る。御三はその平常より赤き頬をますます赤くして

洗湯から帰ったついでに、昨夜ゆうべに懲こりてか、早くか

ら勝手の戸締とじまりをする。書斎で主人が俺のステッキを

枕元へ出しておけと云う声が聞える。何のために枕

頭にステッキを飾るのか吾輩には分らなかつた。ま

さか易水えきすいの壮士を気取つて、竜鳴りゅうめいを聞こうと云う酔

狂でもあるまい。きのうは山の芋、今日はステッキ

、明日あすは何になるだろう。

夜はまだ浅い鼠はなかなか出そうにない。吾輩は

大戦の前に一と休養を要する。

主人の勝手には引窓がない。座敷なら欄間らんまと云う

ような所が幅一尺ほど切り抜かれて夏冬吹き通しに
引窓の代理を勤めている。惜し気もなく散る彼岸桜ひがんざくら

を誘うて、颯と吹き込む風に驚ろいて眼を覚ますと

おぼろづき

朧月さえいつの間に差してか、竈の影は斜めに揚

あげ

板いたの上にかかる。寝過ごしはせぬかと二三度耳を振

って家内の容子ようすを窺うかがうと、しんとして昨夜のごとく

柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだろう。

戸棚の中でことごとと音がしだす。小皿の縁ふちを足

で抑えて、中をあらしているらしい。ここから出る
わいと穴の横へすくんで待っている。なかなか出て
来る景色けしきはない。皿の音はやがてやんだが今度はど
んぶりか何かに掛ったらしい、重い音が時々ごとごと
とする。しかも戸を隔ててすぐ向う側でやってい
る、吾輩の鼻づらと距離にしたら三寸も離れておら
ん。時々はこちらよろと穴の口まで足音が近寄る

が、また遠のいて一匹も顔を出すものはない。戸一

枚向うに現在敵が暴行を逞たくましくしているのに、吾輩

はじつと穴の出口で待っておらねばならん随分気の

長い話だ。鼠は旅順りょじゆん碗わんの中で盛に舞踏会を催うして

いる。せめて吾輩の這はい入いれるだけ御三がこの戸を開

けておけば善いのに、気の利かぬ山出しだ。

今度はへつついの影で吾輩の鮑貝あわびがいがことりと鳴る

。敵はこの方面へも来たなど、そーつと忍び足で近

寄ると手桶ておけの間から尻尾しっぽがちらと見えたぎり流しの

下へ隠れてしまった。しばらくすると風呂場でうが

い茶碗が金盥かなだらにかちりと当る。今度は後方うしろだと振り

むく途端に、五寸近くある大おおな奴がひらりと齒磨の

袋を落して椽えんの下へ馳かけ込む。逃がすものかと続い

て飛び下りたらもう影も姿も見えぬ。鼠とを捕るのは

思つたよりむずかしい者である。吾輩は先天的鼠を捕る能力がないのか知らん。

吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から馳け出し、

戸棚を警戒すると流しから飛び上り、台所の真中に

頑張がんばっていると三方面共少々ずつ騒ぎ立てる。小癩こしやく

ひきよう

と云おうか、卑怯と云おうかとうてい彼等は君子の敵でない。吾輩は十五六回はあちら、こちらと気を

疲らし心を勞^{しん}らして奔走努力して見たがついに一度

も成功しない。残念ではあるがかかる小人^{しょうじん}を敵にし

てはいかなる東郷大将も施^{ほど}こすべき策がない。始め

は勇氣もあり敵愾^{てきが いしん}心もあり悲壯と云う崇高な美感さ

えあつたがついには面倒と馬鹿氣ているのと眠いの

と疲れたので台所の真中へ坐つたなり動かない事に

なつた。しかし動かんでも八方睨^{はっほうにら}みを極^きめ込んでい

れば敵は小人だから大した事は出来ないのである。目
ざす敵と思つた奴が、存外けちな野郎だと、戦争が
名誉だと云う感じが消えて悪にくいと云う念だけ残る
。悪にくいと云う念を通り過すと張り合が抜けてぼー
とする。ぼーとしたあとは勝手にしろ、どうせ氣の
利きいた事は出来ないのだからと輕蔑けいべつの極眠きよくねむたくなる
。吾輩は以上の徑路をたどつて、ついに眠くなつた

。吾輩は眠る。休養は敵中に在^あつても必要である。

横向に底^{ひさし}を向いて開いた引窓から、また花吹雪を

一塊^{ひとかたま}りなげ込んで、烈しき風の吾を遶^{めぐ}ると思えば、

戸棚の口から弾丸のごとく飛び出した者が、避くる

間^まもあらばこそ、風を切つて吾輩の左の耳へ喰いつ

く。これに続く黒い影は後^{うし}ろに廻るかと思ふ間もな

く吾輩の尻尾^{しっぽ}へぶら下がる。瞬^{またた}く間の出来事である

。吾輩は何の目的もなく器械的に跳上る。はねあが満身の力

を毛穴に込めてこの怪物を振り落とそうとする。耳

に喰い下がったのは中心を失ってだらりと吾が横顔

に懸る。護謨管ゴムかんのごとき柔かき尻尾の先が思い掛な

く吾輩の口に這入る。くつきよう屈竟の手懸りに、てがか砕けよとば

かり尾を啣くわえながら左右にふると、尾のみは前歯の

間に残って胴体は古新聞で張った壁に当って、揚板

の上に跳ね返る。起き上がるところを隙間なく乗し

かか

掛れば、毬を蹴たるごとく、吾輩の鼻づらを掠めて

かす

釣り段の縁に足を縮めて立つ。彼は棚の上から吾輩

ふち

を見おろす、吾輩は板の間から彼を見上ぐる。距離

は五尺。その中に月の光りが、大幅の帯を空に張る

おおはば

くう

ごとく横に差し込む。吾輩は前足に力を込めて、や

つとばかり棚の上に飛び上がろうとした。前足だけ

は首尾よく棚の縁にかかったが後足は宙にもがいて

いる。尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離るま

じき勢で喰い下っている。吾輩は危うい。前足を懸

け易えて足懸りを深くしようとする。懸け易える度

に尻尾の重みで浅くなる。二三分滑れば落ちねばな

らぬ。吾輩はいよいよ危うい。棚板を爪で搔きむし

る音ががりがりと聞える。これではならぬと左の前

足を抜き易える拍子に、爪を見事に懸け損じたので
吾輩は右の爪一本で棚からぶら下った。自分と尻尾
に喰いつくものの重みで吾輩のからださがぎりぎり
と廻わる。この時まで身動きもせずねらに覘いをつけて
いた棚の上の怪物は、ここぞと吾輩の額を目懸けて棚
の上から石を投ぐるがごとく飛び下りる。吾輩の爪
は一縷いちるのかかりを失う。三つの塊かたまりが一つとなつ

て月の光を豎に切つて下へ落ちる。次の段に乘せて

すりばち

あつた摺鉢と、摺鉢の中の小桶とジャムの空缶が同

こおけ

あきかん

ひとかたまり

じく一塊となつて、下にある火消壺を誘つて、半分

みずがめ

は水甕の中、半分は板の間の上へ転がり出す。すべ

てが深夜にただならぬ物音を立てて死物狂いの吾輩
の魂をさえ寒からしめた。

どうまごえ

「泥棒！」と主人は胴間声を張り上げて寢室から飛

び出して来る。見ると片手にはランプを提さげ、片手

にはステッキを持って、寝ぼけ眼まなこよりは身分相応の

炯々けいけいたる光を放っている。吾輩は鮑貝あわびがいの傍そばにおとな

しくして蹲踞うずくまる。二足の怪物は戸棚の中へ姿をかく

す。主人は手持無沙汰に「何だ誰だ、大きな音をさ

せたのは」と怒気を帯びて相手もいないのに聞いて

いる。月が西に傾いたので、白い光りの一帯は半切はんきれ

ほどに細くなつた。

六

こう暑くては猫といえどもやり切れない。皮を脱

いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだイギリスと英吉利

のシドニー・スミスとか云う人が苦しがつたと云う

話があるが、たとい骨だけにならなくとも好いから

、せめてこの淡灰色の斑入ふいりの毛衣けごろもだけはちよつと洗

い張りでもするか、もしくは当分の中質うちにでも入れ

たいような気がする。人間から見たら猫などは年が

年中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、

至って単純な無事な銭ぜにのかからない生涯しょうがいを送ってい

るように思われるかも知れないが、いくら猫だって

相応に暑さ寒さの感じはある。たまには行水ぎょうずいの一度

くらいあびたくない事もないが、何しろこの毛衣の

上から湯を使った日には乾かすのが容易な事でない

から汗臭いのを我慢してこの年になるまで洗湯の暖の

簾れんを潜くぐった事はない。折々は団扇うちわでも使つて見よう

と云う気も起らんでもないが、とにかく握る事が出

来ないのだから仕方がない。それを思うと人間は贅ぜい

沢^{たく}なものだ。なまで食つてしかるべきものをわざわざ

ざ煮て見たり、焼いて見たり、酢^すに漬^つけて見たり、

味噌^{みそ}をつけて見たり好んで余計な手数^{てすう}を懸けて御互

に恐悦している。着物だつてそうだ。猫のように一

年中同じ物を着通せと云うのは、不完全に生れつい

た彼等にとって、ちと無理かも知れんが、なにもあ

んなに雑多なものを皮膚の上へ載^のせて暮さなくても

の事だ。羊の御厄介になつたり、蚕かいこの御世話になつ

たり、綿畠の御情おなさけさえ受けるに至つては贅ぜい沢は無

能の結果だと断言しても好いくらいだ。衣食はまず

大目に見て勘弁するとしたところで、生存上直接の

利害もないところまでこの調子で押して行くのは毫ごう

も合点がてんが行かぬ。第一頭の毛などと云うものは自然

に生えるものだから、放ほうっておく方がもつとも簡便

で当人のためになるだろうと思うのに、彼等はいら

ぬ算段をして種々雑多な恰好かつこうをこしらえて得意であ

る。坊主とか自称するものはいつ見ても頭を青くし

ている。暑いとその上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾ずきん

で包む。これでは何のために青い物を出しているの

か主意が立たんではないか。そうかと思うと櫛くしとか

称する無意味な鋸のこぎり様の道具を用いて頭の毛を左右に

等分して嬉しがつてるのもある。等分にしないと七

分三分の割合で頭蓋骨ずがいこつの上へ人為的くかくの区劃を立てる

。中にはこの仕切りがつむじを通り過して後ろうしまで

食はみ出しているのがある。まるで贗造がんぞうの芭蕉葉ばしょうのよ

うだ。その次には脳天を平らに刈はって左右は真直に

切り落す。丸い頭へ四角な枠わくをはめているから、植

木屋を入れた杉垣根の写生としか受け取れない。こ

のほか五分刈、三分刈、一分刈さえあると云う話だから、しまいには頭の裏まで刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などと云う新奇な奴が流行するかも知れない。とにかくそんなに憂身うきみを窺やつしてどうするつもりか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか使わないと云うのから贅沢だ。四本であるけばそれだけはかも行く訳なのに、いつでも二本です

まして、残る二本は到来の棒鱈ぼうだらのように手持無沙汰

にぶら下げているのは馬鹿馬鹿しい。これで見ると

人間はよほど猫より閑ひまなもので退屈のあまりかよう

ないたずらを考案して楽しんでいるものと察せられる

。ただおかしいのはこの閑人ひまじんがよると障さわると多忙

だ多忙だと触れ廻わるのみならず、その顔色がいか

にも多忙らしい、わるくすると多忙に食い殺されは

しまいかと思われるほどこせつ、いてゐる。彼等のあ
るものは吾輩を見て時々あんなになつたら氣樂でよ
かろうなどと云うが、氣樂でよければなるが好い。

そんなにこせこせしてくれと誰も頼んだ訳でもなか
ろう。自分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して
苦しい苦しいと云うのは自分で火をかんかん起して
暑い暑いと云うようなものだ。猫だつて頭の刈り方

を二十通りも考え出す日には、こう気楽にしてはおられんさ。気楽になりたければ吾輩のように夏でもけごろも毛衣を着て通されるだけの修業をするがよろしい。

——とは云うものの少々熱い。毛衣では全く熱あつ過ぎる。

これでは一手専売の昼寝も出来ない。何かないかな、永らく人間社会の觀察を怠おこたったから、今日は久

あくせく

し振りで彼等が酔興に齷齪する様子を拝見しようか

あいにく

と考えて見たが、生憎主人はこの点に関してすこぶ

しょうぶん

る猫に近い性分である。昼寝は吾輩に劣らぬくらい

やるし、ことに暑中休暇後になつてからは何一つ人

間らしい仕事をせないので、いくら観察をしても一向

いっこう

観察する張合がない。こんな時に迷亭でも来ると胃

弱性の皮膚も幾分か反応を呈して、しばらくでも猫

に遠ざかるだろうに、先生もう来ても好い時だと思
っている、誰とも知らず風呂場でざあざあ水を浴
びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折
々大きな声で相の手を入れている。「いや結構」

「どうも良い心持ちだ」「もう一杯」などと家中に

うちじゅう

響き渡るような声を出す。主人のうちへ来てこんな

大きな声と、こんな無作法な真似をやるものはほか

ぶさほう

にはない。迷亭に極きまっている。

いよいよ来たな、これで今日半日は潰つぶせると思っ

ていると、先生汗を拭ふいて肩を入れて例のごとく座

敷までずかずか上つて来て「奥さん、苦沙弥君はどくしやみ

うしました」と呼ばわりながら帽子を畳の上へ抛ほうり

出す。細君は隣座敷で針箱の側そばへ突っ伏して好い心

持ちに寝ている最中にワンワンと何だか鼓膜へ答え

るほどの響がしたのではつと驚ろいて、醒めぬ眼を
わざと睜みはつて座敷へ出て来ると迷亭が薩摩上布を着
て勝手な所へ陣取つてしきりに扇使いをしている。

「おやいらしやいまし」と云つたが少々狼狽ろうばいの気味

で「ちつとも存じませんでした」と鼻の頭へ汗をか
いたまま御辞儀をする。「いえ、今来たばかりなん
ですよ。今風呂場で御三おさんに水を掛けて貰つてね。よ

うやく生き帰ったところで——どうも暑いじやあり

りょうさんち

ませんか」「この両三日は、ただじつとしておりまして汗が出るくらいで、大變御暑うございます。

——でも御変りもございませんで」と細君は依然と

して鼻の汗をとらない。「ええありがとうございます。なに暑

いくらいでそんなに変りやしませんや。しかしこの

暑さは別物ですよ。どうも体がだるくってね」「私わたく

しなども、ついに昼寝などを致した事がないんでございますが、こう暑いとつい——」「やりますかね。好いですよ。昼寝られて、夜寝られりや、こんな結構な事はないでさあ」とあいかわらず呑気のんきな事を並べて見たがそれだけでは不足と見えて「私わたしなんざ、寝たくない、質たちでね。苦沙弥君などのように来るたんびに寝ている人を見ると羨うらやましいですよ。もっと

も胃弱にこの暑さは答えるからね。丈夫な人でも今日なんかは首を肩の上に載^のせてるのが退儀でさあ。

さればと云つて載つてゐる以上はもぎとる訳にも行かずね」と迷亭君いつになく首の処置に窮している。

「奥さんなんざ首の上へまだ載つけておくものがあるんだから、坐つちやいられないはずだ。鬚^{まげ}の重み

だけでも横になりたくありませんよ」と云うと細君は

今まで寝ていたのが齧かっこうの恰好から露見したと思つて

「ホホホ口の悪い」と云いながら頭をいじつて見る

。

迷亭はそんな事には頓着なく「奥さん、昨日きのうはね

、屋根の上で玉子のフライをして見ましたよ」と妙

な事を云う。「フライをどうなさったんでございま

す」「屋根の瓦があまり見事に焼けていましたから

「ただ置くのも勿体ないと思つてね。バタを溶かして玉子を落したんでさあ」「あらまあ」「ところがやっぱり天日てんぴは思うように行きませんや。なかなか半熟にならないから、下へおりて新聞を読んでいると客が来たもんだからつい忘れてしまつて、今朝になつて急に思い出して、もう大丈夫だろうと上つて見たらね」「どうなつておりました」「半熟どころ

か、すっかり流れてしまいました」「おやおや」と
細君は八の字を寄せながら感嘆した。

「しかし土用中あんなに涼しくって、今頃から暑くなるのは不思議ですね」「ほんとでございますよ。

せんだってじゅうは単衣ひとえでは寒いくらいでございま

したのに、一昨日おとといから急に暑くなりましてね」「蟹かに

なら横に這はうところだが今年の気候はあ、と、び、さ、り、を

するんですよ。倒行とうこうして逆施げきしすまた可ならずやと云

うような事を言っているかも知れない」「なんでござんす、それは」「いえ、何でもないのです。どうもこの気候の逆戻りをするところはまるでハーキュリスの牛ですよ」と図に乗っていいよいよ変ちきりんな事を言うと、果せるかな細君は分らない。しかし

最前の倒行して逆施すで少々懲こりているから、今度

はただ「へえー」と云つたのみで問い返さなかつた。
これを問い返されないと迷亭はせつかく持ち出した甲斐がない。「奥さん、ハーキュリスの牛を御存じですか」「そんな牛は存じませんわ」「御存じないですか、ちよつと講釈をしましうか」と云うと細君もそれには及びませんとも言ひ兼ねたものだから「ええ」と云つた。「昔^{むか}しハーキュリスが牛を引

「張つて来たんです」「そのハーキュリスと云うのは牛飼でもござんすか」「牛飼じゃありませんよ。牛飼やいろはの亭主じゃありません。その節は希臘シヤにまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね」

「あら希臘のお話しなの？　そんなら、そうおっしゃればいいのに」と細君は希臘と云う国名だけは心得ている。「だってハーキュリスじゃありませんか」

「ハーキュリスなら希臘なんですか」「ええハーキュリスは希臘の英雄でさあ」「どうりで、知らないと思いました。それでその男がどうしたんで——」

「その男がね奥さん見たように眠くなつてぐうぐう寝ている——」「あらいやだ」「寝ている間に、ヴァルカンの子が来ましてね」「ヴァルカンで何です」「ヴァルカンは鍛冶屋かじやですよ。この鍛冶屋のせ

がれがその牛を盗んだんでさあ。ところがね。牛の

尻尾しっぽを持ってぐいぐい引いて行つたもんだからハー

キュリスが眼を覚さまして牛やーい牛やーいと尋ねて

あるいても分らないんです。分らないはずでさあ。

牛の足跡をつけたつて前の方へあるかして連れて行

つたんじやありませんもの、後うしろへ後うしろへと引きず

つて行つたんですからね。鍛冶屋のせがれにしては

大出来ですよ」と迷亭先生はすでに天氣の話は忘れている。

「時に御主人はどうしました。相変らず午睡ひるねですか

ね。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙

弥君のように日課としてやるのは少々俗気がありま

すね。何の事もない毎日少しずつ死んで見るような

ものですぜ、奥さん御手数おてすうだがちよつと起してい

「っしやい」と催促すると細君は同感と見えて「ええ、ほんとにあれでは困ります。第一あなた、からだが悪くなるばかりですから。今御飯をいただいたばかりなのに」と立ちかけると迷亭先生は「奥さん、御飯と云やあ、僕はまだ御飯をいただかないんですかね」と平気な顔をして聞きもせぬ事を吹聴する。ふいちよう

。「おやまあ、時分どきだのにちつとも気が付きま

せんで――それじゃ何もございませんが御茶漬でも
「いえ御茶漬なんか頂戴しなくつても好いですよ
」 「それでも、あなた、どうせ御口^{あつ}に合うようなもの
はございませんが」と細君少々厭味を並べる。迷
亭は悟ったもので「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免
蒙るんです。今途中で御馳走を逃^{あつ}らえて来ましたか
ら、そいつを一つここでしただきますよ」ととうて

しろうと

い素人には出来そうもない事を述べる。細君はたつ

ひとこと

た一言「まあ！」と云ったがそのまあうちの中には驚ろ

いたまあと、気を悪くしたまあと、手てすう数が省けて

ありがたいと云うまあが合併している。

ところへ主人が、いつになくあまりやかましいの

で、寝つき掛った眠をさかに扱こかれたような心持で

ふらふらと書斎から出て来る。「相変らずやかま

しい男だ。せつかく好い心持に寝ようとしたところ

を」と欠伸交りにあくびまじ仏頂面ぶつちやうづらをする。「いや御目おめざめ覚かね

。鳳眠ほうみんを驚かし奉つてはなはだ相済まん。しかした

まには好かろう。さあ坐りたまえ」とどつちが客だ

か分らぬ挨拶をする。主人は無言のまま座に着いて

寄木細工の巻煙草入から「朝日」を一本出してすば

すば吸い始めたが、ふと向むこうの隅すみに転がっている迷亭

の帽子に眼をつけて「君帽子を買ったね」と云った。
迷亭はすぐさま「どうだい」と自慢らしく主人と
細君の前に差し出す。「まあ奇麗だ事。大変目が細
かくって柔らかいんですね」と細君はしきりに撫で
廻わす。「奥さんこの帽子は重宝ちようほうですよ、どうでも
言う事を聞きますからね」と拳骨げんこつをかためてパナマ
の横ッ腹をばかりと張り付けると、なるほど意のご

とく拳こぶしほどな穴があいた。細君が「へえ」と驚く間ま

もなく、この度は拳骨を裏側へ入れてうんと突ツ張

ると釜かまの頭がぽかりと尖とんがる。次には帽子を取つ

て鍰つばと鍰とを両側から押し潰つぶして見せる。潰れた帽

子は麵棒めんぼうで延のした蕎麦そばのように平たくなる。それを

片端から蓆むしろでも巻くごとくぐるぐる畳む。「どうで

すこの通り」と丸めた帽子を懷中へ入れて見せる。

「不思議です事ねえ」と細君は歸天齋正一の手品で

きてんさいしやういち

も見物しているように感嘆すると、迷亭もその氣に

なつたものと見えて、右から懷中に収めた帽子をわ

ざと左の袖口から引つ張り出して「どこにも傷はあ

そでぐち

りません」と元のごとくに直して、人さし指の先へ

釜の底を載せてくるくると廻す。もう休めるかと思

の

や

つたら最後にぽんと後ろへ放^なげてその上へ堂^どつさり

うし

と尻餅を突いた。「君大丈夫かい」と主人さえ懸念けねん

らしい顔をする。細君は無論の事心配そうに「せつ

かく見事な帽子をもし壊こわしでもしちやあ大変です

から、もう好い加減になすったら宜ようござんしょう

」と注意をする。得意なのは持主だけで「ところが

壊こわれないから妙でしょう」と、くちやくちやにな

ったのを尻の下から取り出してそのまま頭へ載せる

と、不思議な事には、頭の恰好かっこうにたちまち回復する

。「実に丈夫な帽子です事ねえ、どうしたんでしよう」と細君がいよいよ感心すると「なにどうもしたんじゃないやありません、元からこう云う帽子なんです」と迷亭は帽子を被ったまま細君に返事をしている。

「あなたも、あんな帽子を御買になったら、いいでしょう」としばらくして細君は主人に勧めかけた。

「だって苦沙弥君は立派な麦藁むぎわらの奴を持つてるじゃ

ありませんか」「ところがあなた、せんだって小供

があれを踏み潰つぶしてしましまして」「おやおやそり

や惜しい事をしましたね」「だから今度はあなたの

ような丈夫で奇麗なのを買ったら善かろうと思いま

すんで」と細君はパナマの価段ねだんを知らないものだか

ら「これになさいよ、ねえ、あなた」としきりに主

人に勧告している。

迷亭君は今度は右の袂たもとの中から赤いケース入りの

鍬はさみを取り出して細君に見せる。「奥さん、帽子はそ

のくらいにしてこの鍬を御覧なさい。これがまたす

こぶる重宝ちようほうな奴で、これで十四通りに使えるんです

「この鍬が出ないと主人は細君のためにパナマ責め
になるところであつたが、幸に細君が女として持つ

て生れた好奇心のために、この厄運やくうんを免まぬかれたのは

迷亭の機転と云わんよりむしろ僥倖ぎようこうの仕合せだと吾

輩は看破した。「その鋏がどうして十四通りに使え

ます」と聞くや否や迷亭君は大得意な調子で「今一々説明しますから聞いていらっしやい。いいですか

みかづきがた

。ここに三日月形の欠け目がありましたよう、ここへ

葉巻を入れてぷつりと口を切るんです。それからこ

の根にちよと細工がありました。よう、これで針金をぽつぽつやりますね。次には平たくして紙の上へ横に置く^{じょうぎ}と定規の用をする。また刃^はの裏には度盛^{どもり}がしてあるから物指^{ものさし}の代用も出来る。こちらの表にはヤスリが付いているこれで爪を磨^すりまさあ。ようがすか。この先^さきを螺旋鋏^{らせんぴよう}の頭へ刺し込んでぎりぎり廻す。と金槌^{かなづち}にも使える。うんと突き込んでこじ開けると

大抵の釘付くぎづけの箱なんざあ苦もなく蓋ふたがとれる。まっ

た、こちらの刃の先は錐きりに出来ている。ここん所ところは

書き損いの字を削けずる場所で、ばらばらに離すと、ナ

イフとなる。一番しまいに——さあ奥さん、この一

番しまいが大変面白いんです、ここに蠅はえの眼玉くら

いな大きさの球たまがありましたよう、ちよつと、覗のぞいて

御覧なさい」「いやですわまたきつと馬鹿になさる

んだから」 「そう信用がなくっちゃ困ったね。だが

だま

欺だまされたと思つて、ちよいと覗いて御覧なさいな。

え？

厭いやですか、ちよつとでいいから」と鉈はさみを細君

に渡す。

細君は覚束おぼつかなげに鉈を取りあげて、例の蠅

の眼玉の所へ自分の眼玉を付けてしきりに覗ねらいをつけ

ている。「どうです」「何だか真黒ですわ」「真黒

じやいけませんね。もう少し障子の方へ向いて、そう

鋏を寝かさずに——そうそうそれなら見えるでしょう」 「おやまあ写真ですねえ。どうしてこんな小さな写真を張り付けたんでしょう」 「そこが面白いところであ」と細君と迷亭はしきりに問答をしている。最前から黙っていた主人はこの時急に写真が見たくなつたものと見えて「おい俺にもちよつと覽みせろ」と云うと細君は鋏を顔へ押し付けたまま「実に

奇麗です事、裸体の美人ですね」と云つてなかなか離さない。「おいちよつと御見せと云うのに」「まあ待っていらつしやいよ。美くしい髪ですね。腰までありますよ。少し仰向あおむいて恐ろしい背せいの高い女だ事、しかし美人ですね」「おい御見せと云つたら、大抵にして見せるがいい」と主人は大に急おおいせき込んで細君に食つて掛る。「へえ御待遠さま、たんと御覧

遊ばせ」と細君が鋏を主人に渡す時に、勝手から御お

さん
おあつらえ

三が御客さまの御詔が参りましたと、二個の箆蕎麦ざるそばを座敷へ持つて来る。

「奥さんこれが僕の自弁じべんの御馳走ですよ。ちよつと

御免蒙って、ここではくつく事に致しますから」と

ていねい

叮嚀に御辞儀をする。真面目なような巫山ふざけ戯たよう

な動作だから細君も応対に窮したと見えて「さあど

うぞ」と軽く返事をしたぎり拝見している。主人は
ようやく写真から眼を放して「君この暑いのに蕎麦そば
は毒だぜ」と云った。「なあに大丈夫、好きなもの
は滅多めったに中あたるもんじやない」と蒸籠せいろうの蓋ふたをとる。

「打ち立てはありがたいな。蕎麦そばの延びたのと、人

間の間まが抜けたのは由来たのもしくはないもんだよ」
と薬味やくみをツユの中へ入れて無茶苦茶に掻かき廻わす。

「君そんなに山葵わさびを入れると辛いかいぜ」と主人は心

配そうに注意した。「蕎麦はツユと山葵で食うもん

だあね。君は蕎麦が嫌いなんだろう」「僕は饅頭うどんが

好きだ」「饅頭は馬子まごが食うもんだ。蕎麦の味を解

しない人ほど気の毒な事はない」と云いながら杉箸すぎばし

をむざと突き込んで出来るだけ多くの分量を二寸ば

かりの高さにしやくい上げた。「奥さん蕎麦を食う

にもいろいろ流儀がありますがね。初心しよしんの者に限つ

て、無暗むやみにツユを着けて、そうして口の内うちでくちや

くちやややっていますね。あれじや蕎麦の味はないで

すよ。何でも、こう、一ひとしゃくいに引つ掛けてね

」と云いつつ箸を上げると、長い奴が勢揃せいぞろいをして

一尺ばかり空中に釣るし上げられる。迷亭先生もう

善かろうと思つて下を見ると、まだ十二三本の尾が

蒸籠の底を離れないで簀すだ垂れの上に纏綿てんめんしている。

「こいつは長いな、どうです奥さん、この長さ加減は」とまた奥さんに相の手を要求する。奥さんは

「長いものでございますね」とさも感心したらしい返事をする。「この長い奴へツ、ユ、を三分一さんぶいちつけて、

一口に飲んでしまうんだね。噛かんじやいけない。噛

んじや蕎麦の味がなくなる。つるつると咽のど喉すべを滑り

込むところがねうちだよ」はしと思い切つて箸を高く上

げると蕎麦はようやくの事で地を離れた。ゆんで左手に受

ける茶碗の中へ、箸を少しずつ落して、尻尾の先か

らだんだんにひた浸すと、アーキミジスの理論によつて

蕎麦の浸つかつた分量だけツユの嵩かさが増してくる。と

ころが茶碗の中には元からツユが八分目這入はいつてい

るから、迷亭の箸にかかった蕎麦の四半分しはんぶんも浸つからな

い先に茶碗はツユで一杯になつてしまつた。迷亭の箸は茶碗を去る^さ五寸の上に至つてぴたりと留まつたきりしばらく動かない。動かないのも無理はない。

少しでも卸^{おろ}せばツユが溢^{こぼ}れるばかりである。迷亭も

ここに至つて少し蹣蹣^{ちゅうちよ}の体であつたが、たちまち脱^だ

兎^{つと}の勢を以て、口を箸の方へ持つて行つたなと思う

間^まもなく、つるつるちゅうと音がして咽喉^{のどぶえ}笛が一二

度上下へ無理に動いたら箸の先の蕎麦は消えてなくなつておつた。見ると迷亭君の両眼から涙のようなものが一二滴眼尻めじりから頬へ流れ出した。山葵わさびが利きいたものか、飲み込むのに骨が折れたものかこれはいまだに判然しない。「感心だなあ。よくそんなに一どきに飲み込めたものだ」と主人が敬服すると「御見事です事ねえ」と細君も迷亭の手際てぎわを激賞した。

迷亭は何にも云わないで箸を置いて胸を二三度敲たたい

たが「奥さんざるは大概三口半か四口で食うんですね

。それより手数てすうを掛けちや旨うまく食えませんよ」とハ

ンケチで口を拭いてちよつと一息入れている。

ところへ寒月君が、どう云う了見りようけんかこの暑いのに

御苦労にも冬帽を被かぶつて両足を埃ほこりだらけにしてやつ

てくる。「いや好男子の御入来ごにゅうらいだが、喰い掛けたも

のだからちよつと失敬しますよ」と迷亭君は衆人環しゅうじんか

座んざの裏うちにあつて臆面おくめんもなく残つた蒸籠たいらを平げる。今

度は先刻さつきのように目覚めざましい食方もしなかつた代りに

ハンケチを使つて、途中で息を入れると云う不体

裁もなく、蒸籠せいろう二つを安々とやってのけたのは結構

だつた。

「寒月君博士論文はもう脱稿するのかね」と主人が

聞くと迷亭もその後あとから「金田令嬢がお待ちかねだ

そうそうていしゆつ

から早々呈出したまえ」と云う。寒月君は例のごと

く薄気味の悪い笑を洩もらして「罪ですからなるべく

早く出して安心させてやりたいのですが、何しろ問

題が問題で、よほど労力いの入る研究を要するのです

から」と本気の沙汰とも思われない事を本気の沙汰

らしく云う。「そうさ問題が問題だから、そう鼻の

言う通りにもならないね。もつともあの鼻なら充分鼻息をうかがうだけの価値はあるがね」と迷亭も寒月流な挨拶をする。比較的眞面目なのは主人である。「君の論文の問題は何とか云ったつけな」「蛙の眼球めだまの電動作用に対する紫外光線しがいこうせんの影響と云うのです」「そりや奇だね。さすがは寒月先生だ、蛙の眼球は振ふるってるよ。どうだろう苦沙弥君、論文脱稿

前にその問題だけでも金田家へ報知しておいては」

主人は迷亭の云う事には取り合わないで「君そんな事が骨の折れる研究かね」と寒月君に聞く。「ええ

、なかなか複雑な問題です、第一蛙の眼球のレンズ

の構造がそんな単簡たんかんなものでありませんからね。そ

れでいろいろ実験もしなくちやなりません。がまず丸

い硝子ガラスの球たまをこしらえてそれからやろうと思ってい

ます」 「硝子の球なんかガラス屋へ行けば訳ないじゃないか」 「どうして——どうして」と寒月先生少々反身そりみになる。「元来円えんとか直線とか云うのは幾何学的のもので、あの定義に合ったような理想的な円や直線は現実世界にはないもんです」 「ないもんなら、廃よしたらよかろう」と迷亭が口を出す。「それでまず実験上差さし支つかえないくらいな球を作って見よ

うと思ひましてね。せんだつてからやり始めたので
す」「出来たかい」と主人が訳のないようにきく。

「出来るものですか」と寒月君が云つたが、これでは少々矛盾だと気が付いたと見えて「どうもむずかしいです。だんだん磨^すつて少しこつち側の半径が長過ぎるからと思つてそつちを心持落すと、さあ大變今度は向側^{むこうがわ}が長くなる。そいつを骨を折つてようや

く磨り潰したかと思うと全体の形がいびつになるん

です。やっとの思いでこのいびつを取るとまた直径

に狂いが出来ます。始めは林檎りんごほどな大きさのもの

がだんだん小さくなつて苺いちごほどになります。それで

も根気よくやっていると大豆だいずほどになります。大豆

ほどになつてもまだ完全な円は出来ませんよ。私も

随分熱心に磨りましたが——この正月からガラス玉

を大小六個磨り潰しましたよ」と嘘だか本当だか見

ちようちよう

当のつかぬところを喋々と述べる。「どこでそんな

に磨っているんだい」「やっぱり学校の実験室です

、朝磨り始めて、昼飯のときちよつと休んでそれか

ら暗くなるまで磨るんですが、なかなか楽じゃあり

ません」「それじゃ君が近頃忙がしい忙がしいと云

って毎日日曜でも学校へ行くのはその珠を磨りに行

くんだね」 「全く目下のところは朝から晩まで珠ばかり磨っています」 「珠作りの博士となつて入り込みしは——と云うところだね。しかしその熱心を聞かせたら、いかな鼻でも少しはありがたがるだろう。実は先日僕がある用事があつて図書館へ行つて歸りに門を出ようとしたら偶然老梅君に出逢つたのさ。ろうばいあの男が卒業後図書館に足が向くとはよほど不思議。

議な事だと思つて感心に勉強するねと云つたら先生
妙な顔をして、なに本を読みに来たんじやない、今
門前を通り掛つたらちよつと小用がしたくなつたか
こよう

ら拝借に立ち寄つたんだと云つたんで大笑をしたが

、老梅君と君とは反対の好例として新撰蒙求しんせんもうぎゆうに是非

入りたいよ」と迷亭君例のごとく長たらしい註釈を
つける。主人は少し真面目になつて「君そう毎日毎

日珠ばかり磨つてるのもよからうが、元来いつ頃出

来上るつもりかね」と聞く。「まあこの容子ようすじや十

年くらいかかりそうです」と寒月君は主人より吞氣のんき

に見受けられる。「十年じや——もう少し早く磨り

上げたらよからう」「十年じや早い方です、事によ

ると廿年くらいかかります」「そいつは大変だ、そ

れじや容易に博士にやなれないじやないか」「ええ

一日も早くなつて安心さしてやりたいのですがとにかく珠を磨り上げなくっちゃ肝心の実験が出来ませんから……」

寒月君はちよつと句を切つて「何、そんなにご心配には及びませんよ。金田でも私の珠ばかり磨つてる事はよく承知しています。実は二三にさんち日前行つた時にもよく事情を話して来ました」としたり顔に述べ

立てる。すると今まで三人の談話を分らぬながら傾聴していた細君が「それでも金田さんは家族中残らず、先月から大磯へ行つていらつしやるじやありませんか」と不審そうに尋ねる。寒月君もこれには少し辟易へきえきの体であつたが「そりや妙ですな、どうしたんだろう」ととぼけている。こう云う時に重宝なのは迷亭君で、話の途切れた時、極きまりの悪い時、眠く

なつた時、困つた時、どんな時でも必ず横合から飛

び出してくる。「先月大磯へ行つたものにりょうさんち両三日前

東京で逢うなどは神秘的でいい。いわゆる霊の交換

だね。相思の情の切な時にはよくそう云う現象が起

るものだ。ちよつと聞くと夢のようだが、夢にして

も現実よりたしかな夢だ。奥さんのように別に思い

も思われもしない苦沙弥君の所へ片付いて生涯しょうがい恋の

何物たるを御解しにならん方には、御不審ももつともだが……」「あら何を証拠にそんな事をおっしやるの。随分輕蔑けいべつなさるのね」と細君は中途から不意に迷亭に切り付ける。「君だつて恋煩こいわずらいなんかした事はなさそうじゃないか」と主人も正面から細君に助太刀をする。「そりや僕の艶聞えんぶんなどは、いくら有つてもみんな七十五日以上経過しているから、君方きみがた

の記憶には残っていないかも知れないが——実はこれでも失恋の結果、この歳になるまで独身で暮らしているんだよ」と一順列座の顔を公平に見廻わす。

「ホホホ面白い事」と云ったのは細君で、「馬鹿にしていらあ」と庭の方を向いたのは主人である。

ただ寒月君だけは「どうかその懐旧談を後学こうがくのため
に伺いたいもので」と相変らずにやにやする。

「僕のも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら

たいぶ

非常に受けるのだが、惜しい事に先生は永眠されたから、実のところ話す張合もないんだが、せつかくだから打ち開けるよ。その代りしまいまで謹聴しなくっちゃいけないよ」と念を押していいよ本文に取り掛る。「回顧すると今を去る事——ええと——

何年前だったかな——面倒だからほぼ十五六年前と

しておこう」
「冗談じゃない」と主人は鼻からフン

と息をした。「大變物覚えが御悪いのね」と細君が

ひやかした。寒月君だけは約束を守つて一言も云わ

ずに、早くあとが聴きたいと云う風をする。「何で

もある年の冬の事だが、僕が越後の国は蒲原郡筍谷

かんばらごおけのこだに

を通つて、蛸壺峠たこつぽとうげへかかつて、これからいよいよ会

あい

津領づりようへ出ようとするところだ」「妙なところだな」

と主人がまた邪魔をする。「だまって聴いていらつ
しやいよ。面白いから」と細君が制する。「ところ
が日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がない
から峠の真中にある一軒屋をたた敲いて、これこれかよ
うかようしかじかの次第だから、どうか留めてくれ
と云うと、御安い御用です、さあ御上がんなさいと
はだかろうそく裸蠟燭を僕の顔に差しつけた娘の顔を見て僕はぶる

ぶると悸ふるえたがね。僕はその時から恋と云う曲者くせものの

魔力を切実に自覚したね」「おやいやだ。そんな山

の中にも美しい人があるんでしうか」「山だつて

海だつて、奥さん、その娘を一目あなたに見せたい

と思うくらいですよ、文金ぶんきんの高島田たかしまだに髪を結いいまし

てね」「へえー」と細君はあつけに取られている。

「這はい入つて見ると八畳の真中に大きな囲い炉裏ろりが切つ

てあつて、その周りに娘と娘の爺さんじいと婆さんばあと僕

と四人坐つたんですがね。さぞ御腹おなかが御減りおへでしよ

うと云いますから、何でも善いから早く食わせ給え

と請求したんです。すると爺さんがせつかくの御客

さまだから蛇飯へびめしでも炊たいて上げようと云うんです。

さあこれからがいよいよ失恋に取り掛るところだか

らしつかりして聴きたまえ」「先生しつかりして聴

く事は聴きますが、なんぼ越後の国だつて冬、蛇が
いやしますまい」「うん、そりや一応もつともな質
問だよ。しかしこんな詩的な話しになるとそう理窟りくつ
にばかり拘泥こうでいしてはいられないからね。鏡花の小説
にや雪の中から蟹かにが出てくるじゃないか」と云つた
ら寒月君は「なるほど」と云つたきりまた謹聴の態
度に復した。

「その時分の僕は随分悪^{あく}もの食いの隊長で、蝗^{いなづま}、な

めくじ、赤蛙などは食い厭^あきていたくらいなところ

だから、蛇飯は乙^{おつ}だ。早速御馳走になろうと爺さん

に返事をした。そこで爺さん囲炉裏の上へ鍋^{なべ}をかけ

て、その中へ米を入れてぐずぐず煮出したものだね

。不思議な事にはその鍋^{なべ}の蓋^{ふた}を見ると大小十個ばか

りの穴があいている。その穴から湯気がふうふう吹

くから、旨い工夫をしたものだ、田舎いなかにしては感心

だと見ていると、爺さんふと立って、どこかへ出て

行つたがしばらくすると、大きな筧ざるを小脇かに抱い込

んで歸つて来た。何気なくこれを囲炉裏そばの傍へ置い

たから、その中を覗のぞいて見ると――いたね。長い奴

が、寒いもんだから御互にとぐろの捲まきくらをやつ

て塊かたまっていきましたね」「もうそんな御話よしは廃し

になさいよ。厭らしい」と細君は眉に八の字を寄せ
る。「どうしてこれが失恋の大原因になるんだから
なかなか廃せませんや。爺さんはやがて左手に鍋の
蓋をとって、右手に例の塊まった長い奴を無雑作に
つかまえて、いきなり鍋の中へ放り込んで、すぐ上
から蓋をしたが、さすがの僕もその時ばかりははっ
と息の穴が塞ふさがったかと思つたよ」「もう御やめにな

さいよ。気味きびの悪るい」と細君しきりに怖こわがつてい

る。「もう少しで失恋になるからしばらく辛抱しんぼうして

いらつしやい。すると一分立つか立たないうちに蓋

の穴から鎌首かまくびがひよいと一つ出ましたのには驚ろき

ましたよ。やあ出たなと思うと、隣の穴からもまた

ひよいと顔を出した。また出たよと云ううち、あち

らからも出る。こちらからも出る。とうとう鍋中蛇なべじゅう

の面^{つら}だらけになつてしまった」「なんで、そんなに

首を出すんだい」「鍋の中が熱いから、苦しまぎれ

に這い出そうとするのさ。やがて爺さんは、もうよ

かろう、引っ張らっしとか何とか云うと、婆さんは

はあーと答える、娘はあいと挨拶をして、名々^{めいめい}に蛇

の頭を持ってぐいと引く。肉は鍋の中に残るが、骨

だけは奇麗に離れて、頭を引くと共に長いのが面白

いように抜け出してくる」「蛇の骨抜きですわね」と
寒月君が笑いながら聞くと「全くの事骨抜きだ、器用
な事をやるじゃないか。それから蓋を取って、杓子しゃくし
でもって飯と肉を矢鱈やたらに掻き交まぜて、さあ召し上が
れと来た」「食ったのかい」と主人が冷淡に尋ねる
と、細君は苦にがい顔をして「もう廃よしになさいよ、胸
が悪わるくって御飯も何もたべられやしない」と愚痴

をこぼす。「奥さんは蛇飯を召し上がらんから、そんな事をおっしやるが、まあ一遍たべてご覧なさい、あの味ばかりは生涯しょうがい忘れられませんぜ」「おお、いやだ、誰が食べるもんですか」「そこで充分御饌ごぜんも頂戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見るし、もう思いおく事はないと考えていると、御休みなさいましと云うので、旅の労れつかもある事だから、

仰に従つて、ごろりと横になると、すまん訳だが前

後を忘却して寝てしまった」「それからどうなさい

ました」と今度は細君の方から催促する。「それか

あくるあさ

ら明朝になつて眼を覚さましてからが失恋でさあ」「ど

うかなさつたんですか」「いえ別にどうもしやしま

まきたばこ

せんがね。朝起きて巻煙草をふかしながら裏の窓か

かけひ

そば

やかんあたま

ら見ていると、向うの笥かけひの傍そばで、薬缶頭やかんあたまが顔を洗つ

ているんでさあ」「爺さんか婆さんか」と主人が聞く。「それがさ、僕にも識別しにくかったから、しばらく拝見して、その薬缶がこちらを向く段になつて驚ろいたね。それが僕の初恋をした昨夜ゆうべの娘なんだもの」「だって娘は島田に結いつているとさつき云つたじゃないか」「前夜は島田さ、しかも見事な島田さ。ところが翌朝は丸薬缶さ」「人を馬鹿に

していらあ」と主人は例によつて天井の方へ視線を

そらす。「僕も不思議の極きよく内心少々怖こわくなつたから

、なお余よそ所ながら容ようす子を窺うかがつていると、薬缶はよう

やく顔を洗おわい了つて、傍かたえの石の上に置いてあつた

高島田の鬢かづらを無雑作に被かぶつて、すましてうちへ這入はい

つたんでなるほども思つた。なるほどとは思つたよ

うなものその時から、とうとう失恋の果敢はかなき運

命をかこつ身となつてしまった」 「くだらない失恋

もあつたもんだ。ねえ、寒月君、それだから、失恋

でも、こんなに陽気で元気がいいんだよ」と主人が

寒月君に向つて迷亭君の失恋を評すると、寒月君は

「しかしその娘が丸薬缶でなくつてめでたく東京へ

でも連れて御歸りになつたら、先生はなお元氣かも

知れませんよ、とにかくせつかくの娘が禿はげであつた

せんしゅう こんじ

のは千秋の恨事ですなえ。それにしても、そんな若い女がどうして、毛が抜けてしまったんでしよう」

「僕もそれについてはだんだん考えたんだが全く蛇飯を食い過ぎたせいに相違ないと思う。蛇飯てえ奴

はのぼせるからね」 「しかしあなたは、どこも何と

もなく結構でございましたね」 「僕は禿にはなら

ずにすんだが、その代りにこの通りその時から近眼きんがん

になりました」と金縁の眼鏡をとってハンケチで^{てい}丁寧に拭^ふいている。しばらくして主人は思い出したように「全体どこが神秘的なんだい」と念のために聞いて見る。「あの髪はどこで買ったのか、拾ったのかどう考えても未^{いま}だに分らないからそこが神秘さ」と迷亭君はまた眼鏡を元のごとく鼻の上へかける。

「まるで噺^{はな}し家^かの話を聞くようでござんすね」とは

細君の批評であつた。

迷亭の駄弁もこれで一段落を告げたから、もうやめるかと思ひのほか、先生は猿轡さるぐつわでも嵌はめられない。うちはとうてい黙っている事が出来ぬ性たちと見えて、また次のような事をしやべり出した。

「僕の失恋も苦にがい経験だが、あの時あの薬缶やかんを知らずに貰ったが最後生涯の目障りめざわになるんだから、よ

く考えないと険呑けんのもんだよ。結婚なんかは、いざと云う

間際になつて、飛んだところに傷口が隠れているの

を見出みいだす事がある者だから。寒月君などもそんなに

憧憬しょうけいしたり恟忼しょうきやうしたり独ひとりでむずかしがらないで、

篤とくと気を落ちつけて珠たまを磨するがいいよ」といやに異

見めいた事を述べると、寒月君は「ええなるべく珠

ばかり磨こっていたいんですが、向うでそうさせない

んだから弱り切ります」とわざと辟易したような顔

付をする。「そうさ、君などは先方が騒ぎ立てるん

だが、中には滑稽なのがあるよ。あの図書館へ小便

をしに来た老梅君ろうばいなどになるとすこぶる奇だからね

」「どんな事をしたんだい」と主人が調子づいて承うけたま

わる。「なあに、こう云う訳さ。先生その昔静岡の

東西館へ泊った事があるのさ。——たった一と晩だ

ぜ——それでその晩すぐにそこの下女に結婚を申し

込んだのさ。僕も随分呑気のんきだが、まだあれほどには

進化しない。もつともその時分には、あの宿屋に御お

夏なつさんと云う有名な別嬪べっぴんがいて老梅君の座敷へ出た

のがちようどその御夏さんなのだから無理はないが

ね」「無理がないどころか君の何とか峠とまるで同

じじやないか」「少し似ているね、実を云うと僕と

老梅とはそんなに差異はないからな。とにかく、その御夏さんに結婚を申し込んで、まだ返事を聞かないうちに水瓜すいかが食いたくなつたんだがね」「何だつて？」と主人が不思議な顔をする。主人ばかりではない、細君も寒月も申し合せたように首をひねってちよつと考えて見る。迷亭は構わずどんどん話を進行させる。「御夏さんと呼んで静岡に水瓜はあるま

いかと聞くと、御夏さんが、なんぼ静岡だつて水瓜
くらいはありますよと、御盆に水瓜を山盛りにして
持ってくる。そこで老梅君食つたそうだ。山盛りの
水瓜をことごとく平らげて、御夏さんの返事を待つ
ていると、返事の来ないうちに腹が痛み出してね、
うーんうーんと唸^{うな}つたが少しも利^き目^{きめ}がないからまた
御夏さんと呼んで今度は静岡に医者はあるまいかと

聞いたたら、御夏さんがまた、なんぼ静岡だつて医者

くらいはありますよと云つて、天地玄黄とかいう千^せ

字文^{んじもん}を盗んだような名前のドクトルを連れて来た。

翌朝^{あくるあさ}になつて、腹の痛みも御蔭でとれてありがたい

と、出立する十五分前に御夏さんと呼んで、昨日^{きのう}申

し込んだ結婚事件の諾否を尋ねると、御夏さんは笑

いながら静岡には水瓜もあります、御医者もありま

すが一夜作りの御嫁はありませんよと出て行つたきり顔を見せなかったそうだ。それから老梅君も僕同様失恋になつて、図書館へは小便をするほか来なくなつたんだつて、考えると女は罪な者だよ」と云うと主人がいつになく引き受けて「本当にそうだ。せんだつてミュッセの脚本を読んだらそのうちの人物が羅馬の詩人を引用してこんな事を云つていた。――

——羽より軽い者は塵ちりである。塵より軽いものは風で

ある。風より軽い者は女である。女より軽いものは
無むである。——よく穿うがつてゐるだろう。女なんか仕方

がない」と妙なところで力味りきんで見せる。これを承うけたまわ

った細君は承知しない。「女の軽いのがいけないと

おっしゃるけれども、男の重いんだって好い事はな

いでしよう」「重いた、どんな事だ」「重いと云う

な重い事ですわ、あなたのようなのです」 「俺がな
んで重い」 「重いじゃありませんか」と妙な議論が
始まる。迷亭は面白そうに聞いていたが、やがて口
を開いて「そう赤くなつて互に弁難攻撃をするとこ
ろが夫婦の真相と云うものかな。どうも昔の夫婦な
んてものはまるで無意味なものだつたに違いない」
とひやかすのだから賞めるのだから曖昧ほ あいまいな事を言つたが

、それでやめておいても好い事をまた例の調子で布ふ衍えんして、下しものごとく述べられた。

「昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかつたんだって云うが、それなら唾おしを女房にしていると同じ事で僕などは一向いっこうありがたい。やっぱり奥さんのようにあなたは重いじゃありませんかとか何とか云われて見たいね。同じ女房を持つくらいなら

、たまには喧嘩の一つ二つしなくつちや退屈でしよ
うがないからな。僕の母などと来たら、おやじの前
へ出ては、いとへいで持ち切っていたものだ。そうし
て二十年もいっしょになっっているうちに寺参りより
ほかに外へ出た事がないと云うんだから情けないじ
やないか。もつとも御蔭で先祖代々の戒名はことごとく
かいみよう暗記している。男女間の交際だつてそうさ、僕

の小供の時分などは寒月君のように意中の人と合奏をしたり、霊の交換をやつて朦朧体もうろうたいで出合つて見た

りする事はとうてい出来なかつた」「御気の毒様で

」と寒月君が頭を下げる。「実に御気の毒さ。しか

もその時分の女が必ずしも今の女より品行がかならいいと

限らんからね。奥さん近頃は女学生が墮落したの何

だのとやかましく云いますがね。なに昔はこれより

烈^{はげ}しかったんですよ」「そうでしょうか」と細君は

真面目である。「そうですとも、出^{でたらめ}鱈目じゃない、

ちゃんと証拠があるから仕方ありませんや。苦沙

弥君、君も覚えているかも知れんが僕等の五六歳の

時までは女の子を唐茄子^{とうなす}のように籠^{かご}へ入れて天秤棒^{てんびんぼう}

で担^{かつ}いで売ってあるいたもんだ、ねえ君」「僕はそ

んな事は覚えておらん」「君の国じゃどうだか知ら

ないが、静岡じやたしかにそうだった」「まさか」と細君が小さい声を出すと、「本当ですか」と寒月君が本当らしからぬ様子で聞く。

「本当さ。現に僕のおやじが価ねを付けた事がある。

その時僕は何でも六つくらいだったろう。おやじと

いっしよに油町あぶらまちから通町とおりちょうへ散歩に出ると、向うから

大きな声をして女の子はよしかな、女の子はよしかな

なと怒鳴どなつてくる。僕等がちようと二丁目の角へ来

ると、伊勢源いせげんと云う呉服屋の前でその男に出っ食わ

した。伊勢源と云うのは間口が十間で蔵くらが五つ戸前とまえ

あつて静岡第一の呉服屋だ。今度行つたら見て来給

え。今でも歴然と残っている。立派なうちだ。その

番頭が甚兵衛と云つてね。いつでも御袋おふくろが三日前に

亡なくなりましたと云うような顔をして帳場の所へ控ひか

えている。甚兵衛君の隣りには初^{はつ}さんという二十四

五の若い衆^{しゅ}が坐っているが、この初さんがまた雲照^{うんしよ}

律師^{うりつし}に帰依^{きえ}して三十七二十一日の間蕎麦湯^{そばゆ}だけで通し

たと云うような青い顔をしている。初さんの隣りが

長^{ちよう}どんでこれは昨日^{きのう}火事で焚^やき出されたかのごとく

愁然^{しゆうぜん}と算盤^{そろばん}に身を凭^{もた}している。長どんと併^{なら}んで……

「君は呉服屋の話をするのか、人売りの話をする

のか」「そうそう人売りの話しをやっていたんだっ

け。実はこの伊勢源についてもすこぶる奇譚きだんがある

んだが、それは割愛かつあいして今日は人売りだけにしてお

こう」「人売りもついでにやめるがいい」「どうし

てこれが二十世紀の今日こんにちと明治初年頃の女子の品性

の比較について大だいなる参考になる材料だから、そん

なに容易たやすくやめられるものか——それで僕がおやじ

と伊勢源の前までくると、例の人売りがおやじを見

て旦那女の子の仕舞物しまいものはどうです、安く負けておく

から買っておくんなさいと云いながら天秤棒てんぴんぼうをおろ

して汗を拭ふいているのさ。見ると籠の中には前に一

人うし後ろに一人両方とも二歳ばかりの女の子が入れて

ある。おやじはこの男に向つて安ければ買つてもい

いが、もうこれぎりかいと聞くと、へえ生憎あいにく今日は

みんな売り尽^{つく}してたった二つになつちまいしました。

どっちでも好いから取つとくんなさいなと女の子を

両手で持つて唐茄子^{とうなす}か何ぞのようにおやじの鼻の先

へ出すと、おやじはぽんぽんと頭^{たま}を叩いて見て、は

はあかなりな音だと云った。それからいよいよ談判

が始まつて散々^{さんざねぎ}価切つた末おやじが、買つても好い

が品はたしかだろうなと聞くと、ええ前の奴は始終

見ているから間違はありませんがね後ろに担いでる

方は、何しろ眼がないんですから、ことによるとひ

びが入ってるかも知れません。こいつの方なら受け

合えない代りにねだん価段を引いておきますと云った。僕

はこの問答を未だに記憶しているんだがその時小供

心に女と云うものはなるほど油断のならないものだ

と思ったよ。――しかし明治三十八年の今日こんにちこんな

馬鹿な真似をして女の子を売つてあるくものもなし、
眼を放して後ろへ担いだ方は險呑だなどと云う事
も聞かないようだ。だから、僕の考ではやはり泰西
文明の御蔭で女の品行もよほど進歩したものだろう
と断定するのだが、どうだろう寒月君」

寒月君は返事をする前にまず鷹揚な咳払を一つし
て見せたが、それからわざと落ちついた低い声で、

こんな觀察を述べられた。「この頃の女は学校の行き帰りや、合奏会や、慈善会や、園遊会で、ちよいと買つて頂戴な、あらおいや？　などと自分で自分

を売りにあるいていますから、そんな八百屋やおやのお余りを雇つて、女の子はよしか、なんて下品な依托販いたくはん

売はいをやる必要はないですよ。人間に独立心が発達し
てくると自然こんな風になるものです。老人なんぞ

はいらぬ取越苦勞をして何とかかとか云いますが、

實際を云うとこれが文明の趨勢すうせいですから、私などは

大おおいに喜ばしい現象だと、ひそかに慶賀の意を表して

いるのです。買う方だつて頭をたた敲いて品物は確かか

なんて聞くような野暮やぼは一人もいないんですからそ

の辺は安心なものでさあ。またこの複雑な世の中に

、そんな手数てすうをする日にやあ、際限がありませんか

らね。五十になつたつて六十になつたつて亭主を持

つ事も嫁に行く事も出来やしません」寒月君は二十

世紀の青年だけあつて、大に当世流の考を開陳してかいちん

において、敷島しきしまの煙をふうーと迷亭先生の顔の方へ吹

き付けた。迷亭は敷島の煙くらいで辟易へきえきする男では

ない。「仰せの通り方今ほうこんの女生徒、令嬢などは自尊

自信の念から骨も肉も皮まで出来ていて、何でも男

子に負けないところが敬服の至りだ。僕の近所の女学校の生徒などと来たらえらいものだぜ。筒袖を穿つつそでは

いて鉄棒へぶら下がるから感心だ。僕は二階の窓か

かなぼう

ら彼等の体操を目撃するたんびに古代希臘ギリシャの婦人を

追懐するよ」「また希臘か」と主人が冷笑するよう

に云い放つと「どうも美な感じのするものは大抵希臘から源を発しているから仕方がない。美学者と希

臘とはとうてい離れられないやね。——ことにあの色の黒い女学生が一心不乱に体操をしているところを拝見すると、僕はいつでも Agnodice の逸話を思い出すのさ」と物知り顔にしゃべり立てる。「またむずかしい名前が出て来ましたね」と寒月君は依然としてにやにやする。「Agnodice はえらい女だよ、僕は実に感心したね。アテン 当時アテン亜典の法律で女が産婆を

營業する事を禁じてあつた。不便な事さ。Agnodice
だつてその不便を感じるだらうじゃないか」「何だ
い、その――何とか云うのは」「女さ、女の名前だ
よ。この女がつらつら考えるには、どうも女が産婆
になれないのは情けない、不便極まる。どうかして
産婆になりたいもんだ、産婆になる工夫はあるまい
かと三日三晩手を拱こまぬいて考え込んだね。ちようど三

あけがた

日目の暁方に、隣の家で赤ん坊がおぎやあと泣いた

かつぜんたいご

声を聞いて、うんそうだと豁然大悟して、それから

早速長い髪を切つて男の着物をきて Hierophilus の

講義をききに行つた。首尾よく講義をきき終せて、
おお

もう大丈夫と云うところでもつて、いよいよ産婆を

開業した。ところが、奥さん流行り^{はや}ましたね。あち

らでもおぎやあと生れるこちらでもおぎやあと生れ

る。それがみんな Agnodice の世話なんだから大變

儲^{もう}かつた。ところが人間万事塞翁の馬、七^{なな}転び八^や起^お

き、弱り目に祟^{たた}り目で、ついこの秘密が露見に及ん

でついに御上^{おかみ}の御法度^{ごはつと}を破つたと云うところで、重

き御仕置^{しおき}に仰せつけられそうになりました」「まる

で講釈見たようです事」「なかなか旨^{うま}いでしよう。

ところが亞典^{アテン}の女連が一同連署して嘆願に及んだか

ら、時の御奉行もそう木で鼻を括くくつたような挨拶も
出来ず、ついに当人は無罪放免、これからはたとい
女たりとも産婆営業勝手たるべき事と云う御布令おふれさ
え出てめでたく落着を告げました」「よくいろいろ
な事を知っていらっしゃるのね、感心ねえ」「ええ
大概の事は知っていますよ。知らないのは自分の馬
鹿な事くらいなものです。しかしそれも薄々は知っ

てます」 「ホホホ面白い事ばかり……」 と細君そう相

形を崩ぐさうして笑っていると、格子戸こうしどのベルが相変らず

着けた時と同じような音を出して鳴る。 「おやまた

御客様だ」 と細君は茶の間へ引き下がる。 細君と入

れ違いに座敷へ這入はいって来たものは誰かと思つたら

ご存じの越智東風君おちとうふうであつた。

ここへ東風君さえくれば、主人の家うちへ出入でいりする変

人はことごとく網羅し尽したとまで行かずとも、少

ぶりよう

なくとも吾輩の無聊を慰むるに足るほどの頭数は御

あたまかず

おそ

ろい揃になつたと云わねばならぬ。これで不足を云つて

もつたい

は勿体ない。運悪くほかの家へ飼われたが最後、

生涯人間中にかかる先生方が一人でもあろうとさえ

さいわい

気が付かずに死んでしまいかも知れない。幸にして

びようじ

ちようせきこ

ひ

はん

苦沙弥先生門下の猫児となつて朝夕虎皮の前に侍べ

るので先生は無論の事迷亭、寒月乃至東風などないしと云

う広い東京にさえあまり例のない一騎当千の豪傑連

の挙止動作を寝ながら拝見するのは吾輩にとって千

載一遇の光栄である。御蔭様でこの暑いのに毛袋で

つつまれていると云う難儀も忘れて、面白く半日を

消光する事が出来るのは感謝の至りである。どうせ

これだけ集まれば只事ただごとではすまない。何か持ち上が

るだろうと襖ふすまの陰から謹つつしんで拝見する。

「どうもご無沙汰を致しました。しばらく」と御辞

儀をする東風君の顔を見ると、先日のごとくやはり

奇麗に光っている。頭だけで評すると何か緞帳役者どんちようやくしや

のようにも見えるが、白い小倉こくらの袴はかまのゴワゴワする

のを御苦勞にも鹿爪しかづめらしく穿はいているところは榊原さかきば

健吉けんきちの内弟子としか思えない。従つて東風君の身体

で普通の人間らしいところは肩から腰までの間だけである。「いや暑いのに、よく御出掛だね。さあずつと、こつちへ通りたまえ」と迷亭先生は自分の家らしい挨拶をする。「先生には大分久しく御目にかかりません」「そうさ、たしかこの春の朗読会ぎりだったね。朗読会と云えば近頃はやはり御盛かね。その後御宮にやなりませんか。あれは旨かつたよ。

おおい

僕は、大に拍手したぜ、君氣が付いてたかい」「ええ

御蔭で、大きに勇氣が出まして、とうとうしまいまで

漕こぎつけました」「今度はいつ御催しがありますか」

と主人が口を出す。「七八ふたつき両月は休んで九月には何

か賑にぎやかにやりたいと思つております。何か面白い

趣向はございますまいか」「さよう」と主人が氣の

ない返事をする。「東風君僕の創作を一つやらない

か」と今度は寒月君が相手になる。「君の創作なら

面白いものだろうが、一体何かね」「脚本さ」と寒

月君がなるべく押しを強く出ると、案のごとく、三

人はちよつと毒気をぬかれて、申し合せたように本

人の顔を見る。「脚本はえらい。喜劇かい悲劇かい」

と東風君が歩を進めると、寒月先生なお澄し返って

「なに喜劇でも悲劇でもないさ。近頃は旧劇とか新

劇とか大部だいぶやかましいから、僕も一つ新機軸を出し

はいげき

て俳劇と云うのを作って見たのさ」「俳劇たどんな

ものだい」「俳句趣味の劇と云うのを詰めて俳劇の

二字にしたのさ」と云うと主人も迷亭も多少煙けむに捲ま

かれて控ひかえている。「それでその趣向と云うのは？」

と聞き出したのはやはり東風君である。「根が俳句

趣味からくるのだから、あまり長たらしくって、毒

悪なのはよくないと思つて一幕物にしておいた」

「なるほど」「まず道具立てから話すが、これも極ごく

簡単なのがいい。舞台の真中へ大きな柳を一本植え

付けてね。それからその柳の幹から一本の枝を右の

方へヌツと出させて、その枝へ鳥からすを一羽とまらせる」

「鳥がじつとしていればいいが」と主人が独り言ひとごとの

ように心配した。「何わけは有りません、鳥の足を

糸で枝へ縛り付けしばておくんです。でその下へ行水盥ぎようずいだらい

を出しましてね。美人が横向きになつて手拭を使つ

ているんです」「そいつは少しデカダンだね。第一

誰がその女になるんだい」と迷亭が聞く。「何これ

もすぐ出来ます。美術学校のモデルを雇つてくるん

です」「そりや警視庁がやかましく云いそうだな」

と主人はまた心配している。「だって興行さえしな

ければ構わんじやありませんか。そんな事をとやかく云った日にや学校で裸体画の写生なんざ出来っことはありません」 「しかしあれは稽古のためだから、ただ見ているのとは少し違うよ」 「先生方がそんな事を云った日には日本もまだ駄目です。絵画だって、演劇だって、おんなじ芸術です」 と寒月君大いに氣きを吹く。
焰えんを吹く。「まあ議論はいいが、それからどうする

のだい」と東風君、りようけんことによると、やる了見と見え

て筋を聞きたがる。「ところへ花道から俳人高浜虚たかはまき

子よしがステツキを持って、白い灯心とうしん入りの帽子を被かぶつ

て、透綾すきやの羽織に、薩摩飛白さつまがすりの尻端折しりつばしよりの半靴と云

うこしらえて出てくる。着付けは陸軍の御用達見ごようたした

ようだけれども俳人だからなるべく悠々ゆうゆうとして腹の

中では句案に余念のない体ていであるかなくつちやいけ

ない。それで虚子が花道を行き切つていよいよ本舞
台に懸つた時、ふと句案の眼をあげて前面を見ると、
大きな柳があつて、柳の影で白い女が湯を浴びてい
る、はつと思つて上を見ると長い柳の枝に鳥が一羽
とまつて女の行水を見下ろしている。そこで虚子先
生大おおに俳味に感動したと云う思い入れが五十秒ばか
りあつて、行水ぎすいの女をに惚ほれる鳥かなと大きな声で一

句朗吟するのを合図に、拍子木ひょうしぎを入れて幕を引く。

——どうだろう、こう云う趣向は。御氣に入りませ

んかね。君御宮おみやになるより虚子になる方がよほどい

いぜ」東風君は何だか物足らぬと云う顔付で「あん

まり、あっけないようだ。もう少し人情を加味した

事件が欲しいようだ」と真面目に答える。今まで比

較的おとなしくしていた迷亭はそういつまでもだま

っているような男ではない。「たったそれだけで俳

劇はすさまじいね。うえだびん上田敏君の説によると俳味とか

滑稽とか云うものは消極的で亡国の音いんだそうだが、

敏君だけあってうまい事を云ったよ。そんなつまら

ない物をやって見給え。それこそ上田君から笑われ

るばかりだ。第一劇だか茶番だか何だかあまり消極

的で分らないじゃないか。失礼だが寒月君はやはり

実験室で珠を磨たまいてる方がいい。俳劇なんぞ百作っ

たつて二百作つたつて、亡国の音いんじや駄目だ」寒月

君は少々憤むっとして、「そんなに消極的でしょうか。

私はなかなか積極的なつもりなんですが」どっちで

も構わん事を弁解しかける。「虚子がですね。虚子

先生が女に惚ほれる烏くかなと烏を捕とらえて女に惚れさし

たところが大おおに積極的だろうと思います」「こりや

新説だね。是非御講釈を伺がいきましょう」「理学士として考えて見ると烏が女に惚れるなどと云うのは不合理でしょう」「ごもつとも」「その不合理な事を無雑作に言い放つて少しも無理に聞えません」

むぞうさ

「そうかしら」と主人が疑つた調子で割り込んだが寒月は一向頓着しない。「なぜ無理に聞えないかと云うと、これは心理的に説明するとよく分ります。

実を云うと惚れるとか惚れないとか云うのは俳人その人に存する感情で鳥とは没交渉の沙汰であります。

しかるところあの鳥は惚れてるなと感じるのは、つ

まり鳥がどうのこうのと云う訳じゃない、ひつきよう必竟自分

が惚れているんでさあ。虚子自身が美しい女の行水ぎようずい

しているところを見てはっと思う途端にずっと惚れ

込んだに相違ないです。さあ自分が惚れた眼で鳥が

枝の上で動きもしないで下を見つめているのを見た
ものだから、ははあ、あいつも俺と同じく参つて
なと癩違かんちがいをしたのです。癩違かんちがいには相違ないです
がそこが文学的でかつ積極的なところなんです。自
分だけ感じた事を、断りもなく鳥の上に拡張して知
らん顔をしてすましているところなんぞは、よほど
積極主義じゃありませんか。どうです先生」「なる

ほど御名論だね、虚子に聞かしたら驚くに違いない。説明だけは積極だが、実際あの劇をやられた日には、見物人はたしかに消極になるよ。ねえ東風君」「へえどうも消極過ぎるように思います」と真面目な顔をして答えた。

主人は少々談話の局面を展開して見たくなつたと見えて、「どうです、東風さん、近頃は傑作もあり

ませんか」と聞くと東風君は「いえ、別段これと云
つて御目にかけるほどのものも出来ませんが、近日
詩集を出して見ようと思ひまして――稿本こうほんを幸い持
つて参りましたから御批評を願ひましょう」と懐か
ら紫の袱紗包ふくさづつみを出して、その中から五六十枚ほどの
原稿紙の帳面を取り出して、主人の前に置く。主人
はもつともらしい顔をして拝見と云つて見ると第一

世の人に似ずあえかに見え給う

富子嬢に捧ぐ

と二行にかいてある。主人はちよつと神秘的な顔を
してしばらく一頁を無言のまま眺^{なが}めているので、迷

亭は横合から「何だい新体詩かね」と云いながら覗のぞき込んで「やあ、捧げたね。東風君、思い切って富子嬢に捧げたのはえらい」としきりに賞ほめる。主人はなお不思議そうに「東風さん、この富子と云うのは本当に存在している婦人なのですか」と聞く。

「へえ、この前迷亭先生とごいっしょに朗読会へ招待した婦人の一人です。ついこの御近所に住んでお

ります。実はただ今詩集を見せようと思つてちよつ

と寄つて参りましたが、あいにく生憎先月から大磯へ避暑に

行つて留守でした」と真面目くさつて述べる。「苦

沙弥君、これが二十世紀なんだよ。そんな顔をしな

いで、早く傑作でも朗読するさ。しかし東風君この

捧げ方は少しまずかったね。このあゝかにと云う雅が

言は全体何げんと言う意味だと思つてゐるかね」「蚊弱かよわい

とかたよわくと云う字だと思います」「なるほどそうも取れん事はないが本来の字義を云うと危う氣にと云う事だぜ。だから僕ならこうは書かないね」

「どう書いたらもつと詩的になりました」「僕ならこうさ。世の人に似ずあえかに見え給う富子嬢の鼻の下に捧ぐとするね。わずかに三字のゆきさつだが鼻の下があるのとないのとは大変感じに相違が

あるよ」「なるほど」と東風君は解しかねたところを無理に納得した体にもてなす。

主人は無言のままようやく一頁をはぐつていいよいよ巻頭第一章を読み出す。

倦んじて薫ずる香裏に君の

霊か相思の煙のたなびき

おお我、ああ我、辛からきこの世に

あまく得てしか熱き口づけ

「これは少々僕には解しかねる」と主人は嘆息しながら迷亭に渡す。「これは少々振り過ぎてる」と迷亭は寒月に渡す。寒月は「なああるほど」と云つて

東風君に返す。

「先生御分りにならんのはごもつともで、十年前の

こんにち

詩界と今日の詩界とは見違えるほど発達しておりま

すから。この頃の詩は寝転んで読んだり、停車場で

読んではとうてい分りようがないので、作った本人

ですら質問を受けると返答に窮する事がよくありま

す。全くインスピレーションで書くので詩人はその

他には何等の責任もないのです。註釈や訓義くんぎは学究

のやる事で私共の方では頓とんと構いません。せんだつ

ても私の友人で送籍そうせきと云う男が一夜、という短篇をか

きました、誰が読んでも朦朧もうろうとして取り留めとがつ

かないので、当人に逢つて篤とくと主意のあるところを

糺ただして見たのですが、当人もそんな事は知らないよ

と云つて取り合わないのです。全くその辺が詩人の

特色かと思ひます」「詩人かも知れないが随分妙な

男です」ね」と主人が云うと、迷亭が「馬鹿だよ」と

たんかん

単簡に送籍君を打ち留めた。東風君はこれだけでは

まだ弁じ足りない。「送籍は吾々仲間のうちでも取^と

除^りけですが、私の詩もどうか心持ちその気で読んで

いただきたいので。ことに御注意を願いたいのはか、

らきこの世と、あまき口づけと対^{つい}をとったところが

私の苦心です」「よほど苦心をなすった痕迹^{こんせき}が見え

ます」 「あま、いとから、いと反照するところなんか十

うしちみちよあうがらしちよう

七味調唐辛子調で面白い。全く東風君独特の伎倆で敬々服々の至りだ」としきりに正直な人をまぜ返して喜んでゐる。

主人は何と思つたか、ふいと立つて書斎の方へ行つたがやがて一枚の半紙を持って出てくる。「東風

君の御作も拝見したから、今度は僕が短文を読んで

諸君の御批評を願おう」といささか本気の沙汰であ

る。「天然居士てんねんこじの墓碑銘ぼひめいならもう二三遍拝聴したよ」

「まあ、だまつていなさい。東風さん、これは決し

て得意のものではありませんが、ほんの座興ですか

ら聴いて下さい」「是非伺がいきましょう」「寒月君

もついでに聞き給え」「ついででなくても聴きます

よ。長い物じゃないでしょう」「僅々六十余字さ」

と苦沙弥先生いよいよ手製の名文を読み始める。

やまとだまし

「大和魂！」

と叫んで日本人が肺病やみのような咳せき

をした」

「起し得て突兀とっこつですね」と寒月君がほめる。

「大和魂！」

と新聞屋が云う。大和魂！

と掏摸すりが

云う。大和魂が一躍して海を渡った。英国で大和魂

の演説をする。

ドイツ

独逸で大和魂の芝居をする」

「なるほどこりや天然居士てんねんこじ以上の作だ」と今度は迷亭先生がそり返って見せる。

「東郷大將が大和魂を有もっている。肴屋さかなやの銀さんも

大和魂を有っている。詐偽師さぎし、山師やまし、人殺しも大和

魂を有っている」

「先生そこへ寒月も有っているとつけて下さい」

「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答

えて行き過ぎた。五六間行つてからエヘンと云う声が聞こえた」

「その一句は大出来だ。君はなかなか文才があるね。それから次の句は」

「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。

大和魂は名前の示すごとく魂である。魂であるから常にふらふらしている」

「先生だいぶ面白うございますが、ちと大和魂が多過ぎはしませんか」と東風君が注意する。「賛成」と云つたのは無論迷亭である。

「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。

誰も聞いた事はあるが、誰も遇あつた者がない。大和

魂はそれ天狗てんぐ たぐいの類か」

主人はいっけつようぜん一結杳然と云うつもりで読み終つたが、さ

すがの名文もあまり短か過ぎるのと、主意がどこにあるのか分りかねるので、三人はまだあとがある事
と思つて待っている。いくら待つていても、うんと
も、すんとも、云わないので、最後に寒月が「それ
ぎりですか」と聞くと主人は軽くかる「うん」と答えた。
うんは少し氣樂過ぎる。

不思議な事に迷亭はこの名文に対して、いつもの

ようにあまり駄弁を振わなかったが、やがて向き直つて、「君も短篇を集めて一卷として、そうして誰かに捧げてはどうだ」と聞いた。主人は事もなげに

「君に捧げてやろうか」と聴くと迷亭は「真平だ」まっぴら

と答えたぎり、さつき先刻細君に見せびらかした鋏はさみをちよ

きちよき云わして爪をとっている。寒月君は東風君に向つて「君はあの金田の令嬢を知ってるのかい」

と尋ねる。「この春朗読会へ招待してから、懇意になつてそれから始終交際をしている。僕はあの令嬢の前へ出ると、何となく一種の感に打たれて、自分のうちは詩を作つても歌を詠よんでも愉快に興が乗つて出て来る。この集中にも恋の詩が多いのは全くああ云う異性の朋友ほうゆうからインスピレーションを受け
るからだろうと思う。それで僕はあの令嬢に対して

は切実に感謝の意を表しなければならんからこの機
を利用して、わが集を捧げる事にしたのさ。昔むかしか
ら婦人に親友のないもので立派な詩をかいたものは
ないそうだ」「そうかなあ」と寒月君は顔の奥で笑
いながら答えた。いくら駄弁家の寄合でもそう長く
は続かんものと見えて、談話の火の手は大分下火にだいぶ
なつた。吾輩も彼等の変化なき雑談を終日聞かねば

ならぬ義務もないから、失敬して庭へ蟪蛄かまきりを探しに出た。
梧桐あおぎりの緑を綴つづる間から西に傾く日が斑まだらに洩もれて、
幹にはつくつく法師ぼうしが懸命けんめいにないている。晩
はことによると一雨かかるかも知れない。

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利き

いた風だと一概に冷罵れいばし去る手合てあいにちよつと申し聞

けるが、そう云いう人間だつてつい近年までは運動の

何者たるを解せず、食つて寝るのを天職のように

心得ていたではないか。無事ぶじ是貴人これきにんとか称となえて、懐ふと

ころで

ざぶとん

手をして座布団から腐れかかった尻を離さざるをも

やにさが

つて旦那の名誉と脂下やにさがつて暮したのは覚えてゐるは

ずだ。運動をしろの、牛乳を飲めの冷水を浴びろの、

海の中へ飛び込めの、夏になったら山の中へ籠こもって

当分霞を食くらえのとくだらぬ注文を連発するようにな

ったのは、西洋から神国へ伝染した輓ばん近きんの病気で、

やはりペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていい

くらいだ。もつとも吾輩は去年生れたばかりで、当

年とって一歳だから人間がこんな病気に罹かかり出した

当時の有様は記憶に存しておらん、のみならずその

みぎ

かざなか

砌りは浮世の風中にふわついておらなかつたに相違

ないが、猫の一年は人間の十年に懸^かけ合うと云つて

もよろしい。吾等の寿命は人間より二倍も三倍も短

かかわ

いに係らず、その短日月の間に猫一足の発達は十分

つかまつ

仕るところをもつて推論すると、人間の年月と猫の

せいそう

星霜を同じ割合に打算するのははなはだしき誤^ご謬^びで

ある。第一、一歳何カ月に足らぬ吾輩がこのくらい
の見識を有しているのでも分るだろう。主人の第三
女などは数え年で三つだそうだが、智識の発達から
云うと、いやはや鈍いものだ。泣く事と、寝小便を
する事と、おっぱいを飲む事よりほかに何にも知ら
ない。世を憂い時を憤るいきどお吾輩などに較くらべると、から
たわいのない者だ。それだから吾輩が運動、海水浴、

転地療養の歴史を方寸のうちに畳み込んでいたって

毫こも驚おどろくに足りない。これしきの事をもし驚おどろく者

があつたなら、それは人間と云う足の二本足りない

野呂間のろまに極きまっている。人間は昔から野呂間である。

であるから近頃に至いたつて漸ようよう々運動の機能を吹聴ふいちようした

り、海水浴の利益を喋ちやうちやう々して大発明のように考える

のである。吾輩などは生れない前からそのくらいな

事はちゃんと心得ている。第一海水がなぜ薬になるかと云えばちよつと海岸へ行けばすぐ分る事じやないか。あんな広い所に魚が何疋びきおるか分らないが、あの魚が一疋も病氣をして医者にかかった試ためしがない。みんな健全に泳いでいる。病氣をすれば、からだが利きかなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚の往生をあがると云つて、鳥の薨去こうきよを、落おちると唱とな

え、人間の寂滅じやくめつをごねると号している。洋行をして

印度洋を横断した人に君、魚の死ぬところを見た事
がありますかと聞いて見るがいい、誰でもいいえと
答えるに極っている。それはそう答える訳だ。いく

ら往復したって一匹も波の上に今呼吸いきを引き取った

——呼吸いきではいかん、魚の事だから潮しほを引き取った

と云わなければならん——潮を引き取って浮いてい

るのを見た者はないからだ。あの渺々たる、あの漫

びようびよう

まん

々たる、大海を日となく夜となく続けざまに石炭を

たいかい

焚いて探がしてあるいても古往今来一匹も魚が上

こんらい

が、

つておらんとくろをもつて推論すれば、魚はよほど

丈夫なものに違ないと云う断案はすぐに下す事が出
来る。それならなぜ魚がそんなに丈夫なのかと云え

ばこれまた人間を待つてしかる後に知らざるなりで、

のち

訳わけはない。すぐ分る。全く潮水しおみずを吞んで始終海水浴

をやっているからだ。海水浴の機能はしかく魚に取

って顕著けんちよである。魚に取って顕著である以上は人間

に取っても顕著でなくてはならん。一七五〇年にド

クトル・リチャード・ラッセルがブライトンの海水

に飛込めば四百四病そくせき即席全快と大袈裟おおげさな広告を出し

たのは遅い遅いと笑ってよろしい。猫といえども

相当の時機が到着すれば、みんな鎌倉あたりへ出掛けるつもりでいる。但し今はいけない。物には時機

がある。御維新前ごいつしんまえの日本人が海水浴の機能を味わう

事が出来ずに死んだごとく、今日こんにちの猫はいまだ裸体

で海の中へ飛び込むべき機会に遭遇そうぐうしておらん。せ

いては事を仕損しそんずる、今日のように築地つきじへ打っち

やられに行つた猫が無事に帰宅せん間は無暗むやみに飛び

込む訳には行かん。進化の法則で吾等猫輩の機能が

きょうらんどう

狂瀾怒濤に対して適當の抵抗力を生ずるに至るまでは――換言すれば猫が死んだと云う代りに猫が上がつたと云う語が一般に使用せらるるまでは――容易に海水浴は出来ん。

海水浴は追つて実行する事にして、運動だけは取りあえずやる事に取り極めた。きどうも二十世紀の今こん

にち

日運動せんのはいかにも貧民のようで人聞きがわる

い。運動をせんと、運動せんのではない。運動が出

来んのである、運動をする時間がないのである、余

裕がないのだと鑑定される。昔は運動したものが折おり

助すけと笑われたごとく、今では運動をせぬ者が下等と

見み倣なされている。吾人の評価は時と場合に応じ吾輩

の眼玉のごとく変化する。吾輩の眼玉はただ小さく

なったり大きくなったりするばかりだが、人間の品ひん

隲しつとくると真逆まっさかさまにひっくり返る。ひっくり返

つても差し支さえつかはない。物には両面がある、両端りやうたんが

ある。両端を叩たたいて黒白こくびやくの変化を同一物の上に起こ

すところが人間の融通のきくところである。方寸ほうすんを

逆さかさまにさいきようして見ると寸方すんぽうとなるとところに愛嬌あいぎようがあ

る。天あまの橋立はしだてを股倉またぐらから覗のぞいて見るとまた格別おもむきな趣

が出る。セクスピアも千古万古セクスピアではつまらない。偶たまには股倉からハムレットを見て、君こり

や駄目だよくらいに云う者がないと、文界も進歩しないだろう。だから運動をわるく云った連中が急に運動がしたくなつて、女までがラケットを持って往來をあるき廻いっこうつたつて一向不思議はない。ただ猫が運動するのを利きいた風だなどと笑いさえしなければ

よい。さて吾輩の運動はいかなる種類の運動かと不

審を抱く^{いだ}者があるかも知れんから一応説明しよう

と思う。御承知のごとく不幸にして機械を持つ事が出

来ん。だからボールもバットも取り扱い方に困窮す

る。次には金がないから買う^{わけ}訳に行かない。この二

つの原因からして吾輩の選んだ運動は一文^{いちもん}いらず器

械なしと名づくべき種類に属する者と思う。そんな

ら、のそのそ歩くか、あるいは鮪まぐろの切身を啣くわえて馳か

け出す事と考えるかも知れんが、ただ四本の足を力

学的に運動させて、地球の引力に順したがつて、大地を横

行するのは、あまり単簡たんかんで興味がない。いくら運動

と名がついても、主人の時々実行するような、読ん

で字のごとき運動はどうも運動の神聖を汚けがす者だ

ろうと思う。勿論もちろんただの運動でもある刺激の下もとには

やらんとは限らん。鰹節競争、鮭探しなどは結構だ

かんじん

がこれは肝心の対象物があつての上の事で、この刺

さくぜん

激を取り去ると索然として没趣味なものになつてし

まう。懸賞的興奮剤がないとすれば何か芸のある運

動がして見たい。吾輩はいろいろ考えた。台所の廂

ひさし

やね

から家根に飛び上がる方、家根の天辺にある梅花形

てっぺん

ばいかがた

かわら

の瓦の上に四本足で立つ術、物干竿を渡る事——こ

ものほしざお

れはとうてい成功しない、竹がつるつる滑^すべって爪

が立たない。後^{うし}ろから不意に小供に飛びつく事、――

――これはすこぶる興味のある運動の一^{ひとつ}だが滅^め多^{った}にや

るとひどい目に逢うから、高^{たか}々^だ月に三度くらいしか

試みない。紙袋^{かんぶくろ}を頭へかぶせらるる事――これは苦

しいばかりではなはだ興味の乏^{とぼ}しい方法である。こ

とに人間の相手がおらんと成功しないから駄目。次

には書物の表紙を爪で引き搔く事、——これは主人に見付かると必ずどやされる危険があるのみならず、割合に手先の器用ばかりで総身の筋肉が働かない。

これらは吾輩のいわゆる旧式運動なる者である。新

式のうちにはなかなか興味の深いものがある。第一に

蠅螂狩り。どうろうが——蠅螂狩りは鼠狩りねずみがほどの大運動でな

い代りにそれほど危険がない。夏の半なかばから秋の始

めへかけてやる遊戯としてはもつとも上乘のものだ。

その方法を云うとまず庭へ出て、一匹の蠅螂をさが

かまきり

し出す。時候がいいと一匹や二匹見付け出すのは雑

ぞ

作も^{うさ}ない。さて見付け出した蠅螂君の傍へは^{そば}つと風

を切つて馳^かけて行く。するとすわこそと云う身構を

みがまえ

して鎌首をふり上げる。蠅螂でもなかなか健気なも

けなげ

ので、相手の力量を知らんうちは抵抗するつもりで

いるから面白い。振り上げた鎌首を右の前足でちよつと参る。振り上げた首は軟かいからぐにやり横へ曲る。この時の螭螂君の表情がすこぶる興味を添える。おやと云う思い入れが充分ある。ところを一足いっそく

飛びに君きみの後ろうしへ廻つて今度は背面から君の羽根を

軽く引き搔かく。あの羽根は平生大事にたた畳んであるが、

引き搔き方が烈はげしいと、ぱつと乱れて中から吉野紙

のような薄色の下着があらわれる。君は夏でも御苦
労千万に二枚重ねで乙おつに極きまっている。この時君の
長い首は必ず後ろに向き直る。ある時は向ってくる
が、大概の場合には首だけぬつと立てて立っている。
こっちから手出しをするのを待ち構えて見える。先
方がいつまでもこの態度でいては運動にならんから、
あまり長くなるとまたちよいと一本参る。これだけ

参ると眼識のある螭螂なら必ず逃げ出す。それを我^が

^{むしやら}

無洒落に向つてくるのはよほど無教育な野蛮的螭螂

である。もし相手がこの野蛮な振舞をやると、向つ

て来たところを覘^{ねら}いすまして、いやと云うほど張り

付けてやる。大概は二三尺飛ばされる者である。し

かし敵がおとなしく背面に前進すると、こっちは気

の毒だから庭の立木を二三度飛鳥のごとく廻つてく

る。かまきりくん

螭螂君はまだ五六寸しか逃げ延びておらん。も

う吾輩の力量を知ったから手向いをする勇氣はない。

ただ右往左往へ逃げ惑まどうのみである。しかし吾輩も

右往左往へ追っかけるから、君はしまいには苦しが

って羽根を振ふるって一大活躍を試みる事がある。元来

螭螂の羽根は彼の首と調和して、すこぶる細長く出

来上がったものだが、聞いて見ると全く裝飾用だそ

うで、人間の英語、仏語、独逸語のごとく毫ごうも実用

にはならん。だから無用の長物を利用して一大活躍

を試みたところが吾輩に対してあまり機能のありよ

う訳がない。名前は活躍だが事實は地面の上を引き

ずつてあるくと云うに過ぎん。こうなると少々気の

毒な感はあるが運動のためだから仕方がない。御免ごめんこ

蒙うむつてたちまち前面へ馳かけ抜ける。君は惰性で急廻

転が出来ないからやはりやむを得ず前進してくる。

その鼻をなぐりつける。この時螳螂君は必ず羽根を

広げたままたお仆れる。その上をうんと前足で抑えて少おき

しく休息する。それからまた放す。放しておいてま

た抑える。しちきんしちしようめい七擒七縱孔明の軍略で攻めつける。約三

十分この順序を繰り返して、身動きも出来なくなつ

たところを見すましてちよつと口へ啣くわえて振って見

る。それからまた吐き出す。今度は地面の上へ寝たぎり動かないから、こつちの手で突っ付いて、その勢で飛び上がるところをまた抑えつける。これもいやになつてから、最後の手段としてむしやむしや食つてしまふ。ついでだから螭螂を食つた事のない人に話しておくが、螭螂はあまり旨い物ではない。そして滋養分も存外少ないようである。螭螂狩りに

うま

とうろうが

せみと

次いで蟬取りと云う運動をやる。単に蟬と云ったと

ころが同じ物ばかりではない。人間にも油野郎、み

あぶらやろう

んみんな野郎、おしいつくつく野郎があるごとく、蟬

にも油蟬、みんな、おしいつくつくがある。油蟬

はしつくくて行かん。みんなは横風おうふうで困る。ただ

取って面白いのはおしいつくつくである。これは夏

の末にならないと出て来ない。八やつ口くちの綻ほころびから秋あき

風が断わりなしに膚を撫でてはつくしよ風邪を引い

たと云う頃熾に尾を掉り立ててなく。善く鳴く奴で、

吾輩から見ると鳴くのと猫にとられるよりほかに天

職がないと思われるくらいだ。秋の初はこいつを取

る。これを称して蟬取り運動と云う。ちよつと諸君

に話しておくがいやしくも蟬と名のつく以上は、地

面の上に転がってはおらん。地面の上に落ちている

ものには必ず蟻ありがついている。吾輩の取るのはこの

蟻の領分に寝転んでゐる奴ではない。高い木の枝に

とまって、おしいつくつくと鳴いてゐる連中を捕えとら

るのである。これもついでだから博学なる人間に聞

きたいがあればおしいつくつくと鳴くのか、つくつ

くおしいと鳴くのか、その解釈次第によつては蟬の

研究上少なからざる関係があると思う。人間の猫に

優るところはこんなところに存するので、人間の自みづか

ら誇る点もまたかような点にあるのだから、今即答が出来ないならよく考えておいたらよかろう。もっ

とも蟬取り運動上はどつちにしても差さし支つかえはない。

ただ声をしるべに木を上のぼって行つて、先方が夢中になつて鳴いているところをうんと捕えるばかりだ。

これはもつとも簡略な運動に見えてなかなか骨の折

れる運動である。吾輩は四本の足を有しているから
大地を行く事においてはあえて他の動物には劣ると
は思わない。少なくとも二本と四本の数学的智識か
ら判断して見て人間には負けないつもりである。し
かし木登りに至っては^{だいぶ}大分吾輩より巧者な奴がいる。
本職の猿は別物として、猿の^{ばっそん}末孫たる人間にもなか
なか^{あなど}侮るべからざる^{てあい}手合がいる。元来が引力に逆ら

つての無理な事業だから出来なくても別段の恥辱と

ちじよく

は思わんけれども、蟬取り運動上には少なからざる不便を与える。幸に爪と云う利器があるので、どう

かこうか登りはするものの、はたで見るほど楽ではござらん。のみならず蟬は飛ぶものである。螭螂君

かまきりくん

と違って一たび飛んでしまったが最後、せつかくの

木登りも、木登らずと何の択むところなしと云う悲

えら

運に際会する事がないとも限らん。最後に時々蟬から小便をかけられる危険がある。あの小便がややともすると眼を覗^{ねら}つてしよぐつてくるようだ。逃げるのは仕方がないから、どうか小便ばかりは垂れんように致したい。飛ぶ間際^{まぎわ}に溺^{いば}りを仕^{つかまつ}るのは一体どう云う心理的狀態の生理的器械に及ぼす影響だろう。やはりせつなさのあまりかしらん。あるいは敵の不

意に出でて、ちよつと逃げ出す余裕を作るための方便か知らん。そうすると烏賊いかの墨を吐き、ベランメーほりものの刺物を見せ、主人が羅旬語ラテンゴを弄する類たぐいと同じ綱こう目もくに入るべき事項となる。これも蟬学上忽ゆるかせにすべからざる問題である。充分研究すればこれだけで、たしかに博士論文の価値はある。それは余事だから、そのくらいにしてまた本題に帰る。蟬のもつとも集

注するのは――集注がおかしければ集合だが、集合

ちんぷ

は陳腐だからやはり集注にする。――蟬のもつとも

あおぎり

集注するのは青桐である。漢名を梧桐と号するそう

ごとう

だ。ところがこの青桐は葉が非常に多い、しかもそ

うちわ

おおき

の葉は皆団扇くらいな大きさであるから、彼等が生い

お

重なると枝がまるで見えないくらい茂っている。こ

れがはなはだ蟬取り運動の妨害になる。声はすれど

ぞくよう

も姿は見えずと云う俗謡はとくに吾輩のために作つた者ではなからうかと怪しまれるくらいである。吾輩は仕方がないからただ声を知るべに行く。下から一間ばかりのところで梧桐は注文通り二又ふたまたになつてゐるから、ここで一休息ひとやすみして葉裏から蟬の所在地を探偵する。もつともここまで来るうちに、がさがさと音を立てて、飛び出す気早な連中がいる。一羽飛

ぶともういけない。真似をする点において蟬は人間に劣らぬくらい馬鹿である。あとから続々飛び出す。

漸々二又ようようふたまたに到着する時分には満樹寂せきとして片声へんせいをと

どめざる事がある。かつてここまで登って来て、ど

こをどう見廻わしても、耳をどう振っても蟬氣せみけがな

いので、出直すのも面倒だからしばらく休息しよう

と、又またの上に陣取って第二の機会を待ち合せていた

ら、いつの間にか眠くなつて、つい黒甜郷裡こくてんきょうりに遊ん

だ。おやと思つて眼が醒めたら、二又の黒甜郷裡こくてんきょうりか

ら庭の敷石の上へどたりと落ちていた。しかし大概

は登る度に一つは取つて来る。ただ興味の薄い事に

は樹の上で口に啣くわえてしまわなくてはならん。だか

ら下へ持つて来て吐き出す時は大方おおかた死んでいる。い

くらじやらしても引つ搔かいても確然たる手答がない。

蟬取りの妙味はじつと忍んで行つておいしい君くんが一生

懸命に尻尾しっぽを延ばしたり縮ちぢましたりしているところ

を、わつと前足で抑おさえる時にある。この時つくつく

君くんは悲鳴を揚げて、薄い透明な羽根を縦横無尽に振

う。その早い事、美事なる事は言語道断、実に蟬世

界の一偉観である。余はつくつく君を抑たひえる度にい

つでも、つくつく君に請求してこの美術的演芸を見

せてもらう。それがいやになるとご免を蒙こうむつて口の

内へ頬張ほおばつてしまう。蟬によると口の内へ這はい入つて

まで演芸をつづけているのがある。蟬取りの次にや

る運動は松滑りまつすべである。これは長くかく必要もない

から、ちよつと述べておく。松滑りと云うと松を滑

るように思うかも知れんが、そうではないやはり木

登りの一種である。ただ蟬取りは蟬を取るために登

り、松滑りは、登る事を目的として登る。これが両

者の差である。元来松は常磐ときわにて最明寺さいみょうじの御馳走ごちそうを

してから以来今日こんにちに至るまで、いやにごつごつして

いる。従つて松の幹ほど滑らないものはない。手懸

りのいいものはない。足懸りのいいものはない。――

――換言すれば爪懸りつまがかりのいいものはない。その爪懸り

のいい幹へ一気呵成いっきかせいに馳かけ上あがる。馳かけ上あがつておいて

馳け下がる。馳け下がるには二法ある。一はさかさ

になつて頭を地面へ向けて下りてくる。一は上つたのぼ

ままの姿勢をくずさず尾を下にして降りる。人間の

に問うがどつちがむずかしいか知ってるか。人間の

あさはかな了見では、どうせ降りるのだから下向にりょうけん
したむき

馳け下りる方が楽だと思ふだろう。それが間違つて

る。君等は義経が鶉越ひよどりこえを落としたことだけを心得て、

義経でさえ下を向いて下りるのだから猫なんぞは無
論^し下た向きでたくさんだと思ふのだらう。そう輕蔑^{けいべつ}
するものではない。猫の爪はどっちへ向いて生^はえて
いると思ふ。みんな後ろ^{うし}へ折れている。それだから
鳶^{とびぐち}口のように物をかけて引き寄せる事は出来るが、
逆に押し出す力はない。今吾輩が松の木を勢よく馳
け登ったとする。すると吾輩は元来地上の者である

から、自然の傾向から云えば吾輩が長く松樹の巔に

いただき

とど留まるを許さんに相違ない、ただおけば必ず落ちる。

しかし手放しで落ちては、あまり早過ぎる。だから

何等かの手段をもつてこの自然の傾向を幾分かゆる

めなければならん。これ即ち降りるのである。落ち

すなわ

るのと降りるのは大變な違のようだが、その実思つ

たほどの事ではない。落ちるのを遅くすると降りる

ので、降りるのを早くすると落ちる事になる。落ちると降りるのは、ちとりの差である。吾輩は松の木の上から落ちるのはいやだから、落ちるのを緩めて降りなければならない。即ちあるものをもつて落ちる速度に抵抗しなければならん。吾輩の爪は前申す通り皆後ろ向きであるから、もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は悉く、落ちる勢に逆って利用

すなわ

ゆる

ぜん

ことごと

さから

出来る訳である。従つて落ちるが變じて降りるにな

る。實に見易き道理である。みやすしかるにまた身を逆さかに

して義経流に松の木越ごえをやつて見給え。爪はあつて

も役には立たん。ずるずる滑つて、どこにも自分の

体量を持ち答える事は出来なくなる。ここにおいて

かせつかく降りようと企てた者が變化して落ちる事くわだ

になる。ひよどりごえこの通り鶉越はむずかしい。猫のうちでこ

の芸が出来る者は恐らく吾輩のみであろう。それだから吾輩はこの運動を称して松滑りと云うのである。最後に垣巡かきめぐりについて一言いちげんする。主人の庭は竹垣をもつて四角にしきられている。椽側えんがわと平行している。

一片いっぺんは八九間もあろう。左右は双方共四間に過ぎん。

今吾輩の云った垣巡りと云う運動はこの垣の上を落ちないように一周するのである。これはやり損そこなう事

もままあるが、首尾よく行くとお慰なぐさみになる。ことに

所々に根を焼いた丸太が立っているから、ちよつと

休息に便宜べんぎがある。今日は出来がよかったので朝か

ら昼までに三返べんやって見たが、やるたびにうまくな

る。うまくなる度たびに面白くなる。とうとう四返繰り

返したが、四返目に半分ほど巡まわりかけたら、隣の屋

根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向うに列を

正してとまった。これは推参な奴だ。人の運動の妨さまたげ

をする、ことにどこの鳥だか籍せきもない分ぶんざい在で、人の

塀へとまるといふ法があるもんかと思つたから、通

るんだおい除のきたまえと声をかけた。真先の鳥はこ

っちを見てにやにや笑っている。次のは主人の庭を

眺ながめている。三羽目は嘴くちばしを垣根の竹で拭ふいている。

何か食つて来たに違ない。吾輩は返答を待つために、

彼等に三分間の猶予ゆうよを与えて、垣の上に立っていた。

烏は通称を勘左衛門と云うそうだが、なるほど勘左衛門だ。吾輩がいくら待ってても挨拶もしなければ、飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。すると真先の勘左衛門がちよいと羽を広げた。やっとなと吾輩の威光に恐れて逃げるなと思った。右向から左向に姿勢をかえただけである。この

野郎！ 地面の上ならその分に捨ておくのではない

が、いかんせん、たださえ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしている余裕がない。といってまた立留ま^のって三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。

第一そう待っていては足がつづかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな所へはとまりつけている。従^とつて気に入ればいつまでも逗留^{どうりゆう}するだろう。

こっちはこれで四返目だたださえ大分だいぶん劳つかれている。

いわんや綱渡りにも劣らざる芸当兼運動をやるのだ。

何等の障害物がなくてさえ落ちんとは保証が出来ん

のに、こんな黒装束が、三個も前途をさへぎ遮さへぎつては容易

ならざる不都合だ。いよいよとなれば自ら運動を中みずか

止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、

いっそさよう仕ろうか、敵は大勢の事ではあるし、

ことにはあまりこの辺には見馴れぬ人体である。口

嘴が乙に尖がつて何だか天狗の啓し子のようだ。ど

うせ質のいい奴でないには極っている。退却が安全

だろう、あまり深入りをして万一落ちでもしたらな

おさら恥辱だ。と思つてゐると左向をした鳥が阿呆

と云つた。次のも真似をして阿呆と云つた。最後の

奴は御鄭寧にも阿呆阿呆と二声叫んだ。いかに温厚

なる吾輩でもこれは看過かんか出来ない。第一自己の邸内

からすはい

で烏輩に侮辱されたとあつては、吾輩の名前にかか

わる。名前はまだないから係わりようがなかろうと

云うなら体面に係わる。決して退却は出来ない。諺ことわざ

うごう

にも烏合の衆と云うから三羽だつて存外弱いかも知

れない。進めるだけ進めと度胸を据すえて、のそのそ

歩き出す。烏は知らん顔をして何か御互に話をして

いる様子だ。いよいよ肝癰かんしゃくに障さわる。垣根の幅がもう

五六寸もあつたらひどい目に合せてやるんだが、残

念な事にはいくら怒おこつても、のそのそとしかあるか

れない。ようやくの事先鋒せんぽうを去る事約五六寸の距離

まで来てもう一息だと思つと、勘左衛門は申し合せ

たように、いきなり羽搏はばたきをして一二尺飛び上がった。

その風が突然余の顔を吹いた時、はつと思つたら、

つい踏み外はずして、すたとんと落ちた。これはしくじ

ったと垣根の下から見上げると、三羽共元の所にと

まっ上からくちばし嘴を揃そろえて吾輩の顔を見下している。

凶太い奴だ。睨にらめつけてやったが一向利いっこうかない。背

を丸くして、少々唸うなったが、ますます駄目だ。俗人

に靈妙なる象徴詩がわからぬごとく、吾輩が彼等に

向って示す怒りの記号も何等の反応を呈出しない。

考えて見ると無理のないところだ。吾輩は今まで彼等を猫として取り扱っていた。それが悪るい。猫ならこのくらいやればたしかに応^{こた}えるのだが生憎^{あいにく}相手は烏だ。烏の勘公とあつて見れば致し方がない。実業家が主人苦^く沙^{しゃ}弥^み先生を圧倒しよう^{さいぎょう}とあせるごとく、西行に銀製の吾輩を進呈するがごとく、西郷隆盛君の銅像に勘公が糞^{ふん}をひるようなものである。機を見

るに敏なる吾輩はとうてい駄目と見て取ったから、
奇麗さっぱりと椽側へ引き上げた。もう晩飯の時刻
だ。運動もいいが度を過ぎすと行かぬ者で、からだ
全体が何となく緊りしまがない、ぐたぐたの感がある。
のみならずまだ秋の取り付きで運動中に照り付けら
れた毛ごろもは、西日を思う存分吸収したと見えて
、ほてってたまらない。毛穴から染しみ出す汗が、流

れればと思うのに毛の根に膏あぶらのようにねばり付く。

背中せなかがむずむずする。汗でむずむずするのと蚤のみが這は

ってむずむずするのは判然と区別が出来る。口の届

く所なら噛かむ事も出来る、足の達する領分は引き搔か

く事も心得にあるが、脊髓せきずいの縦に通う真中と来たら

自分の及ぶ限かぎりでない。こう云う時には人間を見懸け

て矢鱈やたらにこすり付けるか、松の木の皮で充分摩擦術

を行うか、二者その一を択えらばんと不愉快で安眠も出

来兼ねる。人間は愚ぐなものであるから、猫なで声で

——猫なで声は人間の吾輩に対して出す声だ。吾輩

を目安めやすにして考えれば猫なで声ではない、なでられ

声である——よろしい、とにかく人間は愚なもので

あるから撫なでられ声で膝そばの傍へ寄って行くと、大抵

の場合において彼もしくは彼女を愛するものと誤解

して、わが為すままに任せるのみか折々は頭さえ撫な

でてくれるものだ。しかるに近来吾輩の毛中にのみもうちゅう

と号する一種の寄生虫が繁殖したので滅多に寄り添めった

うと、必ず頸筋くびすじを持つて向うへ抛ほうり出される。わず

かに眼に入るか入いらぬか、取るにも足らぬ虫のため

に愛想あいそをつかしたと見える。手を翻ひるせば雨、手を覆くつがえ

せば雲とはこの事だ。高がのみの千足びきや二千足でよ

くまあこんなに現金な真似が出来たものだ。人間世

界を通じて行われる愛の法則の第一条にはこうある
そうだ。——自己の利益になる間は、すべからく人

を愛すべし。——人間の取り扱が俄然豹変がぜんひょうへんしたので

、いくら痒かゆくても人力を利用する事は出来ん。だ

から第二の方法によつてしょうひまさつほう松皮摩擦法をやるよりほか

に分別はない。しからばちよつとこすつて参ろうか

とまた椽側えんがわから降りかけたが、いやこれも利害相償

わぬ愚策だと心付いた。と云うのはほかでもない。

松には脂やにがある。この脂やにたるすこぶる執着心の強い

者で、もし一たび、毛の先へくっ付けようものなら

、雷が鳴つてもバルチック艦隊が全滅しても決して

離れない。しかのみならず五本の毛へこびりつくが

早いか、十本に蔓延まんえんする。十本やられたなと気が付

くと、もう三十本引つ懸っている。吾輩は淡泊たんぱくを愛

ちやじんてきねこ

する茶人的猫である。こんな、しつこい、毒惡な、

しゅうねんぶか

ねちねちした、執念深い奴は大嫌だ。たとい天下の

びみょう

美猫といえどもご免蒙る。いわんや松脂まつやににおいてを

やだ。車屋の黒の両眼から北風に乗じて流れる目糞

えら

と拭ぶところなき身分をもつて、この淡灰色たんかいしよくの毛衣けごろも

だい

を大なしにすると怪けしからん。少しは考えて見る

がいい。といったところできやつなかなか考える氣きづ

遣かいはない。あの皮のあたりへ行つて背中をつけるが

早い**か**必ずべたりとおいでになるに極きまっている。こ

んな無分別な頓痴奇とんちきを相手にしては吾輩の顔に係わ

るのみならず、引いて吾輩の毛並に関する訳だ。い

くら、むずむずしたって我慢するよりほかに致し方

はあるまい。しかしこの二方法共実行出来んとなる

とはなはだ心細い。今において一工夫ひとくふうしておかんと

しまいにはむずむず、ねちねちの結果病氣かかに罹かかるか

も知れない。何か分別はあるまいかなと、後あと足あしを

折ひつて思案したが、ふと思ひ出した事がある。うち

の主人は時々手拭しやぽんと石鹼ひようぜんをもつて飄然ひようぜんといずれへか

出て行く事がある、三四十分して歸かへつたところを見

ると彼の朦朧もうろうたる顔色がんしよくが少しは活氣を帯びて、晴れ

やかに見える。主人のような汚苦むさくるしい男にこのくら

ききめ

いな影響を与えるなら吾輩にはもう少し利目があるに相違ない。吾輩はただでさえこのくらいな器量だ

から、これより色男になる必要はないようなもの

、万一病気に罹かつて一歳何なんが月げつで夭折ようせつするような事

そうせい

があつては天下の蒼生そうせいに対して申し訳がない。聞い

つぶ

せんとう

て見るとこれも人間のひま潰つぶしに案出した洗湯せんとうなる

ものだそうだ。どうせ人間の作ったものだから碌ろくな

ものでないには極きまっているがこの際の事だから試し

に這はい入って見るのもよからう。やって見て功験がな

ければよすまでの事だ。しかし人間が自己のために

設備した浴場へ異類の猫を入れるだけの洪量こうりょうがある

だろうか。これが疑問である。主人がすまして這はい入

るくらいのところだから、よもや吾輩を断わる事も

なかりうけれども万一お気の毒様を食うような事が

あつては外聞がわるい。これは一先ひとまず容子ようすを見に行

くに越した事はない。見た上でこれならよいと当り

が付いたら、手拭を啣くわえて飛び込んで見よう。とこ

こまで思案を定めた上でのそのそと洗湯へ出掛けた

。

横町を左へ折れると向うに高いとよ竹のようなも

のが屹立^{きつりつ}して先から薄い煙を吐いている。これ即ち^{すなわ}

洗湯である。吾輩はそつと裏口から忍び込んだ。裏

口から忍び込むのを卑怯^{ひきよう}とか未練とか云うが、あれ

は表からでなくては訪問する事が出来ぬものが嫉妬^{しつと}

半分に囃^{はや}し立てる繰^くり言^{ごと}である。昔から利口な人は

裏口から不意を襲う事にきまっている。紳士養成方^{ほう}

の第二巻第一章の五ページにそう出ているそうだ。

その次のページには裏口は紳士の遺書にして自身徳を得るの門なりとあるくらいだ。吾輩は二十世紀の猫だからこのくらいの教育はある。あんまり軽蔑けいべつしてはいけない。さて忍び込んで見ると、左の方に松を割って八寸くらいにしたのが山のように積んであって、その隣りには石炭が岡のように盛ってある。

なぜ松薪まつまきが山のように、石炭が岡のようかと聞く人

があるかも知れないが、別に意味も何もない、ただちよつと山と岡を使い分けただけである。人間も米を食つたり、鳥を食つたり、肴さかなを食つたり、獣けものを食つたりいろいろの悪あくもの食いをしつくしたあげくついに石炭まで食うように墮落したのは不憫ふびんである。行き当りを見ると一間ほどの入口が明け放しになつて、中のぞを覗くとがんがらがんのがあんと物静かであ

むこうがわ

る。その向側で何かしきりに人間の声がする。いわ

ゆる洗湯はこの声の発する辺へんに相違ないと断定した

から、松薪と石炭の間に出来てる谷あいを通り抜け

て左へ廻つて、前進すると右手に硝子窓ガラスまどがあつて、

そのそとに丸い小桶こおけが三角形即ちピラミッドのごとすなわ

く積みかさねてある。丸いものが三角に積まれるの

は不本意千万だろうと、ひそかに小桶諸君の意を諒りよう

とした。小桶の南側は四五尺の間板あいだが余つて、あたかも吾輩を迎うるもののごとく見える。板の高さは地面を去る約一メートルだから飛び上がるには御詔おあつらえの上等である。よろしいと云いながらひらりと身を躍おどらすといわゆる洗湯は鼻の先、眼の下、顔の前にぶらついている。天下に何が面白いと云つて、未いまだ食わざるものを食い、未だ見ざるものを見るほど

の愉快はない。諸君もうちの主人のごとく一週三度くらい、この洗湯界に三十分乃至四十分を暮すならいいが、もし吾輩のごとく風呂と云うものを見た事がないなら、早く見るがいい。親の死目しにめに逢あわなくてもいいから、これだけは是非見物するがいい。世界広しといえどもこんな奇観きかんはまたとあるまい。

何が奇観だ？

何が奇観だって吾輩はこれを口に

するを憚^{はば}かるほどの奇観だ。この硝子窓^{ガラスまど}の中にうじ

やうじや、があがあ騒いでいる人間はことごとく裸

体である。台湾の生蕃^{せいばん}である。二十世紀のアダムで

ある。そもそも衣装^{いしやう}の歴史を繙^{ひもと}けば——長い事だか

らこれはトイフェルスドレック君に譲って、繙くだ

けはやめてやるが、——人間は全く服装で持つてる

のだ。十八世紀の頃大英国バスの温泉場においてボ

ー・ナツシが嚴重な規則を制定した時などは浴場内で男女共肩から足まで着物でかくしたくらいである

。今を去る事六十年前^{ぜん}これも英国の去る都で図案学

校を設立した事がある。図案学校の事であるから、

裸体画、裸体像の模写、模型を買い込んで、ここ、

かしここに陳列したのはよかったが、いざ開校式を挙

行する一段になって当局者を初め学校の職員が大困

却をした事がある。開校式をやるとすれば、市の淑女を招待しなければならん。ところが当時の貴婦人方の考によると人間は服装の動物である。皮を着た猿の子分ではないと思つていた。人間として着物をつけないのは象の鼻なきがごとく、学校の生徒なきがごとく、兵隊の勇気なきがごとく全くその本体を失ししている。いやしくも本体を失している以上は人

間としては通用しない、獣類である。仮令たとひ模写模型

にせよ獣類の人間と伍するのは貴女の品位を害する

訳である。でありますから妾等しやうらは出席御断わり申す

と云われた。そこで職員共は話せない連中だとは思

ったが、何しろ女は東西両国を通じて一種の装飾品

である。米春こめつきにもなれん志願兵にもなれないが、開

校式には欠くべからざる化粧道具けしょうどうぐである。と云うと

ころから仕方がない、呉服屋へ行つて黒布くろぬのを三十五

はちぶんのしち

反八分七買つて来て例の獣類の人間にことごとく着

物をきせた。失礼があつてはならんと念に念を入れ

て顔まで着物をきせた。かようにしてようやくの事

とどこお

滞りなく式をすましたと云う話がある。そのくらい

衣服は人間にとって大切なものである。近頃は裸体

画裸体画と云つてしきりに裸体を主張する先生もあ

るがあれはあやまっている。生れてから今日こんにちに至る

まで一日も裸体になつた事がない吾輩から見ると、

どうしても間違っている。裸体は希臘ギリシャ、羅馬ローマの遺風

が文芸復興時代の淫靡いんぴの風ふうに誘われてから流行はやりだ

したもので、希臘人や、羅馬人は平常ふだんから裸体を見み

做なれていたのだから、これをもつて風教上の利害の

関係があるなどとは毫さうも思い及ばなかつたのだらう

が北欧は寒い所だ。日本でさえ裸で道中になるもの

かと云うくらいだから独逸ドイツや英吉利イギリスで裸になつてお

れば死んでしまふ。死んでしまつてはつまらないか

ら着物をきる。みんなが着物をきれば人間は服装の

動物になる。一たび服装の動物となつた後のちに、突然

裸体動物に出逢えば人間とは認めない、けだもの獣と思う。

それだから歐洲人ことに北方の歐洲人は裸体画、裸

体像をもつて獣として取り扱つていいのである。猫に劣る獣と認定していいのである。美しい？　美しくても構わんから、美しい獣と見倣みなせばいいのである。こう云うと西洋婦人の礼服を見たかと云うものもあるかも知れないが、猫の事だから西洋婦人の礼服を拝見した事はない。聞くとところによると彼等は胸をあらわし、肩をあらわし、腕をあらわしてこれ

を礼服と称しているそうだ。怪けしからん事だ。十四世紀頃までは彼等の出いで立たちはしかく滑稽ではなかつた、やはり普通の人間の着るものを着ておつた。

それがなぜこんな下等な軽術師流かるわざしに転化してきたか

は面倒だから述べない。知る人ぞ知る、知らぬものは知らん顔をしておればよろしかろう。歴史はとにかく彼等のかかる異様な風態をして夜間だけは得々とくとく

たるにも係わらず内心は少々人間らしいところもあると見えて、日が出ると、肩をすぼめる、胸をかくす、腕を包む、どこもかしこもことごとく見えなくしてしまうのみならず、足の爪一本でも人に見せるのを非常に恥辱と考えている。これで考えても彼等の礼服なるものは一種の頓珍漢的作用とんちんかんてきさようによって、馬鹿と馬鹿の相談から成立したものだと言ふ事が分る

くや
につちゆう

。それが口惜しければ日中でも肩と胸と腕を出して
いて見るがいい。裸体信者だってその通りだ。それ
ほど裸体がいいものなら娘を裸体にして、ついでに
自分も裸になつて上野公園を散歩でもするがいい、
できない？ 出来ないのではない、西洋人がやらな
いから、自分もやらないのだらう。現にこの不合理
極まる礼服を着て威張つて帝国ホテルなどへ出懸け

るではないか。その因縁いんねんを尋ねると何にもない。た

だ西洋人がきるから、着ると云うまでの事だろう。

西洋人は強いから無理でも馬鹿氣ていても真似なければやり切れないのだろう。長いものには捲まかれろ

、強いものには折れろ、重いものには圧おされろと、

そうれろ、尽しでは氣が利きかんではないか。氣が利きかんでも仕方がないと云うなら勘弁するから、あまり

日本人をえらい者と思つてはいけない。学問といえどもその通りだがこれは服装に關係がない事だから以下略とする。

衣服はかくのごとく人間にも大事なものである。

人間が衣服か、衣服が人間かと云うくらい重要な条件である。人間の歴史は肉の歴史にあらず、骨の歴史にあらず、血の歴史にあらず、単に衣服の歴史で

あると申したいくらいだ。だから衣服を着けない人

間を見ると人間らしい感じがしない。まるで化物にばけもの

かいこう邂逅したようだ。化物でも全体が申し合せて化物に

なれば、いわゆる化物は消えてなくなる訳だから構

わんが、それでは人間自身が大に困却おおいする事になる

ばかりだ。その昔むかし自然は人間を平等なるものに製

造して世の中に抛ほうり出した。だからどんな人間でも

あかはだか

ほんせい

生れるときは必ず赤裸である。もし人間の本性が平等に安んずるものならば、よろしくこの赤裸のままで生長してしかるべきだろう。しかるに赤裸の一人が云うにはこう誰も彼も同じでは勉強する甲斐がな

い。骨を折った結果が見えぬ。どうかして、おれはおれだ誰が見てもおれだと云うところが目につくようにしたい。それについては何か人を見てあつと魂

た

消る物をからだにつけて見たい。何か工夫はあるま

いかと十年間考えてようやく猿股さるまたを発明してすぐさ

まこれを穿はいて、どうだ恐れ入ったろうと威張って

そこいらを歩いた。これが今日の車夫の先祖である

。単簡たんかんなる猿股を発明するのに十年の長日月を費ついや

したのはいささか異いな感もあるが、それは今日から

古代に溯さかのぼって身を蒙昧もうまいの世界に置いて断定した結論

と云うもので、その当時にこれくらいの大発明はな
かったのである。デカルトは「余は思考す、故に余
は存在す」という三つ子^{みご}にでも分るような真理を考
え出すのに十何年か懸ったそうだ。すべて考え出す
時には骨の折れるものであるから猿股の発明に十年
を費やしたって車夫の智慧^{ちえ}には出来過ぎると云わね
ばなるまい。さあ猿股が出来ると世の中で幅のきく

のは車夫ばかりである。あまり車夫が猿股をつけて

天下の大道を我物顔に横行濶歩かつぽするのを憎らしいと

思つて負けん気の化物が六年間工夫して羽織と云う

無用の長物を発明した。すると猿股の勢力は頓とみに衰

えて、羽織全盛の時代となつた。八百屋、生薬屋きぐすりや、

呉服屋は皆この大発明家の末流ばつりゆうである。猿股期、羽

織期あとの後に来るのが袴期はかまきである。これは、何だ羽織

の癖にと癩癩かんしゃくを起した化物の考案になつたもので、

昔の武士今の官員などは皆この種属である。かよう

に化物共がわれもわれもと異いを銜てらい新しんを競きそつて、つ

いには燕つばめの尾にかたどつた畸形きけいまで出現したが、退

いてその由来を案ずると、何も無理矢理に、出鱈目でたらめ

に、偶然に、漫然に持ち上がった事実では決してな

い。皆勝ちたい勝ちたいの勇猛心の凝こつてさまざま

の新形しんがたとなつたもので、

おれは手前じゃないぞと振

れてあるく代りに被かぶつているのである。して見ると

この心理からして一大発見が出来る。それはほかで

もない。自然は真空を忌いむごとく、人間は平等を嫌

うと云う事だ。すでに平等を嫌つてやむを得ず衣服

を骨肉のごとくかようにつけ纏まとう今日において、こ

の本質の一部分たる、これ等を打ちやつて、元の空も

阿弥くあみの公平時代に帰るのは狂人の沙汰である。よし

狂人の名称を甘んじても帰る事は到底出来ない。帰

った連中をかいめいじん開明人の目から見れば化物である。仮令たとい

世界何億万の人口を挙あげて化物の域に引ずりおろし

てこれなら平等だろう、みんなが化物だから恥ずか

しい事はないと安心しててもやっぱり駄目である。世

界が化物になった翌日からまた化物の競争が始まる

。着物をつけて競争が出来なければ化物なりで競争

をやる。あかはだか赤裸は赤裸でどこまでも差別を立ててくる

。この点から見ても衣服はとうてい脱ぐ事は出来ないものになっている。

しかるに今吾輩が眼がん下に見下した人間の一団体は

、この脱ぐべからざる猿股も羽織も乃至袴ないしはかまもことごと

とく棚の上に上げて、無遠慮にも本来の狂態しゅうもを衆目

環視くかんしの裡うちに露出して平々然へいへいぜんと談笑ほしいまを縦たてまにしている

。吾輩さつきが先刻一大奇觀と云ったのはこの事である。

吾輩は文明の諸君子のためにここに謹つつしんでその一般を紹介するの榮を有する。

何だかごちやごちやしていて何なにから記述してい

いか分らない。化物のやる事には規律がないから秩

序立ゆぶねった証明をするのに骨が折れる。まず湯槽ゆぶねから

述べよう。湯槽だか何だか分らないが、大方湯槽と

おおかた

いうものだろうと思うばかりである。幅が三尺くら

い、長は一間半もあるか、それを二つに仕切つて一

ながさ

つには白い湯が這入っている。何でも薬湯とか号す

はい

くすりゆ

るのだそうで、石灰を溶かし込んだような色に濁つ

いしばい

ている。もつともただ濁っているのではない。膏ぎ

あぶら

って、重た気に濁っている。よく聞くと腐って見え

げ

るのも不思議はない、一週間に一度しか水を易えな

いのだそうだ。その隣りは普通一般の湯の由だがこ

れまたもって透明、瑩徹などとは誓って申されない

。天水桶を攪き混ぜたくらいの価値はその色の上に

おいて充分あらわれている。これからが化物の記述

だ。大分骨が折れる。天水桶の方に、突っ立って

る若造が二人いる。立ったまま、向い合って湯をざ

ぶざぶ腹の上へかけている。いい慰みだ。なぐさ双方共色

の黒い点において間然かんぜんするところなきまでに発達し

ている。この化物は大分だいぶん逞ましいなと見ていると、

やがて一人が手拭で胸のあたりを撫なで廻しながら

「金さん、どうも、ここが痛んでいけねえが何だろ

う」と聞くと金さんは「そりや胃さ、胃て云う奴は

命をとるからね。用心しねえとあぶないよ」と熱心

に忠告を加える。「だってこの左の方だぜ」た左肺さはい

の方を指す。「そこが胃だあな。左が胃で、右が肺

だよ」「そうかな、おらあまた胃はここいらかと思

った」と今度は腰の辺を叩たたいて見せると、金さんは

「そりや疝氣せんきだあね」と云った。ところへ二十五六

の薄い髯ひげを生はやした男がどぶんと飛び込んだ。する

と、からだに付いていた石鹼シャボンが垢あかと共に浮きあがる

。鉄氣かなけのある水を透すかして見た時のようにきらきら

と光る。その隣りに頭の禿はげた爺さんが五分刈を捕とら

えて何か弁じている。双方共頭だけ浮かしているの

みだ。「いやこう年をとっては駄目さね。人間もや

きが廻まわつちや若い者には叶かなわないよ。しかし湯だけ

は今でも熱いのでないと心持が悪くてね」「旦那な

んか丈夫なものですぜ。そのくらい元氣がありや結

構だ」 「元氣もないのさ。ただ病氣をしないだけさ

。人間は悪い事さえしなけりやあ百二十までは生きるもんだからね」 「へえ、そんなに生きるもんです

か」 「生きるとも百二十までは受け合う。御維新前ごいつしんまえ

牛込に曲淵まがりぶちと云う旗本はたもとがあつて、そこにいた下男は

百三十だったよ」 「そいつは、よく生きたもんです

ね」 「ああ、あんまり生き過ぎてつい自分の年を忘

れてね。百までは覚えていました。それがそれから忘れてしまいましたが云つてたよ。それでわしの知つていたのが百三十の時だったが、それで死んだんじやない。それからどうなつたか分らない。事によるとまだ生きてるかも知れない」と云いながら槽ふねから上あがる。髯ひげを生はやしている男は雲母きららのようなものを自分の廻まりに蒔まき散らしながら独ひとりでにやにや笑つていた。

。入れ代つて飛び込んで来たのは普通一般の化物と

は違つて背せ中に模様画をほり付けている。岩見重太

郎ろうが大刀だいとうを振り翳かざして蟒うわばみを退治たいじるところのようだが

、惜しい事に未だ竣功ま しゅんこうの期に達せんので、蟒はどこ

にも見えない。従つて重太郎先生いささか拍子抜け

の気味に見える。飛び込みながら「篋棒べらぼうに温ぬるいや

」と云つた。するとまた一人続いて乗り込んだのが

「こりやどうも……もう少し熱くなくっちゃあ」と

けしき

顔をしかめながら熱いのを我慢する気色とも見えた

が、重太郎先生と顔を見合せて「やあ親方」と挨拶あいさつ

をする。重太郎は「やあ」と云ったが、やがて「民

さんはどうしたね」と聞く。「どうしたか、じゃん

じやんが好きだからね」「じゃんじやんばかりじや

ねえ……」「そうかい、あの男も腹のよくねえ男だ

からね。――どう云うもんか人に好かれねえ、――
どう云うものだか、――どうも人が信用しねえ。職
人てえものは、あんなもんじやねえが」「そうよ。

民さんなんざあ腰が低いんじやねえ、頭ずが高たけえん

だ。それだからどうも信用されねえんだね」「本当
によ。あれで一いっぱし腕があるつもりだから、――

つまり自分の損だあな」「しろかねちよう白銀町にも古い人が亡なく

なつてね、今じや桶屋おけやの元さんと煉瓦屋れんがやの大將と親

方ぐれえな者だあな。こちとらあこうしてここで生

れたもんだが、民さんなんざあ、どこから来たんだ

か分りやしねえ」「そうよ。しかしよくあれだけに

なつたよ」「うん。どう云うもんか人に好かれねえ

。人が交際つきあわねえからね」と徹頭徹尾民さんを攻撃

する。

天水桶はこのくらいにして、白い湯の方を見ると

これはまた非常な大入で、湯の中に人が這入はいつてゐる

と云わんより人の中に湯が這入つてると云う方が適

当である。しかも彼等はすこぶる悠々閑々ゆうゆうかんかんたる物で

先刻さつきから這入るものはあるが出る物は一人もない

。こう這入った上に、一週間もとめておいたら湯も

よごれるはずだと感心してなおよく槽おけの中を見渡す

と、左の隅に圧おしつけられて苦沙弥先生が真ま赤っにな

ってすくんでいる。可かわい哀いそうに誰か路をあけて出し

てやればいいのに思うのに誰も動きそうにもしな

ければ、主人も出ようとする気色けしきも見せない。ただ

じつとして赤くなっているばかりである。これはご

苦勞な事だ。なるべく二錢五厘の湯錢を活用しよう

と云う精神からして、かように赤くなるのだろうが

早く上がらんと湯氣ゆけにあがるがと主思しゅうおもいの吾輩は

窓の棚たなから少なからず心配した。すると主人の一軒

置いて隣りに浮いてる男が八の字を寄せながら「こ

れはちと利きき過ぎるようだ、どうも背中せなかの方から熱

い奴がじりじり湧わいてくる」と暗に列席の化物に同

情を求めた。「なあにこれがちようどいい加減です

。薬湯はこのくらいでないと利ききません。わたしの

国なぞではこの倍も熱い湯へ這入ります」と自慢らしく説き立てるものがある。「一体この湯は何に利くんでしよう」と手拭をたた畳んで凸凹頭をかくした男が一同に聞いて見る。「いろいろなものに利きますよ。何でもいいてえんだからね。豪氣まうきだあね」と云ったのは瘠やせた黄瓜きゅうりのような色と形とを兼ね得たる顔の所有者である。そんなに利く湯なら、もう少し

は丈夫そうになれそうなものだ。「薬を入れ立てよ

り、三日目か四日目がちようどいいようです。今日きょう

等などは這入り頃ですよ」と物知り顔に述べたのを見る

と、膨ふくれ返った男である。これは多分垢肥あかぶとりだろう

。「飲んでも利きましようか」とどこからか知らな

いが黄色い声を出す者がある。「冷ひえた後あとなどは一

杯飲んで寝ると、奇き体たいに小便に起きないから、まあ

やつて御覧なさい」と答えたのは、どの顔から出た声か分らない。

湯槽ゆぶねの方はこれぐらいにして板間いたまを見渡すと、い

るわいるわ絵にもならないアダムがずらりと並んで

各勝手次第おのおのな姿勢で、勝手次第なところを洗つてい

る。その中にもつとも驚ろくべきのは仰向けあおむに寝て

、高い明かり取あとりを眺めながめているのと、腹這はらばいになって

溝の中を覗き込んでゐる両アダムである。これは

よほど閑なアダムと見える。坊主が石壁を向いてし

やがんでゐると後ろから、小坊主がしきりに肩を叩

いてゐる。これは師弟の關係上三介の代理を務める

のであろう。本当の三介もゐる。風邪を引いたと見

えて、このあついのにちゃんちゃんを着て、小判形

の桶おけからざあと旦那の肩へ湯をあびせる。右の足を

見ると親指の股に呉紹ごしょうの垢擦あかすりを挟はさんでいる。こち

こおけ

らの方では小桶を慾張こおけって三つ抱え込んだ男が、隣

シャボン

りの人に石鹼シャボンを使え使えと云いながらしきりに長談

議をしている。何だろうと聞いて見るとこんな事を

言っていた。「鉄砲は外国から渡ったもんだね。昔

は斬り合いばかりさ。外国は卑怯だからね、それで

あんなものが出来たんだ。どうも支那じゃねえよう

だ、やっぱり外国のようだ。和唐内わとうないの時にや無かつ

たね。和唐内はやはり清和源氏さ。なんでも義経が

蝦夷えぞから満洲へ渡った時に、蝦夷の男で大変学がくので

きる人がくっ付いて行つたてえ話しだね。それでそ

の義経のむすこが大明たいみんを攻めたんだが大明じゃ困る

から、三代將軍へ使をよこして三千人の兵隊を借かし

てくれろと云うと、三代様さんだいさまがそいつを留めておいて

歸さねえ。――何とか云ったつけ。――何でも何と

か云う使だ。――それでその使を二年とめておいて

しまいじょうろに長崎で女郎を見せたんだがね。その女郎に

出来た子が和唐内さ。それから国へ歸つて見ると大

明は国賊に亡ぼされていた。……」何を云うのかさ

っぱり分らない。その後ろうしに二十五六の陰気な顔を

した男が、ぼんやりして股の所を白い湯でしきりに

たでている。腫物はれものが何かで苦しんでいると見える。

その横に年の頃は十七八で君とか僕とか生意気な事をべらべら喋しゃべ舌つてるのはこの近所の書生だろう。

そのまた次に妙な背中せなかが見える。尻の中から寒竹かんちくを

押し込んだように背骨せぼねの節が歴々ありありと出ている。そう

してその左右に十六むさしに似たる形が四個ずつ行

儀よく並んでいる。その十六むさしが赤く爛ただれて周ま

困わりに膿うみをもっているのもある。こう順々に書いてく

ると、書く事が多過ぎて到底吾輩の手際てぎわにはその一いっ

斑ばんさえ形容する事が出来ん。これは厄介な事をやり

始めた者だと少々辟易へきえきしていると入口の方に浅黄木あさぎも

綿めんの着物をきた七十ばかりの坊主がぬっあらと見われた

坊主は恭うやうやしくこれらの裸体の化物に一礼して「へ

い、どなた様も、毎日相変らずありがとうございますと存じます

。今日は少々御寒うございますから、どうぞ御緩く

り——どうぞ白い湯へ出たり這はい入ったりして、ゆる

りと御あつたまり下さい。——番頭さんや、どうか

湯加減をよく見て上げてな」とよどみなく述べ立て

た。番頭さんは「おーい」と答えた。和唐内は「愛あい

嬌きょうものだね。あれでなくては商買しょうばいは出来ないよ」と

大おおに爺おやさんを激賞した。吾輩は突然この異いな爺さん

に逢つてちよつと驚ろいたからこつちの記述はそのままにして、しばらく爺さんを専門に觀察する事にした。爺さんはやがて今上り^{あが}立て^たの四つばかりの男の子を見て「坊ちゃん、こちらへおいで」と手を出す。小供は大福を踏み付けたような爺さんを見て大變だと思つたか、わーつと悲鳴を揚^あげてなき出す。

爺さんは少しく不本意の気味で「いや、御泣きか、

なに？　爺さんが恐い？　いや、これはこれは」と

感嘆した。仕方がないものだからたちまち機鋒きほうを転

じて、小供の親に向つた。「や、これは源さん。今

日は少し寒いな。ゆうべ、近江屋おうみやへ這入つた泥棒は

何と云う馬鹿な奴じやの。あの戸の潜くぐりの所を四角

に切り破つての。そうしてお前の。何も取らずに行い

んだげな。御巡おまわりさんか夜番でも見えたものであろ

う」^{おおい}と大に泥棒の無謀を憫笑^{びんしょう}したがまた一人を捉^つら
まえて「はいはい御寒う。あなた方は、御若いから
、あまりお感じにならんかの」と老人だけにただ一
人寒がつている。

しばらくは爺さんの方へ気を取られて他の化物の
事は全く忘れていたのみならず、苦しそうにすくん
でいた主人さえ記憶^{うち}の中から消え去った時突然流し

と板の間の中間で大きな声を出すものがある。見る

まぎ

と紛れもなき苦沙弥先生である。主人の声の凶抜け

て大いなるのと、その濁って聴き苦しいのは今日に

始まった事ではないが場所が場所だけに吾輩は少か

らず驚ろいた。これは正まさしく熱湯の中うちに長時間のあ

つか

ぎやくじょう

いだ我慢をして浸つかっておったため逆上ぎやくじょうしたに相違な

とっさ

いと咄嗟とっさの際に吾輩は鑑定をつけた。それも単に病

気の所為せいなら咎とがむる事もないが、彼は逆上しながら

も充分本心を有しているに相違ない事は、何のため

にこの法外の胴間どうまごえ声を出したかを話せばすぐわかる

。彼は取るにも足らぬ生意氣書生なまいきを相手に大人氣おとなげも

ない喧嘩を始めたのである。「もつと下がれ、おれ

の小桶に湯が這入はいっていかん」と怒鳴るのは無論主

人である。物は見ようでもなるものだから、

この怒号をただ逆上の結果とばかり判断する必要は

ない。万人のうちに一人くらいは高山彦九郎が山賊

たかやまひこくろう

を叱しつしたようだけに解釈してくれるかも知れん

。当人自身もそのつもりでやった芝居かも知らんが

、相手が山賊をもつて自みづからおらん以上は予期する結

果は出て来ないに極きまっている。書生は後うしろを振り返

って「僕はもとからここにいたのです」とおとなし

く答えた。これは尋常の答で、ただその地を去らぬ事を示しただけが主人の思い通りにならなかったので、その態度と云い言語と云い、山賊として罵^{のの}り返すべきほどの事でもないのは、いかに逆上の気味の主人でも分っているはずだ。しかし主人の怒号は書生の席そのものが不平なのではない、先刻^{さつき}からこの兩人は少年に似合わず、いやに高慢ちきな、利^きいた風の事

ばかり併ならべていたので、始終それを聞かされた主人

は、全くこの点に立腹したものと見える。だから先

方でおとなしい挨拶をしても黙って板の間へ上がり

はせん。今度は「何だ馬鹿野郎、人の桶おけへ汚ない水

をぴちやぴちや跳はねかす奴があるか」と喝かつし去った

。吾輩もこの小僧を少々心憎く思っていたから、こ

の時心中にはちよつと快哉かいさいを呼んだが、学校教員た

る主人の言動としては穩かならぬ事と思つた。元来

主人はあまり堅過ぎていかん。石炭のたき殻見たよ

うにかさかさしてしかもいやに硬い。むかしハンニ

バルがアルプス山を越える時に、路の真中に當つて

大きな岩があつて、どうしても軍隊が通行上の不便

邪魔をする。そこでハンニバルはこの大きな岩へ醋す

をかけて火を焚いて、柔かにしておいて、それから

のこぎり
鋸でこの大岩を蒲鉾かまぼこのように切つて滞りなく通行を

したそうだ。主人のごとくこんな利目ききめのある薬湯へ

煮うだるほど這入はいつても少しも機能のない男はやはり

醋をかけて火炙ひあぶりにするに限ると思う。しからずん

ば、こんな書生が何百人出て来て、何十年かかった

って主人の頑固がんこは癒なおりっこない。この湯槽ゆぶねに浮いて

いるもの、この流しにごろごろしているものは文明

の人間に必要な服装を脱ぎ棄てる化物の団体であるから、無論常規常道をもつて律する訳にはいかん。

何をしたって構わない。肺の所に胃が陣取って、和唐内が清和源氏になって、民さんが不信用でもよろう。しかし一たび流しを出て板の間に上がれば、

もう化物ではない。普通の人類の生息する娑婆せいそくへ出

たのだ、文明に必要なる着物をきるのだ。従って人

間らしい行動をとらなければならんはずである。今

主人が踏んでいるところは敷居である。流しと板の

間の境にある敷居の上であつて、当人はこれから歎かん

げんゆしよく

えんてんかつだつ

言愉色、円転滑脱の世界に逆戻りをしようと言う間ま

ぎわ

際である。その間際ですらかくのごとく頑固がんこである

ろう

なら、この頑固は本人にとって牢ろうとして抜くべから

ざる病気に相違ない。病気なら容易に矯正きょうせいする事は

出来まい。この病気を癒す^{なお}方法は愚考によるとただ

一つある。校長に依頼して免職して貰う事^{すなわ}即ちこれ

なり。免職になれば融通の利^きかぬ主人の事だからき

つと路頭に迷うに極^{きま}つてゐる。路頭に迷う結果はのた

れ死にをしなければならぬ。換言すると免職は主

人にとって死の遠因になるのである。主人は好んで

病氣をして喜こんでいるけれど、死ぬのは大嫌^{だいきら}であ

る。死なない程度において病氣と云う一種の贅沢ぜいたくが
していたいのである。それだからそんなに病氣をし
ていると殺すぞと嚇おどかせば臆病なる主人の事だから
びりびりと悸ふるえ上がるに相違ない。この悸え上がる
時に病氣は奇麗に落ちるだろうと思う。それでも落
ちなければそれまでの事さ。

いかに馬鹿でも病氣でも主人に変わりはない。一飯いっばん

君恩を重んずと云う詩人もある事だから猫だつて主人の身の上を思わない事はあるまい。気の毒だと云う念が胸一杯になつたため、ついそちらに気が取られて、流しの方の觀察を怠^{おこ}たつていると、突然白い湯槽^{ゆぶね}の方面に向つて口々に罵^{ののし}る声が聞える。ここに
も喧嘩が起つたのかと振り向くと、狭い柘榴口^{ざくろぐち}に一^{いっ}寸^{すん}の余地もないくらいに化物が取りついて、毛のあ

る脛と、毛のない股と入り乱れて動いている。折か

はつあき

ら初秋の日は暮るるになんなんとして流しの上は天

井まで一面の湯気が立て籠こめる。かの化物の犇ひしめく様さま

がその間から朦朧もうろうと見える。熱い熱いと云う声が吾

輩の耳を貫つらぬいて左右へ抜けるように頭の中で乱れ

合う。その声には黄なものも、青いのも、赤いのも、

黒いのもあるが互に畳かさなりかかって一種名状すべか

らざる音響を浴場内に漲みなぎらす。ただ混雑と迷乱とを

形容するに適した声と云うのみで、ほかには何の役

にも立たない声である。吾輩は茫然ぼうぜんとしてこの光景

に魅入みいられたばかり立ちすくんでいた。やがてわー

わーと云う声が混乱の極度に達して、これよりはも

う一步も進めぬと云う点まで張り詰められた時、突

然無茶苦茶に押し寄せ押し返している群むれの中から一

大長漢がぬつと立ち上がった。彼の身みの丈たけを見ると

ほか

他の先生方よりはたしかに三寸くらいは高い。のみ

ならず顔から髯ひげが生はえているのか髯の中に顔が同居

しているのか分らない赤つらを反そり返して、日盛り

に破われ鐘かねをつくような声を出して「うめろうめろ、

熱い熱い」と叫ぶ。この声とこの顔ばかりは、かの

ふんぶん

紛々ふんぶんと纏もつれ合う群衆の上に高く傑出して、その瞬間

には浴場全体がこの男一人になったと思わるるほど

である。超人だ。ニ―チエのいわゆる超人だ。魔中

の大王だ。化物の頭梁だ。とうりよう。と思つて見ていると湯槽ゆぶね

の後ろでうしおーいと答えたものがある。おやとまたも

そちらに眸をひとみそらすと、暗慥あんたんとして物色も出来ぬ中

に、例のちゃんちゃん姿の三介が砕けよと一塊りさんすけのひとかたま

石炭を竈かまどの中に投げ入れるのが見えた。竈の蓋ふたをく

ぐつて、この塊りがぱちぱちと鳴るときに、三介の

半面がぱつと明るくなる。同時に三介の後ろうしにある

煉瓦れんがの壁が暗やみを通して燃えるごとく光った。吾輩は

少々物凄ものすごくなつたから早々窓から飛び下りて家いえに帰

る。帰りながらも考えた。羽織を脱ぎ、猿股を脱ぎ

はかま

袴はかまを脱いで平等になろうと力つとめる赤裸々の中には

、また赤裸々の豪傑が出て来て他の群小を圧倒して

しまう。平等はいくらはだかになつたつて得られるものではない。

歸つて見ると天下は太平なもので、主人は湯上が

りの顔をテラテラ光らして晚餐ばんさんを食っている。吾輩

が椽側えんがわから上がるのを見て、のんきな猫だなあ、今

頃どこをあるいているんだらうと云つた。膳の上を

見ると、銭ぜにのない癖に二三品御菜おかずをならべている。

そのうちに肴さかなの焼いたのが一疋びきある。これは何と称

する肴か知らんが、何でも昨日きのうあたり御台場近辺で

やられたに相違ない。肴は丈夫なものだと説明して

おいたが、いくら丈夫でもこう焼かれたり煮られた

りしてはたまらん。多病にして残喘ざんぜんを保つ方たもがよほ

ど結構だ。こう考えて膳そばの傍に坐すつて、隙すきがあつた

ら何か頂戴しようと、見るごとく見ざるごとく装よそおつ

ていた。こんな装い方を知らないものはとうていう

まい肴は食えないと諦めなければいけない。あきら主人は

肴をちよつと突つついたが、うまくなないと云う顔付

をして箸を置いた。はし正面に控えたる妻君はこれまた

無言のまま箸の上下に運動する様子、主人の両顎の

りごうかいこう離合開闔の具合を熱心に研究している。

「おい、その猫の頭をちよつと撲ぶつて見ろ」と主人

は突然細君に請求した。

「撲てば、どうするんですか」

「どうしてもいいからちよつと撲つて見ろ」

こうですかと細君は平手ひらてで吾輩の頭をちよつと敲たた

く。痛くも何ともない。

「鳴かんじやないか」

「ええ」

「もう一返へんやって見ろ」

「何返やったって同じ事じゃありませんか」と細君

また平手でぽかと参まいる。やはり何ともないから、じ

っとしていた。しかしその何のためたるやは智慮深

き吾輩には頓とんと了解し難い。これが了解出来れば、

どうかこうか方法もあろうがただ撲って見ろだから

、撲つ細君も困るし、撲たれる吾輩も困る。主人は

二度まで思い通りにならんで、少々焦れ気味で

「おい、ちよつと鳴くようにぶつて見ろ」と云つた

細君は面倒な顔付で「鳴かして何になさるんです

か」と問いながら、またぴしやりとおいでになつた

。こう先方の目的がわかれば訳はない、鳴いてさえ

やれば主人を満足させる事は出来るのだ。主人はか

くのごとく愚物ぐぶつだから厭いやになる。鳴かせるためなら

、ためと早く云えば二返も三返も余計な手数てすうはしな

くてもすむし、吾輩も一度で放免になる事を二度も

三度も繰り返えされる必要はないのだ。ただ打ぶって

見ろと云う命令は、打つ事それ自身を目的とする場

合のほかには用うべきものでない。打つのは向うの事

、鳴くのはこっちの事だ。鳴く事を始めから予期し

て懸つて、ただ打つと云う命令のうちに、こつちの
随意たるべき鳴く事さえ含まつてるように考えるの
は失敬千万だ。他人の人格を重んぜんと云うものだ
。猫を馬鹿にしている。主人の蛇蝎だかつのごとく嫌う金
田君ならやりそうな事だが、赤裸々をもつて誇る主
人としてはすこぶる卑劣である。しかし実のところ
主人はこれほどけちな男ではないのである。だから

主人のこの命令は狡猾こうかつの極きよくに出いでたのではない。つ

まり智慧ちえの足りないところから湧わいた子子ぼうふらのような

ものと思惟しする。飯を食えば腹が張るに極きまってい

る。切れば血が出るに極きっている。殺せば死ぬに極

まっている。それだから打ぶてば鳴くに極きっていると

速断をやったんだろう。しかしそれはお気の毒だが

少し論理に合わない。その格で行くと川へ落ちれば

必ず死ぬ事になる。天麩羅てんぷらを食えば必ず下痢げりする事

になる。月給をもらえば必ず出勤する事になる。書

物を読めば必ずえらくなる事になる。必ずそうなつ

ては少し困る人が出来てくる。打てば必ずなかなかけ

ればならんとなると吾輩は迷惑である。目白の時の

鐘と同一に見倣みなされては猫と生れた甲斐かいがない。ま

ず腹の中でこれだけ主人を凹へこましておいて、しかる

後にやーと注文通り鳴いてやった。

すると主人は細君に向つて「今鳴いた、に、や、あと云う声は感投詞か、副詞か何だか知つてるか」と聞いた。

細君はあまり突然な問なので、何にも云わない。

実を云うと吾輩もこれは洗湯の逆上がまださめないためだろうと思つたくらいだ。元来この主人は近所

きんじよ

合壁有名な変人で現にある人はたしかに神経病だとも
 まで断言したくらいである。ところが主人の自信は
 えらいもので、おれが神経病じゃない、世の中の奴
 が神経病だと頑張がんばっている。近辺のものが主人を犬
 々と呼ぶと、主人は公平を維持するため必要だとか
 号して彼等を豚々ぶたぶたと呼ぶ。実際主人はどこまでも公
 平を維持するつもりらしい。困ったものだ。こう云

う男だからこんな奇問を細君にむか対つて呈出するのも

あさめしまえ

、主人に取つては朝食前の小事件かも知れないが、

聞く方から云わせるとちよつと神経病に近い人の云

いそうな事だ。だから細君は煙にけむ捲まかれた気味で何

とも云わない。吾輩は無論何とも答えようがない。

すると主人はたちまち大きな声で

「おい」と呼びかけた。

細君は吃驚^{びっくり}して「はい」と答えた。

「そのはいは感投詞か副詞か、どっちだ」

「どっちですか、そんな馬鹿氣た事はどうでもいい
じゃありませんか」

「いいものか、これが現に国語家の頭脳を支配して
いる大問題だ」

「あらまあ、猫の鳴き声ですか、いやな事ねえ。」

だって、猫の鳴き声は日本語じゃあないじゃないですか」

「それだからさ。それがむずかしい問題なんだよ。

比較研究と云うんだ」

「そう」と細君は利口だから、こんな馬鹿な問題には関係しない。「それで、どっちだか分ったんですか」

「重要な問題だからそう急には分らんさ」と例の肴さかな

をむしやむしや食う。ついでにその隣にある豚と芋いも

のにころばしを食う。「これは豚だな」「ええ豚で

ござんす」「ふん」と大軽蔑だいけいべつの調子をもつて飲み込

んだ。「酒をもう一杯飲もう」と杯さかずきを出す。

「今夜はなかなかあがるのね。もう大分だいぶん赤くなつて

いらつしやいますよ」

「飲むとも——御前世界で一番長い字を知ってるか

」

「ええ、前のさき関白太政大臣でしょう」

「それは名前だ。長い字を知ってるか」

「字って横文字ですか」

「うん」

「知らないわ、——御酒はもういいでしょう、これ

で御飯になさいな、ねえ」

「いや、まだ飲む。一番長い字を教えてやろうか」
「ええ。そうしたら御飯ですよ」

「Archaiomelesidonophrunicherata ヌニム字だ」

「出鱈目でたらめでしょう」

「出鱈目なものか、ギリシヤ語希臘語だ」

「何という字なの、日本語にすれば」

「意味はしらん。ただ綴り^{つづ}だけ知ってるんだ。長く書くと六寸三分くらいにかける」

他人なら酒の上で云うべき事を、正気で云っているところがすこぶる奇観である。もつとも今夜に限って酒を無暗^{むやみ}にのむ。平生なら猪口^{ちよこ}に二杯ときめているのを、もう四杯飲んだ。二杯でも随分赤くなるところを倍飲んだのだから顔が焼火箸^{やけひばし}のようにはて

つて、さも苦しそうだ。それでもまだやめない。

「もう一杯」と出す。細君はあまりの事に

「もう御よしになつたら、いいでしょう。苦しいば

かりですわ」と苦々しい顔をにがにがする。

「なに苦しくつてもこれから少し稽古するんだ。大おお

町桂月まちけいげつが飲めと云った」

「桂月って何です」さすがの桂月も細君に逢つては

一文の価値いちもんもない。

「桂月は現今一流の批評家だ。それが飲めと云うのだからいいに極きまっているさ」

「馬鹿をおっしやい。桂月だって、梅月だって、苦しい思をして酒を飲めなんて、余計な事ですわ」

「酒ばかりじゃない。交際をして、道楽をして、旅行をしろといった」

「なおわるいじやありませんか。そんな人が第一流の批評家なの。まああきれた。妻子のあるものに道楽をすすめるなんて……」

「道楽もいいさ。桂月が勧めなくつても金さえあればやるかも知れない」

「なくつて仕合せだわ。今から道楽なんぞ始められちやあ大変ですよ」

「大變だと云うならよしてやるから、その代りもう
少^{おつと}し夫を大事にして、そうして晩に、もつと御馳走
を食わせろ」

「これが精一杯のところですよ」

「そうかしらん。それじゃ道楽は追つて金が這^{はい}入り
次第やる事にして、今夜はこれでやめよう」と飯茶
碗を出す。何でも茶漬を三ぜん食ったようだ。吾輩

はその夜豚肉三片よみきれと塩焼の頭を頂戴した。

八

垣巡りかきめぐと云いう運動を説明した時に、主人の庭を結ゆ

い繞めぐらしてある竹垣の事をちよつと述べたつもりで

あるが、この竹垣の外がすぐ隣家、即ち南隣みなみとなりの次郎じろ

ちゃんと思つては誤解である。家賃は安いがそ

こは苦沙弥先生である。与よつちちゃんや次郎ちゃんな

どと号する、いわゆるちゃん付きの連中と、薄っ片ぺら

な垣一重を隔てて御隣り同志の親密なる交際は結ん

でおらぬ。この垣の外は五六間の空地あきちであつて、そ

の尽くるところに檜ひのきが蓊然こんもりと五六本併ならんでいる。椽えん

側がわから拝見すると、向うは茂った森で、ここに往む

先生は野中の一軒家に、無名の猫を友にして日月を

じつげつ

こうこ

しよし

送る江湖の処士であるかのごとき感がある。但し檜

ただ

ふいちよう

の枝は吹聴するごとく密生しておらんで、その間

あいだ

ぐんかくかん

から群鶴館という、名前だけ立派な安下宿の安屋根

が遠慮なく見えるから、しかく先生を想像するのに

はよほど骨の折れるのは無論である。しかしこの下

きよ

がりようくつ

宿が群鶴館なら先生の居はたしかに臥竜窟くらいな

価値はある。名前に税はかからんから御互にえらそうな奴を勝手次第に付ける事として、この幅五六間の空地が竹垣を添うて東西に走る事約十間、それから、たちまち鉤かぎの手に屈曲して、臥竜窟の北面を取り囲んでいる。この北面が騒動の種である。本来なら空地を行き尽してまたあき地、とか何とか威張つてもいいくらいに家の二側ふたがわを包んでいるのだが、臥がり

ようくつ

竜窟の主人は無論窟内の靈猫たる吾輩すらこのあき

れいびよう

地には手こずっている。南側に檜ひのきが幅を利きかしてい

るごとく、北側には桐きりの木が七八本行列している。

もう周囲一尺くらいにのびているから下駄屋さえ連

れてくればいい価ねになるんだが、借家しゃくやの悲しさには、

いくら気が付いても実行は出来ん。主人に対しても

気の毒である。せんだって学校の小使が来て枝を一

本切つて行つたが、そのつぎに来た時は新らしい桐

まないたげた

は

の俎下駄を穿いて、この間の枝でこしらえましたと、

ふいちよう

聞きもせんのに吹聴していた。ずるい奴だ。桐はあ

るが吾輩及び主人家族にとつては一文にもならない

桐である。玉を抱いだいて罪ありと云う古語があるそう

は

だが、これは桐を生はやして銭ぜになしと云つてもしかる

ぐさ

べきもので、いわゆる宝の持ち腐れである。愚ぐなる

ものは主人にあらず、吾輩にあらず、家主やぬしの伝兵衛

である。いないかな、いないかな、下駄屋はいない

かなと桐の方で催促しているのに知らん面かおをして屋や

賃ちんばかり取り立てにくる。吾輩は別に伝兵衛うらみに恨も

ないから彼の悪口あっこうをこのくらいにして、本題に戻つ

てこの空地あきちが騒動の種であると云う珍譚ちんだんを紹介仕つかまつる

が、決して主人にいつてはいけない。これぎりの話

しである。そもそもこの空地に関して第一の不都合なる事は垣根のない事である。吹き払い、吹き通し、抜け裏、通行御免天下晴れての空地である。あると云うと嘘をつくようではない。実を云うとあつたのである。しかし話しは過去へ溯さかのぼらんと原因が分らない。原因が分らないと、医者でも処方しょうほうに迷惑する。だからここへ引き越して来た当時からゆ

つくりと話し始める。吹き通しも夏はせいせいして
心持ちがいいものだ、不用心だつて金のないところ
に盗難のあるはずはない。だから主人の家に、あら
ゆる堀^{へい}、垣^{ないし}、乃至は乱杭^{らんぐい}、逆茂木^{さかもぎ}の類は全く不要で
ある。しかしながらこれは空地の向うに住居^{すまい}する人
間もしくは動物の種類^{いかん}如何によつて決せらるる問題
であらうと思う。従つてこの問題を決するためには

勢い向う側に陣取っている君子の性質を明かにせん
ければならん。人間だか動物だか分らない先に君子
と称するのははなはだ早計のようではあるが大抵君
子で間違はない。りようじよう梁上の君子などと云つて泥棒さえ
君子と云う世の中である。但しただこの場合における君
子は決して警察の厄介になるような君子ではない。

警察の厄介にならない代りに、数でこなした者と見

えて沢山いる。うじやうじやいる。落雲館らくうんかんと称する

私立の中学校——八百の君子をいやが上に君子に養成するために毎月二円の月謝を徴集する学校である。

名前が落雲館だから風流な君子ばかりかと思うと、

それがそもそもの間違になる。その信用すべからざ

る事は群鶴館ぐんかくかんに鶴の下りざるごとく、臥竜窟に猫が

いるようなものである。学士とか教師とか号するも

のに主人苦沙弥君のごとき気違のある事を知った以上は落雲館の君子が風流漢ばかりでないと言ふ事がわかる訳だ。わけそれがわからんと主張するならまず三日ばかり主人のうちへ宿りに来て見るがいい。とま

前申すごとく、ぜんここへ引き越しの当時は、例の空あ

きち地に垣がないので、落雲館の君子は車屋の黒のごとく、きりばたけのそのそと桐畠に這入り込んできて、話をする、

弁当を食う、笹ささの上に寝転ぶ——いろいろの事をや

ったものだ。それから**は**弁当の死骸すなわ即ち竹の皮、古

新聞、あるいは古草履ふるぞうり、古下駄、ふると云う名のつ

くものを大概ここへ棄てたようだ。無頓着なる主人

は存外平気に構えて、別段抗議も申し込まずに打ち

過ぎたのは、知らなかったのか、知つても咎とがめんつ

もりであつたのか分らない。ところが彼等諸君子は

学校で教育を受くるに従つて、だんだん君子らしく

なつたものと見えて、次第に北側から南側の方面へ

さんしよく

向けて蚕食を企だてて來た。蚕食と云う語が君子に

不似合ならやめてもよろしい。但ただしほかに言葉がな

すいそう

いのである。彼等は水草を追うて居を變ずる沙漠さばくの

きり

ひのき

住民のごとく、桐の木を去つて檜ひのきの方に進んで來た。

檜のある所は座敷の正面である。よほど大胆なる君

子でなければこれほどの行動は取れんはずである。

一両日の後^{のち}彼等の大胆はさらに一層の大を加えて大^{だい}

々^{だいたん}胆となつた。教育の結果ほど恐しいものはない。

彼等は単に座敷の正面に^{せま}逼るのみならず、この正面

において歌をうたいだした。何と云う歌か忘れてし

まったが、決して三十一文字^{みそひともじ}の類^{たぐい}ではない、もつと

活^{かつぱつ}潑で、もつと俗耳^{ぞくじ}に入り易^{やす}い歌であつた。驚ろい

たのは主人ばかりではない、吾輩までも彼等君子の

才芸に嘆服たんぷくして覚えず耳を傾けたくらいである。し

かし読者もご案内であろうが、嘆服と云う事と邪魔

と云う事は時として両立する場合がある。この両者

がこの際はか図らずも合して一となったのは、今から考

えて見ても返す返す残念である。主人も残念であつ

たろうが、やむを得ず書齋から飛び出して行って、

ここは君等の這入る所ではない、出給えと云つて、

二三度追い出したようだ。ところが教育のある君子の事だから、こんな事でおとなしく聞く訳がない。

追い出されればすぐ這入る。這入れば活潑なる歌を

うたう。高声こうせいに談話をする。しかも君子の談話だか

ら一風違いっふうつて、おめえだの知らねえのと云う。そん

な言葉は御維新前ごいっしんまえは折助おりすけと雲助くもすけと三助さんすけの専門的知識

に属していたそうだが、二十世紀になってから教育

ある君子の学ぶ唯一の言語であるそうだ。一般から

軽蔑せられたる運動が、かくのごとく今日こんにち歓迎せら

るようになったのと同じの現象だと説明した人が

ある。主人はまた書斎から飛び出してこの君子流の

言葉にもつとも堪能なる一人を捉つかまえて、なぜここ

へ這入るかと詰問したら、君子はたちまち「おめえ、

知らねえ」の上品な言葉を忘れて「ここは学校の植
物園かと思いました」とすこぶる下品な言葉で答え
た。主人は将来を戒め^{いまし}て放してやった。放してやる
のは亀の子のようでおかしいが、実際彼は君子の袖^{そで}
を捉^{とら}えて談判したのである。このくらいやかましく
云ったらもうよかろうと主人は思っていたそうだ。

ところが実際は女媧^{じよかし}氏の時代から予期と違うもので、

主人はまた失敗した。今度は北側から邸内を横断して表門から抜ける、表門をがらりとあけるから御客かと思うと桐畠の方で笑う声がする。形勢はますます不穩である。教育の功果はいよいよ顯著になつてくる。気の毒な主人はこいつは手に合わんと、それから書齋へ立て籠こもつて、恭うやうやしく一書を落雲館校長に奉つて、少々御取締をと哀願した。校長も鄭重ていちょうなる

返書を主人に送って、垣をするから待ってくれと云った。しばらくすると二三人の職人が来て半日ばかりの間に主人の屋敷と、落雲館の境に、高さ三尺ばかりの四つ目垣が出来上がった。これでようよう安心だと主人は喜こんだ。主人は愚物である。このくらしい事で君子の挙動の変化する訳がない。

全体人にからかうのは面白いものである。吾輩の

ような猫ですら、時々は当家の令嬢にからかつて遊ぶくらいだから、落雲館の君子が、気の利^きかない苦沙弥先生にからかうのは至極^{しごく}もつともなところで、これに不平なのは恐らく、からかわれる当人だけであらう。からかうと云う心理を解剖して見ると二つの要素がある。第一からかわれる当人が平気ですましていてはならん。第二からかう者が勢力において

人数において相手より強くなくてはいかん。この間
主人が動物園から帰って来てしきりに感心して話し
た事がある。聞いて見ると駱駝らくだと小犬の喧嘩を見た
のだそうだ。小犬が駱駝の周囲を疾風のごとく廻転
して吠えほ立てると、駱駝は何の気もつかずに、依然
として背せ中なかへ瘤こぶをこしらえて突っ立ったままである
そうだ。いくら吠えても狂っても相手にせないので、

あいそ

しまいには犬も愛想をつかしてやめる、実に駱駝は

無神経だと笑っていたが、それがこの場合の適例で

ある。いくらからかうものが上手でも相手が駱駝と

来ては成立しない。さればと云つて獅子ししや虎とらのよう

に先方が強過ぎても者にならん。からかいかけるや

否や八つ裂きにされてしまう。からかうと齒をむき

おこ

出して怒る、怒る事は怒るが、こつちをどうする事

も出来ないと言ふ安心のある時に愉快は非常に多いものである。なぜこんな事が面白いと言ふとその理由はいろいろある。まずひまつぶしに適している。

退屈な時には髯ひげの数さえ勘定して見たくなる者だ。

昔むかし獄に投ぜられた囚人の一人は無聊ぶりようのあまり、房へや

の壁に三角形を重ねて画かいてその日をくらしたと云

う話がある。世の中に退屈ほど我慢の出来にくいも

のはない、何か活気を刺激する事件がないと生きて
いるのがつらいものだ。から、かうと云うのもつまり
この刺激を作つて遊ぶ一種の娯樂である。但し多少
先方を怒らせるか、じらせるか、弱らせるかしく
ては刺激にならんから、昔しからからかうと云う娯
樂に耽^{ふけ}るものは人の氣を知らない馬鹿大名のような
退屈の多い者、もしくは自分のなぐさみ以外は考う

るに暇なきほど頭の発達が幼稚で、しかも活気の使

い道に窮する少年かに限っている。次には自己の優

勢な事を実地に証明するものにはもつとも簡便な方

法である。人を殺したり、人を傷けたり、きずつまたは人

を陥れ^{おとし}たりしても自己の優勢な事は証明出来る訳で

あるが、これらはむしろ殺したり、傷けたり、陥れ

たりするのが目的のときによるべき手段で、自己の

優勢なる事はこの手段を遂行すいこうした後に必然の結果と

して起る現象に過ぎん。だから一方には自分の勢力

が示したくって、しかもそんなに人に害を与えたく

ないと云う場合には、からかうのが一番御恰好おかっこうであ

る。多少人を傷けなければ自己のえらい事は事実の

上に証拠だてられない。事実になつて出て来ないと、

頭のうちに安心していても存外快樂のうすいもので

ある。人間は自己を恃たのむものである。否恃み難い場合でも恃みたいものである。それだから自己はこれだけ恃める者だ、これなら安心だと云う事を、人に対して実地に応用して見ないと気がすまない。しかも理窟りくつのわからない俗物や、あまり自己が恃みになりそうもなくて落ちつきのない者は、あらゆる機会を利用して、この証券を握ろうとする。柔術使が時

々人を投げて見たくなるのと同じ事である。柔術の怪しいものは、どうか自分より弱い奴に、ただの一返でいいから出逢つて見たい、素人しろうとでも構わないから抛なげて見たいと至極危険な了見を抱いだいて町内をあるくのもこれがためである。その他にも理由はいろいろあるが、あまり長くなるから略する事に致す。

聞きたければ鯉節かつぶしの一折ひとおりも持つて習いにくるがいい、

いつでも教えてやる。以上に説くところを参考して

推論して見ると、吾輩の考かんがえでは奥山おくやまの猿さると、学校の

教師がからかうには一番手頃である。学校の教師を

もって、奥山の猿に比較しては勿体もったいない。――猿に

対して勿体ないのではない、教師に対して勿体ない

のである。しかしよく似ているから仕方がない、御

承知の通り奥山の猿は鎖くさりで繋つながれている。いくら齒

をむき出して、きやつきやつ騒いでも引き搔かかれ

きづかい

る気遣きづかいはない。教師は鎖で繋がれておらない代りに

月給で縛られている。いくらからかったって大丈夫、

辞職して生徒をぶんぐる事はない。辞職をする勇

気のあるようなものなら最初から教師などをして生

おも

徒の御守おもりは勤めないはずである。主人は教師であ

る。落雲館の教師ではないが、やはり教師に相違な

い。からかうには至極しごく適當で、至極安直あんちよくで、至極無

事な男である。落雲館の生徒は少年である。からか

う、事は自己の鼻を高くする所以ゆえんで、教育の功果とし

て至當に要求してしかるべき權利とまで心得ている。

のみならずからかいでもしなければ、活氣に充みちた

五体と頭腦を、いかに使用してしかるべきか十分じつぶんの

休暇中持もてあまして困っている連中である。これら

おのず

の条件が備われば主人は自からから、かわれ、生徒は
自からからかう、誰から云わしても毫ごうも無理のない
ところである。それを怒おこる主人は野暮やぼの極、間拔の
骨頂でしよう。これから落雲館の生徒がいかに主人
にからかったか、これに対して主人がいかに野暮を
極めたかを逐一かいてご覧に入れる。

諸君は四つ目垣とはいかなる者であるか御承知で

あろう。風通しのいい、簡便な垣である。吾輩などは目の間から自由自在に往来する事が出来る。こしらえたって、こしらえなくたって同じ事だ。然し落雲館の校長は猫のために四つ目垣を作ったのではない、自分が養成する君子が潜くぐられんために、わざわざ職人を入れて結ゆい繞めぐらせたのである。なるほどいくら風通しがよく出来ていても、人間には潜くぐれそう

にない。この竹をもつて組み合せたる四寸角の穴を

ぬける事は、清国しんこくの奇術師張世尊ちようせいそんその人といえども

むずかしい。だから人間に対しては充分垣の機能を

つくしているに相違ない。主人がその出来上つたの

を見て、これならよかろうと喜んだのも無理はない。

しかし主人の論理には大なる穴おおいがある。この垣より

も大いなる穴がある。吞舟どんしゆうの魚をも洩もらすべき大穴

がある。彼は垣は踰ゆべきものにあらざとの仮定から出立している。いやしくも学校の生徒たる以上は
いかに粗末の垣でも、垣と云う名がついて、分界線
の区域さえ判然すれば決して乱入される氣遣はない
と仮定したのである。次に彼はその仮定をしばらく
打ち崩して、よし乱入する者があつても大丈夫と論
断したのである。四つ目垣の穴を潜り得る事は、い

かなる小僧といえどもとうてい出来る氣遣はないか

おそれ

ら乱入の虞は決してないと速定そくていしてしまつたのであ

る。なるほど彼等が猫でない限りはこの四角の目を

ぬけてくる事はしまい、したくても出来まいが、乗

り躰こえる事、飛び越える事は何の事もない。かえつ

て運動になつて面白いくらいである。

垣の出来た翌日から、垣の出来ぬ前と同様に彼等

は北側の空地へばかりばかりと飛び込む。但し座敷

の正面までは深入りをしない。もし追ひ懸けられた

ら逃げるのに、少々ひまがいるから、予め逃げる時

あらかじめ

間を勘定に入れて、捕えらるる危険のない所で遊弋

ゆうよく

をしている。彼等が何をしているか東の離れにいる

主人には無論目に入らない。北側の空地に彼等が遊

あきち

弋している状態は、木戸をあけて反対の方角から鉤

かぎ

の手に曲つて見るか、または後架こうかの窓から垣根越し

に眺ながめるよりほかに仕方がない。窓から眺める時は

どこに何がいるか、一目明瞭いちもくに見渡す事が出来るが、

よしや敵を幾人見出いくたりしたからと云つて捕える訳には

行かぬ。ただ窓の格子こうしの中から叱りつけるばかりで

ある。もし木戸から迂回うかいして敵地を突こうとすれば、

足音を聞きつけて、ばかりばかりと捉つかまる前に向う

側へ下りてしまふ。

脇脇おっとせいがひなたぼっこをしてい

るところへ密猟船が向つたような者だ。主人は無論
後架で張り番をしている訳ではない。と云つて木戸
を開いて、音がしたら直ぐ飛び出す用意もない。も
しそんな事をやる日には教師を辞職して、その方専
門にならなければ追つつかない。主人方の不利を云
うと書斎からは敵の声だけ聞えて姿が見えないのと、

窓からは姿が見えるだけで手が出せない事である。

この不利を看破したる敵はこんな軍略を講じた。主

人が書斎に立て籠こもつていると探偵した時には、なる

べく大きな声を出してわあわあ云う。その中には主

人をひやかすような事を聞こえよがしに述べる。し

かもその声の出所を極めて不分明にする。ちよつと

聞くと垣の内で騒いでいるのか、あるいは向う側で

あばれているのか判定しにくいようにする。もし主人が出懸けて来たら、逃げ出すか、または始めから向う側にいて知らん顔をする。また主人が後架へ――

――吾輩は最前からしきりに後架後架ときたない字を使用するのを別段の光栄とも思っておらん、実は迷惑千万であるが、この戦争を記述する上において必

要であるからやむを得ない。――すなわ即ち主人が後架へ

まかり越したと見て取るときは、必ず桐の木の附近

はいかい

を徘徊してわざと主人の眼につくようにする。主人

がもし後架から四隣しりんに響く大音を揚げて怒鳴りつけ

れば敵は周章あわてる気色けしきもなく悠然ゆうぜんと根拠地へ引きあ

げる。この軍略を用いられると主人ははなはだ困却

する。たしかに這入はいっているなと思つてステツキを

持つて出懸けると寂然せきぜんとして誰もいない。いないか

と思つて窓からのぞくと必ず一二人這入っている。

主人は裏へ廻つて見たり、後架から覗のぞいて見たり、

後架から覗いて見たり、裏へ廻つて見たり、何度言

つても同じ事だが、何度云つても同じ事を繰り返し

ている。奔命ほんめいに疲れるとはこの事である。教師が職

業であるか、戦争が本務であるかちよつと分らない

くらい逆上ぎやくじょうして来た。この逆上の頂点に達した時に

下しもの事件が起つたのである。

事件は大概逆上から出る者だ。逆上とは読んで字

のごとく逆さかさのぼに上るのである、この点に関しては

ゲーレンもパラセルサスも旧弊なる扁鵲へんじやくも異議となを唱

うる者は一人もない。ただどこへ逆さかさのぼに上るかが

問題である。また何が逆かさのぼに上るかが議論のある

ところである。古来歐洲人の伝説によると、吾人の

体内には四種の液が循環しておったそうだ。第一に

どえき

怒液と云う奴がある。やつこれが逆かさに上ると怒り出

おこ

す。第二に鈍液と名づくるのがある。どんえきこれが逆かさ

に上ると神経が鈍くなる。にぶ次には憂液、ゆうえきこれは人間

を陰気にする。最後が血液、けつえきこれは四肢をし壮んにす

さか

る。その後人文が進むに従って鈍液、怒液、憂液は

いつの間にかなくなつて、ま現今に至つては血液だけ

が昔のように循環していると云う話しだ。だからもし逆上する者があらば血液よりほかにはあるまいと思われる。しかるにこの血液の分量は個人によつてちやんと極^きまつている。性分によつて多少の増減はあるが、まず大抵一人前に付五升五合の割合である。だによつて、この五升五合が逆かさに上ると、上つたところだけは熾^{さか}んに活動するが、その他の局部は

欠乏を感じて冷たくなる。ちようと交番焼打の当時
巡査がことごとく警察署へ集つて、町内には一人も
なくなつたようなものだ。あれも医学上から診断を
すると警察の逆上と云う者である。でこの逆上を癒い
やすには血液を従前のごとく体内の各部へ平均に分
配しなければならん。そうするには逆かさに上つた
奴を下へ降おろさなくてはならん。その方にはいろいろ

ある。今は故人となられたが主人の先君などは濡れ

手拭てぬぐいを頭にあてて炬燵こたつにあたつておられたそうだ。

頭寒足熱は延命息災の徴と傷寒論しょうかんろんにも出ている通り、

濡れ手拭は長寿法において一日も欠くべからざる者

である。それでなければ坊主の慣用する手段を試み

るがよい。一所不住いっしょふじゆうの沙門雲水行脚しゃもんうんすいあんぎやの衲僧のうそうは必ず樹

下石上やどを宿とすとある。樹下石上とは難行苦行のた

めではない。全くのぼせを下さげるために六祖ろくそが米を

舂つきながら考え出した秘法である。試みに石の上に

坐まつてご覧、尻が冷えるのは当り前だろう。尻が冷

える、のぼせが下がる、これまた自然の順序にして

毫ごうも疑ぎを挟さむべき余地はない。かようにいろいろな

方法を用いてのぼせを下さげる工夫は大分だいぶん発明された

が、まだのぼせを引き起す良方が案出されないのは

残念である。一概に考えるとのぼせは損あつて益なき現象であるが、そうばかり速断してならん場合がある。職業によると逆上はよほど大切な者で、逆上せんと何にも出来ない事がある。その中^{うち}でもつとも逆上を重んずるのは詩人である。詩人に逆上が必要なる事は汽船に石炭が欠くべからざるような者で、この供給が一日でも途切れると彼れ等は手を拱^{こまぬ}いて

飯を食うよりほかに何等の能もない凡人になつてし

まう。もつとも逆上は氣違いみようの異名で、氣違にならな

いと家業かぎようが立ち行かんとあつては世間せけん体が悪いから、

彼等の仲間では逆上を呼ぶに逆上の名をもつてしな

い。申し合せてインスピレーション、インスピレー

ションとさも勿体もったいそうに称となえている。これは彼等が

世間を瞞まん着ちやくするために製造した名でその実は正に逆

上である。プレートーは彼等の肩を持ってこの種の
逆上を神聖なる狂氣と号したが、いくら神聖でも狂
氣では人が相手にしない。やはりインスピレーショ
ンと云う新發明の売藥のような名を付けておく方が
彼等のためによからうと思う。しかし蒲鉾かまぼこの種が山やま
芋であるごとく、いも観音かんのんの像が一寸八分の朽木くちきである
ごとく、かもなんばん鴨南蛮の材料が烏であるごとく、下宿屋の

牛鍋が馬肉であるごとくインスピレーションも実は

逆上である。逆上であって見れば臨時の気違である。

巢鴨へ入院せずに済むのは単に臨時、気違であるから

だ。ところがこの臨時の気違を製造する事が困難な

のである。一生涯いっしょうがいの狂人はかえって出来安いが、筆

を執とって紙に向う間あいだだけ気違にするのは、いかに巧こう

者しやな神様でもよほど骨が折れると見えて、なかなか

こしら
拵えて見せない。神が作ってくれん以上は自力で拵

えなければならん。そこで昔から今日までこんにち逆上術も

また逆上とりのけ術と同じく大に学者の頭脳を悩まおおい

した。ある人はインスピレーションを得るために毎

日渋柿を十二個ずつ食った。これは渋柿を食えば便

秘する、便秘すれば逆上は必ず起るといふ理論から

来たものだ。またある人はかん徳利を持って鉄砲風てっぽう

ぶろ

呂へ飛び込んだ。湯の中で酒を飲んだら逆上するに

きま

極きまつていると考えたのである。その人の説によると

これで成功しなければ葡萄酒ぶどうしゅの湯をわかして這入はいれ

ば一返ぺんで機能があると信じ切っている。しかし金が

ないのでついに実行する事が出来なくて死んでしま

ったのは気の毒である。最後に古人の真似をしたら

インスピレーションが起るだろうと思いついた者が

ある。これはある人の態度動作を真似ると心的状態もその人に似てくると云う学説を応用したのである。酔っぱらいのように管くだを捲まいていると、いつの間まにか酒飲みのような心持になる、坐禅をして線香一本の間我慢しているとどこことなく坊主らしい気分になる。だから昔からインスピレーションを受けた有しよ名の大家の所作しよさを真似れば必ず逆上するに相違ない。

聞くところによればユーゴーは快走船ヨットの上へ寝転ねころん

で文章の趣向を考えたそうだから、船へ乗って青空

を見つめていれば必ず逆上うけあい受合である。スチーヴン

ソンは腹這はらばいに寝て小説を書いたそうだから、打うつ伏ふ

しになって筆を持てばきつと血が逆さかさのぼに上のぼってく

る。かようにいろいろな人がいろいろの事を考え出

したが、まだ誰も成功しない。まず今日こんにちのところで

は人為的逆上は不可能の事となっている。残念だが致し方がない。早晩随意にインスピレーションを起し得る時機の到来するは疑も^{うたがい}ない事で、吾輩は人文のためにこの時機の一日も早く来らん事を切望するのである。

逆上の説明はこのくらいで充分だろうと思うから、これよりいよいよ事件に取りかかる。しかしすべて

の大事事件の前には必ず小事件が起るものだ。大事事件のみを述べて、小事件を逸するのは古来から歴史家の常におちい陥る弊竇へいとうである。主人の逆上も小事件に逢う度に一層の劇甚げきじんを加えて、ついに大事事件を引き起したのであるからして、幾分かその発達を順序立てて述べないと主人がいかに逆上しているか分りにくい。分りにくいと主人の逆上は空名に歸して、世間から

はよもやそれほどでもなかろうと見くびられるかも

知れない。せつかく逆上しても人から天晴あっぱれな逆上と

謡うたわれなくては張り合がないだろう。これから述べ

る事件は大小に係かかわらず主人に取って名誉な者ではな

い。事件その物が不名誉であるならば、責せめて逆上

なりとも、正銘しょうめいの逆上であつて、決して人に劣るも

のでないと云う事を明かにしておきたい。主人は他

に對して別にこれと云つて誇るに足る性質を有しておらん。逆上でも自慢しなくてはほかに骨を折つて書き立ててやる種がない。

落雲館に群がる敵軍は近日に至つて一種のダムダム弾を發明して、じっぶん十分の休暇、もしくは放課後に至つて熾にさかん北側のあきち空地に向つて砲火を浴びせかける。

このダムダム弾は通称をボールととな称えて、すりこぎ搗粉木の

大きな奴をもつて任意これを敵中に発射する仕掛である。いくらダムダムだつて落雲館の運動場から発射するのだから、書齋に立て籠こもつてる主人に中あたる気きづ遣かいはない。敵といえども弾道のあまり遠過ぎるのを自覚せん事はないのだけれど、そこが軍略である。旅順の戦争にも海軍から間接射撃を行つて偉大な功を奏したと云う話であれば、空地へころがり落つる

ボールといえども相当の功果を収め得ぬ事はない。

いわんや一発を送る度たびに総軍力を合せてわーと威嚇いかく

性大音声せいたいおんじょうを出すいだにおいてをやである。主人は恐縮の

結果として手足に通う血管が収縮せざるを得ない。

煩悶はんもんの極きよくそこいらを迷付まごついている血が逆さかさに上のぼるは

ずである。敵の計はかりごとはなかなか巧妙と云うてよろしい。

昔むかし希臘ギリシャにイスキラスと云う作家があつたそうだ。

この男は学者作家に共通なる頭を有していたと云う。
吾輩のいわゆる学者作家に共通なる頭とは禿はげと云う
意味である。なぜ頭が禿げるかと云えば頭の營養不
足で毛が生長するほど活気がないからに相違ない。

学者作家はもつとも多く頭を使うものであつて大概
は貧乏に極きまっている。だから学者作家の頭はみんな
營養不足でみんな禿はげげている。さてイスキラスも作

家であるから自然の勢いきおい禿げなくてはならん。彼はつ

るつる然たる金柑頭きんかんあたまを有しておった。ところがある

日の事、先生例の頭——頭に外行よそゆきも普段ふだん着もないか

ら例の頭に極ってるが——その例の頭を振り立て振
り立て、太陽に照らしつけて往来をあるいていた。

これが間違いのもとである。禿げ頭を日にあてて遠
方から見ると、大変よく光るものだ。高い木には風

があたる、光かる頭にも何かあたらなくてはならん。

この時イスキラスの頭の上に一羽の鷺わしが舞っていた

が、見るとどこかで生捕いけどった一疋びきの亀を爪の先に攫つか

んだままである。亀、スツポンなどは美味に相違な

いが、希臘時代から堅い甲羅こうらをつけている。いくら

美味でも甲羅つきではどうする事も出来ん。海老えびの

鬼殻おにがらやき焼はあるが亀の子の甲羅煮は今でさえないくら

いだから、当時は無論なかつたに極っている。さす

がの鷺わしも少々持て余した折柄おりから、遙はるかの下界にぴかと

光った者がある。その時鷺はしめたと思つた。あの

光ったものの上へ亀の子を落したなら、甲羅は正まさし

く砕けるに極きわまつた。砕けたあとから舞い下りて

中味なかみを頂戴ちやうだいすれば訳はない。そうだと覗ねらいを定

めて、かの亀の子を高い所から挨拶も無く頭の上へ

落した。あいにく生憎作家の頭の方が亀の甲より軟らかであ

ったものだから、禿はめちやめちやに碎けて有名な

るイスキラスはここに無惨むざんの最後を遂げた。それは

そうと、解げしかねるのは驚の了見である。例の頭を、

作家の頭と知って落したのか、または禿岩と間違え
て落したもののか、解決しよう次第で、落雲館の敵と

この驚とを比較する事も出来るし、また出来なくも

なる。主人の頭はイスキラスのそれのごとく、また

おれきれき

御歴々の学者のごとくぴかぴか光ってはおらん。し

かし六畳敷にせよいやくも書斎と号する一室を控^{ひか}

えて、居眠りをしながらも、むずかしい書物の上へ

顔を翳^{かざ}す以上は、学者作家の同類と見倣^{みな}さなければ

ならん。そうすると主人の頭の禿げておらんのは、

まだ禿げるべき資格がないからで、その内に禿げる

だろうとは近々きんきんこの頭の上に落ちかかるべき運命で

あろう。して見れば落雲館の生徒がこの頭を目懸け

て例のダムダム丸がんを集注するのは策のもつとも時宜じぎ

に適したものと云わねばならん。もし敵がこの行動

を二週間継続するならば、主人の頭は畏怖いふと煩悶はんもんの

ため必ず營養の不足を訴えて、金柑きんかんとも薬缶やかんとも銅ど

壺うことも変化するだろう。なお二週間の砲撃を食えくらば

金柑は潰れるに相違ない。薬缶は洩るに相違ない。

銅壺ならひびが入るにきまつている。この睹易き結

果を予想せんで、あくまでも敵と戦鬪を継続しよう

と苦心するのは、ただ本人たる苦沙弥先生のみである。

ある日の午後、吾輩は例のごとく椽側へ出て午睡

をして虎になった夢を見ていた。主人に鶏肉を持っ

て来いと云うと、主人がへえと恐る恐る鶏肉を持つ

て出る。迷亭が来たから、迷亭に雁^{がん}が食いたい、雁^{がん}

鍋^{なべ}へ行つて逃^{あつ}らえて来いと云うと、蕪^{かぶ}の香^{こう}の物^{もの}と、

塩煎餅^{しおせんべい}といっしよに召し上がりますと雁の味が致し

ますと例のごとく茶羅^{ちやら}ツ鉾^{ぼこ}を云うから、大きな口を

あいて、うーと唸^{うな}つて嚇^{おどか}してやったら、迷亭は蒼^{あお}く

なつて山下^{やました}の雁鍋は廃業致しましたがいかが取り計^{はから}

いましようかと云った。それなら牛肉で勘弁するか
ら早く西川へ行つてロースを一斤取つて来い、早く
せんと貴様から食い殺すぞと云つたら、迷亭は尻を
端折^{はしよ}つて馳^かけ出した。吾輩は急にからだが大きくな
ったので、椽側一杯に寝そべつて、迷亭の歸るのを
待ち受けていると、たちまち家中^{うちじゅう}に響く大きな声が
してせつかくの牛^{ぎゆう}も食わぬ間に夢^まがさめて吾に歸つ

た。すると今まで恐る恐る吾輩の前に平伏していた
と思いのほかの主人が、いきなり後架こうかから飛び出し
て来て、吾輩の横腹をいやと云うほど蹴けたから、お
やと思ううち、たちまち庭下駄をつっかけて木戸か
ら廻って、落雲館の方へかけて行く。吾輩は虎から
急に猫と収縮したのだから何となく極きまりが悪くもあ
り、おかしくもあつたが、主人のこの権幕と横腹を

蹴られた痛さとで、虎の事はすぐ忘れてしまった。

同時に主人がいよいよ出馬して敵と交戦するな面白
いわいと、痛いのを我慢して、後を慕^{あと}つて裏口へ出

た。同時に主人がぬすつとうと怒鳴る声が聞える、

見ると制帽をつけた十八九になる倔強^{くつきよう}な奴が一人、

四ツ目垣を向うへ乗り越えつつある。やあ遅かった

と思ううち、彼^かの制帽は馳^かけ足の姿勢をとって根拠

地の方へ韋駄天いだてんのごとく逃げて行く。主人はぬすつ、

とうが大おおに成功したので、またもぬすつ、とうと高く

叫びながら追いかけて行く。しかしかの敵に追いつ

くためには主人の方で垣を越さなければならん。深

入りをすれば主人みづか自らが泥棒になるはずである。前ぜん

申す通り主人は立派なる逆上家である。こう勢いきおいに乗

じてぬすつ、とうを追ひ懸ける以上は、夫子ふうし自身がぬ、

すつ、とうに成つても追ひ懸けるつもりと見えて、引き返す気色けしきもなく垣の根元まで進んだ。今一步で彼はぬすつ、とうの領分はいに入らなければならんと云う間ま際に、敵軍の中から、薄い髯ひげを勢なく生はやした将官ぎわがのこのこと出馬して来た。両人ふたりは垣を境に何か談判している。聞いて見るとこんなつまらない議論である。

「あれは本校の生徒です」

「生徒たるべきものが、何で他の邸内へ侵入するのですか」

「いやボールがつい飛んだものですから」

「なぜ断つて、取りに来ないのでですか」

「これから善く注意します」

「そんなら、よろしい」

竜騰虎鬪の壯觀があるだろうと予期した交渉はか

くのごとく散文的なる談判をもつて無事に迅速に結

了した。主人の壯^{さか}んなるはただ意気込みだけである。

いざとなると、いつでもこれでおしまいだ。あたか

も吾輩が虎の夢から急に猫に返ったような觀がある。

吾輩の小事件と云うのは即ちこれである。^{すなわ}小事件を

記述したあとには、順序として是非大事件を話さな

ければならん。

主人は座敷の障子を開いて腹這はらばいになつて、何か思

案している。恐らく敵に対して防禦策ぼうぎよさくを講じている

のだらう。落雲館は授業中と見えて、運動場は存外

静かである。ただ校舎の一室で、倫理の講義をして

いるのが手に取るように聞える。朗々たる音声でな

かなかうまく述べ立てているのを聴くと、全く昨日きのう

敵中から出馬して談判の衝に當つた將軍である。

「……で公德と云うものは大切な事で、あちらへ行
つて見ると、フランス 仏蘭西でも独逸でもドイツ 英吉利でも、どこ
へ行つても、この公德の行われておらん国はない。

またどんな下等な者でもこの公德を重んぜぬ者はな
い。悲しいかな、我が日本に在あつては、未まだこの点
において外国と拮抗きつこうする事が出来ないのである。で公

徳と申すと何か新しく外国から輸入して来たように

考える諸君もあるかも知れんが、そう思うのは大なだい

る誤りで、昔人せきじんも夫子ふうしの道一みちいっもつ以て之これを貫くつらぬ、忠恕ちゅうじょの

み矣いと云われた事がある。この恕じょと申すのが取りも

直さず公德しゅつしよの出所である。私も人間であるから時に

は大きな声をして歌などうたつて見たくなる事があ

る。しかし私が勉強している時に隣室のものなどが

放歌するのを聴くと、どうしても書物の読めぬのが

私の性分である。であるからして自分が唐詩選とうしせんでも

高声こうせいに吟じたら気分が晴々せいせいしてよかろうと思う時で

すら、もし自分のように迷惑がる人が隣家に住んで

おつて、知らず知らずその人の邪魔をするような事

があつてはすまんと思つて、そう云う時はいつでも

控ひかえるのである。こう云う訳だから諸君もなるべく

公德を守って、いやしくも人の妨害になると思う事は決してやってはならんのである。……」

主人は耳を傾けて、この講話を謹聴していたが、ここに至ってにやりと笑った。ちよつとこのにやり、の意味を説明する必要がある。皮肉家がこれをよんだらこのにやり、の裏には冷評的分子が交っていると思うだろう。しかし主人は決して、そんな人の悪い

男ではない。悪いと云うよりそんなに智慧ちえの発達した男ではない。主人はなぜ笑ったかと云うと全く嬉しくって笑ったのである。倫理の教師たる者がかように痛切なる訓戒まねを与えるからはこの後のちは永久ダムダム弾の乱射を免まぬがれるに相違ない。当分のうち頭も禿かげずにすむ、逆上は一時に直らんでも時機さえくれば漸次ぜんじ回復するだろう、濡ぬれ手拭てぬぐいを頂いて、炬こ

燧にあたらなくとも、樹下石上を宿やどとしなくとも大丈夫だろうと鑑定したから、にやにやと笑ったのである。借金は必ず返す者と二十世紀の今日こんにちにもやはり正直に考えるほどの主人がこの講話を真面目に聞くのは当然であろう。

やがて時間が来たと見えて、講話はぱたりとやんだ。他の教室の課業も皆一度に終った。すると今ま

で室内に密封された八百の同勢は鬨ときの声をあげて、

建物を飛び出した。その勢いきおいと云うものは、一尺ほど

な蜂はちの巣を敲たたき落したごとくである。ぶんぶん、わ

んわん云うて窓から、戸口から、開きから、いやし

くも穴の開あいている所なら何の容赦もなく我勝ちに

飛び出した。これが大事件の発端である。

まず蜂の陣立てから説明する。こんな戦争に陣立

ても何もあるものかと云うのは間違っている。普通

の人は戦争とさえ云えば沙河しやかとか奉天ほうてんとかまた旅順りよじゆん

とかそのほかに戦争はないもののごとくに考えてい

る。少し詩がかった野蛮人になると、アキリスがヘ

クトーの死骸を引きずって、トロイの城壁を三匝さんそうし

たとか、燕えんびと張飛ちようはんきようが長坂橋に丈八じようはちの蛇矛だぼうを横よこえて、

曹操そうそうの軍百万人を睨にらめ返したとか大袈裟おおげさな事ばかり

連想する。連想は当人の随意だがそれ以外の戦争はないものと心得るのは不都合だ。たいこもうまい太古蒙昧の時代に

あ在つてこそ、そんな馬鹿氣た戦争も行われたかも知

れん、しかし太平の今日、こんにち大日本国帝都の中心にお

いてかくのごとき野蛮的行動はあり得べからざる奇

蹟に属している。いかに騒動が持ち上がっても交番

の焼打以上に出る氣遣きづかいはない。して見ると臥竜窟主がりようくつ

人の苦沙弥先生と落雲館裏八百の健児との戦争は、

まず東京市あつて以来の大戦争の一として数えても

しかるべきものだ。左氏さしが鄢陵えんりやうの戦たたかいを記するに当つ

てもまず敵の陣勢から述べている。古来から叙述に

巧みなるものは皆この筆法を用いるのが通則になつ

ている。だによつて吾輩が蜂の陣立てを話すのも仔し

細さいなからう。それでまず蜂の陣立ていかんと見てあ

ると、四つ目垣の外側に縦列を形ちづくった一隊が

ある。これは主人を戦鬪線内に誘致する職務を帯びた者と見える。「降参しねえか」「しねえしねえ」

「駄目だ駄目だ」「出てこねえ」「落ちねえかな」

「落ちねえはずはねえ」「吠えて見ろ」「わんわん」

「わんわん」「わんわんわんわん」これから先は縦

隊総がかりとなつて唖喊とっかんの声を揚げる。縦隊を少し

右へ離れて運動場の方面には砲隊が形勝の地を占め

て陣地を布しいている。臥竜窟がりようくつに面して一人の将官が

掃すりこぎ粉木の大きな奴を持つて控ひかえる。これと相對して

五六間の間隔をとつてまた一人立つ、掃粉木のあと

にまた一人、これは臥竜窟に顔をむけて突っ立って

いる。かくのごとく一直線にならんで向い合つてい

るのが砲手である。ある人の説によるとこれはベ-

スボールの練習であつて、決して戦鬪準備ではない

そうだ。吾輩はベースボールの何物たるを解せぬ文もん

盲漢もうかんである。しかし聞くとところによればこれは米国

から輸入された遊戯で、今日こんにち中学程度以上の学校に

行わるる運動のうちでもっとも流行するものだそう

だ。米国は突飛とつぴな事ばかり考え出す国柄であるから、

砲隊と間違えてもしかるべき、近所迷惑の遊戯を日

本人に教うべくだけそれだけ親切であつたかも知れない。また米国人はこれをもつて真に一種の運動遊戯と心得ているのだらう。しかし純粹の遊戯でもかように四隣を驚かすに足る能力を有している以上は使ひようで砲撃の用には充分立つ。吾輩の眼をもつて觀察したところでは、彼等はこの運動術を利用して砲火の功を収めんと企てつつあるとしか思われな

い。物は云いようでもなるものだ。慈善の名を借りて詐偽さぎを働らき、インスピレーションと号して逆上をうれしがる者がある以上はベースボールなる遊戯の下に戦争もとをなさんとも限らない。或る人の説明は世間一般のベースボールの事であろう。今吾輩が記述するベースボールはこの特別の場合に限らるるベースボールすなわ即ち攻城的砲術である。これから

ダムダム弾を発射する方法を紹介する。直線に布か
れたる砲列の中の一人が、ダムダム弾を右の手に握
って播粉木の所有者に抛りつける。ダムダム弾は何
で製造したか局外者には分らない。堅い丸い石の団
子のようなものを御鄭寧ごていねいに皮でくるんで縫い合せた
ものである。前申ぜんす通りこの弾丸が砲手の一人の手
中を離れて、風を切って飛んで行くと、向うに立つ

た一人が例の搗粉木をやつと振り上げて、これを敲たた

き返す。たまには敲そこき損なつた弾丸が流れてしまふ

事もあるが、大概はポカンと大きな音を立てて弾はね

返る。その勢は非常に猛烈なものである。神経性胃

弱なる主人の頭を潰つぶすくらいは容易に出来る。砲手

はこれだけで事足るのだが、その周囲附近には弥や次

馬兼うま援兵が雲霞うんかのごとく付き添うてゐる。ポカーン

と搗粉木が団子に中^{あた}るや否やわー、ぱちぱちぱちと、

わめく、手を拍^うつ、やれやれと云う。中^{あた}つたろうと

云う。これでも利^きかねえかと云う。恐れ入らねえか

と云う。降参かと云う。これだけならまだしもであ

るが、敲^{たた}き返された弾丸は三度に一度必ず臥竜窟邸

内へころがり込む。これがころがり込まなければ攻

撃の目的は達せられのである。ダムダム弾は近来

諸所で製造するが随分高価なものであるから、いかに戦争でもそう充分な供給を仰ぐ訳に行かん。大抵一隊の砲手に一つもしくは二つの割である。ポンと鳴る度にこの貴重な弾丸を消費する訳には行かん。

そこで彼等はたま拾ひろいと称する一部隊を設けて落弾おちだまを拾ってくる。落ち場所がよければ拾うのに骨も折れ

ないが、草原とか人の邸内へ飛び込むとそう容易たやすく

は戻つて来ない。だから平生ならなるべく労力を避けるため、拾い易い^{やす}所へ打ち落すはずであるが、この際は反対に出る。目的が遊戯にあるのではない、戦争に存するのだから、わざとダムダム弾を主人の邸内に降らせる。邸内に降らせる以上は、邸内へ這^は入^いつて拾わなければならん。邸内に這入るもつとも簡便な方法は四つ目垣を越えるにある。四つ目垣の

うちで騒動すれば主人が怒り出さなければならん。おこ

かぶと

しからずんば兜を脱いで降参しなければならん。苦心のあまり頭がだんだん禿げて来なければならん。

今しも敵軍から打ち出した一弾は、しょうじゆめやま照準誤たず、

きり

四つ目垣を通り越して桐の下葉を振り落して、第二

すなわ

の城壁即ち竹垣に命中した。随分大きな音である。

いわ

ニュートンの運動律第一に曰くもし他の力を加うる

にあらざれば、一度^{ひとた}び動き出したる物体は均一の速

度をもつて直線に動くものとす。もしこの律のみに
よつて物体の運動が支配せらるるならば主人の頭は
この時にイスキラスと運命を同じくしたのであろう。

幸^{さいわい}にしてニュートンは第一則を定むると同時に第二

則も製造してくれたので主人の頭は危うきうちに一
命を取りとめた。運動の第二則に曰く運動の変化は、

加えられたる力に比例す、しかしてその力の働く直線
の方向において起るものとす。これは何の事だか
少しくわかり兼ねるが、かのダムダム弾が竹垣を突
き通して、障子しょうじを裂き破つて主人の頭を破壊しなか
ったところをもつて見ると、ニュートンの御蔭おかげに相
違ない。しばらくすると案のごとく敵は邸内に乗り
込んで来たものと覺しく、「ここか」「もっと左の

方か」などと棒でもって笹の葉を敲き廻わる音がする。すべて敵が主人の邸内へ乗り込んでダムダム弾を拾う場合には必ず特別な大きな声を出す。こっそり這入って、こっそり拾っては肝心かんじんの目的が達せられん。ダムダム弾は貴重かも知れないが、主人にからかうのはダムダム弾以上に大事である。この時のごときは遠くから弾の所在地は判然している。竹垣

に中^{あた}つた音も知っている。中つた場所も分っている、
しかしてその落ちた地面も心得ている。だからおと
なしくして拾えば、いくらでもおとなしく拾える。

ライブニツツの定義によると空間は出来べき同在
現象の秩序である。いろはにほへとはいつでも同じ
順にあらわれてくる。柳の下には必ず鰐^{どじょう}がいる。蝙蝠^{こう}

蝠^{もり}に夕月はつきものである。垣根にボールは不似合

かも知れぬ。しかし毎日毎日ボールを人の邸内に抛ほうり込む者の眼に映ずる空間はたしかにこの排列に慣なれている。一ひとめ眼見ればすぐ分る訳だ。それをかくのごとく騒さわぎ立てるのは必竟ひっきようずるに主人に戦争を挑いどむ策略である。

こうなつてはいかに消極的な主人といえども応戦しなければならん。さつき座敷のうちから倫理の

講義をきいてにやにやしていた主人は奮然として立ち上がった。猛然として馳^かけ出した。驀^{ばくぜん}然として敵の一人を生^{いけど}捕った。主人にしては大出来である。大出来には相違ないが、見ると十四五の小供である。髯^{ひげ}の生^はえている主人の敵として少し不似合だ。けれども主人はこれで沢山だと思ったのだらう。詫^わび入るのを無理に引っ張って椽^{えんがわ}側の前まで連れて来た。

ここにちよつと敵の策略について一言する必要がある

きのう

けんまく

る、敵は主人が昨日の権幕を見てこの様子では今日

も必ず自身で出馬するに相違ないと察した。その時

おおぞう

万一逃げ損じて大僧がつらまつては事面倒になる。

ここは一年生か二年生くらいな小供を玉拾いにやつ

て危険を避けるに越した事はない。よし主人が小供

ぐずぐずりくつ

をつらまえて愚図愚図理窟を捏ね廻したつて、落雲

館の名誉には関係しない、こんなものを大人気おとなげもな

ちじよく

く相手にする主人の恥辱になるばかりだ。敵の考は

しごく

こうであつた。これが普通の人間の考で至極もつと

もなところである。ただ敵は相手が普通の人間でな

いと云う事を勘定のうちに入れるのを忘れたばかり

である。主人にこれくらいの常識があれば昨日だつ

て飛び出しはしない。逆上は普通の人間を、普通の

人間の程度以上に釣るし上げて、常識のあるものに、
非常識を与える者である。女だの、小供だの、車引
きだの、馬子だのと、そんな見境みさかいのあるうちは、
まだ逆上を以て人に誇るに足らん。主人のごとく相
手にならぬ中学一年生を生捕いけどって戦争の人質とする
ほどの了見でなくては逆上家の仲間入りは出来ない
のである。可哀かわいそうなのは捕虜である。単に上級生

の命令によつて玉拾いなる雑兵の役を勤めたるところ、運わるく非常識の敵將、逆上の天才に追い詰められて、垣越える間^まもあらばこそ、庭前に引き据^すえられた。こうなると敵軍は安閑と味方の恥辱を見ている訳に行かない。我も我もと四つ目垣を乗りこして木戸口から庭中に乱れ入る。その数は約一ダースばかり、ずらりと主人の前に並んだ。大抵は上衣^{うわぎ}も

ちよつ着^きもつけておらん。白シャツの腕をまくつて、

腕組をしたのがある。綿^{めん}ネルの洗いざらしを申し訳

に背中だけへ乗せているのがある。そうかと思うと

白の帆木綿^{ほもめん}に黒い縁^{ふち}をとって胸の真中に花文字を、

同じ色に縫いつけた洒落者^{しやれもの}もある。いずれも一騎当

千の猛将と見えて、丹波^{たんば}の国は笹山から昨夜着し立

てでござると云わぬばかりに、黒く逞^{たくま}しく筋肉が発

達している。中学などへ入れて学問をさせるのは惜

しいものだ。漁師りょうしか船頭にしたら定めし国家のため

になるだろうと思われるくらいである。彼等は申し

合せたごとく、素足に股引ももひきを高くまくって、近火の

手伝にでも行きそうな風体ふうていに見える。彼等は主人の

前にならんだぎり默然もくねんとして一言いちごんも発しない。主人

も口を開ひらかない。しばらくの間双方共睨にらめくらをし

ているなかにちよつと殺気がある。

「貴様等はぬすつとうか」と主人は尋問した。大気^{だいき}

燄^{えん}である。奥歯で嚙^かみ潰^{つぶ}した癰癰玉^{かんしやくだま}が炎となつて鼻

の穴から抜けるので、小鼻が、いちじるしく怒^{いか}つて

見える。越後獅子^{えちごじし}の鼻は人間が怒^{おこ}つた時の恰好^{かつこう}を形^{かた}

どつて作つたものであろう。それでなくてはあんな

に恐しく出来るものではない。

「いえ泥棒ではありません。落雲館の生徒です」

「うそをつけ。落雲館の生徒が無断で人の庭宅に侵入する奴があるか」

「しかしこの通りちゃんと学校の徽章きしやうのついている帽子を被かぶっています」

「にせものだろう。落雲館の生徒ならなぜむやみに侵入した」

「ボールが飛び込んだものですから」

「なぜボールを飛び込ました」

「つい飛び込んだんです」

「怪^けしからん奴だ」

「以後注意しますから、今度だけ許して下さい」

「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内に闖入^{ちんにゆう}

するのを、そう容易^{たやす}く許されると思うか」

「それでも落雲館の生徒に違いないんですから」

「落雲館の生徒なら何年生だ」

「三年生です」

「きつとそうか」

「ええ」

主人は奥の方を顧みながら、おいこらこらと云う。

埼玉生れの御三が襖をおさん ふうまあけて、へえと顔を出す。

「落雲館へ行つて誰か連れてこい」

「誰を連れて参ります」

「誰でもいいから連れてこい」

下女は「へえ」と答えが、あまり庭前の光景が妙

なのと、使の趣がおもむき判然しないのと、さつきからの事

件の発展が馬鹿馬鹿しいので、立ちもせず、坐りも

せず、にやにや笑っている。主人はこれでも大戦争を
しているつもりである。逆上の敏腕を大に振おおいふるつてい
るつもりである。しかるところ自分の召し使たる当
然こつちの肩を持つべきものが、真面目な態度をも
つて事に臨まんのみか、用を言いつけるのを聞きな
がらにやにや笑っている。ますます逆上せざるを得
ない。

「誰でも構わんから呼んで来いと云うのに、わからんか。校長でも幹事でも教頭でも……」

「あの校長さんを……」下女は校長と云う言葉だけしか知らないのである。

「校長でも、幹事でも教頭でもと云っているのにわからんか」

「誰もおりませんでしたら小使でもよろしゅうござ

いますか」

「馬鹿を云え。小使などに何が分かるものか」

ここに至つて下女もやむを得んと心得たものか、

「へえ」と云つて出て行つた。使の主意はやはり飲

み込めのである。小使でも引張つて来はせんかと

心配していると、あに計らんや例の倫理の先生が表

門から乗り込んで来た。平然と座に就^つくを待ち受け

た主人は直ちに談判にとりかかる。

「ただ今邸内にこの者共が乱入致して……」と忠臣蔵のような古風な言葉を使つたが「本当に御校おんこうの生徒でしうか」と少々皮肉に語尾を切つた。

倫理の先生は別段驚いた様子もなく、平気で庭前にならんでゐる勇士を一通り見廻わした上、もとのごとく瞳ひとみを主人の方にかえして、下しものごとく答えた。

「さようみんな学校の生徒であります。こんな事のないように始終訓戒を加えておきますが……どうも困ったもので……なぜ君等は垣などを乗り越すのか」

さすがに生徒は生徒である、倫理の先生に向つては一言もいちごんないと見えて何とも云うものはない。おと

なしく庭の隅にかたまつて羊の群が雪に逢つたように控ひかえている。

「丸が這入たまはいるのも仕方がないでしょう。こうして学

校の隣りに住んでいる以上は、時々はボールも飛んで来ましょう。しかし……あまり乱暴ですからな。

仮令垣たといを乗り越えるにしても知れないように、そつと拾つて行くなら、まだ勘弁のしようもありま

すが……」

「ごもつともで、よく注意は致しますが何分多人数たにんずの事で……よくこれから注意をせんといかんぜ。もしボールが飛んだら表から廻つて、御断りをして取らなければいかん。いいか。——広い学校の事です。からどうも世話ばかりやけて仕方がないです。で運動は教育上必要なものでありますから、どうもこれ

を禁ずる訳には参りかねるので。これを許すとつい御迷惑になるような事が出来ますが、これは是非御容赦を願いたいと思います。その代り向後^{こうご}はきつと表門から廻つて御断りを致した上で取らせますから」

「いや、そう事が分かればよろしいです。球^{たま}はいくら御投げになつても差^さ支^しえ^{つか}はないです。表からきて

ちよつと断わつて下されば構いません。ではこの生徒はあなたに御引き渡し申しますからお連れ歸りを願います。いやわざわざ御呼び立て申して恐縮です」と主人は例によつて例のごとく竜頭蛇尾りゅうとうだびの挨拶をする。倫理の先生は丹波の笹山を連れて表門から落雲館へ引き上げる。吾輩のいわゆる大事件はこれできとまず落着を告げた。何のそれが大事件かと笑うな

ら、笑うがいい。そんな人には大事件でないまでだ。
吾輩は主人の、大事件を写したので、そんな人の、大事
件を記したのではない。しる尻が切れて強弩の末勢だきょうどなばっせい
どと悪口するものがあるなら、これが主人の特色で
ある事を記憶して貰いたい。主人が滑稽文の材料に
なるのもまたこの特色に存する事を記憶して貰いた
い。十四五の小供を相手にするのは馬鹿だと云うな

ら吾輩も馬鹿に相違ないと同意する。だから大町桂月
は主人をつらまえて未だ稚氣いまちきを免がれずと云うて
いる。

吾輩はすでに小事件を叙し了り、今また大事件を
述べ了ったから、これより大事件のあと後に起る余瀾よらんを
描き出だして、全篇の結びを付けるつもりである。
えが

すべて吾輩のかく事は、口から出任せのいい加減と
でまか

思う読者もあるかも知れないが決してそんな軽率な

猫ではない。一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含

するは無論の事、その一字一句が層々連続すると首

尾相応じ前後相照らして、瑣談さだんせんわ織話と思つてうつか

りと読んでいたものが忽然豹変して容易ならざる法

語となるんだから、決して寝ころんだり、足を出し

て五行ごとに一度に読むのだなどと云う無礼を演じ

てはいけない。りゆうそうげん 柳宗元は韓退之かんだいしの文を読むごとに薺しよ

うび
みず

薇の水で手を清めたと云うくらいだから、吾輩の文

じばら

に対してもせめて自腹で雑誌を買って来て、友人の

御余りを借りて間に合わすと云う不始末だけはない

事に致したい。これから述べるのは、吾輩みずか自ら余瀾

と号するのだけれど、余瀾ならどうせつまらんに極きま

っている、読まんでもよかろうなどと思うと飛んだ

後悔をする。是非しまいまで精読しなくてはいかん。

大事件のあつた翌日、吾輩はちよつと散歩がしたくなつたから表へ出た。すると向う横町へ曲がろう

と云う角で金田の旦那と鈴木とうの藤さんがしきりに立

ちながら話をしている。金田君は車で自宅うちへ帰ると

ころ、鈴木君は金田君の留守を訪問して引き返す途

中で兩人がふたりばったりと出逢つたのである。近来は金

田の邸内も珍らしくなくなつたから、滅多めったにあちら

の方角へは足が向かなかつたが、こう御目に懸つて

見ると、何となく御懷おなつかしい。鈴木にも久々ひさびさだから

余所よそながら拝顔の栄を得ておこう。こう決心しての

そのそ御兩君の佇立ちよりつしておらるる傍そば近く歩み寄つて

見ると、自然兩君の談話が耳いに入る。これは吾輩の

罪ではない。先方が話しているのがわるいのだ。金

田君は探偵さえ付けて主人の動静を窺うかがうくらいのの

程度の良心を有している男だから、吾輩が偶然君の

談話を拝聴したって怒おこらるる氣遣きづかいはあるまい。もし

怒られたら君は公平と云う意味を御承知ないのであ

る。とにかく吾輩は両君の談話を聞いたのである。

聞きたくて聴いたのではない。聞きたくもないのに

談話の方で吾輩の耳の中へ飛び込んで来たのである。

「只今御宅へ伺いましたところで、ちようどよい所で御目にかかりました」と藤^{とう}さんは鄭^{てい}寧^{ねい}に頭をびよこつかせる。

「うむ、そうかえ。実はこないだから、君にちよつと逢いたいと思つていたがね。それはよかつた」

「へえ、それは好都合でございました。何かご用で」
「いや何、大した事でもないのさ。どうでもいいんだが、君でないと出来ない事なんだ」

「私に出来る事なら何でもやりましょう。どんな事で」

「ええ、そう………」と考えている。

「何なら、御都合のとき出直して伺いましょう。い
つが宜^{よろ}しゅう、ございますか」

「なあに、そんな大した事じゃ無いのさ。――それ
じゃせつかくだから頼もうか」

「どうか御遠慮なく……」

「あの変人ね。そら君の旧友さ。苦沙弥とか何とか
云うじゃないか」

「ええ苦沙弥がどうかしましたか」

「いえ、どうもせんがね。あの事件以来胸糞むなくそがわるくってね」

「ごもつともで、全く苦沙弥は剛慢ですから……少しは自分の社会上の地位を考えているといいのですけれども、まるで一人天下ですから」

「そこさ。金に頭はさげん、実業家なんぞ——とか

何とか、いろいろ小生意気な事を云うから、そんな
ら実業家の腕前を見せてやろう、と思つてね。こな
いだから大分弱^{だいぶ}らしているんだが、やつぱり頑張^{がんば}つ
ているんだ。どうも剛情な奴だ。驚ろいたよ」

「どうも損得と云う觀念の乏^{とほ}しい奴ですから無暗^{むやみ}に
瘦我慢を張るんでしよう。昔からああ云う癖のある
男で、つまり自分の損になる事に気が付かないんで

すから度し難いです」

「あはははほんとに度し難い。いろいろ手を易え品

を易えてやって見るんだがね。とうとうしまいに学

校の生徒にやらした」

「そいつは妙案ですな。利目がございましたか」

「これにやあ、奴も大分困ったようだ。もう遠から

ず落城するに極まっている」

「そりや結構です。いくら威張つても多勢たぜいに無勢ぶぜいですからな」

「そうさ、一人じやあ仕方がねえ。それで大分弱だいぶんつたようだが、まあどんな様子か君に行つて見て来てもらおうと云うのさ」

「はあ、そうですか。なに訳はありません。すぐ行つて見ましよう。容ようす子は歸りがけに御報知を致す事

にして。面白いでしょう、あの頑固がんこなのが意気銷沈いきしょうちんしているところは、きつと見物みものですよ」

「ああ、それじゃ歸りに御寄り、待っているから」

「それでは御免蒙ごめんこうむります」

おや今度もまた魂胆こんたんだ、なるほど実業家の勢力は

えらいものだ、石炭の燃殻もえがらのような主人を逆上させ

るのも、苦悶くもんの結果主人の頭が蠅滑はえすべりの難所となる

のも、その頭がイスキラスと同様の運命に陥るおちいのも

皆実業家の勢力である。地球が地軸を廻転するのは

何の作用かわからないが、世の中を動かすものはた

しかに金である。この金の功力くりきを心得て、この金の

威光を自由に発揮するものは実業家諸君をおいてほ

かに一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に

西へ入るのも全く実業家の御蔭である。今まではわ

からずやの窮措大きゆうそだいの家に養なわれて実業家の御利益ごりやく

を知らなかったのは、我ながら不覺である。それに

しても冥頑不靈めいがんふれいの主人も今度は少し悟らずばなるま

い。これでも冥頑不靈で押し通す了見だと危あぶない。

主人のもつとも貴重する命があぶない。彼は鈴木君

に逢ってどんな挨拶をするのか知らん。その模様で

彼の悟り具合も自おのずから分明ぶんめいになる。愚図愚図しては

おられん、猫だつて主人の事だから大に心配おおいになる。
早々鈴木君をすり抜けて御先へ帰宅する。

鈴木君はあいかわらず調子のいい男である。今日は金田の事などはおくびにも出さない、しきりに当り障りさわのない世間話を面白そうにしている。

「君少し顔色が悪いようだぜ、どうかしやせんか」
「別にどこも何ともないさ」

「でも蒼いぜ、用心せんといかんよ。時候がわるいからね。よるは安眠が出来るかね」

「うん」

「何か心配でもありやしないか、僕に出来る事なら何でもするぜ。遠慮なく云い給え」

「心配って、何を？」

「いえ、なければいいが、もしあればと云う事さ。」

心配が一番毒だからな。世の中は笑って面白く暮すのが得だよ。どうも君はあまり陰気過ぎるようだ」

「笑うのも毒だからな。無暗に笑うと死ぬ事があるぜ」

「冗談云じょうだんつちやいけない。笑う門かどには福来きたるさ」

「昔むかし希臘ギリシヤにクリシツパスと云う哲学者があつたが、

君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「その男が笑い過ぎて死んだんだ」

「へえー、そいつは不思議だね、しかしそりや昔の事だから……」

「昔しだって今だって変りがあるものか。驢馬ろばが銀

の井どんぶりから無花果いちじくを食うのを見て、おかしくってたま

らなくって無暗むやみに笑ったんだ。ところがどうしても

笑いがとまらない。とうとう笑い死にに死んだんだあね」

「はははしかしそんなに留め度とどもなく笑わなくってもいいさ。少し笑う——適宜てきぎに、——そうするといひ心持ちだ」

鈴木君がしきりに主人の動静を研究していると、表の門ががらがらとあく、きやくらい客来かと思うとそうでな

い。

「ちよつとボールが這^{はい}入りましたから、取らして下さい」

下女は台所から「はい」と答える。書生は裏手へ廻る。鈴木は妙な顔をして何だいと聞く。

「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」

「裏の書生？　裏に書生がいるのかい」

「落雲館と云う学校さ」

「ああそうか、学校か。随分騒々しいだろうね」

「騒々しいの何のつて。碌々ろくろく勉強も出来やしない。

僕が文部大臣なら早速閉鎖を命じてやる」

「ハハハ大分怒だいぷおこったね。何か癩しやくに障さわる事でも有るの

かい」

「あるの無いのつて、朝から晩まで癩に障り続けだ」

「そんなに癩に障るなら越せばいいじゃないか」

「誰が越すもんか、失敬千万な」

「僕に怒ったって仕方がない。なあに小供だあね、打ち^うち^うやっておけばいいさ」

「君はよからうが僕はよくない。昨日^{きのう}は教師を呼び

つけて談判してやった」

「それは面白かったね。恐れ入ったろう」

「うん」

この時また門口かどぐちをあけて「ちよつとボールが這入はい

りましたから取らして下さい」と云う声がする。

「いや大分だいぶん来るじゃないか、またボールだぜ君」

「うん、表から来るように契約したんだ」

「なるほどそれであんなにくるんだね。そうーか、

分った」

「何が分ったんだい」

「なに、ボールを取りにくる原因がさ」

「今日はこれで十六返目だ」

「君うるさくないか。来ないようにしたらいいじゃないか」

「来ないようにするってたって、来るから仕方がない

さ」

「仕方がないと云えばそれまでだが、そう頑固がんこにしていなくてもよからう。人間は角かどがあると世の中を転ころがって行くのが骨が折れて損だよ。丸いものはころごろどこへでも苦くなしに行けるが四角なものはころがるに骨が折れるばかりじゃない、転がるたびに角がすれて痛いものだ。どうせ自分一人の世の中じ

やなし、そう自分の思うように人はならないさ。まあ何だね。どうしても金のあるものに、たてを突いちや損だね。ただ神経ばかり痛めて、からだは悪くなる、人は褒めてくれず。向うは平気なものさ。坐つて人を使いさえすればすむんだから。多勢たぜいに無勢ぶぜいどうせ、叶かなわないのは知れているさ。頑固もいいが、立て通すつもりでいるうちに、自分の勉強に障った

り、毎日の業務に煩はんを及ぼしたり、とどのつまりが

骨折り損の草臥くたびれ儲けだからね」

「ご免なさい。今ちよつとボールが飛びましたから、裏口へ廻つて、取つてもいいですか」

「そらまた来たぜ」と鈴木君は笑っている。

「失敬な」と主人は真赤まっかになっている。

鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思つたから、

それじゃ失敬ちと来たまえと歸きつて行く。

入れ代つてやつて来たのが甘木あまき先生である。逆上

家が自分で逆上家だと名乗る者は昔むかしから例が少な

い、これは少々変だなと覺さとつた時は逆上の峠とうげはもう

越している。主人の逆上は昨日きのうの大事件の際に最高

度に達したのであるが、談判も竜頭蛇尾たるに係かかわら

ず、どうかこうか始末がついたのでその晩書齋でつ

くづく考えて見ると少し変だと気が付いた。もつと

も落雲館が変なのか、自分が変なのか疑うたがいを存する余

地は充分あるが、何しろ変に違ない。いくら中学校

の隣に居を構えたって、かくのごとく年が年中肝癰かんしやく

を起しつづけはちと変だと気が付いた。変であつて

見ればどうかしなければならん。どうするつたつて

仕方がない、やはり医者かんしやくの薬でも飲んで肝癰かんしやくの源に

わいろ 賄賂でも使つて慰撫するよりほかに道はない。こう

さと

覺つたから平生かかりつけの甘木先生を迎えて診察を受けて見ようと云う量見を起したのである。賢か

愚か、その辺は別問題として、とにかく自分の逆上

に気が付いただけは殊勝しゆしょうの志、奇特きどくの心得と云わな

ければならん。甘木先生は例のごとくにこにこと落

ちつき払つて、「どうです」と云う。医者は大抵ど

うですと云うに極きまつてる。吾輩は「どうです」と云わない医者はどうも信用をおく気にならん。

「先生どうも駄目ですよ」

「え、何そんな事があるものですか」

「一体医者の薬は利きくものでしょうか」

甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚の長者ちやうじやだから、

別段激した様子もなく、

「利かん事もないです」と穏おだやかに答えた。

「わたし私の胃病なんか、いくら薬を飲んでも同じ事です
ぜ」

「決して、そんな事はない」

「ないですか。少しは善くなりますかな」と自分の胃の事を人に聞いて見る。

「そう急には、癒なおりません、だんだん利きます。今

でももとより大分だいぶんよくなっています」

「そうですかな」

「やはり肝癰かんしやくが起りますか」

「起りますとも、夢にまで肝癰を起します」

「運動でも、少しなさったらいいでしょう」

「運動すると、なお肝癰が起ります」

甘木先生もあきれ返ったものと見えて、

「どれ一つ拝見しましょうか」と診察を始める。診察を終るのを待ちかねた主人は、突然大きな声を出して、

「先生、せんだって催眠術のかいてある本を読んだら、催眠術を応用して手癖のわるいんだの、いろいろな病気だのを直す事が出来ると書いてあったですが、本当でしょうか」と聞く。

「ええ、そう云う療法もあります」

「今でもやるんですか」

「ええ」

「催眠術をかけるのはむずかしいものでしょうか」

「なに訳はありません、わたし私などもよく懸けます」

「先生もやるんですか」

「ええ、一つやって見ましようか。誰でも懸かけなけ

ればならん理窟りくつのものです。あなたさえ善よければ懸けて見ましょう」

「そいつは面白い、一つ懸けて下さい。私もわたしとうから懸かって見たいと思ったんです。しかし懸かりきりで眼が覚さめないと困るな」

「なに大丈夫です。それじゃやりましょう」

相談はたちまち一決して、主人はいよいよ催眠術

を懸けらるる事となつた。吾輩は今までこんな事を
見た事がないから心ひそかに喜んでその結果を座敷
の隅から拝見する。先生はまず、主人の眼からかけ
始めた。その方法を見ていると、りようがん うわまぶた両眼の上瞼を上か
ら下へと撫なでて、主人がすでに眼を眠ねむっているにも
係かかわらず、しきりに同じ方向へくせを付けたがつてい
る。しばらくすると先生は主人に向つて「こうやつ

て、^{まぶた}瞼を撫でていると、だんだん眼が重たくなるでしょう」と聞いた。主人は「なるほど重くなりますな」と答える。先生はなお同じように撫でおろし、撫でおろし「だんだん重くなりますよ、ようござんすか」と云う。主人もその気になったものか、何とも云わずに黙っている。同じ摩擦法はまた三四分繰り返される。最後に甘木先生は「さあもう開きませ^あ

んぜ」と云われた。可哀想に主人の眼はとうとう潰つぶ

れてしまった。「もう開かんですか」「ええもう

あきません」主人は默然もくねんとして目を眠っている。吾

輩は主人がもう盲目めくらになつたものと思ひ込んでしま

つた。しばらくして先生は「あけるなら開いて御覧

なさい。とうていあけないから」と云われる。「そ

うですか」と云うが早いか主人は普通の通り両眼りょうがんを

開いていた。主人はにやにや笑いながら「懸かりませんな」と云うと甘木先生も同じく笑いながら「ええ、懸りません」と云う。催眠術はついに不成功に
了る。^{おわ}甘木先生も帰る。

その次に来たのが――主人のうちへこのくらい客の来た事はない。交際の少ない主人の家にしてはまるで嘘うそのようである。しかし来たに相違ない。しか

も珍客が来た。吾輩がこの珍客の事を一言でも記述

いちごん

するのは単に珍客であるがためではない。吾輩は先

刻申す通り大事件の余瀾よらんを描きえがつつある。しかして

この珍客はこの余瀾を描くに方あたつて逸すべからざる

材料である。何と云う名前か知らん、ただ顔の長い

上に、山羊やぎのような髯ひげを生はやしている四十前後の男

と云えばよからう。迷亭の美学者たるに對して、吾

輩はこの男を哲学者と呼ぶつもりである。なぜ哲学者と云うと、何も迷亭のように自分で振り散らすからではない、ただ主人と対話する時の様子を拝見しているといかにも哲学者らしく思われるからである。これも昔むかしの同窓と見えて兩人共ふたりとも応対振りは至極しごく打ち解とけた有様だ。

「うん迷亭か、あれは池に浮いてる金魚きんぎょ魅よふのように

ふわふわしているね。せんだって友人を連れて一面
識もない華族の門前を通行した時、ちよつと寄つて
茶でも飲んで行こうと云つて引つ張り込んだそうだ
が随分呑氣のんきだね」

「それでどうしたい」

「どうしたか聞いても見なかったが、——そうさ、

まあ天稟てんぴんの奇人だろう、その代り考も何もない全く

金魚麩だ。鈴木か、――あれがくるのかい、へえー、

あれは理窟りくつはわからんが世間的には利口な男だ。金

時計は下げられるたちだ。しかし奥行きがないから

落ちつきがなくって駄目だ。円滑えんかつ円滑と云うが、円

滑の意味も何もわかりはせんよ。迷亭が金魚麩なら

あれは藁わらで括くくった蒟蒻こんにやくだね。ただわるく滑なめらかでぶる

ぶる振ふるえているばかりだ」

主人はこの奇警きけいな比喩ひゆを聞いて、大おおに感心したもののらしく、久し振りでハハハと笑った。

「そんなら君は何だい」

「僕か、そうさな僕なんかは——まあ自然じねん薯じよくらいなところだろう。長くなつて泥の中に埋うまつてるさ」

「君は始終泰然として気楽なようだが、羨うらやましいな」

「なに普通の人間と同じようにしているばかりさ。

別に羨まれるに足るほどの事もない。ただありがた
い事に人を羨む気も起らんから、それだけいいね」

「会計は近頃豊かかね」

「なに同じ事さ。足るや足らずさ。しかし食うてい
るから大丈夫。驚かないよ」

「僕は不愉快で、かんしゃく肝癰が起つてたまらん。どつちを

向いても不平ばかりだ」

「不平もいいさ。不平が起つたら起してしまえば当分はいい心持ちになれる。人間はいろいろだから、そう自分のように人にもなれと勧めたって、なれるものではない。箸^{はし}は人と同じように持たんと飯が食いにくい^{パン}が、自分の麵麩^{パン}は自分の勝手に切るのが一番都合がいいようだ。上手^{じょうず}な仕立屋で着物をこしら

えれば、着たてから、からだに合ったのを持つてく

るが、下手へたの裁縫屋したてやに逃あつらえたら当分は我慢しないと

駄目さ。しかし世の中はうまくしたもので、着てい

るうちには洋服の方で、こちらの骨格に合わしてく

れるから。今の世に合うように上等な両親が手際てぎわよ

く生んでくれれば、それが幸福なのさ。しかし出来でき

損そこなつたら世の中に合わないで我慢するか、また

は世の中で合わせるまで辛抱するよりほかに道はな
かろう」

「しかし僕なんか、いつまで立っても合いそうにな
いぜ、心細いね」

「あまり合わない背^せ広^びを無理にきると綻^ほび^こる。喧^{けん}嘩^か。

をしたり、自殺をしたり騒動が起るんだね。しかし
君なんかただ面白くないと云うだけで自殺は無論し

やせず、喧嘩だつてやった事はあるまい。まあまあいい方だよ」

「ところが毎日喧嘩ばかりしているさ。相手が出来なくつても怒つておれば喧嘩だろう」

「なるほど一人ひとりげんか喧嘩だ。面白いや、いくらでもやるがいい」

「それがいやになつた」

「そんならよすさ」

「君の前だが自分の心がそんなに自由になるものじゃない」

「まあ全体何がそんなに不平なんだい」

主人はここにおいて落雲館事件を始めとして、今^い

戸焼の狸^{まどやき}から、ぴん助、きしやごそのほかあらゆる^{ためき}

不平を挙げて滔々^{とうとう}と哲学者の前に述べ立てた。哲学

者先生はだまって聞いていたが、ようやく口を開いひらて、かように主人に説き出した。

「ぴん助やきしやごが何を云ったって知らん顔をしておればいいじゃないか。どうせ下らんのだから。

中学の生徒なんか構う価値があるものか。なに妨害になる。だって談判しても、喧嘩をしてもその妨害はとれんのじゃないか。僕はそう云う点になると西

洋人より昔むかしの日本人の方がよほどえらいと思う。

西洋人のやり方は積極的積極的と云って近頃大分流だいは

行やるが、あれは大だいなる欠点を持っているよ。第一積

極的と云ったって際限がない話しだ。いつまで積極

的にやり通したって、満足と云う域とか完全と云う

境さかいにいけるものじゃない。向むこうに檜ひのきがあるだろう。あ

れが目障めざわりになるから取り払う。とその向うの下宿

屋がまた邪魔になる。下宿屋を退去させると、その次の家が癩しやくに触る。どこまで行っても際限のない話しさ。西洋人の遣やり口くちはみんなこれさ。ナポレオンでも、アレキサンダーでも勝って満足したものは一人もないんだよ。人が気に喰わん、喧嘩をする、先方が閉口しない、法ほうてい庭へ訴える、法庭で勝つ、それで落着と思うのは間違さ。心の落着は死ぬまで焦あせつ

たつて片付く事があるものか。寡人政治かじんせいじがいかんか

ら、だいきせいたい代議政体にする。代議政体がいかんから、また

何かにしたくなる。川が生意気だつて橋をかける、

山が氣に喰わんと云つて隧道トンネルを掘る。交通が面倒だ

と云つて鉄道を布しく。それで永久満足が出来るもの

じゃない。さればと云つて人間だものどこまで積極

的に我意を通す事が出来るものか。西洋の文明は積

極的、進取的かも知れないがつまり不満足で一生をくらす人の作つた文明さ。日本の文明は自分以外の状態を變化させて満足を求めゐるのじやない。西洋と

おおい

大に違ふところは、根本的に周囲の境遇は動かすべ

もと

からざるものと云う一大仮定の下に発達しているの

だ。親子の關係が面白くないと云つて歐洲人のよう

にこの關係を改良して落ちつきをとろうとするので

はない。親子の關係は在來のままでどうてい動かす事が出来んものとして、その關係の下に安心もとを求むる手段を講ずるにある。夫婦君臣の間柄もその通り、武士町人の區別もその通り、自然その物を觀みるのもその通り。——山があつて隣国へ行かれなければ、山を崩すと云う考を起す代りに隣国へ行かんでも困らないと云う工夫をする。山を越さなくとも満足だ

と云う心持ちを養成するのだ。それだから君見給え。

ぜんけ

禅家でも儒家でもじゆかきつと根本的にこの問題をつらま

える。いくら自分がえらくても世の中はとうてい意

のごとくなるものではない、落日をらくじつ回めぐらす事も、加

茂川を逆さかに流す事も出来ない。ただ出来るものは自

分の心だけだからね。心さえ自由にする修業をした

ら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平気なものでは

ないか、今戸焼の狸でも構わんでおられそうなものだ。ぴん助なんか愚^ぐな事を云ったらこの馬鹿野郎とすましておれば仔細^{しさい}なからう。何でも昔しの坊主は人に斬^きり付けられた時電光影裏^{でんこうえいり}に春風^{しゅんぷう}を斬るとか、何とか洒落^{しゃ}れた事を云ったと云う話だぜ。心の修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出るのじゃないかしらん。僕なんか、そんなむずか

しい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極主義ばかりがいいと思うのは少々誤まっているようだ。

現に君がいくら積極主義に働いたって、生徒が君をひやかしにくるのをどうする事も出来ないじゃないか。君の権力であの学校を閉鎖するか、または先方が警察に訴えるだけのわるい事をやれば格別だが、さもない以上は、どんなに積極的に出たつたて勝て

つこないよ。もし積極的に出るとすれば金の問題になる。多勢たぜいに無勢ぶぜいの問題になる。換言すると君が金持に頭を下げなければならんと云う事になる。衆を恃たのむ小供に恐れ入らなければならんと云う事になる。君のような貧乏人でしかもたった一人で積極的に喧嘩をしようと云うのがそもそも君の不平の種さ。どうだい分ったかい」

主人は分つたとも、分らないとも言わずに聞いていた。珍客が歸つたあとで書齋へ這はい入つて書物も読まずに何か考えていた。

鈴木の藤とうさんは金と衆とに従えと主人に教えたの

である。甘木先生は催眠術で神経を沈めろと助言じょごんし

たのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得

ろと説法したのである。主人がいずれをえら択ぶかは主

人の随意である。ただこのままでは通されないに極きまっている。

九

主人は痘痕面あばたづらである。

御維新前ごいつしんまえはあばたも大分流だいぶんは

行やったものだそうだが日英同盟の今日こんにちから見ると、

こんな顔はいささか時候後れおくの感がある。あばたの

衰退は人口の増殖と反比例して近き将来には全くそ

の迹あとを絶つに至るだろうとは医学上の統計から精密

に割り出されたる結論であつて、吾輩のごとき猫と

いえども毫ごうも疑さしはさを挟む余地のないほどの名論である。

現今地球上にあばたつらつ面を有して生息している人間

は何人くらいあるか知らんが、吾輩が交際の区域内

において打算して見ると、猫には一匹もない。人間にはたった一人ある。しかしてその一人が即ち主人すなわである。はなはだ気の毒である。

吾輩は主人の顔を見る度に考える。まあ何の因果

でこんな妙な顔をして臆面おくめんなく二十世紀の空気を呼

吸しているのだろう。昔なら少しは幅も利きいたか知

らんが、あらゆるあばたが二の腕へ立ち退のきを命ぜ

られた昨今、依然として鼻の頭や頬の上へ陣取つて

頑^{がん}として動かないのは自慢にならんのみか、かえつ

てあばたの体面に関する訳だ。出来る事なら今のう

ち取り払つたらよさそうなものだ。あばた自身だつ

て心細いに違いない。それとも党勢不振の際、誓つ

て落日を中天に挽回^{ちゆうてん ばんかい}せずんばやまずと云う意気込み

で、あんなに横風^{おうふう}に顔一面を占領しているのか知ら

ん。そうするとこのあばたは決して輕蔑けいべつの意をもつ

て視みるべきものでない。滔々とうとうたる流俗に抗する万ばん古

こふま

不磨の穴の集合体であつて、大おおに吾人の尊敬に値す

でこぼこ

る凸凹と云つて宜よろしい。ただきたならしいのが欠点

である。

主人の小供のときに牛込の山伏町に浅田宗伯あさだそうはくと云

う漢法の名医があつたが、この老人が病家を見舞う

ときには必ずかごに乗ってそろりそろりと参られた
そうだ。ところが宗伯老が亡くなられてその養子の
代になつたら、かごがたちまち人力車に變じた。だ
から養子が死んでそのまた養子が跡を続いだら葛根かつこん
湯がアンチピリンとうに化けるかも知れない。かごに乗
って東京市中を練りあるくのは宗伯老の当時ですら
あまり見つともいいものでは無かつた。こんな真似

をして澄すましていたものは旧弊な亡者もうじやと、汽車へ積み

込まれる豚と、宗伯老とのみであつた。

主人のあばたもその振わざる事においては宗伯老
のかごと一般で、はたから見ると気の毒なくらいだ
が、漢法医にも劣らざる頑固がんこな主人は依然として孤
城落日のあばたを天下に曝露ばくろしつつ毎日登校してリ
ードルを教えている。

かくのごとき前世紀の紀念を満面に刻こくして教壇に

立つ彼は、その生徒に対して授業以外に大だいなる訓戒

を垂れつつあるに相違ない。彼は「猿が手を持つ」

を反覆するよりも「あ、ば、た、の顔面に及ぼす影響」と

云う大問題を造作ぞうさもなく解釈して、不言ふげんの間にその

答案を生徒に与えつつある。もし主人のような人間

が教師として存在しなくなつた暁あかつきには彼等生徒はこ

の問題を研究するために図書館もしくは博物館へ馳
けつけて、吾人がミイラによつて埃及人エジプトじんを髣髴ほうふつする
と同程度の労力を費ついやさねばならぬ。この点てんから見
ると主人の痘痕あばたも冥々めいめいの裡うちに妙な功德くどくを施こしてい
る。

もつとも主人はこの功德を施こすために顔一面に
疱瘡ほうそうを種うえ付けたのではない。これでも実は種え疱

瘡をしたのである。不幸にして腕に種えたと思ったのが、いつの間にか顔へ伝染していたのである。その頃は小供の事で今のように色気いろけもなにもなかったものだから、痒かゆい痒かゆいと云いながら無暗むやみに顔中引き搔かいたのだそうだ。ちょうど噴火山が破裂してラヴアが顔の上を流れたようなもので、親が生んでくれた顔を台なしにしてしまった。主人は折々細君に向

つて疱瘡をせぬうちは玉のような男子であつたと云

かんのんさま

っている。浅草の観音様で西洋人が振り反つて見た

かえ

くらい奇麗だつたなどと自慢する事さえある。なる

ほどそうかも知れない。ただ誰も保証人のいないのが残念である。

いくら功德になつても訓戒になつても、きたない

ものごころ

者はやっぱりきたないものだから、物心がついて以

来と云うもの主人は大におおい、あばたについて心配し出して、あらゆる手段を尽してこの醜態を揉み潰そうとした。ところが宗伯老のかごと違って、いやになつたからと云うてそう急に打ちやられるものではない。今だに歴然と残っている。この歴然が多少気にかかると見えて、主人は往来をあるく度毎にあばた面を勘定してあるくそうだ。今日何人あばたに出逢つて、

その主は男か女か、その場所は小川町の勧工場かんこうばであ

るか、上野の公園であるか、ことごとく彼の日記に

つけ込んである。彼はあばたに関する智識において

は決して誰にも譲るまいと確信している。せんだっ

てある洋行帰りの友人が来た折なぞは、「君西洋人

にはあばたがあるかな」と聞いたくらいだ。すると

その友人が「そうだな」と首を曲げながらよほど考

えたあとで「まあ滅多めったにないね」と云ったら、主人

は「滅多になくつても、少しはあるかい」と念を入

れて聞き返えした。友人は氣のない顔で「あつても

乞食か立たちん坊ぼうだよ。教育のある人にはないようだ」

と答えたら、主人は「そうかなあ、日本とは少し違

うね」と云った。

哲学者の意見によつて落雲館との喧嘩を思い留つ

た主人はその後書齋に立て籠こもつてしきりに何か考え

ている。彼の忠告を容いれて静坐の裡うちに靈活なる精神

を消極的に修養するつもりかも知れないが、元來が

気の小さな人間の癖に、ああ陰気な懷手ふところばかりして

いては碌ろくな結果の出ようはずがない。それより英書

でも質に入れて芸者から喇叭節らっぱぶしでも習った方が遙はるか

にましだとまでは気が付いたが、あんな偏屈へんくつな男は

とうてい猫の忠告などを聴くきづかい氣遣はないから、まあ勝手にさせたらよかろうと五六日は近寄りもせず
に暮した。

今日はあれからちようど七日目なぬかめである。禅家など

では一七日いちしちにちを限って大悟して見せるなどと凄じすさまい勢いきおい

で結跏けっかする連中もある事だから、うちの主人もどう

かなつたろう、死ぬか生きるか何とか片付いたろう

と、のそのそ縁側えんがわから書斎の入口まで来て室内の動
静を偵察ていさつに及んだ。

書斎は南向きの六畳で、日当りのいい所に大きな
机が据すえてある。ただ大きな机ではわかるまい。長
さ六尺、幅三尺八寸高さこれにかなうと云う大きな
机である。無論出来合のものではない。近所の建具

屋に談判して寝台兼机けんとして製造せしめたる稀代きたいの

品物である。何の故にこんな大きな机を新調して、

また何の故にその上に寝て見ようなどという了見をりようけん

起したもののか、本人に聞いて見ない事だから頓とんとわ

からない。ほんの一時の出来心で、かかる難物を担かつ

ぎ込んだのかも知れず、あるいはことによると一種

の精神病者において吾人がしばしば見出みいだすごとく、

縁もゆかりもない二個の観念を連想して、机と寝台

を勝手に結び付けたものかも知れない。とにかく奇抜な考えである。ただ奇抜だけで役に立たないのが欠点である。吾輩はかつて主人がこの机の上へ昼寝をして寝返りをする拍子ひょうしに椽側へ転げ落ちたのを見た事がある。それ以来この机は決して寝台に転用されないようである。

机の前には薄っぺらなメリンスの座布団ざぶとんがあつて、

煙草たばこの火で焼けた穴が三つほどかたまつてゐる。中か

ら見える綿は薄黒い。この座布団の上に後ろうし向きに

かしこまつているのが主人である。鼠色によごれた

兵児帯へこおびをこま結びにむすんだ左右がだらりと足の裏

へ垂れかかっている。この帯へじやれ付いて、いき

なり頭を張られたのはこないだの事である。滅多めったに

寄り付くべき帯ではない。

まだ考えているのか下手へたの考と云う喩たとえもあるのに

と後うしろから覗のぞき込んで見ると、机の上でいやにぴか

ぴかと光ったものがある。吾輩は思わず、続け様に

二三度瞬まばたきをしたが、こいつは変だとまぶしいのを我

慢してじつと光るものを見つめてやった。するとこ

の光りは机の上で動いている鏡から出るものだと言

う事が分った。しかし主人は何のために書斎で鏡な

どを振り舞わしているのである。鏡と云えば風呂

場にあるに極^きまっている。現に吾輩は今朝風呂場で

この鏡を見たのだ。この鏡ととくに云うのは主人の
うちにはこれよりほかに鏡はないからである。主人

が毎朝顔を洗ったあとで髪を分けるときにもこの鏡
を用いる。——主人のような男が髪を分けるとのかと

聞く人もあるかも知れぬが、實際彼は他^{ほか}の事に無精^{ぶしよう}

なるだけそれだけ頭を叮嚀ていねいにする。吾輩が当家に参

つてから今に至るまで主人はいかなる炎熱の日とい

えども五分刈に刈り込んだ事はない。必ずかならず二寸くら

いの長さにして、それを御大ごたいそうに左の方で分ける

のみか、右の端はじをちよつと跳ね返して澄はすすましている。

これも精神病の徴候かも知れない。こんな氣取つた

分け方はこの机いっこうと一向調和しないと思うが、あえて

他人に害を及ぼすほどの事でないから、誰も何とも云わない。本人も得意である。分け方のハイカラなのはさておいて、なぜあんなに髪を長くするのかと思つたら実はこう云う訳わけである。彼のあばたは単に彼の顔を侵蝕しんしょくせるのみならず、とくの昔むかしに脳天まで食い込んでいるのだそうだ。だからもし普通の人のように五分刈や三分刈にすると、短かい毛の根本

から何十となくあばたがあらわれてくる。いくら撫な

でも、さすつてもほつぽつがとれない。枯野に螢ほたる

を放ったようなもので風流かも知れないが、細君の

御意ぎよいに入らんのは勿論もちろんの事である。髪さえ長くして

おけば露見しないですむところを、好んで自己の非

を曝あばくにも当らぬ訳だ。なろう事なら顔まで毛を生

やして、こっちのあばたも内済ないさいにしたいくらいなと

ころだから、ただで生はえる毛を銭ぜにを出して刈り込ま

ずがいこつ

てんねんとう

せて、私は頭蓋骨の上まで天然痘にやられましたよ

ふいちよう

と吹聴する必要はあるまい。――これが主人の髪を

長くする理由で、髪を長くするのが、彼の髪をわけ

る原因で、その原因が鏡を見る訳で、その鏡が風呂

ゆえん

場にある所以で、しこうしてその鏡が一つしかない

と云う事実である。

風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が

書齋に來ている以上は鏡が離魂病りこんびょうに罹かかつたのかまた

は主人が風呂場から持つて來たに相違ない。持つて

來たとすれば何のために持つて來たのだらう。ある

いは例の消極的修養に必要な道具かも知れない。昔むか

し或る学者が何とかいう智識を訪とうたら、和尚おしょう両肌

を抜いで瓢かわらを磨ましておられた。何をこしらえなさる

と質問をしたら、なにさ今鏡を造ろうと思つて一生懸命にやつておるところじやと答えた。そこで学者は驚ろいて、なんぼ名僧でも瓢を磨して鏡とする事は出来まいと云うたら、和尚からからと笑いながらそうか、それじややめよ、いくら書物を読んでも道はわからぬのもそんなものじやろと罵ののしつたと云うから、主人もそんな事を聞きかじつて風呂場から鏡でも

持つて来て、したり顔に振り廻しているのかも知れない。だいぶ大分物騒になつて来たなと、そつと窺うかがつている。

かくとも知らぬ主人ははなはだ熱心なる容子ようすをも

つて一いっちょうらい張来の鏡を見つめている。元来鏡というもの

は気味の悪いものである。深夜ろうそく蠟燭を立てて、広い

部屋のなかで一人鏡を覗のぞき込むにはよほどの勇気が

いるそうだ。吾輩などは始めて当家の令嬢から鏡を

顔の前へ押し付けられた時に、はっと仰天ぎょうてんして屋敷

のまわりを三度馳かけ回ったくらいである。いかに白

昼といえども、主人のようにかく一生懸命に見つめ

ている以上は自分で自分の顔が怖こわくなるに相違ない。

ただ見てさえあまり気味のいい顔じゃない。ややあ

って主人は「なるほどきたない顔だ」と独り言ひとりごを云

った。自己の醜を自白するのはなかなか見上げたも

のだ。様子から云うとたしかに氣違の所作しよさだが言う

ことは真理である。これがもう一步進むと、己おのれの

醜惡な事が怖こわくなる。人間は吾身が怖ろしい惡党で

あると云う事実を徹骨徹髓に感じた者でないと苦勞

人とは云えない。苦勞人でないととうてい解脱げだつは出

来ない。主人もここまで来たらついでに「おお怖こわい」

とでも云いそうなものであるがなかなか云わない。

「なるほどきたない顔だ」と云ったあとで、何を考
え出したか、ぷうつと頬ほっぺたを膨ふくらました。そう
してふくれた頬っぺたを平手ひらてで二三度叩たたいて見る。

何のまじないだか分らない。この時吾輩は何だかこ
の顔に似たものがあるらしいと云う感じがした。よ
くよく考えて見るとそれは御三おさんの顔である。ついで

だから御三の顔をちよつと紹介するが、それはそれ

はふくれたものである。この間さる人が穴守稻荷か

あなもりいなり

ら河豚ふぐの提灯ちようちんをみやげに持つて来てくれたが、ちよ

うどあの河豚提灯ふぐちようちんのようにふくれている。あまりふ

くれ方が残酷なので眼は両方共紛失している。もつ

とも河豚のふくれるのは万遍なく真丸まんまるにふくれるの

だが、お三とくると、元来の骨格が多角性であつて、

その骨格通りにふくれ上がるのだから、まるで水気すいき

になやんでいる六角時計のようなものだ。御三が聞

いたらさぞ怒るおこだろうから、御三はこのくらいにし

てまた主人の方に帰るが、かくのごとくあらん限り

の空気をもって頬ほつぺたをふくらませたる彼は前申ぜん

す通り手のひらで頬ほぺたを叩きながら「このくらい

皮膚が緊張するとあばたも眼につかん」とまた独りひと

こと
語をいった。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「こうして見ると大変目立つ。

やっぱりまともに日の向いてる方が平たいらに見える。奇

体な物だなあ」と大分だいぶん感心した様子であつた。それ

から右の手をうんと伸のばして、出来るだけ鏡を遠距離

に持つて行つて静かに熟視している。「このくらい

離れるとそんなでもない。やはり近過ぎるといかん。

——顔ばかりじゃない何でもそんなものだ」と悟つたようなことを云う。次に鏡を急に横にした。そう

して鼻の根を中心にして眼や額や眉まゆを一度にこの中

心に向つてくしゃくしゃとあつめた。見るからに不

愉快的容貌ようぼうが出来上ったと思つたら「いやこれは駄

目だ」と当人も気がついたと見えて早々やめてしまそうそう

った。「なぜこんなに毒々しい顔だろう」と少々不

審の体^{てい}で鏡を眼を去る三寸ばかりの所へ引き寄せる。

右の人指しゆびで小鼻を撫^なでて、撫でた指の頭を机

の上にあつた吸^{すい}取り紙^{がみ}の上へ、うんと押しつける。

吸い取られた鼻の膏^{あぶら}が丸^まるく紙の上へ浮き出した。

いろいろな芸をやるものだ。それから主人は鼻の膏

を塗^{とまつ}抹した指頭^{しとう}を転じてぐいと右眼^{うがん}の下^{したまぶた}瞼を裏返し

て、俗に云うべっかんこうを見事にやって退けたの。

あばたを研究しているのか、鏡と睨め競にらくらをしている

のかその辺は少々不明である。気の多い主人の事だ

から見ているうちにいろいろになると見える。それ

どころではない。もし善意をもつて蒟蒻問答こんにやくもんどうてき的に解

釈してやれば主人は見性自覚けんしょうじかくの方便ほうべんとしてかように

鏡を相手にいろいろな仕草しぐさを演じているのかも知れ

ない。すべて人間の研究と云うものは自己を研究するのである。天地と云い山川さんせんと云い日月じつげつと云い星辰せいしんと云うも皆自己の異名いみように過ぎぬ。自己を措おいて他に研究すべき事項は誰人たればとにも見出し得ぬ訳だ。もし人間が自己以外に飛び出す事が出来たら、飛び出す途端に自己はなくなってしまう。しかも自己の研究は自己以外に誰もしてくれる者はない。いくら仕てや

りたくても、貰いたくても、出来ない相談である。

それだから古来の豪傑はみんな自力で豪傑になった。

人のお蔭で自己が分るくらいなら、自分の代理に牛

肉を喰わして、堅いか柔かいか判断の出来る訳だ。

朝に法を聴き、^{あした}夕に道^{ゆうべ}を聴き、^{ごぜん}梧前灯下^{とうか}に書卷を手

にするのは皆この自証^{じじょう}を挑撥^{ちようはつ}するの方便^{ほうべん}の具^ぐに過ぎ

ぬ。人の説く法のうち、他の弁ずる道のうち、乃至^{ないし}

は五車ごしやにあまる蠹紙堆裏としたいりに自己が存在する所以ゆえんがな

い。あれば自己の幽霊である。もつともある場合に

において幽霊は無霊むれいより優るかも知れない。影を追え

ば本体に逢着ほうちやくする時がないとも限らぬ。多くの影は

大抵本体を離れぬものだ。この意味で主人が鏡をひ

ねくっているなら大分だいぶん話せる男だ。エピクテタスな

どを鵜呑うのみにして学者ぶるよりも遥はるかにましだと思う。

鏡は己惚うぬぼれの醸造器であるごとく、同時に自慢の消

毒器である。もし浮華虚栄の念をもつてこれに対す

る時はこれほど愚物を煽動せんどうする道具はない。昔から

増上慢ぞうじょうまんをもつて己おのれを害し他そこのを戕じうた事蹟じせきの三分の二

はたしかに鏡の所作しよさである。仏国革命の当時物好き

な御医者さんが改良首きり器械を発明して飛んだ罪

をつくったように、始めて鏡をこしらえた人も定め

ねざめ

し寢覚のわるい事だろう。しかし自分に愛想あいその尽き

かけた時、自我の萎縮した折は鏡を見るほど薬にな

る事はない。

けんしゅうりようぜん

妍醜瞭然だ。

こんな顔でよくまあ人で

そうろうそ

候と反りかえって

こんにち

今日まで暮らされたものだと気が

つくにきまつている。そこへ気がついた時が人間の

しょうがい

生涯しょうがい中もつともありがたい期節である。自分で自分

の馬鹿を承知しているほど尊たつとく見える事はない。

じかくせいばか

この自覚性馬鹿の前にはあらゆるえらがり屋がこと

ごとく頭を下げて恐れ入らねばならぬ。当人は昂然こうぜん

けいぜうようしよう

として吾を輕侮嘲笑けいぜうようしようしているつもりでも、こちらか

ら見るとその昂然たところが恐れ入って頭を下げ

おの

ている事になる。主人は鏡を見て己れの愚を悟るほ

どの賢者ではあるまい。しかし吾が顔に印せられる

痘痕の銘めいくらいは公平に読み得る男である。顔の醜みにくいのを自認するのは心の賤いやしきを会得えとくする楷梯かいていにもなろう。たのもしい男だ。これも哲学者からやり込められた結果かも知れぬ。

かように考えながらなお様子をうかがっていると、それとも知らぬ主人は思ふ存分あかんべえをしたあとで「大分だいぶん充血けっけつしているようだ。やっぱり慢性結膜

炎だ」と言いながら、人さし指の横つらでぐいぐい

充血した^{まぶた}瞼をこすり始めた。大方^{おおかたかゆ}痒いのだろうけれ

ども、たださえあんなに赤くなっているものを、こ

う^{こす}擦ってはたまるまい。遠からぬうちに^{しおだい}塩鯛の眼玉

のごとく腐爛^{ふらん}するにきまつてる。やがて眼を開いて^{ひら}

鏡に向ったところを見ると、果せるかなどんよりと

して北国の冬空のように曇っていた。もつとも平常^{ふだん}

からあまり晴れ晴れしい眼ではない。誇大な形容詞

を用いると混沌こんとんとして黒眼と白眼が剖判ほうはんしないくら

い漠然ぼくぜんとしている。彼の精神が朦朧もうろうとして不得要領

底ていに一貫しているごとく、彼の眼も曖々然あいあいぜんまいまいぜん昧々然と

して長えに眼窩がんかの奥に漂ただようている。これは胎毒たいどくのた

めだとも云うし、あるいは疱瘡ほうそうの余波だとも解釈さ

れて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙の厄介にな

った事もあるそうだが、せつかく母親の丹精も、あ

るにその甲斐^{かい}あらばこそ、今日^{こんにち}まで生れた当時のま

までぼんやりしている。吾輩ひそかに思うにこの状

態は決して胎毒や疱瘡のためではない。彼の眼玉が

かように晦渋^{かいじゅう}溷濁^{こんだく}の悲境に彷徨^{ほうこう}しているのは、とり

も直さず彼の頭脳が不透^{ふとう}不明^{ふめい}の實質から構成されて

いて、その作用が暗^{あん}憺^{たん}溟濛^{めいもう}の極に達しているから、

自然とこれが形体の上にあられて、知らぬ母親に
いらぬ心配を掛けたんだろう。煙たつて火あるを知
り、まなこ濁つて愚^ぐなるを証す。して見ると彼の眼
は彼の心の象徴で、彼の心は天保銭^{てんぼうせん}のごとく穴があ
いているから、彼の眼もまた天保銭と同じく、大き
な割合に通用しないに違ない。

今度は髯^{ひげ}をねじり始めた。元来から行儀のよくな

い髯でみんな思い思いの姿勢をとって生はえている。

いくら個人主義が流行はやる世の中だって、こう町々まちまちに

我儘わがままを尽くされては持主の迷惑はさこそと思いやら

れる、主人もここに鑑かんみるところあつて近頃は大おおに

訓練を与えて、出来る限り系統的に按排あんばいするように

尽力している。その熱心の功果こうかは空むなしからずして昨

今ようやく歩調が少しとこのうようになつて来た。

今までは髯が生えておったのであるが、この頃は髯

を生やしているのだと自慢するくらいになった。熱

心は成効の度に応じて鼓舞せられるものであるから、

吾が髯の前途有望なりと見てとって主人は朝な夕な、

手がすいておれば必ず髯に向つて鞭撻を加える。彼

のアムビションは独逸皇帝陛下のように、向上の念

の熾な髯を蓄えるにある。それだから毛孔が横向で

あろうとも、下向であろうとも聊いささか頓着なく十把一じつぱひ

とからげに握にぎつては、上の方へ引つ張り上げる。髯

もさぞかし難儀であろう、所有主たる主人すら時々

は痛い事もある。がそこが訓練である。否いやでも応で

もさかに扱こき上げる。門外漢から見ると気の知れな

い道楽のようであるが、当局者だけは至当の事と心

得ている。教育者がいたずらに生徒の本性ほんせいを撓ためて、

僕の手柄を見給えと誇るようなもので毫も非難すべき理由はない。

主人が満腔まんこうの熱誠をもつて髯を調練していると、

台所から多角性の御三おさんが郵便が参りましたと、例の

ごとく赤い手をぬつと書斎の中うちへ出した。右手みぎに髯

をつかみ、左手ひだりに鏡を持った主人は、そのまま入口

の方を振りかえる。八の字の尾に逆さか立だちを命じた

ような髯を見るや否や御多角おたかくはいきなり台所へ引き

戻して、ハハハハと御釜おかまの蓋ふたへ身をもたして笑った。

主人は平気なものである。悠々ゆうゆうと鏡をおろして郵便

を取り上げた。第一信は活版ずりで何だかいかめしい文字が並べてある。読んで見ると

拝啓いよいよ愈御多祥奉賀候回顧すれば日露の戦役は連戦連

勝の勢いきおいに乗じて平和克復を告げ吾忠勇義烈なる将士

は今や過半万歳声裡りに凱歌を奏し国民の歡喜何もの

か之これに若しかん曩さきに宣戰の大詔煥発たいしやうかんぱつせらるるや義勇公

に奉じたる将士は久しく万里の異境に在ありて克よく寒

暑の苦難を忍び一意戰鬪に従事し命めいを国家に捧げた

るの至誠は永く銘して忘るべからざる所なり而しして

軍隊の凱旋は本月を以て殆ほとんど終了を告げんとす依

つて本会は来る二十五日を期し本区内一千有余の出

征将校下士卒に対し本区民一般を代表し以て一大凱

旋祝賀会を開催し兼て軍人遺族を慰藉いしやせんが為め熱

誠これ之を迎え聊感謝いささかの微衷びちゆうを表し度就たくついては各位の御協

賛を仰ぎ此盛典を挙行するの幸さいわいを得ば本会の面目これ不

過にすぎず之と存候間何卒御賛成奮ふるつて義捐ぎえんあらんことを只ひた

管希望の至に堪たえず候敬具そろ

とあつて差し出し人は華族様である。主人は黙読一

過の後直ちに封の中へ巻き納めて知らん顔をしてい

る。義捐などは恐らくしそうにない。せんだつて東

北凶作の義捐金を二円とか三円とか出してから、逢

う人毎に義捐をとられた、ぶごととられたと吹聴ふいちやうしている

くらいである。義捐とある以上は差し出すもので、

とられるものでないには極きまっている。泥棒にあつた
のではあるまいし、とられたとは不穩当である。し
かるにも関せず、盜難にでも雇かかつたかのごとくに思
つてゐらしい主人がいかに軍隊の歡迎だと云つて、
いかに華族様の勧誘だと云つて、強談ごうだんで持ちかけた
らいざ知らず、活版の手紙くらいで金銭を出すよう
な人間とは思われない。主人から云えば軍隊を歡迎

する前にまず自分を歓迎したのである。自分を歓迎した後あとなら大抵のものは歓迎しそうであるが、自分が朝夕ちようせきに差し支さえる間つかは、歓迎は華族様に任まかせておく了見らしい。主人は第二信を取り上げたが「や、これも活版だ」と云った。

時下秋冷こうの候ころに候処貴家益々御隆盛の段奉賀上候陳がしあげたてまつりそのふ

れば本校儀も御承知の通り一昨々年以来二三野心家

の為に妨げられ一時其極に達し候得共是れ皆不肖

そうらえども

ふしよう

しんさく

針作が足らざる所に起因すと存じ深く自ら警むる所

みずか いまし

がしんしょうたん

あり臥薪嘗胆其の苦辛の結果漸く茲に独力以て我が

くしん

ようや ここ

理想に適するだけの校舎新築費を得るの途を講じ候

そろ

そ

其は別義にも御座なく別冊裁縫秘術綱要と命名せる

そろ

しんさく

書冊出版の義に御座候本書は不肖針作が多年苦心研

究せる工芸上の原理原則に法のつとり真に肉を裂き血を

絞るの思を為なして著述せるものに御座候そろよ因よつて本書

あまね

を普く一般の家庭へ製本実費に些少さしょうの利潤を附して

まごうきゆう

御購求を願ひ一面斯道しどう発達の一助となすと同時に又

きんしょう

一面には僅少の利潤を蓄積して校舎建築費に当つる

つもり

そろ

なんとも

心算に御座候依そつては近頃何共恐縮の至りに存じ候

なしくださる

おぼしめ

ここ

えども本校建築費中へ御寄附被成下と御思召し茲に

呈供仕候秘術綱要一部を御購求の上御侍女の方へな

なしくだされそろ

りとも御分与被成下候て御賛同の意を御表章被成下

なしくだされ

度伏して懇願仕候勿々敬具

大日本女子裁縫最高等大学院

校長

ぬいだしんさく
縫田針作

九拜

とある。主人はこの鄭重なる書面を、冷淡に丸めて

ぽんと屑籠くずかごの中へ抛り込ほうんだ。せつかくの針作君の

九拜も臥薪嘗胆も何の役にも立たなかつたのは氣の毒である。第三信にかかる。第三信はすこぶる風変

りの光彩を放っている。状袋が紅白のだんだらで、

飴あめん棒ぼうの看板のごとくはなやかなる真中に珍野ちんのくし苦沙

弥やみ先生虎皮こひか下と八分体はっぶんたいで肉太したたに認めてある。中から

お太たさんが出るかどうかどうだか受け合わないが表おもてだけは

すこぶる立派なものだ。

若し我を以て天地を律すればひとくち一口にしてせいこう西江の水を

吸いつくすべく、若し天地を以て我を律すれば我は

すなわはくじょう

則ち陌上の塵のみ。すべからく道え、天地と我と仕

んも

塵の交渉がある。……始めて海鼠なまこを食い出せる人は

其胆力に於て敬すべく、始めて河豚ふぐを喫せる漢きつは其

勇氣に於て重んずべし。海鼠を食えるものは親鸞の

再来にして、河豚を喫せるものは日蓮の分身なり。

苦沙弥先生の如きに至っては只干瓢の酢味噌を知る

のみ。干瓢の酢味噌を食って天下の士たるものは、

われ未だ之を見ず。……

親友も汝を売るべし。父母も汝に私あるべし。愛人

も汝を棄つべし。富貴は固より頼みがたかるべし。

しやくろくいつちよう

爵禄は一朝にして失うべし。汝の頭中に秘蔵する学

問には黷かびが生はえるべし。汝何を恃たのまんとするか。天

地の裡うちに何をたのまんとするか。神？ 神は人間の

苦しまぎれに捏造でつぞうせる土偶どぐうのみ。人間のせつな糞ぐその

凝結せる臭骸のみ。恃たのむまじきを恃んで安しと云う。

とつとつ

咄々、醉漢漫みだりに胡乱うろんの言辞を弄して、蹣跚まんさんとして

墓に向う。油尽きて灯自とら滅す。業尽きて何物をか

遺す。のこ 苦沙弥先生よろしく御茶でも上がれ。……

人を人と思わざれば畏るる所なし。おそ 人を人と思わざ

るものが、吾を吾と思わざる世を憤るは如何。いきどお 権貴

栄達の士は人を人と思わざるに於て得たるが如し。

只他の吾を吾と思わぬ時に於て怫然として色を作す。ただひと ふっぜん な

任意に色を作し来れ。馬鹿野郎。……

吾の人を人と思うとき、他の吾を吾と思わぬ時、不

平家は発作的ほっさてきに天降る。あまくだ此発作的活動を名づけて革命という。革命は不平家の所為にあらず。権貴栄達
の士が好んで産する所なり。朝鮮に人参にんじん多し先生何
が故に服せざる。

在巢鴨

てんどうこうへい
天道公平

再拝

針作君は九拝であつたが、この男は単に再拝だけ

である。寄附金の依頼でないだけに七拝ほど横風おうふうに

構えている。寄附金の依頼ではないがその代りすこ
ぶる分りにくいものだ。どこの雑誌へ出しても没書
になる価値は充分あるのだから、頭脳の不透明をも
つて鳴る主人は必ず寸断ずたずたに引き裂いてしまうだ
ろうと思おもいのほか、打ち返し打ち返し読み直している。
こんな手紙に意味があると考えて、あくまでその意

味を究めようという決心かも知れない。およそ天地

かん

の間にわからんものは沢山あるが意味をつけてつか

ないものは一つもない。どんなむずかしい文章でも

解釈しようとすれば容易に解釈の出来るものだ。人

間は馬鹿であると云おうが、人間は利口であると云

おうが手もなくわかる事だ。それどころではない。

人間は犬であると云つても豚であると云つても別に

苦しむほどの命題ではない。山は低いと云つても構
わん、宇宙は狭いと云つても差し支^さえはな^{つか}い。鳥が
白くて小町が醜婦で苦沙弥先生が君子でも通らん事
はない。だからこんな無意味な手紙でも何とか蚊^かと
か理窟^{りくつ}さえつけられ^ばどうとも意味はとれる。ことに
主人のように知らぬ英語を無理矢理にこじ附けて説
明し通して来た男はなおさら意味をつけたがるので

ある。天氣の悪るいになぜグード・モーニングで

すかと生徒に問われて七日間^{なぬかかん}考えたり、コロンバス

と云う名は日本語で何と云いますかと聞かれて三日

三晩かかって答を工夫するくらいな男には、干瓢^{かんぴょう}の

酢味^{すみそ}噌が天下の士であろうと、朝鮮の仁参^{にんじん}を食って

革命を起そうと随意的意味は随処に湧^わき出る訳であ

る。主人はしばらくしてグード・モーニング流にこ

の難解な言句ことくを呑み込んだと見えて「なかなか意味

深長だ。何でもよほど哲理を研究した人に違ない。

天晴あっぱれな見識だ」と大變賞賛した。この一言いちごんでも主人

の愚ぐなところはよく分るが、翻ひるがえって考えて見るとい

ささかもつともな点もある。主人は何に寄らずわか

らぬものをありがたがる癖を有している。これはあ

ながち主人に限った事でもなからう。分らぬところ

には馬鹿に出来ないものが潜伏して、測るべからざ

る辺には何だかけだか気高い心持が起るものだ。それだか

ら俗人はわからぬ事をわかつたように吹聴ふいちようするにも

係かかわらず、学者はわかつた事をわからぬように講釈す

る。大学の講義でもわからん事を喋しゃべ舌る人は評判が

よくつてわかる事を説明する者は人望がないのでも

よく知れる。主人がこの手紙に敬服したのも意義が

明瞭であるからではない。その主旨が那邊なへんに存する

かほとんど捕とらえ難いからである。急に海鼠なまこが出て来

たり、せつな糞ぐそが出てくるからである。だから主人

がこの文章を尊敬する唯一の理由は、道家どうけで道德経

を尊敬し、儒家じゆかで易经えいききようを尊敬し、禅家ぜんけで臨濟録りんざいろくを尊

敬すると一般で全く分らんからである。但しただ全然分

らんでは気がすまんから勝手な註釈をつけてわかつ

た顔だけはする。わからんものをわかつたつもりで
尊敬するのは昔から愉快なものである。——主人は
恭しくうやうや八分体の名筆を巻き納めて、これを机上に置
いたままふところ懷手をして冥想めいそうに沈んでいる。

ところへ「頼む頼む」と玄関から大きな声で案内
を乞う者がある。声は迷亭のようだが、迷亭に似合
わずしきりに案内を頼んでいる。主人は先から書齋

のうちでその声を聞いているのだが懐手のまま毫もちよう

動こうとしない。取次に出るのは主人の役目でない

という主義か、この主人は決して書斎から挨拶をし

た事がない。下女は先刻洗濯石鹼さつきせんたくシャボンを買いに出た。細

君は憚りはばかである。すると取次に出べきものは吾輩だ

けになる。吾輩だつて出るのはいやだ。すると客人

は沓脱くつぬぎから敷台へ飛び上がつて障子を開け放つてつ

かつか上り込んで来た。主人も主人だが客も客だ。

座敷の方へ行つたなと思ふと襖を二三度あけたり閉

ふすま

た

てたりして、今度は書斎の方へやってくる。

「おい冗談じやない。じょうだん何をしているんだ、御客さん

だよ」

「おや君か」

「おや君かもないもんだ。そこにいるなら何とか云

えばいいのに、まるで空家あきやのようじゃないか」

「うん、ちと考え事があるもんだから」

「考えていたって通れくらいは云えるだろう」

「云えん事もないさ」

「相変らず度胸がいいね」

「せんだってから精神の修養を力つとめているんだもの」

「物好きだな。精神を修養して返事が出来なくなつた日には来客は御難だね。そんなに落ちつかれちゃ困るんだぜ。実は僕一人来たんじやないよ。大變な御客さん連れて来たんだよ。ちよつと出て逢つてくれ給え」

「誰を連れて来たんだい」

「誰でもいいからちよつと出て逢つてくれたまえ。」

是非君に逢いたいと云うんだから」

「誰だい」

「誰でもいいから立ちたまえ」

主人は懷手ふところのままぬつと立ちながら「また人を担かつ

ぐつもりだろう」と椽側えんがわへ出て何の気もつかずに客

間へ這入はいり込んだ。すると六尺の床を正面に一個の

老人が肅然しゆくぜんと端坐たんざして控ひかえている。主人は思わず懷

から両手を出してぺたりと唐紙からかみの傍そばへ尻を片づけて
しまった。これでは老人と同じく西向きであるから
双方共挨拶のしようがない。昔堅気むかしかたぎの人は礼義はや
かましいものだ。

「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人を
促うながす。主人は両三年前までは座敷はどこへ坐まつて
も構かまわんものと心得こころえていたのだが、その後ごある人か

ら床の間の講釈を聞いて、あれは上段の間の^ま変化したもので、^{じょうし}上使が坐わる所だと悟って以来決して床の間へは寄りつかない男である。ことに見ず知らずの年長者が頑^{がん}と構えているのだから上座^{じょうざ}どころではない。挨拶さえ碌^{ろく}には出来ない。一応頭をさげて「さあどうぞあれへ」と向うの云う通りを繰り返した。

「いやそれでは御挨拶が出来かねますから、どうぞあれへ」

「いえ、それでは……どうぞあれへ」と主人はいい加減に先方の口上を真似ている。

「どうもそう、御謙遜では恐れ入る。ごけんそんかえって手前が痛み入る。どうか御遠慮なく、さあどうぞ」

「御謙遜では……恐れますから……どうか」主人は

真赤になつて口をもごもご云わせている。精神修養

もあまり効果がないようである。迷亭君は襖の影か

ふすま

ら笑いながら立見をしていたが、もういい時分だと思つて、後ろうしろから主人の尻を押しやりながら

「まあ出たまえ。そう唐紙からかみへくつついては僕が坐る

所がない。遠慮せず前へ出たまえ」と無理に割り込んでくる。主人はやむを得ず前の方へすり出る。

「苦沙弥君これが毎々君に噂をする静岡の伯父だよ。伯父さんこれが苦沙弥君です」

「いや始めて御目にかかります、毎度迷亭が出て御邪魔を致すそうで、いつか参上の上御高話を拝聴致そうと存じておりましたところ、幸い今日は御近所

を通行致したもので、御礼かたがた旁伺よろった訳で、どうぞ御

見知りおかれまして今後共宜よろしく」と昔むかし風な口上

を淀みなく述べたてる。主人は交際の狭い、無口な

人間である上に、こんな古風な爺さんとはほとんど

出会った事がないのだから、最初から多少場うての

気味で辟易していたところへ、滔々と浴びせかけら

れたのだから、朝鮮仁参も飴ん棒の状袋もすっかり

忘れてしまつてただ苦しまぎれに妙な返事をする。

「私も……私も……ちよつと伺がうはずでありまし

たところ……何分よろしく」と云い終つて頭を少々
畳から上げて見ると老人は未だいまに平伏しているので、
はっと恐縮してまた頭をぴたりと着けた。

老人は呼吸を計つて首をあげながら「私ももとは
こちらに屋敷も在あつて、永らく御膝元でくらししたも
のですが、瓦解がかいの折にあちらへ参つてからとんと
出てこんのでな。今来て見るとまるで方角も分らん

くらいで、——迷亭にでも伴つれてあるいてもらわんと、とても用達ようたしも出来ません。滄桑そうそうの変へんとは申しながら、御入国ごにゆうこく以来三百年も、あの通り將軍家の……」

「伯父さん將軍家もありがたいかも知れませんが、明治よの代も結構ですぜ。昔は赤十字なんてものもなかったでしよう」

「それはない。赤十字などと称するものは全くない。ことに宮様の御顔を拝むなどと云う事は明治の御代みよでなくては出来ぬ事だ。わしも長生きをした御蔭でこの通り今日こんにちの総会にも出席するし、宮殿下の御声もきくし、もうこれで死んでもいい」

「まあ久し振りで東京見物をするだけでも得ですよ。苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の総会があるので

わざわざ静岡から出て来てね、今日いっしょに上野へ出掛けただが今その帰りがけなんだよ。それだからこの通り先日僕が白木屋へ注文したフロックコートを着ているのさ」と注意する。なるほどフロックコートを着ている。フロックコートは着ているがすこしもからだに合わない。袖が長過ぎて、襟がそでおえりつびら開いて、背中へ池が出来て、腋わきの下が釣るし上が

っている。いくら不恰好ぶかつこうに作ろうと云ったって、こ

うまで念を入れて形を崩くずす訳にはゆかないだろう。

その上白シャツと白襟しろえりが離れ離れになつて、仰あおむく

と間から咽喉のど仏が見える。第一黒い襟飾りが襟に属

しているのか、シャツに属しているのか判然はんぜんしない。

フロツクはまだ我慢が出来るが白髪しらのチョン髷まげはは

なはだ奇観である。評判てっせんの鉄扇はどうかと目を注つけ

ると膝の横にちゃんと引きつけている。主人はこの時ようやく本心に立ち返って、精神修養の結果を存分に老人の服装に応用して少々驚いた。まさか迷亭の話ほどではなかろうと思っていたが、逢って見ると話以上である。もし自分のあばたが歴史的研究所の材料になるならば、この老人のチョンまげ髻や鉄扇はたしかにそれ以上の価値がある。主人はどうかしてこ

の鉄扇の由来を聞いて見たいと思つたが、まさか、打ちつけに質問する訳には行かず、と云つて話を途切らすのも礼に欠けると思つて

「だいぶ人が出ましたろう」と極^{きわ}めて尋常な問をかけた。

「いや非常な人で、それでその人が皆わしをじろじろ見るので——どうも近来は人間が物見高くなつた

ようだがすな。昔むかしはあんなではなかったが」

「ええ、さよう、昔はそんなではなかったですな」

と老人らしい事を云う。これはあながち主人が知しつ

高たか振りをした訳ではない。ただ朦朧もうろうたる頭脳から好

い加減に流れ出す言語と見れば差さし支つかえない。

「それにな。皆この甲割かぶとわりへ目を着けるので」

「その鉄扇は大分だいぶん重いものでございましょう」

「苦沙弥君、ちよつと持つて見たまえ。なかなか重
いよ。伯父さん持たして御覧なさい」

老人は重たそうに取り上げて「失礼ですが」と

主人に渡す。京都の黒谷で参詣人くろだにさんけいが蓮生坊れんしょうぼうの太刀たちを

戴いたくただようなかたで、苦沙弥先生しばらく持つていた

が「なるほど」と云つたまま老人に返却した。

「みんながこれを鉄扇鉄扇と云うが、これは甲割とかぶとわり

とな
称えて鉄扇とはまるで別物で……」

「へえ、何にしたものでございましょう」

「兜を割るので、――敵の目がくらむ所を撃ちとつ

たものでがす。くすのきまさしげ楠正成時代から用いたようで……」

「伯父さん、そりや正成の甲割ですかね」

「いえ、これは誰のかわからん。しかし時代は古い。

けんむじだい
建武時代の作かも知れない」

「建武時代かも知れないが、寒月君は弱ってしましたぜ。苦沙弥君、今日歸りにちようどいい機会だから大学を通り抜けるついでに理科へ寄って、物理の実験室を見せて貰ったところがね。この甲割が鉄だものだから、磁力の器械が狂って大騒ぎさ」

「いや、そんなはずはない。これは建武時代の鉄で、しょう性のいい鉄だから決してそんなおそ虞れはない」

「いくら性のいい鉄だつてそうはいきませんよ。現に寒月がそう云つたから仕方がないです」

「寒月というのは、あのガラス球を磨^{だま}つて^すいる男かい。今の若さに気の毒な事だ。もう少し何かやる事がありそうなものだ」

「可愛^{かわい}想^{そう}に、あれだつて研究でさあ。あの球を磨り上げると立派な学者になれるんですからね」

「玉を磨りあげて立派な学者になれるなら、誰にでも出来る。わしにでも出来る。ビードロやの主人にでも出来る。ああ云う事をする者を漢土では玉人きゆうじんと称したもので至って身分の軽いものだ」と云いながら主人の方を向いて暗に賛成を求めゐる。

「なるほど」と主人はかしこまっている。

「すべて今の世の学問は皆形而下けいじかの学でちよつと結

構なようだが、いざとなるとすこしも役には立ちま
せんでな。昔はそれと違って侍は皆命懸けいのちがの商買だしょうばい
から、いざと云う時に狼狽ろうばいせぬように心の修業を致
したもので、御承知でもあらっしやろうがなかなか
玉を磨ったり針金を緬よったりするような容易たやすいもの
ではなかったのがすよ」

「なるほど」とやはりかきこまっている。

「伯父さん心の修業と云うものは玉を磨る代りに懷ふと

ころで

手をして坐り込んでるんでしよう」

「それだから困る。決してそんな造作ぞうさのないもので

はない。孟子もうし きゆうほうしんは求放心と云われたくらいだ。邵康節しょうこうせつ

しんようほう

は心要放と説いた事もある。また仏家では中峯和尚

ぶっか

ちゆうほうおしょう

ぐふたいてん

と云うのが具不退転と云う事を教えている。なかなか

か容易には分らん」

「どうてい分りっこありませんね。全体どうすればいいんです」

「御前は沢菴たくあんぜんじ禪師ふどうちしんみようろくの不動智神妙録というものを讀んだ事があるかい」

「いいえ、聞いた事ありません」

「心をどこに置こうぞ。敵の身の働はたらきに心を置けば、

敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀たちに心を置

けば、敵の太刀に心を取らるるなり。敵を切らんと
思うところに心を置けば、敵を切らんと思うところ
に心を取らるるなり。わが太刀に心を置けば、我太
刀に心を取らるるなり。われ切られじと思うところ
に心を置けば、切られじと思うところに心を取らる
るなり。人の構かまえに心を置けば、人の構に心を取らる
るなり。とかく心の置きどころはないとある」

「よく忘れずに暗誦あんしょうしたものです。伯父さんもなかなか記憶がいい。長いじやありませんか。苦沙弥君分ったかい」

「なるほど」と今度もなるほどですましてしまった。

「なあ、あなた、そうでござりましょう。心をどこに置こうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働

に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば……」

「伯父さん苦沙弥君はそんな事は、よく心得ているんですよ。近頃は毎日書齋で精神の修養ばかりしているんですから。客があつても取次に出ないくらい心を置き去りにしているんだから大丈夫ですよ」

「や、それは御奇^{ごきどく}特な事で——御前などもちとごいっしょにやったらよかろう」

「へへへそんな暇はありませんよ。伯父さんは自分が楽なからだだもんだから、人も遊んでると思っていらっしやるんでしよう」

「實際遊んでるじゃないかの」

「ところが閑中自かんちゅうおのずから忙ぼうありでね」

「そう、粗忽そこつだから修業をせんといかないと云うの

よ、忙中自おのずから閑かんありと云う成句せいこくはあるが、閑中自ら

忙ありと云うのは聞いた事がない。なあ苦沙弥さん」

「ええ、どうも聞きませんようで」

「ハハハハそうなたちやあ敵かなわない。時に伯父さん

どうです。久し振りで東京の鰻うなぎでも食つちやあ。竹ちく

葉ようでも奢おごりましょう。これから電車で行くとすぐで

す」

「鰻も結構だが、今日はこれからすい原すいはらへ行く約束があるから、わしはこれで御免を蒙こうむろう」

「ああ杉原すぎはらですか、あの爺じいさんも達者ですね」

「杉原すぎはらではない、すい原すいはらさ。御前はよく間違ばかり

云って困る。他人の姓名を取り違えるのは失礼だ。

よく気をつけないけない」

「だって杉原すぎはらとかいてあるじゃありませんか」

すぎはら
「杉原と書いてすい原と読むのさ」

「妙ですね」

「なに妙な事があるものか。名目読みと云つて昔か

らある事さ。蚯蚓きゅういんを和名わみょうでみみずと云う。あれは目、

見ずの名目よみで。蝦蟆がまの事をかいると云うのと同

じ事さ」

「へえ、驚ろいたな」

「蝦蟆を打ち殺すと仰向きにかえる。それを名目読

あおもむ

みにかいると云う。透垣をすい垣、すぎがき 茎立をくく立、がき

くきたち

皆同じ事だ。杉原をすぎ原などと云うのは田舎もの

すいはら

いなか

の言葉さ。少し気を付けないと人に笑われる」

「じゃ、その、すい原へこれから行くんですか。困

ったな」

「なに厭いやなら御前は行かんでもいい。わし一人で行

くから」

「一人で行けますかい」

「あるいてはむずかしい。車を雇って頂いて、ここから乗って行こう」

主人は畏ま^{かしこ}って直ちに御三^{おさん}を車屋へ走らせる。老

人は長々と挨拶をしてチョン^{まげあたま}髻頭へ山高帽をいただいて帰って行く。迷亭はあとへ残る。

「あれが君の伯父さんか」

「あれが僕の伯父さんさ」

「なるほど」と再び座蒲団ざぶとんの上に坐つたなり懷手ふところを

して考え込んでいる。

「ハハハ豪傑だろう。僕もああ云う伯父さんを持つ

て仕合せなものさ。どこへ連れて行つてもあの通り

なんだぜ。君驚ろいたろう」と迷亭君は主人を驚ろ

かしたつもりで大に喜ん^{おおい}でいる。

「なにそんなに驚きやしない」

「あれで驚かなけりや、胆力の据^{すわ}ったもんだ」

「しかしあの伯父さんはなかなかえらいところがあ
るようだ。精神の修養を主張するところなぞは^{おおい}大に

敬服していい」

「敬服していいかね。君も今に六十くらいになると

やっぱりあの伯父見たように、時候おくれになるかも知れないぜ。しつかりしてくれたまえ。時候おくれの廻り持ちなんか気が利きかないよ」

「君はしきりに時候おくれを気にするが、時と場合によると、時候おくれの方がえらいんだぜ。第一今の学問と云うものは先へ先へと行くだけで、どこまで行つたつて際限はありやしない。とうてい満足は

得られやしない。そこへ行くと東洋流の学問は消極
的で大に味あじわいがある。心そのものの修業をするのだから」とせんだって哲学者から承わった通りを自説の
ように述べ立てる。

「えらい事になって来たぜ。何だか八木独仙やぎどくせん君のよ
うな事を云ってるね」

八木独仙と云う名を聞いて主人ははっと驚ろいた

がりようくつ

。実はせんだって臥竜窟を訪問して主人を説服に及

ゆうぜん

んで悠然と立ち帰った哲学者と云うのが取も直さず

しかつめ

この八木独仙君であつて、今主人が鹿爪らしく述べ

立てている議論は全くこの八木独仙君の受売なので

あるから、知らんと思つた迷亭がこの先生の名を間

か

んふようはつ

不容髪の際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの

かりばな

仮鼻を挫いた訳になる。

「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は剣^{けん}呑^{のん}だから念^おを推して見る。

「聞いたの、聞かないのって、あの男の説ときたら
十年前学校にいた時分と今日^{こんにち}と少しも変りやしな
い」

「真理はそう変るものじゃないから、変らないところ
がたのもしいかも知れない」

「まあそんな^{ひいき}鼻負があるから独仙もあれで立ち行く

んだね。第一八木と云う名からして、よく出来てる

よ。あの髯^{ひげ}が君全く山羊^{やぎ}だからね。そうしてあれも

寄宿舎時代からあの通りの恰好^{かつこう}で生えていたんだ。

名前の独仙なども振^{ふる}ったものさ。昔^{むか}し僕のところへ

泊りがけに来て例の通り消極的の修養と云う議論を

してね。いつまで立っても同じ事を繰り返してやめ

ないから、僕が君もう寝ようじやないかと云うと、

先生気楽なものさ、いや僕は眠くないとすまし切っ

て、やっぱり消極論をやるには迷惑したね。仕方が

ないから君は眠くなかろうけれども、僕の方は大變

眠いのだから、どうか寝てくれたまえと頼むように

して寝かしたまではよかったが——その晩鼠ねずみが出て

独仙君の鼻のあたまを噛かじってね。夜なかに大騒ぎさ

。先生悟ったような事を云うけれども命は依然として惜しかったと見えて、非常に心配するのさ。鼠の毒が総身そうしんにまわると大変だ、君どうかしてくれと責めるには閉口したね。それから仕方がないから台所へ行つて紙片かみぎれへ飯粒を貼はつてごまかしてやったあね

「どうして」

「これは舶来こうやくの膏藥で、近來獨逸ドイッの名医が發明したので、印度人インドじんなどの毒蛇に噛かまれた時に用いると即効があるんだから、これさえ貼っておけば大丈夫だと云つてね」

「君はその時分からごまかす事に妙を得ていたんだね」

「……すると独仙君はああ云う好人物だから、全く

だと思つて安心してぐうぐう寝てしまつたのさ。あ
くる日起きて見ると膏藥の下から糸屑いとくずがぶらさがつ
て例の山羊髯やぎひげに引つかかつていたのは滑稽こっけいだつたよ
」

「しかしあの時分より大分だいぶんえらくなつたようだよ」
「君近頃逢つたのかい」

「一週間ばかり前に来て、長い間話しをして行つた

「どうりで独仙流の消極説を振り舞わすと思つた」

「実はその時大に感心おおいしてしまつたから、僕も大に

奮発して修養をやろうと思つてるところなんだ」

「奮発は結構だがね。あんまり人の云う事を真まに受

けると馬鹿を見るぜ。一体君は人の言う事を何でも

かでも正直に受けるからいけない。独仙も口だけは

立派なものだがね、いざとなると御互と同じものだ
よ。君九年前の大地震を知ってるだろう。あの時寄
宿の二階から飛び降りて怪我をしたものは独仙君だ
けなんだからな」

「あれには当人大分説だいぶんがあるようじゃないか」

「そうさ、当人に云わせるとすこぶるありがたいも
のさ。禪きほうの機鋒しゆんしょうは峻峭なもので、いわゆる石火せつかの機き

となる^{こわ}と怖いくらい早く物に応ずる事が出来る。ほ

かのものが地震だと云つて狼狽^{うろた}えているところを自

分だけは二階の窓から飛び下りたところに修業の効

があらわれて嬉しいと云つて、跛^{びつこ}を引きながらうれ

しがっていた。負惜みの強い男だ。一体禪^{ぜん}とか仏^{ぶつ}と

か云つて騒ぎ立てる連中ほどあやしいのはないぜ」

「そうかな」と苦沙弥先生少々腰が弱くなる。

「この間来た時禅宗坊主の寝言見たような事を何か

云ってつたろう」

「うん電光影裏でんこうえいりに春風しゅんぷうをきるとか云う句を教えて行

ったよ」

「その電光さ。あれが十年前からの御箱おはこなんだから

おかしいよ。無覚むかくぜんじ禅師の電光ときたら寄宿舍中誰も

知らないものはないくらいだった。それに先生時々

せき込むと間違えて電光影裏を逆さまに春風影裏に

電光をきると云うから面白い。今度ためして見たま

え。むこう向で落ちつき払って述べたてているところを、

こっちでいろいろ反対するんだね。するとすぐ顛倒てんとう

して妙な事を云うよ」

「君のようないたずらものに逢っちや叶かなわない」

「どっちがいたずら者だか分りやしない。僕は禅坊

主だの、悟ったのは大嫌だ。僕の近所に南蔵院なんぞういんと云

う寺があるが、あすここに八十ばかりの隠居がいる。

それでこの間の白雨ゆうだちの時寺内じないへ雷らいが落ちて隠居のい

る庭先の松の木を割さいてしまった。ところが和尚おしょう泰

然として平氣だと云うから、よく聞き合わせて見る

とから聾つんぼなんだね。それじゃ泰然たる訳さ。大概そ

んなものさ。独仙も一人で悟っていればいいのだが

、ややともすると人を誘い出すから悪い。現に独仙の御蔭で二人ばかりきちがい気狂にされているからな」

「誰が」

「誰がつて。一人は理野陶然りのとうぜんさ。独仙の御蔭で大におお

禅学に凝り固こまつて鎌倉へ出掛けて行つて、とうと

う出先で気狂になつてしまった。円覚寺えんがくじの前に汽車

の踏切りがあるだろう、あの踏切り内うちへ飛び込んで

レールの上で座禪をするんだね。それで向うから来

る汽車をとめて見せると云う大気焰だいきえんさ。もつとも汽

車の方で留つてくれたから一命だけはとりとめたが

、その代り今度は火に入いつて焼けず、水に入いつて溺おぼ

れぬ金剛不壊こんごうふえのからだだと号して寺内じないの蓮池はすいけへ這入はい

つてぶくぶくあるき廻まわつたもんだ」

「死んだかい」

「その時も幸さいわい、道場の坊主が通りかかって助けてく

れたが、その後東京へ帰かえってから、とうとう腹膜炎

で死んでしまった。死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎

になった原因は僧堂で麦飯や万年漬まんねんづけを食ったせいだ

から、つまるところは間接に独仙が殺したようなも

のさ」

「むやみに熱中するのも善よし悪あししだね」と主人は

ちよつと気味のわるいという顔付をする。

「本当にさ。独仙にやられたものがもう一人同窓中にある」

「あぶないね。誰だい」

たちまちろうばいくん

「立町老梅君さ。あの男も全く独仙にそそのかされ

うなぎ

て鰻が天上するような事ばかり言っていたが、とう

とう君本物になってしまった」

「本物たあ何だい」

「とうとう鰻が天上して、豚が仙人になつたのさ」

「何の事だい、それは」

「八木が独仙なら、立町は豚仙ぶたせんさ、あのくらい食い

意地のきたない男はなかったが、あの食意地と禅坊

主のわる意地が併へいはっ発したのだから助からない。始め

は僕らも気がつかなかったが今から考えると妙な事

ばかり並べていたよ。僕のうちなどへ来て君あの松
の木へカツレツが飛んできやしませんかの、僕の国
では蒲鉾かまぼこが板へ乗って泳いでいますのって、しきり
に警句を吐いたものさ。ただ吐いているうちはよか
ったが君表のどぶどぶへ金きんとんを掘りに行きましたようと
促うながすに至っては僕も降参したね。それから二三日にさんち
するとついに豚仙になって巢鴨へ収容されてしまつ

た。元来豚なんぞが氣狂になる資格はないんだが、
全く独仙の御蔭であすこまで漕ぎ付けたんだね。独
仙の勢力もなかなかえらいよ」

「へえ、今でも巢鴨にいるのかい」

「いるだんじやない。じだいきよう自大狂でだいきえん大氣焰を吐いている

。近頃は立町老梅なんて名はつまらないと云うので

みずか、自ら天道公平と号して、天道の権化ごんげをもつて任じ

ている。すさまじいものだよ。まあちよつと行つて見たまえ」

「天道公平？」

「天道公平だよ。氣狂の癖にうまい名をつけたものだね。時々は孔平こうへいとも書く事がある。それで何でも世人が迷つてゐるからぜひ救つてやりたいと云うので、むやみに友人や何かへ手紙を出すんだね。僕も四

五通貫ったが、中にはなかなか長い奴があつて不足税を二度ばかりとられたよ」

「それじゃ僕の所へ来たのも老梅から来たんだ」

「君の所へも来たかい。そいつは妙だ。やっぱり赤い状袋だろう」

「うん、真中が赤くて左右が白い。一風変つた状袋だ」

「あれはね、わざわざ支那から取り寄せるのだそうだよ。天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間に在^あつて赤しと云う豚仙の格言を示したんだって：

…」

「なかなか因縁^{いんねん}のある状袋だね」

「氣狂だけに大^{おお}に凝^こつたものさ。そうして氣狂にな

つても食意地^{おおい}だけは依然として存しているものと見

えて、毎回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ。

君の所へも何とか云つて来たろう」

「うん、海鼠なまこの事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだったからね。もつともだ。それから？」

「それから河豚ふぐと朝鮮仁参ちようせんになじんか何か書いてある」

「河豚と朝鮮仁参の取り合せは旨うまいね。おおかた河

豚を食つて中^{あた}つたら朝鮮仁参を煎^{せん}じて飲めとでも云うつもりなんだろう」

「そうでもないようだ」

「そうでなくても構わないさ。どうせ氣狂だもの。それっきりかい」

「まだある。苦沙弥先生御茶でも上がれと云う句がある」

「アハハハ御茶でも上がれはきびし過ぎる。それで
おい

大に君をやり込めたつもりに違ない。大出来だ。天

道公平君万歳だ」と迷亭先生は面白がつて、大に笑

い出す。主人は少からざる尊敬をもつて反覆読誦し
どくしょう

た書翰しょかんの差出人が金箔きんぱくつきの狂人であると知つてか

ら、最前の熱心と苦心が何だか無駄骨のような気が

して腹立たしくもあり、また瘋癲病者ふうてんびょうの文章をさほ

ど心勞して翫味がんみしたかと思うと恥ずかしくもあり、

最後に狂人の作にこれほど感服する以上は自分も多

少神経に異状がありはせぬかとの疑念もあるので、

立腹と、慚愧ざんきと、心配の合併した状態で何だか落ち

つかない顔付をして控ひかえている。

折から表格子をあららかに開けて、重い靴の音が

二た足ほど沓脱くつぬぎに響いたと思ったら「ちよつと頼み

ます、ちよつと頼みます」と大きな声がする。主人

の尻の重いに反して迷亭はまたすこぶる気軽な男で

あるから、御三おさんの取次に出るのも待たず、通れと云

いながら隔ての中の間まを二た足ばかりに飛び越えて

玄関に躍り出した。おど人のうちへ案内も乞わずにつか

つか這入はいり込むところは迷惑のようだが、人のうち

へ這入った以上は書生同様取次を務つとめるからはなは

だ便利である。いくら迷亭でも御客さんには相違ない、その御客さんが玄関へ出張するのに主人たる苦沙弥先生が座敷へ構え込んで動かん法はない。普通の男ならあとから引き続いて出陣すべきはずであるが、そこが苦沙弥先生である。平氣に座布団の上へ尻を落ちつけている。但し落ちつけているのと、落ただちをつけているのとは、その趣は大分だいぶ似ているが、そ

の実質はよほど違う。

玄関へ飛び出した迷亭は何かしきりに弁じていたが、やがて奥の方を向いて「おい御主人ちよつと御足労だが出てくれたまえ。君でなくっちゃ、間に合わない」と大きな声を出す。主人はやむを得ずふところ懐手のままのそりのそりと出てくる。見ると迷亭君は一枚の名刺を握ったまましやがんで挨拶をしている。

すこぶる威嚴のない腰つきである。その名刺には警

よしだとらぞう

視庁刑事巡査吉田虎蔵とある。虎蔵君と並んで立つ

ているのは二十五六の背せいの高い、いなせな唐とう棧ざんずく

めの男である。妙な事にこの男は主人と同じく懷手

をしたまま、無言で突つ立つっている。何だか見たよう

な顔だと思つてよくよく観察すると、見たようななど

ころじやない。この間深夜御来訪になつて山やまの芋いもを

持つて行かれた泥棒君である。おや今度は白昼公然と玄関からおいでになったな。

「おいこの方は刑事巡査でせんだつての泥棒をつらまえたから、君に出頭しろと云うんで、わざわざおいでになつたんだよ」

主人はようやく刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて鄭寧ていねいに御辞儀

をした。泥棒の方が虎蔵君より男振りがいいので、

こっちが刑事だと早合点はやがてんをしたのだろう。泥棒も驚

ろいたに相違ないが、まさか私わたしが泥棒ですよと断わ

る訳にも行かなかつたと見えて、すまして立ってい

る。やはり懐手のままである。もつとも手錠てじょうをはめ

ているのだから、出そうと云つても出る気遣きづかいはない

。通例のものならこの様子でたいいはわかるはず

だが、この主人は当世の人間に似合わず、むやみに役人や警察をありがたがる癖がある。御上おかみの御威光

となると非常に恐しいものと心得ている。もつとも理論上から云うと、巡査なぞは自分達が金を出して番人に雇っておくのだくらいの事は心得ているのだが、実際に臨むといやにへえへえする。主人のおやじはその昔場末の名主であつたから、上の者にびよ

こぴよこ頭を下げて暮した習慣が、因果となつてか
ように子に酬むくつたのかも知れない。まことに氣の毒
な至りである。

巡査はおかしかったと見えて、にやにや笑いなが
ら「あしたね、午前九時までに日本堤にほんづつみの分署まで来
て下さい。——盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云いかけたが、あいにく先生た

いがい忘れている。ただ覚えているのは多々良三平

の山の芋だけである。山の芋などはどうでも構わん

と思ったが、盗難品は……と云いかけてあとが出な

いのはいかにも与太郎よたろうのようで体裁ていさいがわるい。人が

盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれておきな

がら、明瞭の答が出来んのは一人前いちにんまえではない証拠だ

と、思い切って「盗難品は……山の芋一箱」とつけ

た。

泥棒はこの時よほどおかしかったと見えて、下を向いて着物の襟へあごえりを入れた。迷亭はアハハハと笑いながら「山の芋がよほど惜しかったと見えるね」と云った。巡查だけは存外真面目である。

「山の芋は出ないようだがほかの物件はたいがい戻ったようです。——まあ来て見たら分るでしょう。」

それでね、下げ渡したら請書うけしよが入るから、印形いんぎようを忘

れずに持つておいでなさい。――九時までに来なく

つてはいかん。にほんづつみぶんしよ日本堤分署です。――浅草警察署の

管轄かんかつない内の日本堤分署です。――それじゃ、さような

ら」と独りひとで弁じて帰って行く。泥棒君も続いて門

を出る。手が出せないのので、門をしめる事が出来な

いから開け放しのまま行ってしまった。恐れ入りな

がらも不平と見えて、主人は頬をふくらし、ぴしやりと立て切った。

「アハハハ君は刑事を大變尊敬するね。つねにああ云う恭謙きょうけんな態度を持つてるといい男だが、君は巡査だけに鄭寧ていねいなんだから困る」

「だってせつかく知らせて来てくれたんじゃないか

「知らせに来るつたつて、先は商売だよ。当り前にあしらつてりや沢山だ」

「しかしただの商売じゃない」

「無論ただの商売じゃない。探偵と云ういけすかない商売さ。あたり前の商売より下等だね」

「君そんな事を云うと、ひどい目に逢うぜ」

「ハハハそれじゃ刑事の悪口はやめわるくちにしよう。しか

し刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至っては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかって君は泥棒にお辞儀をしたじゃないか」

「いつ？」

「たった今平身低頭へいしんていとうしたじゃないか」

「馬鹿あ云ってら、あれは刑事だね」

「刑事があんななり、をするものか」

「刑事だからあんななり、をするんじゃないか」

「頑固がんこだな」

「君こそ頑固だ」

「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなに懷手ふところなにかして、突立つったっているものかね」

「刑事だつて懷手をしないとは限るまい」

「そう猛烈にやつて来ては恐れ入るがね。君がお辞儀をする間あいつは始終あのままで立っていたのだぜ」

「刑事だからそのくらいの事はあるかも知れんさ」

「どうも自信家だな。いくら云つても聞かないね」

「聞かないさ。君は口先ばかりで泥棒だ泥棒だと云つてるだけで、その泥棒がはいるところを見届けた訳じゃないんだから。ただそう思つて独りひとで強情を張つてるんだ」

迷亭もここにおいてとうてい済度さいどすべからざる男と断念したものと見えて、例に似ず黙つてしまった

。主人は久し振りで迷亭を凹へこましたと思つて大得意である。迷亭から見ると主人の価値は強情を張つただけ下落したつもりであるが、主人から云うと強情を張つただけ迷亭よりえらくなつたのである。世の中にはこんな頓珍漢とんちんかんな事はままある。強情さえ張り通せば勝つた氣でいるうちに、当人の人物としての相場は遥はるかに下落してしまう。不思議な事に頑固の

めんぼく

本人は死ぬまで自分は面目めんぼくを施こしたつもりかなにかで、その時以後人が軽蔑けいべつして相手にしてくれないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのだそうだ。

「ともかくもあした行くつもりかい」

「行くとも、九時までに来いと云うから、八時から出て行く」

「学校はどうする」

「休むさ。学校なんか」と擲^{たた}きつけるように云った

のは壮^{さかん}なものだった。

「えらい勢^{いきおい}だね。休んでもいいのかい」

「いいとも僕の学校は月給だから、差し引^きかれる気

遣^{かい}はない、大丈夫だ」と真直に白状してしまった。

ずるい事もずるいが、単純なことも単純なものだ。

「君、行くのはいいが路を知ってるかい」

「知るものか。車に乗って行けば訳はないだろう」とぶんぶんしている。

「静岡の伯父に譲らざる東京通なるには恐れ入る」「いくらでも恐れ入るがいい」

「ハハハ日本堤分署と云うのはね、君ただの所じゃないよ。よしわら吉原だよ」

「何だ？」

「吉原だよ」

「あの遊廓のある吉原か？」

「そうさ、吉原と云やあ、東京に一つしかないやね
。 どうだ、行つて見る気かい」と迷亭君またからか
いかける。

主人は吉原と聞いて、そいつはと少々しゅんじゅん逡巡の体で

あつたが、たちまち思い返して「吉原だろうが、遊廓だろうが、いったん行くと云つた以上はきつと行く」と入らざるところに力味りきんで見せた。愚人は得てこんなところに意地を張るものだ。

迷亭君は「まあ面白かろう、見て来たまえ」と云

つたのみである。一波瀾ひとはらんを生じた刑事事件はこれで

ひとまずひとまず落着らくちやくを告げた。迷亭はそれから相変らず駄弁

を弄ろうして日暮れ方、あまり遅くなると伯父おこに怒られ
ると云つて歸つて行つた。

迷亭が歸つてから、そこそこに晩飯をすまして、

また書齋へ引き揚げた主人は再び拱手きょうしゅして下しものよう
に考え始めた。

「自分が感服して、大おおに見習おおいおうとした八木独仙君
も迷亭の話しによつて見ると、別段見習うにも及ば

ない人間のようにである。のみならず彼の唱道すると

ころの説は何だか非常識で、迷亭の云う通り多少瘋ふう

てんてき

癲的系統に属してもおりそうだ。いわんや彼は歴乎れつき

とした二人の氣狂きちがいの子分を有している。はなはだ危

険である。滅多めったに近寄ると同系統内に引き摺ひずり込ま

れそうである。自分が文章の上において驚嘆の余よ、

これこそ大見識を有している偉人に相違ないと思い

てんとうこうへいことじつみようちまちろうばい

込んだ天道公平事實名立町老梅は純然たる狂人であ

って、現に巢鴨の病院に起居している。迷亭の記述

が棒大のざれ言にもせよ、彼が瘋癲院中ふうてんいんに盛名を擅ほしい

みずか

ままにして天道の主宰をもつて自ら任ずるは恐らく

事實であろう。こう云う自分もことによると少々ご

ざっているかも知れない。同氣相求め、同類相集ま

ると云うから、氣狂の説に感服する以上は——少な

くともその文章言辞に同情を表する以上は——自分
もまた氣狂に縁の近い者であるだろう。よし同型中
に鑄化せられんでも軒を比ちゆうかべて狂人と隣り合ならせに居きよ
をトぼくするとすれば、境の壁を一重打ち抜いていつの
間まにか同室内に膝を突き合せて談笑する事がないと
も限らん。こいつは大變だ。なるほど考えて見ると
このほどじゆうから自分の腦の作用は我ながら驚く

くらい奇上きじょうに妙みょうを点じ變傍へんぼうに珍ちんを添えている。脳漿のうしよ

ういつせき

一勺の化学的變化はとにかく意志の動いて行為とな

るところ、発して言辞と化する辺あたりには不思議にも中

庸を失した点が多い。舌上ぜつじょうに竜泉りゅうせんなく、腋下えきかに清風せいふう

を生しょうぜざるも、齒根しこんに狂臭きやうしゅうあり、筋頭きんとうに瘋味ふうみあるを

いかんせん。いよいよ大變だ。ことによるともうす

でに立派な患者になつていゝるのではないかしらん。

まだ幸に人を傷けたり、世間の邪魔になる事をし出

さいわい

きずつ

かささんからやはり町内を追払われずに、東京市民と

して存在しているのではなかろうか。こいつは消極

の積極のと云う段じゃない。まず脈搏みやくはくからして検査

しなくてはならん。しかし脈には変りはないようだ

。頭は熱いかしらん。これも別に逆上の気味でもな

い。しかしどうも心配だ。」

「こう自分と氣狂きちがいばかりを比較して類似の点ばかり

勘定しては、どうしても氣狂の領分を脱する事は出来そうにもない。これは方法がわるかった。氣狂を標準にして自分をそっちへ引きつけて解釈するからこんな結論が出るのである。もし健康な人を本位にしてその傍そばへ自分を置いて考えて見たらあるいは反対の結果が出るかも知れない。それにはまず手

近から始めなくてはいかん。第一に今日来たフロツクコートコートの伯父さんはどうだ。心をどこに置こうぞ……あれも少々怪しいようだ。第二に寒月はどうだ。朝から晩まで弁当持参で球たまばかり磨いている。これぼうぐも棒組だ。第三にと……迷亭？ あれはふざけ廻るのを天職のように心得ている。全く陽性の氣狂に相違ない。第四はと……金田の妻君。あの毒惡な根こん

性は全く常識をはずれている。純然たる氣じるしに

極つてゐる。第五は金田君の番だ。金田君には御目に

懸つた事はないが、まずあの細君を恭しくおつ立て

て、きんしつ琴瑟調和しているところを見ると非凡の人間と

見立てて差支さしつかえあるまい。非凡は氣狂の異名いみようである

から、まずこれも同類にしておいて構わない。それ

からと、——まだあるある。落雲館の諸君子だ、年

齡から云うとまだ芽生えだが、躁狂そうきょうの点においては

一世を空むなしゅうするに足る天晴あっぱれな豪ごうのものである。

こう数え立てて見ると大抵のものは同類のようである。案外心丈夫になつて来た。ことによると社会は

みんな氣狂の寄り合かも知れない。氣狂が集合して

鎬しのぎを削けずつてつかみ合い、いがみ合い、罵ののり合い、奪

い合つて、その全体が団体として細胞のように崩くずれ

たり、持ち上ったり、持ち上ったり、崩れたりして暮して行くのを社会と云うのではないか知らん。その中で多少理窟りくつがわかつて、分別のある奴はかえつて邪魔になるから、瘋癲院ふうてんいんというものを作つて、こへ押し込めて出られないようにするのではないかしらん。すると瘋癲院に幽閉されているものは普通の人で、院外にあばれているものはかえつて氣狂で

ある。氣狂も孤立している間はどこまでも氣狂にされてしまふが、団体となつて勢力が出ると、健全の人間になつてしまふのかも知れない。大きな氣狂が金力や威力を濫用らんようして多くの小氣狂しょうきちがいを使役しえきして乱暴を働いて、人から立派な男だと云われている例は少ない。何が何だか分らなくなつた」

以上は主人が当夜けいけい瑩々たる孤灯もとの下で沈思熟慮し

た時の心的作用をありのままに描き出したものである。えが

る。彼の頭脳の不透明なる事はここにも著るしくあ

らわれている。彼はカイゼルに似た八字髯を蓄うる。はちじひげ　たくわ

にもかかわらず狂人と常人の差別さえなし得ぬくら

いの凡倉ぼんくらである。のみならず彼はせつかくこの問題

を提供して自己の思索力に訴えながら、ついに何等

の結論に達せずしてやめてしまった。何事によらず

彼は徹底的に考える脳力のない男である。彼の結論

ぼうばく

の茫漠として、彼の鼻孔から迸出する朝日の煙のご

ほうしゅつ

とく、捕捉ほそくしがたきは、彼の議論における唯一の特

色として記憶すべき事実である。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中を

かく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れ
んが、このくらいな事は猫にとって何でもない。吾

輩はこれで読心術を心得ている。いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。ともかくも心得ている。人間の膝ひざの上へ乗って眠っているうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣けごろもをそつと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電気が起つて彼の腹の中のいきさつが手にとるように吾輩の心眼に映ずる。せんだってなどは主人がやさしく吾輩の頭を撫なで廻し

ながら、突然この猫の皮を剥はいでちやんちやんにし

たらさぞあたたかであろうと飛んでもない了見りようけんを

むらむらと起したのを即座に気取けどつて覚えずひやつ

とした事さえある。怖こわい事だ。当夜主人の頭のなか

に起つた以上の思想もそんな訳合わけあいで幸さいわいにも諸君にご

報道する事が出来るように相成つたのは吾輩の大おおに

栄誉とするところである。但ただし主人は「何が何だか

分らなくなつた」まで考えてそのあとはぐうぐう寝
てしまつたのである、あすになれば何をどこまで考
えたかまるで忘れてしまふに違ない。向後こうごもし主人
が氣狂きちがいについて考える事があるとすれば、もう一返ぺん
出直して頭から考え始めなければならぬ。そうする
と果してこんな徑路けいろを取つて、こんな風に「何が何
だか分らなくなる」かどうか保証出来ない。しか

し何返考え直しても、何条なんじようの径路をとって進もうとも、ついに「何が何だか分らなくなる」だけはたしかである。

十

「あなた、もう七時ですよ」と襖越ふすまこしに細君が声を

掛けた。主人は眼がさめているのだから、寝ているのだから、向うむきになつたぎり返事もしない。返事をしないのはこの男の癖である。ぜひ何とか口を切らなければならぬ時はうん、と云う。このうんも容易な事では出てこない。人間も返事がうるさくなるくらい無精ぶしようになると、どこともなく趣おもむきがあるが、こんな人に限つて女に好かれた試しがない。現在連れ添う

細君ですら、あまり珍重しておらんようだから、その他は推^おして知るべしと云つても大した間違はなからう。親兄弟に見離され、あかの他人の傾城^{けいせい}に、可愛がらりようはずがない、とある以上は、細君にさえ持てない主人が、世間一般の淑女に氣に入るはずがない。何も異性間に不人望な主人をこの際ことさらに暴露^{ばくろ}する必要もないのだが、本人において存外

な考え違をして、全く年廻りのせいで細君に好かれないのだなどと理窟をつけていると、迷まよひの種であるから、自覚の一助にもなろうかと親切心からちよつと申し添えるまでである。

言いつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方がその注意を無にする以上は、向むかうをむいてうん、さんさえ発せざる以上は、その曲きょくは夫にあつて、妻に

あらずと論定したる細君は、遅くなつても知りませ
んよと云う姿勢で箒ほうきとはたき、かつ担いで書斎の方へ行
つてしまった。やがてぱたぱた書斎中を叩たたき散らす
音がするのは例によつて例のごとき掃除を始めたの
である。一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のた
めか、掃除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところで
ないから、知らん顔をしていれば差さし支つかえないよう

なもの、ここの細君の掃除法のごときに至つては
すこぶる無意義のものと云わざるを得ない。何が無
意義であるかと云うと、この細君は単に掃除のため
に掃除をしているからである。はたきを一通り障子しょうじ
へかけて、箒を一応畳の上へ滑すべらせる。それで掃除
は完成した者と解釈している。掃除の原因及び結果
に至つては微塵みじんの責任だに背負つておらん。かるが

故に奇麗な所は毎日奇麗だが、ごみのある所、ほこりの積っている所はいつでもごみが溜たまってほこりが積こくさくっている。告朔きようしやくの餼羊きようようと云う故事こじもある事だから、これでもやらんよりはましかも知れない。しかしやっても別段主人のためにはならない。ならないところを毎日毎日御苦勞にもやるところが細君のえらいところである。細君と掃除とは多年の習慣で、器

械的の連想をかたちづくつて頑がんとして結びつけられているにもかかわらず、掃除の實じつに至つては、妻君がいまだ生れざる以前のごとく、はたきと箒が発明せられざる昔のごとく、毫ごうも挙あがつておらん。思うにこの両者の関係は形式論理学の命題における名辞のごとくその内容のいかんにかかわらず結合せられたものである。

吾輩は主人と違って、元来が早起の方だから、この時すでに空腹になつて参つた。とうていうちのもののさえ膳ぜんに向わぬさきから、猫の身分をもつて朝めに有りつける訳のものではないが、そこが猫の浅ましさに、もしや煙の立つた汁の香においが鮑貝あわびがいの中から、うまそうに立ち上つておりはすまいかと思うと、じつとしていられなくなつた。はかない事を、はか

ないと知りながら頼みにするときには、ただその頼みだけを頭の中に描いて、動かずに落ちついている方が得策であるが、さてそうは行かぬ者で、心の願と實際が、合うか合わぬか是非とも試験して見たくなる。試験して見れば必ず失望するにきまつてゐる事ですら、最後の失望を自ら事実の上に受取るまでは承知出来んものである。みずか吾輩はたまらなくなつて台所

へ這出した。はいだまずへっ、つ、いの影にある鮑貝あわびがいの中を覗のぞ

いて見ると案に違たがわず、夕べ舐なめ尽したまま、闐然げきぜん

として、怪しき光が引窓を洩もる初秋の日影にかがや

いている。御三おさんはすでに炊たき立たての飯を、御櫃おはちに移し

て、今や七輪しちりんにかけた鍋なべの中をかきまぜつつある。

釜かまの周囲には沸わき上がって流れだした米の汁が、か

さかさいくすじに幾条となくこびりついて、あるものは吉野

紙を貼^はりつけたごとくに見える。もう飯も汁も出来

ているのだから食わせてもよさそうなものだと思つた。こんな時に遠慮するのはつまらない話だ、よし

んば自分の望通りにならなくたって元々で損は行かないのだから、思い切って朝飯の催促をしてやろ

う、いくら居候^{いそうろう}の身分だつてひもじいに変りはない

。とさえ定めた吾輩はにやあにやあと甘えるごとく

、訴うるがごとく、あるいはまた怨えんずるがごとく泣

いて見た。御三はいつこう顧みる景色けしきがない。生れ

ついでのお多角たかくだから人情に疎うといのはとうから承知

の上だが、そこをうまく泣き立てて同情を起させる

のが、こつちの手際てぎわである。今度はにやごにやごと

やって見た。その泣き声は吾ながら悲壯の音おんを帯び

て天涯てんがいの遊子ゆうしをして断腸の思あらしむるに足ると信

ずる。御三は恬^{てん}として顧^{かえり}みない。この女は聾^{つんぼ}なのか

も知れない。聾では下女が勤まる訳^{わけ}がないが、こと

によると猫の声だけには聾なのだろう。世の中には

しきもう

色盲^{しきもう}というのがあって、当人は完全な視力を具えて

いるつもりでも、医者から云わせると片輪^{かたわ}だそうだ

が、この御三は声盲^{せいもう}なのだろう。声盲だつて片輪に

違^{ちが}ひない。片輪のくせにいやに横風^{おうふう}なものだ。夜中

なぞでも、いくらこつちが用があるから開けてく
ろと云つても決して開けてくれた事がない。たまに
出してくれたと思うと今度はどうしても入れてくれ
ない。夏だつて夜露は毒だ。いわんや霜しもにおいてを
やで、軒下に立ち明かして、日の出を待つのは、ど
んなに辛いつらかとうてい想像が出来るものではない。

この間しめ出しを食つた時なぞは野良犬の襲撃を蒙こうむ

つて、すでに危うく見えたところを、ようやくの事で物置の家根^{やね}へかけ上^{あが}つて、終夜顫^{ふる}えつづけた事さえある。これ等は皆御三の不人情から胚胎^{はいたい}した不都合である。こんなものを相手にして鳴いて見せたつて、感応^{かんのう}のあるはずはないのだが、そこが、ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに恋のふみと云うくらいだから、たいていの事ならやる気になる。にやごお

うにやごおうと三度目には、注意を喚起するために
ことさらに複雑なる泣き方をして見た。自分ではベ
トヴェンのシンフォニーにも劣らざる美妙の音おんと確
信しているのだが御三には何等の影響も生じないよ
うだ。御三は突然膝をついて、揚げ板を一枚はね除の
けて、中から堅炭の四寸ばかり長いのを一本つかみ
出した。それからその長い奴を七輪しちりんの角でぽんぽん

と敲^{たた}いたら、長いのが三つほどに砕けて近所は炭の

粉で真黒くなつた。少々は汁の中へも這^{はい}入つたらし

い。御三はそんな事に頓着する女ではない。直ちに

くだけたる三個の炭を鍋^{なべ}の尻から七輪の中へ押し込

んだ。とうてい吾輩のシンフォニーには耳を傾けそ

うにもない。仕方がないから悄然^{しょうぜん}と茶の間の方へ引

きかえそうとして風呂場の横を通り過ぎると、ここ

は今女の子が三人で顔を洗つてゐる最中で、なかなか

はんじょう

繁昌している。

顔を洗うと云つたところで、上の二人が幼稚園の

生徒で、三番目は姉の尻についてさえ行かれないく

らい小さいのだから、正式に顔が洗えて、器用に御

化粧が出来るはずがない。一番小さいのがバケツの

中から濡れ雑巾ぬぞうきんを引きずり出してしきりに顔中撫なで

廻わしている。雑巾で顔を洗うのは定めし心持ちが
わるかろうけれども、地震がゆるたびにおも、ちろい
わと云う子だからこのくらいの事はあつても驚ろく
に足らん。ことによると八木独仙君より悟っている
かも知れない。さすがに長女は長女だけに、姉をも
みずか
つて自ら任じているから、うがい茶碗をからからか
んと抛出してほうりだ「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾

をとりにかかる。坊やちゃんもなかなか自信家だから容易に姉の云う事なんか聞きそうにしない。「いやーよ、ばぶ」と云いながら雑巾を引っ張り返した。このばぶ^ぶなる語はいかなる意義で、いかなる語源を有しているか、誰も知ってるものがない。ただこの坊やちゃんが^{かんしやく}癩癩を起した時に折々ご使用になるばかりだ。雑巾はこの時姉の手と、坊やちゃんの手

で左右に引つ張られるから、水を含んだ真中からぽたぽた^{しずく}雫が垂^たれて、容赦なく坊やの足にかかる、足だけなら我慢するが膝のあたりがしたたか濡れる。

坊やはこれでも元禄^{げんろく}を着ているのである。元禄とは

何の事だとだんだん聞いて見ると、中形^{ちゆうがた}の模様なら

何でも元禄だそうだ。一体だれに教わって来たものか分らない。「坊やちゃん、元禄が濡れるから御よ

しなさい、ね」と姉が洒落しやれた事を云う。その癖くせこの姉はついこの間まで元禄と双六すごろくとを間違えていた物識ものしりである。

元禄で思い出したからついでに喋舌しゃべってしまおうが

この子供の言葉ちがいをやる事は夥おびただしいもので、

折々人を馬鹿にしたような間違を云ってる。火事で

茸きのこが飛んで来たり、御茶おちやの味噌みその女学校へ行ったり

恵比寿、台所と並べたり、或る時などは「わたし

えびす
だいどころ
わらだな

や藁店の子じやないわ」と云うから、よくよく聞き

ただ
うらだな

糺して見ると裏店と藁店を混同していたりする。主

人はこんな間違を聞くたびに笑っているが、自分が

学校へ出て英語を教える時などは、これよりも滑稽

ごびゆう

な誤謬を真面目になつて、生徒に聞かせるのだらう

坊やは——当人は坊やとは云わない。いつでも坊
ばと云う——元禄が濡れたのを見て「元^{げん}ど、こがべた、
い、」と云つて泣き出した。元禄が冷たくては大変だ
から、御三が台所から飛び出して来て、雑巾を取上
げて着物を拭^ふいてやる。この騒動中比較的静かであ
ったのは、次女のすん子嬢である。すん子嬢は向う
むきになつて棚の上からころがり落ちた、お白粉^{しろい}の

瓶びんをあけて、しきりに御化粧ほどこしを施ほどこしている。第一に

突つ込んだ指をもつて鼻の頭をキューと撫なでたから

豎たてに一本白い筋が通つて、鼻のありかがいささか分ぶん

明みようになつて来た。次に塗りつけた指を転じて頬の上

を摩擦したから、そこへもつてきて、これまた白い

かたまりが出来上つた。これだけ装飾がととのつた

ところへ、下女がはいつて来て坊ばの着物を拭いた

ついでに、すん子の顔もふいてしまった。すん子は少々不満の体^{てい}に見えた。

吾輩はこの光景を横に見て、茶の間から主人の寢室まで来てもう起きたかとひそかに様子をうかがつて見ると、主人の頭がどこにも見えない。その代り十文半の甲の高い足が、夜具の裾^{すそ}から一本食^はみ出し

ている。頭が出ていては起こされる時に迷惑だと思

つて、かくもぐり込んだのであろう。亀の子のよう
な男である。ところへ書斎の掃除をしてしまった妻
君がまた箒ほうきとはたきを担かついでやってくる。最前さいぜんのよ
うに襖ふすまの入口から

「まだお起きにならないのですか」と声をかけたま
ま、しばらく立って、首の出ない夜具を見つめてい
た。今度も返事がない。細君は入口から二歩ふたあしばかり

進んで、箒をとんと突きながら「まだなんですか、あなた」と重ねて返事を承わる。この時主人はすでに目が覚め^さている。覚めているから、細君の襲撃にそなうるため、あらかじめ夜具の中に首もろとも立て籠^{こも}ったのである。首さえ出さなければ、見逃^{みのが}してくれる事もあるかと、詰まらない事を頼みにして寝ていたところ、なかなか許しそうもない。しかし

第一回の声は敷居の上で、少くとも一間の間隔があったから、まず安心と腹のうちで思っていると、とんと突いた箒が何でも三尺くらいの距離に追つていたにはちよつと驚ろいた。のみならず第二の「まだなんですか、あなた」が距離においても音量においても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなかまで聞えたから、こいつは駄目だと覚悟をして、小さな声で

うんと返事をした。

「九時までにはいらっしやるのでしよう。早くなさいと間に合いませんよ」

「そんなに言わなくても今起きる」と夜着よぎの袖口そでぐちか

ら答えたのは奇観である。妻君はいつでもこの手を食って、起きるかと思つて安心してゐると、また寝込まれつけているから、油断は出来ないと「さあお

起きなさい」とせめ立てる。起きると云うのに、な
お起きろと責めるのは気に食わんものだ。主人のご
とき我儘者にはなわがままものお気に食わん。ここにおいてか主
人は今まで頭から被かぶっていた夜着を一度に跳はねのけ
た。見ると大きな眼を二つとも開あいている。

「何だ騒々しい。起きると云えば起きるのだ」

「起きるとおっしやってもお起きなさらんじやあり

ませんか」

「誰がいつ、そんな嘘うそをついた」

「いつでもですわ」

「馬鹿を云え」

「どっちが馬鹿だか分りやしない」と妻君ぷんとして箒を突いて枕元に立っているところは勇ましかつた。この時裏の車屋の子供、八っちゃんが急に大き

な声をしてワーと泣き出す。八っちゃんおこは主人が怒り出しさえすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命ぜられるのである。かみさんは主人が怒るたんびに八っちゃんを泣かして小遣こづかいになるかも知れんが、八っちゃんこそいい迷惑だ。こんな御袋おふくろを持つたが最後朝から晩まで泣き通しに泣いていなくて
はならない。少しはこの辺の事情を察して主人も少

々怒るのを差し控^{ひか}えてやったら、八っちゃんの寿命

が少しは延びるだろうに、いくら金田君から頼まれ

たって、こんな愚^ぐな事をするのは、天道公平君より

もはげしくおいでになっている方だと鑑定してもよ

からう。怒るたんびに泣かせられるだけなら、まだ

余裕もあるけれども、金田君が近所のゴロツキを傭^{やと}

つて今^{いま}戸焼^{どやき}をきめ込むたびに、八っちゃん泣かね

ばならのである。主人が怒るか怒らぬか、まだ判然しないうちから、必ず怒るべきものと予想して、早手廻しに八っちゃん泣いているのである。こうなると主人が八っちゃんだか、八っちゃんが主人だか判然しなくなる。主人にあてつけるに手数てすうは掛らない、ちよつと八っちゃんに剣突けんつくを食わせれば何の苦もなく、主人の横よこつ面つらを張った訳になる。昔むかし西

洋で犯罪者を所刑にする時に、本人が国境外に逃亡

して、捕えられん時は、偶像をつくつて人間の代り

に火あぶりにしたと云うが、彼等のうちにも西洋の

故事に通曉する軍師があると見えて、うまい計略を

授けたものである。落雲館と云い、八っちゃんつうぎょうの御

袋と云い、腕のきかぬ主人にとっては定めし苦手にがてで

あろう。そのほか苦手はいろいろある。あるいは町

内中ことごとく苦手かも知れんが、ただいまは関係がないから、だんだん成し崩しに紹介致す事にする。

八っちゃんかんしやくの泣き声を聞いた主人は、朝っばらからよほど癩癩かんしやくが起つたと見えて、たちまちがばと布ふ

団とんの上に起き直った。こうなると精神修養も八木独仙も何もあつたものじゃない。起き直りながら両方

の手でゴシゴシゴシと表皮のむけるほど、頭中引き

搔^かき廻す。一カ月も溜^かつてゐるフケは遠慮なく、頸^{くび}

筋^{すじ}やら、寝巻の襟^{えり}へ飛んでくる。非常な壯觀である

。髯^{ひげ}はどうだと見るとこれはまた驚ろくべく、ぴん

然とおっ立っている。持主が怒^{おこ}っているのに髯だけ

落ちついていてはすまないとでも心得たものか、一

本一本に癩癬^{かんしやく}を起して、勝手次第の方角へ猛烈なる

勢をもつて突進している。これとてもなかなかの見^み

物である。^{もの}昨日^{きのう}は鏡の手前もある事だから、おとな

しく独^{ドイツ}乙皇帝陛下の真似をして整列したのであるが

、一晩寝れば訓練も何もあつた者ではない、直ちに

本来の面目に帰つて思い思いの出^いで立^{たち}に戻るのであ

る。あたかも主人の一夜作りの精神修養が、あくる

日になると拭^{ぬぐ}うがごとく奇麗に消え去つて、生れつ

やちよてき

いての野猪的本領が直ちに全面を暴露し来るのとき

般である。こんな乱暴な髯をもっている、こんな乱暴な男が、よくまあ今まで免職にもならず、教師が勤まったものだと思つと、始めて日本の広い事がわかる。広ければこそ金田君や金田君の犬が人間として通用しているのもあろう。彼等が人間として通用する間は主人も免職になる理由がないと確信して

いるらしい。いざとなれば巢鴨へ端書はがきを飛ばして天

道公平君に聞き合せて見れば、すぐ分る事だ。

この時主人は、昨日きのう紹介した混沌こんとんたる太古の眼を

精一杯に見張つて、向うの戸棚をきつと見た。これ

は高さ一間を横に仕切つて上下共各二枚の袋戸おのおのをは

めたものである。下の方の戸棚は、布団ふとんの裾すそとすれ

すれの距離にあるから、起き直つた主人が眼をあき

さえすれば、天然自然ここに視線がむくように出来
ている。見ると模様を置いた紙がところどころ破れ
て妙な腸が^{はらわた}あからさまに見える。腸にはいろいろな
のがある。あるものは活版摺^{かっぱんずり}で、あるものは肉筆で
ある。あるものは裏返しで、あるものは逆さまであ
る。主人はこの腸を見ると同時に、何がかいてある
か読みたくなつた。今までは車屋のかみさんでも捕^{つらま}

えて、鼻づらを松の木へこすりつけてやろうくらい

にまで怒おこっていた主人が、突然この反古紙ほごがみを読んで

見たくなるのは不思議のようであるが、こう云う陽

性の癩癩持ちには珍らしくない事だ。小供が泣くと

きに最中もなかの一つもあてがえばすぐ笑うと一般である

。主人が昔むかし去る所の御寺に下宿していた時、襖ふすま一

と重えを隔てて尼が五六人いた。尼などと云うものは

元来意地のわるい女のうちでもつとも意地のわるいものであるが、この尼が主人の性質を見抜いたものと見えて自炊の鍋なべをたたきながら、今泣いた鳥がもう笑った、今泣いた鳥がもう笑ったと拍子を取って歌ったそうだ、主人が尼が大嫌になつたのはこの時からだと云うが、尼は嫌きらひにせよ全くそれに違ない。主人は泣いたり、笑ったり、嬉しがり、悲しが

ったり人一倍もする代りにいずれも長く続いた事がない。よく云えば執着がなくて、心機しんきがむやみに転

ずるのだろうが、これを俗語に翻訳してやさしく云

えば奥行のない、薄うすっ片ぺらの、鼻はなっ張はりだけ強いだだっ

子である。すでにだだっ子である以上は、喧嘩をす

る勢で、むつくと刎はね起きた主人が急に気をかえて

袋戸ふくろどの腸を読みにかかるのももつともと云わねばな

るまい。第一に眼にとまったのが伊藤博文の逆さか立だ

ちである。上を見ると明治十一年九月廿八日とある

。韓かん国統監もこの時代から御布令おふれの尻尾しっぽを追っ懸け

てあるいていたと見える。大将この時分は何をして

いたんだらうと、読めそうにないところを無理によ

むと大蔵卿おおくらぎょうとある。なるほどこらいものだ、いくら

逆か立ちしても大蔵卿である。少し左の方を見ると

今度は大蔵卿横になつて昼寝をしている。もつともだ。逆か立ちではそう長く続くきづかい氣遣はない。下の方に大きな木板で汝はと二字だけ見える、あとが見たもくばんいがあいにく露出しておらん。次の行には早くの二字だけ出ている。こいつも読みたいがそれぎれで手掛りがない。もし主人が警視庁の探偵であつたら、人のものでも構わずに引っぺがすかも知れない。探

偵と云うものには高等な教育を受けたものがないから事実を挙げるためには何でもする。あれは始末に行^ゆかないものだ。願^{ねが}くばもう少し遠慮^わをしてもらいたい。遠慮をしなければ事實は決して挙げさせない事にしたらよからう。聞^きくところによると彼等は羅^ら織^{しき}虚^き構^{こう}をもつて良民を罪に陥^{おとし}れる事さえあるそうだ。
良民が金を出して雇^こつておく者が、雇主を罪にす

るなどときてはこれまた立派な氣狂きちがいである。次に眼

を転じて真中を見ると真中には大分県おおいたけんが宙返りをし

ている。伊藤博文でさえ逆か立ちをするくらいだか

ら、大分県が宙返りをするのは当然である。主人は

ここまで読んで来て、双方へ握り拳にぎこぶしをこしらえて、

これを高く天井に向けて突きあげた。あくびの用意

である。

このあくびがまた鯨の遠吠くじらとおぼえのようにすこぶる変調

を極きわめた者であつたが、それが一段落を告げると、

主人はそのそと着物をきかえて顔を洗いに風呂場へ出掛けて行つた。待ちかねた細君はいきなり布団ふとん

をまくつて夜着よぎを畳んで、例の通り掃除をはじめ

掃除が例の通りであるごとく、主人の顔の洗い方

も十年一日のごとく例の通りである。先日紹介をし

たごとく依然としてがーがー、げーげーを持続して

いる。やがて頭を分け終つて、西洋手拭てぬぐいを肩へかけ

て、茶の間へ出御しゅつぎよになると、超然として長火鉢の横

に座を占めた。長火鉢と云うと櫂けやきの如輪木じよりんもくか、銅あかの

総落そうおとしで、洗髪あらいがみの姉御が立膝で、長煙管ながぎせるを黒柿くろがきの縁ふち

へ叩きつける様を想見する諸君もないとも限らない

が、わが苦沙弥先生くしゃみの長火鉢に至つては決して、そ

んな意気なものではない、何で造ったものか素人しろうとに

けんとう

は見当のつかんくらい古雅なものである。長火鉢は

しんしょう

拭き込んでてらてら光るところが身上なのだが、こ

しろもの

の代物は櫨きりか桜か桐か元来不明瞭な上に、ほとんど

ふきん

布巾をかけた事がないのだから陰気で引き立たざる

おびただ

事夥しい。こんなものをどこから買つて来たかと云

おぼえ

うと、決して買った覚えはない。そんなら貰ったかと

聞くと、誰もくれた人はないそうだ。しからは盗ん

だのかと糺ただして見ると、何だかその辺が曖昧あいまいである

。昔し親類に隠居がおつて、その隠居が死んだ時、

当分留守番を頼まれた事がある。ところがその後一

戸を構えて、隠居所を引き払う際に、そこで自分の

もののように使っていた火鉢を何の気もなく、つい

持って来てしまったのだそうだ。少々たちが悪いよ

うだ。考えるとたちが悪いようだがこんな事は世間に往々ある事だと思う。銀行家などは毎日人の金をあつかいつけているうちに人の金が、自分の金のように見えてくるそうだ。役人は人民の召使である。

用事を弁じさせるために、ある権限を委托した代理人のようなものだ。ところが委任された権力を笠に

かさ

着て毎日常務を処理していると、これは自分が所有

している権力で、人民などはこれについて何らの喙くちばしを容いる理由がないものだと狂ってくる。こんな人が世の中に充満している以上は長火鉢事件をもつて主人に泥棒根性があると断定する訳には行かぬ。もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にみんな泥棒根性がある。

長火鉢の傍そばに陣取って、食卓を前に控ひかえたる主人

の三面には、先刻さつきぞうきん雑巾で顔を洗った坊おちやばと御茶の味、

噲おの学校へ行くとんしろいびん子と、お白粉しろいびん鑿おに指を突き込ん

だすおん子が、すでに勢揃せいぞろいをして朝飯を食っている。

主人は一応この三女子の顔を公平に見渡した。とん

子の顔は南蛮鉄なんばんてつの刀の鍰つばのような輪廓りんかくを有している

。すん子も妹だけに多少姉の面影おもかげを存りゆうきゆうぬりして琉球塗りゆうきゆうぬりの

朱盆しゅぼんくらいな資格はある。ただ坊おばに至ひとっては独り

異彩を放つて、面長おもながに出来上っている。但ただし豎たてに長

いのなら世間にその例もすくなくないが、この子のは横に長いのである。いかに流行が変化し易やすくつた

って、横に長い顔がはやる事はなからう。主人は自

分の子ながらも、つくづく考える事がある。これで

も生長しなければならぬ。生長するところではない

、その生長の速すみやかなる事はぜんでら禅寺の筍がたけのこ若竹に變化す

る勢で大きくなる。主人はまた大きくなつたなと思

うたんびに、後ろうしから追手おってにせまられるような気が

してひやひやする。いかに空漠くうばくなる主人でもこの三

令嬢が女であるくらいは心得ている。女である以上

はどうにか片付けなくてはならんくらいも承知して

いる。承知しているだけで片付ける手腕のない事も

自覚している。そこで自分の子ながらも少しく持て

余しているところである。持て余すくらいなら製造しなけばいいのだが、そこが人間である。人間の定義を云うとほかに何にもない。ただ入^いらざる事を捏造^{ねつぞう}して自ら苦しんでいる者だと云えば、それで充分だ。

さすがに子供はえらい。これほどおやじが処置に窮しているとは夢にも知らず、楽しそうにご飯をた

べる。ところが始末におえないのは坊ばである。坊ばは当年とつて三歳であるから、細君が氣を利かし
て、食事のときには、三歳然たる小形の箸はしと茶碗を
あてがうのだが、坊ばは決して承知しない。必ず姉
の茶碗を奪い、姉の箸を引つたくつて、持ちあつか
いにく悪い奴を無理に持ちあつかっている。世の中を見
渡すと無能無才の小人ほど、いやにのさばり出てがら

にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全くこの坊ば時代から萌芽ほうがしているのである。その因よつて来きたるところはかくのごとく深いのだから、決して教育や薰陶くんとうで癒なおせる者ではないと、早くあきらめてしまふのがいい。

坊ばは隣りから分捕ぶんどった偉大なる茶碗と、長大なる箸を専有して、しきりに暴威ほしいままを擅しにしている。使

いこなせない者をむやみに使おうとするのだから、

いきおい たくま

勢暴威を逞しくせざるを得ない。坊ばはまず箸の根

元を二本いっしよに握ったままうんと茶碗の底へ突

込んだ。茶碗の中は飯が八分通り盛り込まれて、そ

の上に味噌汁が一面に漲みなぎっている。箸の力が茶碗へ

伝わるやいなや、今までどうか、こうか、平均を保

っていたのが、急に襲撃を受けたので三十度ばかり

傾いた。同時に味噌汁は容赦なくだらだらと胸のあたりへこぼれだす。坊ばはそのくらいな事で辟易^{へきえき}する訳がない。坊ばは暴君である。今度は突き込んだ箸を、うんと力一杯茶碗の底から刎^はね上げた。同時に小さな口を縁^{ふち}まで持つて行って、刎^はね上げられた米粒を這^{はい}入るだけ口の中へ受納した。打ち洩^もらされた米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと頬^ほっぺた

と顚あごとへ、やつと掛声をして飛びついた。飛びつき

損じて畳の上へこぼれたものは打算ださんの限りでない。

随分無分別な飯の食い方である。吾輩は謹つつしんで有名

なる金田君及び天下の勢力家に忠告する。公等こうらの他

をあつかう事、坊ばの茶碗と箸をあつかうがごとく

んば、公等こうらの口へ飛び込む米粒は極めて僅少きんしょうのもの

である。必然の勢をもつて飛び込むにあらず、戸迷とまどい

をして飛び込むのである。どうか御再考を煩わした

わづら

い。世故せこにたけた敏腕家にも似合しからぬ事だ。

姉のとん子は、自分の箸と茶碗を坊りやくだつばに掠奪され

て、不相応に小さな奴をもつてさつきから我慢して

いたが、もともと小さ過ぎるのだから、一杯にもつ

た積りでも、あんとあけると三口ほどで食ってしま

う。したがって頻ひんぱん繁に御はちの方へ手が出る。もう

四膳かえて、今度は五杯目である。とん子は御はち

の蓋ふたをあけて大きなしやもじを取り上げて、しばらく

眺ながめていた。これは食おうか、よそうかと迷って

いたものらしいが、ついに決心したものと見えて、

焦こげのなさそうなところを見計ひとつて一掬しやくいしやもじ

の上へ乗せたまでは無難ぶなんであつたが、それを裏返し

て、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶碗にはい入りきらん

飯は塊かたまつたまま畳の上へ転ころがり出した。とん子は

驚ろく景色けしきもなく、こぼれた飯を鄭寧ていねいに拾い始めた

。拾って何にするかと思つたら、みんな御はちの中へ入れてしまった。少しきたないようだ。

坊ばが一大活躍を試みて箸を刎はね上げた時は、ち

ようどとん子が飯をよそいおわ了った時である。さすが

に姉は姉だけで、坊ばの顔のいかにも乱雑なのを見

かねて「あら坊ばちゃん、大変よ、顔が御ぜん粒だ

らけよ」と云いながら、早速坊ばの顔の掃除にとり

かかる。第一に鼻のあたみに寄寓していたのを取払

う。取払って捨てると思のほか、すぐ自分の口のな

かへ入れてしまったのには驚ろいた。それから頬つ

ぺたにかかる。ここには大分群をなして数にしたら

、両方を合せて約二十粒もあつたろう。姉は丹念に

一粒ずつ取っては食い、取っては食い、とうとう妹の顔中にある奴を一つ残らず食ってしまった。この時ただ今まではおとなしく沢庵たくあんをかじっていたすん子が、急に盛り立ての味噌汁の中から薩摩芋さつまいものくずれたのをしゃくい出して、勢よく口の内へ抛り込ほうんだ。諸君も御承知であろうが、汁にした薩摩芋の熱したのほど口中こうちゅうにこたえる者はない。大人おとなですら注

意しないと火傷やけどをしたような心持ちがする。まして

すん子のごとき、薩摩芋に経験とほの乏しい者は無論ろう狼

狽ばいする訳である。すん子はワツと云いながら口中こうちゆうの

芋を食卓の上へ吐き出した。その二三片ぺんがどう云う

拍子か、坊ばの前まですべって来て、ちようどいい

加減な距離でとまる。坊ばは固もとより薩摩芋が大好き

である。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだ

から、早速箸を抛り出して、手攫みにしてむしやむしや食ってしまった。

先刻さつきからこの体ていたらくを目撃していた主人は、一いち

言ごんも云わずに、専心自分の飯を食い、自分の汁を飲

んで、この時はすでに楊枝ようじを使っている最中であつ

た。主人は娘の教育に関して絶体的放任主義を執とる

つもりと見える。今に三人が海老茶式部えびちやしきぶか鼠式部ねずみしきぶか

になつて、三人とも申し合せたように情夫をこしら

しゅっぱん

えて出奔しても、やはり自分の飯を食つて、自分の汁を飲んで澄まして見ているだらう。働きのない事

だ。しかし今の世の働きのあると云う人を拝見する

と、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻つて馬の眼玉

を抜く事と、虚勢を張つて人をおどかす事と、鎌を

かま

かけて人を陥れる事よりほかに何も知らないようだ

おとし

。中学などの少年輩までが見様見真似に、みようみまねこうしな

くては幅が利きかないと心得違ちがいをして、本来なら赤

面してしかるべきのを得々とくとくと履行りこうして未来の紳士だ

と思おもっている。これは働き手と云うのではない。ご

ろつき手と云うのである。吾輩も日本の猫だから多

少の愛国心はある。こんな働き手を見るたびに撲なぐつ

てやりたくなる。こんなものが一人でも殖ふえれば国

家はそれだけ衰える訳である。こんな生徒のいる学校は、学校の恥辱であつて、こんな人民のいる国家は国家の恥辱である。恥辱であるにも関らず、ごろごろ世間にごろついているのは心得がたいと思う。

日本の人間は猫ほどの気概もないと見える。情ない

なさけ

事だ。こんなごろつき手に比べると主人などは遙か

はる

に上等な人間と云わなくてはならん。意気地のない

ところが上等なのである。無能なところが上等なのである。ちよこざい猪口才でないところが上等なのである。

かくのごとく働きのない食い方をもつて、無事に

あさめし

朝食を済ましたる主人は、やがて洋服を着て、車へ

乗って、日本堤分署へ出頭に及んだ。格子こうしをあけた

時、車夫に日本堤という所を知ってるかと聞いたら

、車夫はへへへと笑った。あの遊廓のある吉原の近

。 辺の日本堤だぜと念を押したのは少々滑稽こっけいであつた。

主人が珍らしく車で玄関から出掛け、あとで、妻

君は例のごとく食事を済ませて「さあ学校へおいで

。遅くなりますよ」と催促すると、小供は平気なも

ので「あら、でも今日は御休みよ」と支度したくをする景け

色しきがない。「御休みなもんですか、早くなさい」と

叱しかる

ように言つて聞かせると「それでも昨日きのう、先生

が御休だつて、おつしやつてよ」と姉はなかなか動

じない。妻君もここに至つて多少變に思つたものか

、戸棚から曆こよみを出して繰り返して見ると、赤い字で

ちゃんと御祭日と出ている。主人は祭日とも知らず

に学校へ欠勤届を出したのだらう。細君も知らずに

郵便箱へ抛ほうり込んだのだらう。ただし迷亭に至つて

は實際知らなかつたのか、知って知らん顔をしたのか、そこは少々疑問である。この発明におやと驚ろいた妻君はそれじゃ、みんなでおとなしく御遊びなさいと平生の通り針箱を出して仕事に取りかかる。

その後三十分間は家内平穩、別段吾輩の材料になるような事件も起らなかつたが、突然妙な人が御客に來た。十七八の女学生である。踵かかとのまがつた靴を

履はいて、紫色の袴はかまを引きずつて、髪を算盤珠そろばんたまのよう

にふくらまして勝手口から案内も乞こわずに上あがつて来

た。これは主人の姪めいである。学校の生徒だそうだが

、折々日曜にやって来て、よく叔父さんと喧嘩をし

て帰って行く雪江ゆきえとか云う奇麗な名のお嬢さんであ

る。もつとも顔は名前ほどでもない、ちよつと表へ

出て一二町あるけば必ず逢える人相である。

「叔母さん今日は」と茶の間へつかつか這入^{はい}って来て、針箱の横へ尻をおろした。

「おや、よく早くから……」

「今日は大祭日ですから、朝のうちにちよつと上がろうと思つて、八時半頃から家^{うち}を出て急いで来たの

」
「そう、何か用があるの？」

「いいえ、ただあんまり御無沙汰をしたから、ちよつと上がったの」

「ちよつとでなくっていいから、緩ゆっくり遊んでいらつしやい。今に叔父さんが帰って来ますから」

「叔父さんは、もう、どこへかいらしたの。珍らしいのね」

「ええ今日はね、妙な所へ行つたのよ。……警察へ

行つたの、妙でしよう」

「あら、何で？」

「この春這^{はい}入つた泥棒がつらまつたんだつて」

「それで引き合に出されるの？　いい迷惑ね」

「なあに品物が戻るのよ。取られたものが出たから

取りに來いって、昨日^{きのう}巡査がわざわざ來たもんです

から」

「おや、そう、それでなくっちゃ、こんなに早く叔父さんが出掛ける事はないわね。いつもなら今時分はまだ寝ていらっしやるんだわ」

「叔父さんほど、寝坊はないんですから……そうして起こすとぷんぷん怒るおこのよ。今朝なんかも七時までに是非おこせと云うから、起こしたんでしよう。すると夜具の中へ潜もぐって返事もしないんですもの。」

こっちは心配だから二度目にまたおこすと、夜着よぎの袖そでから何か云うのよ。本当にあきれ返ってしまうの
」

「なぜそんなに眠いんでしょう。きっと神経衰弱な
んでしょう」

「何ですか」

「本当にむやみに怒かたる方ね。あれでよく学校が勤ま

るのね」

「なに学校じゃおとなしいんですって」

「じやなお悪るいわ。まるで蒟蒻こんにやく閻魔ね」

「なぜ？」

「なぜでも蒟蒻閻魔なの。だって蒟蒻閻魔のようじやありませんか」

「ただ怒るばかりじやないのよ。人が右と云えば左

左と云えば右で、何でも人の言う通りにした事がない、——そりや強情ですよ」

あまのじやく

「天探女でしょう。叔父さんはあれが道楽なのよ。

だから何かさせようと思つたら、うら、を云うと、こ

ちの思い通りになるのよ。こないだ蝙蝠傘こうもりを買つ

てもらふ時にも、いらない、いらないって、わざと云つたら、いらない事があるものかつて、すぐ買つ

て下すつたの」

「ホホホ旨いうまのね。わたしもこれからそうしよう

」

「そうなさいよ。それでなくっちや損だわ」

「こないだ保険会社の人に来て、是非御お這入はいんなさ

いって、勧めているんでしょう、——いろいろ訳わけを

言って、こう云う利益があるの、ああ云う利益があ

るのつて、何でも一時間も話をしたんですが、どうしても這入らないの。うちだって貯蓄はなし、こうして小供は三人もあるし、せめて保険へでも這入つてくれるとよつぽど心丈夫なんですけれども、そんな事は少しも構わないんですもの」

「そうね、もしもの事があると不安心だわね」と十七八の娘に似合しからん世帯染しよたいじみたことを云う。

「その談判を蔭で聞いていると、本当に面白いのよ。なるほど保険の必要も認めないではない。必要なものだから会社も存在しているのだろう。しかし死なない以上は保険に這^{はい}入る必要はないじゃないかって強情を張っているんです」

「叔父さんが？」

「ええ、すると会社の男が、それは死ななければ無

論保険会社はいりません。しかし人間の命と云うものは丈夫なように脆いもろもので、知らないうちに、いつ危険が逼せまっているか分りませんと云うとね、叔父さんは、大丈夫僕は死なない事に決心をしているつて、まあ無法な事を云うんですよ」

「決心したって、死ぬわねえ。わたしなんか是非及き第うだいするつもりだったけれども、とうとう落第してし

まっただわ」

「保険社員もそう云うのよ。寿命は自分の自由にはなりません。決心で長が^な生きが^い出来るものなら、誰も死ぬものはございませんって」

「保険会社の方が至^{しとう}当ですわ」

「至当でしょう。それがわからないの。いえ決して死なない。誓って死なないって威張るの」

「妙ね」

「妙ですとも、おおみよう大妙ですわ。保険の掛金を出すくら

いなら銀行へ貯金する方が遥はるかにましだってすまし切っているんですよ」

「貯金があるの？」

「あるもんですか。自分が死んだあとなんか、ちつとも構う考なんか無いんですよ」

「本当に心配ね。なぜ、あんななんでしょう、ここへいらっしやる方^{かた}だって、叔父さんのようなのは一人もいないわね」

「いるものですか。無類ですよ」

「ちつと鈴木さんにでも頼んで意見でもして貰うといいんですよ。ああ云う穏^{おだ}やかな人だとよっぽど楽^{らく}ですがねえ」

「ところが鈴木さんは、うちじゃ評判がわるいのよ」

「みんな逆^{さか}なのね。それじゃ、あの方^{かた}がいいでしょ

う——ほらあの落ちついてる——」

「八木さん？」

「ええ」

「八木さんには大分^{だいぶん}閉口しているんですがね。

昨日^{きのう}

迷亭さんが来て悪口をいったものだから、思つたほど利^きかないかも知れない」

「だっていいじゃないですか。あんな風に鷹揚^{おうよう}に落ちついていれば、——こないだ学校で演説をなすつたわ」

「八木さんが？」

「ええ」

「八木さんは雪江さんの学校の先生なの」

「いいえ、先生じゃないけども、しゆくとかふじんかい淑徳婦人会のとき

に招待して、演説をして頂いたの」

「面白かった？」

「そうね、そんなに面白くもなかったわ。けども

あの先生が、あんな長い顔なんでしょう。そうし

て天神様のようなひげ髯を生やしているもんだから、み

んな感心して聞いているよ」

「御話しって、どんな御話なの？」と妻君が聞きかけていると椽側えんがわの方から、雪江さんの話し声をききつけて、三人の子供がどたばた茶の間へ乱入して来た。今までは竹垣の外の空地あきちへ出て遊んでいたものであろう。

「あら雪江さんが来た」と二人の姉さんは嬉しそう

に大きな声を出す。妻君は「そんなに騒がないで、みんな静かにして御坐わりなさい。雪江さんが今面白い話をなさるところだから」と仕事を隅へ片付ける。

「雪江さん何の御話し、わたし御話しが大好き」と云ったのはとん子で「やっぱりかちかち山の御話し？」と聞いたのはすん子である。「坊ばも御はなち

「と云い出した三女は姉と姉の間から膝を前の方に

出す。ただしこれは御話を承うけたまわると云うのではない

坊ばもまた御話を仕つかまつると云う意味である。「あら

また坊ばちゃんの話だ」と姉さんが笑うと、妻君

は「坊ばはあとでなさい。雪江さんの御話がすんで

から」と賺すかして見る。坊ばはなかなか聞きそうに

ない。「いやーよ、ばぶ」と大きな声を出す。「お

お、よしよし坊ばちゃんからなさい。何と云うの？

「と雪江さんは謙遜けんそんした。

「あのね。坊たん、坊たん、どこ行くのって」

「面白いのね。それから？」

「私たちは田圃たんぼへ稲刈いに」

「そう、よく知ってる事」

「御前がくうと邪魔だまになる」

「あら、くうとじゃないわ、くるとだわね」とん
子が口を出す。坊ばは相変らず「ばぶ」と一喝^{いっかつ}して
直ちに姉を辟易^{へきえき}させる。しかし途中で口を出された
ものだから、続きを忘れてしまつて、あとが出て来
ない。「坊ばちゃん、それぎりなの？」と雪江さん
が聞く。

「あのね。あとでおならは御免^{ごめん}だよ。ぷう、ぷうぷ

うって」

「ホホホホ、いやだ事、誰にそんな事を、教わったの？」

「御三おたんに」

「わるい御三おさんね、そんな事を教えて」と妻君は苦笑をしていたが「さあ今度は雪江さんの番だ。坊やはおとなしく聞いているのですよ」と云うと、さすが

の暴君も納得したと見えて、それぎり当分の間は沈黙した。なっとく

「八木先生の演説はこんなだよ」と雪江さんがとうとう口を切った。「昔ある辻つじの真中に大きな石地藏があつたんですってね。ところがそこがあいにく馬や車が通る大變賑にぎやかな場所だもんだから邪魔になつて仕様がないうでね、町内のものが大勢寄つて、

相談をして、どうしてこの石地蔵を隅の方へ片づけたらよかろうって考えたんですって」

「そりや本当にあつた話なの？」

「どうですか、そんな事は何ともおっしやらなくつてよ。――でみんながいろいろ相談をしたら、その町内で一番強い男が、そりや訳はありません、わたしがきつと片づけて見せますって、一人でその辻へ

行つて、もろはだ両肌を抜いで汗を流して引つ張つたけれど
も、どうしても動かないんですつて」

「よつぽど重い石地藏なのね」

「ええ、それでその男が疲れてしまつて、うちへ歸
つて寢てしまつたから、町内のものはまた相談をし
たんですね。すると今度は町内で一番利口な男が、

わたし私に任せて御覧なさい、一番やつて見ますからつて

重箱のなかへ牡丹餅ぼたもちを一杯入れて、地蔵の前へ来

て、『ここまでおいで』と云いながら牡丹餅を見せ

びらかしたんだって、地蔵だって食意くいいじ地が張ってる

から牡丹餅で釣れるだろうと思つたら、少しも動か

ないんだって。利口な男はこれではいけないと思つ

てね。今度は瓢箪ひょうたんへお酒を入れて、その瓢箪を片手

へぶら下げて、片手ちよこへ猪口を持ってまた地蔵さんの

前へ来て、さあ飲みたくはないかね、飲みたければ
ここまでおいでと三時間ばかり、からかつて見たが
やはり動かないんですって」

「雪江さん、地蔵様は御腹おなかが減へらないの」とん子

がきくと「牡丹餅が食べたいな」とすん子が云った

。「利口な人は二度共しくじったから、その次には贗にせ

札を沢山こしらえて、さあ欲しいだろう、欲しければ取りにおいでと札を出したり引っ込ましたりしたがこれもまるで益やくに立たないんですって。よつぽど頑固がんこな地蔵様なのよ」

「そうね。すこし叔父さんに似ているわ」

「ええまるで叔父さんよ、しまいに利口な人も愛想あいそをつかしてやめてしまったんですとさ。それでその

あとからね、大きな法螺ほらを吹く人が出て、私わたしならき
つと片づけて見せますからご安心なさいとさも容易たやす
い事のように受合ったそうです」

「その法螺を吹く人は何をしたんです」

「それが面白いのよ。最初にはね巡査の服をきて、
付け髯ひげをして、地蔵様の前へきて、こらこら、動か
んとその方のためにならんぞ、警察で棄てておかん

ぞと威張って見せたんですとさ。今の世に警察の仮こわ

声いろなんか使ったって誰も聞きやしないわね」

「本当ね、それで地藏様は動いたの？」

「動くもんですか、叔父さんですもの」

「でも叔父さんは警察には大変恐れ入っているのよ

「あらそう、あんな顔をして？　それじゃ、そんな

に怖^{こわ}い事はないわね。けれども地藏様は動かないん

ですって、平気でいるんですとさ。それで法螺吹は

大變怒^{おこ}って、巡査の服を脱いで、付け髯^{かみくず}を紙屑籠^{かご}へ

抛^{ほう}り込んで、今度は大金持ちの服装^{なり}をして出て来た

そうです。今の世で云うと岩崎男爵のような顔をす

るんですとさ。おかしいわね」

「岩崎のような顔ってどんな顔なの？」

「ただ大きな顔をするんでしょう。そうして何もしていないで、また何も云わないで地蔵の周りまわを、大きな巻煙草まきたばこをふかしながら歩行あるしているんですとさ」

「それが何になるの？」

「地蔵様を煙けむに捲まくんです」

「まるで噺はなし家かの洒落しやれのようね。首尾よく煙けむに捲まい

たの？」

「駄目ですわ、相手が石ですもの。ごまかしもたいていにすればいいのに、今度は殿下さまに化けて来たんだって。馬鹿ね」

「へえ、その時分にも殿下さまがあるの？」

「有るんでしょう。八木先生はそうおっしゃってよ。たしかに殿下様に化けたんだって、恐れ多い事だ。が化けて来たって——第一不敬じゃありませんか、

ほらふ
法螺吹きの分際ぶんざいで」

「殿下つて、どの殿下さまなの」

「どの殿下さまですか、どの殿下さまだつて不敬で
すわ」

「そうね」

「殿下さまでも利きかないでしょう。法螺吹きもしよ
うがないから、とても私わたしの手際てぎわでは、あの地藏はど

うする事も出来ませんと降参をしたそうです」

「いい気味ね」

「ええ、ついでに懲役ちようえきにやればいいのに。――でも

町内のものは大層氣を揉もんで、また相談を開いたんですが、もう誰も引き受けるものがないんで弱った
そうです」

「それでおしまい？」

「まだあるのよ。一番しまいに車屋とゴロツキを大勢雇って、地蔵様の周りをまわをわいわい騒いであるいたんです。ただ地蔵様をいじめて、いたたまれないようにすればいいと云って、夜昼交替でこうたい騒ぐんだって」

「御苦労様ですこと」

「それでも取り合わないんですとさ。地蔵様の方も

随分強情ね」

「それから、どうして？」と、とん子が熱心に聞く。

「それからね、いくら毎日毎日騒いでも、げん験が見えな

いので、大分だいぶみんなが厭いやになつて来たんですが、車

夫やゴロツキは幾日いくんちでも日当にっとうになる事だから喜んで

騒いでいましたとさ」

「雪江さん、日当ってなに？」と、とん子が質問をす

る。

「日当と云うのはね、御金の事なの」

「御金をもらって何にするの？」

「御金を貰ってね。……ホホホいやなすん、子さん

だ。——それで叔母さん、毎日毎晩から騒ぎをして

いますとね。その時町内に馬鹿竹と云つて、ばかたけ何も知なんに

らない、誰も相手にしない馬鹿がいたんですってね

。その馬鹿がこの騒ぎを見て御前方おまえがたは何でそんなに

騒ぐんだ、何年かかっても地蔵一つ動かす事が出来ないのか、可哀想かわいそうなものだ、と云ったそうですって

——」

「馬鹿の癖にえらいのね」

「なかなかえらい馬鹿なのよ。みんなが馬鹿竹ばかたけの云

う事を聞いて、物はためしだ、どうせ駄目だろうが

まあ竹にやらして見ようじやないかとそれから竹に頼むと、竹は一も二もなく引き受けたが、そんな邪魔な騒ぎをしないでまあ静かにしろと車引やゴロツキを引き込まして飄然と地蔵様の前へ出て来ました」

「雪江さん飄然て、馬鹿竹のお友達？」ととん子が肝心なところで奇問を放ったので、細君と雪江さん

はどつと笑い出した。

「いいえお友達じゃないのよ」

「じゃ、なに？」

「飄然と云うのはね。——云いようがないわ」
「飄然で、云いようがないの？」

「そうじゃないのよ、飄然と云うのはね——」

「ええ」

「そら多々良三平さんたたらさんを知ってるでしょう」

「ええ、山の芋をくれてよ」

「あの多々良さん見たようなを云うのよ」

「多々良さんは飄然なの？」

「ええ、まあそうよ。——それで馬鹿竹が地蔵様の

前へ来てふところ懐手をして、地蔵様、町内のものが、あな

たに動いてくれと云うから動いてやんなさいと云つ

たら、地蔵様はたちまちそうか、そんなら早くそう云えばいいのに、とのこのこ動き出したそうです」

「妙な地蔵様ね」

「それからが演説よ」

「まだあるの？」

「ええ、それから八木先生がね、今日こんにちは御婦人の会

であります、私がかような御話をわざわざ致した

のは少々考があるので、こう申すと失礼かも知れませんが、婦人というものはとにかく物をするのに正面から近道を通って行かないで、かえって遠方から廻りくどい手段をとる弊へいがある。もつともこれは御婦人に限った事でない。明治の代よは男子といえども、文明の弊を受けて多少女性的になっっているから、よくいらざる手数てすうと労力を費ついやして、これが本筋であ

る、紳士のやるべき方針であると誤解しているものが多いようだが、これ等は開化の業に束縛された畸き形けい児じである。別に論ずるに及ばん。ただ御婦人に在あ

ってはなるべくただいま申した昔話を御記憶になつて、いざと云う場合にはどうか馬鹿竹のような正直な了見で物事を処理していただきたい。あなた方が

馬鹿竹になれば夫婦の間、嫁姑よめしゅうとの間に起る忌いまわしき

葛藤の三分一はたしかに減ぜられるに相違ない。人

こんたん

間は魂胆があればあるほど、その魂胆が崇たつて不幸

みなもと

の源をなすので、多くの婦人が平均男子より不幸な

のは、全くこの魂胆があり過ぎるからである。どうか馬鹿竹になつて下さい、と云う演説なの」

「へえ、それで雪江さんは馬鹿竹になる気なの」

「やだわ、馬鹿竹だなんて。そんなものになりたく

はないわ。金田の富子さんなんぞは失敬だつて大變

怒おこつてよ」

「金田の富子さんて、あの向横町むこうよこちょうの？」

「ええ、あのハイカラさんよ」

「あの人も雪江さんの学校へ行くの？」

「いいえ、ただ婦人会だから傍聴に来たの。本当に

ハイカラね。どうも驚ろいちまうわ」

「でも大変いい器量だつて云うじやありませんか」

「並ですわ。御自慢ほどじやありませんよ。あんなに御化粧をすればたいていの人はよく見えるわ」

「それじや雪江さんなんぞはそのかたのように御化粧をすれば金田さんの倍くらい美しくなるでしょう」

「あらいやだ。よくつてよ。知らないわ。だけど、

あの方は全くつくり過ぎるのね。かた なんぼ御金があつたって——」

「つくり過ぎても御金のある方がいいじゃありませんか」

「それもそうだけれども——あの方こそ、かた 少し馬鹿竹になった方がいいでしょう。無暗むやみに威張るんです

もの。この間もなんとか云う詩人が新体詩集を捧げ

たつて、みんなに吹聴ふいちようしているんですもの」

「東風さんでしょう」

「あら、あの方が捧げたの、よつぽど物数ものずき奇ね」

「でも東風さんは大変真面目なんですよ。自分じや

あんな事をするのが当前あたりまえだとまで思ってるんです

もの」

「そんな人があるから、いけないんですよ。——そ

れからまだ面白い事があるの。此間こないだだれか、あの方

の所ところへ艶書えんしょを送ったものがあるんだって」

「おや、いやらしい。誰なの、そんな事をしたのは

」

「誰だかわからないんだって」

「名前はないの？」

「名前はちゃんと書いてあるんだけれども聞いた事

もない人だって、そうしてそれが長い長い一間ばかりもある手紙でね。いろいろな妙な事がかいてあるんですとさ。わたし私があなをおも恋っているのは、ちよう

ど宗教家が神にあこがれているようなものだの、あなたのためならば祭壇に供える小羊となつて屠ほふられ

るのが無上の名誉であるの、心臓の形かたちが三角で、

三角の中心にキューピッドの矢が立って、吹き矢な

ら大当りであるの……」

「そりや真面目なの？」

「真面目なんですとさ。現にわたしの御友達のうちでその手紙を見たものが三人あるんですもの」

「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あの方は寒月さんのところへ御嫁に行くつもりなんだから、そんな事が世間へ知れちや困るでしょうにね」

「困るところですか大得意よ。こんだ寒月さんが来たら、知らして上げたらいいでしよう。寒月さんはまるで御存じないんでしょう」

「どうですか、あの方は学校へ行つて球たまばかり磨いていらつしやるから、大方知らないでしよう」

「寒月さんは本当にあの方を御貫おもらいになる気なんでしょうかね。御気の毒だわね」

「なぜ？　御金があつて、いざつて時に力になつて、
いいじやありませんか」

「叔母さんは、じきに金、金つて品ひんがわるいのね。

金より愛の方が大事じやありませんか。愛がなければ夫婦の関係は成立しやしないわ」

「そう、それじや雪江さんは、どんなところへ御嫁
に行くの？」

「そんな事知るもんですか、別に何もないんですもの」

雪江さんと叔母さんは結婚事件について何か弁論

を^{たくま}遅しくしていると、さつきから、分らないなりに

謹聴していると、ん子が突然口を開いて「わたしも御嫁に行きたいな」と云いだした。この無鉄砲な希望

には、さすが青春の氣に満ちて、大^{おおい}に同情を寄すべ

き雪江さんもちよつと毒氣を抜かれた体であつたが、細君の方は比較的平氣に構えて「どこへ行きたいの」と笑ながら聞いて見た。

「わたしねえ、本当はね、招魂社しょうこんしゃへ御嫁に行きたいんだけど、水道橋を渡るのがいやだから、どうしようかと思つてるの」

細君と雪江さんはこの名答を得て、あまりの事に

問い返す勇氣もなく、どっと笑い崩れた時に、次女のすん子が姉さんに向ってかような相談を持ちかけた。

「御ねえ様も招魂社がすき？　わたし也大すき。い

っしよに招魂社へ御嫁に行きましよう。ね？　いや

？　いやなら好いいわ。わたし一人で車へ乗ってさっ

さと行っちまうわ」

「坊ばも行くの」とついには坊ばさんまでが招魂社へ嫁に行く事になった。かように三人が顔を揃そろえて招魂社へ嫁に行けたら、主人もさぞ楽であろう。

ところへ車の音ががらがらと門前に留ったと思つたら、たちまち威勢のいい御帰りと云う声がした。

主人は日本堤分署から戻ったと見える。車夫が差出す大きな風呂敷包を下女に受け取らして、主人は悠ゆう

然と茶の間へ這入はいつて来る。「やあ、来たね」と雪

江さんに挨拶しながら、例の有名なる長火鉢そばの傍へ

、ばかりと手に携たずさえた徳利様のものを抛ほうり出した。

徳利様と云うのは純然たる徳利では無論ない、と云

つて花活はないけとも思われない、ただ一種異様の陶器で

あるから、やむを得ずしばらくかように申したので

ある。

「妙な徳利ね、そんなものを警察から貰っていらしたの」と雪江さんが、倒れた奴を起しながら叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの顔を見ながら、「どうだ、いい恰好かつこうだろう」と自慢する。

「いい恰好なの？　それが？　あんまりよかあない

あぶらつぽ

わ？　油壺なんか何で持っていらつしたの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云うから困

る」

「じゃ、なあに？」

「花活はないけさ」

「花活にしちや、口が小ちいさ過ぎて、いやに胴が張
つてるわ」

「そこが面白いんだ。御前も無風流だな。まるで叔
母さんとえら忤ぶところなしだ。困ったものだな」と独ひと

りで油壺を取り上げて、障子しょうじの方へ向けて眺ながめている。

「どうせ無風流ですわ。油壺を警察から貰ってくるような真似は出来ないわ。ねえ叔母さん」叔母さんはそれどころではない、風呂敷包を解といて皿眼さらまなこになつて、盗難品を検しらべている。「おや驚ろいた。泥棒も進歩したのね。みんな、解いて洗い張をしてある

わ。ねえちよいと、あなた」

「誰が警察から油壺を貰ってくるものか。待ってるのが退屈だから、あすこいらを散歩しているうちに掘り出して来たんだ。御前なんぞには分るまいがそれでも珍品だよ」

「珍品過ぎるわ。一体叔父さんはどこを散歩したの

「どこつて日本堤界限にほんづつみかいわいさ。吉原へも這入はいつて見た。

なかなか盛さかんな所だ。あの鉄の門を觀みた事があるかい

。ないだろう」

「だれが見るもんですか。吉原なんて賤業婦せんぎようふのいる

所へ行く因縁いんねんがありませんわ。叔父さんは教師の身

で、よくまあ、あんな所へ行かれたものねえ。本当

に驚ろいてしまうわ。ねえ叔母さん、叔母さん」

「ええ、そうね。どうも品数しなかずが足りないようだ事。

これでみんな戻ったんでしょうか」

「戻らんのは山の芋ばかりさ。元来九時に出頭しろと云いながら十一時まで待たせる法があるものか、これだから日本の警察はいかん」

「日本の警察がいけないって、吉原を散歩しちやな
おいけないわ。そんな事が知れると免職になつてよ

ねえ叔母さん」

「ええ、なるでしょう。あなた、私の帯の片側がな
かたかわ
いんです。何だか足りないと思ったら」

「帯の片側くらいあきらめるさ。こっちは三時間も
待たされて、大切な時間を半日潰つぶしてしまった」と

日本服に着代えて平気に火鉢へもたれて油壺を眺ながめ
ている。細君も仕方がないと諦あきらめて、戻った品をそ

のまま戸棚へしまい込んで座に帰る。

「叔母さん、この油壺が珍品ですとさ。きたないじやありませんか」

「それを吉原で買っていたの？　まあ」

「何がまあだ。分りもしない癖に」

「それでもそんな壺なら吉原へ行かなくつても、どこにだってあるじやありませんか」

「ところがないんだよ。滅多めったに有る品ではないんだよ」

「叔父さんは随分石地蔵いしじぞうね」

「また小供の癖に生意気を云う。どうもこの頃の女学生は口が悪くついていかん。ちと女大学でも読むがいい」

「叔父さんは保険が嫌きらでしょう。女学生と保険とど

「つちが嫌なの？」

「保険は嫌ではない。あれは必要なものだ。未来の考のあるものは、誰でも這^{はい}入る。女学生は無用の長物だ」

「無用の長物でもいい事よ。保険へ這入ってもいいない癖に」

「来月から這入るつもりだ」

「きつと？」

「きつとだとも」

「およしなさいよ、保険なんか。それよりかその懸かけ

金きんで何か買った方がいいわ。ねえ、叔母さん」叔母

さんはにやにや笑っている。主人は真面目になつて

「お前などは百も二百も生きる気だから、そんな呑の

気んきな事を云うのだが、もう少し理性が発達して見ろ

保険の必要を感じずに至るのは当前だ。あたりまえ ぜひ来月

から這入るんだ」

「そう、それじゃ仕方がない。だけどこないだのよ

うに蝙蝠傘こうもりを買って下さる御金があるなら、保険に

這入る方がましかも知れないわ。ひとがいりません

、いりませんと云うのを無理に買って下さるんです

もの」

「そんなにいらなかったのか？」

「ええ、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら還かえすがいい。ち、よ、う、ど、とん子が欲しがっ

てるから、あれをこっちへ廻してやろう。今日持っ

て来たか」

「あら、そりや、あんまりだわ。だって苛ひどいじゃあ

りませんか、せっかく買つて下すっておきながら、

「還せなんて」

「いらないと云うから、還せと云うのさ。ちつとも苛くはない」

「いらない事はいらないんですけれども、苛いわ」

「分らん事を言う奴だな。いらないと云うから還せと云うのに苛い事があるものか」

「だって」

「だって、どうしたんだ」

「だって苛いわ」

「愚^ぐだな、同じ事ばかり繰り返している」

「叔父さんだって同じ事ばかり繰り返しているじゃないですか」

「御前が繰り返すから仕方がないさ。現にいらないと云ったじゃないか」

「そりや云いましたわ。 いらぬ事はいらぬいですけれども、 還すのは厭いやですもの」

「驚ろいたな。 没わからずや分曉で強情なんだから仕方がない

。 御前の学校じや論理学を教えないのか」

「よくつてよ、 どうせ無教育なんですから、 何とでもおつしやい。 人のものを還せだなんて、 他人だつてそんな不人情な事は云やしない。 ちつと馬鹿ばかたけ竹の

真似でもなさい」

「何の真似をしろ？」

「ちと正直に淡泊たんぱくになさいと云うんです」

「お前は愚物の癖にやに強情だよ。それだから落第するんだ」

「落第したって叔父さんに学資は出して貰やしないわ」

雪江さんは言^{げん}ここに至^{いた}つて感に堪^たえざるもののご

とく、^{さんぜん}濟然として一掬^{いっきく}の涙^{なみだ}を紫の袴^{はかま}の上に落した。

主人は茫^{ぼう}乎^うとして、その涙がいかなる心理作用に起

因^よするかを研究するもののごとく、袴の上と、俯^{うつ}つ

向いた雪江さんの顔を見つめていた。ところへ御三^{おさん}

が台所から赤い手を敷居越^{そろ}に揃^{そろ}えて「お客さまがい

らっしゃいました」と云う。「誰が来たんだ」と主

人が聞くと「学校の生徒さんでございます」と御三
は雪江さんの泣顔を横目に睨にらめながら答えた。主人
は客間へ出て行く。吾輩も種取り兼けん人間研究のため
主人に尾びして忍びやかに椽えんへ廻まわった。人間を研究
するには何か波瀾がある時を択えらばないと一向結果が
出て来ない。平生は大方の人が大方の人であるから
、見ても聞いても張合のないくらい平凡である。し

かしいざとなるとこの平凡が急に靈妙なる神秘的作
用のためにむくむくと持ち上がって奇なもの、変な
もの、妙なもの、異いなもの、一と口に云えば吾輩猫
共から見てすこぶる後学になるような事件が至ると
ころに横風おうふうにあらわれてくる。雪江さんの紅涙こうるいのご
ときはまさしくその現象の一つである。かくのごと
く不可思議、不可測ふかそくの心を有している雪江さんも、

細君と話をしているうちはさほども思わなかつた

が、主人が歸つてきて油壺を抛り出すやいなや、た

ちまち死竜しりゆうに蒸気唧筒じょうきポンプを注ぎかけたるごとく、勃然ぼつぜん

としてその深奥しんおうにして窺知きちすべからざる、巧妙なる

、美妙なる、奇妙なる、靈妙なる、麗質を、惜気も

なく発揚し了おわつた。しかしてその麗質は天下の女性によしやう

に共通なる麗質である。ただ惜しい事には容易にあ

らわれて来ない。否いやあらわれる事は二六時中断な

くあらわれているが、かくのごとく顯著しやくぜんへいこに灼然炳乎

として遠慮なくはあらわれて来ない。幸にして主人

のように吾輩の毛をややともすると逆さに撫なでたが

旋毛つむじまが曲りの奇特きどく家がおったから、かかる狂言も拝

見が出来たのであろう。主人のあとさえついてある

けば、どこへ行っても舞台の役者は吾知らず動くに

相違ない。面白い男を旦那様に戴いたいて、短かい猫の命のうちにも、大分だいぶん多くの経験が出来る。ありがたい事だ。今度のお客は何者であろう。

見ると年頃は十七八、雪江さんと追おつつ、返かつつの書生である。大きな頭を地じの隙すいて見えるほど刈り込んで団子だんごっ鼻ばなを顔の真中にかためて、座敷の隅の方に控ひかえている。別にこれと云う特徴もないが頭ず

蓋骨がいこつだけはすこぶる大きい。青坊主に刈つてさえ、

ああ大きく見えるのだから、主人のように長く延ばしたら定めし人目を惹ひく事だろう。こんな顔にかぎって学問はあまり出来ない者だとは、かねてより主人の持説である。事實はそうかも知れないがちよつと見るとナポレオンのようですこぶる偉観である。

着物は通例の書生のごとく、薩摩さつま絣がすりか、久留米くろめがす

りかまた伊^い予^よ絣^{かすり}が分らないが、ともかくも絣^{かすり}と名づ

^{あわせ}

けられたる^{あわせ}袷^{あわせ}を袖短かに着こなして、下には襯^{シヤツ}衣も

^{じゅばん}

襦^{じゅばん}袢もないようだ。素^す袷^{あわせ}や素^す足^{あし}は意気なものだそう

だが、この男のはなはだむさ苦しい感じを与える。

ことに畳の上に泥棒のような親指を歴然と三つまで

^{いん}

印^{いん}しているのは全く素足の責任に相違ない。彼は四

つ目の足跡の上へちやんと坐つて、さも窮屈そうに

畏しこま^かつてゐる。一体かしこまるべきものがおと

なしく控^{ひか}えるのは別段気にするにも及ばんが、毬栗^{いがぐり}

頭^{あたま}のつんつるてんの乱暴者が恐縮してゐるところは

何となく不調和なものだ。途中で先生に逢つてさえ

礼をしないのを自慢にするくらいの連中が、たとい

三十分でも人並に坐るのは苦しいに違ない。ところ

を生れ得て恭謙^{きょうけん}の君子、盛徳^{ちやうしや}の長者であるかのごと

く構えるのだから、当人の苦しいにかかわらず傍か

だいぶ

ら見ると大分おかしいのである。教場もしくは運動

場であんなに騒々しいものが、どうしてかように自

かんそく

己を箝束する力を具そなえているかと思うと、憐れにも

こっけい

あるが滑稽でもある。こうやって一人ずつ相対あいたいにな

ぐがい

ると、いかに愚駭なる主人といえども生徒に対して

幾分かの重みがあるように思われる。主人も定めし

得意であろう。塵積ちりつて山をなすと云うから、微々

たぜい しゅうごう あなど

たる一生徒も多勢が聚合すると侮るべからざる団体

はいせき

となつて、排斥運動やストライキをしでかすかも知

れない。これはちやうど臆病者が酒を飲んで大胆になるような現象であろう。衆を頼んで騒ぎ出すのは

、人の氣に酔つ払つた結果、正氣を取り落したるも

さしつか

のと認めて差支えあるまい。それでなければかよう

に恐れ入ると云わんよりむしろ悄然しょうぜんとして、自ら襖みずかに押し付けられているくらいな薩摩絣が、いかに老朽だと云って、苟かりそめにも先生と名のつく主人を輕蔑けいべつしようがない。馬鹿に出来る訳がない。

主人は座布団ざぶとんを押しやりながら、「さあお敷き」

と云ったが毬栗先生はかたくなのまま「へえ」と云って動かない。鼻の先に剥はげかかった更紗さらさの座布

団が「御乗んなさい」とも何とも云わずに着席して
いる後ろうしに、生きた大頭がつくねんと着席している
のは妙なものだ。布団は乗るための布団で見詰める
ために細君が勧工場から仕入れて来たのではない。

布団にして敷かれずんば、布団はまさしくその名誉
を毀損きそんせられたるもので、これを勧めたる主人もま
た幾分か顔が立たない事になる。主人の顔を潰つぶして

まで、布団と睨にらめくらをしている毬栗君は決して布

団その物が嫌きらいではない。実を云うと、正式に坐

った事は祖父じいさんの法事の時のほかは生れてから滅め

多ったにないので、先さつきからすでにしびれが切れかか

って少々足の先は困難を訴えているのである。それ

にもかかわらず敷かない。布団が手持無沙汰に控ひかえ

ているにもかかわらず敷かない。主人がさあお敷き

と云うのに敷かない。厄介な毬栗坊主だ。このくら

い遠慮するなら多人数集まった時もう少し遠慮すれ

ばいいのに、学校でもう少し遠慮すればいいのに、

下宿屋でもう少し遠慮すればいいのに。すまじきと

ころへ気兼きがねをして、すべき時には謙遜けんそんしない、否大おおい

に狼藉ろうぜきを働らく。たちの悪るい毬栗坊主だ。

ところへ後ろうしの襖ふすまをすうと開けて、雪江さんが一

碗の茶を恭しく坊主に供した。平生なら、そらサヴ

エジ・チーが出たと冷やかすのだが、主人一人に対

してすら痛み入っている上へ、妙齡の女性が学校で

覚え立ての小笠原流で、乙に氣取った手つきをして

茶碗を突きつけたのだから、坊主は大に苦悶の体に

見える。雪江さんは襖をしめる時に後ろからにやに

やと笑った。して見ると女は同年輩でもなかなかえ

らいものだ。坊主に比すれば遙はるかに度胸が据すわつて
いる。ことに先刻さつきの無念にはらはらと流した一滴の
紅涙こうるいのあとだから、このにやにやがさらに目立って
見えた。

雪江さんの引き込んだあとは、双方無言のまま、
しばらくの間は辛防しんぼうしていたが、これでは業ぎょうをする
ようなものだど気がついた主人はようやく口を開い

た。

「君は何とか云ったけな」

「古井……ふるい」

「古井？　古井何とかだね。名は」

「古井武右衛門ぶえもん」

「古井武右衛門——なるほど、だいぶ長い名だな。」

「今の名じゃない、昔の名だ。四年生だったね」

「いいえ」

「三年生か？」

「いいえ、二年生です」

「甲の組かね」

「乙です」

「乙なら、わたしの監督だね。そうか」と主人は感心している。実はこの大頭は入学の当時から、主人

の眼についているんだから、決して忘れるどころではない。のみならず、時々夢に見るくらい感銘した頭である。しかし呑気のんきな主人はこの頭とこの古風な姓名とを連結して、その連結したものをまた二年乙組に連結する事が出来なかったのである。だからこの夢に見るほど感心した頭が自分の監督組の生徒であると聞いて、思わずそうかと心の裏うちで手を拍うつ

たのである。しかしこの大きな頭の、古い名の、し

かも自分の監督する生徒が何のために今頃やって来

たのか頓とんと推諒すいりょう出来ない。元来不人望な主人の事だ

から、学校の生徒などは正月だろうが暮だろうがほ

とんど寄りついた事がない。寄りついたのは古井武

右衛門君をもつて嚙こうし矢とするくらいな珍客であるが

、その来訪の主意がわからんには主人も大おおに閉口し

ているらしい。こんな面白くない人の家へただ遊び

にくる訳もなかろうし、また辞職勧告ならもう少し

昂然こうぜんと構え込みそうだし、と云つて武右衛門君など

が一身上の用事相談があるはずがないし、どっちか

ら、どう考えても主人には分らない。武右衛門君の

様子を見るとあるいは本人自身にすら何で、ここま

で参つたのか判然しないかも知れない。仕方がない

から主人からとうとう表向に聞き出した。

「君遊びに来たのか」

「そうじゃないんです」

「それじゃ用事かね」

「ええ」

「学校の事かい」

「ええ、少し御話ししようと思って……」

「うむ。どんな事かね。さあ話したまえ」と云うと

武右衛門君下を向いたぎり何なんにも言わない。元来武

右衛門君は中学の二年生にしてはよく弁ずる方で、

頭の大きい割に脳力は発達しておらんが、喋しゃべ舌る事

においては乙組中鏘々そうそうたるものである。現にせんだ

ってコロンバスの日本訳を教えろと云って大おおに主人

を困らしたはまさにこの武右衛門君である。その鏘

々たる先生が、最前さいぜんから吃どもりの御姫様のようにもじもじしているのは、何か云いわくのある事でなくてはならん。単に遠慮のみとはとうてい受け取られない。主人も少々不審に思った。

「話す事があるなら、早く話したらいいじゃないか」

「少し話しにくい事で……」

「話しにくい？」と云いながら主人は武右衛門君の

顔を見たが、先方は依然として俯向うつむきになつてゐるから

、何事とも鑑定が出来ない。やむを得ず、少し語勢

を変えて「いいさ。何でも話すがいい。ほかに誰も

聞いていやしない。わたしも他言たごんはしないから」と

穏おだやかにつけ加えた。

「話してもいいでしょうか？」と武右衛門君はまだ

迷っている。

「いいだろう」と主人は勝手な判断をする。

「では話しますが」といいかけて、毬栗頭をむくりいがぐりあたま

と持ち上げて主人の方をちよつとまぼしそうに見た。
その眼は三角である。主人は頬をふくらまして朝
日の煙を吹き出しながらちよつと横を向いた。

「実はその……困った事になつちまつて……」

「何が？」

「何がって、はなはだ困るもんですから、来たんです」

「だからさ、何が困るんだよ」

「そんな事をする考はなかったんですけれども、浜^は

田^{まだ}が借せ借せと云うもんですから……」

「浜田と云うのは浜田平助^{へいすけ}かい」

「ええ」

「浜田に下宿料でも借したのかい」

「何そんなものを借したんじやありません」

「じや何を借したんだい」

「名前を借したんです」

「浜田が君の名前を借りて何をしたんだい」

「えんしよ艶書を送ったんです」

「何を送った？」

「だから、名前は廃よして、投函とうかん役になると云ったんです」

「何だか要領を得んじやないか。一体誰が何をしたんだい」

「艶書えんしよを送ったんです」

「艶書を送った？ 誰に？」

「だから、話しにくいと云うんです」

「じゃ君が、どこかの女に艶書を送ったのか」

「いいえ、僕じゃないんです」

「浜田が送ったのかい」

「浜田でもないんです」

「じゃ誰が送ったんだい」

「誰だか分らないんです」

「ちつとも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」

「名前だけは僕の名なんです」

「名前だけは君の名だって、何の事だかちつとも分らんじゃないか。もつと条理を立てて話すがいい。

元来その艶書を受けた当人はだれか」

「金田むこうよこちようって向横丁にいる女です」

「あの金田という実業家か」

「ええ」

「で、名前だけ借したとは何の事だい」

「あすこの娘がハイカラで生意気だから艶書を送ったんです。——浜田が名前がなくちやいけないって云いますから、君の名前をかけって云ったら、僕のじやつまらない。古井武右衛門の方がいいって——」

それで、とうとう僕の名を借してしまつたんです」

「で、君はあすこの娘を知つてゐるのか。交際でもあるのか」

「交際も何もありません。顔なんか見た事もありません」

「乱暴だな。顔も知らない人に艶書をやるなんて、まあどう云う了見で、そんな事をしたんだい」

「ただみんながあいつは生意気で威張ってるて云うから、からかつてやったんです」

「ますます乱暴だな。じゃ君の名を公然とかいて送ったんだな」

「ええ、文章は浜田が書いたんです。僕が名前を借して遠藤が夜あすこのうちまで行って投函して来たんです」

「じゃ三人で共同してやったんだね」

「ええ、ですけれども、あとから考えると、もしあらわれて退学にでもなると大変だと思って、非常に心配して二三日は寝られないんで、何だか茫ぼんやりしてしまいました」

「そりやまた飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中学二年生古井武右衛門とでもかいたのかい

「いいえ、学校の名なんか書きやしません」

「学校の名を書かないだけまあよかった。これで学校の名が出て見るがいい。それこそ文明中学の名誉に関する」

「どうでしょう退校になるでしょうか」

「そうさな」

「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、それにお母さんつかが継母ままははですから、もし退校にでもなろうもんなら、僕あ困っちゃうです。本当に退校になるでしよるか」

「だから滅多めったな真似をしないがいい」

「する気でもなかったんですが、ついやってしまっ
たんです。退校にならないように出来ないでしよ

か」と武右衛門君は泣き出しそんな声をしてしきりに哀願に及んでいる。ふすま襖の蔭では最前さいぜんから細君と雪江さんがくすくす笑っている。主人は飽あくまでももったいぶって「そうさな」を繰り返している。なかなか面白い。

吾輩が面白いというと、何がそんなに面白いと聞く人があるかも知れない。聞くのはもつともだ。人

間にせよ、動物にせよ、己おのれを知るのは生涯しょうがいの大事で

ある。己おのれを知る事が出来さえすれば人間も人間とし

て猫より尊敬を受けてよろしい。その時は吾輩もこ

んないたずらを書くのは気の毒だからすぐさまやめ

てしまうつもりである。しかし自分で自分の鼻の高

さが分らないと同じように、自己の何物かはなかな

か見当けんとうがつき悪にくいと見えて、平生から軽蔑けいべつしてい

る猫に向つてさえかのような質問をかけるのである。
人間は生意気なようでもやはり、どこか抜けてい
る。万物の霊だなどどこへでも万物の霊を担^{かつ}いで
あるくかと思うと、これしきの事実が理解出来ない
。しかも恬^{てん}として平然たるに至つてはちと一噓^{いっきやく}を催
したくなる。彼は万物の霊を背^せ中^{なか}へ担^{かつ}いで、おれの
鼻はどこにあるか教えてくれ、教えてくれと騒ぎ立

てている。それなら万物の霊を辞職するかと思うと、
どう致して死んでも放しそうにしない。このくら

あいきよう

い公然と矛盾をして平気でいられれば愛嬌になる。

あまん

愛嬌になる代りには馬鹿をもつて甘じなくてはなら
ん。

吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江

はちあわ

嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せをして

、その鉢合せが波動を乙^{おつ}なところに伝えるからでは

ない。実はその鉢合の反響が人間の心に個々別々の

音色^{ねいろ}を起すからである。第一主人はこの事件に対し

てむしろ冷淡である。武右衛門君のおやじさんがい

かにやかましくって、おつかさんがいかに君を継子^{ままこ}

あつかいにしようとも、あんまり驚ろかない。驚ろ

くはずがない。武右衛門君が退校になるのは、自分

が免職になるのとは大に趣が違おおい おもむきう。千人近くの生徒

がみんな退校になったら、教師も衣食の途に窮みちする

かも知れないが、古井武右衛門君一人の運命がどういちにん

変化しようと、主人の朝夕にはほとんちようせきど関係がない

関係の薄いところには同情も自おのずから薄い訳である

見まゆず知らずの人のために眉をひそめたり、鼻をか

んだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向ではな

い。人間がそんなに情深い、思いやりのある動物であるとははなはだ受け取りにくい。ただ世の中に生れて来た賦税^{ふぜい}として、時々交際のために涙を流して見たり、気の毒な顔を作つて見せたりするばかりである。云わばごまかし^{せい}性表情で、実を云うと大分骨^{だいぶ}が折れる芸術である。このごまかしをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云つて、これは世間から

大變珍重される。だから人から珍重される人間ほど怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。この点において主人はむしろ拙せつな部類に属すると云つてよろしい。拙だから珍重されない。珍重されないから内部の冷淡を存外隠すところもなく発表している。彼が武右衛門君に対して「そうさな」を繰り返しているのでも這裏しやりの消息はよく分る。諸君は冷淡だ

からと云つて、けつして主人のような善人を嫌つてはいけない。冷淡は人間の本来の性質であつて、その性質をかくそうと力め^{つと}ないのは正直な人である。

もし諸君がかかる際に冷淡以上を望んだら、それこそ人間を買い被^{かぶ}つたと云わなければならない。正直

ですら^{ふつてい}底な世にそれ以上を予期するのは、馬^ば琴^{きん}の

小説から志^し乃^のや小文^{こぶん}吾^ごが抜けだして、向う三軒両隣

はっけんでん

へ八犬伝が引き越した時でなくては、あてにならな

い無理な注文である。主人はまずこのくらいにして

、次には茶の間で笑つてゐる女連おんなれんに取りかかるが、こ

れは主人の冷淡を一步向むこうへ跨またいで、滑稽こっけいの領分おどに躍

り込んで嬉しがっている。この女連には武右衛門君

が頭痛に病んでゐる艶書事件が、仏陀ぶつだの福音ふくいんのごと

くありがたく思われる。理由はないただありがたい

。強いて解剖すれば武右衛門君が困るのがありがた
いのである。諸君女に向つて聞いて御覧、「あなた
は人が困るのを面白がつて笑いますか」と。聞かれ
た人はこの問を呈出した者を馬鹿と云うだろう、馬
鹿と云わなければ、わざとこんな問をかけて淑女の
品性を侮辱したと云うだろう。侮辱したと思うのは
事実かも知れないが、人の困るのを笑うのも事実で

ある。であるとするれば、これから私の品性^{わたし}を侮辱する
ような事を自分でしてお目にかけますから、何とか云っ
ちやいやよと断わるのと一般である。僕は泥棒をする。
しかしけっして不道德と云ってはならん。もし不道德だ
などと云えば僕の顔へ泥を塗ったものである。僕を侮
辱したものである。と主張するよ。うなものだ。女はな
かなか利口だ、考えに筋道が立

っている。いやしくも人間に生れる以上は踏んだり蹴^けたり、どやされたりして、しかも人が振りむきもせぬ時、平気でいる覚悟が必用であるのみならず、唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大きな声で笑われるのを快よく思わなくてはならない。それでなくてはかように利口な女と名のつくものと交際は出来ない。武右衛門先生もちよつとしたは

すみから、とんだ間違をして大に恐れ入つてはいるおおい

ようなものの、かように恐れ入つてゐるものを蔭で笑

うのは失敬だくらいは思ふかも知れないが、それ

は年が行かない稚氣ちきというもので、人が失礼をした

時に怒るのを氣おこが小さいと先方では名づけるそうだ

から、そう云われるのがいやならおとなしくするが

よろしい。最後に武右衛門君の心行きをちよつと紹

介する。君は心配の権化である。ごんげかの偉大なる頭脳

はナポレオンのそれが功名心をもつて充満せるがごとく、まさに心配をもつてはちきれんとしている。

時々その団子っ鼻がびくびく動くのは心配が顔面神

経に伝つたわつて、反射作用のごとく無意識に活動するの

である。彼は大きな鉄砲丸を飲てっぽうだまみ下くだしたごとく、腹

の中にいかんともすべからざる塊かたまりを抱いだいて、こ

の両三日処置に窮している。その切なさの余り、別

でどころ

に分別の出所もないから監督と名のつく先生のとこ

ろへ出向いたら、どうか助けてくれるだろうと思っ

て、いやな人の家へ大きな頭を下げにまかり越した

うち

のである。彼は平生学校で主人にからかったり、同

せんどう

級生を煽動して、主人を困らしたりした事はまるで

忘れている。いかにからかおうとも困らせようとも

監督と名のつく以上は心配してくれるに相違ないと信じているらしい。随分単純なものだ。監督は主人が好んでなつた役ではない。校長の命によつてやむを得ずいただいている、云わば迷亭の叔父さんの山高帽子の種類である。ただ名前である。ただ名前だけではどうする事も出来ない。名前がいざと云う場合、役に立つなら雪江さんは名前だけで見合が出来

る訳だ。武右衛門君はただに我儘わがままなるのみならず、

他人は己おのれに向つて必ず親切でなくてはならんと云

う、人間を買い被かぶつた仮定から出立している。笑わ

れるなどとは思も寄らなかつたろう。武右衛門君は

監督の家うちへ来て、きつと人間について、一の真理を

発明したに相違ない。彼はこの真理のために将来ま

すます本当の人間になるだろう。人の心配には冷淡

になるだろう、人の困る時には大きな声で笑うだろう。かくのごとくにして天下は未来の武右衛門君をもつて充^みたされるであろう。金田君及び金田令夫人をもつて充たされるであろう。吾輩は切に武右衛門君のために瞬時も早く自覚して真人間^{まにんげん}になられん事を希望するのである。しからずんばいかに心配するとも、いかに後悔するとも、いかに善に移るの心が

切実なりとも、とうてい金田君のごとき成功は得られんのである。いな社会は遠からずして君を人間の居住地以外に放逐するであらう。文明中学の退校どころではない。

かように考えて面白いなと思つていと、格子こうしががらがらとあいて、玄関の障子しょうじの蔭から顔が半分ぬうと出た。

「先生」

主人は武右衛門君に「そうさな」を繰り返して、
たところへ、先生と玄関から呼ばれたので、誰だろ
うとそつちを見ると半分ほど筋違すじかいに障子から食はみ出
している顔はまさしく寒月君である。「おい、御這おは
入いり」と云ったぎり坐っている。

「御客ですか」と寒月君はやはり顔半分で聞き返し

ている。

「なに構わん、まあ御^お上^あがり」

「実はちよつと先生を誘いに來たんですがね」

「どこへ行くんだい。また赤坂かい。あの方面はも

う御免だ。せんだつては無闇^{むやみ}にあるかせられて、足

が棒のようになった」

「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」

「どこへ出るんだい。まあ御上がり」

「上野へ行つて虎の鳴き声を聞こうと思ふんです」
「つまらんじゃないか、それよりちよつと御上り」

寒月君はとうてい遠方では談判不調と思つたもの
か、靴を脱いでそのそのそ上がつて来た。例のごとく

鼠色の、尻につぎの中あつたずぼんを穿はいているが、

これは時代のため、もしくは尻の重いために破れた

のではない、本人の弁解によると近頃自転車の稽古を始めて局部に比較的多くの摩擦を与えるからである。

未来の細君をもつてしよくもく矚目された本人へ文をふみつけ

た恋の仇とは夢にも知らず、「やあ」と云つて武右あだ

衛門君に軽く会釈えしやくをして椽側えんがわへ近い所へ座をしめた

。「虎の鳴き声を聞いたって詰らないじゃないか」

「ええ、今じやいけません、これから方々散歩して
夜十一時頃になつて、上野へ行くんです」

「へえ」

「すると公園内の老木は森々^{しんしん}として物凄^{ものすご}いでしよう

」

「そうさな、昼間より少しは淋^{さみ}しいだろう」

「それで何でもなるべく樹^きの茂^{さか}った、昼でも人の通

らない所を扱よつてあるいていると、いつの間まにか紅こう

じんばんじょう

塵万丈の都会に住んでる気はなくなつて、山の中へ
迷い込んだような心持ちになるに相違ないです」

「そんな心持ちになつてどうするんだい」

「そんな心持ちになつて、しばらくたたず佇んでいるとた

ちまち動物園のうちで、虎が鳴くんです」

うま

「そう旨うまく鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き声は昼でも理科大学へ

聞えるくらいなんですから、深夜げきせき閑寂として、四望しぼう

人なく、鬼気はだえ肌せまに逼つて、魑魅ちみ鼻を衝つく際さいに……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を云うじやありませんか、怖こわい時に」

「そうかな。あんまり聞かないようだが。それで」

「それで虎が上野の老杉ろうさんの葉をことごとく振り落す

ような勢で鳴くでしょう。物凄いでさあ」

「そりや物凄いだろう」

「どうです冒険に出掛けませんか。きっと愉快だろうと思うんです。どうしても虎の鳴き声は夜なかに聞かなくっちゃ、聞いたとはいわれなйдらうと思うんです」

「そうさな」と主人は武右衛門君の哀願に冷淡であ

るごとく、寒月君の探検にも冷淡である。

この時まで默然^{もくねん}として虎の話を羨^{うらや}ましそうに聞い

ていた武右衛門君は主人の「そうさな」で再び自分の身の上を思い出したと見えて、「先生、僕は心配なんですが、どうしたらいいでしょう」とまた聞き返す。寒月君は不審な顔をしてこの大きな頭を見た

。吾輩は思う仔細^{しさい}あつてちよつと失敬して茶の間へ

廻る。

茶の間では細君がくすくす笑いながら、京焼の安茶碗に番茶を浪々なみなみと注ついで、アンチモニ―の茶托ちやたくの上へ載せて、

「雪江さん、憚はばかりさま、これを出して来て下さい」

「わたし、いやよ」

「どうして」と細君は少々驚ろいた体ていで笑いをはた

と留める。

「どうしても」と雪江さんはやにすました顔を即席にこしらえて、傍そばにあつた読売新聞の上にのしかかるように眼を落した。細君はもう一応きようしやう協商を始め
る。

「あら妙な人ね。寒月さんですよ。構やしないわ」
「でも、わたし、いやなんですもの」と読売新聞の

上から眼を放さない。こんな時に一字も読めるものではないが、読んでいないなどとあばかれたらまた泣き出すだろう。

「ちつとも恥かしい事はないじゃありませんか」と今度は細君笑いながら、わざと茶碗を読売新聞の上へ押しやる。雪江さんは「あら人の悪るい」と新聞を茶碗の下から、抜こうとする拍子に茶托に引きか

ちやたく

かつて、番茶は遠慮なく新聞の上から畳の目へ流れ込む。「それ御覧なさい」と細君が云うと、雪江さんは「あら大変だ」と台所へ馳かけ出して行つた。雑ぞう巾きんでも持つてくる了りよう見けんだろう。吾輩にはこの狂言がちよつと面白かつた。

寒月君はそれとも知らず座敷で妙な話を話している。

「先生障子しょうじを張り易かえましたね。誰が張ったんです

「女が張ったんだ。よく張れているだろう」

「ええなかなかうまい。あの時々おいでになる御嬢さんが御張りになったんですか」

「うんあれも手伝ったのさ。このくらい障子が張れば嫁に行く資格はあると云って威張ってるぜ」

「へえ、なるほど」と云いながら寒月君障子を見つめている。

「こつちの方は平たいらですが、右の端はじは紙が余つて波が出来ていますね」

「あすこが張りたてのところで、もつとも経験の乏とぼしい時に出来上ったところさ」

「なるほど、少し御手際おてぎわが落ちますね。あの表面は

超絶的曲線ちようぜつてききよくせんでとうてい普通のフ

ァンクシヨンではあ

らわせないです」と、理学者だけにむずかしい事を

云うと、主人は

「そうさね」と好い加減な挨拶をした。

この様子ではいつまで嘆願をしても、とうて

い見込がないと思ひ切った武右衛門君は突然かの偉

大なる頭蓋骨ずがいこつを畳の上

にお圧しつけて、無言の裡うちに暗

に訣別けつべつの意を表した。主人は「帰るかい」と云った

。武右衛門君は悄然しょうぜんとして薩摩下駄を引きずって門

を出た。可愛想かわいそうに。打ちやつて置くと巖頭がんとうの吟ぎんでも

書いて華嚴けごん滝から飛び込むかも知れない。元を糺ただせ

ば金田令嬢のハイカラと生意氣から起った事だ。も

し武右衛門君が死んだら、幽霊になつて令嬢を取り

殺してやるがいい。あんなものが世界から一人や二

人消えてなくなつたつて、男子はすこしも困らない。
寒月君はもつと令嬢らしいのを貰うがいい。

「先生ありや生徒ですか」

「うん」

「大変大きな頭ですね。学問は出来ますか」

「頭の割には出来ないがね、時々妙な質問をするよ

こないだコロンバスを訳して下さいって大に弱つ
おおい

た」

「全く頭が大き過ぎますからそんな余計な質問をするんでしよう。先生何とおっしゃいました」

「ええ？　なあに好^い加減な事を云って訳してやつた」

「それでも訳す事は訳したんですか、こりやえらい

」

「小供は何でも訳してやらないと信用せんからね」

「先生もなかなか政治家になりましたね。しかし今の様子では、何だか非常に元気がなくって、先生を困らせるようには見えないじゃありませんか」

「今日は少し弱ってるんだよ。馬鹿な奴だよ」

「どうしたんです。何だかちよつと見たばかりで非常に可哀想かわいそうになりました。全体どうしたんです」

「なに愚^ぐな事さ。金田の娘に艶書^{えんしょ}を送ったんだ」

「え？ あの大頭がですか。近頃の書生はなかなかえらいもんですね。どうも驚ろいた」

「君も心配だろうが……」

「何ちつとも心配じゃありません。かえって面白いです。いくら、艶書が降り込んだって大丈夫です」

「そう君が安心していれば構わないが……」

「構わんですとも私はいっこう構いません。しかしあの大頭が艶書をかいたと云うには、少し驚ろきますね」

「それがさ。じょうだん冗談にしたんだよ。あの娘がハイカラで生意気だから、からかってやろうって、三人が共同して……」

「三人が一本の手紙を金田の令嬢にやったんですか

。ますます奇談ですね。一人前の西洋料理を三人で食うようなものじゃありませんか」

「ところが手分けがあるんだ。一人が文章をかく、一人が投函^{とうかん}する、一人が名前を借す。で今来たのが名前を借した奴なんだがね。これが一番愚^ぐだね。しかも金田の娘の顔も見た事がないって云うんだぜ。どうしてそんな無茶な事が出来たものだろう」

「そりや、近来の大出来ですよ。傑作ですね。どうもあの大頭が、女に文をやるなんて面白いじやありませんか」

「飛んだ間違にならあね」

「なになつたつて構やしません、相手が金田ですもの」

「だって君が貰うかも知れない人だぜ」

「貰うかも知れないから構わないんです。なあに、

金田なんか、構やしません」

「君は構わなくっても……」

「なに金田だって構やしません、大丈夫です」

「それならそれでいいとして、当人があとになって

、急に良心に責められて、恐ろしくなったものだから、

大に恐縮して僕のうちへ相談に来たんだ」
おい

「へえ、それであんなにしおしお悄々としているんですか、

気の小さい子と見えますね。先生何とか云っておやんなすったんでしよう」

「本人は退校になるでしようかって、それを一番心配しているのさ」

「何で退校になるんです」

「そんな悪るい、不道德な事をしたから」

「何、不道德と云うほどでもありませんやね。構やしません。金田じや名誉に思つてきつと吹聴ふいちようしていただきますよ」

「まさか」

「とにかく可愛かわいそう想ですよ。そんな事をするのがわるいとしても、あんなに心配させちや、若い男を一人殺してしまいますよ。ありや頭は大きいが人相はそ

んなにわるくありません。鼻なんかぴくぴくさせて可愛いです」

「君も大分迷亭見たように呑気のんきな事を云うね」

「何、これが時代思潮です、先生はあまり昔むかし風ふうだ

から、何でもむずかしく解釈なさるんです」

「しかし愚ぐじやないか、知りもしないところへ、い

たずらに艶書えんしよを送るなんて、まるで常識をかいてる

じゃないか」

「いたずらは、たいがい常識をかいていまさあ。救つておやんなさい。功德くどくになりますよ。あの容子ようすじや華嚴けごんの滝へ出掛けますよ」

「そうだな」

「そうなさい。もっと大きな、もっと分別のある大僧ぞう共がそれどころじゃない、わるいいたずらをして

知らん面かおをしていますよ。あんな子を退校させるくらいなら、そんな奴らを片かたっ端はしから放逐でもしなく
つちや不公平でさあ」

「それもそうだね」

「それでどうです上野へ虎の鳴き声をききに行くの
は」

「虎かい」

「ええ、聞きに行きましよう。実は二三日中にさんちうちにちよ

つと帰国しなければならぬ事が出来ましたから、

当分どこへも御伴おともは出来ませんから、今日は是非い

つしよに散歩をしようと思つて来たんです」

「そうか帰るのかい、用事でもあるのかい」

「ええちよつと用事が出来たんです。——ともかく

も出ようじやありませんか」

「そう。それじゃ出ようか」

「さあ行きましよう。今日は私が晩餐を奢りますか

ばんさん

おごこ

ら、——それから運動をして上野へ行くとちようど

好い刻限です」としきりに促がすものだから、主人

うな

もその気になって、いっしょに出掛けて行つた。あ

とでは細君と雪江さんが遠慮のない声でげらげらけ

らけらからからと笑っていた。

床の間の前に碁盤を中に据^すえて迷亭君と独仙君が対坐している。

「ただはやらない。負けた方が何か奢^{おご}るんだぜ。いいかい」と迷亭君が念を押すと、独仙君は例のごと

く山羊髯やぎひげを引つ張りながら、こう云いつた。

「そんな事をすると、せつかくの清戯せいぎを俗了ぞくりようしてし

まう。かけなどで勝負に心を奪われては面白くない

。成敗せいはいを度外どがいにおいて、白雲の自然しぜんに岫しゅうを出でて冉ぜん

々ぜんたるごとき心持ちで一局を了してこそ、個中こちゅうの味あじわい

はわかるものだよ」

「また来たね。そんな仙骨を相手にしちや少々骨が

折れ過ぎる。宛然^{えんぜん}たる列仙伝中の人物だね」

「無絃^{むげん}の素琴^{そきん}を弾じさ」

「無線の電信をかけかね」

「とにかく、やろう」

「君が白を持つのかい」

「どっちでも構わない」

「さすがに仙人だけあって鷹揚^{おうよう}だ。

君が白なら自然

の順序として僕は黒だね。さあ、来たまえ。どこからでも来たまえ」

「黒から打つのが法則だよ」

「なるほど。しからば謙遜^{けんそん}して、定石^{じょうせき}にここいらから行こう」

「定石にそんなのはないよ」

「なくっても構わない。新奇発明の定石だ」

吾輩は世間が狭いから碁盤と云うものは近来になつて始めて拝見したのだが、考えれば考えるほど妙に出来ている。広くもない四角な板を狭苦しく四角に仕切つて、目が眩くらむほどごたごたと黒白こくびやくの石をならべる。そうして勝つたとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騒いでいる。

高が一尺四方くらいの面積だ。猫の前足で掻かき散ら

しても滅茶滅茶になる。引き寄せて結べば草の庵にいおり

て、解くればもとの野原なりけり。入らざるいたず

らだ。ふところで懷手をして盤を眺めている方が遙かはるに氣樂で

ある。それも最初の三四十目もくは、石の並べ方では別

段目障りめざわにもならないが、いざ天下わけ目と云う間ま

際きわに覗のぞいて見ると、いやはや御氣の毒な有様だ。白

と黒が盤から、こぼれ落ちるまでに押し合つて、御

互にギューギュー云っている。窮屈だからと云つて、隣りの奴にどいて貰う訳にも行かず、邪魔だと申して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命とあきらめて、じつとして身動きもせず、すくんでいるよりほかに、どうする事も出来ない。碁を発明したものは人間で、人間の嗜好しこうが局面にあらわれるものとすれば、窮屈なる碁石の運命はせせこましい人間

の性質を代表していると云つても差支さしつかえない。人間

の性質が基石の運命で推知すいちする事が出来るものとす

れば、人間とは天空海濶てんくうかいかつの世界を、我からと縮めて

己おのれの立つ両足以外には、どうあつても踏み出せ

ぬように、小刀細工こがたなざいくで自分の領分に縄張りをするの

が好きなんだと断言せざるを得ない。人間とはしい

て苦痛を求めめるものであると一言いちごんに評してもよかる

う。

呑のん氣きなる迷亭君と、禪ぜん機きある独仙君とは、どう云

う了見か、今日に限って戸棚から古碁盤を引きずり出して、この暑苦しいいたずらを始めたのである。

さすがに御兩人御揃おそろいの事だから、最初のうちは各

自任意の行動をとって、盤の上を白石と黒石が自由自在に飛び交わしていたが、盤の広さには限りがあ

つて、横よこ豎たての目盛りは一手ひとてごとに埋うまつて行くのだから、いかに吞氣でも、いかに禅機があつても、苦しくなるのは当り前である。

「迷亭君、君の碁は乱暴だよ。そんな所へ這入はいつてくる法はない」

「禅坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、ほんいんぼう本因坊の流儀じゃ、あるんだから仕方がないさ」

「しかし死ぬばかりだぜ」

「臣死をだも辞せず、いわんやていけん屍肩をやと、一つ、
こう行くかな」

「そうおいでになつたと、よろしい。薰風みんなみ南より来
つて、殿閣微涼びりようを生ず。こう、ついでおけば大丈夫
なものだ」

「おや、ついだのは、さすがにえらい。まさか、つ

ぐ氣遣きづかいはなかうと思つた。ついで、くりやるな八はち

まんがね

幡鐘をと、こつやつたら、どうするかね」

「どうするも、こつするもないさ。一剣天に倚よつて

寒し——ええ、面倒だ。思い切つて、切つてしまえ

」

「やや、大變大變。そこを切られちや死んでしまふ

じようだん

。おい冗談じようだんじゃない。ちよつと待つた」

「それだから、さつきから云わん事じゃない。こうなつてるところへは這はい入れるものじゃないんだ」

「這入つて失敬つかまつ仕り候。ちよつとこの白をとつてく

れたまえ」

「それも待つのかい」

「ついでにその隣りのも引き揚げて見てくれたまえ」

「

「ずうずうしいぜ、おい」

「Do you see the boy か。——なに君と僕の間柄じやないか。そんな水臭い事を言わずに、引き揚げてくれたまえな。死ぬか生きるかと云う場合だ。しばらく、しばらくって花道はなみちから馳かけ出してくるところだよ」

「そんな事は僕は知らんよ」

「知らなくつてもいいから、ちよつとどけたまえ」

「君さつきから、六返^{ぺん}待ったをしたじゃないか」

「記憶のいい男だな。向後^{こうご}は旧に倍し待ったを仕^{つかまつ}り

候。だからちよつとどけたまえと云うのだあね。君

もよツぽど強情だね。座禪なんかしたら、もう少し

捌^{さば}けそんなものだ」

「しかしこの石でも殺さなければ、僕の方は少し負

けになりそうだから……」

「君は最初から負けても構わない流じゃないか」

「僕は負けても構わないが、君には勝たしたくない」

「飛んだ悟道だ。相変らず春風影裏しゅんぷうえいりに電光でんこうをきって

るね」

「春風影裏じゃない、電光影裏だよ。君のは逆ださかさ」

「ハハハハもうたいてい逆さかになつていい時分だと思つたら、やはりたしかなところがあるね。それじや仕方がないあきらめるかな」

「生死事大、しょうじじだい無常迅速、むじょうじんそくあきらめるさ」

「アーメン」と迷亭先生今度はまるで関係のない方面へびしやりと一石いっせきを下くだした。

床の間の前で迷亭君と独仙君が一生懸命しゅえいに輸贏しゅえいを

争っている、座敷の入口には、寒月君と東風君が相ならんでその傍そばに主人が黄色い顔をして坐っている。寒月君の前に鰹節かつぶしが三本、裸のまま畳の上に行儀よく排列してあるのは奇観である。

この鰹節の出処しゅっしょは寒月君の懷ふところで、取り出した時は暖あつたかく、手のひらに感じたくらい、裸ながらぬくもっていた。主人と東風君は妙な眼をして視線を鰹

節の上に注いでいると、寒月君はやがて口を開いた。

「実は四日ばかり前に国から帰つて来たのですが、いろいろ用事があつて、方々馳^かけあるいていたものですから、つい上がられなかつたのです」

「そう急いでくるには及ばないさ」と主人は例のごとく無^ぶ愛^{あい}嬌^{きょう}な事を云う。

「急いで来んでもいいのですけれども、このおみやげを早く献上けんじょうしないと心配ですから」

「鰹節じゃないか」

「ええ、国の名産です」

「名産だつて東京にもそんなのは有りそうだぜ」と主人は一番大きな奴を一本取り上げて、鼻の先へ持つて行つて臭いにおをかいで見る。

「かいだつて、鰹節の善悪はわかりませんよ」
よしあし

「少し大きいのが名産たる所以かね」
ゆえん

「まあ食べて御覧なさい」

「食べる事はどうせ食べるが、こいつは何だか先が
欠けてるじゃないか」

「それだから早く持って来ないと心配だと云うので
す」

「なぜ？」

「なぜって、そりや鼠ねずみが食ったのです」

「そいつは危険だ。滅多めったに食うとペストになるぜ」

「なに大丈夫、そのくらいかじったって害はありません」

「全体どこで噛かじったんだい」

「船の中です」

「船の中？　どうして」

「入れる所がなかったから、ヴァイオリンといっしよに袋のなかへ入れて、船へ乗ったら、その晩にやられました。鰹節かつぶしだけなら、いいのですけれども、

大切なヴァイオリンの胴を鰹節と間違えてやはり少々かじ噛りました」

「そそっかしい鼠だね。船の中に住んでると、そう

見境みさかいがなくなるものかな」と主人は誰にも分らん事を云つて依然として鰹節を眺ながめている。

「なに鼠だから、どこに住んでてもそそっかしいの
でしよう。だから下宿へ持つて来てもまたやられそ
うでね。剣吞けんどんだから夜よるは寢床の中へ入れて寢まし
た」

「少しきたないようだぜ」

「だから食べる時にはちよつとお洗いなさい」

「ちよつとくらいじや奇麗にやなりそうもない」

「それじや灰汁あくでもつけて、ごしごし磨いたらいい

でしょう」

「ヴァイオリンも抱いて寝たのかい」

「ヴァイオリンは大き過ぎるから抱いて寝る訳には行かないんですが……」と云いかけると

「なんだって？　ヴァイオリンを抱いて寝たって？

それは風流だ。行く春や重たき琵琶びわのだき心と云

う句もあるが、それは遠きその上かみの事だ。明治の秀

才はヴァイオリンを抱いて寝なくつちや古人を凌しのぐ

訳には行かないよ。かい巻まきに長き夜守よもるやヴァイオ

リンはどうだい。東風君、新体詩でそんな事が云え

るかい」と向うの方から迷亭先生大きな声でこつち

の談話にも関係をつける。

東風君は真面目で「新体詩は俳句と違ってそう急には出来ません。しかし出来た暁にはもう少し生靈せいらいの機微きびに触れた妙音が出ます」

「そうかね、生靈しょうりょうはおがらを焚たいて迎え奉るものと
思ってたが、やっぱり新体詩の力でも御来臨になる
かい」と迷亭はまだ碁をそつちのけにして調戲からかつてい

る。

「そんな無駄口を叩く^{たた}とまた負けるぜ」と主人は迷亭に注意する。迷亭は平気なもので

「勝ちたくても、負けたくても、相手が釜中^{ふちゅう}の章魚^{たこ}

同然手も足も出せないのだから、僕も無聊^{ぶりよう}でやむを

得ずヴァイオリンの御仲間^{つかまつ}を仕るのさ」と云うと、

相手の独仙君はいささか激した調子で

「今度は君の番だよ。こっちで待ってるんだ」と云い放った。

「え？　もう打ったのかい」

「打ったとも、とうに打ったさ」

「どこへ」

「この白をはすに延ばした」

「なあるほど。この白をはすに延ばして負けにけり

か、そんならこっちはと——こっちは——こっちは
こっちはとて暮れにけりと、どうもいい手がないね。
君もう一返打たしてやるから勝手なところへ一目打
いちもく
ちたまえ」

「そんな碁があるものか」

「そんな碁があるものかなら打ちましょう。——そ
れじゃこのかど地面へちよつと曲がつて置くかな。

——寒月君、君のヴァイオリンはあんまり安いから
鼠が馬鹿にして噛^{かじ}るんだよ、もう少しいいのを奮発
して買うさ、僕が以太^{イタリ}亞から三百年前の古物^{こぶつ}を取
り寄せてやろうか」

「どうか願います。ついでにお払いの方も願いたい
もので」

「そんな古いものが役に立つものか」と何にも知ら

ない主人は一喝いっかつにして迷亭君を極きめつけた。

「君は人間の古物こぶつとヴァイオリンの古物こぶつと同一視し

ているんだろう。人間の古物でも金田某のごときも

のは今だに流行しているくらいだから、ヴァイオリ
ンに至っては古いほどがいいのさ。――さあ、独仙

君どうか御早く願おう。けいまさのせりふじゃない
が秋の日は暮れやすいからね」

「君のようなせわしない男と碁を打つのは苦痛だよ。考える暇も何もありやしない。仕方がないから、ここへ一目^{いちもく}入れて目^めにしておこう」

「おやおや、とうとう生かしてしまった。惜しい事をしたね。まさかそこへは打つまいと思つて、いささか駄弁^{ふる}を振つて肝胆^{かんたん}を砕いていたが、やッぱり駄目か」

「当り前さ。君のは打つのじゃない。ごまかすのだ」

「それが本因坊流、金田流、当世紳士流さ。――お

い苦沙弥先生、さすがに独仙君は鎌倉へ行つて万年漬を食つただけあつて、物に動じないね。どうも敬々服々だ。碁はまずいが、度胸は据^{すわ}つてる」

「だから君のような度胸のない男は、少し真似をす

るがいい」と主人が後ろ向うしむきのまままで答えるやいなや、

迷亭君は大きな赤い舌をぺろりと出した。独仙君は

毫ごうも関せざるものごとく、「さあ君の番だ」とま

た相手を促うながした。

「君はヴァイオリンをいつ頃から始めたのかい。僕

も少し習おうと思うのだが、よっぽどむずかしいも

のだそうだね」と東風君が寒月君に聞いている。

「うむ、一と通りなら誰にでも出来るさ」

「同じ芸術だから詩歌しいかの趣味のあるものはやはり音

楽の方でも上達が早いだろうと、ひそかに恃たのむところ

があるんだが、どうだろう」

「いいだろう。君ならきつと上手になるよ」

「君はいつ頃から始めたのかね」

「高等学校時代さ。——先生わたく私のヴァイオリンを

習い出した顛末^{てんまつ}をお話しした事がありましたかね」

「いいえ、まだ聞かない」

「高等学校時代に先生でもあつてやり出したのかい」

「なあに先生も何もありやしない。独習さ」

「全く天才だね」

「独習なら天才と限った事もなかろう」と寒月君は

つんとする。天才と云われてつんとするのは寒月君だけだろう。

「そりや、どうでもいいが、どう云う風に独習したのかちよつと聞かしたまえ。参考にしたいから」

「話してもいい。先生話しましょうかね」

「ああ話したまえ」

「今では若い人がヴァイオリンの箱をさげて、よく

往来などがあるいておりますが、その時分は高等学校生で西洋の音楽などをやったものはほとんどなかつたのです。ことに私のおつた学校は田舎いなかの田舎で

あさうらぞうり

麻裏草履さえないと云うくらいな質朴な所でしたか

ら、学校の生徒でヴァイオリンなどを弾ひくものはもちろん一人もありません。……」

「何だか面白い話が向うで始まつたようだ。独仙君

いい加減に切り上げようじゃないか」

「まだ片づかない所が二三箇所ある」

「あつてもいい。大概な所なら、君に進上する」

「そう云つたつて、貰う訳にも行かない」

「禅学者にも似合わんきちようめん几帳面な男だ。それじゃ一いっき気

呵かせい成にやつちまおう。——寒月君何だかよつぽど面

白そうだね。——あの高等学校だろう、生徒が裸足はだし

で登校するのは……」

「そんな事はありません」

「でも、皆みんなはだしで兵式体操をして、廻れ右をやるんで足の皮が大変厚くなつてると云う話だぜ」

「まさか。だれがそんな事を云いました」

「だれでもいいよ。そうして弁当には偉大なる握り

飯を一個、夏蜜柑なつみかんのように腰へぶら下げて来て、そ

れを食うんだって云うじゃないか。食うと云うより
むしろ食いつくんだね。すると中心から梅干が一個
出て来るそうだ。この梅干が出るのを楽しみに塩氣
のない周囲を一心不乱に食い欠いて突進するんだと
云うが、なるほど元氣旺盛おうせいなものだね。独仙君、君
の氣に入りそうな話だぜ」

「質朴剛健でたのもしいい氣風だ」

「まだたのもしき事がある。あすこには灰吹きはいふがな

いそうだ。僕の友人があすこへ奉職をしている頃吐と

月峰げっほうの印いんのある灰吹きを買いに出たところが、吐月

峰どころか、灰吹と名づくべきものが一個もない。

不思議に思つて、聞いて見たら、灰吹きなどは裏の

藪やぶへ行つて切つて来れば誰にでも出来るから、売る

必要はないと澄まして答えたそうだ。これも質朴剛

健の気風をあらわす美譚びだんだろう、ねえ独仙君」

「うむ、そりやそれでいいが、ここへ駄目を一つ入れなくちやいけない」

「よろしい。駄目、駄目、駄目と。それで片づいた。

——僕はその話を聞いて、実に驚いたね。そんなと

ころで君がヴァイオリンを独習したのは見上げたも

のだ。惇独けいどくにして不羣ふぐんなりと楚辞そじにあるが寒月君は

全く明治の屈原くつげんだよ」

「屈原はいやですよ」

「それじゃ今世紀のウエルテルさ。――なに石を上げて勘定をしろ？ やに物堅い性質ものがただね。勘定しなくっても僕は負けてるからたしかだ」

「しかし極きまりがつかないから……」

「それじゃ君やってくれたまえ。僕は勘定所じやな

い。一代の才人ウエルテル君がヴァイオリンを習い出した逸話を聞かなくっちゃ、先祖へ済まないから失敬する」と席をはずして、寒月君の方へすり出して来た。独仙君は丹念に白石を取っては白の穴を埋^うめて来た。黒石を取っては黒の穴を埋めて、しきりに口の内^{うち}で計算をしている。寒月君は話をつづける。

「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがま

た非常に頑固かんこなので、少しでも柔弱なものがおつて

は、他県の生徒に外聞がわるいと云つて、むやみに制裁を嚴重にしましたから、ずいぶん厄介でした」

「君の国の書生と来たら、本当に話せないね。元来

何だつて、紺こんの無地の袴はかまなんぞ穿はくんない。第一だいちあ

れからして乙おつだね。そうして塩風に吹かれつけてい

るせいかな、どうも、色が黒いね。男だからあれで済

むが女があれじゃさぞかし困るだろう」と迷亭君が
一人這入ると肝心はいかんじんの話はどつかへ飛んで行っしま
う。

「女もあの通り黒いのです」

「それでよく貰い手があるね」

「だって一国中いっごくじゅうことごとく黒いのだから仕方があり
ません」

「因果いんがだね。ねえ苦沙弥君」

「黒い方がいいだろう。生なまじ白いと鏡を見るたんび

に己惚おのぼれが出ていけない。女と云うものは始末におえ

ない物件だからなあ」と主人は喟然きぜんとして大息たいそくを洩も

らした。

「だって一國中ことごとく黒ければ、黒い方で己惚うぬぼ

れはしませんか」と東風君がもつともな質問をかけ

た。

「ともかくも女は全然不必要な者だ」と主人が云うと、

「そんな事を云うと妻君が後でご機嫌がわるいぜ」と笑いながら迷亭先生が注意する。

「なに大丈夫だ」

「いないのかい」

「小供を連れて、さつき出掛けた」

「どうれで静かだと思った。どこへ行つたのだい」

「どこだか分らない。勝手に出てあるくのだ」

「そうして勝手に帰ってくるのかい」

「まあそうだ。君は独身でいいなあ」と云うと東風

君は少々不平な顔をする。寒月君はにやにやと笑う。

迷亭君は

「妻さいを持つとみんなそう云う氣になるのさ。ねえ独
仙君、君なども妻君難の方だろう」

「ええ？　ちよつと待った。四六二十四、二十五、

二十六、二十七と。狭いと思ったら、四十六目もくある

か。もう少し勝ったつもりだったが、こしらえて見
ると、たった十八目の差か。——何だつて？」

「君も妻君難だろうと云うのさ」

「アハハハハ別段難でもないさ。僕の妻は元来僕を愛しているのだから」

「そいつは少々失敬した。それでこそ独仙君だ」

「独仙君ばかりじゃありません。そんな例はいくらでもありますよ」と寒月君が天下の妻君に代ってちよつと弁護の労を取った。

「僕も寒月君に賛成する。僕の考では人間が絶対の

域いきに入るには、ただ二つの道があるばかりで、その

二つの道とは芸術と恋だ。夫婦の愛はその一つを代

表するものだから、人間は是非結婚をして、この幸

福を完まっうしなければ天意に背そむく訳だと思ふんだ。――

「がどうでしょう先生」と東風君は相変らず真面目で迷亭君の方へ向き直った。

「御名論だ。僕などはとうてい絶対の境きょうに這はい入れそ

うもない」

「妻を貰え^{さい}ばなお這入れやしない」と主人はむずかしい顔をして云った。

「ともかくも我々未婚の青年は芸術の靈氣にふれて向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分らないですから、まず手始めにヴァイオリンでも習おう
と思つて寒月君にさつきから^{けいけんたん}経験譚をきいているの

です」

「そうそう、ウエルテル君のヴァイオリン物語を拝聴するはずだったね。さあ話し給え。もう邪魔はしないから」と迷亭君がようやく鋒鋦ほうごを収めると、

「向上の一路はヴァイオリンなどで開ける者ではない。そんな遊戯三昧ゆうぎざんまいで宇宙の真理が知れては大変だ。

い。そんな遊戯三昧で宇宙の真理が知れては大変だ。
しやり
這裡の消息を知ろうと思えばやはり懸崖けんがいに手を撒さし

て、絶後^{ぜつご}に再び蘇^{よみが}える底^{てい}の気魄^{きはく}がなければ駄目だ」

と独仙君はもったい振って、東風君に訓戒じみた説教をしたのはよかったが、東風君は禪宗のぜの字も知らない男だから頓^{とん}と感心したようすもなく

「へえ、そうかも知れませんが、やはり芸術は人間^{かつぎょう}の渴仰の極致を表わしたものだと思いますから、ど

うしてもこれを捨てる訳には参りません」

「捨てる訳に行かなければ、お望み通り僕のヴァイオリン談をして聞かせる事にしよう、で今話す通りの次第だから僕もヴァイオリンの稽古をはじめめるまでには大分苦心だいぶをしたよ。第一買うのに困りましたよ先生」

「そうだろう麻裏草履あさうらぞうりがない土地にヴァイオリンがあるはずがない」

「いえ、ある事はあるんです。金も前から用意して溜めたから差支さしつかえないのですが、どうも買えないのです」

「なぜ？」

「狭い土地だから、買っておればすぐ見つかります。見つければ、すぐ生意気だと云うので制裁を加えられます」

「天才は昔から迫害を加えられるものだからね」と
東風君は大に同情を表した。おおい

「また天才か、どうか天才呼ばわりだけは御免蒙りごめんこうむ

たいね。それでね毎日散歩をしてヴァイオリンのあ

る店先を通るたびにあれが買えたら好かろう、あれ

を手に抱えた心持ちはどんなだろう、ああ欲しい、かか

ああ欲しいと思わない日は一日もなかつたのです」いちんち

「もつともだ」と評したのは迷亭で、「妙に凝こったものだね」と解げしかねたのが主人で、「やはり君、天才だよ」と敬服したのは東風君である。ただ独仙君ばかりは超然として髯ひげを撚ねんしている。

「そんな所にどうしてヴァイオリンがあるかが第一ご不審かも知れないですが、これは考えて見ると当り前の事です。なぜと云うとこの地方でも女学校が

あつて、女学校の生徒は課業として毎日ヴァイオリンを稽古しなければならぬのですから、あるはず
です。無論いいのはありません。ただヴァイオリン
と云う名が辛^{かろ}うじてつくくらしいのものであります。

だから店でもあまり重きをおいていないので、二三
挺いっしよに店頭へ吊^つるしておくのです。それがね、
時々散歩をして前を通るときに風が吹きつけたり、

小僧の手が障さわったりして、そら音ねを出す事がありま
す。その音ねを聞くと急に心臓が破裂しそうな心持で、
いても立ってもいられなくなるんです」

「危険だね。水癲癇みずてんかん、人癲癇ひとてんかんと癲癇にもいろいろ種

類があるが君のはウエルテルだけあって、ヴァイオ
リン癲癇だ」と迷亭君が冷やかすと、

「いやそのくらい感覚が鋭敏でなければ真の芸術家

にはなれないですよ。どうしても天才肌だ」と東風君はいよいよ感心する。

「ええ実際癲癇てんかんかも知れませんが、しかしあの音色ねいろ

だけは奇体ですよ。その後今日まで随分ひきました

があねのくらい美しい音が出た事があります。そう

さ何と形容していいでしょう。とうてい言いあらわ

せないです」

りんろうぎゆうそう

「琳琅瑋鏘として鳴るじゃないか」とむずかしい事を持ち出したのは独仙君であつたが、誰も取り合わなかつたのは気の毒である。

「私が毎日毎日店頭を散歩しているうちにとうとうこの靈異な音ねを三度ききました。三度目にどうあつてもこれは買わなければならぬと決心しました。

たとい
仮令国のものから譴責けんせきされても、他県のものから輕けい

蔑べつされても——よし鉄拳制裁てっけんのために絶息ぜっそくしても——

——まかり間違つて退校の処分を受けても——、こればかりは買わずにいられないと思ひました」

「それが天才だよ。天才でなければ、そんなに思い込める訳のものじゃない。うらやま羨しい。僕もどうかして、

それほど猛烈な感じを起して見たいと年来心掛けているが、どうもいけないね。音楽会などへ行つて出

来るだけ熱心に聞いているが、どうもそれほどに感興が乗らない」と東風君はしきりに羨うらやましがっている。

「乗らない方が仕合せだよ。今でこそ平気で話すよ
うなもののその時の苦しみはとうてい想像が出来る
ような種類のもものではなかった。——それから先生
とうとう奮発して買いました」

「ふむ、どうして」

「ちょうど十一月の天長節の前の晩でした。国のも
のは揃^{そろ}って泊りがけに温泉に行きましたから、一人
もいません。私は病気だと云って、その日は学校も
休んで寝ていました。今晚こそ一つ出て行^{かね}って兼て
望みのヴァイオリンを手に入れようと、床の中でそ
の事ばかり考えていました」

「偽病をつかつて学校まで休んだのかい」
けびよう

「全くそうです」

「なるほど少し天才だね、こりや」と迷亭君も少々
恐れ入った様子である。

「夜具の中から首を出していると、日暮れが待遠で
まちどお

たまりません。仕方がないから頭からもぐり込んで
眼を眠ねむって待って見ましたが、やはり駄目です。

首を出すと烈しい秋の日が、六尺の障子しょうじへ一面にあ
たつて、かんかんするには癩癩かんしゃくが起りました。上の
方に細長い影がかたまつて、時々秋風にゆすれるの
が眼につきます」

「何だい、その細長い影と云うのは」

「渋柿の皮を剥むいて、軒へ吊つるしておいたのです」

「ふん、それから」

「仕方がないから、床とこを出て障子をあけて椽側えんがわへ出

て、渋柿の甘干あまぼしを一つ取って食いました」

「うまかったかい」と主人は小供みたような事を聞く。

「うまいですよ、あの辺の柿は。とうてい東京などじゃあの味はわかりませんね」

「柿はいいがそれから、どうしたい」と今度は東風

君がきく。

「それからまたもぐって眼をふさいで、早く日が暮れればいいがと、ひそかに神仏に念じて見た。約三四時間も立ったと思う頃、もうよかろうと、首を出すにあにはからんや烈しい秋の日は依然として六尺の障子を照らしてかんかんする、上の方に細長い影がかたまつて、ふわふわする」

「そりや、聞いたよ」

なんべん

「何返もあるんだよ。それから床を出て、障子をあけて、甘干しの柿を一つ食つて、また寢床へ這はい入つて、早く日が暮ればいいと、ひそかに神仏に祈念をこらした」

「やっぱりもとのところじゃないか」

「まあ先生そう焦せかずに聞いて下さい。それから約

しんぼう

三四時間夜具の中で辛抱して、今度こそもうよかろうとぬつと首を出して見ると、烈しい秋の日は依然として六尺の障子へ一面にあたつて、上の方に細長い影がかたまつて、ふわふわしている」

「いつまで行つても同じ事じゃないか」

「それから床を出て障子を開けて、椽側へ出て甘干

えんがわ

しの柿を一つ食つて……」

「また柿を食ったのかい。どうもいつまで行っても柿ばかり食ってて際限がないね」

「私もじれったくてね」

「君より聞いてる方がよっぽどじれったいぜ」

「先生はどうも性急だせっかちから、話がしにくくって困ります」

「聞く方も少しは困るよ」と東風君も暗あんに不平を洩も

らした。

「そう諸君が御困りとある以上は仕方がない。たい
ていにして切り上げましょう。要するに私は甘干し
の柿を食つてはもぐり、もぐつては食い、とうとう
軒端のきばに吊つるした奴をみんな食つてしまいました」
「みんな食つたら日も暮れたろう」

「ところがそう行かないので、私が最後の甘干しを

食つて、もうよかろうと首を出して見ると、相変らず烈しい秋の日が六尺の障子へ一面にあたつて……

」

「僕あ、もう御免だ。いつまで行つても果て^はしがない」

「話す私も飽^あき飽きします」

「しかしそのくらい根気があればたいいの事業は

成就するよ。じょうじゆだまつてたら、あしたの朝まで秋の日

がかんかんするんだろう。全体いつ頃にヴァイオリ

ンを買う気なんだい」とさすがの迷亭君も少し辛抱しんぼう

し切れなくなつたと見える。ただ独仙君のみは泰然

として、あしたの朝までも、あさつての朝までで

も、いくら秋の日がかんかんしても動ずる気色けしきはさ

らにない。寒月君も落ちつき払つたもので

「いつ買う気だとおっしやるが、晩になりさえすれば、すぐ買いに出掛けるつもりなのです。ただ残念な事には、いつ頭を出して見ても秋の日がかんかんしているものですから——いえその時の私わたくしの苦しみと云ったら、とうてい今あなた方の御じれになるどころの騒ぎじゃないです。私は最後の甘干を食つても、まだ日が暮れないのを見て、げんぜん 泫然として思わ

ず泣きました。東風君、僕は実に情けなくつて泣いたよ」

「そうだろう、芸術家は本来多情多恨だから、泣いた事には同情するが、話はもっと早く進行させたいものだね」と東風君は人がいいから、どこまでも真面目で滑稽な挨拶こっけいをしている。

「進行させたいのは山々だが、どうしても日が暮れ

てくれないものだから困るのさ」

「そう日が暮れなくちや聞く方も困るからやめよう」と主人がとうとう我慢がし切れなくなつたと見え
て云い出した。

「やめちやなお困ります。これからがいよいよ佳境
に入^いるところですから」

「それじゃ聞くから、早く日が暮れた事にしたらよ

かろう」

「では、少しご無理なご注文ですが、先生の事ですから、枉まげて、ここは日が暮れた事に致しましょう」

「それは好都合だ」と独仙君が澄まして述べられたので一同は思わずどつと噴き出した。

「いよいよ夜よに入ったので、まず安心とほっと一息

ついで鞍懸村くらかけむらの下宿を出ました。私は性来騒々しょうらいそうぞうしい

所が嫌きらいですから、わざと便利な市内を避けて、人迹じんせき

稀まれな寒村の百姓家にしばらく蝸牛かぎゅうの庵いおりを結んでいた

のです……」

「人迹じんせきの稀まれなはあんまり大袈裟おおげさだね」と主人が抗議

を申し込むと「蝸牛かぎゅうの庵いおりも仰山ぎょうさんだよ。床の間なしの

四畳半くらいにしておく方が写生的で面白い」と迷

亭君も苦情を持ち出した。東風君だけは「事実はどうでも言語が詩的で感じがいい」と褒め^ほめた。独仙君は真面目な顔で「そんな所に住んでいては学校へ通うのが大変だろう。何里くらいあるんですか」と聞いた。

「学校まではたった四五丁です。元来学校からして寒村にあるんですから……」

「それじゃ学生はその辺にだいぶ宿をとってゐるんでしょう」と独仙君はなかなか承知しない。

「ええ、たいていな百姓家には一人や二人は必ずいます」

「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を喰^{くら}わせる

。「ええ学校がなかったら、全く人迹は稀ですよ。：

：で当夜の服装と云うと、手織木綿の綿入の上へ金きん

ボタン

がいとう

釦の制服外套を着て、外套の頭巾ずきんをすぼりと被かぶつて

なるべく人の目につかないような注意をしました。

おりから

なんごうかいどう

折柄柿落葉の時節で宿から南郷街道へ出るまでは木こ

ひとあし

の葉で路が一杯です。一歩運ぶごとにがさがさする

のが気にかかります。誰かあとをつけて来そうだと

とうれいじ

まりません。振り向いて見ると東嶺寺の森がこんも

りと黒く、暗い中に暗く写っています。この東嶺寺

と云うのは松平家の菩提所まつだいらけ ぼだいしよで、庚申山の麓こうしんやま ふもとにあつて

私の宿とは一丁くらいしか隔へだたっていない、すこぶ

る幽邃ゆうすいな梵刹ぼんせつです。森から上はのべつ幕なしの星月

夜で、例の天の河が長瀬川を筋違すじかいに横切つて末は――

――末は、そうですね、まず布哇ハワイの方へ流れています

……」

「布哇は突飛だね」と迷亭君が云った。

「南郷街道をついに二丁来て、鷹台町たかのだいまちから市内に這

入って、古城町こじようまちを通つて、仙石町せんごくまちを曲つて、喰代町くいしろちよう

を横に見て、通町をとおりちよう一丁目、二丁目、三丁目と順に

通り越して、それから尾張町おわりちよう、名古屋町なごやちよう、鯉鉾町しやちほちよう、

かまぼこちよう

蒲鉾町……」

「そんなにいろいろな町を通らなくてもいい。要す

るにヴァイオリンを買ったのか、買わないのか」と
主人がじれったそうに聞く。

「楽器のある店は金善かねぜん即ち金子善兵衛方ですから、
まだなかなかです」

「なかなかでもいいから早く買うがいい」

「かしこまりました。それで金善方へ来て見ると、
店にはランプがかんかんともって……」

「またかんかんか、君のかんかんは一度や二度で済まないんだから難渋するよなんじゅう」と今度は迷亭が予防線を張った。

「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のかんかんですから、別段御心配には及びません。……灯ほ

影かげにすかして見ると例のヴァイオリンが、ほのかに秋の灯ひを反射して、くり込んだ胴の丸みに冷たい光

を帯びています。つよく張った琴線きんせんの一部だけがきらりと白く眼に映うつります。……」

「なかなか叙述がうまいや」と東風君がほめた。

「あれだな。あのヴァイオリンだなと思うと、急に動悸どうきがして足がふらふらします……」

「ふふん」と独仙君が鼻で笑った。

「思わず馳かけ込んで、隠袋かくしから蝦蟇口がまぐちを出して、蝦

墓口の中から五円札を二枚出して……」

「とうとう買ったかい」と主人がきく。

「買おうと思いましたが、まてしばし、ここが肝心かんじん

のところだ。滅多めったな事をしては失敗する。まあよそ

うと、際きわどいところで思い留まりました」

「なんだ、まだ買わないのかい。ヴァイオリン一挺
でなかなか人を引っ張るじゃないか」

「引つ張る訳じゃないんですが、どうも、まだ買えないんですから仕方がありません」

「なぜ」

「なぜって、まだ宵よいの口で人が大勢通るんですもの

」

「構わんじゃないか、人が二百や三百通ったって、

君はよっぽど妙な男だ」と主人はぶんぶんしている

「ただの人なら千が二千でも構いませんがね、学校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持って徘徊はいかいしているんだから容易に手を出せませんよ。中には沈澱ちんでん党などと号して、いつまでもクラスの底に溜まって喜んでいるのがありますからね。そんなのに限って柔道は強いのですよ。滅多めったにヴァイオリンな

どに手出しは出来ません。どんな目に逢^あうかわかりません。私だってヴァイオリンは欲しいに相違ないですけれども、命はこれでも惜しいですからね。ヴァイオリンを弾^ひいて殺されるよりも、弾かずに生きてる方が楽ですよ」

「それじゃ、とうとう買わずにやめたんだね」と主人が念を押す。

「いえ、買ったのです」

「じれったい男だな。買うなら早く買うさ。いやな
らいやでいいから、早くかたをつけたらよさそうな
ものだ」

「えへへへへ、世の中の事はそう、こっちの思うよ
うに埒らちがあくもんじやありませんよ」と云いながら
寒月君は冷然と「朝日」へ火をつけてふかし出した

主人は面倒になつたと見えて、ついと立って書齋

へ這入はいつたと思つたら、何だか古ぼけた洋書を一冊

持ち出して来て、ごろりと腹這はらばいになつて読み始めた

。独仙君はいつの間まにやら、床の間の前へ退去して

、独りひとで碁石を並べて一人相撲ひとりずもうをとっている。せつ

かくの逸話もあり長くかかるので聴手が一人減り

二人減つて、残るは芸術に忠実なる東風君と、長い事にかつて辟易へきえきした事のない迷亭先生のみとなる。

長い煙をふうと世の中へ遠慮なく吹き出した寒月

君は、やがて前同様の速度をもつて談話をつづける。
ぜんどうよう

「東風君、僕はその時こう思ったね。とうていこり

や宵の口は駄目だ、と云つて真夜中に来れば金善は

寝てしまふからなお駄目だ。何でも学校の生徒が散歩から帰りつくして、そうして金善がまだ寝ない時を見計らつて来なければ、せつかくの計画が水泡に帰する。けれどもその時間をうまく見計うのがむずかしい」

「なるほどこりやむずかしからう」

「で僕はその時間をまあ十時頃と見積つたね。それ

で今から十時頃までどこかで暮さなければならぬ

。うちへ歸つて出直すのは大變だ。友達のうちへ話

しに行くのは何だか氣が咎^{とが}めるように面白くなし、

仕方がないから相当の時間がくるまで市中を散歩す

る事にした。ところが平生ならば二時間や三時間は

ぶらぶらあるいているうちに、いつの間^まにか経つて

しまふのだがその夜^よに限つて、時間のたつのが遅い

の何のって、——千秋の思とはあんな事を云うのだ
ろうと、しみじみ感じました」とさも感じたらしい
風をしてわざと迷亭先生の方を向く。

「古人を待つ身につらき置炬燵おきごたつと云われた事がある

からね、また待たる身より待つ身はつらいともあ
つて軒に吊られたヴァイオリンもつらかったろうが
、あてのない探偵のようにうろろう、まごついてい

る君はなおさらつらいだろう。累々^{るいりい}として喪家^{そうか}の犬のごとし。いや宿のない犬ほど気の毒なものは實際ないよ」

「犬は残酷ですね。犬に比較された事はこれでもまだありませんよ」

「僕は何だか君の話をきくと、昔^{むか}しの芸術家の伝を讀むような氣持がして同情の念に堪^たえない。犬に比

較したのは先生の冗談じようだんだから気に掛けずに話を進行

したまえ」と東風君は慰藉いしやした。慰藉されなくても

寒月君は無論話をつづけるつもりである。

「それから徒町おかちまちから百騎町ひやつきまちを通つて、両替町りようがえちようから鷹たか

じようまち

匠町へ出て、県庁の前で枯柳の数を勘定して病院の

横で窓の灯ひを計算して、紺屋橋こんやばしの上で巻煙草まきたばこを二本

ふかして、そうして時計を見た。……」

「十時になつたかい」

「惜しい事にならないね。——紺屋橋を渡り切つて

川添に東へ上のぼつて行くと、按摩あんまに三人あつた。そう

して犬がしきりに吠ほえましたよ先生……」

「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのはちよつと芝

居がかりだね。君は落人おちゆうどと云う格だ」

「何かわるい事でもしたんですか」

「これからしよう」と云うところさ」

かわいそう

「可哀相にヴァイオリンをかうのが悪い事じゃ、音楽学校の生徒はみんな罪人ですよ」

「人が認めない事をすれば、どんないい事をしても罪人さ、だから世の中に罪人ほどあてにならないものはない。耶蘇ヤソもあんな世に生れれば罪人さ。好男

子寒月君もそんな所でヴァイオリンをくえば罪人さ

「それじゃ負けて罪人としておきましよう。罪人はいいですが十時にならないのには弱りました」

「もう一返^{ぺん}、町の名を勘定するさ。それで足りなければまた秋の日をかんかんさせるさ。それでもおつかなければまた甘干しの渋柿を三ダースも食うさ。いつまでも聞くから十時になるまでやりたまえ」

寒月先生はにやにやと笑った。

「そう先を越せんされては降参するよりほかはありません

ん。それじゃ一足飛びに十時にしてしましましょう

。さて御約束の十時になって金善かねぜんの前へ来て見ると

夜寒の頃ですから、さすが目貫めぬきの両替町りようがえちようもほとん

ど人通りが絶えて、向むこうからくる下駄の音さえ淋さみしい

心持ちです。金善ではもう大戸をたてて、わずかに

潜り戸くぐとだけを障子しょうじにしています。私は何となく犬に

尾つけられたような心持で、障子をあけて這はい入るのに

少々薄気味がわるかったです……」

この時主人はきたならしい本からちよつと眼をは

ずして、「おいもうヴァイオリンを買ったかい」と

聞いた。「これから買うところです」と東風君が答

えると「まだ買わないのか、実に永いな」と独り言ひとごと

のように云つてまた本を読み出した。独仙君は無言のまま、白と黒で碁盤を大半埋めてしまった。

「思い切つて飛び込んで、頭巾ずきんを被かぶったままヴァイ

オリンをくれと云いますと、火鉢の周圍に四五人小僧や若僧がかたまつて話をしていたのが驚いて、申し合せたように私の顔を見ました。私は思わず右の手を挙げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おい

ヴァイオリンをくれと二度目に云うと、一番前にい

て、私の顔を覗き込むようにしていた小僧がへえと

覚束ない返事をして、立ち上がって例の店先に吊る

してあったのを三四挺一度に卸して来ました。いく

らかと聞くと五円二十銭だと云います……」

「おいそんな安いヴァイオリンがあるのかい。おも

ちやじやないか」

「みんな同価どうねかと聞くと、へえ、どれでも変りはご

ざいません。みんな丈夫に念を入れて拵こしらえてござ

いますと云いますから、蝦蟇がまぐち口のなかから五円札と

銀貨を二十銭出して用意の大風呂敷を出してヴァイ

オリンを包みました。この間あいだ、店のものは話を中止

してじつと私の顔を見えています。顔は頭巾でかくし

てあるから分る気遣きづかいはないのですけれども何だか気

がせいて一刻も早く往来へ出たくて堪りません。たまよ

うやくの事風呂敷包を外套がいとうの下へ入れて、店を出た

ら、番頭が声を揃そろえてありがとうと大きな声を出し

たのにはひやつとしました。往来へ出てちよつと見

廻して見ると、幸誰さいわいもいないようですが、一丁ばか

り向むかひから二三人して町内中に響けとばかり詩吟をし

て来ます。こいつは大変だと金善の角を西へ折れて

濠端ほりばたを薬王師道やくおうじみちへ出て、はんの木村から庚申山こうしんやまの裾すそ

へ出てようやく下宿へ帰りました。下宿へ帰って見たらもう二時十分前でした」

「夜通しあるいていたようなものだね」と東風君が
気の毒そうに云うと「やっと上がった。やれやれ長

い道中双六だ」と迷亭君はほっと一と息ついた。
どうちゆうすゐろく

「これからが聞きどころですよ。今までは単に序幕

です」

「まだあるのかい。こいつは容易な事じゃない。たいていのものは君に逢っちゃ根氣負けをするね」

「根氣はとにかく、ここでやめちや仏作って魂入れずと一般ですから、もう少し話します」

「話すのは無論随意さ。聞く事は聞くよ」

「どうです苦沙弥先生も御聞きになつては。もうヴ

アイオリンは買ってしまいましたよ。ええ先生」

「こん度はヴァイオリンを売るところかい。売るところなんか聞かなくってもいい」

「まだ売るところじゃありません」

「そんならなお聞かなくともいい」

「どうも困るな、東風君、君だけだね、熱心に聞い
てくれるのは。少し張合が抜けるがまあ仕方がない

「ざっと話してしまおう」

「ざっとでなくてもいいから緩ゆっくり話したまえ。大

変面白い」

「ヴァイオリンはようやくの思で手に入れたが、ま

ず第一に困ったのは置き所だね。僕の所へは大分だいぶん人

が遊びにくるから滅めった多な所へぶらさげたり、立て懸

けたりするとすぐ露見してしまう。穴を掘って埋め

ちや掘り出すのが面倒だろう」

「そうさ、天井裏へでも隠したかい」と東風君は氣
樂な事を云う。

「天井はないさ。百姓家だもの」
ひやくしやうや

「そりや困ったろう。どこへ入りたい」

「どこへ入れたと思う」

「わからないね。戸袋のなかか」

「いいえ」

「夜具にくるんで戸棚へしまったか」

「いいえ」

東風君と寒月君はヴァイオリンの隠^{かく}れ家^がについてかくのごとく問答をしているうちに、主人と迷亭君も何かしきりに話している。

「こりや何と読むのだい」と主人が聞く。

「どれ」

「この二行さ」

「何だって？　〔*Quid aliud est mulier nisi amicitia*」

ae& inimica〕……こりや君ラテン語羅匈語じゃないか」

「羅匈語は分ってるが、何と読むのだい」

「だって君は平生羅匈語が読めると云ってるじゃないか」と迷亭君も危険だと見て取って、ちよつと逃

げた。

「無論読めるさ。読める事は読めるが、こりや何だ
い」

「読める事は読めるが、こりや何だは手ひどいね」

「何でもいいからちよつと英語に訳して見ろ」

「見ろは烈しいね。まるで従卒のようだね」

「従卒でもいいから何だ」

「まあ羅旬語などはあとにして、ちよつと寒月君の

ご高話を拝聴つかまつ仕ろうじやないか。今大變なところだ

よ。いよいよ露見するか、しないか危機一髪と云う

安宅あたかの関せきへかかつてるんだ。――ねえ寒月君それか

らどうしたい」と急に乗氣になつて、またヴァイオ

リンの仲間入りをする。主人は情けなさなくも取り残さ

れた。寒月君はこれに勢を得て隠し所を説明する。

「とうとう古つづらの中へ隠しました。このつづらは国を出る時御祖母おばあさんが餞別にくれたものですが、何でも御祖母さんが嫁にくる時持って来たものだそうです」

「そいつは古物こぶつだね。ヴァイオリンとは少し調和しないようだ。ねえ東風君」

「ええ、ちと調和せず」

「天井裏だって調和しないじゃないか」と寒月君は東風先生をやり込めた。

「調和はしないが、句にはなるよ、安心して給え。秋^{あき}

淋^{さび}しつづらにかくすヴァイオリンはどうだい、両君」

「先生今日は大分俳句^{だibu}が出来ますね」

「今日に限った事じゃない。いつでも腹の中で出来

てるのさ。僕の俳句における造詣ぞうけいと云ったら、故子こし

規き子も舌を捲まいて驚ろいたくらいのものさ」

「先生、子規さんとは御つき合でしたか」と正直な

東風君は真率しんそつな質問をかける。

「なにつき合わなくつても始終無線電信で肝胆相照らしていたもんだ」と無茶苦茶を云うので、東風先生あきれて黙ってしまった。寒月君は笑いながらま

た進行する。

「それで置き所だけは出来た訳だが、今度は出すのに困った。ただ出すだけなら人目を掠^{かす}めて眺^{なが}めるくらいはやれん事はないが、眺めたばかりじゃ何にもならない。弾^ひかなければ役に立たない。弾けば音が出る。出ればすぐ露見する。ちようど木槿垣^{むくげがき}を一重隔てて南隣りは沈澱組^{ちんでんぐみ}の頭領が下宿しているんだか

けんのん
ら剣呑だあね」

「困るね」と東風君が気の毒そうに調子を合わせる。

「なるほど、こりや困る。論より証拠音が出るんだ

から、小督こさうの局つぼねも全くこれでしくじったんだからね。

これがぬすみ食をするとか、贗札にせざつを造るとか云うな

ら、まだ始末がいいが、おんぎよく音曲は人に隠しちや出来な

いものだからね」

「音さえ出なければどうでも出来るんですが……」

「ちよつと待った。音さえ出なけりやと云うが、音

が出なくても隠かくし了おおせないのがあるよ。昔むかし僕等が

小石川の御寺で自炊をしている時分に鈴木とうの藤さん

と云う人がいてね、この藤さんが大変味淋みりんがすきで、

ビールの徳利とっくりへ味淋を買って来ては一人で楽しみに

飲んでいたのさ。ある日藤さん^{とう}が散歩に出たあとで、
よせばいいのに苦沙弥君がちよつと盗んで飲んだと
ころが……」

「おれが鈴木^{鈴木}の味淋などをのむものか、飲んだのは
君だぜ」と主人は突然大きな声を出した。

「おや本を読んでるから大丈夫かと思つたら、やは
り聞いてるね。油断の出来ない男だ。耳も八丁、目

も八丁とは君の事だ。なるほど云われて見ると僕も飲んだ。僕も飲んだには相違ないが、発覚したのは君の方だよ。――両君まあ聞きたまえ。苦沙弥先生元来酒は飲めないのだよ。ところを人の味淋だと思つて一生懸命に飲んだものだから、さあ大変、顔中真赤まっかにはれ上つてね。いやもう二目ふためとは見られないありさまさ………」

「黙っている。羅甸語ラテンゴも読めない癖に」

「ハハハハ、それで藤さんとうが帰って来てビールの徳利をふって見ると、半分以上足りない。何でも誰か飲んだに相違ないと云うので見廻して見ると、大将隅の方に朱泥しゅでいを練りかためた人形のようにかたくな
つていらあね……」

三人は思わず哄然こうぜんと笑い出した。主人も本をよみ

ながら、くすくすと笑った。ひとり^{ひと}独仙君に至っては

機^き外の機^きを弄^{ろう}し過ぎて、少々疲労したと見えて、碁

盤の上へのしかかって、いつの間^まにやら、ぐうぐう

寝ている。

「まだ音がしないもので露見した事がある。僕が昔

し姥子^{うばこ}の温泉に行つて、一人のじじいと相宿になつ

た事がある。何でも東京の呉服屋の隠居か何かだつ

たがね。まあ相宿だから呉服屋だろうが、古着屋だ
ろうが構う事はないが、ただ困った事が一つ出来て
しまった。と云うのは僕は姥子うばこへ着いてから三日目
に煙草たばこを切らしてしまったのさ。諸君も知ってるだ

ろうが、あの姥子と云うのは山の中の一軒屋でただ
温泉に這入はいって飯を食うよりほかにどうもこうも仕
様のない不便の所さ。そこで煙草を切らしたのだから

ら御難だね。物はないとなるとなお欲しくなるもので、煙草がないなと思うやいなや、いつもそんなでないのが急に呑みたくなり出してね。意地のわるい事に、そのじじいが風呂敷に一杯煙草を用意して登山しているのさ。それを少しずつ出しては、人の前あぐらで胡坐をかいて呑みたいだろうと云わないばかりに、すばすばふかすのだね。ただふかすだけなら勘弁の

しようもあるが、しまいには煙を輪に吹いて見たり、

たて

豎に吹いたり、横に吹いたり、乃至は邯鄲夢の枕と

ないし

かんたんゆめ

まくら

ぎやく

逆に吹いたり、または鼻から獅子の洞入り、洞返り

ほらい

ほらがえ

に吹いたり。つまり呑みびらかすんだね……」

「何です、呑みびらかすと云うのは」

いしようにどうぐ

「衣装道具なら見せびらかすのだが、煙草だから呑

みびらかすのさ」

「へえ、そんな苦しい思いをなさるより貰ったらい
いでしよう」

「ところが貰わないね。僕も男子だ」

「へえ、貰っちゃいけないんですか」

「いけるかも知れないが、貰わないね」

「それでどうしました」

「貰わないで偷ぬすんだ」

「おやおや」

「奴さん手拭てぬぐいをぶらさげて湯に出掛けたから、呑む

ならここだと思つて一心不乱立てつづけに呑んで、

ああ愉快だと思ふ間まもなく、障子しょうじがからりとあいた

から、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」

「湯には這入らなかつたのですか」

「這入ろうと思つたら巾着きんちやくを忘れたのに気がついて、

廊下から引き返したんだ。人が巾着でもとりやしま
いし第一それからが失敬さ」

「何とも云えませんね。煙草の御手際おてぎわじゃ」

「ハハハハじじいもなかなか眼識があるよ。巾着は
とにかくだが、じいさんが障子をあけると二日間の
溜め呑みをやった煙草の煙りがむつとするほど室の
なかに籠こもつてゐるじゃないか、悪事千里とはよく云つ

たものだね。たちまち露見してしまった」

「じいさん何とかいいましたか」

「さすが年の功だね、何にも言わずに巻煙草まきたばこを五六

十本半紙にくるんで、失礼ですが、こんな粗葉そはでよ

ろしければどうぞお呑み下さいましと云つて、また

湯壺ゆっぼへ下りて行つたよ」

「そんなのが江戸趣味と云うのでしうか」

「江戸趣味だか、呉服屋趣味だか知らないが、それから僕は爺さんとおおいかんたんあいて大に肝胆相照らして、二週間の間面白く逗留して帰つて来たよ」

「煙草は二週間中爺さんの御馳走になつたんですか」

「まあそんなところだね」

「もうヴァイオリンは片ついたかい」と主人はよう

やく本を伏せて、起き上りながらついに降参を申し込んだ。

「まだです。これからが面白いところです、ちょうどいい時ですから聞いて下さい。ついでにあの碁盤の上で昼寝をしている先生——何とか云いましたね、え、独仙先生、——独仙先生にも聞いていただきたくないな。どうですあんなに寝ちや、からだに毒ですぜ。

もう起してもいいでしょう」

「おい、独仙君、起きた起きた。面白い話がある。

起きるんだよ。そう寝ちや毒だとさ。奥さんが心配だとさ」

「え」と云いながら顔を上げた独仙君の山羊髯やぎひげを伝

わって垂涎よだれが一筋長々と流れて、蝸牛かたつむりの這った迹あとの

ように歴然と光っている。

「ああ、眠かった。山上の白雲わがものう懶きに似たりか。

ああ、いい心持ちに寝ねたよ」

「寝たのはみんなが認めているのだがね。ちつと起

きちゃどうだい」

「もう、起きてもいいね。何か面白い話があるかい」

「これからいよいよヴァイオリンを——どうするん

だったかな、苦沙弥君」

「どうするのかな、とんと見当けんとうがつかない」

「これからいよいよ弾くところです」

「これからいよいよヴァイオリンを弾くところだよ。

こっちへ出て来て、聞きたまえ」

「まだヴァイオリンかい。困ったな」

「君は無絃むげんの素琴そきんを弾ずる連中だから困らない方な

んだが、寒月君のは、きいきいぴいぴい近所合壁へ

聞えるのだから大におおい困つてるところだ」

「そうかい。寒月君近所へ聞えないようにヴァイオリンを弾く方ほうを知らんですか」

「知りませんね、あるなら伺いたいもので」

「伺わなくても露地ろじの白牛びやくぎゅうを見ればすぐ分るはずだ

が」と、何だか通じない事を云う。寒月君はねぼけ

てあんな珍語を弄ろうするのだらうと鑑定したから、わざと相手にならないで話頭を進めた。

「ようやくの事で一策を案出しました。あくる日は

天長節だから、朝からうちにいて、つづらの蓋ふたをと

って見たり、かぶせて見たりいちんち一日そわそわして暮ら

してしまいましたがいよいよ日が暮れて、つづらの

底で蟬こおろぎが鳴き出した時思い切って例のヴァイオリン

と弓を取り出しました」

「いよいよ出たね」と東風君が云うと「滅多に弾く
めったとあぶないよ」と迷亭君が注意した。

「まず弓を取って、切先からきっさき鰐元つばもとまでしらべて見る

……」

「下手な刀屋じゃあるまいし」と迷亭君が冷評ひやかした。

「實際これが自分の魂だと思つと、侍が研ぎ澄した

ちやうや

ほかげ

さやばらい

名刀を、長夜の灯影で鞘払をする時のような心持ち

がするものですよ。私は弓を持ったままぶるぶると

ふるえました」

「全く天才だ」と云う東風君について「全く癲癇だ」

てんかん

と迷亭君がつけた。主人は「早く弾いたらよかろう」

と云う。独仙君は困つたものだと言ふ顔付をする。

「ありがたい事に弓は無難です。今度はヴァイオリンを同じくランプの傍そばへ引き付けて、裏表共よくしらべて見る。この間あいだ約五分間、つづらの底では始終こおろぎ蟬が鳴いていると思つて下さい。……」

「何とでも思つてやるから安心して弾くがいい」

「まだ弾きやしません。——幸いヴァイオリンも疵きずがない。これなら大丈夫とぬつくと立ち上がる……」

「どっかへ行くのかい」

「まあ少し黙って聞いて下さい。そう一句毎に邪魔をされちゃ話が出来ない。……」

「おい諸君、だまるんだとさ。シーシー」

「しゃべるのは君だけだぜ」

「うん、そうか、これは失敬、謹聴謹聴」

「ヴァイオリンを小脇に抱い込んで、草履ぞうりを突つかけ

たまま二三歩草の戸を出たが、まてしばし……」

「そらおいでなすった。何でも、どっかで停電するに違ないと思った」

「もう帰ったって甘干しの柿はないぜ」

「そう諸先生が御まぜ返しになつてははなはだ遺憾いかん

の至りだが、東風君一人を相手にするより致し方が

ない。——いいかね東風君、二三步出たがまた引き

返して、国を出るとき三円二十銭で買った赤毛布を

あかげつと

頭から被^{かぶ}つてね、ふつとランプを消すと君真暗闇に

まつくらやみ

なつて今度は草履^{ぞうり}の所在地^{あrika}が判然しなくなつた」

「一体どこへ行くんだい」

「まあ聞いてたまい。ようやくの事草履を見つけて、

表へ出ると星月夜に柿落葉、赤毛布にヴァイオリン。

右へ右へと爪先上りに庚申山へ差しかかってくる、

つまさきあが
こうしんやま
とうれいじ

東嶺寺の鐘がボーンと毛布を通して、耳を通して、

けつと

頭の中へ響き渡った。何時だなんじと思う、君」

「知らないね」

「九時だよ。これから秋の夜長をたった一人、山道

おおだいら

八丁を大平と云う所まで登るのだが、平生なら臆病

な僕の事だから、恐しくってたまらないところだけ

れども、一心不乱となると不思議なもので、怖いこわに

も怖くないにも、毛頭そんな念はてんで心の中に起
らないよ。ただヴァイオリンが弾きたいばかりで胸
が一杯になつてゐるんだから妙なものさ。この大平と
云う所は庚申山の南側で天氣のいい日に登つて見る
と赤松の間から城下が一目に見下みおろせる眺望佳絶の平
地で——そうさ広さはまあ百坪もあるうかね、真中

に八畳敷ほどな一枚岩があつて、北側は鵜うの沼ぬまと云

う池つづきで、池のまわりは三抱えもあらうと云う

樟くすのきばかりだ。山のなかだから、人の住んでる所は樟しよ

脳うのうとを採る小屋が一軒あるばかり、池の近辺は昼でも

あまり心持ちのいい場所じゃない。幸い工兵が演習

のため道を切り開いてくれたから、登るのに骨は折

れない。ようやく一枚岩の上へ来て、毛布けっとを敷いて、

ともかくもその上へ坐つた。こんな寒い晩に登つたのは始めてなんだから、岩の上へ坐つて少し落ち着くと、あたりの淋さみしさが次第次第に腹の底へ沁しみ渡る。こう云う場合に人の心を乱すものはただ怖こわいと言ふ感じばかりだから、この感じさえ引き抜くと、余るところは皎々冽々こうこうれつれつたる空靈の気だけになる。二十分ほど茫然ぼうぜんとしてゐるうちに何だか水晶で造つた

御殿のなかに、たった一人住んでるような気になつた。しかもその一人住んでる僕のからだが一——いやからだばかりじゃない、心も魂もことごとく寒天か何かで製造されたごとく、不思議に透き徹すとおってしまつて、自分が水晶の御殿の中にいるのだから、自分の腹の中に水晶の御殿があるのだから、わからなくなつて来た……」

「飛んだ事になって来たね」と迷亭君が真面目にか
らかうあとに付いて、独仙君が「面白い境界だ」と
少しく感心したようすに見えた。

「もしこの状態が長くつづいたら、私はあすの朝ま
で、せつかくのヴァイオリンも弾かずに、茫ぼんやり一
枚岩の上に坐ってたかも知れないです……」

「狐でもいる所かい」と東風君がきいた。

「こう云う具合で、自他の区別もなくなつて、生きているか死んでいるか方角のつかない時に、突然後うしろの古沼の奥でギヤーと云う声がした。……」

「いよいよ出たね」

「その声が遠く反響を起して満山の秋の梢を、野分のわきと共に渡つたと思つたら、はつと我に歸つた……」

「やつと安心した」と迷亭君が胸を撫なでおろす真似

をする。

たいしいちばげんこんあらた

「大死一番乾坤新なり」と独仙君は目くばせをする。

寒月君にはちつとも通じない。

「それから、我に帰つてあたりを見廻わすと、庚申こうしん

やま

山一面はしんとして、雨垂れほどの音もしない。は

てな今の音は何だろうと考えた。人の声にしては鋭

すぎるし、鳥の声にしては大き過ぎるし、猿の声に

しては――この辺によもや猿はおるまい。何だろう

？ 何だろうと云う問題が頭のなかに起ると、これ

を解釈しようとするので今まで静まり返っていたや

からが、ふんぜんざつぜんしゅうぜん紛然雜然糅然としてあたかもコンノート殿

下歓迎の当時における都人士狂乱の態度を以てもつ脳裏

をかけ廻る。そのうちにそうしん総身の毛穴が急にあいて、

しょうちゅう焼酎を吹きかけた毛脛けずねのように、勇氣、胆力、分別、

沈着などと号するお客様がすうすうと蒸発して行く。
心臓が肋骨の下でステテコを踊り出す。両足が紙鳶たこ
のうなりのように震動をはじめ。これはたまらん。
いきなり、毛布けつとを頭からかぶって、ヴァイオリンを
小脇に掻かい込んでひよろひよると一枚岩を飛び下り
て、一目散に山道八丁を麓ふもとの方へかけ下りて、宿へ
帰かへって布団ふとんへくるまって寝てしまった。今考えても

あんな気味のわるかつた事はないよ、東風君」

「それから」

「それでおしまいさ」

「ヴァイオリンは弾かないのかい」

「弾きたくつても、弾かれないじゃないか。ギヤ―

だもの。君だつてきつと弾かれないよ」

「何だか君の話は物足りないような気がする」

「気がしても事実だよ。どうです先生」と寒月君は一座を見廻わして大得意のようすである。

「ハハハハこれは上出来。そこまで持つて行くにはだいぶ苦心慘憺たるものがあつたのだらう。僕は男子のサンドラ・ベロニが東方君子の邦くにに出現するところかと思つて、今が今まで真面目に拝聴していたんだよ」と云つた迷亭君は誰かサンドラ・ベロニの

講釈でも聞くかと思のほか、何にも質問が出ないの

で「サンドラ・ベロニが月下にたてごと豎琴を弾いて、以太イタ

リアリアふう風の歌を森の中でうたつてるところは、君の庚こう

申山しんやまへヴァイオリンをかかえて上のぼるところと同曲に

して異巧なるものだね。惜しい事に向うは月中げっちゅうの嫦じょ

娥うがを驚ろかし、君は古沼ふるぬまの怪狸かいりにおどろかされたの

で、際きわどいところで滑稽こっけいと崇高の大差を来たした。

さぞ遺憾いかんだろう」と一人で説明すると、

「そんなに遺憾ではありません」と寒月君は存外平気である。

「全体山の上でヴァイオリンを弾こうなんて、ハイカラをやるから、おどかさるんだ」と今度は主人が酷評を加えると、

「好漢こうかんこの鬼窟きくつ裏りに向って生計を営む。惜しい事だ」

と独仙君は嘆息した。すべて独仙君の云う事は決して寒月君にわかったためしがない。寒月君ばかりではない、おそらく誰にでもわからないだろう。

「そりや、そうと寒月君、近頃でも矢張り学校へ行って珠ばかり磨たまいてるのかね」と迷亭先生はしばらくして話頭を転じた。

「いえ、こないだうちから国へ帰省していたもんで

すから、暫時中止の姿です。さんじ珠ももうあきましたから、実はよそうかと思ってるんです」

「だって珠が磨けないと博士にはなれんぜ」と主人は少しく眉をひそめたが、本人は存外気楽で、

「博士ですか、エヘヘヘ。博士ならもうならなくつてもいいんです」

「でも結婚が延びて、双方困るだろう」

「結婚って誰の結婚です」

「君のさ」

「私が誰と結婚するんです」

「金田の令嬢さ」

「へええ」

「へえって、あれほど約束があるじゃないか」

「約束なんかありません、そんな事を言い触_ふら

すなあ、向うの勝手です」

「こいつは少し乱暴だ。ねえ迷亭、君もあの一件は知ってるだろう」

「あの一件た、鼻事件かい。あの事件なら、君と僕が知ってるばかりじゃない、公然の秘密として天下一般に知れ渡ってる。現に万朝まんちようなぞでは花聶花嫁と

云う表題で両君の写真を紙上に掲ぐるの栄はいつだ

ろう、いつだろうって、うるさく僕のところへ聞きにくるくらいだ。東風君などはすでに鴛鴦歌と云う

えんおうか

一大長篇を作って、三箇月前ぜんから待ってるんだが、

寒月君が博士にならないばかりで、せっかくの傑作も宝の持ち腐れになりそうで心配でたまらないそう
だ。ねえ、東風君そうだろう」

「まだ心配するほど持ちあつかってはいませんが、

とにかく満腹の同情をこめた作を公けにするつもりです」

「それ見たまえ、君が博士になるかならないかで、四方八方へ飛んだ影響が及んでくるよ。少ししっかりして、珠を磨いてくれたまえ」

「へへへいろいろ御心配をかけて済みませんが、もう博士にはならないでもいいのです」

「なぜ」

「なぜって、私にはもう歴然^{れっき}とした女房があるんです」

「いや、こりやえらい。いつの間に秘密結婚をやったのかね。油断のならない世の中だ。苦沙弥さんただ今御聞き及びの通り寒月君はすでに妻子があるんだとさ」

「子供はまだですよ。そう結婚して一と月もたたないうちに子供が生れちゃ事でさあ」

「元来いつどこで結婚したんだ」と主人は予審判事見たような質問をかける。

「いつって、国へ帰ったら、ちゃんと、うちで待ってたのです。今日先生の所へ持って来た、この鰹節かつぶしは結婚祝に親類から貰ったんです」

「たった三本祝うのはけちだな」

「なに沢山のうちを三本だけ持って来たのです」

「じゃ御国の女だね、やっぱり色が黒いんだね」

「ええ、真黒です。ちょうど私には相当です」

「それで金田の方はどうする気だい」

「どうする気でもありません」

「そりや少し義理がわるかろう。ねえ迷亭」

「わるくもないさ。ほかへやりや同じ事だ。どうせ夫婦なんてものは闇の中で鉢合せをするようなものだ。要するに鉢合せをしないでもすむところをわざわざ鉢合せるんだから余計な事さ。すでに余計な事なら誰と誰の鉢が合ったって構いっこないよ。ただ気の毒なのは鴛鴦えんおう歌を作った東風君くらいなものさ」

「なに鴛鴦歌は都合によつて、こちらへ向け易^かえてもよろしゅうございます。金田家の結婚式にはまた別に作りますから」

「さすが詩人だけあつて自由自在なものだね」

「金田の方へ断わったかい」と主人はまだ金田を気にしている。

「いいえ。断わる訳がありません。私の方でくれと

も、貰いたいとも、先方へ申し込んだ事はありませんから、黙っていれば沢山です。——なあに黙つても沢山ですよ。今時分は探偵が十人も二十人もかかつて一部始終残らず知れていますよ」

探偵と云う言語ことばを聞いた、主人は、急に苦にがい顔を
して

「ふん、そんなら黙っている」と申し渡したが、そ

れでも飽き足らなかつたと見えて、なお探偵につい

て下しものような事をさも大議論のように述べられた。

「不用意の際に人の懷中を抜くのがスリで、不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ。知らぬ間まに雨戸

をはずして人の所有品を偷ぬすむのが泥棒で、知らぬ間

に口を滑すべらして人の心を読むのが探偵だ。ダンビラ

を畳の上へ刺して無理に人の金銭を着服するのが強

盗で、おどし文句をいやに並べて人の意志を強^しうる
のが探偵だ。だから探偵と云う奴はスリ、泥棒、強
盗の一族でとうてい人の風上^{かざかみ}に置けるものではない。
そんな奴の云う事を聞くと癖になる。決して負ける
な」

「なに大丈夫です、探偵の千人や二千人、風上に隊
伍を整えて襲撃したって怖^{こわ}くはありません。珠磨^{たます}り

の名人理学士水島寒月でさあ」

「ひやひや見上げたものだ。さすが新婚学士ほどあ

って元気旺盛おうせいなものだね。しかし苦沙弥さん。探偵

がスリ、泥棒、強盗の同類なら、その探偵を使う金

田君のごときものは何の同類だろう」

くまさかちようはん

「熊坂長範くらいなものだろう」

「熊坂はよかったね。一つと見えたる長範が二つに

なつてぞ失せにけりと云うが、あんな烏金からすがねで身代しんだいを

むこうよこちよう

つくつた向横丁の長範なんかは業ごうつく張りの、慾張

り屋だから、いくつになつても失せる氣遣きづかいはないぜ。

あんな奴につかまつたら因果だよ。生涯しょうがいたたるよ、

寒月君用心したまえ」

「なあに、いいですよ。ああら物々し盗人ぬすびとよ。手並

はさきにも知りつらん。それにも懲こりず打ち入るか

つて、ひどい目に合せてやりまさあ」と寒月君は自
若として宝生流ほうしやうりゆうに気燄きえんを吐はいて見せる。

「探偵と云えば二十世紀の人間はたいてい探偵のよ
うになる傾向があるが、どう云う訳だろう」と独仙
君は独仙君だけに時局問題には関係のない超然たる
質問を呈出した。

「物価が高いせいでしょう」と寒月君が答える。

「芸術趣味を解しないからでしよう」と東風君が答える。

「人間に文明の角つのが生えて、金米糖こんぺいとうのようにいらいらするからさ」と迷亭君が答える。

今度は主人の番である。主人はもつたい振ぶつた口調で、こんな議論を始めた。

「それは僕が大分だいぶん考えた事だ。僕の解釈によると当

世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるの
が原因になっている。僕の自覚心と名づけるのは独
仙君の方で云う、けんしょうじょうぶつ見性成仏とか、自己は天地と同一
体だとか云う悟道の類たぐいではない。……」

「おや大分だいぶんむずかしくなつて来たようだ。苦沙弥君、
君にしてそんな大議論を舌頭ぜつとうに弄ろうする以上は、かく
申す迷亭も憚はばかりながら御あとで現代の文明に対する

不平を堂々と云うよ」

「勝手に云うがいい、云う事もない癖に」

「ところがある。大おおにある。君なぞはせんだつては

刑事巡査を神のごとく敬うやまい、また今日は探偵をスリ

泥棒に比し、まるで矛盾の変怪へんげだが、僕などは終始

一貫ふもみしようにぜん父母未生以前からただ今に至るまで、かつて自

説を変じた事のない男だ」

「刑事は刑事だ。探偵は探偵だ。せんだつてはせんだつてで今日は今日だ。自説が変らないのは発達しない証拠だ。下愚^{かぐ}は移らずと云うのは君の事だ。：

…」

「これはきびしい。探偵もそうまともにくると可愛
いところがある」

「おれが探偵」

「探偵でないから、正直でいいと云うのだよ。喧嘩はおやめおやめ。さあ。その大議論のあとを拝聴しよう」

「今の人の自覚心と云うのは自己と他人の間に截然せつぜんたる利害の鴻溝こうこうがあると云う事を知り過ぎていると云う事だ。そうしてこの自覚心なるものは文明が進むにしたがつて一日一日と鋭敏になつて行くから、

しまいには一挙手一投足も自然天然とは出来ないよ
うになる。ヘンレーと云う人がスチーヴンソンを評
して彼は鏡のかかった部屋に入はいつて、鏡の前を通る
毎ごとに自己の影を写して見なければ気が済まぬほど瞬
時も自己を忘るる事の出来ない人だと評したのは、
よく今日こんにちの趨勢すうせいを言いあらわしている。寝てもおれ、
覚さめてもおれ、このおれが至るところにつけまつわ

っているから、人間の行為言動が人工的にコセつくばかり、自分で窮屈になるばかり、世の中が苦しくなるばかり、ちようと見合をする若い男女の心持ちで朝から晩までくらさなければならぬ。悠々^{ゆうゆう}とか従容^{しょうよう}とか云う字は劃^{かく}があつて意味のない言葉になつてしまふ。この点において今代^{きんだい}の人は探偵的である。泥棒的である。探偵は人の目を掠^{かす}めて自分だけうま

い事をしようと言ふ商売だから、勢いきおい自覚心が強くな

らなくては出来ん。泥棒も捕つかまるか、見つかるかと

云う心配が念頭を離れる事がないから、勢自覚心が

強くならざるを得ない。今の人はどうしたら己おのれの

利になるか、損になるかと寝ても醒さめても考えつづ

けだから、勢探偵泥棒と同じく自覚心が強くならざ

るを得ない。二六時中キョトキョト、コソコソして

墓に入るまで一刻の安心も得ないのは今の人の心だ。
文明の咒詛だ。じゅそ馬鹿馬鹿しい」

「なるほど面白い解釈だ」と独仙君が云い出した。

こんな問題になると独仙君はなかなか引込ひっこんでいない男である。「苦沙弥君の説明はよく我意わがいを得てい

る。むか昔しむかの人は己れを忘れろと教えたものだ。今の

人は己れを忘れるなと教えるからまるで違う。二六

時中己れと云う意識をもつて充満している。それだから二六時中太平の時はない。いつでも焦熱地獄だ。天下に何が薬だと云つて己れを忘れるより薬な事はない。三更月下入無我さんこうげつかむがにいますとはこの至境を咏えいじたものさ。今の人は親切をしても自然をかいている。英吉利イギリスのナイスなどと自慢する行為も存外自覚心が張り切れそうになっている。英国の天子が印度インドへ遊びに行つ

て、印度の王族と食卓を共にした時に、その王族が
天子の前とも心づかずに、つい自国の我流を出して
馬鈴薯じゃがいもを手攫てづかみで皿へとって、あとから真赤まっかになつ
て愧はじ入ったら、天子は知らん顔をしてやはり二本
指で馬鈴薯を皿へとったそうだ……」

「それが英吉利趣味ですか」これは寒月君の質問で
あつた。

「僕はこんな話を聞いた」と主人が後あとをつける。

「やはり英国のある兵營で聯隊の士官が大勢して一人の下士官を御馳走した事がある。御馳走が済んで手を洗う水を硝子鉢ガラスばちへ入れて出したら、この下士官は宴会になれんと見えて、硝子鉢を口へあてて中の水をぐうと飲んでしまった。すると聯隊長が突然下士官の健康を祝すと云いながら、やはりフヒンガー

・ボールの水を一息に飲み干したそうだ。そこで並なみいる士官も我劣らじと水盃みづさかずきを挙げて下士官の健康を祝したと云うぜ」

「こんなはなし噺もあるよ」とだまつてる事の嫌きらひな迷亭君

が云った。「カーライルが始めて女じよ皇に謁こうした時、

宮廷の礼に嫻ならわぬ変物へんぶつの事だから、先生突然どうで

すと云いながら、どさりと椅子へ腰をおろした。と

ころが女皇の後ろうしろに立っていた大勢の侍従や官女が

みんなくすくす笑い出した——出したのではない、

出そうとしたのさ、すると女皇が後ろを向いて、ち

よつと何か相図おおぜいをしたら、多勢の侍従官女がいつの

間まにかみんな椅子へ腰をかけて、カーライルは面目

を失わなかったと云うんだが随分御念の入った親切

もあつたもんだ」

「カーライルの事なら、みんなが立ってても平気だったかも知れませんか」と寒月君が短評を試みた。

「親切の方の自覚心はまあいいがね」と独仙君は進行する。「自覚心があるだけ親切をするにも骨が折れる訳になる。気の毒な事さ。文明が進むに従って殺伐の気がなくなる、個人と個人の交際がおだやかになるなどと普通云うが大間違いさ。こんなに自覚

心が強くって、どうしておだやかになれるものか。

なるほどこちよつと見るとごくしずかで無事なようだが、御互の間は非常に苦しいのさ。ちようど相撲が土俵の真中で四つよに組んで動かないようなものだろう。はたから見ると平穩至極だが当人の腹は波を打っているじゃないか」

「喧嘩けんかも昔むかしの喧嘩は暴力で圧迫するのだからかえ

って罪はなかったが、近頃じやなかなか巧妙になつてゐるからなおなお自覺心が増してくるんだね」と番が迷亭先生の頭の上に廻つて来る。「ベーコンの言葉に自然の力に従つて始めて自然に勝つとあるが、今の喧嘩は正にベーコンの格言通りに出来上つてゐるから不思議だ。ちやうど柔術のようなものさ。敵の力を利用して敵を斃^{たお}す事を考える……」

「または水力電気のようなものです。水の力に逆らわないでかえってこれを電力に変化して立派に役に立たせる……」と寒月君が言いかけると、独仙君がすぐそのあとを引き取った。「だから貧^{ひん}時には貧^{ひん}に縛^{ばく}せられ、富^ふ時には富^ふに縛^{ばく}せられ、憂^{ゆう}時には憂^{ゆう}に縛^{ばく}せられ、喜^き時には喜^きに縛^{ばく}せられるのさ。才人は才に斃^{たお}れ、智者は智に敗れ、苦沙弥君のような癩癩^{かんしゃくも}持

ちは癩癩を利用さえすればすぐに飛び出して敵のペ
てんに罹^{かか}る……」

「ひやひや」と迷亭君が手をたたくと、苦沙弥君は
にやにや笑いながら「これでなかなかそう甘^{うま}くは行
かないのだよ」と答えたら、みんな一度に笑い出し
た。

「時に金田のようなのは何で斃れるだろう」

「女房は鼻で斃れ、主人は因業いんごうで斃れ、子分は探偵で斃れか」

「娘は？」

「娘は——娘は見た事がないから何とも云えないが——まず着倒れか、食い倒れ、もしくは呑んだくれの類たぐいだろう。よもや恋い倒れにはなるまい。ことに

よると卒塔婆そとば小町こまちのように行き倒れになるかも知れ

ない」

「それは少しひどい」と新体詩を捧げただけに東風君が異議を申し立てた。

「だから応無所住而生其心おうむしよじゆうにしょうごしんと云うのは大事な言葉だ、

そう云う境界きようがいに至らんと人間は苦しくてならん」と

独仙君しきりに独りひと悟ったような事を云う。

「そう威張るもんじやないよ。君などはことによる

と電光影裏にさか倒れをやるかも知れないぜ」
でんこうえいり

「とにかくこの勢で文明が進んで行つた日にや僕は生きてるのはいやだ」と主人がいい出した。

「遠慮はいらないから死ぬさ」と迷亭が言下ごんかに道破どうはする。

「死ぬのはなおいやだ」と主人がわからん強情を張る。

「生れる時には誰も熟考して生れるものは有りませんが、死ぬ時には誰も苦にすると見えますね」と寒月君がよそよそしい格言をのべる。

「金を借りるときには何の気なしに借りるが、返す時にはみんな心配するのと同じ事さ」とこんな時にすぐ返事の出来るのは迷亭君である。

「借りた金を返す事を考えないものは幸福であるご

とく、死ぬ事を苦にせんものは幸福さ」と独仙君は
しゅつせけんてき
超然として出世間的である。

「君のように云うとつまり図太いのが悟つたのだね」
ずぶと

「そうさ、禅語に鉄牛面てつぎゅうめんの鉄牛心てつぎゅうしん、牛鉄面の牛鉄心
と云うのがある」

「そうして君はその標本と云う訳かね」

「それでもない。しかし死ぬのを苦にするようになったのは神経衰弱と云う病気が発明されてから以後の事だよ」

「なるほど君などはどこから見ても神経衰弱以前の民だよ」

迷亭と独仙が妙な掛合かけあいをのべつにやっていると、

主人は寒月東風二君を相手にしてしきりに文明の不

平を述べている。

「どうして借りた金を返さずに済ますかが問題である」

「そんな問題はありませんよ。借りたものは返さなくちやなりませんよ」

「まあさ。議論だから、だまって聞かない。どうして借りた金を返さずに済ますかが問題であるごと

く、どうしたら死なずに済むかが問題である。いな

問題であつた。れんきんじゆつ錬金術はこれである。すべての錬金

術は失敗した。人間はどうしても死ななければなら

ん事が分明ぶんみようになつた」

「錬金術以前から分明ですよ」

「まあさ、議論だから、だまって聞いている。いいかい。どうしても死ななければならん事が分明にな

った時に第二の問題が起る」

「へえ」

「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよかろう。これが第二の問題である。自殺クラブはこの第二の問題と共に起るべき運命を有している」

「なるほど」

「死ぬ事は苦しい、しかし死ぬ事が出来なければな

お苦しい。神経衰弱の国民には生きている事が死よりもはなはだしき苦痛である。したがって死を苦にする。死ぬのが厭いやだから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よかろうと心配するのである。ただたいていのものは智慧ちえが足りないから自然のままに放擲ほうてきしておくうちに、世間がいじめ殺してくれる。しかし一と癖あるものは世間からなし崩しにいじめ

殺されて満足するものではない。必ずや死に方に付かなら

いて種々考究の結果、ざんしん嶄新な名案を呈出するに違な

い。だからして世界向後の趨勢こうごは自殺者すうせいが増加して、

その自殺者が皆独創的な方法をもつてこの世を去るに違ない」

だいぶぶつそう「大分物騒な事になりますね」

「なるよ。たしかになるよ。アーサー・ジョーンス

と云う人のかいた脚本のなかにしきりに自殺を主張する哲学者があつて……」

「自殺するんですか」

「ところが惜しい事にしないのだがね。しかし今から千年も立てばみんな実行するに相違ないよ。万年の後は死と云えば自殺よりほかに存在しないもの^{のち}のように考えられるようになる」

「大変な事になりますね」

「なるよきつとなる。そうなると自殺も大分研究が積んで立派な科学になって、落雲館のような中学校で倫理の代りに自殺学を正科として授けるようになる」

「妙ですな、傍聴に出たいくらいのもですね。迷亭先生御聞きになりましたか。苦沙弥先生の御名論

を」

「聞いたよ。その時分になると落雲館の倫理の先生はこう云うね。諸君公德などと云う野蛮の遺風を墨^{ぼく}守^{しゅ}してはなりません。世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は自殺である。しかして己^{おの}れの好むところはこれを人に施^{ほど}こして可なる訳だから、自殺を一步展開して他殺にしてもよろしい。ことに表

きゆうそだい

の窮措大珍野苦沙弥氏のごときものは生きてござる

のが大分苦痛のように見受けらるるから、一刻も早

く殺して進ぜるのが諸君の義務である。もつとも昔

と違って今日は開明の時節であるから槍やり、薙刀なぎなたもし

くは飛道具たぐいの類を用いるような卑怯ひきような振舞をしては

なりません。ただあてこすりの高尚なる技術によつ

て、くどくからかい殺すのが本人のため功德にもなり、ま

た諸君の名誉にもなるのであります。……」

「なるほど面白い講義をしますね」

「まだ面白い事があるよ。現代では警察が人民の生命財産を保護するのを第一の目的としている。ところがその時分になると巡査が犬殺しのような棍棒こんぼうをもつて天下の公民を撲殺ぼくさつしてあるく。……」

「なぜです」

「なぜって今の人間は生命いのちが大事だから警察で保護

するんだが、その時分の国民は生きてるのが苦痛だから、巡査が慈悲のために打ち殺ぶしてくれるのさ。

もつとも少し気の利きいたものは大概自殺してしまふ

から、巡査に打殺ぶちころされるような奴はよくよく意気地

なし、自殺の能力のない白痴もしくは不具者に限

るのさ。それで殺されたい人間は門口かどぐちへ張札をして

おくのだね。なにただ、殺されたい男ありとか女ありとか、はりつけておけば巡査が都合のいい時に巡まわつてきて、すぐ志望通り取計つてくれるのさ。死骸かね。死骸はやっぱり巡査が車を引いて拾つてあるのさ。まだ面白い事が出来てくる。……」

「どうも先生の冗談じょうだんは際限がありませんね」と東風君は太おおに感心おおいしている。すると独仙君は例の通り山や

羊髯ぎひげを気にしながら、のそのそ弁じ出した。

「冗談と云えば冗談だが、予言と云えば予言かも知れない。真理に徹底しないものは、とかく眼前の現象世界に束縛せられて泡沫ほうまつの夢幻むげんを永久の事実と認定したがるものだから、少し飛び離れた事を云うと、すぐ冗談にしてしまう」

「燕雀えんじやく焉んぞ大鵬たいほうの志こころざしを知らんやですな」と寒月君

が恐れ入ると、独仙君はそうさと云わぬばかりの顔付で話を進める。

「昔^{むか}しスペインにコルドヴァと云う所があつた……」

「今でもありやしないか」

「あるかも知れない。今昔の問題はとにかく、そこ
の風習として日暮れの鐘がお寺で鳴ると、家々の女

がことごとく出て来て河へ這入はいつて水泳をやる……」

「冬もやるんですか」

「その辺はたしかに知らんが、とにかく貴賤老若きせんろうにやくの

別なく河へ飛び込む。但ただし男子は一人も交らない。

ただ遠くから見ている。遠くから見ていると暮色蒼ぼしよくそう

然ぜんたる波の上に、白はだえい肌が模も糊ことして動いている……

…」

「詩的ですね。新体詩になりますね。なんと云う所ですか」と東風君は裸体らたいが出さえすれば前へ乗り出してくる。

「コルドヴァさ。そこで地方の若いものが、女といつしよに泳ぐ事も出来ず、さればと云つて遠くから判然その姿を見る事も許されないのを残念に思つて

、ちよつといたずらをした……」

「へえ、どんな趣向だい」といたずらと聞いた迷亭君は^{おお}大に嬉しがる。

「お寺の鐘つき番に^{わいろ}賄賂を使つて、日没を合図に撞^つく鐘を一時間前に鳴らした。すると女などは^{あさはか}浅墓な

ものだから、そら鐘が鳴つたと云うので、めいめい

^{かし}河岸へあつまつて半^{はんじゅばん}襦袢、半^{はんももひき}股引の服装でざぶりざ

ぶりと水の中へ飛び込んだ。飛び込みはしたものの、いつもと違って日が暮れない」

「烈^{はげ}しい秋の日がかんかんしやしないか」

「橋の上を見ると男が大勢立って眺^{なが}めている。恥ずかしいがどうする事も出来ない。大に赤面したそう
だ」

「それで」

「それでさ、人間はただ眼前の習慣に迷わされて、根本の原理を忘れるものだから氣をつけないと駄目だと云う事さ」

「なるほどありがたい御説教だ。眼前の習慣に迷わされの御話しを僕も一つやろうか。この間ある雑誌をよんだら、こう云う詐欺師さぎしの小説があつた。僕が

まあここで書画骨董店こつとうてんを開くとする。で店頭に大家

の幅ふくや、名人の道具類を並べておく。無論贗物にせものじや

ない、しょうじきしょうめい正直正銘、うそいつわりのない上等品ばかり

並べておく。上等品だからみんな高価にきまつてる

。そこへ物数ものずき奇な御客さんが来て、この元信もとのぶの幅は

いくらだねと聞く。六百円なら六百円と僕が云うと

、その客が欲しい事はほしいが、六百円では手元に

持ち合せがないから、残念だがまあ見合せよう」

「そう云うときまってるかい」と主人は相変らず芝

ばいぎ

居気のない事を云う。迷亭君はぬからぬ顔で、

「まあさ、小説だよ。云うとしておくんだ。そこで

僕がなに代だいは構いませんから、お気に入ったら持つ

ていらっしやいと云う。客はそうも行かないからと

ちゆうちよ

躊躇する。それじゃ月賦げつぷでいただきましょう、月賦

も細く、長く、どうせこれから御鼻屑ごひいきになるんです

から——いえ、ちつとも御遠慮には及びません。どうです月に十円くらいじや。何なら月に五円でも構いませんと僕が極ごくきさくに云うんだ。それから僕と客の間に二三の問答があつて、とど僕が狩野法眼かのうほうげん元信の幅を六百円ただし月賦十円払込の事で売渡す」

「タイムスの百科全書見たようですね」

「タイムスはたしかだが、僕のはすこぶる不慥ふたしかだよ

。これからがいよいよ巧妙なる詐偽に取りかかるの
だぜ。よく聞きたまえ月十円ずつで六百円なら何年
で皆済かいさいになると思う、寒月君」

「無論五年でしょう」

「無論五年。で五年の歳月は長いと思うか短かいと
思うか、独仙君」

「一念万年、いちねんばんねん 万年一念。ばんねんいちねん

短かくもあり、短かくもな

しだ」

「何だそりや道歌^{どうか}か、常識のない道歌だね。そこで

五年の間毎月十円ずつ払うのだから、つまり先方では六十回払えばいいのだ。しかしそこが習慣の恐ろしいところで、六十回も同じ事を毎月繰り返して、六十回にも十円払う気になると、六十一回にもやはり十円払う気になる。六十二回六十三回、回

を重ねるにしたがつてどうしても期日がくれば十円
払わなくては気が済まないようになる。人間は利口
のようだが、習慣に迷つて、根本を忘れると云う大
弱点がある。その弱点に乗じて僕が何度でも十円ず
つ毎月得をするのさ」

「ハハハハまさか、それほど忘れっぽくもならない
でしょう」と寒月君が笑うと、主人はいささか真面

目で、

「いやそう云う事は全くあるよ。僕は大学の貸費たいひを毎月毎月勘定せずに返して、しまいに向むから断ことわわられた事がある」と自分の恥を人間一般の恥のように公言した。

「そら、そう云う人が現にここにいるからたしかなものだ。だから僕の先刻さつき述べた文明の未来記を聞い

て冗談だなどと笑うものは、六十回でいい月賦を生しよ

涯うがい払いって正当だと考える連中だ。ことに寒月君や、

東風君のような経験の乏とぼしい青年諸君は、よく僕ら

の云う事を聞いてだまされないようにしなくっちゃ
いけない」

「かしこまりました。月賦は必ず六十回限りの事に

致します」

「いや冗談のようだが、實際参考になる話ですよ、

寒月君」と独仙君は寒月君に向いだした。「たとえ

ばですね。今苦沙弥君か迷亭君が、君が無断で結婚

したのが穩当おんとうでないから、金田とか云う人に謝罪し

ろと忠告したら君どうです。謝罪する見ですか」

「謝罪は御容赦にあずかりたいですね。向うがあや

まるなら特別、私の方ではそんな慾はありません」

「警察が君にあやまれと命じたらどうです」

「なおな^{ごめんこうむ}お御免蒙ります」

「大臣とか華族ならどうです」

「いよいよもって御免蒙ります」

「それ見たまえ。昔と今とは人間がそれだけ変って
る。昔は御上^{おかみ}の御威光なら、何でも出来た時代です。

その次には御上の御威光でも、出来ないものが出来て

くる時代です。今の世はいかに殿下でも閣下でも、ある程度以上に個人の人格の上にのしかかる事が出来来ない世の中です。はげしく云えば先方に権力があればあるほど、のしかかれるものの方では不愉快を感じて反抗する世の中です。だから今の世は昔むかしと違って、御上の御威光だから出来ないので云う新現象のあらわれる時代です、昔しのものから考え

ると、ほとんど考えられないくらいな事柄が道理で通る世の中です。世態人情の変遷と云うものは実に不思議なもので、迷亭君の未来記も冗談だと云えば冗談に過ぎないのだが、その辺の消息を説明したものとすれば、なかなか味あじわいがあるじゃないですか」

「そう云う知己ちきが出てくると是非未来記の続きが述べたくなるね。独仙君の御説のごとく今の世に御上

の御威光を笠かさにきたり、竹槍の二三百本を恃たのにして

無理を押し通そうとするのは、ちようどカゴへ乗つ

て何でも蚊かでも汽車と競争しようとおせる、時代後

れの頑物がんぶつ——まあわからずやの張本ちようほん、烏金からすがねの長範先ちようはんせん

生んせいくらしいものだから、黙もくって御手際おてぎわを拝見してい

ればいいが——僕の未来記はそんな当座間に合せの

小問題じゃない。人間全体の運命に関する社会的現

象だからね。つらつら目下文明の傾向を達観して、

遠き将来の趨勢すうせいを卜ぼくすると結婚が不可能の事になる

。驚ろくなかれ、結婚の不可能。訳はこうさ。前申ぜん

す通り今の世は個性中心の世である。一家を主人が

代表し、一郡を代官が代表し、一国を領主が代表し

た時分には、代表者以外の人間には人格はまるでな

かった。あつても認められなかった。それががらり

と変ると、あらゆる生存者がことごとく個性を主張し出して、だれを見ても君は君、僕は僕だと云わぬばかりの風をするようになる。ふたりの人が途中で逢えばうぬが人間なら、おれも人間だぞと心の中^{うち}で喧嘩^{けんか}を買いながら行き違ふ。それだけ個人が強くなつた。個人が平等に強くなつたから、個人が平等になつた。個人が平等になつた訳になる。人がおのれを害する事が出

来にくくなつた点において、たしかに自分は強くなつたのだが、滅多めったに人の身の上に手出しがならなくなつた点においては、明かに昔より弱くなつたんだらう。強くなるのは嬉しいが、弱くなるのは誰もありがたくないから、人から一毫いちごうも犯おかされまいと、強い点をあくまで固守すると同時に、せめて半毛はんもうでも人を侵おかしてやろうと、弱いところは無理にも拡ひろげた

くなる。こうなると人と人の間に空間がなくなつて、生きてるのが窮屈になる。出来るだけ自分を張りつめて、はち切れるばかりにふくれ返つて苦しがつて生存している。苦しいから色々な方法で個人と個人との間に余裕を求める。かくのごとく人間が自業自得で苦しんで、その苦し紛れに案出した第一の方案は親子別居の制さ。日本でも山の中へ這入つて見

給え。いっけいちもん一家一門ことごとく一軒のうちにごろごろし

ている。主張すべき個性もなく、あつても主張しな

いから、あれで済むのだが文明の民はたとい親子の

間でもお互に我儘わがままを張れるだけ張らなければ損にな

るから勢いきおい両者の安全を保持するためには別居しな

ければならない。歐洲は文明が進んでゐるから日本

より早くこの制度が行われている。たまたま親子同

居するものがあつても、息子^{むすこ}がおやじから利息のつ

く金を借りたり、他人のように下宿料を払つたりす

る。親が息子の個性を認めてこれに尊敬を払えばこ

そ、こんな美風が成立するのだ。この風は早晚日本

へも是非輸入しなければならん。親類はとくに離れ

、親子は今日^{こんにち}に離れて、やつと我慢しているような

ものの個性の発展と、発展につれてこれに対する尊

敬の念は無制限にのびて行くから、まだ離れなくて
は樂が出来ない。しかし親子兄弟の離れたる今日、
もう離れるものはない訳だから、最後の方案として
夫婦が分れる事になる。今の人の考ではいっしよに
いるから夫婦だと思つてゐる。それが大きな了見違ひ
さ。いっしよにゐるためにはいっしよにゐるに充分
なるだけ個性が合わなければならぬだらう。昔し

なら文句はないさ、異体同心とか云つて、目には夫

婦二人に見えるが、内実は一人前いちにんまえなんだからね。そ

れだから偕老同穴かいろうどうけつとか号して、死んでも一つ穴の狸

に化ける。野蛮なものさ。今はそうは行かないやね

。夫はあくまでも夫で妻はどうしたって妻だからね

。その妻が女学校で行灯袴あんどんばかまを穿はいて牢乎ろうこたる個性を

鍛きたえ上げて、束髪姿で乗り込んでくるんだから、と

ても夫の思う通りになる訳がない。また夫の思い通りになるような妻なら妻じゃない人形だからね。賢夫人になればなるほど個性は凄^{すご}いほど発達する。発達すればするほど夫と合わなくなる。合わなければ自然の勢^{いきおい}夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上は朝から晩まで夫と衝突している。まことに結構な事だが、賢妻を迎えれば迎えるほど双方共苦しみの

程度が増してくる。水と油のように夫婦の間には截せつ

然ぜんたるしきりがあつて、それも落ちついて、しきり

が水平線を保っていればまだしもだが、水と油が双方から働らきかけるのだから家のなかは大地震のよう
うに上がったたり下がったりする。ここにおいて夫婦

雑居はお互の損だと云う事が次第に人間に分つてく

る。……」

「それで夫婦がわかれるんですか。心配だな」と寒月君が云った。

「わかれる。きつとわかれる。天下の夫婦はみんな分れる。今まではいっしょにいたのが夫婦であつたが、これからは同棲どうせいしているものは夫婦の資格がないように世間から目もくされてくる」

「すると私なぞは資格のない組へ編入される訳です

ね」と寒月君は際きわどいところでのろけを云った。

「明治の御代みよに生れて幸さ。僕などは未来記を作る

だけあって、頭脳が時勢より一二歩ずつ前へ出てい

るからちゃんと今から独身でいるんだよ。人は失恋

の結果だなどと騒ぐが、近眼者の視みるところは実に

憐れなほど浅薄なものだ。それはとにかく、未来記

の続きを話すところさ。その時一人の哲学者が天降あまくだ

はてんこう

つて破天荒の真理を唱道する。その説に曰くさ。人

いわ

間は個性の動物である。個性を滅すれば人間を滅す

ると同結果に陥る。おちい いやしくも人間の意義を完まったから

しめんためには、いかなる価あたいを払うとも構わないか

らこの個性を保持すると同時に発達せしめなければ

ろうしゅう

ならん。かの陋習ろうしゅうに縛せられて、いやいやながら結

婚を執行するのは人間自然の傾向に反した蛮風であ

つて、個性の発達せざる蒙昧もうまいの時代はいざ知らず、

こんにち

へいとう

おちい

てん

かえり

文明の今日こんにちなおこの弊竇へいとうに陥おちいつて恬てんとして顧みない

びゅうけん

のははなはだしき謬見びゅうけんである。開化の高潮度に達せ

きんだい

る今代きんだいにおいて二個の個性が普通以上に親密の程度

をもつて連結され得べき理由のあるべきはずがない

みやす

。この観易みやすき理由はあるにも関らず無教育の青年男

みだり とうきん

女が一時の劣情に駆られて、漫みだり とうきんに合あひの式を挙ぐる

はいとくぼつりん

は悖徳没倫のはなはだしき所為である。吾人は人道のため、文明のため、彼等青年男女の個性保護のため、全力を挙げこの蛮風に抵抗せざるべからず……」

「先生私はその説には全然反対です」と東風君はこの時思い切った調子でぴたりと平手で膝頭ひらて ひざがしを叩いた。「私の考では世の中に何が尊たつといと云って愛と美ほ

ど尊いものはないと思います。吾々を慰藉いしやし、吾々

を完全にし、吾々を幸福にするのは全く両者の御蔭
であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔に

し、同情を洗鍊するのは全く両者の御蔭であります

。だから吾人はいつの世いづくに生れてもこの二つ
のものを忘れることが出来ません。この二つの者

が現実世界にあらわれると、愛は夫婦と云う関係に

なります。美は詩歌^{しいか}、音楽の形式に分れます。それだからいやしくも人類の地球の表面に存在する限りは夫婦と芸術は決して滅する事はなかうと思ひます」

「なければ結構だが、今哲学者が云つた通りちゃん
と滅してしまふから仕方がないと、あきらめるさ。

なに芸術だ？　芸術だって夫婦と同じ運命に歸着す

るのさ。個性の発展というのは個性の自由と云う意味だろう。個性の自由と云う意味はおれはおれ、人は人と云う意味だろう。その芸術なんか存在出来る訳がないじゃないか。芸術が繁昌するのは芸術家ときようじゆしや享受者の間に個性の一致があるからだろう。君がいくら新体詩家だって踏張ふんばつても、君の詩を読んで面白いと云うものが一人もなくっちゃ、君の新体詩も

御氣の毒だが君よりほかに読み手はなくなる訳だろ

う。えんおうか鴛鴦歌をいく篇作つたつて始まらないやね。幸

いに明治の今日こんにちに生れたから、天下が挙こぞつて愛読す

るのだろうが……」

「いえそれほどでもありません」

「今でさえそれほどでなければ、じんぶん人文の発達した未

来即ち例の一大哲学者が出て非結婚論を主張する時すなわ

分には誰もよみ手はなくなるぜ。いや君のだから読

まないのじゃない。

にんにんここ

人々個々おのおの特別の個性を

もってるから、人の作つた詩文などは一向面白くな

いっこう

いのさ。現に今でも英国などではこの傾向がちゃん

とあらわれている。現今英国の小説家中でもつとも

個性のいちじるしい作品にあらわれた、メレジスを

見給え、ジェームスを見給え。読み手は極めて少

きわ

な

いじやないか。少ない訳わけさ。あんな作品はあんな個

性のある人でなければ読んで面白くないんだから仕方がない。この傾向がだんだん発達して婚姻が不道

徳になる時分には芸術も完まったく滅亡さ。そうだろう君

のかいたものは僕にわからなくなる、僕のかいたも

のは君にわからなくなつた日にや、君と僕の間には

芸術も糞もないじやないか」

「そりやそうですけれども私はどうも直覺的にそう
思われなひんです」

「君が直覺的にそう思われなければ、僕は曲覺的きよつかくてきに
そう思うまでさ」

「曲覺的かも知れないが」と今度は独仙君が口を出
す。「とにかく人間に個性の自由を許せば許すほど
御互の間が窮屈になるに相違ないよ。ニーチェが超

人なんか担^{かつ}ぎ出すのも全くこの窮屈のやりどころがなくなつて仕方なしにあんな哲学に変形したものだね。ちよつと見るとあれがあゝの男の理想のように見えるが、ありや理想じゃない、不平さ。個性の発展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく滅^め多^{った}に寝返りも打てないから、大将少しやけになつてあんな乱暴をかき散らしたのだね。あれを読むと壮

快と云うよりむしろ気の毒になる。あの声は勇猛精ゆうもうしよ

進うじんの声じゃない、どうしても怨恨痛憤えんこんつうふんの音だ。おんそれ

もそのはずさ昔は一人えらい人があれば天下翕然きゆうぜんと

してその旗下にあつまるのだから、愉快なものさ。

こんな愉快が事実に出てくれば何もニーチェ見たよ
うに筆と紙の力でこれを書物の上にあらわす必要が
ない。だからホーマーでもチエヴィ・チエーズでも

同じく超人的な性格を写しても感じがまるで違うからね。陽気ださ。愉快にかいてある。愉快な事実があつて、この愉快な事実を紙に写しかえたのだから、^{にがみ}苦味はないはずだ。ニーチェの時代はそうは行かないよ。英雄なんか一人も出やしない。出たつて誰も英雄と立てやしない。昔は孔子^{こうし}がたった一人だったから、孔子も幅を利^きかしたのだが、今は孔子が幾

人もいる。ことによると天下がことごとく孔子かも知れない。だからおれは孔子だよと威張^{おし}つても圧が利かない。利かないから不平だ。不平だから超人などを書物の上だけで振り廻すのさ。吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困っている。それだから西洋の文明などはちよつといふようでもつまり駄目なものさ。これに反して東洋

じや昔しから心の修行をした。その方が正しいのさ

。見給え個性発展の結果みんな神経衰弱を起して、

始末がつかなくなつた時、王者おうしやの民たみ蕩々とうとうたりと云う

句の価値を始めて発見するから。無為むいにして化かすと

云う語の馬鹿に出来ない事を悟るから。しかし悟つ

たつてその時はもうしようがない。アルコール中毒

にかか罹かつて、ああ酒を飲まなければよかつたと考える

ようなものさ」

「先生方は大分だいぶん厭世的な御説のようだが、私は妙です
ね。いろいろ伺っても何とも感じません。どう云
うものでしょう」と寒月君が云う。

「そりや妻君を持ち立てだからさ」と迷亭君がすぐ
解釈した。すると主人が突然こんな事を云い出した
。

「妻さいを持つて、女はいいものだなどと思うと飛んだ間違になる。参考のためだから、おれが面白い物を読んで聞かせる。よく聴くがいい」と最前書齋さいぜんから持つて来た古い本を取り上げて「この本は古い本だが、この時代から女のわるい事は歴然と分ってる」と云うと、寒月君が

「少し驚きましたな。元来いつ頃の本ですか」と聞

く。「タマス・ナツシと云つて十六世紀の著書だ」

「いよいよ驚ろいた。その時分すでに私の妻の悪口さいを云つたものがあるんですか」

「いろいろ女の悪口があるが、その内には是非君の妻も這入る訳だから聞くがさいいい」

「ええ聞きますよ。ありがたい事になりましたね」

「まず古来の賢哲が女性観を紹介すべしと書いてあ

る。いいかね。聞いてるかね」

「みんな聞いてるよ。独身の僕まで聞いてるよ」

「アリストートルいわ曰く女はどうせ碌ろくでなしなれば、

嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし。

大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が災わざわい少な

し……」

「寒月君の妻君は大きいかい、小さいかい」

「大きな碌でなしの部ですよ」

「ハハハハ、こりや面白い本だ。さああとを読んだ

」

「或る人問う、いかなるかこれ最大奇蹟。さいだいきせき賢者答え

て曰く、貞婦……」

「賢者ってだれですか」

「名前は書いてない」

「どうせ振られた賢者に相違ないね」

「次にはダイオジニスが出ている。或る人問う、妻を娶るめといずれの時においてすべきか。ダイオジニスは答えて曰く青年は未だいまし、老年はすでに遅し。とある」

「先生樽たるの中で考えたね」

「ピサゴラス曰くいわ天下に三の恐るべきものあり曰く

火、曰く水、曰く女」

ギリシヤ

「希臘の哲学者などは存外迂濶うかつな事を云うものだね

。僕に云わせると天下に恐るべきものなし。火に入い

って焼けず、水に入って溺れず……」だけで独仙君
ちよつと行き詰る。

「女に逢つてとろけずだろう」と迷亭先生が援兵に
出る。主人はさつさとあとを読む。

「ソクラチスは婦女子を御するは人間の最大難事と

云えり。デモスセニス曰く人もしその敵を苦しめん

とせば、わが女を敵に与うるより策の得たるはあら

ず。家庭の風波に日となく夜となく彼を困憊起つあ

たわざるに至らしむるを得ればなりと。セネカは婦

女と無学をもつて世界における二大厄とし、マーカ

ス・オーレリアスは女子は制御し難き点において船

舶に似たりと云い、プロータスは女子が綺羅きらを飾る

の性癖をもつてその天稟てんぴんの醜おおを蔽おほうの陋策ろうさくにもとづ

くものとせり。ヴァレリアスかつて書をその友某に

おくつて告げて曰く天下に何事も女子の忍んでなし

得ざるものあらず。願わくは皇天憐あわれみを垂れて、君を

して彼等の術中に陥おちいらしむるなかれと。彼また曰く

女子とは何ぞ。友愛の敵にあらずや。避くべからざ

る苦しみにあらずや、必然の害にあらずや、自然の誘惑にあらずや、蜜みつに似たる毒にあらずや。もし女子を棄つるが不徳ならば、彼等を棄てざるは一層の呵責かしやくと云わざるべからず。……」

「もう沢山です、先生。そのくらい愚妻のわる口を拝聴すれば申し分はありません」

「まだ四五ページあるから、ついでに聞いたらどう

だ」

「もうたいていにするがいい。もう奥方の御歸りの
刻限だろう」と迷亭先生がからかい掛けると、茶の
間の方で

「清や、清や」と細君が下女を呼ぶ声がする。

「こいつは大変だ。奥方はちゃんというぜ、君」

「ウフフフ」
と主人は笑いながら「構うものか」

と云った。

「奥さん、奥さん。いつの間に御^ま帰りですか」
茶の間ではしんとして答がない。

「奥さん、今のを聞いたんですか。え？」

答はまだない。

「今のはね、御主人の御考ではないですよ。十六世紀のナツシ君の説ですから御安心なさい」

「存じません」と妻君は遠くで簡単な返事をした。

寒月君はくすくすと笑った。

「私も存じませんで失礼しましたアハハハハ」と迷

亭君は遠慮なく笑つてると、門口をかどぐちあらあらしくあ

けて、頼むとも、御免とも云わず、大きな足音がし

たと思つたら、座敷の唐紙が乱暴にあいて、たたらさ多々良

んぺい三平君の顔がその間からあらわれた。

三平君今日はいつに似ず、真白なシャツに卸立おろしたて

のフロックを着て、すでに幾分か相場そうばを狂わせてる

上へ、右の手へ重そうに下げた四本の麦酒ビールを縄ぐる

み、鰹節かつぶしの傍そばへ置くと同時に挨拶もせず、どつかと

腰を下ろして、かつ膝を崩したのは目覚めざましい武者振むしやぶり

である。

「先生胃病は近来いいですか。こうやって、うちに

ばかりいなさるから、いかんたい」

「まだ悪いとも何ともいやしない」

「いわんばってんが、顔色はよかなかごたる。先生

顔色が黄きいですばい。近頃は釣がいいです。品川から

舟を一艘雇うて——私はこの前の日曜に行きました

」

「何か釣れたかい」

「何も釣れません」

「釣れなくっても面白いのかい」

「浩然こうぜんの気を養うたい、あなた。どうですあなたが

た。釣に行つた事がありますか。面白いですよ釣は

大きな海の上を小舟で乗り廻わしてあるくのです

からね」と誰彼の容赦なく話しかける。

「僕は小さな海の上を大船で乗り廻してあるきたい

んだ」と迷亭君が相手になる。

「どうせ釣るなら、鯨くじらか人魚でも釣らなくっちゃ、詰らないです」と寒月君が答えた。

「そんなものが釣れますか。文学者は常識がないです
ね。……」

「僕は文学者じゃありません」

「そうですか、何ですかあなたは。私のようなビジ

ネス・マンになると常識が一番大切ですからね。先生私は近來よっぽど常識に富んで来ました。どうしてもあんな所にいると、傍はたが傍だから、おのずから、そうなってしまうのです」

「どうなってしまうのだ」

「煙草たばこでもですね、朝日や、敷島しきしまをふかしては

幅きが利かんです」と云いながら、吸口に金箔きんぱくのつい

エジプト
た埃及煙草を出して、すばすば吸い出した、

「そんな贅沢ぜいたくをする金があるのかい」

「金はなかばってんが、今にどうかなるたい。この
煙草を吸つてると、大變信用が違います」

「寒月君が珠を磨くよりも樂な信用でいい、手数てすうが

かからない。輕便信用だね」と迷亭が寒月にいうと
寒月が何とも答えない間に、三平君は

「あなたが寒月さんですか。博士にや、とうとうならんですか。あなたが博士にならんものだから、私が貰う事にしました」

「博士をですか」

「いいえ、金田家の令嬢をです。実は御気の毒と思つたですたい。しかし先方で是非貰うてくれ貰うてくれと云うから、とうとう貰う事に極きめました、先

生。しかし寒月さんに義理がわるいと思つて心配しています」

「どうか御遠慮なく」と寒月君が云うと、主人は

「貰いたければ貰つたら、いいだろう」と曖昧あいまいな返

事をする。

「そいつはおめでたい話だ。だからどんな娘を持つても心配するがものはないんだよ。だれか貰うと、

さつき僕が云った通り、ちゃんとこんな立派な紳士の御^{むし}聳さんが出来たじゃないか。東風君新体詩の種が出来た。早速とりかかりたまえ」と迷亭君が例のごとく調子づくると三平君は

「あなたが東風君ですか、結婚の時に何か作ってくれませんか。すぐ活版にして方々へくばります。太陽へも出してもらいます」

「ええ何か作りましょう、いつ頃御入用ですか」
ごろにゆうよう

「いつでもいいです。今まで作ったうちでもいいで
す。その代りです。披露ひろのとき呼んで御馳走ごちそうするで

す。シャンパンを飲ませるです。君シャンパンを飲
んだ事がありますか。シャンパンは旨うまいです。――

先生披露会ひろうかいのときに楽隊を呼ぶつもりですが、東風
君の作を譜ふにして奏したらどうでしょう」

「勝手にするがいい」

「先生、譜にして下さらんか」

「馬鹿云え」

「だれか、このうちに音楽の出来るものはおらんで
すか」

「落第の候補者寒月君はヴァイオリンの妙手だよ。

すっかり頼んで見たまえ。しかしシャンパンくらい

じや承知しそうもない男だ」

「シャンパンもですね。一瓶ひとびん四円や五円のじやよく

ないです。私の御馳走するのはそんな安いのじやないですが、君一つ譜を作ってくれませんか」

「ええ作りますとも、一瓶二十銭のシャンパンでも作ります。なんならただでも作ります」

「ただは頼みません、御礼はするです。シャンパン

がいやなら、こう云う御礼はどうです」と云いながら上着の隠袋かくしのなかから七八枚の写真を出してばらばらと畳の上へ落す。半身がある。全身がある。立ってるのがある。坐ってるのがある。袴はかまを穿はいてるのがある。ふりそで振袖がある。高島田がある。ことごとく妙齡の女子ばかりである。

「先生候補者がこれだけあります。寒月君と東風君

にこのうちどれか御礼に周旋してもいいです。こりやどうです」と一枚寒月君につき付ける。

「いいですね。是非周旋を願ひましょう」

「これでもいいですか」とまた一枚つきつける。

「それもいいですね。是非周旋して下さい」

「どれをです」

「どれでもいいです」

「君なかなか多情ですね。先生、これは博士の姪めいです」

「そうか」

「この方は性質が極ごくいいです。年も若いです。これで十七です。——これなら持参金が千円あります。」

「——こっちは知事の娘です」と一人で弁じ立てる。

「それをみんな貰う訳にやいかないでしようか」

「みんなですか、それはあまり慾張りたい。君一夫いっふ

たさいしゆぎ
多妻主義ですか」

「多妻主義じゃないですが、肉食論者にくしよくろんしやです」

「何でもいいから、そんなものは早くしまつたら、

よかろう」と主人は叱りつけるように言い放つたの

で、三平君は

「それじゃ、どれも貰わんですね」と念を押しながら、写真を一枚一枚にポケットトへ収めた。

「何だいそのビールは」

「お見やげでござります。まえいわい前祝かどに角の酒屋で買うて来ました。一つ飲んで下さい」

主人は手を拍うって下女を呼んで栓せんを抜かせる。主人、迷亭、独仙、寒月、東風の五君は恭うやうやしくコップ

を捧げて、三平君の艶福えんぷくを祝した。三平君は大に愉おおい快な様子で

「ここにゐる諸君を披露会に招待しますが、みんな出てくれますか、出てくれるでしょうね」と云う。

「おれはいやだ」と主人はすぐ答える。

「なぜですか。私の一生に一度の大礼たいれいですばい。出てくんなさらんか。少し不人情のごたるな」

「不人情じゃないが、おれは出ないよ」

「着物がないですか。羽織と袴はかまくらいどうでもしま

すたい。ちと人中ひとなかへも出るがよかたい先生。有名な

人に紹介して上げます」

「真平まっぴらご免めんだ」

「胃病が癒なおりますばい」

「癒さしつからんでも差支えない」

「そげん頑固張りなさるならやむを得ません。あな
かんこたはどうです来てくれますか」

「僕かね、是非行くよ。出来るなら媒酌人ばいしやくにんたるの栄

を得たいくらいのものだ。シヤンパンの三々九度や

春の宵。――なに仲人なこうどは鈴木とうの藤さんだって？ な

るほどそこいらだろうと思つた。これは残念だが仕
方がない。仲人が二人出来ても多過ぎるだろう、た

だの人間としてまさに出席するよ」

「あなたはどうぞです」

「僕ですか、いっかんのふうげふかんせいけい一竿風月閑生計、ひとはつはすひんこうりようのかん人釣白蘋紅蓼間」

「何ですかそれは、唐詩選ですか」

「何だかわからんです」

「わからんですか、困りますな。寒月君は出てくれるでしょうね。今までの関係もあるから」

「きつと出る事にします、僕の作った曲を楽隊が奏するのを、きき落すのは残念ですからね」

「そうですとも。君はどうです東風君」

「そうですね。出て御両人ごりょうにんの前で新体詩を朗読したいです」

「そりや愉快だ。先生私は生れてから、こんな愉快な事はないです。だからもう一杯ビールを飲みます」

「と自分で買つて来たビールを一人でぐいぐい飲んで真赤まっかになつた。

短かい秋の日はようやく暮れて、巻煙草の死骸しがいが

算を乱す火鉢のなかを見れば火はとくの昔に消えて

いる。さすが呑氣のんきの連中も少しく興が尽きたと見え

て、「大分遅だいぶんくなつた。もう帰ろうか」とまず独仙

君が立ち上がる。つづいて「僕も帰る」と口々に玄

関に出る。寄席よせがはねたあとのように座敷は淋しくなつた。

主人は夕飯ゆうはんをすまして書斎に入る。妻君は肌寒はださむの

襦袢じゆばんの襟えりをかき合せて、洗い晒あらざらしの不断着を縫う。

小供は枕を並べて寝る。下女は湯に行つた。

呑気のんきと見える人々も、心の底を叩いて見ると、ど

こか悲しい音がする。悟つたようでも独仙君の足は

やはり地面のほかは踏まぬ。気楽かも知れないが迷

亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない。寒月君

は珠磨たますりをやめてとうとうお国から奥さんを連れて

来た。これが順当だ。しかし順当が永く続くと定め

し退屈だろう。東風君も今十年したら、無暗に新体

詩を捧げる事の非を悟るだろう。三平君に至っては

水に住む人か、山に住む人かちと鑑定がむずかしい

しょうがいシヤンパン

生涯三鞭酒を御馳走して得意と思う事が出来れば

結構だ。鈴木とうの藤さんはどこまでも転ころがって行く。

転がれば泥がつく。泥がついても転がれぬものより

も幅が利きく。猫と生れて人の世に住む事もはや二年

越しになる。自分ではこれほどの見識家はまたとあ

るまいと思つていたが、先達せんだつてカーテル・ムルと云

う見ず知らずの同族が突然だいきえん大気燄あを揚げたので、ち

よつと吃驚びっくりした。よくよく聞いて見たら、実は百年

前ぜんに死んだのだが、ふとした好奇心からわざと幽霊

になつて吾輩を驚かせるために、遠い冥土めいどから出張

したのだそうだ。この猫は母と対面をするとき、挨

拶のしるしとして、一匹の肴さかなを啣くわえて出掛けたところ、

途中でとうとう我慢がし切れなくなつて、自分

で食つてしまつたと云うほどの不孝ものだけあつて

才気もなかなか人間に負けぬほどで、ある時などは詩を作つて主人を驚かした事もあるそうだ。こんな豪傑がすでに一世紀も前に出現しているなら、吾輩のような碌ろくでなしはとうに御暇おいとまを頂戴して無何有むかうのき郷ように歸臥きがしてもいいはずであつた。

主人は早晩胃病で死ぬ。金田のじいさんは慾でもう死んでゐる。秋の木の葉こは大概落ち尽した。死ぬ

のが万物の定業で、生きていてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬだけが賢いかも知れない。諸先生の説に従えば人間の運命は自殺に帰するそうだが油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさして来た。三平君のビールでも飲んでちと景気をつけてやろう。

勝手へ廻る。秋風にがたつく戸が細目にあいてる間から吹き込んだと見えてランプはいつの間にか消えているが、月夜と思われて窓から影がさす。コツプが盆の上に三つ並んで、その二つに茶色の水が半分ほどたまっている。硝子ガラスの中のものは湯でも冷たい気がする。まして夜寒の月影に照らされて、静かに火消壺ひけしつぼとならんでいるこの液体の事だから、唇を

つけぬ先からすでに寒くて飲みたくもない。しかしものは試しだ。三平などはあれを飲んでから、真赤まっかになつて、熱苦しい息遣いいきづかをした。猫だつて飲めば陽気にならん事もあるまい。どうせいつ死ぬか知れぬ命だ。何でも命のあるうちにしておく事だ。死んでからああ残念だと墓場の影から悔くやんでもおつつかない。思い切つて飲んで見ろと、勢よく舌を入れ

てぴちやぴちややって見ると驚いた。何だか舌の先

を針でさされたようにぴりりとした。人間は何の酔すい

興きようでこんな腐ったものを飲むのかわからないが、猫

にはとても飲み切れない。どうしても猫とビールは

性しょうが合わない。これは大変だと一度は出した舌を引ひ

つこ

込めて見たが、また考え直した。人間は口癖のよう

にか

に良薬口に苦にがしと言つて風邪かぜなどをひくと、顔をし

かめて変なものを飲む。飲むから癒なおるのか、癒なおるの

に飲むのか、今まで疑問であつたがちようどいい幸さいわい

だ。この問題をビールで解決してやろう。飲んで腹

の中までになくなつたらそれまでの事、もし三平の

ように前後を忘れるほど愉快になれば空前の儲もうけ者もの

で、近所の猫へ教えてやってもいい。まあどうなる

か、運を天に任せて、やっつけると決心して再び舌

を出した。眼をあいていると飲みにくいから、しつかり眠って、またぴちやぴちや始めた。

吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールを飲み干した時、妙な現象が起った。始めは舌がぴりぴりして、口中が外部から圧迫されるように苦しかったのが、飲むに従ってようやく楽らくになつて、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなつた

もう大丈夫と二杯目は難なくやつつけた。ついでに盆の上にこぼれたのも拭ぬぐうがごとく腹内ふくないに収めた。

それからしばらくの間は自分で自分の動静を伺うため、じつとすくんでいた。次第にからだが暖かになる。眼のふちがぼうつとする。耳がほてる。歌がうたいたくなる。猫じゃ猫じゃが踊りたくなる。主

人も迷亭も独仙も糞を食くらえと云う気になる。金田の

じいさんを引搔ひっかいてやりたくなる。妻君の鼻を食い

欠きたくなる。いろいろになる。最後にふらふらと

立ちたくなる。起たつたらよたよたあるきたくなる。

こいつは面白いとそとへ出たくなる。出ると御月様

今晚はと挨拶したくなる。どうも愉快だ。

陶然とはこんな事を云うのだらうと思ひながら、

あてもなく、そこかしこと散歩するような、しない
ような心持でしまりのない足をいい加減に運ばせて
ゆくと、何だかしきりに眠い。寝ているのだか、あ
るいてるのだか判然しない。眼はあけるつもりだが
重い事夥おびただしい。こうなればそれまでだ。海だろ
うが、山だろ
うが驚ろかないんだと、前足をぐにやりと
前へ出したと思う途端ぼちやんと音がして、はっと

云ううち、――やられた。どうやられたのか考える間^まがない。ただやられたなと気がつくか、つかないのにあとは滅茶苦茶になつてしまった。

我に歸つたときは水の上に浮いている。苦しいから爪でもつて矢鱈^{やたら}に搔^かいたが、搔けるものは水ばかりで、搔くとすぐもぐつてしまふ。仕方がないから

後足^{あとあし}で飛び上つておいて、前足で搔いたら、がりり

と音がしてわずかに手応てごたえがあつた。ようやく頭だけ

浮くからどこだろうと見廻わすと、吾輩は大きな甕かめ

の中に落ちてゐる。この甕かめは夏まで水葵みずあおいと称する水みず

草くさが茂もつていたがその後烏の勘公が来て葵を食い尽

した上に行水ぎようずいを使う。行水を使えば水が減る。減れ

ば来なくなる。近来は大分減だいぶんつて烏が見えないなと

先刻さつき思ったが、吾輩自身が烏の代りにこんな所で行

水を使おうなどとは思ひも寄らなかつた。

水から縁^{ふち}までは四寸余^よもある。足をのばしても届

かない。飛び上つても出られない。呑^{のん}氣^きにしていれ

ば沈むばかりだ。もがけばがりがりと甕に爪があた

るのみで、あたった時は、少し浮く氣味だが、すべ

ればたちまちぐつともぐる。もぐれば苦しいから、

すぐがりがりをやる。そのうちからだが疲れてくる

。気は焦るが、足はさほど利きかなくなる。ついにはもぐるために甕を搔くのか、搔くためにもぐるのか、自分でも分りにくくなつた。

その時苦しいながら、こう考えた。こんな呵責かしやくに

逢うのはつまり甕から上へあがりた**い**ばかりの願である。あがりた**い**のは山々であるが上がれないのは知れ切っている。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水

の面おもてにからだが浮いて、浮いた所から思う存分前足をのばしたって五寸にあまる甕の縁に爪のかかりようがない。甕のふちに爪のかかりようがなければい
うがない。搔がいても、あせっても、百年の間身を粉こにし
ても出られっこない。出られないと分り切っている
ものを出ようとするのは無理だ。無理を通そうとす
るから苦しいのだ。つまらない。みずか自ら求めて苦しん

で、自ら好んで拷問ごうもんに罹かっているのは馬鹿氣かている。

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれ

ぎりご免蒙めんこうむるよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自

然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になってくる。苦しいのだからありがたい

のだから見当がつかない。水の中にいるのだから、座敷

の上にいるのだから、判然しない。どこにどうしてい

ても差支えさしつかはない。ただ樂である。否いな樂そのものす

らも感じ得ない。日月を切り落し、天地を粉塵ふんせいして

不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太

平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無なむあみ阿弥

陀たぶつ仏南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。

底本：「夏目漱石全集1」ちくま文庫、筑摩書房
1987（昭和62）年9月29日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩
書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年

1月

入力：柴田卓治

校正：渡部峰子（一）、おのしげひこ（二、五）、

田尻幹二（三）、高橋真也（四、七、八、十、十一

）、しず（六）、瀬戸さえ子（九）

1999年9月17日公開

2013年10月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。